

恋姫無双～黄鬚伝～

ホークス馬鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、史実の三国志で黄鬚と呼ばれた者が恋姫の世界で霸王の弟だったらのお話です。

前作に続いて恋姫の魏の小説です。

ゲームの内容をベースにします。前作とほぼ似ているところもあると思いますが、多少のアレンジは加えますので、そこはご了承ください。

タグは順次追加します。

※3話と9話の内容の一部を修正しました。

※55話の内容の一部修正しました。

※8／11 最新話を変えました。これにて完結です。ありがとうございました。

※8／16 リメイク版を投稿してみました。といっても、内容はほぼ同じです。

<https://syosetu.org/novel/294584/>

目次

人物紹介

1話

2話

3話

4話

5話

6話

7話

8話

9話

10話

11話

1

5

19

34

43

49

63

72

83

98

117

143

1話

1話

1話

1話

1話

1話

1話

1話

2話

2話

2話

2話

2話

4話

165

181

187

191

198

207

225

252

258

285

311

327

342

3 6 話	3 5 話	3 4 話	3 3 話	3 2 話	3 1 話	3 0 話	曹 姉 弟 の 過 去	2 9 話	2 8 話	2 7 話	2 6 話	2 5 話
534	512	499	494	487	480	457	449	423	404	391	370	364

4 3 話	4 2 話	霞 の 目 覚 め	愛 紗 の 想 い	稟 の 想 い	楼 杏 の 想 い	栄 華 の 想 い	秋 蘭 の 一 日	4 1 話	4 0 話	3 9 話	3 8 話	3 7 話
662	652	648	641	632	627	621	617	605	582	572	564	551

50話	栄華の気持ち	霞の恋	楼杏の悩み	稟、益々想いが強くなるの事	秋蘭と夜に響く旋律	49話	48話	47話	46話	45話	44話
816	812	807	799	794	789	784	765	742	729	708	688

57話	56話	55話	愛紗の危ない行動	稟の気持ち	楼杏の気持ち	霞の想い	栄華の募る想い	秋蘭の想い	54話	53話	52話	51話
956	944	933	928	924	920	908	893	889	879	859	837	828

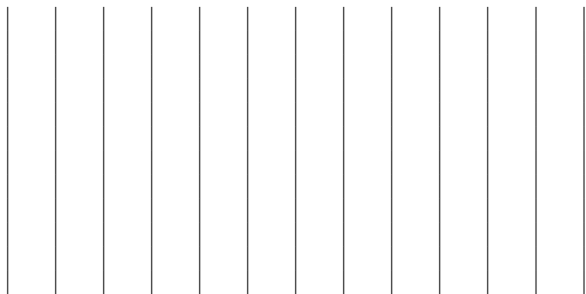
7 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 5 5
0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

109710861077106210541048102710151003 989 982 976 967

8 8 8 8 7 7 7 7 7 7 7 7 7
3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

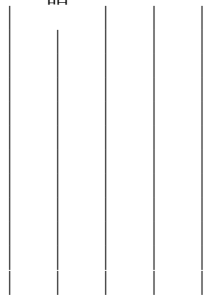
1229121412081196118811701163115411451135112611181108

9 9 9 9 9 9 9 8 8 8 8 8 8
6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



1392137513621346133013181313130512841276126712521237

最 1 9 9 9
終 0 9 8 7
話 0 話 話 話
話



14321427142214161403

人物紹介

・曹彰 字：子文 真名：純

曹家当主曹嵩の子である。華琳とは同じ年に生まれたが、腹違いであることと、華琳より1日遅く生まれたため、弟となった。

春蘭、秋蘭、華命、柳琳、榮華とは従姉妹である。

幼い頃から人並み優れた膂力を持ち猛獣と格闘する事が出来、険阻な場所でも平気であつた。武芸に長けており、その腕は他の追隨を許さない程であり、将兵の統率も非常に高い才能を有しており、彼の子飼いの兵も随一の精強さと結束力を誇り、黄鬚の異名で恐れられる。

頭は悪くないが学問が嫌いで、よく父である曹嵩に指摘されてしまう程だったが、本人は衛青と霍去病のような將軍を目標としているため、六韜三略と孫子を修めている。曹嵩に將軍として先陣を切り、兵と共に苦勞を分かち合い、信賞必罰をしつかりすると述べ、曹嵩を大笑いさせた。

一兵卒と共に苦勞を分かち合ったり、褒賞が足りなければ自腹を切るなど兵を大切に、文官にも敬意を表して接したりするため、将兵だけじゃなく、文官からも人望が厚

く、民からも人気がある。

しかし、姉の華琳とは後継者争いは起きず、互いに信頼し合っている。

得物は主に刀（むしろ日本刀）であるが、槍、戟、弓も扱えて、特に弓が得意である。馬術も騎馬民族並みに操れて、騎射の腕は特に優れている。

・曹操 字：孟徳 真名：華琳

曹家当主曹嵩の子である。純とは同じ年に生まれたが、腹違いであることと、生まれた日が純より1日早く生まれたため、姉となった。

春蘭、秋蘭、華命、柳琳、榮華とは従姉妹である。

英雄になり得る資質を持ち、霸王としての才器がある。

地位や身分に拘らず、才能ある者を見極め、適材適所にその人材を配置する能力に長けており、その慧眼は天下一と言われている。

弟の純とは非常に姉弟仲が良く、恋愛感情は持っていないが、姉として主君として全幅の信頼を置いており、軍の全てを純に掌握させている程である。

・夏侯惇 字：元讓 真名：春蘭

夏侯家の娘である。秋蘭とは双子の姉であり、華琳、純、華崙、柳琳、榮華とは従弟姉妹である。

武芸においては、華琳配下の中では、純に次ぐ強さを持ち、猪突猛進な性格も合わせ

り、常に先陣を切って突撃する姿から後に魏武の大剣と称される。

純に対しては、華琳同様恋愛感情は持っていないが、身内としても武人としても非常に慕っており、いつか追いつき追いつきたいと思っており、自身も鍛錬に励んでいる。

・夏侯淵 字：妙才 真名：秋蘭

夏侯家の娘である。春蘭とは双子の妹であり、華琳、純、華崙、柳琳、栄華とは従弟姉妹である。

武芸、智略共に秀でており、華琳同様文武官をこなしどちらでも中枢を担える程である。

弓の使い手であり、純に次ぐ腕を持っている。

・曹仁 字：子孝 真名：華崙

曹家の1つに生まれる。柳琳の姉であり、華琳、純、春蘭、秋蘭、栄華とは従兄姉妹である。

天真爛漫であり、明るく素直である。まだ武人としては未熟であるが、純と春蘭の強さに憧れており、いつか2人のように強く頼りにされるような存在になりたいと思っている。

・曹純 字：子和 真名：柳琳

曹家の1つに生まれる。華崙の妹であり、華琳、純、春蘭、秋蘭、栄華とは従兄姉妹

である。

曹家一門の中では、比較的良識派であり、癒しの存在であり、私の強い面々が周りにいるため、気苦労が多い役回りである。

武芸はさほどでも無いが、彼女に心酔する最強の親衛隊『虎豹騎』は曹魏の中でも純の子飼いの兵に並ぶ程の強さを誇る。

純の事は、実の兄のように慕っている。

・曹洪 字：子廉 真名：栄華

曹家の1つに生まれる。華琳、純、春蘭、秋蘭、華崙、栄華とは従兄妹である。

魏軍の輜重の全権を握る経理責任者の立場にあり、曹家の金庫番でもあるため、お金には非常にうるさい。

男嫌いであるが、純に対してはそういった感情を抱かず、実の兄のように慕っている。

1話

陳留

陳留の城で、

華琳「・・・流れ星？」

華琳はある一つの流れ星を見た。

春蘭「華琳様！出立の準備が整いました！」

秋蘭「華琳様？どうかなさいましたか？」

華琳「ええ。今、流れ星が見えたのよ。」

これに春蘭と秋蘭に流れ星の事を伝えた。

春蘭「流れ星、ですか？こんな昼間に。」

秋蘭「・・・あまり吉兆とは思えませんね。ただでさえ怪しげな物を追っている最中

だというのに・・・出立を延期致しましょうか？」

これに秋蘭は延期をするか否かを問うたが、

華琳「吉か凶かを取るのには己次第よ。それにこんな理由で滞在を延期しては、また栄

華に小言を言われてしまうわ。後、今遠征に出ている純にもね。」

と華琳はそう返した。

秋蘭「はっ。ならば、予定通りに。・・・姉者。」

春蘭「おう！総員、騎乗！騎乗ッ！」

華琳「無知な悪党共に奪われた貴重な遺産、何としても取り戻すわよ！・・・出撃！」
そう言い、華琳はある物を追うために出撃したのだった。

同時刻、とある場所

純「ん？流れ星？」

純も、華琳同様流れ星を見た。

副官A「曹彰様、帰還の準備が出来ました！」

純「・・・ああ。」

副官A「どうかなさったのですか？」

純「・・・流れ星が見えた。」

副官A「流れ星、ですか？まだ昼間なのに？」

純「ああ。」

これには

副官A「何かの予兆でしょうか？」

副官もそう言ったのだが、

純「さあな、俺そういつたのはよく分かんねーしな。まあ、こんな程度でいちいち目くじらを立てても駄目だろ。」

と純はそう返したのだった。

副官A「そうですか・・・。」

純「では、帰るとしよう。」

副官「はっ！総員、撤退だ！」

純「それと、姉上に使いを送れ。全て完了したと。」

副官「御意！うん？曹彰様、あちらに賊に襲われてる者がおります。」

純「本当だ。すぐに助けるぞ！」

副官「御意！」

?? 「はあ、はあ、はあ、風もう少し速く走れないのですか? じゃないと追いつかれま
すよ!」

眼鏡をかけた少女が頭に人形を乗せてある少女に必死に言った。

?? 「そんなこと言われても、キャ!」

すると、頭に人形を乗せてある少女が転んでしまった。

?? 「風!」

眼鏡をかけた少女が駆けつけたが、その時には彼女らを追っていた連中が追いついて
いた。

賊A 「やつと追いついたぜ。ほらさっさとオレ達と着いてきな。」

?? 「嫌!」

眼鏡をかけた少女が抵抗してるが、腕を捕まえられ身動きできなくなった。すると、

賊B 「おい、大変だ!! 後ろから官軍らしき集団が来たぞ!!」

賊A 「何!! くそ、なかなかの上玉だって言うのに。おい、逃げるぞ。」

賊B 「ああ!!」

そう言つて、2人の賊は2人の少女を置いて逃げていったのである。

副官 「曹彰様、賊は逃げたようですな。この2人を置いて。」

純 「そのようだな。2人とも、怪我はなかったか?」

?? 「ええ。危ないところでしたが、ありがとうございます。」

?? 「はい。おかげさまで。」

?? 「もし宜しければ、あなたの名前を聞いても宜しいでしょうか？」

純 「いいが、まずは自分から名乗るのが筋じゃないか。」

?? 「失礼しました。私の名前は戯志才。そしてこっちが」

?? 「程立ともうします。」

すると、

純 「戯志才とやら、その名は偽名だろうか？」

稟・風 「!?!」

すると、2人は驚愕の表情を浮かべた。

稟 「な、何故！偽名だと・・・！」

純 「だって、自分の名前を言う際、一瞬思考する素振りを見せたじゃん。」

稟 「そ、それは・・・。」

彼女は動揺した。しかし、

純 「まあ、このご時世だ。偽名を使わねばならん理由があるのだろう。俺は気にして

ねーから。」

稟 「そ、そうですか・・・。」

そう言った戯志才であつたが、目の前の男の雰囲気に流すことが出来ないでいる。すると、

風「それで、お兄さんの名前は？」

純「ああ、すまん。俺の名は曹彰、字は子文だ。」

稟「あなたがあの曹彰様ですか!？」

純「おお、そうだが。」

戯志才の驚きように純は戸惑う。すると程立が戯志才をからかうように言った。

風「稟ちゃんは曹彰様の噂を耳にして、ずっと興味を持っていましたからー。その本人に会えたのがとても嬉しいのでしよう。」

稟「ちよつ、風!!」

すると、戯志才が顔を真つ赤にしながら止めようとした。

純「でも、俺より姉の曹孟徳の方に興味が向くと思うんだけどなー。太守でもあるし。」

稟「いえ！確かに曹操殿も素晴らしいお方ですが、その弟君である曹彰様は、遙かに素晴らしいお方です！なぜなら、曹彰様は幼くして、武において圧倒的な才能を見せ、将兵の統率に長け、兵法もしっかり修めている。まさに黄鬚という異名に相応しいお方！」

純「分かった分かった。まあ落ち着いて。」

風「稟ちゃん。いくら憧れの方に出会えたからって、ちよつと興奮しすぎなのですよ。」

稟「ごほん。失礼致しました。」

純「まあ、何だ。俺これから陳留に帰る予定なのだが、お前達はどうするの？」

稟「はい。もし宜しければ、私をあなた様の軍師として雇っていただけませんか？」

風「稟ちゃん、抜け駆けはズルいですよ。風も曹彰様について行きますよ。」

純「いいのか。俺、太守でもねーんだぞ。」

稟「はい、それでもかまいません。」

風「風もですよ。」

純「そっか……。分かった。じゃあ改めて、歓迎する。俺の真名は純だ。宜しく。」
稟「ありがとうございます。では改めまして、私の名は郭嘉、字は奉孝と申します。真

名は稟です。」

風「風の真名は風なのです。それとこの際、名を程立から程昱と名を改めます。日輪を支えるという意味で。」

すると稟が、

稟「風、それって。」

風「はい。風、先日夢を見ました。それは、風の目の前に太陽が落ちてきて、それを風が持ち上げる夢です。これは風が純様という日輪を支えろというお告げだと思えます。」

稟「まさか、風も私と同じ夢を見るとは・・・。」

風「おお、稟ちゃんもですか？」

稟「はい。私も風と同じです。私が日輪を持ち上げる夢を。」

2人が驚きと興奮で言葉が告げられなくなっていたので、純が

純「分かった。2人の真名、受け取ろう。では、共に陳留に行こう。」

稟「はっ!!」

風「はい。」

純「つと、その前に。おい、誰か。」

兵士A「はっ!」

純「道中、軍師を雇ったと姉上たちに伝えておいてくれ。」

兵士A「御意!」

純「よし、行くぞ!!」

そうして、純たちは陳留に向かったのであった。新たな仲間を加えて。

一方の華琳達も、一人の少年と少女を連れて、陳留の城に帰った。

栄華「お帰りなさいませ！お姉様！」

華琳の帰還を知らせで聞いた栄華は、自ら出迎えた。

一刀「・・・誰、あの子。華琳の妹？」

彼女を見た一刀は、秋蘭に尋ねた。

秋蘭「この陳留の金庫番を任されている、曹洪と言う。実の妹ではないが、華琳様の曹一門に属するお方だ。・・・それと」

一刀「分かっているよ。勝手に真名を呼んだりしない。」

秋蘭「それもだが・・・北郷は暫く黙っている。華琳様から何か言われても、最低限の事しか答えなくて良い。分かったな？」

その言葉に、

一刀「・・・ああ、そうする。」

一刀はそう頷いて答えた。

華琳「今戻ったわ、栄華。・・・けれど、なにもここで出迎えなくても良かったのよ？」

栄華「遣いも受けましたし、見張りからも遠くにお姿が見えたと報告がありましたので……いてもたってもいられなくて。」

栄華「ああ……御髪もお衣装も砂だらけで。すぐにお風呂とお召し物の支度をさせていますから、すぐにお使い下さいまし。」

華琳「ふふ、ありがとう。留守中は変わりではなくて？」

栄華「はい。柳琳もいましたし、華命さんも……彼女なりに、よくやって下さいましたわ。」

しかし、華命の名を出すと微妙な間があつたが、そこはご愛嬌である。

華琳「そう。ああ、後純からの遣いで、道中軍師を雇つたとの知らせが入つたわ。」

栄華「分かりましたわ。それと、その……お姉様……新しく出迎えたお客様がいるとか。」

華琳「……ふふっ。そうね、いらつしやい。」

一刀「……ああ。」

香風「はい。」

そう言われ、一刀と香風は前に出た。

栄華「あらあら、まあまあ……！」

香風「……？」

すると、栄華は香風を見ると、目を輝かせたのだった。そう、彼女は少女趣味である。栄華「ふふっ。とつても可愛らしいですわね……。お姉様、この子は？」

華琳「遣いに持たせた連絡の通りよ。私の元で暫く働いてくれる事になったわ。」

栄華「そうですの！」

香風「……？」

その間、栄華は香風に対し非常に優しい対応をしたのだが、時折危ない状態だったため、

華琳「栄華。」

華琳に止められたのだった。その間、一刀はスルーされていたのだった。

栄華「あ……。ふふっ、申し訳ありません。つい癖で……。」

一刀「……。どんな癖だよ。」

この状況に、一刀はそう突っ込んだ。

栄華「ご安心なさって。お姉様のお手つきの子に手を出すような真似は、誓ってい致しませんわ。」

華琳「私の期待を裏切らないで頂戴。」

香風「……お手つき？」

一刀「多分気にしないで良いやつだと思うよ、香風。」

香風「・・・うん。」

華琳「それと・・・一刀。」

一刀「あ、ああ。俺の事、ちゃんと見えてるんだよな？ 気付かないうちに香風以外に見えなくなつてたりしないよな？」

華琳「寝言は寝ている間にしておきなさい。栄華、改めて、もう一人も紹介するわ。・・・一刀、もう一度名乗りを。」

華琳にそう言われ、

一刀「ああ。俺は北郷一刀。色々あつて・・・」

一刀は自己紹介したのだが、

栄華「はい、それで結構ですわ。お姉様の連絡に目を通しましたから、もう十分。」と途中で遮り、明らかに香風とは百八十度違う対応をされたのだった。これには

華琳「栄華。一刀はこれでも例の事件の貴重な情報源よ。必要以上にはしなくて良いけれど、相応の扱いはするように。」

華琳はそう言い、栄華をたしなめた。

栄華「それは・・・どうしてもですか？ お姉様。」

華琳「どうしてもよ。純も同じ事を言うわよ。」

栄華「・・・はあ。承知致しました。」

そして、栄華は不服そうな態度で目を逸らしながら、

栄華「では、厩の隅に藁を積んでありますから、好きにお使いなさい。使った藁は間違つて馬が食べてしまわないように、ちゃんと片付けて下さいまし。宜しくて？」

そう一刀に言つた。

一刀「わ、藁……。」

華琳「……栄華。」

栄華「ですがお姉様……!!」

栄華「香風さんのような可愛らしい子ならいざ知らず、こんな臭くて汚らわしいのは既に置く経費も勿体ないのですけれど！」

華琳「私は、同じ事を二度言わせる子は嫌いよ。純も同じ事を言うわよ。」

栄華「ぐ……っ。」

これには、華琳も殺し文句で黙らせた。

栄華「……分かりましたわ。お部屋を用意させます。」

一刀「ありがとう。世話になつてる分はちゃんと働くよ。」

栄華「当たり前ですわ。あなたがここで暮らす中で、どれだけのお金が無駄に掛かっているか……ちゃんと理解して過ごして下さいまし。」

栄華「それと、今後は私の視界に入らないで下さる？」

一刀「お、おう・・・？視界の中？」

栄華「今はお姉様の指示で、我慢して話していますけれど・・・私、本当は愛らしい女の子しか視界に入れたくありませんの。宜しくて？」

一刀「・・・分かった。気を付ける。」

そして、一同は城に入ったのであった。

2話

陳留・城内

一刀「これが華琳の城か・・・凄いな。」

城下の街を抜けて辿り着いた華琳の居城を見て、その偉容に一刀はそう述べた。

華琳「街を歩いている間もそればかりだったわね？他の言葉は思いつかないの？」

一刀「・・・見慣れる華琳と一緒にしないでくれよ。初めて見たら、やっぱりびっくりするよ、これ。」

柳琳「あ、お姉様、秋蘭様！お帰りなさいませ！」

その時、庭の向こうから別の女の子が華琳達に話しかけてきた。

華琳「ええ、柳琳。今戻ったわ。」

柳琳「申し訳ありません、お姉様。栄華ちゃんと一緒にお迎えに出ようと思つたんですが・・・華命姉さんがどこかに行つていて。」

一刀「・・・秋蘭。この子も華琳の親戚？」

秋蘭「うむ。曹純といつて、栄華と同じく曹家一門に属するお方だ。華命は実の姉だ

な。」

一刀の疑問に、秋蘭はそう答えた。

一刀「曹洪の時みたいな注意点はあある？黙ってた方が良い？」

秋蘭「いや、特には無いな。」

それを聞いた一刀は、栄華の時もあつたので、最初は様子見で観察したのだった。

柳琳「姉さん、城下で見ませんでしたか？」

一刀がまず柳琳に対して感じたことは、優しく穏やかな感じで、几帳面で細やかな人柄に感じた。

華琳「大通りを抜けてきたけれど、見た限りの場所にはいなかったわね。」

華琳「それと・・・一刀。」

一刀「了解。」

華琳に呼ばれた一刀は、先程の栄華の事もあつたので、柳琳に向けて丁寧なぺこりと頭を下げた。

柳琳「はい、お話は聞いています。盗賊の情報提供者の方ですよね？」

柳琳「私は姓は曹、名は純・・・字は子和と申します。以後、お見知りおきを。」

すると、栄華と違って、丁寧な自己紹介をしたので、

一刀「・・・。」

固まってしまった。

柳琳「……どうかなさいましたか？」

華琳「……一刀。」

一刀「あ、ああ……はい。そうです。俺です、北郷一刀です。」

秋蘭「口調が怪しくなっているぞ、北郷。」

あまりの不意打ちに混乱してしまい、

一刀「俺の事は一刀で良いので……その、よろしくお願いします。」

と言ったのだった。

柳琳「はい。こちらこそよろしくお願いします、一刀様。」

一刀「いやちよつ!?様とかホント、そういうのじゃなくて良いから！名前だけで大丈

夫、だから……。」

柳琳「そうですか？なら、一刀さんとお呼びさせていただきますね？」

一刀「あ、ああ……。」

華琳「それと柳琳。部屋の件なのだけれども……。」

柳琳「あ、そうそう。栄華ちゃんは厩の隅でも使わせておけて言っていましたけど、お客様をそんな所にお通し出来ませんから……一番手前の客間を掃除しておきました。」

柳琳「もしかして、お姉様か秋蘭様のご指示でしたか？」

華琳「……いいえ。それで構わなくてよ。」

柳琳「ふふつ。なら良かったです。」

一方の一刀は、栄華とのギャップにまだ戸惑っていた。

柳琳「あの、一刀さん……。」

一刀「ひあつ！……は、はいっ！」

柳琳「栄華ちゃん、お兄様以外の男の方が凄く苦手で……。もし城門の所で会っていたら、きつとお気に障る事があったと思いますけど……。どうか、許してあげて下さい。」

柳琳「本当は、凄く心配りがあって、優しい子なんです。」

一刀「だ……大丈夫。気にしてないから！」

柳琳「そうですか。良かったです！」

柳琳「それじゃお姉様。私、華侖姉さんを探してきますね。」

華琳「ええ。私達も見つけたら声を掛けておくわ。」

華琳「後それと、純から新たに軍師を雇ったとの知らせが来たわ。」

柳琳「分かりました！それでは秋蘭様、一刀さん、失礼します。」

そう言い、柳琳はその場を後にしたのだった。

秋蘭「向こうが食堂で、その先にあるのが謁見の間だ。朝議やそれ以外に集まる時は、大体あそこを使う。」

客間に案内されるついでに、一刀は秋蘭に施設を軽く教えて貰っていた。

秋蘭「この辺りは倉庫だから、中に入る事はそれほど無いだろうな。」

一刀「成程……。それと秋蘭、もう一つ良い？」

秋蘭「何だ？」

一刀「華琳の曹一門って、後二人いるんだよな？曹純の姉さんともう一人は……。名前は真名しか知らないから言えないけど。」

秋蘭「華命と純様……。曹仁と曹彰様の事だな。」

一刀「そうそう、その曹仁殿と曹彰殿……。曹仁殿と曹彰殿は、曹洪の時みたいに注意する事ってあるの？それとも、曹純と同じ？」

秋蘭「ふむ、華命か……。」

すると、華命の事となると、すぐにアドバイスが出てこなかった。

秋蘭「まあ……。会えば分かるだろう。」

一刀「それが怖すぎるから聞いたんだけど。それじゃあ、曹彰殿は？今留守のようだけれど。」

秋蘭「純様か・・・あのお方は特に注意する事は無いな。」
と秋蘭はそう答えた。

一刀「曹彰殿は、どういう人なんだ？」
すると、

秋蘭「純様は素晴らしきお方だ。華琳様の弟君であり、武勇に優れ、戦に長け、統率
力に優れ、将兵の事を常に考え共に苦労を分かち合ってくれている優しくて強いお方
だ。」

秋蘭は少し弾むような声でそう答えたのだった。

一刀「そうなんだ・・・。」

一刀（何か、曹彰殿の事を尋ねたら、雰囲気は明るくなったような・・・。）

一刀「華琳の親戚って、今のところ二人だろ・・・？」

秋蘭「親戚というなら、私や姉者も親戚だぞ。」

一刀「あ・・・そうなんだ。」

秋蘭「うむ。華琳様と純様の父君の出が、我が夏侯一門だからな。我らの親とは兄弟
にあたる。」

一刀「だったら、曹洪達は？」

秋蘭「あのお三方は、華琳様と純様の祖父の代で別れている筈だ。」

それを聞いた一刀は、

一刀「・・・それ、もうほほ他人だよな。」

と言った。

秋蘭「天の国は随分と情が薄いのだな。こちらでは、四代五代遡る事も珍しくないが。」

一刀「そうなんだ・・・。」

そして、色々カウントして華命の人柄を考えたのだが、

一刀「・・・余計に分かなくなつたぞ、曹仁殿。」

といった具合だった。その時、

華命「あたしの事、呼んだっすかー？」

一刀「ああうん。曹仁殿がどういう人かつて・・・えっ!？」

声が聞こえたので、辺りを見渡したが見つからない一刀。

秋蘭「・・・上だ、北郷。」

一刀「上え!？」

秋蘭の言葉に、屋根の上に目を向けた。

華命「うつつすっすー♪」

一刀「・・・。」

すると、屋根の上に華命がいた。

華命「秋姉え、お帰りつすー！」

秋蘭「うむ。華命も久しいな。」

華命「ねえねえ、秋姉え。そつちの人は誰つすか？」

秋蘭「華琳様の連絡にあつたらう。今回の件の参考人だな・・・。」

一刀「北郷一刀です。宜しく。」

華命「ほんごーかずと、ほんごーかずと・・・。なんだか長くて言いにくいつすね。」

一刀「呼びにくかつたら、好きに呼んでくれて良いよ。」

すると

華命「なら、んー」

華命「・・・一刀つちつすかねえ。」

そう華命は言った。

一刀「・・・一刀つち。」

華命「ダメつすか？秋姉えはどうやって呼んでるつすか？」

秋蘭「私は北郷と呼んでいるな。」

それを聞いて、華命は考えていたが、『一刀つち』に決めたのだった。

そして、華命が服を脱ごうとし、屋根にも飛び降りようとするのを止めたりした。そ

の時、

柳琳「姉さん、そこで何をしているの!!」

柳琳の声が響いた。

華命「あ、柳琳!一刀つちから、日向ぼつこの良い方法を教えて貰ってたんす。一刀つち、凄いですよー!」

華琳「いつまでも来ないと思ったら、何をしているの、一刀。秋蘭もいて。」

それに続いて華琳もやって来た。

一刀「や・・・秋蘭と話したら、ちょうどあのこと会ってさ。」

華琳「そう・・・。」

柳琳「もう、屋根の上なんて危ないっていつも言っているでしょ。。。早く降りて。。。ううん、降りて来ないで!」

華命「どつちつすか、柳琳。」

柳琳「あうう・・・。」

一刀「とりあえずハシゴか何か探してきた方が良い?」

秋蘭「・・・少し奥に行けば二階の窓があるだろう。ひとまずそこから降りて来い、華命。」

華琳「そうなさい、華命。」

華命「はい……。」

これには華命も渋々従い、屋根の奥へと去って行った。

柳琳「大丈夫よね……途中で落ちたりしないわよね……。あうう、姉さん……。心配だわ……。」

一刀「……。」

それを見た一刀は、大変だろうなという気持ちで柳琳を見ていたのだった。

香風「あ、お兄ちゃん。」

その時、香風達がやって来た。

一刀「香風！あれ、春蘭達も一緒か。もうお風呂は終わり？」

春蘭「いや、厩に馬を戻しに行っただけだ。先に香風を客間に案内する事になっ
てな。」

その奥には

栄華「……。」

栄華が明らかに距離を取って一刀の視界に入らないようにしていた。

一刀「あ、そうだ華琳」

その時、

栄華「!!!!

!!!!ちよつとあなた
!!!!!!

一刀「え、何曹洪!? どうしたの。」

栄華が一気に一刀に詰め寄ったのだった。

栄華「どうしたもこうしたもありませんわ! どうしてあなたのような下賤な輩がお姉様の真名を口にしていますの!!!」

一刀「下賤な輩……。」

栄華「ああ……お姉様の大切な真名が穢れてしまいますわ。いや、もう穢れてしまつたに違いありません……この穢れは、その口を切り裂いて血で清めるしか……!」

一刀「いやちよつと待つて! 俺の話も聞いて!」

栄華「誰がこれ以上お兄様以外の汚らわしい男の声など聞くものですか! もう……こちらから距離を置いていれば少しはマシだろうと放つておけば!」

柳琳「栄華ちゃん、落ち着いて。」

栄華「これが落ち着いていられるものですか! 柳琳は何とも思いませんの、こんなこの馬の骨とも分からね輩にお姉様の真名を穢されて……!」

柳琳「一刀さんだつて、許されていないのに真名を呼んだりはしらないと思うわよ。お姉様がお決めになった事じゃ……。」

それを聞いた栄華は、

栄華「そ、そうですね、お姉様! お姉様はこのような輩に大切な真名を……。」

華琳に尋ねたら、

華琳「預けたけれど？」

と言われたので、

栄華「・・・っ!!!」

絶句したのだった。

華琳「当たり前でしょう。そうでなければ、最初にそれを口にした時点で私が首を刎ねているわよ。」

一刀「・・・ほんとに皆、俺の首を刎ねるの好きな。」

華命「一刀っちー、何騒いでるっすか？」

一刀「ああ華命。ええつと、曹洪とちよつとな・・・。」

栄華「つて、華命さん、あなたまで・・・まさか・・・。」

華命「ほえ？」

柳琳「姉さん。一刀さんが姉さんの真名を呼んでいたけれど・・・許したの？」

華命「うん。華琳姉えも秋姉えも呼ばれてたから、あたしも良いかなーつて。」

栄華「なん・・・ですつて・・・。秋蘭さんまで・・・という事は！春蘭さん！」

春蘭「ああ。華琳様が預けると仰ったからな。」

華琳「そうね、ちようど良いわ。三人とも、一刀とこちらの香風に真名を預けておき

なさい。例の件もあつて、少し長い付き合ひになりそうだから。香風達も良いわね？」

香風「シャンはシャンだよ。宜しくお願ひします。」

華侖「あたしは華侖つす！宜しくつす、香風！」

柳琳「でしたら一刀さん、香風。これからは、私の事は柳琳とお呼び下さいませ。」

一刀「あ……うん。こちらこそ宜しくお願ひします、柳琳。」

柳琳「ふふつ。お兄様以外の男の方に真名を呼ばれるつて、なんだかくすぐつたいです。すね。」

しかし、

栄華「そんな……まさか……。」

栄華はまだ動揺していた。

一刀「いや、本当に嫌なら、預けなくて大丈夫だからね？」

秋蘭「だが、北郷は真名しか持つていないそうぞ。お前達も北郷の名を呼ぶなら、自然と真名を呼ぶ事になるそうぞ。」

栄華「!!!」

柳琳「真名しか持つていないなんて……天の国というのは、不思議な所なんです。」

華侖「でも、その方が分かりやすいつす。一刀つちは一刀つちで良いつて事つすよね？」

一刀「ああ、大丈夫だよ。」

栄華「な、なら・・・私は、この先これを呼ぶ時はおいとか犬とか・・・」

一刀「・・・春蘭と同じ事を言ってるぞ。」

栄華「そ、それもやむなしですわ・・・」

しかし、

華琳「栄華。」

華琳の一言に栄華は

栄華「・・・はあ。お姉様のご命令とあらば、仕方ありませんわね。お預け致します

わ、真名。」

諦めたのだった。

一刀「そつか。なら、宜しく。えい・・・」

栄華「・・・」

真名を言おうとしたその瞬間、栄華がキツと一刀を睨んだので、

一刀「・・・なんでもない。宜しくお願いします。」

と言ったのだった。

栄華「・・・ええ。宜しくしたくありませんけれど、宜しく願いますわ。」

一刀「・・・それで、華琳。紹介が必要な人って、弟さん以外これで全部？」

華琳「ええ。弟は今、遠征に出ている留守だからそうなるわね。」

一刀「そうか・・・。」

そして、一刀にとっての陳留の一日目は、賑やかに過ぎていったのであった。

3話

謁見の間

兵士A「申し上げます。曹彰様、城門前に着きました。」

華琳「分かったわ。城門を開けなさい。」

兵士A「はっ!!」

そう言つて、兵士は下がった。

秋蘭「華琳様。迎えに行つても宜しいでしょうか？」

華琳「良いわ。あなた、待ちくたびれたでしょう？」

秋蘭「はっ。ではすぐに。」

そう言い、秋蘭は城門に向かった。

一刀「なあ、華琳。」

華琳「何、一刀？」

一刀「次紹介する人つて、華琳の・・・」

華琳「ええ、私の弟よ。」

一刀「秋蘭から聞いたんだけど、強いのか？」

華琳「ええ、我が軍で最も強く、戦に長けているわ。恐らく、私と彼が戦をしたら私が負けるわ。」

華琳「その為、我が軍の全てを純に預けているわ。私ではなく、全ての将兵が純に従うようにね。」

一刀「そ、そこまで・・・。」

一刀（あの曹孟徳がここまで言うなんて!?!）

これには、一刀は驚きを隠せなかった。

一刀「それで、さっき秋蘭が迎えに行っただけ・・・」

華琳「ああ、あの子は純の側近だったのよ。」

一刀「そうだったの!?!」

華琳「ええ、だから、あの子にとってまだ純が主なのよ。」

一刀「そ、そうなんだ・・・。」

城門前

純「着いた着いた。」

稟「これが陳留ですか。」

風「曹操さんの政が善いことが伝わりますね。」

すると城門が開き、出迎えたのは、

秋蘭「純様。お帰りなさいませ。」

秋蘭だった。

純「ただいま、秋蘭。いつもそうだが、わざわざ出迎えに来なくても良いんだぞ。」

秋蘭「いえ、私にとって、純様は私の主でもありますので。」

純「そっか。でも、お前の主は今は姉上だ。そこは、はき違えるなよ。」

秋蘭「御意。」

純「そうだ。着いてからも紹介するが、軍師を2人雇ったから。稟、風、自己紹介しな。」

稟「はっ！」

風「はい。」

そう言つて2人は秋蘭の前に立ち、

稟「お初にお目に掛かります。私は郭嘉、字を奉孝と申します。」

風「風は程昱、字を仲徳と申します。」

秋蘭「そうか。分かった。私は夏侯淵、字を妙才、真名を秋蘭と言う。以後宜しく頼む。」

稟「真名まで。宜しいのですか？」

秋蘭「ああ、純様と真名を交換したのだろう。なら私も交換せねば不公平だ。」

稟「はい！私の真名は稟です。」

風「風は風ですよ。」

そう言つて、3人は真名を交換し合つたのであつた。

謁見の間

純「姉上、ただいま戻りました。」

と純はそう言い、跪き拱手した。

華琳「秋蘭、出迎えご苦勞だったわね。」

秋蘭「はっ。」

華琳「それで純、首尾は？」

純「万事滞りなく。賊を鎮圧致しました。」

華琳「そう、ご苦労だったわね。」

純「ありがたきお言葉。しかし、それら全て俺の部下の活躍のお陰です。」

華琳「そう。相変わらずね、純。」

純「ところで姉上、遣いの者から聞いたと思いますが、軍師を雇いましたので、その紹介をしたいと思います。」

華琳「構わないわ。」

純「ありがとうございます。稟、風、前に。」

そう言つて、秋蘭の時と同様、前に立ち、

稟「私の名は郭嘉、字を奉孝と申します。」

風「風は程昱、字を仲徳と申します。」

華琳「そう。今後とも純をしつかり支えていくように。私は曹操、字を孟徳、真名は

華琳よ。」

風「はい。風は風と申します。」

しかし、

稟「私は純様に忠誠を誓っております。曹操殿には申し訳ありませんが、真名を預ける気にはなれません。」

そう言つて、稟は華琳を睨むような視線で対応した。

栄華「なっ!!」

春蘭「貴様ーっ!!」

一刀「ちよっ・・・!?!」

これには栄華と春蘭は激怒し、一刀は慌てて止めようとした。

純「よせ!!春蘭!栄華!」

一刀「!!?!」

しかし、純の覇氣のこもった一声で黙らせた。この際、一刀は純の覇氣に当てられ、固まってしまった。

春蘭「し、しかし・・・。」

栄華「この方は、お兄様に恥をかかせただけでなく、お姉様に対して無礼を働いたのですよ。」

純「言いたいことは分かる。今は下がれ。」

春蘭「は、はい。」

栄華「承知致しましたわ。」

そう言い、二人は渋々下がった。

純「申し訳ございません。姉上。」

華琳「構わないわ。純の為に働くというのなら。」

純「はっ、ありがとうございます。それと・・・」

その際、純は一刀を指差して

純「このもやし、誰ですか？」

と華琳に言った。

一刀「もやし?!」

まさかもやしと言われると思わなかったのか、一刀は口をあんぐりと開けて絶句した。これには春蘭はしきりにうむうむと頷き、柳琳は一刀をいたわるように肩に手を乗せていた。華琳と栄華、そして華命は隠すこと無く腹を抱えて爆笑していた。

華琳「も、もやしって、もやし・・・ぷっ、あはははははっ!!」

春蘭「確かに純様と比べたら、貴様はもやしだな。」

柳琳「そう気を落とさないで下さい、一刀さん。」

香風「お兄ちゃん、よしよし・・・。」

華命「あはははははっ!!」

栄華「よく言いましたわ、お兄様!!ふふっ!!」

一刀「酷いよ、華琳達・・・。」

これには、一刀はがっくりと肩を落とした。

華琳「純、例の件での参考人で長い付き合いになるかもしれないから、自己紹介しなさい。」

純「分かりました。二人とも、俺の名前は、姓を曹、名を彰、字を子文、真名は純だ。」

香風「シヤンは、姓は徐、名は晃、字は公明、真名は香風です。」

最初に香風が純に自己紹介した。

一刀「えっ、真名まで良いのか!？」

純「別に構わねーよ。さっき姉上の事を真名で呼んだろ？姉上はそう簡単に自分の真名を預けたりしねーよ。雰囲気から察するに、春蘭達にも真名を交換したんだろう。まあ、春蘭と栄華は姉上に命令されたんだと思うんだけど。その中で俺一人真名を預ける訳にはいかねーからな。」

それを聞いた一刀は唾然とした。さっきのを一瞬で判断出来たのかと・・・。

華琳「ふふっ、あなたは相変わらず鋭いわね。」

純「恐れ入ります。」

華琳「頭は悪くないのに、学は嫌いなよね・・・。」

純「姉上、俺の手本は衛青と霍去病です。戦場を将兵と共に駆け巡り、賊を倒して功

を立てる事を目標としております。俺は博士になりたくありません。」

と純は華琳にそう言った。

華琳「そう……。変わらないわね、あなたは。それで、褒美はどうするのかしら？」

純「それででしたら、俺の部下にお与え下さい。」

華琳「そう。分かったわ。」

純「はい。ではまた後で。」

そう言い、純は稟と風を連れて謁見の間を後にした。その際、秋蘭と栄華も自然と純の後をついていったのだった。

一刀「華琳、今のが……」

華琳「ええ、私の自慢の弟よ。」

一刀「衛青と霍去病になりたいって言ってたけど、衛青と霍去病って……」

華琳「かつて北方の異民族討伐に大きく貢献した將軍よ。純は、彼らのような將軍になりたいって、幼い頃よく言っていたわ。」

一刀「へえ……。」

華琳「頭は悪くないのだけど大の勉強嫌いで、よく私塾を無断欠席していたけどね。」

一刀「そ、そうなんだ。」

そう言いつつも、どこか親愛の情を感じさせる顔をした華琳であった。

4話

練兵場

純「構えっ!!」

「「はっ!!」」

純「左翼、突撃!!」

「「おおーっ!!」」

純「突けーっ!!」

「「おおーっ!!」」

純は今、練兵場で兵の訓練をしていた。この兵は全て、純の子飼いの兵であり、皆純の手足の如く動いている。その動きと迫力に

稟「す、凄い……。」

風「……ぐう。」

稟「寝るなっ!!」

風「おおっ!!想像以上の迫力につい……。」

稟「全く……。でも、確かにそうですね……。」

様子を見ていた稟と風は、ただただ絶句し、鳥肌が立ち身震いしていた。

稟「これが、黄鬚と呼ばれている純様のお姿……。」

稟（こういつた兵を従えているのが、私の主……!）

そして、稟に至つては、純の指揮ぶりに感動に近い興奮を覚えた。

純「お前達、見ていたのなら声を掛けてくれれば良かったのに。」

その時、純が稟達に声を掛けた。

稟「つ……純様！」

稟は、突然声を掛けられてドキツとした。

風「予想以上の迫力で、風と稟ちゃんは声を掛けられなかったのですよー。」

風は、何故声を掛けられなかったのかを純に言ったのだが、稟程でなくても驚いていた。

純「そつか……。しかし、ただ見ているだけだと、退屈だろうか？」

稟「い、いえ！退屈どころか、非常に勉強になります！」

風「風もですよー。」

純「そうか、それは良かった。そうだ、どうせなら、お前達もこの兵を指揮してみないか？」

この提案に、

稟「えっ!？」

風「おおっ!？」

二人は驚きのあまり目を見開いてしまった。

純「何を驚く？お前達にもいずれこの兵の指揮の一部を任せるつもりだ。今指揮して
経験を積ませなければ、軍師としての知謀も活かせんだろう。」

純「大丈夫だ、お前達なら出来る。なんとたつて俺の軍師だ、信じているからな。」

この言葉に、稟と風、特に稟は胸が熱くなった。

稟「はっ!!頑張ります!!」

風「風もですよー!!」

そう言い、二人は拱手して答えた。

純「うむ。では、兵に話をしておくな。」

そう言い、純は兵士を集めて事情を話した。そして、稟と風は、この練兵での出来事をきっかけに、純の子飼いの兵の一部の指揮を任されたのだった。

純「それでは、本日の朝議はここまでだ。」

春・秋「解散っ！」

華琳「・・・秋蘭。」

秋蘭「は。」

華琳「北郷一刃が仕事を探しているという話、聞いているかしら？」

秋蘭「はい、聞いております。本人からも何か仕事が無いかと相談されましたので。」

華琳「そう。」

純「秋蘭、あいつに何かあてがってやったのか？」

秋蘭「いえ・・・。」

すると、

春蘭「・・・何の話だ？」

春蘭がそう尋ねたが

秋蘭「姉者には関係の無い話だ。」

と返されたので

春蘭「なんだとう！」

と春蘭は言った。

華琳「黙りなさい春蘭。今、私は秋蘭と話をしているの。」

春蘭「はう、華琳様まで……。」

純「まあまあ、春蘭。」

春蘭「うう、純様……。」

華琳「それで、あれが何をしているか、秋蘭は知っているのでしょう？何の仕事をさせているの？」

秋蘭「結局、自分で何やら思うところがあつたようで、自分で仕事は見つけたようなのですが……。」

華琳「……どうしたの？聞いているなら、教えなさい。」

秋蘭「それが……書庫の整理の手伝いをしているそうなのです。」

これには、

華琳「なっ!？」

華琳は驚いてしまった。

純「おいおい、それは流石に……。」

そう言い、純は華琳の方を見た。すると、華琳はプルプルと震えていた。

純（ありやりや、これは相当怒ってんな……。一刀、ご愁傷様だな……。）

華琳「ちよつと今からあれに説教してくるわ。」

そう言い、華琳はその場を後にした。

春蘭「・・・なあ秋蘭。」

秋蘭「なんだ姉者。」

春蘭「結局さつきの話つて、どういふ事なんだ？」

この言葉に、

純「はあ・・・春蘭、今のは流石に俺でも分かつたぞ。」

秋蘭「・・・姉者はもう少し勉強を頑張らねばな。」

春蘭「なんだとう！」

その時、残つた純達がそういう会話をしていたのだつた。そして、一刀は華琳に説教された後、自分出来る事は何なのかをもう一度しっかり考えたのであつた。

5話

一刀の部屋

ドカツ

一刀「な、なんだっ!？」

一刀は、ノックも無しに突然扉が開けられる音に驚いた。入ってきた者は、

春蘭「北郷一刀!」

物々しい雰囲気を出した春蘭と秋蘭だった。

一刀「ど、どうしたんだ、二人とも……。そんな物々しい雰囲気で……。」

一刀「他国の襲撃か?」

その雰囲気一刀は思わずそう言った。しかし、

一刀（それならなんで俺の所に来たんだ……。? 華琳の指示か……。?）

と思った。

春蘭「そのような事、貴様が知る必要は無い!」

秋蘭「うむ。大人しく、我々に付いてきてもらおう。悪いようにするつもりは無いが……逆らえば、分かっているな？」

と威圧感に近い雰囲気で言われてしまった。

一刀「お、俺……何もしてないぞ！」

春蘭「うるさい！ 言い訳は後で聞く。付いてくるのか、来ないのか！」

これには、

一刀「わ、分かった……。だから、手荒な事はしないでくれよ……？」

そう言い、従わざるを得なかった。殺気むき出しで言われているため……。

春蘭「ふん。そうして欲しければ、大人しくキリキリ歩けっ！」

そのまま、一刀は春蘭と秋蘭に連れてかれたのだった。

陳留・城下

一刀「……はい？」

連れて来られたのは、牢屋でも取調室でもなく、

春蘭「どうした？」

一刀「あの、取り調べは？」

街だった。

秋蘭「・・・取り調べられるような事をしたのか？」

一刀「カツ丼を前にして、さあ吐けーとかは？」

春蘭「かつどん？秋蘭、こいつは一体何を言っているのだ？」

秋蘭「さあ。良く分からんが・・・吐くほど痛めつけられるのが趣味だと言うなら、考えてやつても良いぞ。」

一刀「いやいやいや！別にそんな趣味ないから！」

春蘭「なんだ、つまらん。」

一刀「つまらなくないっ！・・・で、俺をこんな街中に連れてきて、どうするつもりなの。」

この質問に、

春蘭「どうするも何も、買い物に来たに決まってるだろう。普通、今までの流れで分からんか？」

と春蘭は言った。この回答に、

一刀「・・・はあ？」

一刀は意味が分からなかった。

春蘭「言葉が通じなかったか？ 買い物だと言ったのだ、買い物と。分かるか？ 言葉は通じるのだろうか？ か、い、も、の！」

一刀「いやいやいや！ 分かるけどさ！」

春蘭、あんな殺気むき出しじゃ、買い物誘いとは思わんぞ……。

春蘭「……秋蘭。私は何か間違っていたのか？」

秋蘭「いや、ごく普通だと思っただが……？」

春蘭「ほら！ 秋蘭が普通だと言うなら、私は間違っておらん！ おかしいのは貴様の方だ！」

一刀「そ、そうなのか……？」

秋蘭「うむ、そうなのだろうな。」

そう言う秋蘭だったが、こめかみ辺りがピクピクしていたのだった。

一刀（秋蘭、春蘭で遊んでるな！）

春蘭「貴様がどの国に住んでいたのかはどうでも良いが、我が国には我が国のしきたりがあるのだ！ 貴様も華琳様に拾われた身ならば、その流儀に慣れてもらおうか！」

一刀「……分かったよ。でも、俺を誘う時はそんな殺気丸出しじゃなくて別に良いから。」

春蘭「……別に、殺気など出してはおらん！」

一刀「嘘だあ。」

春蘭「単に貴様が嫌いなだけだ！」

一刀「……それ、もつと悪くないか？」

春蘭「なんだとう！」

すると、

秋蘭「やれやれ。二人とも、漫談はその辺りにしておけ。吟味する時間がなくなってしまうぞ。」

そう言い、秋蘭が間に入って止めた。

春蘭「む、それは一大事だな。」

一刀「そんなに大事な買い物なの？」

春蘭「当然だ。本来なら、貴様など連れてくるような買い物ではないのだ。私は気に食わんが、秋蘭がどうしても言うのでな……。」

一刀「……なら、連れて来なけりや。」

春蘭「なんだとう！」

秋蘭「姉者。」

春蘭「う……うむ。」

秋蘭「北郷も、こちらに他意はないのだ。時間が許すなら、我々の吟味に意見を貰え
ると助かるのだが・・・構わんか？」

一刀「ああ。そりゃ、大丈夫だけど・・・」

春蘭「だけどなんだっ！ 私達の決めた事に不満があるとしても言うのかつ！」

秋蘭「姉者。」

春蘭「う・・・うむ。」

一刀「なら、俺を連れてくるより純を連れてきた方が良かったんじゃないか？ 俺より
気心の知れた純の方が適格な意見をくれるだろうし。」

春蘭「仕方あるまい。我々が行ったときいなかったのだから。」

一刀「いなかった？」

秋蘭「うむ。我々も本当は純様を連れて行きたかったのだがいなくてな。どうやら早
朝から出かけてしまったらしい。」

一刀「そうなのか。」

一刀（正直残念だ。同じ男子仲良くしようと思ってたのも理由の一つだが、本当の理
由は、この姉妹を止められる人が一人でもいたら助かったんだけどなあ・・・。）

一刀がそう思っていると、

春蘭「むっ、貴様純様に何か後ろめたい事があるんじゃないだろうな。」

一刀「はいつ？」

春蘭「いきなり一刀にそんな事を言った。」

一刀「な、何を根拠に……」

春蘭「貴様は私達と一緒にいるのにいない純様の事を気にした！それが証拠だ！」

一刀「べ、別に後ろめたい事なんてないよ！」

すると、

秋蘭「……北郷。」

一刀「は、はいつ!!」

静かな声だがはつきり伝わる殺意に一刀は思わず声が震えてしまった。

秋蘭「純様に何か迷惑を掛けたら……分かってるよな？」

一刀「は、はい!!了解しました!!」

殺気全開の秋蘭に、一刀はつい敬礼してしまった。

春蘭「う、うむ。分かれば良いのだ。」

流石の春蘭も震えた声で言った。

一刀「と、とりあえず行こうか。このままだと吟味する時間もなくなってしまうぞ。」

春蘭「そ、そうだな。ほ、ほら、秋蘭行こうか。」

すると、

秋蘭「・・・うむ、そうだな。」

秋蘭は殺気を抑えたのだった。

一刀「よ、良かった・・・。あのままだったら、漏れてたかも・・・。」

そして、皆で買い物を始めた。

春蘭「あれは中々に掘り出し物だったな、秋蘭。」

秋蘭「だな。次の会議に向けて、純様の判断を仰ぐ事にしよう。」

一刀「・・・。」

買い物は、先程の店で三件目だった。鍛冶屋で武器を少し見て、露店で馬具を流し見て、乾物屋で保存食の話をし、全て軍用の備品の話だった。

一刀には口の出しようがなく、ただただ肩身の狭い思いをしていたのだが、秋蘭のあ
る一言に疑問を感じた一刀は、

一刀「なあ、秋蘭。」

秋蘭「何だ？」

一刀「なんで、軍用の備品関連の事を純に判断を仰がせるんだ。華琳じゃないのか？」
と尋ねた。

春蘭「貴様、何か文句があるのか!!」

一刀「べ、別に文句があるわけじゃ・・・!!」

秋蘭「姉者。」

春蘭「う……うむ。」

秋蘭「それはな、軍に関する事は全て純様に委ねられておるのだ。」

一刀「そうなのか？」

秋蘭「うむ。我が軍において、最も戦に長けているのは純様だ。その為、軍の徴兵、武器兵糧の補充、そして全軍の指揮は全て純様が握っておられる。だから、純様に仰ぐのだ。」

一刀「そうなんだ……。」

一刀（そう言えば、華琳もそういった事を言っていたな……。）

と一刀はそう感じていた。

秋蘭「それはそうと北郷、お前に次見て欲しいのは、これなのだが……。」

そして、次の店で見た一刀は、

一刀「これは？」

服だった。

純「そつち行つたぞ!! 捕まえろ!!」

警備兵A 「はっ!!」

一方の純は、街の警邏をしていた。春蘭達が誘おうとしたとき、純はちようど警邏の準備でいなかったためだ。

純 「連れて行け!!」

警備兵B 「ははっ!!」

そして、犯人を追い詰め、捕まえたのだった。

純 「ふう・・・。」
すると、

市民A 「曹彰様、ありがとうございます!!」

市民B 「流石曹彰様だぜ!!もう捕まえちまった!!」

市民C 「いつもありがとうございます!!」

市民D 「流石『黄鬚』様だぜ!!」

その周りにいた市民が、純を一斉に褒め称えた。

純 「俺は大したことしてねーよ、全てはこいつらのお陰だ。」

純はそう言って、一部の警備兵の肩を叩いた。

市民E 「いつもありがとうございます、警備兵様!!」

そう言われ、警備兵達も嬉しそうな表情をしたのだった。

純「さて、どうすつかなあ・・・。」

暴漢を捕まえ、後の事は警備兵に任せただため、暇になった純は適当にブラブラしていた。すると、春蘭達三人組が目に入った。

純「何騒いでんだ、あいつら・・・。」

そう思った純は、話しかけるため三人組に歩んだ。

春蘭「じゃあ次の店に行こうか。」

秋蘭「ふむ、そうだな。」

一刀「ちよっ!?まだ回るつもりなのか!?!」

そう思った一刀は

一刀「ちよつと待ってくれ!!少し休もうぜ!!」

と二人に言った。

春蘭「何を言っている。そんな時間があるわけないだろう。」

秋蘭「うむ。時間は限られているのだからな。」

しかし、思いは届かなかった。

一刀（誰か俺を救ってくれー!!）

そんな事を考えていたその時、

純「何やってんだ、お前ら？」

純がやって来た。

一刀（来たあー!!!）

一刀は救いの神が来たと思い、感激していた。

春蘭「おお、純様！今までどこにいたのですか？」

純「ちよつと街の警邏をしていた。お前達は？」

春蘭「はい！私達は華琳様と純様に似合いそうな服を探していたのです！」

秋蘭「純様、これなんかどうでしょうか？」

すると、秋蘭は純に買った服を見せた。

純「スゲー良い服だな。ありがとう、秋蘭。」

そうお礼を言った純。それを聞いた秋蘭の頬は普段と違って緩んでいた。

一刀（まだこの世界に来て日が浅いけど、秋蘭のあんな顔初めて見たな・・・。）

秋蘭「ところで、純様はこれからどうするおつもりなのですか？私達はこのまま店を

見て回るつもりですが。」

純「悪い、俺この後書類纏めなきやなんねーんだよ。メンドーだけど……。」
と残念そうに純は言った。

秋蘭「そうですね……。」

それを聞いた秋蘭は、少ししよんぼりした顔をした。それを見た純は、

純「そんな顔をするな、秋蘭。今度一緒に行けたら、一緒に街を回ろう。なっ。」

そう言い、秋蘭の頭を撫でてやった。秋蘭は目を細め擦ったそうにしていたが、気持ち良いのか、純に擦り寄ってきたのだった。

一刀（秋蘭って、純と一緒にだと色んな顔するんだな……。）

それを見た一刀は、普段の秋蘭とのギャップに驚いていた。

純「それじゃあ、俺行くな。春蘭も、買いすぎて栄華に叱られないようにな。」

春蘭「わ、分かっております!!」

純「はは。じゃあ秋蘭、また後でな。」

秋蘭「……あ……。んんっ、はい、分かりました。」

その時、秋蘭は一瞬寂しそうな表情をしたが、すぐに咳払いをして、いつものクールな顔に戻ったのだった。

純「そんじや一刀、気を付けてな。」

そう言い、純は手をヒラヒラさせながらその場を後にしたのだった。

一刀「気を付けて言うくらいなら助けてくれー!!」

春蘭「うるさいぞ馬鹿者!!」

そして、一刀は完全に日が暮れるまで付き合わされたのであった。

6話

一刀の部屋

昼を食べ終えた一刀は、窓の外を眺めて

一刀「うーん．．．清々しいまでに見慣れない光景だ。」

そう言った。

一刀「まあ、この感覚もそのうち慣れていくんだろいなあ．．．。」

そして、まだ慣れてないのか、またそう言ったのだった。

一刀（成り行きで華琳に拾われ、今はこうして世話になっている。他に行く当てもないし、それなりに働いて恩返しもするつもりだ。）

一刀「どうせ世話になるのなら、多少は皆と仲良くなっておいた方が良くよな。」

一刀「となると．．．やっぱり押さえておきたいのは華琳率いる曹家の面々だよな．．．。」

その中で特に難しいのは、

一刀「うーん．．．やっぱり一番難しいような相手は栄華か．．．。」

と一刀は栄華と打ち解けるのが難しいと思った。実際華琳の真名を呼んだ時、一番の

劍幕で一刀に迫った。それでなくても、初対面の挨拶の時から、あまり良い印象は持っていないかった。

一刀「いつまで世話になるか分かんないけど、少しでも仲良くなっていた方が良いでしょう……よし！」

そう思った一刀は、栄華に会いに部屋を出たのだった。

一刀「さて、栄華はどこにいるかな……つと。」

そう言つて、一刀は栄華を探していた。すると、

栄華「では、後はお願ひ致します。私は暫く休憩致しますので、何かありましたら呼びに来るように。」

ちようど休憩しようとする栄華を見つけた。

一刀「やあ栄華。」

そう言つて、栄華に挨拶した。

栄華「あなたは……。」

すると、一刀に気付いた栄華は、表情をキツく引き締めた。

一刀（何もそんなに睨みつける事ないじゃないか……。）

一刀「あー、えつと・・・今ちよつと良いかな？」

栄華「何かしら、私今から休憩致しますの。」

一刀「うん、だからちよつと話が出来なかつて思つてさ。」

栄華「何のために？」

一刀「な、何のためにつて・・・」

栄華「と言いますか、私の視界に入らないで下さいと、お伝えした筈ですけど。」

栄華「特別な用がないのであれば、私はこれで・・・」

と栄華が去ろうとしたので、

一刀「ま、待つてくれ、ちよつとだけ話がしたいだけなんだ。」

と言つて止めた。

栄華「あなたの相手をしていて、貴重な休憩時間が無くなつてしまつては、後の仕事に差し支えますから。」

しかし、栄華にそう返されてしまい、

一刀（ぐぬぬ・・・思つた以上に取り付く島もないな・・・）

しかし、ここで引き下がつては仲良くなれないと感じた一刀は

一刀「忙しいのは分かつた、じゃあいつなら暇かな？出来れば話をする時間を作つて欲しいんだけど。」

と栄華にそう言った。

栄華「ですから、何のために？ 困り事があるのであれば、秋蘭さんに相談すれば良いでしょう。」

一刀「困り事っていうか・・・これから世話になるんだし、栄華や皆とも仲良くなりたいなと思つて。」

その時

栄華「仲良くですつて・・・」

一刀の言葉を聞いて、栄華の視線が更に鋭くなった。

一刀「あ、あれ？ 俺なんかマズイ事言つた？」

栄華「そうやって私達に隙を見つけ、あわよくば手込めにしようと・・・やつぱり男なんて不潔ですわっ！」

一刀「そんな事一言も言つてないだろっ！」

栄華「その目を見れば分かります！ 垂れ下がった目尻からいやらしい気持ち溢れていますわ！」

一刀（俺そんな垂れ目つてわけでもないと思うんだけど・・・つてそこじゃない！）

栄華「お分かりでないようですので、この際ですからしっかり伝えておきます。」

栄華「私達は今、お姉様の大望成就の為に、地盤を確かなものにするため尽力してい

ます。」

栄華「その為にはまず、我々曹一門並びに将達の結束が必要になるでしょう。成すべき事は多く、余計な事に手を取られている暇はないのです。」

栄華「一門と将兵の纏めはお兄様がやっておりますが、そんな大事な時期に……あなたのような異物に構っている暇はありません。」

一刀「い、異物とはまた……結構キツイ言い方を。」

栄華「天から突然現れた……などという出自不明の人間が、まともであるとしても？」

一刀「た、確かに……。」

栄華「それに、何より男！香風さんのような可愛らしい女の子ならまだしも、よりもよって男なんて、異物以外の何物でもありません。」

一刀「香風は良いんだ……。」

栄華「ええ、可愛らしい女の子ですから。」

一刀「でも、純も男だぞ。」

すると、この問いに

栄華「あなた、お兄様を他の男と一緒にしないでくれます!!」

栄華が語気を荒げて言った。

一刀「お、おう……ごめん……。」

栄華「お兄様は他の汚らわしい男とは違って、強くて優しく、誰に対しても誠実で義理堅く敬意を表して接する、まさに理想の殿方ですわ！」

一刀「そ、そうなんだ……。」

栄華「あなたの役割は、そうですね、さしずめ空気といったところかしら。」

一刀「へっ、空気？」

栄華「普段は無色透明でいるのかいないのか分からない、お姉様が必要とした時にだけ出てきてお役目を果たし、また消えていく。」

栄華「それなら誰もあなたがいる事を咎めたりは致しませんわ。」

一刀「話は分かったけど……別に險悪にする必要もないんじゃないか？華命なんかは会うと挨拶もしてくれるし……。」

栄華「あの子はまあ、ああいう性格ですから……。」

一刀「だったら栄華とも……。」

栄華「ああやつぱり男はケダモノですわっ！やつてきて早々に女の子ばかりに近付こうとするなんて！」

一刀「違うって！たまたま偉い人皆女の子だったから！」

栄華「私を狙うのならともかく、あの香風さんを毒牙にかけようものなら、即刻チョン切って差し上げますから、覚悟なさいませ！」

その瞬間、一刀はとある一点に強烈な寒気を感じたのだった。

栄華「良いですか、くれぐれも余計な事はしないで下さいまし。」

一刀「いやでも……」

栄華「チョン切りますわよ……」

一刀「あ、はい……」

栄華そう低く言い残し、足早に去って行ったのだった。

一刀「はあ……何となくそんな気はしてたけど……まさかここまで嫌われてるとはなあ……」

その時、

純「あれもアイツの性格なんだ、大目に見てやってくれ。」

秋蘭「そういうことだ。」

純と秋蘭が現れた。

一刀「純、秋蘭、見てたのか？」

純「たまたま通りがかってな。」

純「あれはただ恐れているだけなんだ。お前に姉上や他の皆を、奪われてしまうのではないか、とな。」

一刀「奪われるって……本人にも言ったけど、俺は別にそんな事。」

純「分かつている。」

秋蘭「だが受け取る側からすればそういかない事もある。」

純「そうだな。栄華はこれまで、我ら曹一門の為に心血を注いできた。さほど大きくはないかもしれないが、あれにとつてかけがえのない世界である事は事実。」

秋蘭「そこに入り込んできたお前は、紛れもない異物なのだろうよ。」

一刀「それは・・・分かるけど。でもだからこそ、頑張つて仲良くしたいと思うんだよ。」

秋蘭「ふふつ。その熱意が、彼女にとっては煩わしく思えるのだろうか。」

純「そうかもしれないねーな。」

一刀「ええー・・・。」

秋蘭「何せお前は男だ。大切な家族がどこの馬の骨とも知れない男に拐かされたら、と思うと心配にもなるだろう。」

一刀「拐かすつて・・・俺つてそんな男に見えるのか？」

秋蘭「元々純様を除いて男嫌いであるしな。私達以上に、純様以外の男に対して強い偏見を持つているのかもしれない。」

一刀「やることなすことスケベ心でいっぱい、みたいな？」

秋蘭「ははっ、そうだな、あながち間違つてはいないと思うぞ。」

純「ははっ。」

一刀「成程・・・そう考えると、あの態度も何となく頷ける気がするよ。」

純「少々極端かもしれないねーが、あれも一途という事だ。嫌わないでやってくれ。」

一刀「嫌いはしないよ。寧ろ受け入れてくれると嬉しいんだけど。」

純「彼の城は手強いぞ。」

一刀「純、何か良い策はないかな？」

純「それを俺に聞いてどうする。信頼は自分の力で勝ち得るものだぞ。」

一刀「確かに、純の言う通りだ・・・。」

純「まあ頑張る事だ。仲良くなりてーならな。」

そう言い、純は一刀の肩をポンツと叩いて去って行った。

秋蘭「そういうことだ。頑張れよ、北郷。」

秋蘭も一刀にそう言い、純の後を追ったのだった。

そして、一刀は栄華と仲良くなる作戦は失敗に終わったが、収穫が無かった訳では無く、分かった事もあったし、栄華との会話は少なくとも成り立っていた。

後は仕事で信頼を築き、折を見て声を掛け、仲良くなろうと決意し、何か仕事が無いか探しに行ったのであった。

春蘭「しかし、後もう少しですね。」

純「そうだな。多分、俺1人だと流石にキツかったかも。ありがとな、春蘭。」

春蘭「いえ、とんでもありません！華琳様か純様のご命令だったら、例え火の中水の中どこへでも！」

純「ははっ！頼もしいな。よし、次行くぞ！」

春蘭「はっ！」

陳留城内

秋蘭「そちらの整理は後で構わん。まずは必要なものを必要な場所へと整えろ！もう時間がないぞ！」

兵士B「はっ！」

兵士C「夏侯淵様、城内の兵の配置計画が上がってまいりました。ご確認ください。」

秋蘭「分かった。・・・ほう、これは見事なものだな。最低限の人数で必要な所に配置出来ている。栄華の仕事か？」

兵士C「いえ、曹洪様はお忙しいとの事で、部下の・・・」

秋蘭「・・・なるほど、あいつか。ならばそれは純様と姉者にも回しておいてくれ。急

げよ。」

兵士C「はっ！」

栄華「まったくもう……。」

栄華「どうして皆さん、何でもかんでもこんなに急に言ってきましたの。私だって、別に暇ではありませんのよ……。」

栄華「ほら、準備を急いでくださいまし！方に一つにでも失礼があつては、この陳留……ひいてはお姉様のお名前に傷が付きましてよ！」

女官A「かしこまりました！」

柳琳「栄華ちゃん。ちよつとお姉様について、街に出てくるね。」

栄華「分かりましたわ。護衛は？」

柳琳「私の警護のみんながいるから大丈夫。」

栄華「あ、ああ……、あのかたたちですのね。なら、気をつけて行つてらして。」

柳琳「うん。お昼頃には戻るから。」

栄華「……ふう。時間もお金も人手も何もかも足りませんわ。どうしてこう予定のない事ばかり起きるんですの。」

文官A「邪魔だ邪魔だ、どいたどいた！」

一刀「お、おう・・・ごめんっ。」

文官B「天から来たあんた、暇ならこれを曹洪様のお部屋に運んでおいてくれ！入口の所に置いておいてくれたら良いから！」

一刀「分かった。あのさ・・・」

文官B「じゃあ任せたからな！」

そう言つて、文官は書簡の入った箱を一刀に押し付けて走り去つて行つた。

一刀「・・・皆忙しそうだな。」

その日、陳留の城は、朝から緊張感に包まれていた。一刀も朝議で華琳が何か言つていたのを聞いてはいたが、細かい事を聞く前に解散になつてしまい、聞けなかつたのだ。

一刀「・・・まあ、栄華に聞けば良いか。」

そう言つて、一刀は栄華の執務室に向かつたのだつた。

そして、栄華の執務室の前で荷物を置き、扉にノックした。

一刀「おーい、栄華ー。書簡を持ってくるように頼まれたから、ここ置いとくなー。」
すると、

??「曹洪様ならお留守よ。」

中から栄華とは違う女の子の声が届いた。

一刀「あ、すいません。良かったら栄華に伝えておいてもらえますか?」

??「分かっているからさっさと行きなさい。新入りも、今日は暇では無いはずよ。」

一刀「はい。宜しく願います。」

中にいる人にそう言われ、一刀はその場を後にした。

すると、

華命「あ、一刀っちー!探したっすよー!」

一刀「華命!香風!ちようど良い所に!」

華命と香風に出会った。

一刀「あのさ・・・」

華命「今日って何で皆こんなにバタバタしてるんすか!?!」

一刀(やばい。先越された。)

華命「・・・ほえ?どうしたっすか?」

一刀「いや・・・俺もそれを聞こうと思ったんだよ。」

華命「あー。聞く人、間違えたつすー！」

香風「お兄ちゃんも・・・なかま。」

それを言われ、

一刀（その仲間入りは・・・正直、ちよつと嬉しくない気がするぞ。）
と思つた。

一刀「何か今日の朝議で色々言つてただろ？多分、それで急に忙しくなつたんだと思
うんだけど・・・。」

華命「一刀つちも、香風みたいに眠かつたつすか？」

一刀「・・・香風は眠かつたの？」

香風「今日、朝から良いお天気だったから・・・ふああ。」

一刀「俺は専門用語が多すぎてよく分かんなくてさ・・・。で、そう言う華命は覚え
てるの？」

華命「あはは。覚えてたら一刀つちに聞かないつすよー。」

一刀「・・・成程正論。」

華命「やつぱり朝議の内容は手とかに書いといた方が良いつすかね・・・？」

一刀「だよなあ・・・。」

稟「『沛国の相が謁見を求める。もう済陰に逗留。至急行かせて欲しい。』ですよ、あ

なたたち。」

その時後ろから平坦な声がしたので振り返ってみると、稟と風がいた。

一刀「稟……風……。」

稟「まったく、大事な朝議を何一つ聞いておらず、理解していないとはどういうこと
です！ 華命殿に至っては純様と同じ曹家の一門！ もう少ししっかりしてはどうですか
！」

華命「ううう、稟が怖いっす。」

稟「香風！ あなたは朝議の最中に寝るなど、あるまじき行為ですよ！」

香風「うう朝から良いお天気だったからつい……。」

稟「つい、じゃありません！」

香風「ううっ。」

稟「一刀殿、あなたもちゃんと聞かないと、用無しと判断され捨てられますよ。」

一刀「うっ、すいません……。」

ぐうの音も出ない正論を稟に言われ、何も言えない一刀達。

風「まあ稟ちゃん、それくらいにしたらどうですか。」

宝慧「そうだぞ姉ちゃん。あんまり怒りすぎると小じわが増えてしまうぜ。」

稟「何を行っているのですか、風！」

風「風が言ったわけではないですよ。稟ちゃん、最近純様とお話しできていないからって、イライラしては駄目ですよ。」

稟「誰がイライラしてるか！」

風「違うんですかー？」

稟「うつ・・・、まあ、そうですね・・・。」

風「ぐうぐう。」

稟「寝るな！」

風「おお。珍しく稟ちゃんが素直だったのてつい・・・。」

華命「えつと・・・、つまり、稟は純兄の事が好きなんすか？」

稟「えっ!?それは、その・・・。」

栄華「何廊下の真ん中で騒いでますの!?こんな所で油を売って!」

一刀「あ、栄華。さつき部屋の前に荷物持って行ったぞ。」

すると、

栄華「・・・ッ。」

栄華は一刀が真名を口にした瞬間、キツと睨みつけたのだが・・・それ以上突つかかる余裕が無いのか、香風と華命、そして稟と風に目を向けたまま話を続けた。

栄華「・・・とりあえず相をお迎えする支度に手が足りませんの。この際猫の手でも

汚らしい手でも構いませんから、手伝ってくださいまし！」

香風「はい。」

華侖「分かつたつすー！」

稟「すいません、栄華様。私と風は、純様に頼まれた仕事があるので。」

栄華「そうですか。分かりましたわ。」

稟「はっ、では。」

栄華にそう伝えた稟は、風と共にその場を後にしたのであった。

一刀「了解。で、何をすれば良いんだ？」

栄華「ええつと、まずは……。」

数日後

栄華「いよいよですわね……。」

華琳「柳琳。支度は？」

柳琳「もちろん、万全です。」

純「秋蘭は？」

秋蘭「滞りなく。」

純「そっか。お前が言うなら、大丈夫だろう。」

華琳「結構。純、春蘭。警備に抜けは無いわね。」

純「問題ありません。」

春蘭「純様と一緒にだったので、当然です。猫の子一匹通しません。」

華琳「一刀。」

一刀「・・・え、俺!？」

一刀（幹部連中の次に何で俺・・・!?)

そう思っていると、

華琳「ええ。会見には、あなたと香風も同席なさい。」

と言われた。

一刀「同席って・・・俺、ただの下働きだぞ？猫の手なのに・・・。」

香風「にやーん。」

華琳「おー。猫がいるっす。」

華琳「賊の件が絡むなら、貴方の証言が必要になるかもしれないでしょう。警備の列の端に控えて、話を聞いていなさい。」

一刀「ああ……そう言う意味か。了解。」

華琳「とはいえ、謁見の間に来るのは後で良いわ。純、廊下にも一刀達が立てる所はありそう？」

純「はっ。それなら……」

柳琳「一刀さん。でしたらこちらへ。」

純「そうだな、柳琳のいる辺りなら良いだろう。一刀も香風も、それで良いな？」

一刀「分かった。……でも、脇で話を聞いているだけなら最初っから広間にいても良いんじゃない？」

華琳「立っていれば分かるわ。純、客人が広間に入ったらこちらに一刀を連れてくるように。」

純「承知致しました。」

一刀「なら……え、ここ？」

そこには、明らかに兵士の中でも飛び抜けてマツチヨな面々が並んでいた。

純（ははっ。一刀の奴、虎豹騎のメンツに驚いてるな……。）

その時、

文官「沛国相・陳珪殿、御到着！」

の声が聞こえたのだった。

8話

謁見の間

華琳「……ふむ。豫州で賊が暴れているという事は理解したわ。しかしそれは、既にそちらの問題ではなくて？ 陳珪殿。」

一刀が謁見の間に入ると、既に華琳と沛国の相である陳珪は挨拶を済ませ、本題に移っていた。

秋蘭「遅いぞ、北郷。」

一刀「ごめん。どこに立てば良い？」

榮華「ちよつと、私の隣に來ないで下さいまし。」

一刀「……分かつてるよ。なら……」

柳琳「一刀さん、こちらに。」

一刀「ありがと、柳琳。」

そう言い、一刀は柳琳の隣に立った。

華琳「……そもそも私達は、あの三人の賊を豫州との州境まで追い詰めていたのよ。」

それこそあと一步のところ、そちらへと逃げられてしまった。」

華琳「そして逃亡した賊の件はそちらに報告し、引き続き追跡の許可も求めたわ。……拒絶されたけれどね。」

一刀（華琳としては、逃げられた事実は認めても、その非を認めるつもりはないらしい。まあそこで謝つたら、話は謝罪の方向に行くだけだしな。）

燈「重要な物を追っているという情報を隠して？」

華琳「……どういう事。」

燈「南華老仙の残した書物……太平要術の書、というそうね。」

燈「書物のことはこちらで調べさせてもらったけど、それを追っていることを陳留からは聞いていないと報告があつたわ。」

華琳「それが？」

純（さすが姉上、これは想定内の話か。しかし、相変わらず難しい話は苦手だな……。俺が姉上の立場だったら、稟か風に任せようかな……。）

その時、華琳と陳珪の話聞いていた純は、そう思っていた。

華琳「確かに盗まれた一番の品は、太平要術の書だったわ。けれどそれは、莊周の遺した貴重な古書というだけの話。盗品という点では、金の塊や錦の反物と変わらないわ。」

華琳「それとも豫州では、盗品の明細を作らなければ兵一つ動かせないと？」

燈「ふふつ。それはないわね。」

華琳「それよりもこちらとしては、豫州の州境を越えて兵を動かせなかつた事を問題にしたいのだけれど？」

華琳「我が軍が領内で賊を捕まえられなかつた非は……まあ、認めざるをえないわ。」

華琳「しかしこちらで捕まえると言つたものを捕まえられなかつた事に関しては、こちらに責任を転嫁される謂われはないのではなくて？」

燈「あら。ならば、同じ事が逆の立場であつたらどうするのかしら。豫州から逃げた賊を追うために、我々の兵が陳留へ踏み入る許可を求めたら？」

華琳「通すわけがないでしょう。特に、私の弟はね。その賊には、こちらでの罪の前に、我が領に足を踏み入れた報いを受けてもらう必要があるもの。」

華琳「そちらには私の弟が責任を持って、賊の首と盗品だけを送り返させていただくわ。……ああ、その時は確かに盗品の明細があると便利かもしれないわね。」

すると華侖が小声で

華侖「……華琳姉えとあの人、ケンカしてるんすか？」

と尋ねると、

栄華「まさか。ただの挨拶ですわよ、あんなもの。」

一刀「嫌すぎる挨拶だ……」

一刀（挨拶どころか、二人の間に火花が見える気さえするんだけど。これなら春蘭に怒鳴られる方がまだ気が楽だぞ。）

柳琳「もう……皆さん、お姉様に叱られますよ。」

燈「ならば此度の件、孟徳殿は私達豫州の兵があなたたち陳留の兵を通さなかった……そこが問題の全てだというのね。」

華琳「ええ。我が領内から賊を逃がした報は、既にそちらには伝えたもの。さらに言えば、責任を持つて私の弟が追跡するともね。」

燈「なら……改めて、賊を逃がした責任を取ってもらおう、と言つたら？」

華琳「……責任？報を伝え、こちらの申し出を断つておいて……先程も言つたはずだけれど、既にそれはそちらの問題でしょう。」

燈「身内の恥を晒すようで何だけれど……残念ながら、豫州には陳留ほどの精兵を持つ郡はわずかなの。特に貴女の弟の子文殿の子飼いの兵と比べたら尚更ね。」

一刀（何だか話の方向がまた変わってきた気がする。賊がまだ暴れてるつていうのは俺が広間に入った時でもしたけど、俺を襲つた連中はたった三人だったんだぞ……？）
燈「今、その連中は何をどうしたのか、手勢を増やして小さな廢城を根城にしているわ。規模は数百か、千に及ぼうとする……といったところかしら。」

華琳「……初めから我々に追わせておけば三人で済んだものを……」

華琳「三人を追えというだけならまだしも、そうなる前に手を打たなかった事はこちらの責任ではないわよ。」

華琳「それを曲げて頼むというなら、相応の態度というものがあるのではなくて？」

純（そうさせるか、姉上……）

一刀「……無茶苦茶言うな、華琳。相応の態度って、他国の相に頭でも下げさせるつもりかよ。」

栄華「当たり前ですわ。三人を捕らえるだけなら百の兵を動かすだけ、それはお兄様がいなくても十分でしょうけれど、この規模となるともう戦ですわよ。」

栄華「……一体、どれだけお金が掛かると思っていますの。」

華命「華琳姉え、なんとかの書は取り返したくないんすかね？」

秋蘭「華琳様のことだ。向こうから出来るだけ良い条件を引き出そうとするおつもりなのだろう。」

一刀「政治の駆け引きって、怖いなあ……」

純（やつぱ俺、こういうのは嫌だなあ……。天幕で作戦を聞いてた方がずっとマシだ……）

そんな時、純はそう思い聞いていた。

燈「ふむ。まあ、どうしても言うなら、頭を下げてでも閨で尽くしても構わないのだけれど……」

燈「陳留の太守殿は、私ごときの頭と安い懇願一つで機嫌を良くなさるお方なのかしら？」

華琳「……」

燈「私としては、正直、どちらでも良いの。貴女が動いても、動かなくても。」

今でも穏やかなという名のポーカーフェイスを浮かべたまま表情を変えず、それがハツタリなのか事実なのか分からず、ただ空恐ろしく感じる一刀だった。

燈「ただ、一度逃がした賊を再び捉える機会をあげようと思っただけ。……孟徳殿が、こちらに賊が逃げた報を送ってくれたようにね。」

華琳「……」

燈「孟徳殿の助けが借りられないなら、我が豫州の東方、徐州にいらつしやる陶謙殿に礼を尽くすという手もあるし……」

燈「ここからさらに北上して、南皮の……何と言ったかしら。いま頭角を現わしつつある、汝南袁氏筆頭の……」

それを聞いた純は

純「……麗羽か。」

と眩き、華琳に至っては

華琳「……まさか。袁紹を頼るにしても、南皮から豫州に兵を入れるなど……どうするつもり。」

と思わず息を飲んで言ったのだった。

燈「あのあたりの相や太守にはいろいろ貸しがあつてね……濟陰に寄る前にあちこち足を伸ばして、既に話は通してあるの。まだ袁紹殿ご自身には持ちかけていないけれど。」

華命「あちゃー。袁紹の名前が出てきたつすよ。」

一刀「……どういう事？」

柳琳「袁紹さんとお姉様、そしてお兄様とは、旧知の仲なんです。」

榮華「お兄様とはともかく、お姉様とはあまり仲が……。」

一刀「ああ……華琳の反応を見る限り、そんな感じだよね。」

秋蘭「うむ。その上南皮から豫州までは、本来ならいくつかの郡や国を隔てているのだが……。」

一刀「陳珪さんは、そこも上手く通れるように話を付けるって訳か。」

榮華「それに陳珪殿が南皮に赴けば、今回の陳留の件も袁紹さんのお耳に入るでしょうね……。」

一刀「あー。」

一刀（苦手な奴に自分の失態の告げ口をされるとか、これ華琳的には絶対ダメなやつだろ。もつと言え、太平要術の書だつて・・・。）

燈「・・・いずれにしても、太平要術の書は取り戻すつもりなのでしょう？ 今なら、貴女達に優先的にさせてあげると言っているの。」

華琳「・・・貴女、国を売るつもり？」

華琳「義理にうるさい陶謙はまだしも、袁紹は野心の塊よ。その提案を受け入れるのは間違いないけれど、その後になんか分からない貴女でもないでしょうに。」

燈「あら。それこそ他国の話など、陳留太守の曹孟徳殿には関係ないでしょうに。」

燈「それとも・・・先に買って置きたいのは貴女だったかしら？」

華琳「・・・。」

純（さすがにこんなに分かりやすい挑発には乗らねーか。）

燈「言つたでしょう。逃がした賊を再び捉える機会をあげる、と。それに、貴女の弟の子文殿は黄鬚という異名で通る猛将。この程度の賊、容易いはず。」

それを聞いて

純「コイツ・・・。」

純は小さい声でそう言つた。

華琳「助けてあげるのはこちらよ。それと、私の弟を見くびらないで欲しいわ。」

燈「……。」

華琳「……。」

そして、時間だけがゆっくり過ぎていき、

華琳「……いいわ。同盟という事なら、引き受けてあげる。」

華琳「それと、遠征にかかる費用はそちらに出してもらおうわ。賊を千人も余分に退治してあげるのだから、当然よね？」

これには

陳珪「……。」

陳珪も流石に面食らってしまったのだが、小さくほうつと息を吐き、

燈「……ええ。その条件で結構よ。」

華琳「半月保たせなさい。それで、その賊とやらは、私の弟が一人残らず駆逐してあげるわ。」

燈「準備に半年かかると言われなくて助かったわ。こちらも州内の根回しをもう少ししておきたいから、その時点で改めて遣いを送るわ。」

華琳「……終わりつすか？」

一刀「……みたいだな。」

華命「ふはー。息が詰まったつすー。」

榮華「ほら、もう少しですから、静かにしていなさい。」

燈「さて、なら私は帰るわ。今日は実のある話が沢山出来て光栄だったわ、曹孟徳殿。」

華琳「あら、会食の支度をしていただいたのだけれど。」

燈「申し訳ないのだけれど、辞退させていただくわ。・・・戻つてすべき事が、山の

ようにあるの。」

華琳「そう……。そういえば、その子は？」

燈「ああ、この子は私の娘よ。見聞を広めさせるために同行させたの……。喜雨、ご

挨拶なさい。」

喜雨「……。姓は陳、名は登、字は元龍と申します。」

陳登は居心地が悪かったのか、形式に沿った挨拶をしたが、どこかぶつきらばうな物

言いで名乗り、ペこりと頭を下げたのだった。

華琳「陳元龍……。最近、沛の米や麦の生産が大幅に増えた話を聞いた時、その名が

出てきたわね。」

燈「あら、お耳が早い。この子は政事よりも、そちらの方が好きなようなのよ。」

華琳「そう。私の弟は武が好きだし、ある意味同じね。」

喜雨「……。土と水は、正面からちゃんと向き合った者には誠実に答えてくれるから。」

腹の探り合いも化かし合いもないし、その方がずっと気楽だよ。」

この発言に、

純「ほほう、お前、中々素晴らしい才能じゃねーか！それが出来るなんて、立派だな、俺は尊敬するよ！」

純はそう言つて、陳登を褒めたのだった。

喜雨「そ、尊敬だなんて……。黄鬚と呼ばれ戦に勝つ曹彰様と比べたら、僕は大事な事してないよ。」

これには、普段鉄仮面のように表情を崩さない陳登は大慌てでそう言つた。

純「そんな事ねーよ、胸を張れ！その考えが、どれだけの民を救えるか！」

それに対し、純はそう言つて陳登を更に称えたのだった。

一刀「……なあ。」

秋蘭「どうした、北郷？」

一刀「純つて、あんな感じだったか？」

この様子を見ていた一刀は、秋蘭にそう尋ねた。

秋蘭「北郷は初めてだったな。純様は政事は得意では無いから、そういうのが出来る者を非常に尊敬するお人なのだ。」

一刀「へえ……。」

と一刀は純の様子を見ていた。その時、

華琳「純、まだ話の途中なのだけど……。」

と言ひ、華琳は純をたしなめた。

純「ああ、申し訳ございません。姉上。」

それを聞いた純は、そう言つて下がつた。

華琳「弟の非礼、お詫びするわ。」

燈「いえ。こちらこそ、娘の非礼をお詫びするわ、曹孟徳殿。」

華琳「その知識、いつか私の所でも役立ててほしいものね。」

燈「あら。それは人質ということかしら？」

華琳「まさか。同盟国を相手にそんな無粋な真似はしないわよ。」

華琳「正式な依頼よ。我が陳留にも、これから手を付けなければならぬ土地がそれ

こそ山のようにあるの。」

華琳「沛で振るつた手腕を生かしてくれと光榮だわ。むしろ、純は絶対に快く迎えてくれるわ。」

喜雨「……曹彰様からの依頼だったら、考えておくよ。」

そして2人は頭を下げ、静かに、謁見の間を出て行つた。

一刀「・・・お疲れ様、華琳。」

華琳「この程度、大したものではないわ。朝廷に顔を出す事に比べればね。」

一刀「ほんと、どんだけ魔境なんだよ、朝廷。」

華琳「文字通り、魑魅魍魎の跋扈する蠱毒壺よ。それに比べれば、先程の事など猫のじやれ合いのようなものね。」

柳琳「ですが、あのお方・・・どこまでが本心だったのでしょうか。いくら戦力が心許ないとは言え、他国の兵を自領に引き入れるなど・・・。」

華琳「さあね。けれど、これで貸しを作っておくのも悪くはないでしょう。もちろん、向こうに良いようにされないよう、色々と根回しは必要だけれど。」

一刀「・・・猫とじやれ合うだけでも大変だな。」

華琳「猫にも爪の一つくらいあるものよ。それよりも栄華。」

栄華「はい。お風呂は用意させてありますわ。ゆっくり、汗をお流し下さいませ。」

華琳「それと、遠征に出す兵の支度は純、あなたに全て任せるわ。既に城下の商人には話を付けているし、費用は向こう持ちだから、その点に関しては栄華と相談しなさい。」

純「はっ。」

一刀「話を付けてるって・・・まさか、陳珪さん達が来る前にずっと城下に出かけて

たのつて、それ!」

華琳「二手、三手先を打っておくくらいは当然でしょう。任せるわよ、純、栄華。」

純「お任せ下さい。」

栄華「はい。お兄様と一緒に、他国に見られても恥ずかしくないよう、万全整えさせていただきます。」

一方

喜雨「・・・なるほど。本当に、手の入れがいがありそう。」

燈「あら。曹子文から誘いの依頼が来る前に、もうこちらに来る気になつていないじゃない。」

喜雨「僕は母さんとは違うよ。考える必要があるから、考えるつて言つただけ。」

燈「そう。・・・けれどあの曹孟徳と言う子、噂に聞くよりずっと自製の効く子だつたわね。その弟の曹子文も、血気盛んで気性が荒いと聞いていたけど、意外と大人しかったし。」

燈「袁家の名を出せば、もう少し楽にこちらの誘いに乗ってきてくれるかと思ったのに……」

燈「おかげでこちらの仕込みが台無しだわ。」

喜雨「……。」

燈「もつとも、これなら……ふふっ。」

喜雨「……そういう所が嫌いなんだよ。政治家って。そんな会話をしていた親子であった。」

9 話

城下の下を走り回る完全武装の兵士達。束ねられた槍は薪のように積み上げられ、その隣には槍束を二回り小さくした束が更に大きな山を築いていた。

それは、弓隊が使う矢であり、その他にも糧食やその他備品まであり、それらはCGではなく本物であり、一刀はそれを呆然と見ていた。

春蘭「どうした、そんな間の抜けた顔をして。」

すると、そこを通りかかった春蘭にその声を掛けられた。

一刀「いや、これだけの兵が揃ってるの見たの、初めてだからさ、朝議とか出城の街である程度は見てたけど、ちよつと感動したと言うか、驚いたというか・・・」

春蘭「・・・この程度でか？」

一刀「そりゃ春蘭は見慣れてるんだろうけどさ。俺達の国じゃ、こんな光景見られな
いんだよ。」

春蘭「やれやれ・・・。今からそのザマでは、いずれ華琳様または純様がもつと多くの兵を率いるようになった暁には、驚いて死んでしまうのではないか？」

一刀「いやいや。流星にそれまでには慣れるってば。」

その時、

純「……何を無駄話してるんだ、お前ら。」

純が、華琳や秋蘭と一緒にやって来た。

春蘭「じ……っ、純様……！それに華琳様……！これは、北郷が！」

一刀「うわひどっ！おいこら！先に話し掛けてきたのって、春蘭が先だろ……！」

純「つたく……春蘭。装備品と兵の確認の最終報告、受けてねーぞ。数はちゃんと揃ってるのか？」

春蘭「は……はいっ。全て滞りなく済んでおります！北郷に声を掛けられたため、報告が遅れました！」

一刀（また俺のせいにするー！）

華琳「……その一刀には、糧食の最終点検の帳簿を受け取ってくるよう、純に言われていた筈よね？」

一刀「あ……。」

一刀は、城下の完全武装の兵士などに気を取られて、すっかり忘れていた。

一刀「ごめん、すぐ確認してくる！栄華の所で良いんだっけ？」

秋蘭「栄華は商人達への最後の根回しに出ているぞ。実際の作業は補佐の監督官がしている筈だ。」

一刀「ああ、華琳が他の州に頼まれて遠征を行う、って話か。確かにその辺の情報をしつかり流しとかなないと、華琳が隣国の侵略に出た・・・なんて言われるかもしれないもんな。」

一刀「・・・そう言えば前から思ってたんだけど、栄華って男嫌いなのによくそういう根回しとか行けるな。女の人ばかりなわけないだろうし、大変なんじゃない？」

華琳「だからこそよ。男が嫌いだからと言つて、いつまでもそのままでも困るでしよう。」

一刀「ああ・・・まあ、確かに。」

つまりそれは、華琳なりの優しさだった。

華琳「一刀、機会があればあれを抱いておあげなさい。たまには荒療治も良いでしよう。」

その発言に、

一刀「いやおま、抱くつて、それ・・・」

一刀は、驚いてしまった。

華琳「あら。私から見ても、栄華は美人だと思っただろう？」

純「俺も身内鼻屑抜きにしても、器量良しだと思っただろう。」

一刀「そりゃ栄華が美人つて事に異論はないけどさ。・・・俺やだよ。俺に手籠めに

されたつて遺書残されて自害とかされるの。」

華琳「ふふつ、冗談よ。それに、栄華は他に好きな子がいるしね。」

一刀「そ、そうなんだ。」

純「……まあその件はいつか。早くしろ、お前が遅れる事で、全軍の出撃が遅れるぞ。」

一刀「了解。すぐ行って来る！」

秋蘭「……北郷。監督官は、今馬具の確認をしている筈だ。そちらに行くといい。」

一刀「ありがと、秋蘭。」

そう秋蘭に言われ、一刀はその場を後にした。

しかし、監督官の顔を知らない一刀は、誰かに聞こうとしたのだが、皆戦前というものもあつてピリピリしてて話しかけにくかったのだが、柳琳にどこにいるかを聞き、そこに駆けつけた。

一刀「ええつと……荷馬車はこの辺りだから……。あ、ちよつと君！」

そして、一人の少女に話しかけたのだが、

??「……。」

一刀「ちよつと、その君！」

??「……。」

無視されていた……。

一刀「聞こえてないのかな……？おーい！」

すると

??「聞こえているわよ！さつきから何度も何度も何度も……一体何のつもり
!？」

と言われてしまったのだった。

一刀「聞こえてるんなら返事くらいしてくれよ……。」

??「アンタなんかには用はないもので、そんなに呼びつけて、何がしたかったわけ？」

一刀「糧食の再点検の帳簿を受け取りに来たんだけど……監督官つて人がどこにいるか知らないかな？」

??「何でアンタなんかには、そんなことを教えてやらないといけないのよ。」

一刀「……何でつて。純に頼まれたからだけど。」

その時、

??「な……っ！……ちよつと、何でアンタみたいな奴が、曹彰様の真名を呼んで……っ

！」

純の真名を言った一刀にそう怒鳴ったのだった。

一刀「良いじゃないか。色々あるんだよ。」

??「良いわけじゃないでしょう！曹彰様のお耳に入ったら、アンタ何か叩き斬られるわよ

！あの方は、黄鬚と呼ばれてる猛将で気性の激しいお方よ。」

一刀「・・・いや、純自身から呼んで良いって言われてるんだけど。」

??「信じられない・・・なんで、こんな猿に・・・」

??「！・・・アンタ・・・まさか、曹操様の・・・!!」

一刀「ああ、華琳も真名を呼んで良いって言われてる・・・。」

??「何てこと・・・ああ・・・曹操様と曹彰様が穢される・・・。」

一刀「おいおい、どういう意味だよ・・・。」

??「・・・思い出した。アンタ、この間曹操様に拾われた、天界から来たとか言う猿

でしょ？猿の分際で曹操様と曹彰様の真名を呼ぶなんて・・・ありえないわ・・・。」

一刀「・・・。」

デイスられているが、懐かしいと感じた一刀だった。

??「で、何？私も暇じゃないんだけど。」

一刀「・・・いや、だから、糧食の帳簿を監督官から受け取ってくるように純に言われたんだった。栄華が外回りで忙しいから、監督官の管轄になってるって。」

?? 「・・・曹彰様に？それを早く言いなさいよ！」

一刀（・・・何度も言ったんだけどなあ。根は悪い子じや・・・ない・・・んだろうか。）

一刀「まあいいや。どこにいるの？監督官の人は。」

?? 「私よ。」

一刀「はいはい。・・・で。どこにいるの？」

?? 「だから私って言ってるの。」

一刀「へっ？君が？」

?? 「悪い？何か文句ある？私がここの監督官をしている事で、あなたの人生に何か致命的な問題があるとしても言いたいわけ？」

?? 「もしあるって言うのなら、そのの所を論理的に説明してみなさいよ。少しでも論理が破綻してるなら嗤ってあげるから。」

一刀「い、いや。別に無いけど・・・？」

?? 「・・・ま、アンタの人生なんかどうでも良いけど。」

一刀「良いのかよ・・・。」

一刀「ま、まあとにかく、その再点検の帳簿つての、貰えるかな？」

?? 「・・・その辺に置いてあるから、勝手に持って行きなさい。草色の表紙が当てて

あるわ。」

一刀「……あ、そう。」

そして、帳簿を持って純達の元へ行ったのだった。

一刀「純、遅くなった！これ、再点検の帳簿！」

純「おせーぞ。早く見せろ。」

そして、純は帳簿を受け取ると、すぐにそれを確認し始めた。

純「……。」

一刀（……何かこうやって確かめられてると、テストの採点されてるみたいでドキドキするな。別に俺が書いた書類じゃないんだけど。）

純「……。」

華琳「純？」

すると、純の様子が変わった事に気付いた華琳が、純に声を掛けた。

純「……秋蘭。」

秋蘭「はっ。」

純「この監督官というのは、一体何者だ？」

秋蘭「はい。榮華が使えるところで、陳珪殿がいらした時の警備計画も作成したそうで、今度の食糧調達も任せてみたのですが・・・何か問題でも？」

純「ここに呼べ。大至急だ。」

秋蘭「はっ！」

そう言われ、秋蘭は監督官を連れに行った。

華琳「純、どうしたの？」

純「姉上、これを。」

そう言い、純は帳簿を華琳に見せた。

華琳「これは・・・少ないわね。」

純「はい、俺が指定した量の半分です。気になったので。」

華琳「成程ね・・・。」

純「・・・。」

華琳「・・・遅いわね。」

春蘭「襲いですなあ・・・。」

一刀「すぐ戻ってくるって。」

雲の動きと下で運ばれてる荷物の減り具合を見て、まだ大した時間は経っていないと感じそう言った一刀。

一刀（純は目を閉じて腕を組んで黙ってるけど、相当頭に來てる感じだな・・・。何というか、空気が重いというか、痛い。）

秋蘭「純様。連れて参りました。」

そして、戻ってきた秋蘭が連れてきたのは、先程凄いい口調で一刀と話していた少女だった。

純「お前が食糧の調達をしたのか？」
すると

??「はい。必要十分な量は用意したつもりですが・・・何か問題でもございましたか？」

純「必要十分って・・・お前どういうつもりだ？俺が指定した量の半分しか準備出来てねーじゃねーか！」

その少女の言葉に、純はそう言って怒鳴ったのだった。

一刀「!？」

その剣幕に、一刀は驚いてしまった。

一刀（純って、怒るとあんなに怖いのか!?!しかし、純が怒るのも無理ないな。半分し

か準備出来てないってなると……。

純「このまま出撃したら、糧食不足で我が軍は行き倒れになる所だったぞ。そうなたら、お前どう責任を取るつもりだった？」

??「いえ。そうはならない筈です。」

純「何? ……どういう事だ？」

??「理由は三つあります。お聞きいただけますか？」

純「良いだろう。俺を納得させられたなら、今回の件は不問にしてあげよう。」

一刀（納得いかなかったらどうするんだ、純の奴。変な子ではあるけど、あんまりヒドい目に合うつてのはいただけないぞ……?）

??「……ご納得いただけなければ、私の不徳の致す所。この場で我が首、刎ねていただいて結構にございます。」

純「……二言はねーぞ?」

??「はつ。では、説明させていただきますが……」

その様子を見ていた一刀は

一刀「華琳、良いのか？」

華琳「何が?」

一刀「純に全て任して……」

そう華琳に尋ねた。

華琳「別に構わないわよ。あの子、気性は荒いけど、臣下の言葉にちゃんと耳を傾ける子だから。」

一刀「そ、そうかもしれないが……」

華琳「それに、面白いじゃない。あの純にこのような行動をしたのよ、見ものよ。」

そう言い、華琳は純と少女のやり取りを面白そうに見たのだった。

??「……まず一つ目。この軍を全て掌握しているのは曹彰様です。曹彰様はこの軍で最も戦に長け、黄鬚と呼ばれている程の将軍。それ故、必ず作戦の要たる糧食の確認をなさいます。そこで問題があれば、こうして責任者を呼ぶはず。行き倒れにはなりません。」

すると、

純「……。」

純は太刀を手を取った。

一刀「おいおいおい！ホントに首を刎ねる気か!？」

純「二言はねーと言った。ただ……この太刀を抜き、首を刎ねるか太刀を抜かないかは、二つ目の説明次第だ。続けろ。」

??「次に二つ目。糧食が少なければ身軽になり、輸送部隊の行軍速度も上がります。」

よって、討伐行全体にかかる時間は、大幅に短縮出来るでしょう。」

一刀（そう言えばさつき、食料は荷馬車に積んでたよな。その数が減るなり、軽くなりすれば、確かに移動速度は上がるだろう。けど・・・。）

春蘭「ん・・・？なあ、秋蘭。」

秋蘭「どうした姉者。そんな難しい顔をして。」

春蘭「行軍速度が早くなっても、移動する時間が短くなるだけではないのか？討伐に掛かる時間までは半分にはならない・・・よな？」

秋蘭「ならないぞ。」

春蘭「良かった。私の頭が悪くなったのかと思ったぞ。」

秋蘭「そうか。良かったな、姉者。」

春蘭「うむ。」

一刀（そう。春蘭の言う通りだ。遠征に掛かるのは移動の時間だけじゃない。戦闘も、休息にだって時間が掛かる。）

一刀（そもそも食料がちよつと軽くなった程度で、移動速度だって倍になるわけじゃない。）

華琳「・・・。」

華琳も少女の説明を聞いており、

純「……。」

純も聞いていたのだが、説明に満足出来なかったのか、持っていた太刀を抜いて、ゆっくりと構えてみせた。

一刀「純！」

純「さあ、後がねーぞ。最後の理由、言ってみろ。」

??「はっ。三つ目ですが……私の提案する作戦を採れば、戦闘に掛かる時間は移動時間以上に縮める事が出来ましょう。よって、この糧食の量で十分だと判断致しました。」

そして、

桂花「曹操様！曹彰様！どうかこの荀彧めを、曹操様と曹彰様を勝利に導く軍師として、麾下にお加え下さいませ！」

と荀彧はそう言つて懇願したのでった。

一刀「じ……っ！」

一刀（荀彧つて……曹操の軍師の、あの荀彧か!?!）

秋蘭「な……っ!?!」

春蘭「何と……。」

華琳「ほう……。」

純「……。」

桂花「どうか!どうか、曹操様!曹彰様!」

それを聞いて、

純「……荀彧。お前の真名は。」

純はそう荀彧に尋ねた。

桂花「桂花と、そうお呼び捨て下さいませ。」

純「桂花。お前……この曹彰を試したな?」

純の問いに

桂花「はい。」

荀彧はそう答えた。

春蘭「貴様、何をいけしやあしやあと……。純様!このような無礼な輩、このまま

首を刎ねてしましましょう!そうですね、華琳様!」

春蘭がそう言うと、

桂花「あなたは黙っていないさい!私の運命を決めて良いのは、曹操様か曹彰様だけよ

!」

荀彧はそう春蘭に返した。

春蘭「ぐ……つ。貴様あ……!」

華琳「春蘭。」

春蘭「し、しかし……！」

華琳「良いから黙りなさい。」

春蘭「は……はい……。」

純「桂花。軍師としての経験は？」

桂花「はつ。ここに来るまでは、南皮で軍師をしておりました。」

純「……そつか。」

一刀「な……なあ、秋蘭。南皮つて……あの南皮か？」

秋蘭「ああ。袁紹の本拠地の、あの南皮だろう。」

純「……どうせアイツの事だ、軍師の言葉など聞きはしなかったのだろう。」

純「それに嫌気が差して、この辺りまで流れてきたつてとこか？」

桂花「……まさか。聞かぬ相手に説く事は、軍師の腕の見せ所。ましてや仕える主が天を取る器たれば、その為に己が知謀を説く労苦、何を惜しみ、躊躇いましょうや。」

純「……ならばその力、俺と姉上、特に姉上の為に振るう事は惜しまぬと？」

桂花「一目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信致しました。もしご不要とあらば、この苟賤、生きてこの場を去る気はありません。」

桂花「既に我が三魂七魄はお預け致しました。残る体が不要とあらば、その刃で、遠

慮無く私を斬り捨てて下さいませ！」

そう苟彘は真つ直ぐな目で純にそう言った。

一刀「じ、純……。」

純「……。」

秋蘭「純様……っ！」

純「桂花。俺がこの世で最も腹が立つ事。それは、他人に試される事だ。まあ、姉上も一緒だが……分かつているのか？」

桂花「無論です。」

純「そうか……。ならば、こうする事もお前の考えの内という事だな……！」

一刀「純っ！」

そう言い、純は太刀を苟彘に向かって振るつた。

桂花「……。」

華琳「……。」

秋蘭「……。」

春蘭「……。」

しかし、血は飛び散る事無く、苟彘はその場に立ったままだった。

一刀「……寸止めか。」

純「ったりめーだろ。．．けれど桂花。もし俺が本当に振り抜いていたら、どうするつもりだった？」

桂花「先程の言葉が全てにございます。．．お預けした我が全霊をもつて、お二方をお護りするつもりでした。」

純「．．俺は飾った言葉は嫌いだ。本当の事を言え。」

桂花「曹彰様は気性の激しいお方ですが、相手の言葉にしっかりと耳を傾ける度量の広いお方。そして、自身も試されたなら、試し返すに違いないと思われましたので。避ける気など毛頭ありませんでした。」

桂花「．．何より私は軍師であつて武官ではありません。あの状態から曹彰様の一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした。」

純「そうか．．．。」

そう小さく呟いた純は、太刀をゆっくりと下ろした。

純「．．ふっ。はっはっはっはっ!!」

すると、純は顔に手を当てながら大笑いした。

春蘭「じ、純様．．っ!？」

純「流石だな、桂花。俺を二度も試す度胸とその知謀、気に入ったぞ！ですよね、姉上！」

華琳「ええ、純を二度試すなんて、最高よ、あなた！」

桂花「恐れ入りましてございます。」

純「ならばこれからは、残り半分も姉上に捧げろ。姉上の覇道の為、その全身全霊を以て姉上に尽くせ。良いな？」

桂花「はっ！」

純「まずは、この討伐行を成功させてみる。糧食は半分で良いと言ったんだから……もし不足したならその失態、身を以て償って貰うぞ？」

桂花「御意！」

そして、荀彧の作戦に従って、曹操軍は出陣したのであった。

10話

豫州・汝南

一刀「ここ、本当に豫州なんだよな・・・。」

秋蘭「うむ。前回あれ程苦労したのが嘘のようだな。」

陳珪の根回しが本当に効いたお陰で、豫州の州境は驚くくらいあっさりと越える事が出来た。

秋蘭「北郷、大丈夫か？」

一刀「何とかね。行軍速度もゆっくりだし・・・香風に特訓して貰った甲斐があったよ。」

香風「お兄ちゃん、頑張ってた。」

今回の遠征は、一刀も馬に乗って移動する事になっており、騎馬戦レベルまではいかなかったが、香風との特訓で最低限のバランスを取れるようになっていたのだった。

一刀「けど、こんな調子で大丈夫なのかな？俺はありがたいけど、遅くない？」

秋蘭「別に北郷を氣遣つての事ではないだろうし、氣にする必要は無いと思うがな。」

一刀「それなら良いんだけど……。でも、何か凄い事になったなあ。」

秋蘭「うむ……。」

すると、桂花を見つけたので、

一刀「噂をすれば……。おい、桂花。」

と呼んだ。

桂花「な……。っ！アンタ、何で……。っ！」

しかし、真名を呼ばれた桂花は驚いてしまった。

一刀「華琳と純から聞いただろう。俺や秋蘭達は、お前の事真名で呼ぶって。」

桂花「聞いたけど覚える気にもならなかったわ！」

一刀「何だそりや……。」

桂花「それに、古参の夏侯淵様はともかくとして、何でアンタ何かに真名で呼ばれな

きやならないのよ！訂正なさい！」

香風「シャンも訂正する……。？」

香風の言葉に、

桂花「……。あなたは別に良いわ。」

と言った。

一刀「古参新参で言うなら、俺と香風は同期だぞ？」

桂花「なら訂正するわ。役に立つ立たないの話よ。」

一刀「ぐぬぬ……。」

一刀（その基準を持って来られると、正直痛い……!）

一刀「そ……そんなことよりさ。あんな無茶な事言つて……本当に大丈夫なのか？」

桂花「そんなことじゃないわよ。誤魔化されませんからね！」
すると、

秋蘭「華琳様と純様の命だ。諦めて受け入れるのだな。」

と秋蘭が横からフオーロしたのだった。

桂花「……しようが無いわね。で、何が無茶ですつて？」

一刀「いや、糧食を半分で済ますとかさ……」

桂花「別に無茶でも何でも無いわよ。今の我が軍の実力なら、これくらい出来て当たり前なんだから。何より、曹彰様が鍛えた兵なんだもの。」

一刀「……そうなのか？」

と一刀は秋蘭に尋ねた。

秋蘭「純様は我が軍で最も武に優れているお方だ。しかし、それを頼んで無茶な攻め

を強いる事は基本ないからな。正直、こういう強行を実戦で試すのは初めてだ。それは華琳様と同じ事だがな。」

桂花「ここ暫くの訓練や討伐の報告書と、今回の兵数を把握した上での計算よ。これでも余裕を持たせてあるのだから、安心なさいな。」

一刀「・・・でも、食料が半分なんだろ？この行軍速度で大丈夫なのか？」

桂花「うるさいわね。軍師の私が大丈夫って言ってるんだから大丈夫なの。何か文句でもある？」

一刀「いや・・・ないけど。」

秋蘭「その辺りの手並みはおいおい見せてもらおうとしよう。・・・しかしあのやり取りは肝が冷えたぞ。」

一刀「全くだ。何であんな無茶なやり方をしたんだ？能力に自信があるなら、軍師として志願すれば良かったじゃないか。」

この疑問に

秋蘭「ああ・・・それはだな」

桂花「軍師として志願出来たなら、していたわよ。」

桂花は秋蘭の代わりにそう答えた。

一刀「してなかったの？」

桂花「……ふん。」

秋蘭「うむ。軍師の募集はしていなかった。」

一刀「そうだったんだ……。」

秋蘭「経歴を偽って申告する輩も多いのでな。個の武勇なら純様か姉者辺りが揉んでやれば大体分かるのだが……。」

秋蘭「香風のように既に名が知れているならまだしも、大概の文官は使ってみると判断がつかんのだ。稟と風は、まさに偶然としか言いようがない。」

一刀「そうか。やっぱり凄いんだな、香風。」

香風「えへへー。」

秋蘭「後は……栄華に付けるにはちようど良さそうだったしな。」

一刀「あー。それなー。」

その言葉に、ある意味察した一刀。

桂花「そんなわけで、一刻も早く曹操様と曹彰様の目に留まる働きをして、召し上げていただこうと思ったのだけれど……思ってたよりその機が早く来て、良かったわ。」

一刀「早く、ねえ……。」

秋蘭「それで、お二人はどうだったのだ？」

秋蘭の問いに、

桂花「思つた通り、素晴らしいお二方だったわ……。あのお二方こそ、私が命を懸けてお仕えするに相応しいお二方だわ！」

桂花「とは言え、曹彰様には既に軍師が二人いるようだけどね。」
と桂花は答えた。

一刀「そんなに良かったの？」

桂花「……ふつ。あなたのような木偶の坊には分からないのでしょね。可哀相に。」

一刀「……何か俺に、恨みでもあるのかよ。」

桂花「別に無いわよ。単に嫌いなだけ。」

一刀「……。」

秋蘭「……。」

これには、一刀と秋蘭は黙るしか無かったのだった。

その時、

春蘭「おお、貴様ら、こんな所にいたか。」

春蘭がやって来た。

秋蘭「どうした姉者。急ぎか？」

春蘭「うむ。前方に何やら大人数の集団がいるらしい。純様がお呼びだ。すぐに来い。」

そう言われ、一刀達は本陣に向かったのだった。

本陣

秋蘭「・・・遅くなりました。」

純「ちようど偵察が帰ってきた所だ。報告を頼む。」

柳琳「はい。行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗がないため所属は分かりませんが、格好もまちまちですし、どこかの野盗か山賊だと思われまます。」

華琳「・・・そう。さて、どうするべきかしら？桂花。」

桂花「はっ！もう一度偵察隊を出し、状況次第で迅速に撃破すべきかと。」

桂花「将の選抜までお任せいただけのならば・・・曹彰様、夏侯惇、徐晃、北郷。この四名を中心に据えるのが良いでしょう。」

春蘭「おう。」

香風「まかせて。」

純「・・・成程。」

この人選には、純は何となく察した。ただ、

一刀「・・・俺え!？」

まさか呼ばれるとは思わなかった一刀は、驚いてしまった。

一刀（純と春蘭、そして香風は分かるけど、何で俺・・・）

桂花「曹操様を偵察に行かせる気？」

一刀「いや、そうじゃなくて、俺で戦力になるのかなって・・・」

桂花「ついでに戦闘に巻き込まれて死んでくれれば言うことなしでしょう？」

一刀「いやちよつと待って！言うことしかないよ!？」

桂花「半分は冗談よ。」

桂花「曹純様はお戻りになったばかりだし、夏侯淵様と曹洪様は本隊の指揮があるのでしよう。」

すると、

華侖「なら、あたしが行きたいっすー!」

そう華侖が答えたが、

桂花「・・・せめて夏侯惇様の抑え役くらい、してちょうだい。」

と桂花は答えた。

純「やはり、そういうことか。分かった、引き受けよう。」

一刀「つまり、俺は保険か……。」

春蘭「あの、何を納得しているのですか！それではまるで、私が敵と見ればすぐ突撃するようではないですか！」

桂花「違うの？」

一刀「違うの？」

純「違うのか？」

華琳「違うないでしょう？」

春蘭「うう、華琳様と純様まで……。」

純「はは、冗談だ。ならその策で行こう。」

華琳「純、任せたわよ。」

純「はっ、お任せ下さい。」

香風「なら華琳様、行つてきまーす。」

すると、

秋蘭「……姉者、香風、北郷。純様にもしもの事があつたら、分かっているな。」

栄華「……春蘭さん、北郷さん。お兄様に何かありましたら、分かっていますわね。」

稟「……私もお二人に同感です。分かっていますね。」

秋蘭と栄華、そして稟が、禍々しい殺気を出しながら一刀と春蘭、そして香風に対し

て、そう言った。それに対して、

一刀「は、はい!!了解しました!!」

春蘭「う、うむ。分かっているぞ、秋蘭、栄華、稟。」

香風「コクコクコク」

三人は青ざめながらそう言った。それを見た

純「やめろ、秋蘭、栄華、稟。」

風「秋蘭様、栄華様、稟ちゃん、ちよつと抑えるのですよ。」

柳琳「秋蘭様、栄華ちゃん、稟さん、抑えよう。ねっ?」

純、風、そして柳琳が抑えたお陰で、

秋蘭「……はっ。」

稟「……分かつてますよ、純様、風、柳琳様。一応念を押しただけです。」

栄華「……お兄様、風さん、柳琳、分かっていますわ。」

何とか殺気を取めたのだった。

偵察隊

純「春蘭、今回は偵察が第一だ。通りすがりの商人とかその護衛とかだったら、後が

面倒だからな。」

春蘭「分かっております純様！そこまで私も迂闊ではありません。」

一刀「いや、その迂闊がありえるから俺と純が付けられたんだよ……。」
すると、

香風「春蘭様、あそこー。」

と香風が指を指して言った。

春蘭「よし！と」

純「突撃禁止だぞ！」

春蘭「わ、分かっております……！と、とりあえず、とりあえず……、私は何を
言おうとしたのでしょうか、純様！」

純「知らねーよ……！」

一刀「でも……何だ？なんか連中、行軍してる感じじゃないぞ？」

純「何かと戦っているようだな。」

春蘭「そうですね。」

そうして見ていると

香風「あ、何か飛んだー。」

純「ありや、人だな。」

人が飛んでいた。

一刀「・・・って、人お!？」

一刀（人って、あんな高く上がるものなのか!?)

春蘭「何だ、あれは!」

兵士A「誰かが戦っているようです!・・・その数、一人!それも子供の様子!」

その報告を聞いた春蘭は

春蘭「何だと!？」

馬に鞭を当てて、一気に加速させてその集団へと向かっていった。

純「おい、春蘭!」

一刀「春蘭、待ってってば!」

すると、

香風「純様とお兄ちゃんは、後で来て下さい。」

一刀「香風まで!っ!」

そう言った香風も、春蘭が向かった方向へ馬を走らせたのだった。

兵士A「曹彰様・・・。北郷殿・・・。」

純（つたくあいつら、何しに来たんだよ・・・。）

一刀「純、どうする?」

純「しよーがねー。一刀は二十騎程率いて春蘭達の援護に行け。ただし、全滅させるな。一部は逃がし、そいつらを残りの俺が追跡する。恐らく敵の本陣かもしくは本隊に逃げ込むはずだ。」

一刀「わ、分かった!!」

そう言つて、一刀は二十騎程率いて、春蘭達に向かったのだった。

一方

?? 「でえええええいつ!」

野盗A 「ぐはあつ!」

?? 「まだまだあつ!でやああああああつ!」

野盗B 「がは・・・っ!」

野盗C 「ええい、テメエら、ガキ一人に何を手こずつて!数で行け、数で!」

野盗D 「おとおお!」

?? 「はあ・・・はあ・・・はあ・・・。もう、こんなにたくさん・・・多すぎるよう・・・」

！」

その時、

野盗E「ぐふうっ！」

1人の野盗が倒れた。

??「・・・え？」

春蘭「だらああああっ！」

野盗F「げふうっ！」

香風「はああああっ！」

野盗G「ぐはああっ！」

春蘭「大丈夫か！勇敢な少女よ！」

??「え・・・？あ・・・はいっ！」

春蘭「貴様らあっ！子供1人によつてたかつて・・・卑怯というにも生温いわ！てや

ああああああっ！」

野盗C「うわあ・・・っ！退却！退却ーっ！」

春蘭「逃がすか！全員、叩き斬つてくれるわ！香風、回り込め！」

香風「了解。」

するとそこへ、

一刀「おい、春蘭、香風！ちよつと待てつつの！」

一刀が止めに入った。

春蘭「ぼっ……！北郷、何故止める！」

一刀「俺達の仕事は偵察だぞ。その子を助けるために戦うのは良いけど、敵を全滅させるのが目的じゃないだろう！」

香風「桂花、流れ次第で全滅させて良いって……。」

春蘭「そうだぞ。敵の戦力を削って何が悪い！」

一刀「それは最もだけど、もっと良い作戦があるだろ。」

春蘭「……例えば何だ？」

一刀「逃がした敵をこつそり追跡して、敵の本拠地を掴むとかそういうのだよ。」

春蘭「……おお、それは良い考えだな。誰か、おおい、誰かおらんか！」

一刀「……純が既に偵察に向かったよ。」

香風「さつすがー、純様。」

春蘭「うむ、そうだな。」

一刀「はあ……。」

一方純達は、

純「よし、一部を逃がすことは出来たようだな。あの集団を追うぞ！」

兵「はっ!!」

そう言つて、純達は逃げた敵を追い、盗賊団の本拠地を見つけ、華琳の本隊に戻つたのであつた。

??「あ、あの・・・。」

春蘭「おお、怪我は無いか？少女よ。」

??「はいっ。ありがとうございます！お陰で助かりました！」

春蘭「それは何よりだ。しかし、何故こんな所で一人で戦つていたのだ？」

??「それは・・・。」

その時、後方から華琳達本隊がやつて来た。

一刀「来た来た。おい！華琳ーっ！」

??「・・・っ！」

華琳「一刀。謎の集団とやらはどうしたの？ 戦闘があつたという報告は聞いたけど？」

一刀「春蘭と香風の一当てで総崩れだよ。一部は逃がし、追跡させているから、本拠地はすぐに見つかると思う。」

華琳「あら、なかなか気が利くわね。恐らく純の指示でしょう？」

一刀「ああ、そうだよ。」

するとそこへ、

秋蘭「ところで姉者、香風、北郷。純様と一部の騎馬兵はどうした？」

栄華「そう言えば、見当たりませんわね。」

稟「どこに行つたのですか？」

秋蘭達が一刀らに尋ねた。

春・香「……。」

春蘭と香風は沈黙の後、しまった！ という顔をし、少し青ざめた顔をした。

秋蘭「姉者、香風……。」

栄華「春蘭さん、北郷さん……。」

稟「皆さん……。」

すると、秋蘭、栄華、稟が禍々しいオーラを出したので、

一刀「じ、純は自ら一部の兵を率いて本拠地を探っているよ！」
と一刀がそう答えたのだった。

秋蘭「姉者！香風！純様にもしもの事があつたらどうするつもりだ！」

栄華「秋蘭さんの言う通りですわ！お兄様にもしもの事があつたらどうするつもりですの！」

稟「皆さん……何かあつたら私が許しませんよっ！」

すると、秋蘭達は語気を荒げ春蘭達にそう言った。

春蘭「秋蘭、栄華、稟！純様は黄鬚と呼ばれし我が軍最強の武人だぞ！この程度の連中に遅れを取るものか！」

秋蘭「しかし……。」

栄華「そうですね……。」

稟「純様……。」

華琳「貴女達、純の事を慕っているのなら、信じなさい。春蘭の言う通り、そう簡単にはやられないわよ。」

華琳がそう答えたので、

秋蘭「……御意。」

栄華「……分かりましたわ。」

稟「……はっ。」

秋蘭達は怒りを静めたのであった。

?? 「……！」

華琳「この子は？」

?? 「お姉さん、もしかして、国の軍隊……っ！」

春蘭「まあ、そうなるが……ぐっ！」

一刀「え……っ!？」

その時、春蘭と一緒に戦っていた少女は、鉄球をなぎ払い、春蘭に攻撃した。もし春蘭じゃなかったら、そして春蘭の剣が彼女の攻撃を打ち返してなかったら、間違いなくその場にいた全員が吹き飛ばされてしまっただろう一撃だった。

春蘭「き、貴様、何をっ!？」

?? 「国の軍隊なんか信用できるもんか！僕達を守つてもくれないクセに、税金ばっかりどんどん重くして……ッ！」

?? 「てやあああああああっ！」

春蘭「……くうっ！」

一刀「だから君は一人で戦つてたのか……？」

?? 「そうだよ！僕が村で一番強いから、僕がみんなを守らなきゃいけないんだっ！盗

人からも、お前達……役人からもっ！」

香風「……。」

春蘭「くっ！こ、こやつ……なかなか……っ！」

一刀「嘘だろ……？いくら状況が状況で本気になれないからって……あの春蘭が、押されてる!？」

一刀「桂花。この辺りの郡や国って、そんなひどい政治をやってるのか？」

桂花「だからたかが千の賊も退治出来ずに、州さえ違う曹操様に泣き付く羽目になるのよ。」

一刀「……なんか、希望が無いな。」

香風「でも……この辺りが、多分普通。華琳様の所が、特別。」

一刀の言葉に、香風はそう言った。

華琳「……。」

柳琳「……お姉様。」

??「でええええええええええええええええいっ！」

春蘭「ぐう……！仕方ないか……いや、しかし……」

するとそこへ、一人の影が二人の間に立った。

数分前、

純「よし、敵の本拠地も割り出せたし、姉上の本隊に合流すつか。」

そして、

純「ん？あの少女、さつき野盗の集団と戦ってた子だな。本気が出せないとは言え、あの春蘭を押すとは……。とは言え、止めなきやな。」

そして後ろを振り返し、

純「俺、あいつらを止めるから、お前らは後で来い。」

そう言つて、純は二人に向かって行つたのであつた。

現在

純「お前ら、そこまでだ。」

純は、春蘭と少女の間に立った。それぞれ大小の刀を向けながら。

??「え……っ？」

春蘭「純様！」

一刀「純!？」

純「剣を引け！そこのお前も、春蘭も！」

??「は……はいっ！」

純の覇気に当てられて、少女は軽々と振り回していた鉄球を、その場に取り落としたのだった。

純「……。」

その様子を見た純は、刀を鞘に収め、華琳の傍に立った。

華琳「……春蘭。この子の名は？」

春蘭「え、あ……。」

季衣「き……許楮と言います。」

華琳「そう……。」

そして華琳が取った行動は、

華琳「許楮、ごめんなさい。」

季衣「……え？」

許楮に頭を下げたのだった。

桂花「曹操、様……？」

春蘭「何と……。」

一刀「お、おい、華琳……！」
すると、

純「……。」

一刀「純！」

純が手をかざして止めた。

季衣「あ、あの……っ！」

華琳「名乗るのが遅れたわね。私は曹操。あなたを止めたのは、弟の曹彰。山向こうの陳留の地で太守をしている者よ。」

季衣「山向こうの……？あ……それじゃっ!?こ、こちらこそごめんなさいっ！」

春蘭「な……?」

季衣「山向こうの噂は聞いてます!向こうの太守様は凄く立派な人で、悪いことはないし、税金も安くなつたし、後、その太守様の弟様のおかげで、盗賊も凄く少なくなつたって！」

季衣「……あ!もしかして行商のおじさんが言った、陳留の太守様がこつちの悪い賊を討伐に来るっていうのが……!!」

華琳「……。」

許緒の言葉を聞いた華琳は、黙って頷いた。

季衣「そんな……。そんな人達に、僕……。僕……。！ごめんなさい！僕達を助けに来てくれた人に……。本当にごめんなさい!!」

華琳「……。構わないわ。今の政事が腐敗しているのは、太守の私が一番よく知っているもの。官と聞いて許緒が憤るのも、無理のない話だわ。」

季衣「で、でも……」

華琳「だから許緒。あなたの勇氣と憤り、この曹孟徳に貸してくれないかしら？」

季衣「え……。？僕の……。？」

華琳「私はいずれこの大陸の王となるわ。けれど、今の私の力はあまりに小さすぎる。」

華琳「だから……。村の皆を守るために振るつたあなたの力と勇氣。この私に貸して欲しい。」

季衣「曹操様が、王に……。？」

華琳「ええ。」

季衣「あ……。あの……。だったら。曹操様が王様になったら、僕達の村も、治めてくれますか？盗賊も、やつつけてくれますか？」

華琳「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでもなく……。この大陸の皆

がそうして暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの。」

季衣「この大陸の……みんなが……」

桂花「ああ、曹操様……」。

華琳「ねえ、許褚。」

季衣「は、はいっ！」

華琳「これから、あなたの村を脅かす盗賊団を根絶やしにするわ。まずそこだけでいい、あなたの力を貸してくれるかしら？」

季衣「はい、それならいくらでも！じゃない、僕の方こそお手伝いさせて下さい！！」

華琳「ふふっ、ありがとう。純。」

純「はっ。春蘭、香風。許褚はひとまず、お前達の下に付ける。分からないことは教えてあげろ。」

香風「はーい。」

春蘭「了解です！」

季衣「あ、あの……ええつと……」

春蘭「既に華琳様には謝ったのだろう。ならば、それで良い。」

香風「それより……ごめんなさい。」

季衣「ほえ……？どうして君が僕に謝るの？」

香風「シャンも、前は都の役人だった。……何も出来なかった。」

季衣「あはは。僕は悪い役人は大嫌いだけど、曹操様みたいに良いお役人様は大好きだよ。それより、さつきは助けてくれてありがとう。これからよろしくね！」

香風「うん。シャンは、香風だよ。」

春蘭「ならば、私の事も春蘭でいい。」

季衣「えええっ!?でもそれって、真名じゃ……僕なんかが、畏れ多いです！」

春蘭「あれ程の使い手なら、名を預ける価値もあると言うものだ。先程の猛攻、恐れ入ったぞ。」

香風「うん。今度、シャンともやろう。」

季衣「は……はいつ!なら、僕のことも季衣って呼んで下さい!春蘭様、香風、よろしく願います!」

春蘭「うむ。季衣、その力、華琳様のためにしっかり役立ててくれよ。」

季衣「はいっ!もちろんです!」

純「姉上、偵察した結果、盗賊団の本拠地はすぐそこです。」

華琳「そう。分かったわ。……では総員、行軍を再開するわ!騎乗!」

純「総員!騎乗!騎乗っ!」

そして、盗賊団の根絶やしに向かったのであった。

11話

盗賊団の砦は、山の影に隠れるようにひっそりと建てられていた。

一刀「こんな所にあつたんだ……。」

純「ああ。見つけた時思ったが、メンドーなトコに隠れやがつて。」

稟「そうですね。先程の場所からはすぐ近くでしたが、山の影に隠れてますし、ここだと絶好の隠場ですね。」

風「盗賊団にとっては、非常に良い場所ですね。」

純「そうだな。」

華琳「許緒。この辺りに他に盗賊団はいるの？」

季衣「いえ。この辺りにはあいつらしかいませんから、曹操様が探してる盗賊団っていうのも、此処だと思います。」

華琳「純、敵の数は把握出来ているかしら？」

純「はい。調べた所、およそ三千でした。」

それを聞いて、

栄華「数百か、せいぜい千という話ではありませんでしたの？こちらは千ほどしかい

ませんわよ……？」

春蘭「おのれ。あの女狐め……。」

と言った。

純「いや、三人から千まで膨れ上がった期間を考えるなら、三千でも少ねーくらいだぞ。」

華琳「そうね。純の言う通りだわ。」

桂花「とはいえ、連中は集まっているだけの烏合の衆。統率もなく、訓練もされておりませんゆえ……我々の敵ではありません。」

華命「じゃあ、このままとつげきー！って突っ込んで、わー！って一気にやつつけるっすか？」

華命の問いに対し桂花は、

桂花「まさか。それなら、夏侯惇様でも出来るでしょう。軍師のいる意味がありません。」

と答えた。

春蘭「なんだと！私でも出来るとは、どういう事だ！」

それに対し、春蘭はそう言つて噛みついたが、

純「……それで、策は？糧食の件も忘れてはいねーぞ。」

純は春蘭の発言をスルーした。

春蘭「じ、純様ぁ……。」

華琳「春蘭、そう泣かないの。」

春蘭「か、華琳様ぁ……。」

桂花「はい。まず曹彰様は曹操様と共に少数の兵を率い、砦の正面に展開していただきます。その間に夏侯惇様・夏侯淵様のご兩名は、残りの兵を率いて後方の崖に待機」
桂花「本隊が銅鑼を鳴らし、曹操様の朗々たる名乗りをもつて挑発すれば、怒り狂った敵はその誘いに応じ、間違いなく外に飛び出てくる事でしょう。」

桂花「その後は曹彰様は曹操様と共に兵を退き、十分に砦から引き離れたところで……。」

秋蘭「私と姉者で敵を横合いから叩くわけか。」

桂花「はい。お二人に徐晃殿と許緒を加え、それに曹彰様が自ら兵を率いて反転して突撃すれば、三千の敵として羊の群れに等しくなりましょう。」

香風「わかった。」

季衣「うん！僕、頑張るよ！」

純「ほお、俺を使うか。稟、風。どう思う？」

稟「悪くない策かと思えます。純様の武勇ならば、奴らを殲滅する事は容易かと。」

風「風も同じ意見です。」

純「そうか。」

すると、

春蘭「・・・おい待て。」

春蘭が待ったを掛けた。

純「何か問題があるのか？春蘭は攻撃に回る方が良いだろう？」

春蘭「そこは構わないのですが・・・その策は何か？華琳様と純様に囚をしろと、そう
ういうわけか！」

華琳「話を聞いてる限りでは、そうなるわね。」

純「そうなるな。」

桂花「何か問題が？」

春蘭「大ありだ！華琳様と純様にそんな危険なことをさせるわけにはいかん！それに
この程度の敵、純様がわざわざ危険を冒してまでやる事ではない！」

桂花「反対を口にするなら、反論をもって述べていただけると助かるのですが？夏侯
元讓殿。」

春蘭「ど、どういう意味だ。」

一刀「反対するなら、他にもっと良い作戦を提案しろって事だよ。」

春蘭「烏合の衆なら、私と純様で正面から叩き潰せば良からう。私と純様なら、この程度の敵、すぐに叩き潰せる。」

この答えに、

華琳「……。」

純「……。」

桂花「……。」

華琳と純、そして桂花は呆れてしまった。

一刀「……いや、春蘭。それ、説明の一番最初の所で否定されたばかりだからな？」

華命「え、そうなんすか!？」

柳琳「姉さん……。」

一刀（否定された張本人も、気付いてないよオイ……。）

桂花「油断した所に伏兵が現れば、相手は大きく混乱するわ。それに乗じれば、烏合の衆はもはや衆ですらなくなります。」

桂花「貴重な我が軍の兵と、もつと貴重な曹操様のお時間を無駄にしない為には、この案を凌ぐ策はありません。」

春蘭「な、なら、その連中が誘いとやらに乗らなければ……?？」

桂花「……ふっ。」

春蘭「な、なんだ！その馬鹿にしたような……っ！」

桂花「曹彰様。相手は志を持たず、武を役立てることもせず、そのちっぽけな力に溺れる程度の連中です。間違いないく、夏侯惇様よりも容易く挑発に乗ってくるものかと。」

春蘭「……な、ななな……なんだとおー！」

純「ふっ。お前の負けだ、春蘭。」

華琳「そうよ、春蘭。あなたの負けよ。」

春蘭「か、華琳様あ……純様あ……。」

純「……とはいえ、春蘭の心配も一理ある。次善の策はあるだろう。」

桂花「この近辺で拠点になりそうな城の見取図は、既に揃えてあります。もちろんあの城の見取図も確認済みですので、万が一こちらの誘いに乗らなかつた場合は……」

桂花「城を内から攻め落とします。」

純「方策は。」

桂花「残つた城をすぐに新たな拠点として転用出来るものから、向こう百年ネズミ一匹立ち入れなくなるものまで、ざつと三十。」

一刀「百年はネズミも入れないような策とか、エグいな……。」

純「そうか……。分かつた。なら、まずはその策で行こう。宜しいですね、姉上？」

華琳「構わないわ、全て任せるわ。」

春蘭「純様っ！」

純「これだけ勝てる要素しかない戦いに、囹のひとつも出来ねーようじゃ・・・姉上
が許緒に語った霸道など、とても歩めねーよ。」

華琳「ええ。純の言う通りだわ。」

桂花「その通りです。ただ、単に賊を討伐しただけでは、誰の記憶にも残りません。せ
いぜい、近くの村の者に感謝される程度です。」

桂花「ですが、他国から請われて遠征し、そこで公明正大な振る舞いをし、万全の成
果を上げて凱旋したとなれば・・・曹孟徳の名は一気に天下に広まります。」

桂花「曹洪様、曹純様、曹仁様。お三方は、本隊の曹操様と曹彰様の援護をお願い致
します。」

柳琳「承知しました。」

栄華「ええ。・・・しかし、私の下で働いていた貴女に指示を受けるといいうのも不思
議な気分ですわね。」

桂花「それは私も同じです。ですが、そこを伏してお願ひ出来ますか？」

栄華「もちろん。そこに私情を挟みは致しませんわ。」

しかし、

華命「ぶー。あたしも春姉え達と一緒に暴れたいっすー!」

華命が我儘を言ってきたのだった。

華琳「華命。わがまを言わないの。」

と華琳がたしなめたが、

華命「でもでも、今回あたし出番が全然ないっすよー。季衣の時も何もしてないし。

せつかくの遠征なのにー。」

と言ってきたのだった。

一刀「え? いつの間に許緒の真名を……。」

華命「ほえ? さっき交換したっす!」

一刀(……相変わらずその辺アグレッシブだな。華命の奴。)

季衣「なら、僕が曹操様の護衛に入るんじゃダメですか?」

香風「えー。」

一刀「そこで香風が反論するんだ……。」

香風「だって、季衣と一緒に戦ってみたかった……。」

春蘭「それは私も同じだな。」

桂花「曹彰様……如何致しましょう。」

純「なら華命、お前は許緒と交代しろ。最前線に立つ経験を積むのも、たまにはいい

だろう。」

華命「やったつす！」

純「そして許緒。お前は集団での戦がどういうものか、本陣でそれを見届けな。今までと同じように最前線で敵を倒すよりも、得るものは多いはずだ。」

華琳「もちろんこちらにも賊は来るだろうから、それを追い返すのは純と共に任せるわよ。」

華琳「純。あなたの武勇、久し振りに見せなさい。」

純「御意。」

季衣「は・・・はいっ。頑張ります。」

柳琳「そう緊張しなくても大丈夫ですよ。」

栄華「そうですね。私達もいるのですし、気持ちを楽しませいませ。」

一刀「・・・。」

栄華「な・・・なんですの。」

一刀「いや、別に。」

純「一刀は姉上の側にいろ。良いな。」

一刀「分かった。」

桂花「な・・・っ！」

春蘭「北郷！貴様、華琳様に何かあったらただではおかんからな。その身を盾にしてもお守りするのだぞ！」

一刀「分かっているってば。その為の華琳の側……って事だろうし。」
すると、

秋蘭「北郷……純様もだぞ。分かっているな……。」

栄華「北郷さん、分かっていますわね……。」

稟「一刀殿……。」

秋蘭と栄華、そして稟が、禍々しい殺気を出しながら一刀にそう言った。

一刀「わ、分かっているよ……。」

季衣「そ、曹操様と曹彰様は僕が絶対お守りしますから、大丈夫です！」

これには、季衣は震える声で言ったのだった。

純「では作戦を開始する！各員持ち場につけ！」

そして、それぞれが作戦で決めた持ち場に行く準備を始めたのだった。

その途中、

純「秋蘭、ちよつと良いか？」

秋蘭「はい。」

純は秋蘭を呼んで、

純「いつものことだが、春蘭の手綱はしっかりと握っておいてくれ。後華命もな。」
といった事を伝えた。

秋蘭「分かりました。お任せ下さい。」

純「後最近お前の働きを見てないからな。久しぶりに見させてもらうぞ。ただし、力むなよ。」

秋蘭「はっ！」

そう言つて、秋蘭に櫂を飛ばした。

そして、

純「栄華。」

栄華「はい。」

今度は栄華を呼んで、

純「柳琳と共に、援護は頼んだぞ。」

栄華「お任せ下さいまし！」

純「気負う事はない。いつも通りやれ。」

栄華「はい！」

栄華にそう伝えたのだった。

純「稟、風。部隊を率いて初の実戦だ、任せたぞ。ただし、気負わず、落ち着いてやるんだぞ。」

稟「はっ！」

風「お任せ下さい〜！」

そして、純は他にも、将兵を激励していったのだった。

季衣「あ、兄ちゃん。どうしたの？」

一刀「ん？・・・ああ、許緒ちゃんか。」

季衣「季衣で良いよー。秋蘭様や栄華様達も、真名で呼んで良いって言うてくれたし。」

一刀「そうなの？・・・ほんとみんな、女の子には甘いなあ。」

季衣「でも、なんだか凄いな。こんな沢山の兵士の人達がわーって動くの、僕初めて見たよ。」

一刀「俺だつてそうだよ。こういうの見るの、今回が初めてだし。」

季衣「あれ？兄ちゃんもそうなの？」

一刀「ああ。俺も華琳に拾われて、色々あつてここにいるだけなんだ。・・・そうい

う意味じゃ、季衣とあんまり変わらないんだよな。」

正直に言うと、一刀自身囃部隊に配属されて、ホツとしている。沢山の人の死を見るからだ。

季衣「へええ……。まあ、兄ちゃん、そんな強くなさそうでもんねー。」

一刀「そんなにどころか、全然強くないぞ。季衣が相手なら、指先一つでやられる自信があるぞ。」

季衣「あはは。それ、弱いなんてもんじゃないよー。」

季衣「けど、兄ちゃんも出来る事はちゃんとやってるんでしょ？それで良いんじゃないかなあ？」

一刀「……。そうかな？ま、皆頑張ってるんだし、俺も出来る事はしないとな。」

季衣「そっかあ。……。よし、決めた！」

一刀「へ？決めたって何を。」

季衣「兄ちゃんも曹操様も、みーんな僕が守ってあげるよ！」

一刀「季衣が？」

季衣「うん！大陸の王ってよく分かんないけど……」

季衣「曹操様が僕の村も、他の沢山の街も、陳留みたいな街にしてくれるって事なんだったら……。それってきつと、凄く良いことなんだよね？」

一刀「ああ……そうだな。」

一刀（なんだ。分かってないって言う割に、ちゃんと分かっているじゃないか。この子……。）

そう思った一刀は、

季衣「あ……ひゃ！」

一刀「……ああ、ごめん。」

季衣の頭を撫でようとしたが、季衣は驚いた声を上げた。

季衣「ん？平気、だよ。ちよつとびっくりしただけ。」

一刀「そつか。季衣が良い事言つたから、なんか勝手に身体が動いちやつてさ……。」

季衣「へへ。兄ちゃんの手、なんかおつきいねえ……。」

一刀「ん、そうか？」

その時、

桂花「こら、そこの二人——遊んでないで早く来なさい！作戦が始められないでしょ！」

桂花から声が掛かったので、

一刀「おう、すぐ行く！……んじゃ行くぞ、季衣。」

季衣「うんっ！」

持ち場に戻ったのであった。

戦いの野に激しい銅鑼の音が響き渡ったのだが、

華琳「……。」

純「……。」

栄華「……。」

柳琳「……。」

相手は銅鑼の音で勘違いをした賊は、城門を開けて飛び出してきたのだった。

華琳「……桂花。」

桂花「はい。」

純「連中、今の銅鑼を出撃の合図と勘違いしたんじゃないかねーか？」

桂花「はあ。恐らくは。」

栄華「所詮、臭くて汚いオスの振る舞いでももの。お手どころか、待ても躓けられないに決まっていますわ。」

一刀（栄華の意見に同意せざるを得ないな。流星にホイホイ挑発に乗りすぎだろ……。）

柳琳「・・・挑発も名乗りも必要ありませんでしたね。」

純「姉上、挑発の言葉って、考えてましたか？」

華琳「ええ。そういう作戦だったもの、一応ね。大した内容ではないから、次の賊討伐にでも使い回すことにするわ。」

一刀「次の討伐の時も銅鑼鳴らすだけで出てきてくれたりして。」

華琳「それならそれで楽だから良いのだけれどね。」

すると、

季衣「曹操様！曹彰様！兄ちゃん！敵の軍勢、突っ込んで来たよっ！」

季衣から敵が突っ込んで来たとの知らせが入った。

一刀（おお・・・）。挑発に乗りすぎた連中とはいえ、少人数のこつちに比べて人数だけはハンパなく多い。ってこれ、もしかして相手の全軍とか言わないよな・・・!?）

純「・・・まあ良いだろう。多少のズレはあったけど、こちらは予定通りにするまでだ。」

桂花「総員、敵の突撃に恐れをなしたように、うまく後退なさい！距離は程々に取りつつ、逃げ切れないように！」

一方春蘭達別働隊は、

華命「華琳姉えと純兄の本隊、下がり始めたつすー！」

春蘭「やけに早いな……。ま、まさか……。華琳様と純様の御身に何か……。!?」

秋蘭「心配しすぎだ、姉者。隊列は崩れていないし、相手が血気に逸りすぎて、作戦が予想以上に上手くいった……。そういう所だろう。」

春蘭「そ、そうか。ならばそろそろ……。!」

華命「突撃つすか？突撃するつすか？」

香風「まだ。相手をちゃんと引き付けてから。」

華命「おおー。みんな勢いよく逃げてるつすねー。」

香風「あ、お兄ちゃんだ。おーい。」

秋蘭「見ろ姉者。あそこに華琳様と純様も健在だ。季衣もちゃんとお二人を守る位置にいるぞ。」

春蘭「おお……。良かった……。!」

華命「あ、次が来たつす！」

春蘭「……。これが、敵の盗賊団とやらか。」

秋蘭「隊列も何もあつたものではないな。」

華命「秋姉え、もう突撃つすか？」

秋蘭「まだだ。慌てるな。」

春蘭「しかし、ただの暴徒の群れではないか。この程度の連中、やはり小難しい作戦など必要なかつたな。」

秋蘭「それでもないさ。作戦があるからこそ、我々はより安全に戦うことができるのだからな。」

華命「うう、もう我慢出来ないっすー！突撃したいっすー！」

香風「根性の、見せ所。頑張つて。」

春蘭「ううむ。これだけ無防備に突撃しているだけだと、思い切り殴りつけたくなる衝動が……。」

秋蘭「気持ちは分かるがな……あと一息だ。」
そして、

春蘭「この辺りなら良いだろう！ちようど横腹だぞ！」

秋蘭「うむ。遠慮なく行ってくれ。」

春蘭「ならば行くぞ、華命、香風！」

香風「うん！」

華命「わかったつすー！」

春蘭「秋蘭、後は任せるぞ。」

秋蘭「応。夏侯淵隊、撃ち方用意！」

春蘭「ようし！総員攻撃用意！相手の混乱に呑み込まれるな！平時の訓練を思い出せ！混乱は相手に与えるだけにせよ！」

秋蘭「敵前衛に向け、一斉射撃！撃ていつ！」

春蘭「統率の無い暴徒の群れなど、触れる端から叩き潰せ！総員、突撃いいいいつ！」
攻撃が始まった。

本隊

柳琳「お兄様、後方の崖から春蘭様の旗と、矢の雨が！敵の足が！一気に止まりました

！」

純「流石秋蘭。上手くやった。」

華琳「ええ、そうね。」

季衣「春蘭様は？」

桂花「曹仁様と一緒に突撃したくてうずうずしている所を、夏侯淵様と徐晃殿に抑えられていたんじゃないの？」

一刀「……俺もそう思う。」

桂花「……別にアンタと意見が合っても、嬉しくも何ともないんだけど。」

一刀「いやまあ、良いけどさ。」

純「さて、お喋りはここまでだ。この隙を突いて、一気に畳みかけるぞ。」

桂花「はっ！」

華琳「季衣、あなたの武勇、期待させて貰うわね。」

季衣「分かりましたーっ♪」

華琳「純、黄鬚の力、久し振りに見せて頂戴。」

純「御意。稟！風！後は任せたぞ！」

稟「はっ!!」

風「はいく!!」

柳琳「では、私達も出ます。」

一刀「え、柳琳って戦えるの……!?」

柳琳「いえ、私は無理ですが……私の隊の皆さんが、任せて欲しいと。」

栄華「……柳琳の隊は、打撃力ならお兄様率いる黄鬚隊と夏侯惇隊にも負けませんからね。」

一刀「ああ……。そういえば、やけにごつつい人達と柳琳が一緒にいる所とか時々見てたけど。」

柳琳「多分その方達です。皆さん、とても親切で勇敢ですよ。」

一刀「マジか……。」

一刀（確かにあのマッチョ集団の皆さんなら、一騎当千って言ってもおかしくないよな。）

純「ならば、そこは任せたぞ。……一刀は姉上の側を離れるなよ。」

華琳「そうね。特に期待していないから、私の隣で大人しくしていなさい。」

一刀「……お心遣い、ありがとう。」

この段階で、一刀自身も震えが来ていたので、本人としてもある意味ありがたかったのだった。

純「総員反転しろ！衆ですらない烏合の者どもに、本物の戦が何たるか、骨の髄まで叩き込んでやれ！」

純「総員、突撃っ！」

兵士「「おおーっ!!」「」

そして、盗賊団を根絶やしにする戦いが始まったのであった。

12話

盜賊団の討伐は、快勝に終わった。

桂花「逃げる者は逃げ道を無理に塞ぐな！後方から曹純様の部隊で追撃を掛ける、大人しく力尽きるのを待つて良い！」

一刀「・・・ほんと、えげつない事言うな。」

桂花「正面からへたに受け止めて、噛みつかれるよりはマシでしょう。」

一刀「そりやそうだけどさ・・・」

その時、騒々しい兵達の波が本陣へと向かってきた。その声は興奮と歓声に包まれており、その中心に

純「姉上、ただいま戻りました！これは賊の指揮官の首です！奴らは砦に逃げていきましました！」

純が端正な顔に人懐っこい笑みを浮かべながら戻ってきた。これだけなら女性が見たら黄色い声を上げるのだが、返り血と左手にぶら下げた敵の指揮官の首で台無しになった。

華琳「ご苦勞様、純。相変わらず見事な働きだわ。」

純「はっ、ありがたきお言葉！けど、これも全て、俺の部下の働きのおかげです！」

華琳「そう。貴方らしいわね。」

純「へへっ。」

華琳「けど、ちよつと一刀の事考えなさい。」

純「えっ？」

そう言われた純は、一刀を見ると、一刀は青い顔をしながら口元を抑えてうずくまっていた。

純「わ、わりい一刀……。戦でつい気が昂ぶっちゃって……。」

それを見た純は、そう言っつて一刀に謝罪した。

一刀「い、いや……。良いんだ……。これも何とか慣れていくよ……。」

それに対し、一刀はそう言ったのだった。

すると、

秋蘭「純様。ご無事でしたか。」

秋蘭が本隊に來たのだった。

純「見事な働きだったぞ、秋蘭。」

秋蘭「はっ!!ありがたきお言葉!!」

一刀「あれ？春蘭は？」

すると、春蘭がいないことに気付いた一刀はそう言った。

桂花「どうせ追撃したいだろうから、季衣に夏侯惇様と追撃に行くよう指示しておいたわ。」

それに対し、桂花はそう言ったのだった。

一刀「・・・え、追撃は柳琳がするって」

桂花「誰も曹純様だけが追撃するとは言っていないでしょう?」

純「・・・俺も参加したかったなあ。」

それを聞いた華琳は、

華琳「なら、あなたも行きなさい。」

と純に言った。

純「え、良いんですか!？」

華琳「ええ。まだ暴れ足りないでしょう? 追撃して、好きに思いつ切り暴れなさい。」

それを言われた純は

純「はっ! では直ちに追撃して参ります!!」

満面の笑みを浮かべながら拱手し、

純「行くぞ!! 黄鬚曹彰に付いて来い!!」

そう言いながら颯爽と馬に乗ってその場を後にしたのだった。

華琳「別に良いわよね、桂花。」

桂花「はい。曹彰様が加われれば、討伐の時間も更に短縮出来るので。」

秋蘭「相変わらずだな、純様は……。」

栄華「そうですね……。」

純の様子を見た秋蘭と栄華は、笑みを浮かべながらそう言った。

桂花の言葉を聞いた一刀は、

一刀（春蘭と季衣が追撃している状況で、純が更に襲いかかる。鬼だ、鬼がいるぞ。）
と黙っていた。

桂花「……何か、私に対して失礼な事考えてたでしょ。」

一刀「別に。」

華琳「桂花も見事な作戦だったわ。負傷者も殆どいないようだし、上出来よ。」

華琳の褒め言葉を聞いた桂花は、

桂花「あ……ありがとうございます！曹操様！」

嬉しそうな笑みを浮かべながらそう言ったのだった。

華琳「後は、栄華。」

栄華「はい。事後処理に関しては、お任せ下さいませ。」

華琳「任せるわ。それと……一刀。」

一刀「え、俺？俺も何かした方が良い？」

秋蘭「……。」

桂花「……。」

華琳「……良く逃げなかつたわね。感心したわ。」

一刀「え、そこつて褒めてくれる所なんだ……。」

まさかその事で褒められると思わなかつた一刀は、驚いてしまった。

秋蘭「少なくともいのだぞ。初陣で使い物にならなくなる奴は。」

華琳「ええ。それに、天の国にはこういつた戦はないのでしょうか？」

一刀「まあね……。逃げたかつたのは本音だし、さつき純が持つて来た生首を見てたら……。」

華琳「それは誰しも同じよ。少なくとも、初陣でその気持ちを御する事が出来ただけで大したものだわ。」

一刀「……ありがと。それじゃあ、純も同じだったのかなあ……。」

秋蘭「純様は、初陣の時逃げたいという気持ちは湧かなかつたと言つていたな。その頃から激しい気性を示しており、何度も戦功を挙げていた。」

華琳「ええ。あの子は、武人になるべく産まれてきたのかも知れないわね。」

華琳「けど、よくお父様にその気性を戒めるために学問を薦められていたけどね。」

一刀「……そう……なんだ。」

華琳「けど、純は純。一刀は一刀よ。気にしなくても良いわ。」

一刀「……ああ、分か……った……。」

すると、一刀が突然倒れてしまった。

栄華「ち、ちよつと、北郷さんっ!?!」

秋蘭「……緊張の糸が切れたようですな。」

桂花「もういつそ、このまま捨てていつては如何ですか?」

華琳「栄華。一刀を後方に預けておいて頂戴。桂花と秋蘭は、本陣を前に移す指揮をなさい。このまま砦も落とすわ。」

秋蘭「はっ!」

桂花「承知致しました!」

栄華「えっ、お、お姉様!?!私に任せると言われましても……私こんな汚らしい奴を、あの……っ!お待ちになつてー!」

そして、砦は陥落したのであった。

その帰り道

一刀「・・・あれ？」

秋蘭「やつと気が付いたか。」

猛烈な背中への痛み、一刀は目を覚ました。

一刀「・・・つて、砦は!？」

春蘭「とつとくに陥としたぞ。その間、貴様はずっと眠りこけていたがな。」

春蘭「それに比べて純様は相変わらず凄まじかったぞ。」

桂花「役立たずもここに極まれりね・・・。」

一刀（ちよつと・・・マジすか。）

一刀「・・・どれだけ寝てたの、俺。」

季衣「聞きたい？」

一刀「・・・聞きたくない。」

一刀（あの山影を見る限り、一日や二日つてレベルじゃないな、こりや。）

一刀「・・・それでさ、一つお願いがあるんだけど・・・」

桂花「あ、強引に話変えた！」

一刀「いや。目が覚めたんだし、この縄、解いてくれないのかな・・・つて思ってな。」

一刀は、荷車の上にいるが、落ちないための配慮なのか、縄でぐるぐる巻きにされていたのだ。

華琳「どうせ馬に乗れる体力など戻っていないのでしょうか？ ついでだから、そのまま戻ってはどうか？」

純「ははっ、それもそうですね。」
すると、

華命「あ、一刀っち！目が覚めたっすか！」

柳琳「ご無事で良かったです……！」

華命達が一刀の様子を見に来たのだった。

一刀「やめて！こんな俺の姿、見に来ないで！」

香風「お兄ちゃん……また……。」

華命「え、またって何すか？香風。」

それを言われた香風は

香風「ええつと……。」

目線を逸らしたので、

一刀「だからその話はやめてー！」

一刀はそう言って止めようとした。

一刀（つていうかこれ、実質公開処刑だよな……！）
そんなことを思っていると、

華琳「良く分かつているじゃない。」

と華琳に心を読まれたのだった。

一刀「……あれ？　そういえば、栄華は？」

栄華「……いますわよ。」

その声に反応した栄華だったが、一刀とはかなり距離を取っていた。

純「本陣で倒れたお前を、栄華が後方に下げてくれたらしいぞ。お礼を言いな。」

一刀「え、そうなんだ。ありがと、栄華！」

栄華「……そのお陰で、お兄様以外の男が臭くて汚くて重くてどうしようもない生物だと、改めて理解出来ましたわ。うう。」

これを聞いた一刀は、また暫くまともに話してくれないと痛感したのだった。

一刀「……でも、皆無事で良かったよ。」

春蘭「ふんっ。あの程度で死ぬような軟弱者が、我が軍にいるはずもなからう。」

桂花「死ぬような軟弱者はいないけど……ねえ。」

一刀「まだ言うかこのネコミミ頭巾。」

桂花「ふん。お荷物扱いで荷車に積まれてる奴なんて、何を言われても怖くも何とも

無いわよ。」

一刀「それは言わないで!!」

華琳「ふふっ。今回は一刀の負けね。」

純「ははっ。そうですね。」

秋蘭「ただ心残りなのは・・・華琳様が気に掛けておられた古書が見つからなかった事だな。」

春蘭「うむ。大変用心の書だな。」

華琳「・・・太平要術よ。」

純「・・・つたく。」

一刀「・・・。」

柳琳「・・・。」

桂花「・・・。」

春蘭「言つたよな!私、そう言つたよな!」

純「稟と風は、あの古書について聞いたことある?」

稟「ええ。噂程度で、危険な書物であると。」

風「風も、稟ちゃんと同じ意見ですね。」

純「そっか・・・。つつても、俺も良く分かんねーけどな。」

一刀「じゃあ、あの三人の賊は？」

香風「そつちも、良く分かんない。」

華琳「無知な盗賊に焚き付けにでもされたか、落城の時に燃え落ちたのか……。まあ、代わりに桂花と許緒という得難い宝が入ったのだから、それで良しとしましう。」

一刀「……。そつか。季衣、華琳の所に残るんだ。」

春蘭「ああ。季衣には、今回の武功をもつて華琳様の親衛隊を任せる事になった。」

季衣「それに僕の村も、しばらくは曹操様が治めてくれることになったんだ！」

季衣「税もずつと安くなるし、警備の兵や曹操様の信用してる役人も連れて来てくれるっていうし、それが一番嬉しいよ。」

季衣「だから今度は僕が、曹操様をお守りするんだー！」

一刀「え？ちよつと待って、それって……」

栄華「しばらくは今回の件の後始末も必要ですし、警護の名目も兼ねて沛国のあの方に申し出ておきましたの。」

一刀「陳珪さんか……。でもそれって、それこそ侵略になるんじゃないの？」

華琳「侵略などしたつもりはないわよ。あくまでも一時的な借りであつて、返せと言われればすぐに返すと約束してあるもの。」

季衣「えー。僕、曹操様がずっと村を治めてくれるほうが嬉しいんですけど。」

一刀「・・・領地もだけど、遠征費用だつて向こう持ちだろ？こつちの取り分が多過ぎじゃない？」

一刀（その見返りが盗賊団の討伐一つつて、いくら沛国が困つてゐても高すぎる買い物な気がするんだけど。）

栄華「ええ。タダより高い物は無いと言いますし、いずれどれだけの取り立てが来るやら・・・。」

華琳「あれが怪しいのは折り込み済みよ。それにあの程度の小者も呑み込めないようでは、朝廷の魑魅魍魎と渡り合う事など到底出来ないでしょうね。」

一刀「・・・まあ、そうか。」

一刀（覇道を歩むと決めた以上・・・前に進むしかないんだよな、やっぱり。）

純「さて、後は桂花の事ですな・・・。」

華琳「そうね。」

そう言つて、華琳と純は桂花を見た。

桂花「そ・・・曹彰様、ここですか!？」

見られた桂花は表情を少し硬くしたのであつた。

純「皆も揃っているし、ちょうど良いだろう。」

一刀「秋蘭。桂花の事って？」

秋蘭「北郷は知っているだろう。桂花のした約束の件だ。」

純「桂花、最初にした約束、覚えているな？」

桂花「・・・はい。」

純「城を目の前にして言うのもあれだけど、俺・・・スゲー腹減ってんだよ。分かるか？」

桂花「・・・はい。」

桂花「ですが曹彰様。言い訳を承知で言わせていただければ、それはこの季衣が・・・」

季衣「ほえ？」

一刀「え？って事は・・・」

秋蘭「半分は、北郷の予想通りだ。」

一刀「半分は・・・って？」

秋蘭「話せば長くなるのだが・・・」

そう言つて、秋蘭は一刀に説明した。

結論から言うと、桂花は純との賭に負けてしまった。糧食は昨晚で尽きてしまい、皆朝飯を食っていないのだ。

ただ、それは自分達の損害が少なすぎて、兵が予想以上に残った事も原因の一つなの

であつた。

一刀「・・・うん。流石に不可抗力なんじゃないかな。」

純「不可抗力や予測出来ない事態が起こるのが、戦場の常だ。それを言い訳にするのは、適切な予測が出来ねー、無能者のする事だと思つぞ？」

桂花「そ、それはそうですが・・・。」

一刀「・・・けど、糧食を人の十倍食べる味方がいきなり加わるつてのは、いくらなんでも予想の斜め上だと思つぞ。」

季衣「え？えつと・・・僕、何か悪い事、した？」

柳琳「ううん、大丈夫よ。季衣さんは気にしなくて。」

一刀「なあ、純。今回の遠征が大成功したのは、桂花のお陰なんだし・・・あの約束は・・・。」

純「どんな約束であれ、反故にする事は良くねーよ。少なくとも、無かつた事にする事だけは出来ねーな。」

秋蘭「純様・・・。」

桂花「・・・分かりました。最後まで糧食の管理が出来なかつたのは、私の不始末。首を刎ねるなり、思うままにして下さいませ。」

春蘭「ふむ・・・。」

桂花「ですが、せめて……最後は、曹操様か曹彰様ご自身の手で……！」
春蘭「……。」

純「とは言え、今回の遠征の功績を無視出来ねーのもまた事実だ。……良いだろう、減刑して、姉上に何かしてもらえ。」

桂花「曹彰様……っ！」

純「宜しいですか、姉上？」

華琳「良いわよ、それで。」

純「御意。それから、季衣と共に、俺を純と呼ぶことを許そう。今後はより一層、姉上に奮起して仕えるように。」

華琳「桂花、私もあなたに真名の華琳を呼ぶことを許すわ。」

それを聞いた桂花は

桂花「あ……ありがとうございます！か、華琳様っ！純様っ！」

満面の笑みを浮かべながらそう答えたのだった。

華琳「ふふっ。なら、桂花は城に戻ったら、私の部屋に来なさい。たっぷり……可愛がってあげる。」

桂花「え？そ、それは……ま、ままま、まさか……！」

華琳「お、お姉様っ!?あの、それはいくら何でも……。」

華琳「あら。なら、榮華は純に可愛がつて貰つたら？」

榮華「え．．．そ、それは．．．。でも、お兄様が望まれるなら．．．」

春蘭「．．．いいなあ。」

一刀「え、な、何．．．？」

華命「えーっ。何か楽しそうなんすけど。ね、柳琳。華琳姉え達、何の話してるんすか？」

柳琳「そ、それは．．．その．．．あうう。」

純「あはは．．．。」

そして、一同は無事陳留に帰還したのであった。

13話

城内・廊下

一刀「ん、何だか向こうの方が騒がしいな。」

一刀が廊下を歩いていると、向こうから喧噪、いや怒声が聞こえた。そう感じた一刀は様子を見に行くと、

春蘭「うぬぬ、先程から言わせておけば……。」

桂花「全く、これだけ言っても分からないの？」

春蘭と秋蘭、そして桂花がいて、春蘭と桂花が言い争いをしていた。

秋蘭「おお、北郷。こんな所でどうした？」

一刀「それはこつちの台詞だよ。何を言い合ってるんだ、桂花と春蘭は。」

秋蘭「ああ、それがな……。」

桂花「だからあなたは馬鹿だって言うの。」

春蘭「何っ！もう一度言ってみろ！」

桂花が春蘭に喧嘩を売った様子だった。

桂花「何度だつて言つてあげる。盗賊や小部隊と戦う時なら、あなたの突出は勇敢な突撃となるわ。」

桂花「だけど、大部隊が相手の時に無駄な突撃なんてされると、兵を消耗するし、下手をすれば戦線が瓦解するのよ。」

桂花「だからやめなさい、猪みたいな突進は。純様みたいに状況を確認して、適格な時機に突撃しなさいと、そう言ったの。理解して貰えたかしら？」

春蘭「ぐ．．．っ！きさまあ！」

秋蘭「落ち着け姉者。ここで声を荒げて何になる。それに桂花の言っている事も一理あるぞ。」

春蘭「秋蘭．．．。」

秋蘭に言われた春蘭は、今にも死にそうな程の青い顔で秋蘭を見つめた。

秋蘭「そんな顔をするな。別に姉者の意見、全てが間違っていると云っている訳でもない．．．なあ、北郷？」

一刀「え？あ、うーん．．．状況が良く見えないから何とも言えないけど、春蘭の部隊の突撃は、相手方からすれば大きな脅威と思うけど？」

と一刀は戸惑いながらも思つた事を口にした。

一刀（当然だけど純と比べたら、実戦経験も浅いとかいうレベルじゃない以上、説得

力のある事は言えないと思うけど……。」

桂花「そんなのはただの賭けじゃないの。戦いに賭けを持ち込んでしまえば、勝ち負けは限りなく運になる。……戦いはそんなに甘いものではないわ。」

一刀の意見に桂花はそう言った。

一刀（う、確かにそう言われるとぐうの音も出ないな。）

春蘭「では、こういうものが貴様の考える戦いだと言うのだ！」

桂花「心理と思考の読み合い。そこから紡ぎ出される完璧な策こそが、予定調和としての勝利を華琳様に捧げる事が出来るのよ。それを体現出来るのが、純様の武勇とそれを率いる黄鬚隊の突撃なのよ。」

桂花の持論に

一刀（成程、確かに戦力を活かすには戦術や戦略が必要だな。）

一刀（場合によっては戦略が圧倒的な戦力差を覆す事がある事は、歴史が物語ってるし。）

と一刀は思った。すると

春蘭「はんっ。」

それを聞いた春蘭は、馬鹿にしたように笑った。

桂花「何よ、その笑い方は！」

春蘭「予定調和としての勝利など無い。戦場は千変万化の生き物なのだから。純様も常に仰っていた。だから純様は強いのだ！」

と春蘭はそう言つて反論した。

一刀「これはこれで正論か。策士策に溺れるつて言葉もあるしなく。」

一刀「でも、この言葉を言つたら、この口喧嘩、ただじゃ済まなくなりそうだ……。とこのままじゃ平行線のままでしどうか喧嘩を止めたいと一刀は感じたのだった。

一刀「なあ、秋蘭。さつきから殆ど口出ししてないけど良いのか？自分で言うのも情けないけど、二人を止められるのは秋蘭だけだと思っただけ。」

秋蘭「この二人は犬猿の仲だからな。私が口出した所でどうにかなるものでもない。」

一刀「いやいや。……それじゃ全然收拾がつかないだろ？」

秋蘭「実際の所、二人には二人なりの持論があり、必ずしも間違つているとは言えないからな。どちらか片方を悪者にする事は私には出来んさ。」

一刀「うーん、秋蘭の言うことも最もなんだけど、何か良い方法はないものか……。秋蘭「この事態を收拾出来る人間は二人、特にあのお方しかいないさ。」

一刀「華琳と純、特に純か……。」

秋蘭「うむ。そういうことだ。我が軍の総大将は華琳様だが、実質統率し指揮してい

るのは純様だからな。」

一刀「……かといって、こんな口論一つの為に華琳か純を呼ぶわけにはいかないしなあ。」

秋蘭「ふむ。まあ今は見守るしかあるまい。」

一刀「……ま、そのうち終わるか。」

春蘭「とにかく！貴様のような甘い考え方では、華琳様に勝利など捧げられん。純様も恐らく同じ事を言うぞ。」

桂花「ふん。それこそ視野の狭い脳みそ筋肉の言いそうな台詞ね。純様に見放されるわよ。」

それを聞いた春蘭は、

春蘭「だ、誰が脳筋だと！」

と腰の剣に手を掛けた。

一刀「わっ!?バ、バカ！剣に手を掛けるな！」

それを見た一刀は、慌てて春蘭が手に掛けた剣の柄を握りしめた。

それで春蘭の動きが止まり、安堵の溜息をついたのだが、

春蘭「なん……だど？」

一刀「へっ？」

春蘭「誰が……誰がうすらバカだとおーっ！」

と怒り、劍を抜いた。その反動で、一刀は派手に転がされてしまい、桂花は『情けない』と言っている様な冷たい目でそれを見ていた。

一刀「ちよ、ちよつと待て春蘭！お前、今、本気で振り下ろしただろー！」

春蘭「当たったり前だ！劍を抜いた以上、手加減などするものか！」

一刀「当たったら死ぬだろうがー！」

春蘭「安心しろ、今のは利き腕を狙っただけだ！貴様が後悔する時間をくれてやるつもりだったからな！」

そう言つて、春蘭は怒りと興奮を漂わせながら一刀に劍を向け、一刀は春蘭の斬撃を避けていた。

そしてこれは、純が偶然その場に現れ、春蘭達に罰を与えられるまで続いたのであった。

14話

純はこの日、秋蘭の部屋に向かっていた。すると、

秋蘭「純様？」

ちようど秋蘭に出会ったのだった。

純「おお秋蘭。今日お前って、休みだったよな？」

秋蘭「はい、そうですか？」

純「ちようどお前を誘おうと思ったんだけど、これから一緒に街を回ろうよ。」

秋蘭「はい。私は構いません。」

すると、

秋蘭「その前に、少し着替えてもよろしいでしょうか？」

と秋蘭は何か思いついたのか、純にそう言ったのであった。

純「？まあ良いけど。」

純は意味が分からないと思ったが、了承した。そして、純を部屋の前で待たせ、秋蘭は部屋に入り、筆筒を開き、一着の服を手に取り、着替えたのであった。

秋蘭「お待たせしました。」

そう言われ、秋蘭を見ると、そこには、高貴な青い礼服に身を包んだ秋蘭がいた。

純「お前、それって……」

秋蘭「はい。前に私と一緒に買い物に行った時に私に買ってくれた服です。」
すると、

秋蘭「ど、どうでしょうか……」

秋蘭が、少し恥ずかしげながら、上目遣いで純に尋ねたのであった。

純「……うん。やっぱり似合ってる。やっぱり綺麗だな、秋蘭。」

と純は言った。それを聞いた秋蘭は、嬉しくなり純に抱き付いた。

純「それじゃあ、行こっか。」

秋蘭「はい！」

そして、2人で一緒に街に言ったのであった。街を回ってる間も、秋蘭は純の腕に抱き付いた状態であった。周りの者は、

市民A「おい、曹彰様と夏侯淵様だぞ。」

市民B「本当だ。相変わらず仲が良いな。良いなあ、羨ましい……」

市民C「それに今日の夏侯淵様、とってもお綺麗ですわ〜!!」

市民D「ええ。隣には曹彰様。絵になるわ〜!!」

純と秋蘭を見て、そう言ったのであった。

純「今日のお前、本当に綺麗。それ買って本当に良かった。」

すると、純は秋蘭にそう言った。それを聞いた秋蘭は益々嬉しくなったのか、抱き付いて腕を強くしたのであった。そして、二人は軽く飯を食い、小物屋で商品を見たりなど、色々回ったのであった。その道中、

絵師A「お2人さん、ちよつと良いですか？」

絵師に声をかけられ、純と秋蘭は振り返った。

絵師A「実は私、絵師でありまして、良ければお2人の絵を描かせていただきたいのですが……。」

純「別に構わねーよ。なあ秋蘭？」

秋蘭「はい。構いません。」

絵師A「そうですか。ありがとうございます。」

そう言つて、絵師は二人の絵を描き始めたのであった。それから暫くが経ち、

絵師A「出来ましたよ。」

そう言い、絵師は二人に絵を差し出した。

純「スゲー!!めっちゃ上手い!!」

秋蘭「はい。私も思います……!!」

その出来に、2人は興奮したのだった。

絵師A「喜んでいただいて何よりです。よろしかったらその絵は差し上げますよ。」

秋蘭「良いのか？」

絵師A「ええ。構いませんよ。」

秋蘭「感謝する。」

そう言い、秋蘭は絵を大事そうに抱き締めた。

純「本当ありがとな。こんな素晴らしい絵、初めて見た。」

絵師A「構いませんよ。私も久し振りに良い絵が描けましたから。こんな綺麗な恋仲の絵を描くのは。」

純「そうか。ではな、これはその礼だ。」

そう言つて、純は幾らか金を出して、絵師に渡した。そして、秋蘭と一緒にその場を後にしたのであった。

秋蘭「純様、この絵は私が貰つても良いでしょうか？」

純「良いよ、お前にあげる。」

そう言い、純は秋蘭の頭を撫でた。すると秋蘭は非常に嬉しかったのか、純の頬に口付けをしたのであった。そして、二人は城に戻り、その日の夜は、二人で一緒に寝たのであった。

15話

先の戦で、桂花と季衣を手に入れてから暫くが経った。

純は、とある村が賊に襲われているとの報告があったため、稟、風と一緒に自身の子飼いである黄鬚隊五千を率いて出陣していた。

そんな中、陳留の城の純の部屋にて

?? 「ふっ……はあっ……ふうっ……」

何者かの悩ましげな声が、純の部屋に響き渡った。部屋の主は、現在賊討伐に出陣しているため、当然ここに誰かいるはずも無い。

しかし、寝台の辺りの布団がもぞもぞと動いている。侵入者は純の布団を頭まで被り、その中でなにやら悶えているようだ。……声がやけに熱っぽいのは気のせいか。

栄華 「うっ……ぶはあっ。」

その時、布団の中で身動きを取っていたため酸素不足で息苦しくなったのか、ようやく侵入者が顔を布団の外に出した。

現れたのは、栄華だった。彼女は、布団から顔を出した状態で大きく息をついた。

栄華「はあつ・・・はあつ・・・良い、匂いですわ・・・。」

そうウツトリと、熱に浮かされたように栄華は呟いた。ただ、ここは彼女が兄と慕う従兄の純の部屋であり、決して顔を赤くして寝台の布団の匂いに浸る場所では無い。

だが、栄華はそう言った事は全て無視といった様子で、布団に染みついた愛すべき従兄の匂いをゆつくりじっくり丁寧に吸っていく。

栄華「んはあ・・・お兄、様あ・・・お兄様あ・・・。」

二回、お兄様と呟いた。

純が出陣したため、いつ帰るか分かるはずも無い。それは彼がこの曹操軍の全てを任せられとはいえ、自身だけが遠征に行く時もあるため、それは今に始まった事ではない。だが、いつ帰るか分からないというのは辛い所業だ。そのため、彼女は純が遠征等でない時は、こっそり純の部屋に行き、こうして寂しさを紛らわせているのである。

栄華「ああ・・・お兄様・・・。」

その後、数十分にわたって純の部屋は栄華のプライベートルームとなった。

栄華「また・・・やってしまいましたわ・・・。」

純の部屋を出て、栄華は城内を歩き回りながら、一人自己嫌悪に陥り呟いた。

栄華（い、いくらお兄様が恋しいとは言っても、アレは駄目ですわ!!けど・・・）

栄華「お兄様の事を考え始めてしまうと、私は自分を制御出来なくなってしまうわ・・・。」

この行動について、以前華琳に相談した事があった。すると、

華琳『純の事を好きなのは知っていたけど、かなり重症ね、栄華。』

と一蹴された。それに対して、

栄華『お、お姉様。私も分かっていますわ!!けど、お兄様がいないのは、私にとって胸を剣で突かれるが如く痛いものなのです!!私は、それが苦しく我慢出来ないのですわ!!』

と栄華は反論したのだが、華琳は呆れ顔で首を振られてしまったのだった。

栄華（それにしても、何でこんな気持ちになってしまうのか、分かりませんわ。）

栄華（きっかけも、良く分かりませんわ。ただ、物心ついた頃から、私はお姉様やお兄様、そして、華侖さん、柳琳、春蘭さん、秋蘭さんと一緒に遊んでいましたわ。）

栄華（お兄様は、いつも皆に優しく接してくれましたわ。優しいだけじゃ無く、非常

に強いお方でもあつた。もしかしたら、その時からお兄様を好いていたのかもしれないわね……。」

栄華「この気持ち、嘘はつけませんわ。」

秋蘭「だからといって、純様の部屋で自分を慰めて良いとは限らぬぞ、栄華。」

栄華「っ!？」

その時、後ろから声が聞こえたので振り返ると、秋蘭がいた。

栄華「秋蘭さん……!」

そして、何かを察した栄華は、

栄華「あ、あの……秋蘭さん……。この事は……お姉様は知っておりますが、それ以外のお兄様達には、秘密にしてくださいませんか?」

と秋蘭に言った。

秋蘭「先程の事か?それをやってるのが、お前だけではないぞ。」

栄華「えっ……!」

秋蘭「私もお前と同じ事しているし、後は稟だったかな……。アイツも純様の事を好いておるぞ。」

栄華「そ、そんな……。」

それを聞いた栄華は、ガクンと項垂れた。

栄華（ま……まさか……。稟さんも私と同じ事をしていたなんて……。いつも冷静で知略に優れ、規律に厳しい稟さんが……!）
すると、

秋蘭「だが栄華、お前の気持ちは私も気付いていた。お前も、純様の事が好きだという事を。だが、大丈夫だ。純様は、お前を受け入れてくれるさ。」
と秋蘭はそう栄華に言った。

栄華「そう……。ですの?」

秋蘭「ああ。だが、正妻の座は譲らぬぞ。」

と秋蘭は栄華に宣戦布告をした。

栄華「わ、私も、秋蘭さんには負けませんわ!!」

それに、栄華もそう言ったのだった。

秋蘭「そうか……。では、互いに頑張ろうではないか。」

そう言つて、秋蘭はその場を後にした。

ふと、栄華は空を見上げた。目の前には蒼天が広がっていた。

栄華（もしかしたら、お兄様もこの空を……。）

栄華「……お兄様。もし……。その時が来たら……。」

栄華（『貴方様の事が好きです。』と言わせて下さい……。）

そう空を見て心の中で最後の言葉を呟いたのだった。

同時刻

純「……。」

純は、馬上でふと空に目を向け、そのまま黙っていた。

稟「純様、どうかなさいましたか？」

純「いや……何でも無い。」

風「純様、例の村が見えましたよ。」

それを聞いた純は、

純「分かった。皆、氣勢を上げろ!! 罪無き民を襲い、私腹を肥やす賊共を叩き潰せ!!
そしてその勝利を、陳留におられる姉上に届けるのだ!!」

黄鬚隊兵士「「おおーっ!!」」

純「行くぞ、黄鬚曹彰に付いて来い!!」

そう言い、いつも通り自ら先頭に立ち、兵と共に突撃した。

そして、純の圧倒的武勇と精強で鳴らした純率いる私兵黄鬚隊の活躍で、村を襲って
いた賊を完膚なきまで叩き潰したのであった。

16話

苑州・陳留

季衣「むぐむぐ……。すごい！美味しい！」

城下の店先で、季衣は山のように積まれた饅頭をハイペースで頬張っていた。

季衣「陳留のご飯って、何を食べても美味しいよね……。僕ビックリしちゃった。」
と季衣は心の底から幸せそうな表情で、そう言ったのだった。

華侖「ここはあたしオススメのお饅頭屋さんですよ！ほら、一刀つちも食べるっすー！」

一刀「俺はもうお腹一杯だから、二人で食べなよ。」

季衣「え？でも兄ちゃん、全然食べてないじゃない。」

一刀「いや……。その食べてないは季衣基準だからね？」

季衣は、この饅頭の山を既に三杯目のおかわりであったため、見るだけで腹一杯になつていた。

華侖「一刀つち、だらしないっすー。」

一刀「そういう華命ももう饅頭に全然手を付けてないの、ちゃんと分かっているからな
!？」

華命「そ、そんな事ないっすよ！気のせいっす！」

季衣「おじさーん。おかわりー！」

一刀「え、まだ食べるの!？」

すると、大通りから賑やかな声が聞こえてきた。

一刀「・・・何か騒ぎかな？」

季衣「むぐむぐ・・・兄ちゃん、お仕事？手伝おうか？」

一刀「いやまあ、季衣が出るほどの事じゃないと思うけど・・・」

一刀（雰囲気からすると、別に喧嘩ってわけでもなさそうだし。）

華命「とりあえず、行ってみるっすー！」

そして、三人は大通りに行ったのだった。

大通り

一刀「ああ、なんだ。そういう事か。」

大通りに顔を出すと、遠征から帰ってきた兵士達が行進をしていた。

季衣「きつと春蘭様達だよ！おーい！おーい！」

華命「おーい、おーい！あうう、これじゃ向こうから見えないっすー！」
すると、

季衣「兄ちゃん、ちよつと肩貸して！」

と言つてきた。

一刀「え、季衣!？」

そして、季衣はするすると一刀の背中を登り、肩車をした。

華命「あーっ。季衣だけずるいっすー！一刀っち、あたしもだっこして欲しいっすー
！」

一刀「えええ、流石に二人は・・・」

華命「欲しいっすー！して欲しいっすー！」

と華命が我儘を言ったので、一刀は仕方なく華命の脇に手を入れて、出来るだけ高く持ち上げたのだった。

華命「もう、一刀っち。これじゃグラグラするっすよ！もつとおっぱいに近い辺りを、ガツて掴むっすー！」

一刀「女の子がこんな所でそんな事言わない！」

季衣「あ、春蘭様だー！」

華侖「香風もいるっすー！おーい、おーい！」

春蘭「おう、季衣！今戻ったぞ！」

香風「お兄ちゃんも華侖様も、ただいま。」

一刀「二人とも遠征お疲れ様。最近こーいうの多くて大変だな。」

春蘭「なに、これも華琳様の御為だ。私に出来る事があるというのは良いものだな！

はははははははは！」

成果は上々だったのか、春蘭は自信満々といった様子で楽しそうに笑った。

香風「春蘭様、列がつかえる。」

春蘭「そうだな。ならば、お前達も仕事に励めよ！」

一刀「ああ。俺達もすぐ戻るよ。」

そして、馬上の二人を含む本隊は城に向かったのだった。

季衣「凄いなあ、春蘭様。でも、純様はもつと凄いなだよねえ・・・。」

華侖「そうっすよ！純兄は、もつと凄いつすよー！それより二人とも、早くお城に戻るっす！春姉え達から活躍のお話、聞かせて貰うっすよー！」

一刀「だな。こっちの仕事も終わったから、ぼちぼち戻ろう！」

謁見の間

純「・・・そうか。山陽の平定は上手くいったんだな。」

一刀達が城に戻ると、既に春蘭の報告は始まっていた。

春蘭「はっ。ひとまず暴れていた賊は下しましたので、しばらくはあの辺りも平和になるかと。」

香風「それで、山陽の太守が・・・これからも、守ってって。」

栄華「・・・またですか？」

春蘭「うむ。またなのだ。」

純「それ、ゼツテー秋蘭と柳琳が行っている泰山もだろ、きつと・・・。うわあ、メンドクセー・・・。」

春蘭「はい。恐らく純様のおっしゃる通りかと。」

一刀「郡を越えて兵を動かすのも大問題っていう話は、何だったんだろうな・・・。」

香風「本当は、大問題。でも・・・太守が何も言わなければ、問題にならない。」

純「それに、我が軍は行軍中の略奪を禁じているし、通る郡も前に俺が賊退治をした郡だからな。守って貰ってる上に大人しく通るだけなら、太守だつて何も言わねーか。」

一刀「・・・日頃の行いって事か。」

桂花「泰山は、多分もつと面倒が増えるわよ。」

華侖「もつと面倒つて、何すか？」

稟「あその地域は、役人の不正が他の所以上に横行していたのです。」

風「そうですね。風も調べたとき、驚きましたよ。」

桂花「だから、秋蘭にその証拠の資料をいくつかね・・・。」

一刀「・・・役人の不正まで取り締まる気？それはいくら何でもやり過ぎじゃない？」

華琳「綱紀肅正を言い渡すだけよ。それを聞く気がないなら、大人しく軍を退くだけだわ。」

一刀「それつて、後で恨まれたり・・・。」

華琳「するでしょうね。」

桂花「でも、既に×州の守りは華琳様頼みだもの。不正を行わないだけで領地を守つて貰えるなら、安いものでしょう？別に賄賂を送れと言っているわけでもなし。」

華琳「そういうこと。腹を探られて痛いなら、腹を痛くしなければいいのよ。」

榮華「何より、苑州各地でのお姉様の人気は相当なものですもの。とは言え、お兄様

には負けませんが。今さら私達を追い返したところで、民の不満は高まるだけですわ。」

一刀「今まで賊退治の応援に気持ちよく応えてたのは、この時のためか……。」

栄華「当たり前ですわ。世の中に、タダより高いものはありませんのよ。」

それを聞いた純は、

純「しかし、桂花も稟も風も栄華も大変だった。今までの仕事に加えて、そういう

調査や情報収集までとか……。」

そう言った。

桂花「それこそ望む所です。華琳様の霸道が着々と進んでいるという事ですから。軍師冥利に尽きるというものです。」

稟「私は、純様のお役に立てるなら何でもします。」

風「風も稟ちゃんと同じ意見ですよ。」

すると、軍師勢はそう言ったのだった。

一刀「……あのさ。」

桂花「何よ。」

一刀「割と前から疑問に思ってたんだけど、苑州の州牧は何も言ってこないの？」

一刀「州全体の賊退治とか不正役人の取り締まりって、本当は州牧の仕事だよな……。」

？」

と、一刀は感じた疑問を尋ねた。

華琳「何も。」

一刀「マジか……。」

純「そう言えば、前に州牧から姉上宛に感謝状が届きましたね。」

華琳「ええ。前に一枚そういつたのが届いた気がするわね。一層の奮起を期待するつて書いてあつたわ。……もう倉に片付けてしまつたけれど。」

一刀「……扱い軽すぎだろ。」

純「姉上の振る舞い程度で奮起するような州牧なら、とつくに苑州は良くなつていよ。」

華琳「ええ。純の言う通りね。」

一刀「だろうなあ……。それを今までして来なかつたからこそ、華琳が好き勝手に振る舞う下地が出来てたわけで……。それこそ日頃の行いか。」

純「……さて。なら、後の報告は香風に任せる。いつものように報告書を纏めておいてくれ。」

香風「はい。」

栄華「お姉様。午後からは……。」

華琳「ええ。陳登の所に視察に行つて来るわ。一刀、季衣、午後の予定は空けてある

わね？」

季衣「大丈夫です！」

一刀「ああ。新兵の訓練場の視察と市街地の拡張工事の確認と街の警備とついでに昼ご飯は、ここに来るまでに済ませてあるよ。」

華琳「結構。そちらの報告は、移動しながら聞くわ。純、後は頼んだわよ。」

純「お任せ下さい。」

そして華琳は、一刀と季衣を連れて視察に行ったのだった。

17話

謁見の間

泰山郡に遠征に出ていた秋蘭達が戻ってきて少し経った朝議でのこと。

秋蘭「・・・純様、それは本当ですか？」

純「ああ、本当だ。姉上が□州の州牧になった。」

華琳「それも正式にね。」

すると、

春・華・季「「おめでとうございます、華琳様／姉え！」」

春蘭と華侖、そして季衣がそれぞれ即答して祝いの言葉を述べた。しかし、

秋蘭「・・・。」

柳琳「・・・。」

桂花「・・・。」

稟「・・・。」

風「・・・。」

即答した三人以外は、なんとも言えない微妙な表情を浮かべていた。

季衣「はれ？秋蘭様達は、賛成じゃないんですか？」

華侖「えー。華琳姉えが州牧になったほうが絶対いいですよー！柳琳はイヤなんすか。」

柳琳「うん……。それ自体は、すごくいいお話だと思うんだけど。」

春蘭「北郷も何故そんな顔をしているのだ。よもや、華琳様の出世をお祝いするつもりがないなどは……！」

一刀「いや、華琳が出世するのは嬉しいよ？嬉しいけど……」

桂花「……それは、一体誰からの申し出ですか？とても□州の現州牧が華琳様に申し出るとは思えません……。」

その質問に華琳は、

華琳「陳珪よ。」

そう答えた。

桂花「……やはりですか。」

一刀「じゃあ、これが……華琳が前に言ってた取り立てって事？」

一刀は、以前華琳と一緒に視察に行ったとき、喜雨と話してた事を華琳に尋ねた。

栄華「取り立てで昇進など、それこそおかしいでしょう。どう考えても、お姉様しか

得しませんわよ？」

一刀「だよなあ……。」

純「うむ……。」

稟「これ以上曹操殿を持ち上げる理由が見つかりません。何を考えているのでしょうか、陳珪は？」

風「ぐう……。」

稟「寝るな！」

風「おおっ!?分からなくてつい……。」

稟「全く……。」

栄華「 州と何かしらの同盟を結ぶつもりでも、今の無能な牧を好きに操る方が何かと都合が良いでしょうに……。」

すると、

季衣「ねえねえ、香風。ちよつと良い？」

香風「んー。」

季衣「陳珪って人、確か豫州の沛国の相だよね？」

香風「そう。」

季衣「なんで、他の州の人が 州の州牧を決められるの？」

季衣がそう質問すると、

香風「それが・・・政事の闇。」

香風がそう答えたのだった。

季衣「まつりごとのやみ・・・。」

春蘭「・・・秋蘭。」

秋蘭「私にも分かん。豫州の州牧が口添えというならまだしも、一国の相がそこま
で力を持つてるとも思えんが・・・。」

一刀「陳珪さん、色んな所に繋がりがあつて言つてたし・・・その辺で何とかする
んだらうけどね。」

一刀（実際、そのコネをフル活用して南皮の袁紹つて人を呼び出す策もあつたらしい
し。）

一刀（あの頃は細かい情勢を良く分かつてなかつたから「ふうん」としか思わなかつ
たけど、今考えれば華琳達が言葉を失うのも良く分かる。）

華琳「朝廷にもあるのでしょうね。繋がりが。」

華命「じゃあ華琳姉えはどうするつすか？州牧にはならないつすか？」

華琳「当然、引き受けるに決まってるわ。」

しかし、

桂花「反対です！せめて、もう少し情報を集めてから……」

榮華「それに、泰山での綱紀肅正の噂も既に出回っています。今州牧を引き受ければ、民草はまだしも他の太守からより多くの反感を買うことに……」

桂花と榮華が時期尚早であると反対した。

華琳「反感など、いつ牧になったとしても起こるものよ。だとしたら、早い方が良いでしょう。」

桂花「それはそうかもしれませんが……！」

華琳「たとえこの先に陳珪の策が控えていたとしても、食い破れば良いだけ。そこで陳珪の策に潰えるなら、私の器もそこまでという事だわ。」

そう淡々と言い切る華琳の前に、

桂花「……。」

食い下がっていた桂花は黙った。

華琳「……さて、他に異論の有るものはある？」

そう華琳が問うと、

柳琳「……お姉様がそこまでのお覚悟なら。」

榮華「ですわね。私達の命、既にお預けしていますもの。」

桂花「その策を食い破る策は、私が献じさせていただきます。」

皆それぞれそう言い

純「まあ、これが姉上だもんなあ……。難しい事は分かんねーけど……。」

純はそう言つて、首を横に振つた。

華琳「……。一刀は？」

一刀「異論は無いよ。ただ、命の懸け所は見誤つて欲しくないかな。」

華琳「それは貴方達の働き次第ね。」

華琳「桂花、陳珪に遣いを出しなさい。その申し出、慎んで受けさせていただく、と

ね。……人選は任せるわ。」

桂花「……。はっ。承知致しました。」

あれから数日後

一刀「皆、来ないなあ……。。」

純「しよーがねーよ。気長に待つしかねーよ。」

稟「そうですね。」

風「ぐうぐ。」

稟「寝るな！」

風「おお！気持ちよくて遂……。」

稟「全く……。」

すると、

春蘭「おお、純様。早かったですね。後、北郷も。」

春蘭と桂花が来た。

純「ああ、春蘭か。姉上と秋蘭は？……あれか？」

春蘭「はい。髪の毛とまりが悪くて、今栄華と柳琳に整えさせています。」

一刀「髪い？あのくるくる？」

一刀（うーん。女の子がメイクに時間をかけるのは、今も昔も変わらないんだ

なあ……。）

そう一刀が思っていると、

桂花「……あなた今、化粧や髪型なんて大して変わらない……なんて思ったでしょ。」

と桂花に言われてしまった。

一刀「い、いや、そこまでは……。」

春蘭「やれやれ。だから純様以外の男は馬鹿だと言うのだ。州牧となったお方が、だ

らしい格好で公の前に出てみる。国はおろか、華琳様の品格まで疑われてしまうわ。」
桂花「あら、珍しく意見が合ったじゃない。」

春蘭「当然だ。」

一刀「……別に悪いなんて言つてないだろ。つていうか、華琳が寝癖ぼさぼさで出てくる方がびつくりするよ。」

桂花「華琳様がそんなみつともない真似をなさる筈が無いでしょ！」

一刀「わ、分かつてゐるつてば……。」

純「……。」

春蘭「純様、どうかなさいましたか？」

純「あ、ああ。姉上も州牧になつたから、これからメンドーな問題が起きると思つてな。その時は、頼りにしてゐるぞ。」

春蘭「お任せ下さい！先日華琳様がおつしやつたように、食い破るだけですから。」

桂花「……その食い破る策を考えるのは私なんだけどね。」

一刀「いずれにしても、出来るだけ食い破れるような罫が来て欲しいよなあ。」

稟「まあ、私はもし陳珪が純様に害をなす者であつたら、この手で始末しますが。」

風「おお！稟ちゃんもなかなかえげつない事を言いますね。」

純「はは。」

桂花「後は、情報収集に努めるしかないわね……。あまり借りは作りたくはないのだけれど、中央の知り合いに当たってみるしかないか。」

桂花「まあ、今は中央も苑州周りの情報は欲しがらうし、それをエサにすれば何とかなるかしら……。」

一刀「……中央？桂花もそういうコネがあるのか？」

桂花「こね？」

純「何だその言葉？」

春蘭「何をこねるつもりだ。麵でも打つ気か？」

と桂花達はコネの意味が分からなかった。……そりやそうだ。コネはコネクションの略なんだから。

一刀「ええつと……。桂花が中央にいる知り合いに手回しして、陳珪さん絡みの情報を集めるって事だろ？」

桂花「ええ。袁紹の所って、扱いは悪かったけど、中央との繋がりだけは沢山作れたのよね。」

純「まあ、お前の家は名門だからな。」

一刀「……それ、華琳が知ったら怒らないか？」

そう一刀が言うと、

華琳「別に怒らないわよ。」

と華琳が後ろでそう言ったのだった。

華侖「お待たせつすー！」

桂花「華琳様……。」

華琳「なりふりを構っていられるほど、今の私達に力も余裕も無いもの。使えるものなら部下の繋がりでも何でも、遠慮無く使わせて貰うわよ。」

と華琳はそう言った。

一刀「……。」

華琳「……何？」

一刀「いや、春蘭から髪のとまりが悪いつて聞いてたからさ……。大丈夫だったのかな、つて。」

華琳「雨でも降るのかしらね？いつもと違うようにしかまとまらなかったのよ。……どう？貴方から見て変ではないかしら？」

一刀「ああ……。うん。秋蘭と栄華と柳琳が見て大丈夫なら、大丈夫だと思うよ。」

純「俺も同感です。俺から見ても特に変ではありませんし。」

栄華「当然ですわ。ちゃんとお手入れさせていただきましたもの。」

柳琳「はい。いくらやつても御髪が思うように落ち着かなくて、大変でしたけど。」

そこは付き合いの長さで分かったのだった。

華命「・・・あたしは何が違うのか全然わかんなかったつす。」

・・・華命を除いて。

華琳「ならいいわ。それに、州牧になったお陰で季衣との約束を一つ進められたのだから。ひとまず、それで上出来よ。」

一刀「そつか・・・。あれ？　そういや肝心の季衣は？」

秋蘭「今朝、この辺りで怪しい人物の目撃証言が入ってきたのだ。調査は私と姉者がするから街を見てこいと言ったのだが、聞かなくてな。」

一刀「怪しい人物・・・？」

華琳「太った大男と、痩せた小柄な男と、髭面の男の三人組だそうよ。」

一刀「ちよ、それってまさか・・・！」

栄華「・・・流星にあの根城の壊滅から時間も経っていますし、可能性は限りなく低いでしょうけれど。」

華琳「それに珍しくもない外見だし、この陳留に戻ってくる理由も思い当たらないしね。」

一刀「それもそうか。」

一刀「じゃ、頑張ってる二人にお土産くらいは買って帰らないとな。」

純「うむ。そうだな。」

春蘭「考えることは同じでしたか・・・。」

桂花「観光に行くわけじゃありませんよ？」

稟「そうですね、純様。」

純「分かつてるよ。視察をちゃんとやり、その上で土産を買うんだから。別に構いませんよね？姉上。」

華琳「仕事をちゃんとするならね。」

春蘭「はいっ！」

桂花「・・・返事だけにならない方がいいけど。」

華琳「さて、揃ったのなら出かけるわよ。桂花、留守番、よろしくお願いね。」

桂花「華琳様あ・・・。純様はともかく、なんで私はお留守番なんですかあ・・・？」

一刀「指差すな、指を。」

桂花の発言に、

華琳「・・・一刀には、非常時の判断がまだ出来ないでしょう。それとも、補佐で一

刀も残した方が良い？」

桂花「邪魔だと思った瞬間に斬り捨てて良いなら。」

一刀（おいおいおいおい。）

一刀「なあ。参考までに聞くけど……どういう時に邪魔だと思うの？」

桂花「視界に入った時。」

一刀「寧ろ斬り捨てる気満々じゃねえか。」

桂花「当たり前じゃない。」

柳琳「桂花さん、私も残りますから。」

稟「桂花。私と風もいます。」

桂花「はあ……。稟と風はともかく、柳琳は、街に行ってもいいんだけど。」

華命「そうっすよ。あたしも柳琳と一緒にきたかったっすー！」

柳琳「でも、誰かが残らないとでしょ？今度また、一緒にお買い物に行きましょ、姉さん。」

華命「約束っすよ!!」

華琳「何かあったときの判断は貴女達に任せるわ。一刀を斬り殺されてもかなわなから、あれは連れて行く。いいわね？」

桂花「はあい……。残念。」

純「稟、風。頼んだぞ。」

稟「はっ!!」

風「はい。」

そして、視察に行つたのであつた。

城郊外

?? 「あれが陳留か……。」

?? 「やつと着いたのー。凧ちやーん、もう疲れたのー。」

凧 「いや、沙和……これからが本番なんだが。」

沙和 「もう竹カゴ売るの、めんどくさいのー。真桜ちゃんもめんどくさいよねえ……。」
真桜 「そうは言うてもなあ……全部売れへんかったら、せつかくカゴ編んでくれた村のみんなに合わせる顔がないで。」

凧 「そうだぞ。せつかくこんな遠くの街まで来たのだから、みんな協力してだな……。」

沙和 「うー。わかつたのー。」

真桜 「最近はなんや、立派な太守さんとその弟さんがおるとかで治安も良うなつとるみたいやし、いろんな所から人も来とるからな。気張つて売り切らんと。」

凧「ああ。その太守様も州牧に格上げになったと聞いたし、街もずっと賑やかに
ているはずだ。それにその弟さんは間違ひなく黄鬚と呼ばれている曹彰様だ……。」

真桜「凧はその曹彰様に憧れとるからなあ。」

沙和「そーなのー。凧ちゃんったら、曹彰様の活躍を聞きたびに、目をキラキラさせ
てるのー。」

凧「別に良いではないか！曹彰様は、私の目標でもあるのだから！」

真桜「分かつとるって！」

沙和「ねえねえ。そんなことより、この街がそんなに賑やかならみんなで手分けして
売った方が良くない？」

凧「……なるほど、それも一利あるな。」

真桜「それじゃ、三人で別れて一番売った奴が勝ちつて事でええか？負けたヤツは晩
飯、オゴリやで！」

凧「こら真桜。貴重な路銀を……。」

沙和「分かつたのー！」

凧「沙和まで……。」

真桜「よっし。二対一で、可決つてことで！凧もそれでええやろ？」

凧「はあ……やれやれ。仕方ないな。」

真桜「ほな決まり！」

沙和「おーなのっ！」

凧「・・・なら、夕方には門の所に集合だぞ。解散！」

陳留城下

??「はい！それでは、次の曲、聞いていただきましょう！」

??「姉さん、伴奏お願いね！」

??「はい。お姉ちゃんに、お任せだよーっ♪」

秋蘭「ほう。旅芸人も来ているのか・・・。」

純「ああ。あれは東の歌か・・・。あちらからは来なかつたしな。」

秋蘭「はい。そういう意味では、我々の働きが認められたのかもしれないね。」

純「そうだな。」

栄華「特にあの方達は女性だけのようですし。道中は煩わしい男どもに絡まれる事も多いでしょうから・・・武芸に相当の自信があるか、よほど安全な道がないと来ないで

しようね。」

?? 「ありがとうございましたー!」

?? 「それでは次、もう一曲、いってみましょうか!」

すると、

華琳「まあ、腕としては並という所ね。それより、私達は旅芸人の演奏を聴きに來たワケではないのよ?」

と華琳は言った。

純「そうでしたね。狭い街ではないので、手分けして見ていくのはどうですか?」

華琳「そうね。それで、どう分けるのかしら?」

純「そうですね。では、姉上は一刀と。春蘭は榮華と。秋蘭は俺と華命で組むというのはどうでしょう?」

春蘭「北郷、ずるいぞ!」

一刀「俺が決めたんじゃないぞ!」

純「……お前は自分の身くらい守れるだろう。」

春蘭「……うう。そういうことですか……。北郷。」

一刀「何?」

春蘭「貴様の腕つ節の弱さが、たまに羨ましくなる。どうしたらそんなに弱くなれる

のだ？」

一刀「・・・それは、褒められてるの？それともバカにされてるの？」

春蘭「そんなもの、決まっているだろう。」

一刀「うう・・・。」

栄華「ところでお兄様。私は春蘭さんですの？」

純「なら一刀と一緒に見るか？」

栄華「ううう・・・確かに、まだ春蘭さんの方がマシですわ。」

春蘭「むう、栄華。北郷と比べられても嬉しくないぞ。」

一刀（栄華の基準、どん底まで下がってないか？）

華琳「なら、決まりね。では、後で突き当たりの門の所で落ち合いましょう。」

純「分かりました。じゃあ秋蘭、華命、行くぞ。」

秋蘭「はい。」

華命「はいっす！」

すると、秋蘭は優雅な所作で純の腕に絡んできたのだった。それを見た栄華が、羨ましそうな表情をしていたのは内緒である。

そして、それぞれ別れて視察を始めたのであった。

18話

陳留城下裏通り

一刀と華琳が担当する街の中央部は、真ん中を走る大通りと、そこに並ぶ市場がメインであった。

一刀「なあ、華琳。」

華琳「何？」

一刀「大通りは見て回らなくて良いのか？」

華琳「大通りは後でいいのよ。大きな所の意見は、黙っていても集まるのだから。」

一刀「ああ、そういう事か……。」

華琳「それより一刀。……この辺りを見て、貴方はどう思う？」

一刀「どうって……。」

そう言われ、一刀は周りを見渡した。

一刀「十分賑わってると思うけど。」

一刀（流石に大通りには負けるけど、小さい所は小さいなりに、賑わってるように見

える。俺の感覚からすれば、地域密着の商店街って感じだな。」

華琳「そのくらい、見れば分かるわよ。もつと他に、気付くことは無いのかしら？」

一刀「気付くこと？」

そう言われ、再び見渡した。

一刀「・・・食べ物屋ばかりだな、この辺。季衣が喜びそうだ。」

華琳「ええ。他には？」

一刀（あれ。適当なことを言ってみた割には、華琳の反応が渋くない。もつと嫌な顔されるかと思ったのに。）

一刀「料理屋も結構多い。」

華琳「でしょうね。食材がすぐ手に入るのだから。で？」

一刀「・・・で？」

華琳「他に気付くことは無い？何でも良いわ。」

そう言われ、今度は料理の屋台を眺めてみた。すると、おじさんがバカでかい包丁を使って、肉の塊を器用に切り分けているのが見えた。それを見て、

一刀「・・・包丁。」

と呟いた。

華琳「包丁？」

一刀「包丁を研ぐ店や、調理器具を売る店があつたら、儲からないかな。」

華琳「・・・鍛冶屋の事？」

一刀「そう、それ。」

華琳「鍛冶屋は三つ向こうの通りに行かないと無いわ。」

一刀「え、だって、その辺のお客さんなんて、皆城の鍛冶屋さんと同じ格好を・・・」

華琳「向こうの通りには料理屋が無いの。」

一刀「・・・何で華琳、そんなに詳しいんだよ。」

華琳「そのくらいは街の地図を見れば分かるもの。」

一刀「じゃ、わざわざ視察しなくても・・・」

華琳「街の空気は地図や報告書だけでは実感出来ないでしょう。」

華琳「たまにはこうして自分の目で確かめておかないと、住民達の意にそぐわない指

示を出してしまいかねないわ。」

一刀「・・・もう州牧様なのに？」

華琳「州牧になったからこそよ。」

そう言つて、華琳は露店の前の人ばかりで視線を止めた。

華琳「・・・ああいう光景も、執務室に座っているだけでは分からないもの。」

真桜「はい、寄つてらっしゃい見てらっしゃーい！」

そこには露天商らしき少女がおり、その狭いスペースには、竹カゴがずらりと並べられていた。そして

一刀「・・・何だこれ？」

華琳「カゴ屋のよう・・・だけれど？」

一刀「いや、カゴじゃなくて・・・こっち。」

そう言つて一刀が指さしたのは、少女の脇に置いてあるなんとも言えない物体があつた。

一刀「・・・あれ？」

その箱状の中には、木や金属で作られた歯車があつた。

一刀「この時代に、歯車なんてあつたっけ・・・？」

それを見て、一刀は少し疑問に思った。

華琳「あら。一刀は歯車が珍しい？見るのは初めてかしら？」

一刀「歯車くらい見たことあるけど・・・ああ、木製のは、流石に無いな。」

一刀「いや、それでもなくて、あれつて何の装置？」

華琳「・・・さあ？」

すると、

真桜「おお、そこのお二方、なんともお目が高い！コイツはウチが発明した、全自動

カゴ編み装置や！」

と彼女はそう答えたのだった。

一刀「全自動……」

華琳「カゴ編み装置……？」

一刀「つていうか、全自動……!？」

真桜「せや！この絡繰の底にこう、竹を細う切った材料をぐるーつと一周突っ込んでやな……、その兄さん、こつちの取っ手を持つて！」

一刀「お、おう……？」

一刀は、言われるがまま、機械の取っ手を手に取る。

真桜「でな。こうやって、ぐるぐるーつと。」

一刀「ぐるぐる……？」

言う通りにぐるぐる回していくと、セットされた竹の薄板が機械に吸い込まれていき、暫くすると、装置の上から編み上げられた竹カゴの側面がゆつくりとせり出してきたのだった。

真桜「ほら、こうやって、竹カゴの周りが簡単に編めるんよ！」

一刀「おお……すげー！」

一刀（思いっきり手動だけどなっ！）

華琳「……底と枠の部分はどうするの？」

真桜「あ、そこは手動です。」

華琳「……そう。まあ、便利と言えば、便利ね。」

一刀「全然全自動じゃないじゃないか……。」

真桜「う。兄さん、ツツコミ厳しいなあ……。そこは雰囲気重視、つちゆうことでひとつ。」

一刀「あ、そう……。」

そう言い、一刀はまだハンドルを回していたら、

真桜「あ、ちよ！お兄さん、危ないっ！」

一刀「え……？」

彼女にそう言われたのだが既に遅く、

ドカンッ

一刀「どわあっ!？」

華琳「ちよつと大丈夫？一刀。」

一刀「ば……っ、爆発した……！爆発した……っ！」

カゴ編み装置が爆発したのだった。

真桜「あー。やっぱアカンかったかあ……。」

一刀「え……?え……?」

真桜「まだそれ、試作品やねん。普通に作ると、竹のしなりにこう、強度が追い付かんでなあ……こうやって、爆発してまうんよ。」

一刀「そんな物騒なもん、何で持って来たんだよ。……ついでに言えば、その中に爆発する要素無いよな!?!」

と色々突っ込んだ一刀。

真桜「何でや! こういう時は爆発するもんやろ!」

華琳「ならここに並んでいるカゴは、この装置で作った物ではないの?」

真桜「ああ、村の皆の手作りや。」

華琳「……。」

一刀「……。」

真桜「なあ、お兄さん。」

一刀「……何。」

真桜「折角の絡線を壊したんやから、一個くらい買うて行つてえな。」

一刀「……。」

色々言いたい事がある一刀だが、

華琳「……一つくらいなら、買っておあげなさい。一刀。」

と華琳に言われてしまい、買う事になったのだった。

その頃、春蘭と栄華達は

春蘭「この辺りは、服屋ばかりか・・・。」

栄華「ちよつと。今日は視察なので、お買い物はナシですわよ。無駄なお金は使わないようにして下さいまし。」

春蘭「そんな事は分かっている。服などどうでも良い。」

しかし、

栄華「あら。この服、可愛らしいですわね・・・。季衣さんや香風さんに着せたら似合そう。」

栄華が服の誘惑に負けていた。

春蘭「言う端からなんだ、栄華。今日は視察に来たのだから、買い物はナシなのだろう。」

栄華「わ、分かっていますわよ。私物を買うに来るのなら、ちゃんと日を改めて参り

ますわ。」

春蘭「やれやれ。本当は華琳様と二人で視察をしたかったのだが、純様の命令だしな……。」

栄華「……うう。やつぱりさっきの服、気になりますわね。」

栄華「それに、本当はお兄様と行きたかったですわ……。そうすれば、とても充実した視察だったはずですよ……。」

栄華「でも、お兄様の命令ですし、仕方ないですよ……。」

すると、何か良い服を見つけた春蘭は、

春蘭「むう……。これは。」

春蘭「この華麗な装い……。華琳様がお召しになつたらさぞお似合いになるだろうな。そんなことを言ったのだった。」

栄華「……ごほん。春蘭さん？」

春蘭「わ、分かっている！ 買いに来るのなら、目を改めてだろう。」

春蘭「だが、一着しかなさそうだし、取り置きだけでも……。」

栄華「……お取り置きまでするなら、もう買うのと同じではありませんの。」

春蘭「……。」

栄華「……。」

春蘭「……なあ、栄華。」

栄華「……なんですの。」

春蘭「街の賑わいを確かめるなら、自身でも体感してみるのが一番だとは思わんか。」

栄華「あら。春蘭さんにしては、良い事をおっしゃいますのね。」

栄華「それに街にお金を回すのも、時には必要な事ですわ。」

春蘭「……なんだ、金は使わないのが一番ではなかったのか。」

栄華「世の中には、使ってはならないお金と使うべきお金がありますの。使うべきお金を使うのは、世間にお金を回すための健全な行いですよ。」

春蘭「お前の言っていることはよく分らんが、私はひとまずこの店を視察してみようと思う。」

栄華「視察ですよ。あくまでも、これは視察ですからね……。」

そう言つて、二人は服屋に入った。

店員A「いらつしやいませー！」

春蘭「おお、これはなかなか……。」

栄華「これも可愛らしいですわ……。」

店員A「あのお、お客様。失礼ですがこの辺りは、お客様よりも少々小さめの……。」

お客様に合うものでしたら、あちらの棚に。」

春蘭「私の物など買ってどうするのだ。」

店員A「え、お客様……？」

栄華「申し訳ありません。私達、知り合いの服を買いに来ただけです……。」
店員A「そうでしたか。でしたら、何かありましたらお声掛けくださいませ。他の大ききさもご用意出来る物がありますので。」

栄華「ええ。その時はお願い致しますわ。」

春蘭「ほほう……これも悪くない。ああ、あれも華琳様に……」
すると、

??「じゃあ、これは？」

1人の少女が春蘭に声を掛けたのであった。

春蘭「おおっ。これは素晴らしい！」

沙和「やっぱりなの！それだったら、こっちも合うと思うのー。」

春蘭「……そうか？それはイマイチだろう。むしろ、これを内側に合わせたほうが……」

沙和「おおーっ。お姉さん、なかなかやるのー。」

春蘭「お主もな……って、誰だ貴様っ！」

沙和「うーん。さつきから、服を見る目がすごく熱かったから……。こういう服が好きなら、これも気に入るんじゃないかなーって思ったの。」

栄華「あら。そちらは、今年の流行りですわね。」

沙和「そつちのお姉さんも詳しくそうなの！なかなかやるの・・・。」

栄華「ふふつ。まずは基本を抑えてこそ。その辺りは外しませんことよ。」

沙和「それにそつちのお姉さんは、自分のこだわりがちやんとあるみたいなの・・・。
そういうのも、とつてもステキなの！」

春蘭「ふつ。貴様、この私とやり合う気か？華琳様のための私は、自分で言うのもな
んだが・・・かなり凄いでぞ？」

沙和「んー。このお店、可愛い服がたくさんあるし・・・わかつたの！その勝負、受
けて立つの！」

栄華「面白くなってきましたわね・・・。なら、私も負けませんわよ！」

そして、勝負が始まったのであった。春蘭と栄華は肝心の視察を忘れて・・・。

そして、

春蘭「・・・うむ、久しぶりに良い戦いであつた。血がたぎつたぞ！」

沙和「私も楽しかったの。その買った服も、きつとその子達に似合うと思うのー。」
栄華「ふふつ。あなたの見立ても、なかなかお見事でしたわ。」

沙和「お姉さんとも、またいい勝負が出来る気がするの・・・。」

春蘭「しかし、少々服を買いすぎたな。これでは持つて帰るまでに落としてしまいうだ・・・。」
すると、

沙和「あー。それなら、この竹カゴを使うといいの。」
と言った。

春蘭「おお、それは助かる！感謝するぞ！」

沙和「あ、でもそれ、売り物なの・・・。」

春蘭「なんだ、そうなのか。」

沙和「あと今思い出したけど、今日中にこのカゴ、全部売らないといけないの・・・。」
春蘭「ふつ。それならそうと早く言え。今日の勝負の札だ。そのようなカゴ、私が全て引き取つてやろうではないか！」

しかし、

栄華「ちよつとお待ちなさい、春蘭さん！それとこれとは別問題ですわよ、必要な分だけ買えば十分でしょう！」

栄華は、買いすぎであると反対したのであった。

春蘭「好敵手には相応の敬意を払わねばなるまい。任せろ！」

沙和「おおっ！お姉さん、太っ腹なのー！」

春蘭「はっはっは。誰がお腹がたゆんたゆんで子供が乗ったらフカフカだとー？」

沙和「誰もそんなこと言っていないのー。」

春蘭「まあ良い。ほれ、これで・・・」

そう言つて、春蘭は金を出したのだが、

沙和「・・・。」

春蘭「・・・。」

栄華「・・・。」

服を買いすぎて、もう殆ど残っていないかった。

沙和「・・・それはさすがに、一個しか売れないの。」

春蘭「え、栄華・・・！」

栄華に助けを求めたが、

栄華「お金なら貸しませんわよ。それは、使う必要のないお金ですもの。」

春・沙「そ、そんなあ・・・。」

はつきりと断られてしまったのであった。

一方、純と秋蘭、そして華侖達は

秋蘭「……。」

純「……。」

凧「……。」

華侖「……。」

秋蘭「……。」

純「……。」

凧「……。」

華侖「……ふああ。」

秋蘭「……純様。良いものですね、このカゴは。」

純「ああ、そうだな。」

凧「……どれも入魂の逸品です。」

秋蘭「……そうか。」

純「……へえ。」

凧「……はい。」

秋蘭「……。」

純「……。」

凧「……。」

そして、純と秋蘭はまたカゴを身ながら、じっくり考えていた。一方華命は、
華命「……あ。こっちはお肉売ってるつす。くださいなー。」

純と秋蘭と凧のカゴを巡っての静かなる戦いに飽き、遊んでしまった。

秋蘭「……。」

純「……。」

凧「……。」

華命「……むぐむぐ。お肉おいしいつす！もう一本欲しいつす！」

男「姉ちゃん、このカゴひとつおくれや。」

凧「……まいど。」

秋蘭「……。」

純「……。」

凧「……。」

華命「あ！こっちは何すか・・・？わ、ぴゅーって吹いたら変な音が出るっす。面白
いっすー！」

秋蘭「・・・。」

純「・・・。」

凧「・・・。」

華命「よし！これを季衣と香風のお土産にするっす。二人とも、ぜったい喜んでく
るっす・・・！」

そして、

秋蘭「・・・よし。」

純「・・・よし。」

凧「・・・っ！」

純・秋「これを一つ、もらおうか。」

凧「・・・はっ。」

最終的に、秋蘭と純が一つずつカゴを買うという事に決まった。

突き当たりの門

華琳「……で？」

春蘭「……。」

秋蘭「……。」

純「……。」

一刀「……。」

華琳「どうして皆、揃いも揃って竹カゴを抱えているのかしら？」

純「実は今朝、部屋のカゴの底が抜けているのに気付きました……。」

秋蘭「私も同じくです。」

華琳「……なら、仕方ないわね。どうせあなた達の事だから、気になって仕方なかったのでしょうか？」

純「直そうとは思ったのですが、流石に無理だと思ったので……。」

秋蘭「私もです。」

華命「あたしは季衣と香風にお土産を買ってきたつすよ！」

華琳「そう、喜んでくれると良いわね。……で、春蘭と榮華は？何か山ほど入れているようだけれど……。」

春蘭「こ、これも・・・季衣の土産にございます!」

栄華「え、ええ・・・。それと、香風さんにも。」

華琳「何?服?」

春蘭「はっ!左様でございます!」

華琳「・・・そう。土産も良いけれど、ほどほどになさいね。」

栄華「ええ。そうしますわ。」

純「で、何で一刀もそんなにカゴを背負ってんだよ?」

一刀「・・・やむにやまれぬ事情があつてだな。」

純「・・・そうか。ならしやーねーな。」

華琳「それで、視察はちやんと済ませたのでしようね。カゴなり土産なりを選ぶのに時間をかけ過ぎたとは言わせないわよ。」

華命「もちろんっす!」

栄華「お、お任せくださいませ・・・。」

純「栄華、声が震えてるぞ。」

栄華「いえ、何でもありませんわ。」

華琳「ならいいわ。帰ったら今回の視察の件、報告書にまとめて提出するように。：

一刀もね。」

一刀「え？俺も？」

華琳「こういう資料は質もだけれど、まずは色々な視点からの報告が大切なのよ。……
分かったわね？」

一刀「……了解。」

そして、城に帰ろうとしたその時、

??「そこのお若いの……。」

純「ん？」

華琳「……誰？」

謎の声の主にかけられた。

??「そのの、お主……。」

栄華「何ですか？占い師？」

春蘭「華琳様は占いなどお信じにならん。慎め！」

華琳「……二人とも、控えなさい。」

春蘭「は？……はっ。」

そして、占い師は華琳を見つめて、その結果を述べた。

占い師「強い相が見えるの……。稀にすら見たことの無い、強い強い相じゃ。」

華琳「あら、一体何が見えると？言つてごらんなさい。」

占い師「力のある相じや。兵を従え、知を尊び……。お主が持つは、この国の器を満たし、繁らせ栄えさせる事の出来る強い相。この国にとって、稀代の名臣となる相じや……。」

春蘭「ほほう。良く分かっているではないか。」

占い師「……国にその器があれば……じやがの。」

栄華「……どういことですか？」

占い師「お主の性、今のひび割れた国の器では収まりきらぬ。」

占い師「その野心、器の内に留まるを知らず……溢れた野心は、国を侵し、野を侵し……いずれ、遙か地の果てまで名を轟かせて、類い稀なる奸雄となるであろう。」

と占い師はそう言った。

栄華「あなた！それ以上お姉様を侮辱するならば、容赦は致しませんわよ！」

それを聞いた栄華は鋭い目つきで怒った。

華琳「栄華！」

栄華「し、しかしお姉様！」

華琳「そう。乱世においては、奸雄となると……？」

占い師「左様。それから、そこのお主……。」

純「俺か？」

すると、今度は純を見て

占い師「お主は、その娘以上に危うい。その器は、あらゆる理を全て破壊し、敵味方問わず多くの者の命を奪い、恐れられ、その名は遙か天の果てまで轟かせ、類い稀なる梟雄となるであろう。」

そう言った。

純「!・・・そうか。」

その際、純は少し驚いた表情をし、そう呟いた。その時、

秋蘭「貴様! 純様を愚弄する気か!」

栄華「お姉様に飽き足らず、お兄様も侮辱するならば、許しておけませんわよ!」

一刀「!!」

秋蘭と栄華が烈火の如く怒り、一刀はその劍幕に驚いてしまった。

純「秋蘭! 栄華!」

秋蘭「・・・し、しかし純様!」

栄華「この方は、お姉様だけでなく、お兄様も侮辱し傷つけたのですよ!」

純「いいから下がれ。」

そう言つて、純は二人を下がらせた。

純「そうか。乱世において、姉上は奸雄、俺は梟雄になるのか・・・?」

古い師「左様。それも、千年、万年……人の世が続く限り、名を残すやもしれぬほどのな。」

純「……そうか。」

華琳「……ふふつ。千年、万年と……ね。」

華琳「気に入ったわ。栄華、この古い師に謝礼を。」

栄華「は……？」

純「聞こえなかったのか？ 礼だよ。」

栄華「ですがお姉様、お兄様。このような胡乱な輩に出すお金など……。」

純「……一刀。この古い師に、幾ばくかの礼を。」

一刀「お、おう……。」

そう言い、一刀は幾らかの金を古い師の脇に置いてある茶碗に入れた。その際、栄華と秋蘭は華琳と純、特に純の事を悪く言われたのが気に入らなかったのか、静かに睨みつけたままだった。

純「乱世の梟雄大いに結構だ。それが例え悪名だろうが何だろうが、人の世が続く限り人々の記憶に刻まれるのならばな。」

華琳「ええ。私も大いに結構。人の世が続く限り名を残すなら文句は無いわ。」

そう言い残し、その場を後にしたのだった。

その帰り道

華琳「……それにしても春蘭。よく我慢したわね、偉かったわ。」

春蘭「……はあ。」

純（こいつ、あの占い師の言った意味、分かってねーな。）
そう思っていると、

華命「ねえねえ純兄、一刀っちー。あの占い師の人、結局なんて言ってたんすか？らんせの……？かんゆう？と、きょーゆう？」

一刀「ああ。乱世の奸雄つていうのは、ええつと……」

純「奸知に長けた英雄という意味だ。」

華命「かんち……。」

純（こいつもかよ……。）

栄華「奸知というのは、ずる賢くて、狡猾という意味ですわ。」

華命「おー！じゃあ、きょーゆうは？」

秋蘭「残忍かつ強く荒々しい人という意味だ。」

栄華「ええ、そうですわ。あの占い師、お兄様にあのような酷い事を……！」

華命の疑問に、秋蘭は怒りを抑えた感じでそう言い、栄華は今にもあの占い師を殺そうかという感じだった。

華命「おー！そーなんすねー！」

一刀「要するに、奸雄は世が乱れれば、ずる賢い手段でのし上がるヒドい奴で、梟雄は強いだけでなく、残酷なやり方で上へのし上がる悪人って意味だ。」

その時、

春蘭「何だとおっ！貴様、言うに事欠いて華琳様と純様に何という事をつ！」

一刀「ええ!?何でそこで春蘭がキレルんだよ！つて、そこで掴みかかるな！首が絞まる、閉まるっ！」

突然春蘭がキレて、一刀の首を絞めたのだった。

純（やつぱコイツ、分かってなかった……）

秋蘭「……姉者。あの占い師の言葉、分かっていなかったな。」

栄華「ああ……そういうことですの。」

春蘭「あのようなもって回った物言いをされて分かるものか！おのれ、人が理解出来んからといって華琳様と純様に何という侮辱を！」

春蘭「華琳様、純様、すぐに引き返しましょう！あのイカサマ占い師め！北郷の前に木っ端微塵に叩き斬って、城の外堀に放り捨ててくれる！」

華琳「・・・だから、いいと言っているでしょう、春蘭。とりあえず一刀を離しなさい。」

秋蘭「そうだぞ。落ち着け、姉者。占い師より先に北郷が死んでしまう。」

春蘭「これが落ち着いていられるか！くそう！」

一刀「だから、首！首！首！首！首！」

一刀（や、もうやばいっ！頭が、ぼうつとして・・・！）

純「春蘭、いいから落ち着け。二度は言わんぞ。」

春蘭「は・・・はい。」

純の一言で春蘭はやつと落ち着き、一刀は何とか落ちずに済んだ。

純「・・・。」

秋蘭「純様？」

栄華「お兄様？」

純「ん？どうした、秋蘭？栄華？」

秋蘭「いえ、何でもありません。」

栄華「私も、何でもありませんわ。」

純「そうか……。」

秋蘭「……。」

栄華「……。」

その時、秋蘭と栄華の目には、純の感情が僅かに乱れていただけではなく、深く傷ついた表情をしていたのを一瞬だったが見逃さなかったのだった。

一方季衣と香風は、例の盗賊三人組を追っていたが、途中その三人組が例の旅芸人に書物を渡したのだが、これが後に大陸中を騒がす事になるのは、この時誰も知る由は無かったのである。

19話

純の部屋

純「……。」

純は、部屋の窓から月を眺めていた。

純「……。」

その時、純は占い師の言葉を思い出していた。

回想

占い師（類い稀なる梟雄となるであろう。）

回想終了

純（梟雄か……。歴史に名を残せばそれでいいと言ったが……。）
その時、

秋蘭「純様、秋蘭です。」

純「秋蘭？ちよつと待つて。」

秋蘭の声が聞こえた純は、扉を開けた。

純「どうした、秋蘭。つて、栄華もいるな。」

栄華「お、お兄様……。」

秋蘭の隣には栄華もいて、モジモジしていた。

秋蘭「純様にお願いがあつて栄華と共に参りました。」

純「そうか。まあ入れ。」

そう言い、純は秋蘭と栄華を中に入れた。

純「それで、二人は俺に何の用だ？」

栄華「いえ、特に急ぎの用はありませんわ。ただ……。」

秋蘭「今日は純様と共に寝ようと思つたのです。」

と秋蘭は栄華の代わりに答えた。

栄華「秋蘭さん！」

純「・・・はっ？えつと、秋蘭、もう一度今なんて言った？」

それに純が再度問うと、

秋蘭「はい、私達と一緒に寝て欲しいと言ったのです。」

と秋蘭はそう言った。

純「えつ、何で？」

秋蘭「最近一緒に寝ることがなかったのです。」

栄華「・・・駄目ですか？」

これには、栄華は上目遣いで見つめた。

純「いや、駄目じゃねーけど・・・昔はともかく、お前らもいい年だろう？」

すると、

秋蘭「ふふ、私達の間には関係ありませんよ。」

栄華「そうですね、お兄様。私達、よく一緒に寝ていたではありませんの？」

クスクスと口元に手を当てて笑いながら秋蘭と栄華は言った。その表情は女性の妖

艶さが滲み出ていた。

純「・・・しよーがねーな。」

そう言った純は、二人の頭を優しく撫でて、

純「好きにしろ。」

と言った。すると、

秋蘭「・・・はい！」

栄華「では、お好きに致しますわ！」

と言った秋蘭と栄華は、純の左右の両腕に抱き付き、一緒に寢床に入った。

秋蘭「・・・温かいです。」

栄華「・・・お兄様は良い匂いですわ。」

純「つたく。・・・お休み、秋蘭、栄華。」

秋蘭「お休みなさい、純様。」

栄華「お休みなさい、お兄様。」

そう言い、二人は仲良く川の字になり、眠りについたのだった。

暫くが経ち

秋蘭「ふふ……。」

栄華「お兄様の寝顔、可愛らしいですわ……。」

夜が更けてきた頃、秋蘭と栄華は目の前で寝ている純の頬を撫でていた。

秋蘭「……純様、大好きです。」

栄華「秋蘭さん、それは私もですわ。お兄様……。」

二人は純の寝顔を見てそう言い、その想いが溢れてくる。

それぞれの腕で純の腕を抱き、足で純の足を絡め、純の手を取って自らの頬に添えたりした。

栄華「スンスン。ああ、お兄様……。」

栄華に至っては、純の胸に顔を当てて匂いを嗅ぐ程だった。

秋蘭「栄華、それでは純様が起きてしまうぞ。」

栄華「も、申し訳ありません。けど、お兄様の寝顔と匂いを嗅ぐと、遂……。」

秋蘭「こみ上げる気持ちだが、抑えきれないわけか……。」

栄華「……はい。」

そして、栄華は純の顔を見て

栄華「それに、お兄様は先の視察で占い師に言われて、傷ついた表情を一瞬しましたわ。」

秋蘭「ああ、余程衝撃的だったのだろうな。」

栄華「はい。お兄様は常に私達だけじゃなく、周りの人達の事を考えているお方です。お兄様は、あのような酷いお人ではありませんわ。」

秋蘭「栄華……。」

栄華「だから、もしお兄様が傷ついたなら、私が癒して差し上げ、味方になるつもりですわ。」

秋蘭「それは私も同じだぞ、栄華。」

栄華「秋蘭さん……?」

秋蘭「私は、初めて会った時から純様しか見ていない。私も、純様の側を離れないつもりだ。私は純様がいなくなったら、もう生きていけない。そうなったら、私は命を絶つつもりだ。純様のいない世界に、生きる価値がないからな。」

栄華「秋蘭さん、それは私も同じですわ。」

秋蘭「だから栄華、華琳様もそうだが、純様を公私共に支えていこうではないか。」

栄華「はい、秋蘭さん！」

そして、お互い純の寝顔を堪能し、頬に口付けをしたのだった。そして、両手で純の腕を抱き、匂いに包まれながら眠る幸せを噛みしめながら眠りについたのであった。

20話

謁見の間

春蘭「……というわけです。」

華琳「そう……やはり、黄色い布が。」

その日の軍議は、暴徒の鎮圧から帰ってきた春蘭の報告で始まった。

純「てことは、秋蘭の方もか？」

秋蘭「はい。こちらの暴徒達も同じ布を携えておりました。」

純「そつか……。そういや、俺が前に鎮圧した奴らも、黄色い布を巻いていたな。」

稟「そうでしたね。」

風「……。」

華琳「桂花。そちらはどうだった？」

桂花「は。面識のある諸侯に連絡を取ってみましたが……。どこも我が□州と同じく、黄色い布を身に付けた暴徒の対応に手を焼いているようです。」

華琳「具体的には？」

桂花「ここと……ここ、それからこちらも。」

そう言つて、桂花は広げた地図の上に丸石を置いていく。

桂花「それと、一団の首魁の名前は張角というらしいのですが……正体は全くの不
明だそうです。」

栄華「正体が分かりませんか？」

桂花「捕らえた賊を尋問しても、誰一人として話さなかつたとか。」

純「稟達も同様か？」

稟「はい。私も捕らえた賊を尋問したのですが、桂花と同様でした。」

風「風もですね。」

純「そつか……。」

春蘭「……ふむ。剣を振り上げれば逃げ回るクセに、そこだけは口を割らんのか。さ
して忠義が厚いとも思えんが。」

その時、

一刀「黄巾党……。」

一刀が話を聞いていて、その言葉を言った。

秋蘭「知っているのか、北郷？」

一刀「名前だけはな。一応……。」

それを聞いた華琳は

華琳「なら、それ以上は言わなくて良いわ。」

と言った。

華命「えーっ。何でっすか。一刀っち、色々知ってるんじゃないんすか？」

一刀「ホントに、黄巾党に関しては名前しか知らないんだよ。・・・そんな正確でもない知識を出しても、桂花達を混乱させるだけだろ？華琳の言う通りだよ。」

桂花「ええ。裏付けの無い情報など、寧ろ害悪でしかないわ。」

稟「私も桂花の意見に同感です。」

風「風もですわ。」

華琳「そうね。そんなあやふやなもの、占い師の予言と変わらないわ。」

一刀「こないだは占い師の言葉に笑ってたじゃないか。」

華琳「あれは私と純の問題だもの。外れたところで、笑い話にしかならない。：：けれど、国の問題を占いで解決させるようになってはお終いよ。」

一刀「成程・・・了解。」

華命「うーっ。一刀っちだけ分かってて、ずるいっすー。」

一刀「俺だつて分かってない事ばかりだよ。そもそも俺の知ってる歴史は、華琳も春蘭も華命もみんな男だしな・・・。」

すると、

春蘭「何だそれは。私が男だと……?」

春蘭「私が男だと……男だと……男なら……はっ!男なら、華琳様と……!」

春蘭がそう言つて何かを想像していた。

一刀「言つとくけど、春蘭が男の世界は華琳も男だからな?」

春蘭「……何だそれは!それでは意味が無いではないか!!ああ、私の夢が一瞬で……」

しかし、現実を聞いた春蘭は涙を流した。

一刀「何を期待してたんだよ……」

春蘭「そんなもの決まっているだろう!」

一刀「言わないで良いよ。分かつてるから。」

すると、

栄華「ち、ちよつと……北郷さん。一つ宜しくて?」

栄華が一刀に尋ねた。

一刀「何?どうかした?」

栄華「あの……もしかして、その……あなたの知っている世界とやらでは、ま

さか、まさか……」

一刀「……ああ。それは……」

一刀（そうか。男嫌いの栄華だと、別の世界とはいえ自分がどうなっているかは大問題か・・・。）

栄華「それは・・・」

一刀「・・・想像に任せるよ。」

栄華「ちよつと!!それでは生殺しですわ!」

一刀「だつて栄華、本当の事言つたら絶対大変な事になるだろ。」

栄華「・・・その時点で答えは出ているのも同じではありませんの。」

柳琳「ほら、栄華ちゃん。大丈夫だから、落ち着いて・・・」

一刀「別に栄華本人じゃ無いから。別の世界の、別の歴史の人だから。」

栄華「それでもその世界の私なのでしょう!だつたら、お兄様は!!」

純「そう言えば、俺も気になるな。一刀、お前の知つてる歴史では、俺はどうなんだ?」

その質問に、

一刀「ああ。純も男だよ。」

と一刀は言つた。すると、

栄華「・・・ああ、何だかめまいが・・・。私の夢が・・・。」

とめまいを起こしていた。

純「そっか……。」

一刀「けど、純は華琳の弟ではなく、華琳の息子だったな。」

純「そ、そうなのか……。」

華琳「あら。そうなのね。なら純、私の事、『母上』って呼んでも良いのよ?」

純「姉上、それは遠慮します。」

華琳「あら残念。まあともかく、不要な知識は、人を不幸にするでしょう?」

華琳「あー。何か分かった気がするつす。」

華琳「まあ、敵を呼ぶにも名前が必要だわ。黄巾党という名だけはもらっておきましよう。それで皆、他に新しい情報はないの?」

秋蘭「はい。これ以上は何も……。」

春蘭「こちらありません。」

華琳「ならば、まずは情報収集ね。その張角という輩の正体も確かめなければ……」
その時、一人の兵士が慌てて入ってきた。

兵士A「会議中、失礼致します!」

純「どうした!」

兵士A「はっ!南西の村で、新たな暴徒が発生したと報告がありました!また黄色い布です!」

言い終わったとき、皆の顔が引き締まり、真剣な表情になった。

華琳「休む暇もないわね。・・・さて、情報源が早速現れたわけだけれど、純、今度は誰を行かせる？」

純「そうですね・・・」

すると、

季衣「はいっ！僕が行きます！」

季衣が真つ先に手を上げた。

純「季衣か・・・」

しかし、純はすぐに決断しなかった。

一刀（戦に関しては即断即決の純なのに、珍しいな。華琳も特に干渉しないみたいだし・・・。）

春蘭「・・・季衣。お前は最近、働き過ぎだぞ。ここしばらく、ろくに休んでおらんだろう。」

季衣「そんなの平気です！それに、また知らない村が襲われてるんですよ？せつかく僕、そんな困ってる人達を助けられるようになったのに・・・。」

香風「なら、シヤンが行く。」

華命「だったらあたしも行くっすー！」

純「そうだな。今回の出撃、季衣は外そう。確かに最近の季衣の出撃回数は多すぎる。」

季衣「どうしてですか、春蘭様っ！僕、全然疲れてなんか無いのに・・・！」

純「季衣。お前のその心は貴いものだ。けど、自らの力を過信しては、いずれ足を掬われるぞ。」

季衣「そんなこと・・・ないです。」

華琳「季衣。純の命令に従いなさい。」

季衣「・・・でも、みんな困ってるのに・・・。」

華琳「そうね。けれど、目の前の百の民を救うために貴女が命を投げ打つては、その先救えるはずの何万という民を見殺しにする事にも繋がるの。・・・分かるかしら？」

季衣「だったらその百の民は見殺しにするんですか！」

すると、季衣の発言に、

華・純「「するわけないでしょう！／＼ねーだろーが！」」

季衣「・・・っ！」

華琳と純が覇気のこもった力強い一声を出した。その一声に季衣だけでなく、その場にいる皆が身を縮ませる程だった。

春蘭「季衣。お前が休んでいる時は、私達がその代わりにその百の民を救ってやる。」

だから、今は休め。」

季衣「ううー……。」

華琳「今日の百人も助けるし、明日の万人も助けてみせるわ。その為に必要と判断すれば、無理でも何でも遠慮なく使つてあげる。それは純も同じ事よ。……けれど今はまだ、その時ではないの。」

純「それに我が軍がいかにかに人手不足と言つても、お前一人に全てを背負わせる程ではねーよ。そうだろ？」

すると、

華命「おいつす！」

香風「……うん。任せて。」

華命と香風が返事をした。

季衣「……。」

華琳「純。編成を決めなさい。」

純「御意。……では秋蘭、柳琳。今回の件、お前達が行つてくれ。」

香風「えー。」

華命「なんでつすかー！今、あたしと香風が行く気まんまんだったつすよー!?」

しかし、華命と香風は不満を漏らしたのだった。

桂花「今回の出勤は、戦闘よりも情報収集が大切になってくると華琳様もおっしゃってたでしょ。……二人とも、気が付いたら突撃してるじゃない？」

そう言つて、桂花は純の選定のフォローをした。

香風「……そんなことない。命令なら、ちゃんとする。」

華侖「そ、そうっすー！」

一刀「目が泳いでるぞ、二人とも。」

純「これで決まりだ。秋蘭、柳琳。くれぐれも情報収集は入念にな。」

秋蘭「は。ではすぐに兵を集め、出立致します。」

季衣「秋蘭様！柳琳様！」

柳琳「大丈夫よ。私達が、季衣さんの分までしっかり村の人を守ってくるから。」

季衣「はい……。よろしくお願いしますっ！」

秋蘭「うむ。私達にしかと任せておけ。」

そして、秋蘭と柳琳は出立をしたのだった。

城壁の見張り台

秋蘭達の出発を見送ろうと、城壁の見張り台に行つた一刀だったが、既に先客がいた。

一刀「ここ、良いか？」

季衣「あ、兄ちゃん……。」

一刀「何？落ち込んでるなんて、季衣らしくないぞ。」

季衣「僕だって、落ち込む時くらいあるよ……。」

そう言い、季衣は見張り台の縁に腰掛けて、足をブラブラさせた。

一刀「さっきの事か？」

季衣「うん……。僕、全然疲れてなんか無いのに……。そりゃ、ご飯はいつもの

倍は食べてるけどさ。」

一刀「胃もたれとかしないのか？」

季衣「……にや？」

一刀「いや、分かんないなら、良い。」

季衣「変な兄ちゃん。」

一刀「でも、華琳達と言うように、今が無理をする時じゃないのはホントだぞ？」

季衣「もう。兄ちゃんまでそんな事言うー！」

一刀「華琳も純も春蘭も、みんな季衣の事が心配なんだよ。勿論、俺もな。」

季衣「うう……そりゃ、分かってるけど……」

一刀「今は、黄巾党と張角の正体を突き止める為の、情報を集める時だ。季衣に全力で働いて貰う為には、そいつらの正体が分かった後さ。」

季衣「うん……」

一刀「だから今は、休める時はちゃんと休んで、こんな騒動を起こした奴をやっつける為の力を、溜めといってもらわないとな。」

季衣「……分かったよ。」

そう答えた季衣は、ひよいと城壁の上に飛び乗った。

一刀「おい。危ないぞ、季衣。」

季衣「大丈夫だよー。それに今、何て言うか、力が湧いてきて、我慢出来ない感じなんだ！」

そう言い、季衣は城壁の上で歌を歌った。

一刀「……へえ。」

その歌声は、決して上手くは無かったけど、聞いてるだけで元気が出てくるような歌声だった。

その際、柳琳率いる虎豹騎が、一刀達を見上げて手を振っていた。

一刀「良い歌だな。何て言う歌？」

季衣「分かんない。ちよつと前に街で歌つてた旅芸人さんの歌なんだけどね。確か、張角さんとか……」

その時、それを聞いた一刀は

一刀「……は？張角つて……」

季衣「兄ちゃん！」

一刀「ああ、季衣は華琳と純に言つてきて！俺は秋蘭達に伝えてくる！」
そう言つて、秋蘭達に伝えに行つたのだった。

謁見の間

秋蘭達が討伐から戻つた数日後、その夜遅くに主要なメンバーが集められて報告会が開かれていた。

秋蘭「北郷に言われた件を確かめてきましたが……今日の村にも、三人組の女の旅芸人が立ち寄つておりました。」

季衣「はい。僕が見た旅芸人さんも、女の人の三人組でした。姉妹だつて言つてました。」

柳琳「村の方達が聞いた歌も季衣さんが城壁で歌っていた歌と同じでしたから、同じ方とみて間違いないかと。」

桂花「季衣の報告を受けて、稟と風と一緒に黄巾の蜂起があつた陳留周辺のいくつかの村にも調査の兵を向かわせましたが……大半の村で、同様の目撃例がありました。勿論、歌も。」

華琳「そう。その旅芸人の張角という娘が、黄巾党の首魁の張角という事で間違いなさそうね。」

春蘭「これで、張角とやらの正体は判明か……。」

純「しかし、奴らの目的が知りたいですね。」

華琳「ええ、そうね。」

一刀「目的、ねえ……。旅芸人の歌手つていうなら、本人はただ楽しく歌っただけで、周りが暴走してるだけ、とかだったりして。」

春蘭「そんな下らん理由で暴れているのか!？」

桂花「……胡散臭いにも程があるわよ。」

一刀「分かんないよ。ただの俺の予想だよ。……予想は、占い師の予言とは違うよな?。」

華琳「さして変わりはないけれど、妄言よりはマシね。」

純「仮にそうだったら、余計タチがわりーぞ。大陸制覇の野望でも持っていた方が、俺が遠慮無く叩き潰してやれるんだけどな。」

一刀「叩き潰す事前提かよ……。」

純「その手の象徴の潰し方を間違えると、後で奉られてしまうんだよ。そうなのは、それこそ手が付けらんねーんだよ。」

一刀「ああ……何とか様の遺志を継ぐぞ、つてやつか。」

一刀「確かにそういうのを持ち出されると厄介だな……。」
すると、

春蘭「何だそれは。そんなものが力になるとは思えんが？」

と春蘭はそう言った。

一刀「そうでもないよ。もしもの話だけどさ……春蘭。」

春蘭「おう。またもしもか。貴様はもしもばかりだな。」

一刀「もしもじゃないと春蘭が分かんないからだよ……で、もしも、華琳が志半ばに倒れたとするだろ？」

春蘭「何だど!?何をいきなり不吉な話を……。」

一刀「だから、もしもの話だつてば……それで華琳が『純を支えて覇業に貢献しなさい』つて春蘭に言い残したらどうする？」

春蘭「そんなお言葉を託されたら、純様を支えないわけにはいくまい。我が命燃え尽きるまで、華琳様のお言葉に従うまでだ！」

一刀「……ほら。熱狂的。」

栄華「……ですわね。」

春蘭「だが、当たり前ではないか！華琳様が遺されたお言葉だぞ。側には純様がいて、そして華琳様は私の手を握って、最後の力で伝えて下さったお言葉を……ぐすつ、聞き届けぬわけには……」

と春蘭は泣き始めた。

一刀「え、ちよつと、春蘭!？」

一刀「何かシチュエーションが盛られてないか？俺、そこまで言っていないぞ。つていうかそれ、もしかしてマジ泣き……!？」

秋蘭「姉者、あくまでも仮定の話だからな。華琳様はお元気だぞ。」

春蘭「わ、分かっておるわ……。だが、もしもの事でも考えたら……考えたら……」

柳琳「大丈夫ですから、春蘭様。ご安心なさつて。」

栄華「全くもう。北郷さんのせいですわよ。」

一刀「うう……ごめん、春蘭。」

純「……いい加減泣き止め、春蘭。お前の働き次第で、その様な運命はいくらでも

覆せるぞ。」

華琳「そうよ、春蘭。」

春蘭「そ、そうですね。：ひつく。：私が何としても華琳様をお守りすれば。：」

一刀「悪かったよ、春蘭。ほら、これで涙を拭いて。：。」

春蘭「うむ。北郷にもみつともない所を見せたな。：ぐすぐす。：。ちーん。」

春蘭「話の腰を折ったな、すまなかつた。手拭いは返すぞ。」

しかし、鼻水だらけだったので

一刀「いや、それはもう良いんだけど。：。後で洗って返して。」

と春蘭に言った。

華琳「誰がどんな思いで立ち上げたにせよ、純の言う通り、黄巾党とやらは叩き潰すしかないわ。最悪の事態を招かないよう、首魁の件もきちんと処理してね。」

一刀「。結局叩き潰すんだな。」

華琳「夕方、都から軍令が届いたのよ。早急に黄巾の賊徒を平定せよ、とね。」

柳琳「あの。：。今頃ですか？」

華琳「ええ、今頃よ。」

純「クソツ、遅すぎだぞ!!どれだけ民が苦しんだと思ってるんだ!!」

それを聞いた純は、怒りの声を上げた。

華琳「落ち着きなさい、純。あなたも、朝廷の事は私と同様知っているはずよ。」
すると、華琳は純をなだめさせた。

純「・・・はっ。申し訳ございません、姉上。」

それを聞いた純は、怒りを静めて謝罪した。

一刀「それが今の朝廷の実力、つて事か・・・。」

香風「朝廷のそれは、今に始まった事じゃない。・・・でも、する事は一緒。」

一刀「けど今のままじゃ、いつまで経つても終わらないだろ。敵の本隊とか大陸制覇の大軍団とか、分かりやすいのが出てきてくれられないんだけど。」

栄華「それも無理そうですわね・・・。組織化されているわけでもないようですし、もし北郷さんの言う通りなら、その女芸人を捕まえない限りこの騒ぎは終わりませんわ。」

華琳「ええ。・・・地道に足取りを追うしかないか。」

その時、

華命「華琳姉え、純兄、大変っすー！」

夜の警備に回っていたはずの華命が慌ててやって来た。

華琳「どうしたの、華命。」

華命「ええっと、陳留の隣の郡で、また黄色い布の人が出てきたって報告が届いたっす！それも、沢山！」

香風「沢山……？」

華侖「えーつと、今までに無い規模で、街に近付いてるって！」

華琳「……あら。今日は一刀の予言が良く当たる日ね。占い師にでもなった方が良
いのではない？」

一刀「やめとくよ。そうなったら俺の言う事なんかもつと聞かなくなるだろ？」

一刀（普段から聞いた試しもないけどさ。）

純「まあいいや。桂花、今使える兵はどれほどある？」

桂花「それが……ここ暫く出動が重なってしまいましたので、当直の兵くらいしか……」

桂花「今すぐ招集を掛けるにしても、出立は早くとも早暁になるかと。」

純「……おせーな。俺の隊も同じだな？」

桂花「はい。純様の仰るとおりです。」

栄華「それに、糧食も足りません。こちらにも急ぎ準備するにしても、同じ頃かもう少し掛かるかと。」

純「しゃーねーな。ならば、出来るだけ急いでくれ。」

すると、

柳琳「お兄様。私の隊なら、まだ旅装を解いている最中です。ご命令を戴ければ、すぐに出立できます。」

秋蘭「私の隊も同じです。糧食も残っていますから、先遣隊として動く分には問題ありません。」

柳琳と秋蘭が動けると言ってきた。

純「柳琳と秋蘭か……。」

桂花「恐らく連中は、今までの散発的なものではなく、複数の暴徒が寄り集まったものだと思います。いくら先遣とはいえ、遠征から戻ったばかりのお二人では厳しいかと。」

一刀「いつもみたいで、烏合の衆じゃないの？」

桂花「それは見てから判断する事よ。最初から烏合の衆と侮れば、万が一の時に足元を掬われるわ。」

桂花「人が集まるという事は、集まろうとする意志か、集めようとする意志が働いていると見るべきよ。集団同士が合流するなら、尚更ね。」

一刀「……はあ？」

一刀（なんか哲学とか、禅問答みたいだな。）

桂花「一つ二つの集団が合流しただけなら、ただの偶然でしょう。けれど、それが数十の規模となれば……それは最早意思がなければ起こり得ない事。」

純「つまり……。」

秋蘭「……指揮官がいる、という事か。」

純「そういうことだな。」

華琳「ええ。仮にいなかったとしても……規模が大きくなれば、それだけの能力を持つ者が一人や二人は混じっているものよ。」

華琳「特に今回は、初めから張角という芯があるわ。仮に張角自身が無能だとしても、それも祭り上げようとする輩がいずれ必ず出てくる。」

それを聞いた一刀は

一刀「……俺達みたいにか？」

と例えるように言った。

華琳「限りなく不愉快な例えだけれど、そういうことよ。」

純「そんな未知数の連中を前に、秋蘭と柳琳だけを向かわせるわけにはいかねーよ。」

その時、

季衣「純様！」

今まで黙っていた季衣が手を上げ、

純「……。」

季衣「純様！僕も行きます！」

と言った。

春蘭「……季衣！お前は暫く休んでおけと言っただろう！」

季衣「けど、華琳様は仰いました！無理すべき時は、僕に無理して貰うって！それに百人の民も見捨てないって！」

香風「純様。だったら、シャンも行く。……季衣だけ、戦わせられない。」
すると、香風も名乗りを上げた。

純「……。」

柳琳「お兄様！でしたら、それは私達も同じです。」

華命「だったら、あたしも一緒に行くっす！」

それに続いて、柳琳と華命も名乗りを上げた。

純「柳琳……華命……。」

香風「……純様。」

季衣「純様！」

そして、

純「……こいつらの言う通りですね、姉上。」

華琳「ええ、そうね。」

季衣「純様……。」

華琳「けど、どうするかは純、あなたに任せるわ。」

純「はっ。．．．ならば季衣。秋蘭と柳琳の隊を率いて、先遣隊としてすぐに出発しろ。香風、お前も出られるか？」

香風「勿論、平気。」

季衣「はいっ!．．．って、えっ!?僕が秋蘭様と柳琳様の隊を率いるんですか!？」

純「二人は討伐任務から帰ったばかりだから、指揮まで任せたくねーんだ。やれるな?季衣。」

季衣「あ．．．は、はい．．．。秋蘭様、柳琳様、宜しくお願いします。」

秋蘭「うむ。よろしく頼むぞ、季衣。」

柳琳「一緒に街の人を救いましょう。」

季衣「へへ．．．っ、なんか、くすぐったいです．．．。」

純「補佐とは言っても、指揮の経験は他の皆の方が豊富だ。俺達が追い付くまで、秋蘭達の助言には必ず従え。良いな?」

季衣「分かりました!」

華侖「純兄、あたしは!?!あたしは行っちゃ駄目なんすか?」

純「お前が出たら、本隊の準備が手薄になる。ここは柳琳達を信じろ。」

華侖「うう．．．。柳琳、すぐ追い付くつすよ!」

柳琳「うん。戦だからお兄様の言うことはちゃんと聞いてね、姉さん。」

純「春蘭と華命はすぐに本隊の準備を。栄華と桂花は、城下に降りて糧食の調達に向かえ。」

純「夜明けを待つてはいられねー。夜が明けるまでは、本隊も出陣させるぞ。良いな！」

春・侖・栄・桂「はっ!!!」

華琳「今回の本隊は私が率いるわ。けど、いつも言っている事だけれど戦では純の命令に従うように。以上、解散！」

そして、皆それぞれ準備のためその場を後にしたのだった。

一刀（えーつと・・・）

・・・一刀を除いて。

華琳「・・・どうしたの？」

一刀「いや、俺は何も言われなかったから・・・どうしたら良いのかな、と。」

華琳「寝ておけば？」

一刀「・・・良いの？」

華琳「良いも何も、する事がないなら体を休めておきなさい。私もひと眠りするわ。」

一刀「そ、そんなもんなのか・・・？」

一刀（みんな夜を徹しての仕事になるだろうってのに、手伝わなくて良いのか

な・・・。

華琳「他の皆は夜を徹して作業する事になるでしょう。恐らく馬上で休む事になるから、その間、事態に即応出来る人間が必要になるわ。」

一刀「・・・それは華琳か純の役目じゃないの？」

華琳「総大将は私だけど、実質我が軍の指揮をしているのは純よ。けれど、私の注意が及ばない時は純がやっていたように、純の注意が及ばない時は一刀に補って貰う事になるかもしれない。」

一刀「お、俺!?でも俺は・・・知ってるだろ、華琳だつて。」

華琳「勿論。ただ・・・戦場で武器を振るう才と、指揮をする才は、違うものよ。もつとも、純はその両方を持っているけど。」

華琳「あなたの働きぶりを見る限り、武の才は見る影もないわ。それは事実ね。」

一刀「お、おう・・・。」

華琳「けれど・・・指揮をする力に関しては、純には遠く及ばないけど、少なくとも全くない訳では無いわ。」

一刀「・・・ないわけじゃない、か。」

華琳「豫州に出向いた時も、純のお陰とは言え、次に繋がる手を打ったでしょう?」

一刀「そうなのかな?」

華琳「何を自身の才にするかは、自身が決める事よ。私は国の主として、純は武人として指揮官としての才があると感じたように。けど、私が何を言っても、貴方がそれを信じなければ私の妄言……それこそ、貴方の天の知識や占い師の言葉と変わらないわ。」

一刀「命令してくれれば簡単なのに。」

華琳「私の命令一つで全てが思い通りに進むなら、本当に簡単なだけだね。それは純も同じ事を思っているわ。けど、残念ながら、最後に何とかするのは己自身よ。」

一刀「……そうだな。やれって言われてやれるなら、誰も苦労はしないか。」

華琳「まあ良いわ。ともかく今は人手が足りないのだから、今回はあなたにも季衣のように働いて貰う。その時に生あくびをしているようでは、己の首が飛ぶわよ。」

一刀「……それ、飛ばすのは敵じゃなくて春蘭か純じゃないの？」

華琳「嫌なら飛ばされないようにする事ね。特に春蘭には、ね……私は少し眠ってくるわ。」

一刀「俺も寝る事にする……。」

すると、

華琳「ふふっ……私の閨に来る？」

と華琳が一刀に冗談を言った。

一刀「……この非常時に、そういうドキツとする冗談は勘弁してくれよ。」

華琳「・・・ふふふ。なら、さっさと寝てしまいなさい。」
一刀「はいはい。」

しかし、逆に寝られなかった一刀であった。

21話

本隊

春蘭「急げ急げ！急いで先遣隊に合流するぞ！」

一刀「……馬上で休むんじやなかったのか。」

先遣隊を追って、陳留を出立してから数日が経った。春蘭は初日からこのテンションだった。

華命「そんなことしてられないっす！柳琳や季衣だって、もう戦ってるかもしれないんすよ！進め、進むっすー！」

華命も春蘭同様テンションが高かった。……寝てないからかな？

純「お前達の気持ちは分かる。だが、そんなに急がせてしまったら、戦う前に疲れてしまうぞ。」

華琳「そうよ、純の言う通りよ。」

春蘭「う、うう……。純様あ、私だけ、先遣隊として向かつては駄目ですか？」

華命「だったら、あたしも行きたいっす！純兄！」

純「駄目だ。目と鼻の先ならまだしも、今の位置で隊を分けても効果は薄い。」

一刀「それに柳琳と約束しただろ。純の言う事をちゃんと聞くつて。」

これには

華命「ううう……。」

華命も黙つてしまった。これが、ここ数日のやり取りだった。

桂花「純様。秋蘭から報告の早馬が届きました。」

純「報告しろ。」

桂花「既に敵部隊と接触したそうです。張角は確認していないようですが、予想通り敵は組織化されており、並の盗賊よりも手強いだろうとの事。」

桂花「……くれぐれも余力を残して合流して欲しいそうよ、春蘭。」

春蘭「ううう……。」

一刀（流石秋蘭。姉さんの性格を良く分かつてる。）

純「数はどれ程だ？」

桂花「目測では街の兵と先遣隊を合わせたよりも多い模様。迂闊に攻撃はせず、市街に籠城して時間を稼ぐそうです。」

これには

純「そうか。流石秋蘭だ。」

華琳「ええ、賢明な判断ね。」

純と華琳は秋蘭の判断を褒めた。

一刀「だつてさ、春蘭。秋蘭の指揮なら籠城すれば十分保つだろうし……行軍で無駄な力を使わないようにしようぜ。」

春蘭「……うむう、仕方ない。」

純「張角本人が指揮を執っているのかと期待したんだが……別の指揮者がいるようだな。厄介なことになった。」

華琳「ええ、そうね。」

一刀「張角には、そういう優れた指揮官さえ取り込む才能があるって事？」

一刀（カリスマってやつだっけ……？確かに本人一人が凄いより、凄い人を沢山部下にしている方が遙かに怖いよな。）

華琳「あら、良く分かっているじゃない。」

一刀「……良い見本をずっと見てるしなあ。」

桂花「ちよつと、誰と張角を比べてるのよ。」

一刀「それはまあ……内緒？」

華琳「その才を持ちながら野心を持ったか、暴走しているだけなのか分からないけれど……面白い相手ではあるわね。」

純「あはは……。また姉上の……」

栄華「そうですね、お姉様。柳琳達の命が掛かっているのに、悪い癖ですわよ。」

華琳「強い相手なら、気持ちも昂ぶらない筈がないでしょう。純も本当はそうでしょう？」

その発言に、

純「まあ……。分からなくも無いですね。」

と言った。

華命「もう……。不謹慎つすよー。」

栄華「まさか……。張角達を部下にしたいなどは仰いませぬわよね、お姉様。」

華琳「さあ？それは張角の人となり次第。利用価値のない相手なら、舞台から消えて貰うだけよ。」

その時、

兵士A「曹彰様！曹彰様はいらっしゃいますか！」

純「どうした！」

春蘭「むう。貴様は秋蘭の部下の……」

秋蘭の兵がやって来た。

兵士A「はっ！許緒先遣隊、敵軍と接敵！戦鬪に突入しましたっ！」

華命「え、籠城して時間を稼ぐんじやなかったんすか!？」

純「状況が変わったんだろう……。どうなっている!」

兵士A「籠城で時間を稼ぐつもりでしたが、初手から向こうの大攻勢が始まり……。至急、援軍を求むとの事!」

一刀「え……。?じゃあ、今頃……。」

春蘭「馬鹿を言うなっ!」

純「うむ、秋蘭の事だ。苦戦すると読んで、あらかじめ遣いを出したんだろう。」

華琳「ええ、恐らく。」

兵士A「仰るとおりです。ですが自分が出された段階で、既に防壁には敵の兵が殺到し……。恐らく、今頃は」

純「余力を持つてとはいられなくなつたな。」

華琳「そうね。純、貴方が先に救援に向かいなさい!到着したときの判断は任せるわ!」

純「はっ!ではこれにて。行くぞ、稟、風!」

稟「はっ!」

風「はい!」

純「皆の者、よく聞け!この先で我々の仲間が戦っている。仲間を助け、賊を倒すぞ」

！」

黄鬚隊兵士「「おおーっ!!」」

純「行くぞ!」

そして、純は黄鬚隊を率いて先に行った。

一方秋蘭達は

季衣「秋蘭様!西側の防壁、三つめの防柵まで破られました!」

秋蘭「・・・ふむ。残りの柵は後二つか・・・それでどのくらい保ちそうだ?李典。」

真桜「せやなあ・・・。応急で作ったもんやし、後一刻保つかどうかって所かなあ。」

秋蘭「・・・微妙な所だな。純様達本隊が間に合えば良いのだが。」

柳琳「きつと大丈夫です。姉さん達は、必ず約束を守ってくれますから。」

凧「しかし、夏侯淵様達がいなければ、ここまで耐えることは出来ませんでした。あ
りがとうございます。」

柳琳「それは私達も同じです。あなた達義勇軍の皆さんがいなければ、相手の数に押

されて保たなかったはずですから。」

凧「いえ、それも夏侯淵様と曹純様の指揮があつてこそ。それに、彼女がいなければ、私達だけでは死んでいました。」

そう言つて、後ろにいる彼女に振り返る。すると、そこには綺麗で長い黒髪をして、右手には立派な圓月刀を携えていた女武者がいた。

??「そんな事はない。夏侯淵殿と曹純殿の指揮と楽進達の武勇があつてこそだ。」
とその者は言つた。

凧「いざとなれば・・・自分が討つて出て時間を稼ぎます。後の事はお任せ致しますので、どうか・・・」

その時

季衣「そんなの駄目だよっ！」

凧「・・・っ！」

季衣が怒鳴つたのだつた。

季衣「そういう考えじゃ・・・駄目だよ。絶対にもうすぐ春蘭様達が助けに来てくれるんだから、最後まで頑張つて守り切らないと！」

真桜「・・・せやせや。突つ込んで犬死にしても、誰も褒めてくれへんで。」

??「そうだと楽進。ここで死んでは、何も意味ないぞ。」

凧「……うむむ。」

季衣「今日百人の民を助けるために死んじやったら、その先助けられる何万の民を見捨てる事になるんだよ。分かった？」

凧「……肝に銘じておきます。」

??「……ほうつ。」

これには、楽進は季衣の言葉を受け入れ、黒髪の女武者は感心した感じだった。

秋蘭「……ふふっ。」

季衣「あ、何がおかしいんですか、秋蘭様ー！」

秋蘭「いや、昨日あれだけ姉者や純様に叱られていたお前が、一人前に論しているのが……おかしくてな。」

季衣「うう、ひどーい。」

その時、

沙和「東側の防壁が破られたのー！」

香風「向こうの防壁は、後一つー。」

于禁と香風が慌てた様子でやって来て、東側の防壁が壊されたことを報告に来た。

真桜「……あかん。東側の最後の防壁で、材料が足りひんかつたらかなり脆いで。す

ぐ破られてまう！」

秋蘭「仕方ない。西側は最低限の人数を残し、残る全員で東の侵入を押しとどめられない。」

凧「では、先陣は私が切ります。私の火力を集中させれば、相手の出鼻は挫けるはずです！」

柳琳「でしたら私の隊が続きます。それで、一度は敵を退けられるはず……しばらくは時間を稼げるでしょう。」

秋蘭「……そうだな。なら柳琳、そちらの指揮は任せる。」

柳琳「秋蘭様もお気を付けて。では、楽進さん。」

凧「はっ！」

季衣「秋蘭様。僕と香風で西側を押し留めます。」

香風「大丈夫。お兄ちゃんが来るまで、頑張れる。」

秋蘭「ああ。……皆、ここが正念場だ。力を尽くし、何としてでも生き残るぞ！」

??「無論だ！」

沙和「分かったの！」

真桜「おう！死んでたまるかいな！」

その時、

凧「か……夏侯淵様！外に砂煙が見えます！」

外に砂煙が見えるとの報告を受けた。

真桜「なんやて！」

沙和「えー……また誰か来たの？」

秋蘭「敵か！それとも……」

すると、

柳琳「お味方です！青の旗色に曹の旗印！お兄様です！」

そう柳琳は報告したのであった。それを聞いた兵士達は、

兵士B「おお！曹彰様だ！」

兵士C「曹彰様が来たからにはもう大丈夫だ！」

気力を取り戻し、士気が上がったのであった。

黄鬚隊

純「稟、風。ちゃんと付いて来いよ。」

稟「はっ！」

風「はい〜！」

純「突破するぞ！」

そう言い、西門に向かった。黄巾党はそちらに目を向けたが、

純「邪魔すんじゃない〜!!どきやがれ〜!!」

純の圧倒的な武勇と黄鬚隊の攻撃力に、周りは死体のみが転がった。

街中央

純「秋蘭！柳琳！香風！季衣！」

秋蘭「純様!!」

柳琳「お兄様！助かりました！」

香風「純様ー。」

季衣「純様！」

純「お前達、ここまでよく耐えたな。」

秋蘭「彼女らのおかげです。」

純「この者か？お前達、よくこの村を守ってくれた。俺は曹彰、字は子文と言う。お前達は？」

その時、

純「あつ。」

凧「あつ。」

純は凧の顔を見て、お互い驚いた顔をした。

秋蘭「純様も驚きましたか。以前街の視察でお会いになった者です。」

純「すると、皆義勇軍か。」

凧「はい。自分は楽進、字は文謙と申します。……我らは陽平義勇軍。黄巾党の暴

乱に抵抗するため、こうして兵を挙げた者です。」

真桜「ウチは李典、字は曼成や。」

沙和「沙和は于禁、字は字は文則なのー！」

純「うむ。ところで、お前は何て言うんだ？」

すると、純は黒髪の女武者に尋ねた。

愛紗「わ、私は関羽、字を雲長と申します！」

関羽と申す者は、緊張しながら自己紹介した。

純「はは。そう緊張するな。」

それを見た純はそう言つて、関羽の肩に手を置いた。

愛紗「は、はい!!」

純「皆。後半刻ほどで、姉上達の本隊もやつて来る。それまでに、何としても持ち堪えるぞ。」

秋蘭「はっ!!」

柳琳「はい!!」

香風「うん!」

季衣「分かりました!」

純「俺は関羽と一緒に西側に行くから、そちらは任せたぞ。」

秋蘭「御意!!」

柳琳「分かりました!!」

純「稟と風はここで補佐をしてくれ。」

稟・風「御意。」

純「じゃ、行つてくる。来い、関羽!!」

愛紗「はっ!!」

その時、

秋蘭「純様!!どうかご無事で・・・。」

そう言われたので、純は右手を掲げて行ったのだった。

西側

純「よし、矢を放て!!」

純の命令で、多くの矢が放たれた。それによつて、賊が多少怯んだのであった。その様子を見た純は、鞘から刀を抜き、

純「敵に一当てする。突撃しろ!!」

兵士「こおおーっ!!」

純「関羽も、思いつきり暴れる。しかし、状況を見て一度退くからな。」

愛紗「はっ!!」

そう言つて、純達は突撃した。その時の純は、最初に突撃したのと同様に純「全部ぶつ殺してやるー!!」

黄巾党兵士A「うわーっ!!コイツ、つえーぞ!!」

黄巾党兵士B「に、逃げろー!!黄鬚には敵わねーっ!!」

圧倒的な武勇を見せ、その勢いで敵を斬つていった。その動きは、言動とは逆でまる

で流麗な舞の如く刀を振るっていった。

愛紗「これが黄鬚と呼ばれし曹彰殿の武勇……。」

それを見た関羽は敵を青龍圓月刀で敵を斬りつつも見とれていたのだった。

その後、華琳達の本隊が到着し、黄巾党は壊滅的被害を受けて、撤退したのだった。

春蘭「純様！秋蘭！季衣！ご無事ですかつ！」

純「ああ！大丈夫だ！」

秋蘭「危ないところだったがな……まあ見ての通りだ。」

季衣「春蘭様ーっ！」

華命「柳琳！柳琳はいるっすかー！」

柳琳「姉さん！」

妹の様子を見た華命は、

華命「るー!!」

柳琳に抱き付いたのだった。

柳琳「もう、姉さんったら。そんなに心配しなくても大丈夫だから。」

華命「お姉ちゃんなんだから、心配するに決まってるっすー！無事で良かったっすー

！うわーん！」

香風「お兄ちゃん……。」

一刀「ああ。香風も無事で良かった。」

香風「・・・うん。シャンも皆も、沢山頑張った。」

と香風は一刀に抱き付いた。そして、一刀はそれを撫でてやった。

そして、華琳もやって来た。

華琳「皆、無事で何よりだわ。けれど、損害は大きかったようね。」

秋蘭「いえ。防壁こそ破られましたが、純様の救援と彼女らのおかげで最小限の損害で済みました。街の住人も皆無事です。」

純「彼女らは陽平義勇軍と申し、黄巾の暴乱に抵抗するために兵を挙げたそうです。」
その時、

一刀「あー!!」

春・栄・沙・真「「あー!!」」

春蘭と栄華、李典と于禁が互いに指を指し、叫んだのだった。

華琳「・・・何よ、一体。」

一刀「ほら、華琳。覚えてないか？前に皆で城下に視察に行った時に会った、変な絡線作ってたカゴ屋の子！」

真桜「変な絡線って何やねん！凄い絡線の間違いやろ！」

華琳「・・・思い出したわ。どうしたの、こんな所で。」

真桜「ウチも義勇軍の一員なんよ。そっか……あの時の姐さんが、州牧様やったんか……。」

秋蘭「姉者も知り合いなのか？」

沙和「そうなのー。前に服屋でむぐぐ」

しかし、于禁が喋ろうとしたときに春蘭と栄華が口を押さえ、

春蘭（そ、それは内緒にしておいてくれっ！）

栄華（そうですわ。私とあなたは初対面。いいですわね。初対面ですわよ……？）

そう述べたのだった。

沙和（むぐむぐ。わかつたの……。）

季衣「どうしたんですか？春蘭様。」

春蘭「い、いや、何でもないっ。何でも！」

沙和「むぐぐー。内緒にするから、離してなのー！」

栄華「そうですわ。何でもありませんわ。おほほほほほほほ。」

沙和（でもこれだけお話してたら、とつくにバレてる気がするの……。）

季衣「春蘭様……なんなんですかね？」

秋蘭「さあな。何かあったのだろうか、姉者に合わせておいてやってくれ。」

華琳「それで純、側にいるその者は？」

純「この者は、その義勇軍と一緒に戦っていた者です。関羽、挨拶を。」

愛紗「はっ！」

そして、関羽は前に出て

愛紗「私は関羽、字を雲長と申します。旅をしていた所をたまたまこの街に立ち寄り、賊からこの街を守るために義勇軍と共に戦っておりました。」

と関羽は言った。

華琳「そう……。」

その一方で、

一刀（か、関羽だ?! まだ劉備に仕えていなかったのか?! しかし、史実では髭が綺麗だったから『美髯公』って言われてたけど、この世界では髭なんだな……。まあ、女の子が髭つてのもアレだけど……。）

一刀は関羽の登場に驚いていた。

華琳「……で、その義勇軍がこの街を守っていたのね。」

凧「はい。ですが、黄巾の賊がまさかあれだけの規模になるとは思いもせず……こうして夏侯淵様と曹彰様に助けていただいている次第。身の程も弁えず、お恥ずかしい限りです。」

華琳「けれど、あなた達がいなければ私は大切な将を失う所だった。皆を助けてくれ

た事、感謝するわ。」

そう言つて、華琳は風達に頭を下げた。

風「それはこちらと同じです。こちらが感謝こそすれ、感謝されるようなことは……」

その時

季衣「あの、それですね、華琳様。風ちゃん達を……華琳様の部下にして貰えませんか？」

と季衣が華琳に言つた。

華琳「義勇軍が私の指揮下に入るといふこと？」

風「聞けば、曹操様もこの国の未来を憂いておられるとのこと。一臂の力ではありませんが、その大業にぜひとも我々の力もお加え下さいますよう……」

華琳「……そちらの二人の意見は？」

真桜「ウチもええよ。新しい州牧様とその弟さんの話はよう聞いとるし……そのお方が大陸を治めてくれるなら、今よりは平和になるつちゆうことやろ？」

沙和「風ちゃんと真桜ちゃんが決めたなら、私もそれでいいのー。」

華琳「純から見てどうかしら？」

純「俺も一連の動きを見ておりましたが、村のカゴ売りで終わらせて良い人材ではありません。皆、鍛えればひとかどの将になる器かと。」

華琳「そう……。季衣も真名で呼んでいるようだし、純が認めたなら問題ないでしょう。名は？」

凧「楽進と申します。真名は凧……。曹操様にこの命、お預け致します。」

真桜「李典や。真名の真桜で呼んでくれてええで。以後よろしゅう。」

沙和「于禁なのー。真名は沙和っていうの。よろしくおねがいますなのー♪」
すると、

愛紗「私の真名は愛紗と申します。しかし、曹操様に一つハッキリと申しておきたい事があります。宜しいでしょうか？」

と関羽は真つ直ぐと華琳を見て言った。

華琳「良いわ、言ってみなさい。」

愛紗「私は曹彰様の臣下になりたいのです。その願い、お聞き届けますでしょうか？」

華琳「純は我が軍の全権を握っているけど、立場的には弟であり私の配下よ。それを分かって言っているのでしょうか？」

愛紗「勿論です。私は曹彰様の勇名を聞き、そのお方に仕えたいと思い、ここまで旅をして参りました。もしこの願いを聞き届けるのであれば、私は曹彰様に絶対の忠誠を誓い、曹彰様の命令のみ従います。しかし、もしこの願いが聞き届けられない場合は、この場で命を絶ちます。」

と関羽はハッキリと華琳にそう言った。

華琳（へえ、力強い良い眼をしているわね。私に對してあそこまで言える度胸とその意志。正直私の物にしたいわね。純が羨ましいわ。）

その時、華琳はそう思いながら見ていた。

一刀「華琳……。」

側では、一刀が心配そうに見ていた。

華琳「良いわ。あなたの言った事全て認めてあげるわ。今後は純の為にしっかりと働きなさい。」

愛紗「認めていただきありがとうございます。曹彰様のため、尽力を尽くします。」
そう言つて、愛紗は拱手したのだった。

華琳「それと……一刀。」

一刀「ん？」

華琳「凧、真桜、沙和。あなた達三人は、この男の指揮下に入つて貰うわ。別段の指示がある時を除いては、彼の指示に従うように。」

一刀「はあああああ!？」

真桜「えー。この兄さん大丈夫なん？この間もウチの絡繰壊しとつたやないの……。」

沙和「んー？私は結構平気かもー。曹彰様程ではないけど、カッコイイし♪」

風「曹操様の命とあらば、従うまでだ。宜しくお願い致します。」

一刀「おいしい、ちよつと待てよ、華琳！」

華琳「念願の部下よ。嬉しいでしょう？純もそう思わない？」

純「そうだな。お前にとつても、良い事だぞ。」

一刀（そりや、確かに部下は欲しいって言つてたけど・・・俺、部下を指揮するとか指導するとか、そういう経験全然無いんだぞ!）

一刀（そこにいきなり義勇軍を丸ごと渡されて、しかも三人纏めて面倒見ろとか、無茶すぎないか・・・？）

華琳「あら。何か問題がある？」

桂花「大ありですっ！純様はともかく、何でこんなのに、部下をお付けになるんですか・・・！」

これには、桂花は猛反対した。

一刀「・・・あ、桂花。いたんだ。」

桂花「アンタと違って、私はちゃんと仕事をしていたの。純様、周囲の警戒と追撃部隊の出撃、完了致しました。住民達への支援物資の配給も、もうすぐ始められるかと。」

純「ご苦労だった、桂花。」

華琳「・・・で、何の話だったかしら？」

桂花「これの事です！こんな変態に華琳様か純様の貴重な幹部候補を預けるなどしては・・・早々に穢されてしまいます！」

一刀「おい！俺が無能だつて言うならまだしも、そういう変な事を吹き込むんじゃない！」

桂花「無能なのはそれ以前の問題でしょ！」

この話を聞いた

凧「・・・。」

真桜「・・・。」

沙和「・・・。」

三人は、ドン引きした雰囲気だった。

愛紗「・・・。」

それは愛紗も同様だった。

一刀「いや、その、誤解ですから・・・！」

真桜「んー。変態かぁ・・・。そういうのに興味がないとは言わんけど、ウチにも趣味嗜好つちゆうもんがなぁ・・・。」

沙和「なの・・・。出会ったばかりでいきなりそういうのは、流石に困っちゃうの。ま、ずはお友達か、清い関係からが良いの・・・。」

風「上官の命令とあらば……いや、だが、流石に度を超した命令には逆らう権利が……ぐぬぬ。」

愛紗「曹彰様。」

純「ん？」

愛紗「あの者はそういう嗜好のお方ですか？」

純「いや、コイツはそういう奴じゃねーよ。多分……。」

愛紗「そ、そうですか……。」

純「後、俺の真名は純な。」

愛紗「はっ。我が真名は愛紗。宜しくお願いします。」

純「ああ。宜しく。」

一刀「だから、そういう展開は無いから！そういう要求もしないから！」

華琳「……私は関知しないから、するなら同意の下でしてちょうだい。三人とも、一刀に無理に迫られたら、痛い目に遭わせて構わないわよ。」

一刀「華琳までっ！」

純「まあ、頑張れ一刀……。」

一刀「純っ！」

桂花「首を刎ねても構わないから。……いえ、寧ろ刎ねておいてくれると助かるわ。」

一刀「だからいちいち刎ねさせようとするんじゃない！」

真桜「そういう事なら了解ですわ。・・・じゃ、よろしゅうな、隊長。」

凧「了解しました。隊長。」

沙和「はい。隊長さーん。」

一刀「隊長・・・ねえ。」

華琳「皆は何か異論がある？」

柳琳「いえ。皆さん、これから改めて、宜しくお願いします。」

季衣「良かったね、四人とも！」

春蘭「・・・。」

純「春蘭はどうなんだ？一刀の素質に問題あるか？」

春蘭「いえ。これで北郷も、少しは華琳様の部下としての自覚が生まれるのではない

かと。」

純「・・・そうか。」

純（コイツ、面倒事一刀に押し付けてやったーと思ってる顔だな・・・。）

華琳「それでは四人の件はこれでいいわね。物資の配給の支度が終わったら、この後の方針を決めることにするわよ。各自、持ち場に戻りなさい。」

純「かしこまりました。」

そして、それぞれ持ち場に戻ったのであった。

22話

本陣

華琳「さて。これからどうするかだけど……。新しく参入した凧達もいることだし、一度状況をまとめましょう。……純。」

純「はつ。俺達の敵は黄巾党と呼ばれる暴徒の集団だ。構成員は若者が中心で散発的に暴力活動を行っているが……。特に主張らしい主張はなく、現状で連中の目的は分かっちゃいねー。」

純「また首領の張角も、旅芸人の女らしいという点までは突き止めたが、それ以外は不明だ。どこにいるのかも分かんねー。」

真桜「……ぶつちやけ何も分かつてへんのやな。」

栄華「本当に張角が指揮を執っているかも怪しいものですわ。張角が扇動だけして、煽られた者達が好き勝手に暴れている可能性もありますわね。」

春蘭「誰も口を割らん以上、本人を捕まえて聞くしかなかなかろうな。」

真桜「それ、口を割らんのやのうて、ホンマに知らんだけとちやうん？」

桂花「その可能性も否定出来ないのが面倒なところね・・・。」

稟「はい、そうですね。」

風「ぐうぐ。」

稟「寝るな！」

風「おお！面倒な事だと思いつい・・・。」

稟「全く・・・。」

風「目的とは違うかもしれませんが・・・我々の街では、地元の盗賊団と合流して暴れていました。陳留のあたりではいかがでしたか？」

華琳「似たようなものよ。ただ、この街の例もあるように、事態はより悪い段階に移りつつある。」

春蘭「悪い段階・・・？どういう意味ですか？」

桂花「この大部隊を見たでしょう？無為に暴れるだけの烏合の衆や、地の盗賊と組むだけじゃない。それなりの指揮官を載いて、組織としてまとまりつつあるのよ。」

春蘭「・・・ふむ？」

しかし、イマイチ良く分かってなかったの、

桂花「要するに・・・今までのように、春蘭が大声で咆えたら終わるような敵じゃな

くなるってこと。」

と説明した。

春蘭「なるほど。」

桂花「・・・ホントに分かってるのかしら。」

香風「前より強くて、面倒になってる。」

春蘭「・・・うむ。それだ。」

一刀「それ、どう見ても香風に乗っかったただけだろ、春蘭。」

華琳「ともかく、一筋縄ではいかなかった事だけは間違いないわ。ここでこちらにも味方が増えたのは幸いだったけれど・・・これからの案、誰かある？」

一刀「結局、張角を捕まえるしかないんだよな・・・。」

桂花「相手も組織化しつつあるなら、それこそ張角が首領として据えられてる可能性も高いわ。そこを一網打尽にするしかないわね。」

秋蘭「本拠地を潰せば一番良いのだが・・・旅芸人という出自故、我々のように特定の拠点を持たず、各地を転々としている可能性も高い。そもそも潰す本拠地がないなら、痛いな。」

一刀「本拠地があるかどうかも分かんなくて、どこからでも湧いて出る、微妙に組織だった敵か・・・。タチが悪すぎる。」

一刀（完全にモグラ叩きだ。ただ一つ違うのは、モグラの側から率先して襲いかかるって事か。）

桂花「だからこそ、都から直々に討伐命令が出たのでしょ。ただ、それを討伐出来れば、華琳様の名がさらに大陸に轟くのは間違いないわ。」

稟「はい。私も桂花の意見に同感です。それが出来れば曹操殿だけじゃなく純様の武名が広がります。」

その時

沙和「……すいませーん。軍議中、失礼しますなの一。」

柳琳や華命と一緒に炊き出しを手伝っていた沙和が顔を出したのだった。

華琳「どうかした、沙和。また黄巾党が出たの？」

沙和「ううん、そうじゃなくって一。」

春蘭「何だ。早く言え。」

沙和「村の人に配ってた食糧が足りなくなっちゃったの。代わりに行軍用の糧食を配ってもいいですか一？」

華琳「……栄華、糧食の余裕は？」

栄華「数日分はありますけれど……義勇軍が加わった分の影響もありますし、ここで使い切ってしまうては身動きが取れなくなってしまうわ。」

桂花「……とはいえ、ここで出し渋れば騒ぎになりかねないわよ。」

栄華「分かっています。既に補充の手配はしてありますから、それがこちらに着くのが……そうですね。三日分なら、出しても構いませんわ。」

沙和「三日分ね。わかりましたなのー。」

凧「すみません。我々の持ってきた糧食があれば良かったのですが、先程の戦闘であらかた焼かれてしまいました……」

栄華「焼けてしまったものは仕方ありませんわ。悔やめば灰が食べられるようになるわけでもなし、あるもので何とかしましょう。」

一刀「……なあ。」

桂花「何よ。」

一刀「ちよつと思っただけど、部隊の規模が増えると、糧食や装備もその分必要になるよな?」

春蘭「何を当たり前の事を言っているのだ?」

すると、

純「……そういう事か。」

香風「……あー。」

秋蘭「……成程。」

純「流石秋蘭。分かったようだな。香風も。」

稟「成程。」

風「その手がありましたか。」

一刀の発言に、皆が理解した。

季衣「にや？」

・・・一部を除いて。

栄華「ああ、その手がありましたわね。桂花さん。」

桂花「分かってるわよ。・・・今どうすれば良いか考えてるんだから、声を掛けないで。」

春蘭「どういう意味だ？」

華琳「良い所に気付いたわね、一刀。」

真桜「隊長、中々やるやないの。」

春蘭「お、おい・・・！華命がいないと、分かっていないのは私だけのようではないか！」

季衣「春蘭様、大丈夫です。僕も分かりません！」

純「あいつら黄巾党は、今や大部隊まで発展している。現地調達だけでは武器、食糧を賄いきるのは不可能だ。どこかに、連中の物資の集積地があるはず。」

一刀「そこを叩けば、連中に大きな打撃が与えられるよな？」

純「ああ。もつと運が良ければ、拠点に張角達がいるかもしれないねーしな。」

華琳「ええ。桂花。」

桂花「はい。周辺の地図から物資を集積出来そうな場所の候補を絞り、それぞれに偵察部隊を向かわせます。」

華琳「任せるわ。物資の集積場所だけでなく、搬入と搬出に使えるような道や痕跡も見逃さないようにしなさい。いいわね？」

桂花「もちろんです！」

純「稟と風も頼めるか？」

稟「お任せ下さい。」

風「お任せなのですよ。」

純「他の者は、桂花達の偵察経路が定まり次第、出発しろ。それまでに準備を済ませておくこと！」

春蘭「はいっ！」

季衣「分かりました！」

一刀「・・・ホントに分かつてる？」

春蘭「偵察任務だろう？」

一刀「それだけかよ！」

春蘭「それだけ分かれば十分だ！」

純「相手の動きは極めて流動的だ。仕留めるには、こちら情報収集の早さが勝負。皆、可能な限り迅速に行動しろ！」

凧「はっ！」

純「沙和達も偵察に出す。一刀は配給に出ている三人に作戦の詳細を伝えておいてくれ。」

一刀「了解。配給は俺の方で引き継げば良いんだな。」

そして、それぞれ即座に行動を移したのであった。

それから数日後

純「既に廃棄された砦か・・・良い場所を見つけたものだな。」

華琳「ええ、そうね。」

沙和達の地道な調査で敵の拠点を見つけ、山奥に残されていた砦跡に辿り着いた。

凧「敵の本隊は近くに現れた官軍を迎撃しに行つてゐるようです。残る兵力は一万がせいぜいかと。」

一刀「官軍が来てるの？つていうか、官軍つて動いてたんだ。」

純「ふん。だから砦を捨てて逃げようとしてんだらうな。」

春蘭「はい。そうでしょうね。」

一刀「でも、折角作つた拠点を捨てるのも勿体ない気がするな。」

栄華「正直、ここまで使い捨てられると良い気分ではありませんわ。砦をひとつ建てるのに、一体いくらかかると思つていますの。」

一刀「・・・まあ、栄華ならそつちに考えが行くよな。」

春蘭「その身軽さと神出鬼没が連中の強みなんだから、仕方ないな。」

純「ああ。もう少し遅かったら、この砦はもぬけの殻だったな。」

純「まあいずれにしても、厄介極まりねー相手に一当てする絶好の機会だ。・・・それで凧、こちらの兵は？」

凧「我ら義勇軍と併せて、八千と少々です。向こうはこちらに気付いていませんし、絶好の機会かと。」

純「そうだな。なら、一気に攻め落とすか。」

華琳「ええ、そうね。」

すると、

桂花「純様。それに際して、ひとつご提案が。」

純「何？」

桂花「戦闘終了後、全ての隊は手持ちの軍旗を全て砦に立ててから帰らせて下さい。」
と桂花が提案したのであった。

稟「私も桂花の意見に賛成です。軍旗を立てた方が今後のために良いと思います。」

華命「え、置いて帰るんすか？なんで？」

桂花「この砦を落としたのが、我々だと示す為よ。」

純「なるほど。黄巾の本隊と戦っているという官軍も、狙いはおそらくここだ。ならば、敵を一掃したこの城に曹旗が翻っていれば……」

稟「はい、そういうことです。」

一刀「完全に嫌がらせだな、それ。」

純「けど、面白いな。良いだろう、軍旗を持って帰った隊は厳罰に処す。」

栄華「まったくもう……砦もですけれど、軍旗もタダではありませんのよ？」

純「ふつ、栄華は反対か？」

栄華「……いいえ。今後のために必要な策だと理解していますから、結構ですわ。そういう意見がある事だけ、お心に留め置いてくださいまし。」

そう言つて、栄華はため息をつきながら言つた。すると

真桜「せやつたら、誰が一番高いところに旗を立てられるのか、競争やな！」
と真桜はそう言つた。

凧「こら、真桜。不謹慎だぞ。」

華命「面白そうつすー！あたしもやるつす！」

春蘭「ふん。新入りどもに負けるものか。季衣、お前も負けるんじゃないぞ！」

季衣「はいっ！もちろんですつ！」

香風「いちばん高い所……。シャンも頑張る。」

凧「……。むう。」

純「そうだな。一番高いところに旗を立てられた者には、何か褒美を考えておこう。
それでどうでしょう、姉上。」

華琳「ふふつ。ええ、良いわよ。全て任せるわ。」

一刀「おいおい、華琳まで……」

純「ただし、作戦の趣旨は違えねー事。狙うは敵の守備隊の殲滅と、糧食を残らず焼
き尽くすことだ。良いな。」

春蘭「はっ！」

すると、

沙和「あの・・・純様？」

純「どうした？沙和。」

沙和が純に質問をしたのだった。

沙和「その食料って・・・さっきの街に持って行っちゃ、ダメなの？」

純「ダメだ。糧食は全て焼き尽くせ。俺達の糧食とする事も禁じる。」

沙和「どうしてなの・・・？」

桂花「我が軍は今まで、どこからも略奪を行わずに戦ってきたのよ。」

稟「もし盗賊ごときの糧食をかすめ取るような真似をしてしまえば、今まで築いてきた評価が台無しになってしまいます。」

純「街に施しを行って手持ちの糧食が心許ないのは事実だが、かといって目の前の賊に売って貰う訳にもいかない。・・・ならば、焼くしかねーんだ。」

沙和「けど・・・！」

華琳「・・・それに、奪った糧食を村に持って行けば、今度はその街が黄巾党の復讐の対象になるかもしれない。規模は前回とは比較にならないでしょうね。」

これには華琳がそう言ってフォローした。

沙和「・・・あ。」

栄華「あの街には既に、警護の増援と糧食を手配していますわ。それで復興の準備は

整うはず。お姉様はあの村を見捨てるような事はしませんから、安心なさい。」

純「そういうことだ。糧食は全て焼け。米一粒たりとも持ち帰ることは許さねー。それが奴らの怒りを全てこちらで引き受け、村を守る手段だと理解するんだ。いいな？」

沙和「・・・分かったの。」

華琳「なら、これで軍議は解散とするわ。先鋒は純と春蘭が務めなさい。」

純「はっ。」

春蘭「お任せ下さい！」

華琳「ならば、この戦をもつて、大陸の全てに曹孟徳の名を響き渡らせるわよ。我が覇道はここより始まる！各員、奮励努力せよ！」

全員「はっ！！」

華琳「純、いつも通り各部隊の配置と全軍の指揮、任せたわよ。」

純「御意。」

そして、それぞれ各部隊の配置を決めたのだった。

北郷隊

一刀「……暇だ。」

義勇軍の指揮は風達三人が分担してやってくれているため、一刀は進捗報告を聞くぐらいいになった。

一刀「うう、今までずっと報告をしたり取り纏めたりする側だったからな……。」

風「隊長。楽進隊、布陣完了しました！」

一刀「お疲れさん。なあ、風……。」

風「……何でしょう？」

一刀「沙和の事だけ……さ。」

風「沙和が何か不手際でも……?……まさか!」

そう言つて、風は拳を構えた。

一刀「いや、ない! 風が考えてる事は大体予想付くけど、それはないっ!」

風「……そうですか。」

それを聞いた風は、構えを解いた。

一刀「そうじゃなくつてさ、何であんな優しい子が、義勇軍に入ったのかなつて……」

風「沙和の事は沙和に聞いてみないと分かりません。」

一刀「……まあ、そうなんだけどさ。付き合ひ、長いんだろ?」

凧「長くはありますが、自分はそういう……空気を読むとか察するとかいう事が、どうも苦手で……。いつも二人に注意されてばかりなのです。」

一刀「……そっか。」

凧「ですが、ただ一つ言えるのは……沙和が決めた事なら、沙和は後悔しないだろう、という事です。」

一刀「信頼してるんだな。沙和を。」

凧「長い付き合いですから。」

そして、真桜と沙和が隊の準備完了の報告をし、少し馬鹿騒ぎをしたのだった。

本陣

春蘭「……何をしているのだ、あの馬鹿共は。騒がしい。」

純「さあな？戦の前に気合でも入れ直してるんじゃないかねーの？」

華琳「ふふっ。そうかもしれないわね。」

愛紗「純様。黄鬚隊、布陣完了しました。」

香風「純様ー。夏侯淵隊、準備できたー。」

季衣「夏侯惇隊も準備完了ですっ！」

純「分かった。」

華琳「なら、行くわよ。」

そして、華琳は純と春蘭に目配せをした。

純・春「御意ー！」

純「銅鑼を鳴らせ！鬨の声を上げろ！追い剥ぐことしか知らぬ盗人と、威を借るだけの官軍に、我らの名を知らしめてやれ！」

純「総員、奮闘せよ！突撃いいいいっ！」

純の覇気の籠もった声で、曹操軍は奮い立ち、砦の総攻撃を始めたのであった。

23話

岩内

春蘭「おりやあああああああつ！」

季衣「てりやあああああああああつ！」

春蘭「ちつ。やるな、季衣！」

季衣「春蘭様こそ！でも、今度こそ負けませんよーっ！」

春蘭「それはこちらの台詞だ！あの時の勝負は純様のお声で水入りになったが、今度こそカタを付けてくれる！」

春・季「やあああああああつ！」

純「はあつ！」

愛紗「でりやあああああつ！」

純「ほお！やるじゃねーか、愛紗！」

愛紗「純様こそ！黄鬚の異名に相応しいお力です！」

純「へっ！まだまだ俺は強くなる！愛紗、お前も強くなれ！そして、俺と一緒に天下一の將軍になろうぜ！」

愛紗「はい！」

そう言つて、純と愛紗は果敢に敵に突つ込んだ。そして、二人の通つた道には死体の道が出来ていた。

凧「華侖様！はああああああつ！」

華侖「・・・へっ!？」

その時凧は、華侖に後ろから襲いかかろうとしている黄巾兵に向かつて、気弾を放つた。

華侖「あ・・・っ。」

柳琳「ね、姉さんっ!!」

黄巾党A「うわあああああああ・・・っ！」

そしてそれは、華命の脇を抜け、黄巾兵を吹き飛ばしたのだった。

凧「大丈夫ですか、華命様！」

華命「ほへー。びっくりしたっす……。」

一刀「……凧。」

凧「はい？」

一刀「それ……何？」

凧「何と言われましても……ただの気ですが。」

一刀「ただの……いやまあ、そんなもんなのか？」

一刀（何しろ中国四千年だもん……。……いや、この時代じゃまだ四千年も経つてないのか。）

凧「？」

凧「良く分かりませんが……いずれにしても、ここからでは追い付けそうにありませんね。」

一刀「春蘭達も本気出してるからなあ。」

そう言つて凧に続いて城壁の上を見上げていると、楼閣の屋根を走っている、春蘭や季衣達の姿があつた。

春蘭達の前じゃ、賊達は敵ではない。制圧戦は早々にカタが付き、今は誰が砦の一番

高い所に旗を立てられるかの勝負に移っていた。

その横で、

柳琳「もう・・・姉さん、危ないからやめてって言ったのに！」

華命「大丈夫つすよー。柳琳は心配性つすねえ。」

柳琳「心配もするよう！」

華命と柳琳はそう言ったやり取りをしていた。すると、

華命「それより凧！今の何すか？」

華命「ぼーってなって、ずぼーってなって、どかーんって・・・とにかくすごかったつすー！あれ、どうやるんすか？あたしにも出来るつすか？」

凧「ええつと、その・・・それは・・・」

妹の心配を余所に、華命は凧が放った気弾に興味津々だった。

香風「うーん。」

真桜「やつぱ、上手いかへんなー。」

凧達から離れた一刀は庭の方の様子を見に行くと、真桜と香風がいた。

一刀「何やってるの、二人とも。」

香風はその辺りから剥がした戸板を一枚ずつ手に取って、それをパタパタしていた。

香風「……飛べるかなって。」

一刀「飛べる……」

香風「ここからぴゅーって飛ばば、一番高い所にもすぐ行ける。」

そう言つて、持つている戸板で楼閣を指し

香風「そうなつたら、大逆転！」

と言つた。

一刀「……ああ。確かに空が飛べたら季衣と春蘭にも勝てそうだな。」

真桜「香風にそう言われたから、何かエエ方法ないか思うて考えとつたんやけどなー。」

一刀「……それで戸板を羽根代わりにしてるのか。」

真桜「お、見て分かるんか。隊長、中々見所あんで。」

香風「真桜は、これで鳥さんみたいに飛べるかもって。」

一刀「そうかー。」

そして、一言二言交わした後、一刀はその場を後にした。

沙和「あ、隊長ー。大丈夫だったのー？」

一刀「風と一緒にだったからな。沙和は大丈夫だったか？」

沙和「ん、平気なのー。」

沙和は少し疲れた顔に見えたが、すぐに笑顔を見せた。
すると、

秋蘭「火を放て！糧食を持ち帰ること、まかりならん！持ち帰った者は厳罰に処すぞ
！」

庭の中央で、秋蘭の指示によって糧食が集められ、火をかけていた。

沙和「あーあ。やっぱり、もったいないの。」

栄華「まったくですわ……。これだけの糧食があれば、我が軍が何日食べ繋げる事
か。」

一刀「けど、華琳と純の基本方針に反するし、あの街に持って行くわけにもいかない
しなあ。」

沙和「みゆうう……。」

栄華「それを理解するのと、もったいないと思うのは別問題ですわ。それとも北郷さ

んは、この光景を見て何とも思いませんか？」

一刀「思うに決まってるだろ。・・・今の俺達だって、ただでさえ糧食が足りないんだから。」

沙和「もしかして、食料が足りないのって街の人の所に色々置いてきちやっただけなの？ 沙和がもつと出せませんか、って聞いたから・・・」

栄華「あれは、あの場では必要な行いでしたわ。それにそれを責めるなら、三日分は置いて良いと判断した私の責任でしてよ、沙和さん」

一刀「そうだよ。元々慌てて出てきたから、ギリギリの糧食しかなかったんだし。」
栄華「・・・そう考えると、やっぱり勿体ないですわねえ。」

一刀「だよなあ・・・」

そして、最終的に一番高い所に旗を立てたのは季衣であり、春蘭は二番目だった。純は、正殿の天井に刺さり、本人曰く

純「投げたらそこに刺さった。」

と発言し、周囲を唾然とさせたのだった。そして、純達が本陣に戻ると、沛から急な知らせが来たのだった。

本陣

華琳「沛の城が襲われたですって？」

沛国兵士A「はい。黄色の布を巻いた集団が大軍を率い、我らが沛国の都を……」

沛国兵士A「包囲が完了するまでの僅かな時間で、自分は陳珪様の命を受け、この地に出陣しておられる曹孟徳殿と曹子文殿に助けを求めるようにと出されたのです。」

純「分かった。ひとまず、お前は控えている。向こうに飯と寝床を用意させてある。」
沛国兵士A「……感謝致します。」

そう一礼し、不眠不休でここまで来たのかふらつく足取りで、その場を後にした。

華琳「しかし……大変な事になったわね。」

純「はい。しかも、陳登もちょうど沛に戻っているはず。状況としては最悪ですね。」
一刀「一番ヤバいな……。」

真桜「けどさっきの遣い、陳留やのうて出陣しとるこつちに行くよう言われたて、どないなつとんの？沛の都からここと陳留じゃ、方角が全然違うで？」

真桜の疑問に、

桂花「こちらの動きは把握済みだったんでしょ。あの女狐の事だから、それくらいに

情報収集はしてても不思議でもなんでもないわ。」

栄華「もつとも、それを知られるのは向こうにとつても本意ではないはず。・・・それだけ余裕がなかったとも取れますわ。」

稟「しかし、罠の可能性もあります。」

桂花「そうね。」

風「嘘とも言い切れませんが、かといつて本当のことだとは言い難いです。」

一刀「ここですか？」

桂花「ええ。まさかと思う所ほど、罠の置き場所に適したところはないもの。さつき
の使者が本当の情報を伝えていない可能性もあるしね。」

一刀（あれだけボロボロの姿でここまで来たのが、芝居や演技とは思えないけど・・・）
秋蘭「どうなさいますか、純様。沛に向かうのですか？」

純「ああ。陳珪には借りも多いし、陳登はこれからの陳留に欠かすことの出来ない人材だからな。」

華琳「ええ。純の言う通りだわ。」

桂花「反対です。我が軍は既に連戦に連戦を重ね、疲弊の極みにあります。何より行軍に必要なだけの糧食がありません。」

稟「私も桂花の意見に賛成です。一度陳留に戻り、準備をしてから出陣すべきかと。」

風「風も同じ意見です。」

榮華「私も、お三方の意見に賛成ですわ。」

桂花「陳珪は朝廷との癒着の証拠も多く見つけましたし、罊の可能性も否定出来ません。ここから無理に兵を動かす事も計算の上で、どこかで待ち伏せている可能性すらあります。」

春蘭「……まさか、黄巾党と戦っている官軍と結託しているなどとは言わんよな？」
稟「流石にそこまではないと思いますが……せめて、沛城襲撃の裏付けを取ってからの出陣を提案致します。」

華侖「んー。でもそんな事してて、間に合うんすか？」

香風「……たぶん、無理。」

一刀「だよな。陳留からここに来るだけでも結構な時間が掛かったんだ。」

一刀「ここから沛国に直行するだけでも何日も掛かるのに、陳留経由で大回りしたらそれこそ二倍や三倍の日数が掛かってもおかしくない。」

華侖「え、それじゃ意味がないっす……。」

華琳「意味がないわけではないわ。少なくとも、救出に向かったという事実は出来るもの。……間に合うかどうか別としてね。」

一刀「華琳は……それで良いのか？」

華琳「良いわけがないでしょう。」

華琳「あれにはまだ対価の支払いも済んでいないのよ。踏み倒すには、少し額が多すぎるわ。」

季衣「だったら・・・！」

華琳「ただ、私達も万能ではないの。届く手の長さは決まっているし、手で掬える大きさにも限りがある。」

そう言つて、華琳は少し離れている純に向けて手を伸ばしたが、純の所には届かなかった。

純「姉上・・・。」

純も手を伸ばしたが、指先さえ触れる事は出来なかった。

その時、

季衣「なら、華琳様、純様・・・お願いがあります。」

季衣が華琳と純に声を掛けた。

華琳「何？」

純「どうした？」

すると、

季衣「僕を、沛国に行かせて下さい。」

そう言った。

春蘭「・・・季衣。お前、またか！」

季衣「あの砦の一番高い所に旗を立てたら、ご褒美があるんですよね？ だったら僕、あの人達を助けに行きたいです。」

華琳「・・・。」

純「・・・。」

季衣「華琳様と純様の手が届かないなら、僕と一緒に伸ばします。」

そう言って、季衣は華琳の手を取り、自身も一杯まで手を伸ばし、純に、反対側の手を伸ばしてきた。

季衣「華琳様と純様に掬えないものは、僕もお手伝いします。」

その時、純は季衣に手を伸ばした。すると、季衣はしっかりと純の手を握りしめたのだった。

季衣「ほら。これなら華琳様の手は、純様に届きます。だから・・・」
しかし、

桂花「ダメよ。季衣だって、ここに来るまでどれだけ戦ったと思ってるの。それにいくら黄巾の連中が雑魚ばかりでも、季衣一人が行ったところで・・・」

栄華「何より、もう食料がありませんのよ。せめて、こちらに向かっている輸送部隊

と合流して、補給を済ませてからでない」と。

桂花と栄華が反対したのであった。しかし季衣は、

季衣「それじゃ間に合わないかもしれないでしょ！それに、その食べ物はこの街の人達のものなんだから。」

そう言ったのだったが、季衣の腹が鳴り

栄華「・・・ほら。今の私達は、その空腹を満たすのが精一杯ですよ。」

と栄華が言った。

季衣「だ、大丈夫だよ。お腹が空いてるのも、絶対に我慢するから！うう・・・お腹なんか減つてない、減つてない・・・。」

一刀「・・・華琳、どうするんだ？華琳が決めないで、結論なんて出ないままでぞ。」
一刀「どちらの言い分にも一理あるんだ。勿論心情的には季衣を応援したいけど、現実を見据えてる桂花達軍師と栄華の意見を無視する事も出来やしない。」

華琳「いいえ、一刀。これを決めるのは私じゃないわ、純よ。」

一刀「え？」

純「俺ですか？」

華琳「この軍を率いているのはあなたよ。将兵は勿論、私もあなたの命令に従う。あなたの判断に任せるわ。そしてその判断を、私は信じるわ。」

その発言に

純「そうですね……。」

純はそう言つて、腕を組んで目を閉じた。すると、

季衣「純様、助けに行きましよう！」

桂花「ここは公正な判断を……純様！」

稟「何とぞ、純様！」

風「……。」

栄華「お兄様！」

柳琳「お兄様！」

春蘭「純様！」

香風「純様。」

華命「純兄！」

一刀「……純。」

皆が一斉に純に目を向けた。

純「……。」

そして、純は沈黙の後、目を開き、こう言つた。

純「沛国の救援に向かう！皆、強行軍となるから、大至急出撃の準備をせよ！ついて

来れなかった者は置いていくぞ！」

全員「はっ!!」

純「それと、移動する際、武器鎧は、傷めてるのを装備しろ！栄華、お前は本隊から先行して、沛国に向かう進路上にある郡や県に声を掛け、糧食を貸して貰ってこい！」

栄華「承知致しましたわ！」

稟「なるほど。その為に武器鎧を……。流星は純様です。」

純「よし!!各自、行動を開始せよ!!」

全員「はっ!!」

そうして、陳珪救出のための準備を始め、出撃したのであった。

24話

豫州・沛

燈「戦況はどうかしら？」

沛国將軍A「良くありませんな。」

沛国將軍A「既に北門も破られました。その奥に壁を作つて、何とか凌いではいますが、いい加減、布きれの連中も痺れを切らしているようです。」

燈「大攻勢が来るのも時間の問題か。ここまで半月、よく保つたほうでしょうね。」

沛国將軍A「はい。そこらの賊のように、一当てすればすぐ崩れる烏合の衆かと思いましたが……いやはや、敵ながらあつぱれ。なかなか粘る。」

燈「仕方ないわ。報告はもう結構よ、持ち場に戻りなさい。」

沛国將軍A「……はっ。」

そう言い、將軍は部屋を後にした。

燈「……この状況であつぱれはないでしょうに。」

燈「とはいえ、あれの本質が見えない者は、ただの烏合の衆と見誤るか・・・。」

喜雨「違うの？ 暴徒と賊が寄り集まっただけでしょ？」

燈「・・・ええ。あれらには、あの黄色い布がある。」

喜雨「それが・・・？ ただの布だよな？」

燈「ええ。私達にとっては、ただの布きれよ。・・・けれど、あの暴徒達にとってはそれこそが自分達の正義の証となる。」

喜雨「何それ。意味が分からない。」

燈「他に頼れるものもすがれるものもなくなつてしまえば、そんなものでも希望に見えてしまうのでしょうか。進んだ道の先には、何も無いというのに。」

燈「せめてあの布をかざした者が、荒れた土地を開拓する方向や、街を襲う賊に抗う力へと導く者なら良かったでしょうけれど・・・。」

喜雨「それって、誰かがあの布を使つてあの集団を操つてるって事？ それが・・・沛の城を囲んでる連中の正体？」

燈「恐らくね。力を合わせて沛を落とせば、お米が腹一杯食べられる。皆で協力して、私腹を肥やす悪の相を追い落とそう。・・・せいぜい、その程度の煽りでしょう。」

喜雨「母さんを殺しても、何も解決しないの？」

燈「希望を失つた民などそんなものよ。それが張角の望んだことか知る由もないけれ

ど・・・その言葉にすがって走り出した者達は、もう止まることはないでしょうね。」

喜雨「でも、沛やこの辺りの郡で生活が苦しい民なんて、もう殆どいないはずだよ。」

喜雨「最近は大きな干ばつも起こってないし、税を納めてもご飯はちゃんと食べられる。暴れてた賊だって、曹操様と曹彰様が退治してくれたはずなのに・・・。」

燈「黄巾の隆起は、なにも豫州で起こっているだけではないのよ。」

燈「東の徐州か、南の揚州か・・・。徐州の陶謙殿の権威も今はだいぶ弱まっているそうだし、揚州は税も重く、徐州以上に荒れていると聞くわ。」

燈「そんな場所で集った暴徒が、豊かな沛の都に押し寄せるのは・・・まあ、当然の流れでしょうね。」

喜雨「大陸でも、貧しい所がまだそんなに・・・」

燈「あなたが育てたこの豫州や、力を付けた曹操とその弟曹彰が守る兗州が特別なよ。そんな恵まれた土地は、この大陸からすればほんの一握りに過ぎない。」

燈「喜雨も、こんな事に巻き込んで悪かったわね。せめて、連中が城を包囲する前に逃がせば良かったのだけれど・・・。」

喜雨「・・・土を触っていても、嵐が来る事はあるよ。」

燈「そうね・・・けれど、連中が城まで入ってきたら覚悟を決めて頂戴。戦で虜囚となった若い娘は、不幸よ。」

喜雨「・・・よく知ってる。村のみんなから、何度も聞いたよ。」

燈「そう。なら、この短刀は・・・あなたの分よ。」

「そう言つて、燈は喜雨に短刀を渡した。」

喜雨「・・・。」

喜雨「でも、出来れば・・・まだ死にたくはないな。」

燈「そうね。私もよ。」

喜雨「曹操様達、助けに来てくれないかな。・・・手遅れになる前には何とかしてくれるつて、言つてたのに。」

燈「こういう時のために貸しは作つておいたし、それを理解出来ない愚物ではないはずだけれどね。」

燈「・・・少し、間が悪過ぎた可能性はあるのよねえ。」

すると、外が騒がしいことに喜雨は気付いた。

喜雨「・・・何?」

燈「いよいよ、向こうの大攻勢が始まったのかしらね。」

その時、

沛国兵士B「報告です!」

兵士が知らせにやって来た。

燈「何？」

沛国兵士B「城の北方に新しい軍団を確認！」

燈「旗は。」

沛国兵士B「はっ！旗は曹！陳留の曹孟徳殿とその弟、曹子文殿です！」

喜雨「・・・曹操様と曹彰様？」

燈「もうここまで来たというの・・・？まさか・・・」

沛城城外

秋蘭「斥候の兵、戻りました。既に沛城は最寄りの北門を始め、主要な門のいくつかが崩壊。黄巾党に城下への侵入を許しているそうです。」

秋蘭「ですが、城や門にまだ陳の旗は健在。陳登殿は不明ですが、陳珪殿はまだ無事と思われれます。」

一刀「・・・間に合ったみたいだな、純。」

純「こちらにもなりふり構わずに来たんだ。易々と陥ちてもらって困るんだよ。」

華琳「それに、純ならこれくらい当たり前よ。」

一刀「・・・信頼してるんだな。」

華琳「当然よ。なんたって、私の自慢の弟なんだから。」

一刀「そっか・・・。」

純「まずは城と、陳珪・陳登親子の確保が最優先だ。その後には賊を捕え、暴徒どもの繋がりを曝く。これだけの規模の賊だ、張角に続く手掛かりは必ずあるぞ。」

凧「はっ！」

純「凧、桂花。」

凧「はい。まずは落とされた北門を集中して攻略します。その後、城の確保と各城門の支援に隊を分割します。」

桂花「それと門の攻撃は、内外から同時に行い、門を攻める敵を挟撃して殲滅します。」

春蘭「まずは、あの一番近い門を攻めている連中を叩き潰せば良いのだな。」

凧「はい。そうです。」

桂花「好きだけ暴れなさい。」

春蘭「良い策だ！季衣も行けるな？」

季衣「もちろんです！ご飯もお腹いっぱい食べましたから、いくらでも戦えますよーっ！」

華琳「純。あなたも、好きに思いつ切り暴れなさい。そして奴らに黄鬚の力を見せつけなさい。」

純「御意！愛紗も、共に参るぞ！」

愛紗「はっ!!」

純「よし。ならば、我が陳留の勇者達よ！沛国を襲う脅威を蹴散らし、この地に平穩を！そして、我が国の農の希望を救出せよ！」

秋蘭「総員、進撃を開始せよ！」

そして、陳珪・陳登親子の救出戦が始まった。

城内

春蘭「はあああああああああああああああああつ！」

季衣「でりやあああああああああああああああああつ！」

黄巾党A「うわあああつ！なんだあれは！逃げろ、逃げろおつ！」

黄巾党B「こら、お前らばかり先に逃げるな！逃げるのは俺が先だあつ！」

春蘭「雑魚は捨て置き！まずは城までの道を切り開くのだ！行くぞ、季衣！」

季衣「任せて下さい！どりやああああああああああああああつ！」

黄巾党C「うわーっ！」

一刀「・・・圧倒的だな、我が軍は。」

と一刀は某アニメに似た台詞を言った。

真桜「けど、なんや・・・その、なあ。弱い者いじめしとる感半端ないな。」

一刀「春蘭達が強すぎるだけだし、先に悪い事したのは向こうだぞ。」

しかし、春蘭と季衣の暴れっぷりを見て

真桜「分かっとなるけどなあ。あれ、完全にあかんやつやで。けど、大将はもつと強い

んだよな・・・。ウチ、大将の暴れっぷりをあの街で見てもうたからなあ・・・。」

沙和「・・・春蘭様達が味方で、ホントに良かったの。」

その時

純「おうお前ら、何してんの？」

純が現れた。

一刀「純か・・・。終わったの？」

純「ああ。愛紗と共にな。」

一刀「そ、そっか・・・。」

秋蘭「ほら、北郷達。無駄話をしていないで次の作戦に移るぞ。」

純「秋蘭か。その様子だと、作戦通りにやってるようだな。」

秋蘭「はっ。万事滞りなく。」

純「そっか。」

香風「お兄ちゃん、華琳様がお城の中に行くつて。純様も、華琳様に呼ばれてます。」
沙和「えーつと、北門を抜けたら、沙和達は何するんだっけ？」

真桜「残った門の開放やな。内側から街中を掃除して回る組と、門の外側に回り込んで敵軍を後ろから叩く側に別れるんやて。」

凧「私達は全員、門の外側から賊の背後を叩く側だ。それでは隊長、純様、行つて参ります。」

純「ああ。」

一刀「了解。三人とも、気を付けてな。」

そう言つて、三人はその場を後にした。

香風「なら、シヤン達もいこー。」

一刀「季衣は呼ばなくて良いの？」

純「あれを止める訳にはいかねーだろ。」

秋蘭「はい。姉者と季衣の手綱は私が何とかします。純様、どうかご無事で。香風と北郷も、頼んだぞ。」

純「ああ、秋蘭もな。」

一刀「おう。秋蘭も気を付けて！」

香風「はい。」

城内

燈「来ていただけしたこと、改めて礼を言わせていただきますわ、曹孟徳殿、曹子文殿。・・・正直、間に合わないかと思っていたもの。」

華琳「同盟の誼だもの。礼には及ばないわ。」

純「既に城には兵を入れて、防備を固めている。城下と城門は今掃除している最中だが、敵の指揮系統は崩壊しているようだし、後は時間の問題だ。」

燈「そう・・・。重ね重ね、感謝するわ。」

一刀「陳登も無事だったんだな。良かった・・・。」

喜雨「うん。何とか助かったよ。．．．ありがとう。」

燈「しかし、どうやってここまでこんなに早く来られたの。私の遣いは、賊討伐の遠征先に着いたはずでしょう？」

華琳「純の判断で、そこから直接来たのよ。」

純「ああ。陳留に戻る時間も惜しかったからな。」

燈「そんなに糧食に余裕があつたの？」

純「いや。手持ちの糧食など、ここに来る道程の半分ももたなかつたぞ。」

華琳「ええ。そうだったわ。」

栄華「ですが、どこの太守や県令も、少し声を掛けただけで今までの恩返しとばかりに快く糧食を貸して下さいましたわ。」

純（ま、割増にした代金を後で支払う事を条件にだがな．．．。）

栄華「沛国の相殿をよしなに、だそうですわ。」

燈「．．．そう。」

一刀「別に緊急時だからって脅しだとか、弱みを握ってどうこうつてわけじゃないから安心して。」

栄華「ええ。涙ながらに訴えただけですわ。こちらも賊退治の連戦で満身創痕ではあるけれど、大切な盟友である沛国の相殿をなんと少しでも助けねばなりません．．．と

ね。」

燈「・・・随分と、大衆受けしような手段を取ったものね。」

桂花「その方が民の語り草になるでしょう。」

稟「はい。こういう時は、危機感や悲壮感を出すくらいの方がちょうどいいので。」
純（まあ、だから傷めた装備で移動させたんだけど・・・。）

一刀「まあ、いささか演出過剰な気はするけどね。」

燈「・・・。」

華琳「そんな事より、あの連中はどこから現れたの？ 貴女はともかく、陳登の人望があれば沛の農民が城に攻め入る事などないでしょうに。」

喜雨「・・・僕にだってそんな人望はないよ。」

栄華「ふふつ。それでもありませんわよ。」

栄華「沛に入った後で道なりの村に声を掛けたら、陳登さんをお助け出来るならお代は結構です・・・という農民の方が後を絶ちませんでしたもの。」

喜雨「え、じゃあそれって・・・。」

栄華「もちろんこちらも、適正な代金をお支払いさせていただきますわ。今は手持ちがありませんから、買い掛かりにさせていただきますましたけれど。」

喜雨「・・・そっか。なら良かった。」

燈「恐らく、喜雨の力が及ばない、徐州や揚州でしょうね。徐州は押さえの陶謙殿の力も衰えていると聞くし、揚州は徐州以上に無法がまかり通っているそうだから。」

華琳「成程ね……。」

燈「それでね……曹操。いえ、曹孟徳殿。」

燈「ちようど良い機会だし、お願いがあるの。」

華琳「これ以上何を求めるつもり？」

燈「ええ。……あなたとの同盟を解消させてくださらない？」

純「……ほう。」

一刀「……えつ。」

この宣言に、華琳と純は勿論、桂花や稟、そして陳登も予想外だったのか、驚きの表情を浮かべた。

華琳「この時期に、随分と一方的な話ね。……それで、破棄した後はどうするつもりなの？」

燈「ええ。この豫州を、貴女の下にお預けするわ。」

華琳「……。」

一刀「え、それって……えつ!？」

燈「もはやあなたには、この沛国……いや、私と同盟を結ぶ旨味はないでしょう?」

桂花「だからといって、本当に売国の徒となるつもり!？」

燈「ふふつ。今さらでしょうに。」

燈「・・・曹洪殿、正直に答えていただきたいわ。先程の件、ここまでの通り道で立ち寄った沛の県令達は、みな本当に喜んで糧食を差し出してくれたのではなくて？」

栄華「・・・。」

彼女の問いに、栄華は凶星だったのか、何も答えなかつた。

燈「曹子廉殿。遠慮は無用よ。」

栄華「・・・県を預かる令ともあろう者達が、私のような遣いの小娘に媚びへつらう・・・とてもおぞましい光景でしたわ。正直、二度と思ひ出したくありませんわね。」

一刀「それって・・・」

桂花「・・・黄巾の暴徒如きにいよいよにされる陳珪に見切りを付けて、華琳様に乗り換えたって事でしょ。」

稟「はい。桂花の仰る通りです。」

一刀「ちよつと桂花、稟、言い過ぎだつて! なにも本人に聞こえるように言わなくても・・・。」

燈「軍師殿は本当に遠慮が無いわね・・・。」

燈「でも、残念ながらその通りよ。恐らく、豫州の他の郡でも状況は変わらないでしょ

う。」

華琳「陳珪……。」

純「……。」

燈「豫州はもはや、貴女のものという事よ。私が何をしようかね。」

華琳「……そう仕向けたのは、あなたでしように。」

燈「……で、どう？外の戦いももうすぐ終わるでしょう。今の内に決めておいた方が、戦後処理に手間取らなくて済むと思うのだけれど？」

華琳「なら……一つだけ答えなさい。」

燈「何なりと。」

華琳「貴女の目的は、何だったの？私を州牧にまで引き上げ、自分の属する州を売り渡すような真似までして……貴女は、一体何を見ていたの？」

燈「そうね……。」

すると、陳珪は穏やかな微笑みを浮かべ、

燈「有能な後進に道を与えたかった、ではダメかしら？」

そう答えた。

華琳「おためごかしは嫌いよ。」

燈「……なら、この地を守るための大樹が欲しかった、とでも言えば満足する？」

華琳「育てた大樹に屋敷を潰されては世話はないわね。」

燈「そうね。それでも、大樹の陰や洞を新しい家とすることは出来るわ。」

そう言い、何か憑きものが落ちたように感じた一刀だった。

燈「何よりこれからは、国ごとその大樹の恩恵に預かつていられるのだもの。国一つを差し出した対価としては、まずまずだわ。」

華琳「貴女には為政者としての誇りはないの？」

燈「この土地と民もろとも果てるのが為政者の誇りというなら、そんなものはとうに捨ててしまったわね。」

華琳「……。」

燈「ふふつ。貴女のその顔が見られただけでも、十分な対価な気がしてきたわ。」

華琳「……その言葉、私の寝首を搔いた時にも口にするつもり？」

燈「さあ？そんな時が来ない事を願うだけだわ。」

燈「……さて、曹孟徳殿。我が真名を預けるに足るお方よ。我が恭順を受け入れるや。あるいは我が首を刎ねた血と屍の上に立ち、此の地の主となるや。」

華琳「……。」

香風「純様……。外の制圧、終わったって。」

純「……姉上。」

燈「……曹孟徳殿。いざ。」

陳珪の重ねての問いに、華琳は小さくため息を吐いて、

華琳「……いいでしょう。ならばその真名とこの地、私に預けなさい。」

燈「……御意。」

と返したのだった。

陳留へ向かう街道

一刀「なあ……華琳。陳珪さん……じゃない、燈ってあのままにして帰って良かったの？」

華琳「沛の事後処理もあるし、ひとまずの処置よ。まあ、しばらくはこのままでしようね。」

一刀「いや、そういう意味じゃなくってさ。燈、何て言うか、その……色々、なくなっちゃっただろ？心配っていうか……」

華琳「それこそ燈自身で片付ける問題よ。私が口を出す話ではないわ。それに、喜雨

もいるのだし。」

そして、一刀は後ろを振り返り、

一刀「桂花達も、あそこで何も言わなくて良かったの？ ずーっと黙ってたけど。純は殆ど黙ってたけど。」

純「俺は難しい事は分かんねーからな。俺は姉上に従うまでだよ。」

桂花「不満に決まってるでしょ。」

桂花「でも、燈が怪しいのは前々からずっと言っていた事だし、今さら言っても仕方ないでしょう。」

稟「はい。私も桂花の意見に同感です。ですが純様、もう少し勉強してみても如何かと。」

純「い、いや、そういうのは得意な奴に任せた方が一番良いんじゃないのか？」

稟「それでもです。信頼してくれるのは嬉しいですが、少しは勉強して下さい……。」

純「わ、分かったよ……。」

栄華「それに、お姉様の事でも、どうせいつもの……。」

華琳「ええ。罨があるなら食い破る、それだけよ。」

一刀「……ですよねー。」

春蘭「華琳様の領地が増えるのだ。何にせよ、めでたいことではないか。お前達もう

だうだ言つていないで、素直に喜べ。」

桂花「戦働きするだけだと色々考えなくて、楽で良いわね。」

と、春蘭に対して皮肉を言うのと、

春蘭「ふふん、羨ましいか。」

そう返されたのだった。

桂花「・・・その厚かましき、羨ましいを通り越して腹立たしいんだけど。」

栄華「いずれにしても、燈さんを信用出来ないのは今までと何一つ変わりませんわ。

信用の置ける者を補佐に入れて、監視の目を強くするくらいしかありませんわね。」

純「・・・。」

一刀「純、どうかした？」

純「何か忘れてる気がすんだよな・・・。」

一刀「何を忘れたんだよ・・・。」

華琳「賊の砦に旗を立てて、一番高い所に立てる事が出来たら褒美を与えろという話
よ。」

純「ああ、そうでしたね。・・・季衣。」

季衣「はい、純様。」

純「何か欲しい物はあるか？お前に欲しい物があれば、答えれる範囲で答えよう。」

季衣「え？でもあれ、沛に行く話で・・・」

純「あれはお前の意見がなくても向かっていった。季衣の願いを聞いた形にしては、それこそ格好が付かねーよ。」

季衣「ええええ・・・でも僕、別に欲しい物なんてないんですけど。」

純「そつか・・・。何か欲しい物があつたら、その時言いなよ。」

季衣「はいっ！」

純「後・・・愛紗。」

愛紗「はいっ！」

純「此度の働き、見事だったな。」

愛紗「ありがたきお言葉。」

純「その褒美として、お前には俺の隊の指揮の一部を委ねる。」

愛紗「え!?宜しいのですか!？」

純「ああ。武芸だけじゃなく、兵の動かし方も見事だったからな。頼んだぞ。」

それを聞いた愛紗は全身の毛が逆立つかのような感覚を味わう。勿論嫌悪からではなく、慕っている主からの期待と信頼に歓喜したのだ。

愛紗「はっ!!期待に応えられるよう、この関雲長、全力で純様をお支えます!!」

純「ああ。」

そして、その様子を見た純は

愛紗「あ、あの・・・!? 純様っ!?」

純「んー? どうしたー? しかし、お前の髪、綺麗で触り心地も良いな・・・。」

愛紗の頭を優しく撫でたのだった。それを見た秋蘭、栄華、そして稟がこれから髪をしつかり手入れしようと決意したのは内緒である。

沛

燈「・・・ふふっ。」

その頃、燈は一本の短刀を見つめていた。

喜雨「母さん・・・?」

燈「・・・ああ、喜雨。まだ起きていたのね。」

喜雨「少し眠れなくて。・・・どうかした?」

燈「ええ、ちようど良かったわ。これを・・・預かっておいて欲しいの。」

そう言つて、喜雨に短刀を渡した。

喜雨「これって・・・母さんの分の短刀？まさか、母さん・・・」

燈「大丈夫よ。ここで自ら命を絶つほど、私は繊細な世界に生きていないわ。」

喜雨「・・・そう。」

燈「明日から陳留でしょう。早く眠ってしまいなさい。」

喜雨「うん・・・そうするよ。・・・母さんも、早く寝てね。」

燈「ええ・・・。」

そう言つて、喜雨は部屋を後にしたのであった。

燈「・・・あれが、英雄というのでしょね。」

燈「・・・されど英雄は、ただの一人で成るものではなし。」

燈「諸子百家然り、秦王政然り、項羽と劉邦然り・・・。」

燈「曹孟徳。この先も英雄たらんとするならば、この先貴女を育て、導き、競い合う

のは、果たして・・・一体、誰なのかしらね。」

燈「・・・その行く末、見届けさせて貰うわ。我が大樹。」

そう、一人部屋の中で呟いたのであった。

25話

謁見の間

純「姉上、お呼びですか？」

謁見の間に純がやって来た。

華琳「先程、豫州からの情報で黄巾賊が一部暴れてるようなのよ。」

純「まだ残党が残っていましたか？」

華琳「ええ。それで、あなたに任せたいのよ。頼むわ。」

純「分かりました。では、すぐに出陣致します。その際、秋蘭、愛紗、稟、風を連れて行きます。」

華琳「ええ、構わないわ。頼んだわよ。それと、そこには官軍もいるようだから、よろしく頼むわ。」

純「はっ。ではこれにて。一刀も街の警備、頑張れよ。」

そう言い、純は謁見の間を後にした。

一刀「なあ、華琳。」

華琳「何、一刀？」

一刀「華琳が行かなくて良いのか？」

華琳「良いのよ。戦の事は全て純に任せてあるもの。今までもそうだったから。」

一刀「そうなんだ……。」

華琳「それに、お父様からも言われたのよ。『兵を率いて戦場に駆け、天下の争いに与るような事においてはお前は純に遠く及ばないが、才ある者を用いて国を発展させる事については、お前は純より遙かに勝っている。戦の事は全て純に任せ、お前は国の事を考えて互いに助け合え』ってね。」

一刀「へえ……。道理でいつも戦の事は殆ど口を出さずに純に任せてるわけだ。」

華琳「ええ。純を信じてるもの。だから、私は戦に関して口を出さないの。」

一刀「そっか……。」

一刀（本当に信頼してんだな。何か羨ましい……。）

そう思いながら、一刀は華琳を見たのだった。

そして、純は秋蘭、愛紗、稟、風を引き連れ、一万の兵を率いて出陣したのだった。

揚州・建業

その謁見の間の中央には、まさに虎の如き風格を持つている女性がいた。彼女の名は孫堅、字は文台。『江東の虎』の異名を持つ武人だ。

孫堅「冥琳。」

その孫堅に呼ばれて眼鏡を掛けた理知的で綺麗な女性が前に出た。

周瑜「はっ。まずは黄巾党について。呉郡に乱入した賊は皆々様方のお陰で、追い払う事が出来ました。」

周瑜「しかし、黄巾の乱は今や大陸全土に広がりを見せております。漢王朝もそれに對し、中央から軍を派遣していますが、軒並み苦戦を強いられているようですね。」

彼女の名前は周瑜、字は公瑾。孫呉の軍師である。

黄蓋「官軍も落ちたものじゃな。」

程普「士気も練度も低いよ。」

この二人は黄蓋と程普。孫呉の重鎮である。

周瑜「黄巾党は更に勢いを増し・・・その総数は七十万とも八十万とも伝わっております。」

これには

黄蓋「はっ、八十万じゃとおっ!？」

程普「そこまで多いと、もう何が何やらね……。」

この二人も呆れてしまった。

張昭「ぬう……まるでタチの悪い流行病じやな。」

孫堅「しかし、この乱も長くは続くまい。後の世を制するのは、黄巾討伐で力を付けた諸侯よ。」

周瑜「今気になる諸侯といえ、兗州の曹操でしょうか。他にも、冀州の袁紹殿といったのも……。」

黄蓋「ほほう、曹操か。大宦官、曹騰様の孫娘で『黄鬚』曹彰の姉じやな?」

周瑜「はい。洛陽北部尉から現在は兗州州牧にまで出世しました。そして、その弟の曹彰が彼女の出世に大きく貢献しております。」

孫堅「ほう、『黄鬚』か。」

孫堅「かつて俺と祭、そして粹恰があの小僧に一騎打ちをしたが、手も足も出なかつたなあ!!」

黄蓋「むう、あまり思い出させないでいただきたい。」

程普「ええ。私もちよつと……。」

その時

孫策「ええっ!?母様が負けちゃう相手なの!？」

孫堅に似た女性が驚きの言葉を上げた。彼女の名は孫策、字は伯符。孫堅の娘で母親譲りの武勇を持っている。

孫堅「おう!それも一方的にな!!まさに『黄鬚』の異名に相応しかつたわ!!」

孫策『黄鬚』の勇名は聞いていたけど、曹彰つてそんなに強いんだあ。私も一騎打ちしてみたいなあ・・・。」

周瑜「止めてくれ、雪蓮。私も初めて見たとき、震えが止まらなかつたのだからな。」
周瑜「お前なんか、あっさり返り討ちだぞ。」

孫策「冗談よ、冥琳。そんなに睨まないで・・・。」

孫堅「まあともかく、今回官軍の皇甫嵩から援軍の要請が来たのだ。俺達もこれに応え出陣する。各自準備せよ!!」

全員「はっ!!」

そして、孫堅達も出陣をしたのだった。

官軍

官軍武将A「皇甫嵩殿。此度の戦、どうなるのでしょうか？」

皇甫嵩「さあ。私にも分からないわ。ただ、一つだけ言えるのは、漢王朝は厳しいという事だけね。」

官軍武将A「皇甫嵩殿……。」

皇甫嵩「ともかく、今回の戦、必ず勝たなければいけないわ。孫堅殿にも援軍を要請した。あなた達も奮起しなさい。」

官軍武将A「はっ!!では、兵の様子を見て参ります。」

官軍の武将は、そう言つてその場を後にした。

皇甫嵩「はあ……。」

皇甫嵩（今回の戦も、厳しい戦になりそうね。）

皇甫嵩（曹彰さんは、元気にしてるかしら……。勇名は聞くけど、久しく会っていない。……会いたいわ。）

皇甫嵩「曹彰さん……。……はっ、いけないわ!このような気持ちを抱いちゃ……。!」

その時、皇甫嵩は顔を赤くしたがすぐに切り替え、気を引き締めたのであった。

26話

豫州・皇甫嵩軍本陣

官軍本陣に到着した孫堅は、そのまま皇甫嵩のいる天幕へと向かった。

兵士A「名を申せ。」

孫堅「呉郡太守の孫堅だ。そこをどけ！」

兵士A「こ、この無礼者！ここがどこの陣営だと知つての無礼か!!」

孫堅「そんな事どうだつて良いんだよ。どけっ!!」

兵士A「き、きさ．．．！」

皇甫嵩「止めなさい!!」

すると、天幕の中から皇甫嵩が現れた。

兵士A「ち、中郎将様!!しかし．．．!!」

皇甫嵩「良いから、下がりなさい。」

兵士A「は、はい．．．。」

そう言われ、兵士も下がった。

孫堅「お前が皇甫嵩か。俺は呉郡太守の孫堅だ。こちらにいるのは軍師の周瑜と黄蓋だ。」

皇甫嵩「私は皇甫義真よ。知っているとと思うけど、我らの戦況は極めて良くないわ。あなた方が来てくれてどれだけ頼もしいか。戦場での働きはあなた方に任せるわ。」

と皇甫嵩は孫堅にそう言った。

孫堅「ほう。話が早くて助かるぜ。なら、孫軍が先鋒を担おう。」

それに対し、孫堅はそう言ったのだった。

そして、あらかた話し合った後、孫堅達は自陣に戻った。

孫堅軍天幕

孫堅「ふむ・・・陳珪は中々の策士らしいが、曹操を主に選んだか。やはり、あの宦官の孫には用心せねばな。」

周瑜「はい。手の者にその戦ぶりを検分させておきましょう。」

孫策「曹操も出陣してるの？」

周瑜「要請は受けていないようだが、曹操はこの豫州を陳珪に託されている。兵を出さんわけにはいきまい。」

周瑜「それに出すとしたら、弟の曹彰を送るだろう。曹操は、弟に軍の全てを任せているからな。」

孫策「成程ね。」

孫策「それで・・・母様、恐らく先鋒だけど、官軍と協力して行くのでしょ？」

孫堅「いや、俺達だけで行く。我らの力を官軍に見せつけてやるわ。」

孫策「え!? そんな・・・」

周瑜「ああ。どうやら炎蓮様はそういうお考えだ。」

孫堅「ふん。官軍に手柄などくれてやるものか。」

孫策「か、母様・・・もしかして・・・私達五千だけで、黄巾賊にぶつかるともり？」

この時、孫策は母の孫堅に心配そうな顔でそう尋ねた。

孫堅「何か不満なのか？」

孫策「ううつ・・・私・・・頭が痛くなってきたわ。」

そんな話をしながら、翌日となった。

黄蓋「ふむう・・・。」

程普「全く・・・。」

孫策「母様、私達だけじゃ、奴らには勝てないわ。やっぱり官軍と協力して戦うべきじゃない？」

孫堅「皇甫嵩の軍は官軍にしてはしっかりしておるが、我らと連携が出来るか分からん。だったら、我らが先鋒として活躍し、我らの武威を示すまでよ。」

これには

孫策「はー、もう・・・仕方ないわね。母様がそう決めたなら・・・」

孫策も従わざるを得なかった。

程普「冥琳。曹操の動きはどうなっているの？」

周瑜「既に弟の曹彰が一万の兵を率いて向かっております。が、到着はいつになるか・・・」

黄蓋「ほう、一万とな？」

周瑜「その殆どが曹彰の私兵です。恐らく、最精鋭の兵かと。」

黄蓋「ふむう・・・せめて曹彰と共闘出来れば良いのだがな。機先を制する他ないか。」

程普「それが一番ね。敵もいきなり我らがこの数で攻めてくるとは思わないでしょう・・・」

孫堅「この戦、面白くなってきた・・・」

すると、それまでゆったり構えていた孫堅の表情が変わり、それと同時に天幕の空気

の温度も一気に上がった。

孫堅「良いか、貴様ら！今の形勢を有利に持つて行くためにも、まずは敵の前衛を徹底的に叩き潰す！」

孫堅「曹彰、官軍などあてにするでない！豫州の賊退治だろうと、これは孫呉の戦だ！ここで我らの強さを天下に知らしめるのだっ！」

孫策「もう・・・こうなったら、やるしかないわね！」

孫堅「いざ、出陣ぞ！」

全員「「応!!!」」

その檄に全員気合の声を上げたのだった。

戦場

孫堅「・・・！」

孫堅は、戦場で暫く目を閉じていたが、すぐにカッと目を開いて、

孫堅「かかれえええええっ!!」

呉軍 「「おおおーっ!!!」」

呉軍に号令を下し、黄巾と正面からぶつかったのだった。

官軍本陣

周瑜 「始まりましたね・・・。」

皇甫嵩 「しかし、黄巾の勢いも凄まじいわね。こちらの規模に自棄になったか・・・それとも士気を上げる何かがあったか。」

周瑜 「向こうも後がないと悟っているのでしょうか。敵の中に、忠義を尽くすべき何かを胸に抱えて・・・。」

孫策 「連中、思ったより勢いがあるわね。」

黄蓋 「勢いに飲まれておるのじやろう。それが我らが軍師の掌の上とも知らずにの

う。」

孫策「そして引き際を見誤るってわけね。さて、撤退するわよ！」

呉軍「「おおーっ!!」」

そして、呉軍は撤退を始めた。それを見た黄巾軍は

黄巾党指揮官A「敵は引き揚げたぞー!!このままやっちゃまえー!!」

黄巾党「「おおーっ!!」」

追撃を始めた。その時、

黄巾党A「た、大変です!!後方に官軍が・・・!!」

黄巾党指揮官A「な、何だどっ!？」

程普「今よ!!敵を殲滅せよっ!!」

後ろから敵が押し寄せ、

孫堅「今だ!!突撃ー!!」

孫策「行くわよー!!」

黄蓋「殿と策殿に遅れを取るなー!!」

呉軍も反転攻勢をしたのだった。

官軍本陣

皇甫嵩「・・・見事ね。」

周瑜「恐れ入ります。」

そして、

周瑜「よし！火矢を一斉に放て！！相手の動きが鈍ったら、一斉に攻撃せよ！！」

と周瑜が呉軍に命令した。

皇甫嵩「それに続いて私達も行くわよ！！」

そして、一気に大攻勢が始まったのだった。

これで上手く敵を殲滅できれば良いのだが、

黄巾党指揮官A「こうなったら、仕方ねー。このまま奴らに突撃し、一矢報いてやる

！！行くぞ、掛かれーっ！！」

黄巾党「「おおおーっ！！」

向こうが一気に突撃を仕掛けたのだった。

黄巾党指揮官A「進めー、ここが死に場所ぞ！我ら一人残らず、奴らに一矢報いるの

だー！！」

黄巾党 「「おおおーっ!!!」」

孫策 「諦めの悪い連中ね！母様と早く合流したいのに・・・！」

孫策 「全軍、掛かれーっ！敵を打ち破るのだっ！」

呉軍 「「おおおーっ!!!」」

孫堅 「おらああああっ!!」

黄巾党A 「ギャ・・・ッ!!」

孫堅 「ふう・・・。」

黄蓋 「炎蓮様！」

程普 「ご無事ですか!!」

孫堅 「俺は大丈夫だ!!お前らも、気を抜くな!!」

黄蓋 「はっ!!」

程普 「分かってます!!」

官軍本陣

伝令兵「敵の予想外の攻撃に我が軍は混乱しております!! 敵陣にはまだ孫堅様が! 急ぎお助けせねば、お命が!!」

この報告に

周瑜「左様なこと、言われずとも分かっているっ!」

周瑜は焦った雰囲気でそう言った。

伝令兵「も、申し訳ございませんっ!」

皇甫嵩「・・・ご苦勞。下がりなさい。」

伝令兵「はっ!」

周瑜「くううっ・・・!」

すると

皇甫嵩「周瑜さん! しっかりして! あなたが取り乱したらどうするの!!」

と皇甫嵩が周瑜にそう一喝した。

周瑜「っ・・・。」

周瑜「は、はい・・・申し訳ございません。」

それに周瑜は冷静さを取り戻し、謝罪した。

皇甫嵩「前の敵を叩くしかないわ! 孫堅さんを救い出すわよっ!」

周瑜「はっ!」

黄巾党B「うおおおっ!!」

孫堅「らああああっ!!」

黄巾党B「ぐはあっ!」

黄蓋「はっ・・・!!」

黄巾党C「ぐうふ・・・っ!」

程普「はあああああっ!!」

黄巾党D「がはっ!」

黄巾党「うおおおっ!!」

程普「っ・・・次から次へとっ!」

程普「炎蓮様!私の隊が殿を引き受けます!どうかお退き下さい!」

孫堅「たわけ!前にも後ろにも敵よっ!」

黄蓋「我が隊が突破口を開きますゆえっ・・・!」

孫堅「ならん!雪蓮の部隊が来るまで、ここで持ち堪えるのだ!」

その時

黄巾党E「ぬおおおっ!」

程普「炎蓮様！後ろですっ！」

孫堅「っ……！」

黄巾党の一人の一撃を

孫堅「ぐ……っ!!」

孫堅はもろに食らってしまった。

黄蓋「炎蓮様っ!!」

黄巾党E「はあっ、はあーっ……！」

しかし

孫堅「ほほう、良い一撃だ。そのツラ、覚えておいてやろう……。」

黄巾党E「おおおっ!!」

孫堅「おらああああっ!!」

黄巾党E「がふっ!!」

孫堅は返り討ちにしたのだった。

孫堅「ふっ……。」

程普「炎蓮様、お怪我は!？」

黄蓋「誰か！殿の傷の手当てをっ！」

孫堅「騒ぐなっ！ただのかすり傷よっ！」

孫策 「つあああーっ!!」

黄巾党F 「ぐ、ぐふう・・・っ!」

孫策 「クツ、何て敵の数なの!母様の部隊は・・・」

その時、

?? 「ニワーツ!!!」

孫策 「なっ・・・?」

北の方から鬨の声が聞こえた。

孫堅 「あの鬨の声は・・・?」

黄蓋 「北の方からじゃ!!」

程普 「あの軍は・・・!!」

その声の正体は

純 「黄巾共、この黄鬚が相手だ!!死にたい奴だけ掛かって来い!!」

愛紗 「純様に続けーっ!!」

黄鬚隊兵士 「「おおーっ!!」」

純が率いる一万の兵の声だった。

黄巾党G 「て、敵の新手か・・・!」

黄巾党H 「□州の曹軍だっ!」

黄巾党I 「黄鬚だ!黄鬚が来たぞーっ!!」

秋蘭 「放て・・・!」

黄巾党J 「がっ!!!」

黄巾党K 「ぐはっ!!!」

黄蓋 「おおっ!あれは味方かっ!」

程普 「曹軍ね!それも、『黄鬚』曹彰が率いる軍ね!!」
すると

黄巾党 「「うおおおっ!!!」」

黄巾党の何十人かが純に襲いかかったが、

純 「うおりやああああっ!!」

黄巾党 「「ぎやああああっ!!!」」

一太刀で全滅したのだった。

程普 「ツツ・・・!!」

黄蓋「い、今……曹彰は一太刀で何人斬ったのじゃ？」

程普「さあ……。」

これには、程普と黄蓋は哑然としてしまい

孫堅「ほう……。」

孫堅に至つては、何か面白そうに見ていた。

一方の孫策は

孫策「これが噂に聞く『黄鬚』曹彰……。」

純の圧倒的武勇を見て、絶句していた。

官軍本陣

周瑜「曹軍！」

皇甫嵩「曹彰さん……！」

すると、

官軍兵士A「申し上げます。曹彰軍の軍師が挨拶に。」

稟「お初にお目に掛かります。私は主曹彰様の軍師、郭奉孝でございます。此度豫州における賊平定のため我が主が姉である州州牧曹孟徳の代わりに参りました。」

稟が皇甫嵩達に挨拶した。

皇甫嵩「郭奉孝殿、援軍ご苦勞だった。感謝の念絶えないわ。この事、曹子文殿にお伝え下さい。」

稟「かしこまりました。我が主もきつとお喜びになるかと。」

と稟はそう返した。

周瑜（この軍師、中々のキレ者だな……。そして、我らが苦戦した相手をあつさり蹴散らしたこの精強さとその統率力。曹彰……。孫呉の悲願にとって大きな壁だな……。）

この時、周瑜は郭嘉と黄鬚隊を見てそう思ったのだった。

戦いは、純達の加入で一気に形勢が逆転した。

黄蓋「何てデタラメな強さだ……。」

程普「ええ。我らが苦戦した相手をあつさりと……。」

その時

純「どうやら間に合ったようだ。アンタが斬り込み隊の指揮官か？」
と純が馬から降りてそう言った。

孫堅「ふつ、『黄鬚』か。また強くなったな……。ククツ、更に良い面構えになったではないか？」

純「あ……。？」

そう言われた純は顔をよく見ると、

純「……。孫堅殿？」

斬り込み隊の指揮官が孫堅だったという事に驚いたのだった。

孫堅「応よ。久し振りだな、曹彰。曹操は息災か？」

純「姉上は息災だ。」

純「けど呆れたな……。アンタどうかしてんぞ。孫家の当主が自ら、斬り込み隊を率いて敵陣に乗り込んだのか？」

孫堅「そういう性分でな。」

純「俺が来なかつたら、アンタとつくに首だったぞ？」

孫堅「はつ、礼など言わんぞ。これは元々貴様らの戦なのだからな。」

純「ああ、この豫州は姉上が預かった土地だ。これだけの働きをしてくれて、感謝すべきはこちらの方だ。」

孫堅「ならば、礼は受け取っておこう。」

純「・・・そうか。しかし、孫軍は以前より強くなったな。」

孫堅「はっ、これも全て貴様が俺達に勝ったからよ。」

純「ああ、んな事があつたな。」

孫堅「感謝するぞ、小僧よ。」

純「ふっ。」

このやり取りを見て

黄蓋「何とも妙なやり取りじゃな。」

程普「あれで炎蓮様も、一応、曹彰には感謝してるんでしようね。」

そう思ったのだった。そして、戦は純の加入で大勝に終わったのだった。

皇甫嵩「孫堅殿、曹彰殿。あなた方の活躍、何進大將軍にしっかりお伝えします。」

純「分かりました。」

孫堅「そうか。好きにしろ。」

純「それでは孫堅殿、いつの日にかまた会おう。願わくば、味方としてな・・・」

孫堅「ああ、そう願いたいな。さらばだ、曹彰。」

純「ああ。」

その時

皇甫嵩「曹彰さん！」

純「ん？」

皇甫嵩が純に声を掛け、

皇甫嵩「また・・・お会いしましょう。」

と言った。

純「はい、またどこかで。」

拱手しながら言い、純は颯爽と馬に乗ってその場を後にしたのだった。

皇甫嵩（曹彰さん：・・・またどこかで。今度は戦場ではなく、どこか穏やかな場所で・・・。

ああ、曹彰さん・・・。）

それを皇甫嵩は潤んだ目で見たのだった。

孫堅「・・・。」

一方の孫堅は、目を閉じ

孫堅（・・・ふむ、曹彰。また強くなったな。あの齢にしてあの強さ、しかも、まだまだ成長途中。今俺とやったら、確実に負ける。いや、この場にいる皆は全滅だな。）

孫堅（雪蓮が入っても同様だ。我が孫呉は、あれを倒さねば、曹操に勝てぬ……）。
そう考えていた。その後、程普と黃蓋に怪我の治療をしたのだった。

純「稟、風……後の始末は済んだか？」

稟「はい。黄巾の将も主だった者は、殆どが討ち取られ、敗残兵は散り散りに逃亡致しました。」

風「しかし、張角ら三姉妹は見つかりませんでした。」

純「そうか……。そう上手くいかねーか。」

純「しかし、相変わらず孫堅の戦いぶりはスゲーな。」

稟「はい、確かにそうでしたね。」

純「姉上にとつて最大の壁になるな。」

すると、

稟「いえ、その心配はありません。」

と稟は言った。

純「ん？何でだ？」

稟「確かに孫堅は、『江東の虎』の異名に相応しい勇猛さと剛毅さがあります。しかし、

行動が軽はずみで、結果を出す事を急ぐあまり性急な姿勢が見受けられます。彼女は近いうち死に至るでしょう。」

純「ほう……。」

風「純様。稟ちゃんの先見の鋭さは風を遙かに凌ぎますよ。」

純「そうか……。だが、絶対とは限らねーぞ。それを分かって言ってるな。」

稟「はい。」

純「そうか……。覚えておく。秋蘭も愛紗も良くやったな。」

秋蘭「光栄の至り。」

愛紗「はっ!! ありがたきお言葉!!」

純「今後ともよろしく頼むぞ。」

秋蘭「はっ!!」

愛紗「お任せ下さい!!」

そして、純達は陳留に帰還し、華琳に報告したのであった。

27話

謁見の間

純「……とまあ、豫州の黄巾党の残党は平定しました。」

純は、華琳に豫州での黄巾党残党討伐の報告をしていた。

華琳「そう、良くやったわ。」

純「はっ。」

燈「純様、ありがとうございます。」

純「いや、俺は大した事してねーよ。全ては姉上含め皆の力だ。」

純「俺は姉上の命令に従って賊を討ち滅ぼしたまで。全ては姉上の英断のお陰だ。礼を言う相手が違うぞ。」

燈「華琳様、ありがとうございます。」

華琳「構わないわ。豫州を託された身、何もしないわけにはいかなかったのだしね。」

華琳「ところで純。官軍の指揮官は誰だったのかしら？」

純「皇甫嵩中郎将殿でした。」

華琳「確か、あなたと皇甫嵩殿は顔見知りだったわね。」

純「はい。まだ姉上達と洛陽にいたとき、よく賊討伐で一緒になってましたので。」

華琳「そう。そういえば、この前の山中の食料庫を陥とした時の戦、共同作戦だった事にして欲しいと手紙を送ってきた中郎将って皇甫嵩殿と同じ閥だったわね。」

純「ああ。確か・・・」

燈「董卓將軍では？」

純「おう、それぞれ。」

その時、

一刀「董卓・・・」

一刀は三国志の物語に出てくる人物の名前を聞いて、その名を呟いた。

華琳「董卓というのは、どういう人物なの？あの時は恩を恩と解する人物のようだったから引き受けたけれど・・・その口ぶりだと、知っているのでしょうか。燈。」

燈「もちろん。董卓將軍は地方豪族の出ですが・・・」

一刀（流石に董卓は分かるぞ。三国志でもトップクラスの悪人で、時の朝廷を牛耳ってやりたい放題振る舞った、奸雄オブ奸雄みたいな・・・）

と一刀はそう思っていた。しかし

燈「公明正大な人物で、怪異蠢く朝廷の数少ない良心の一つと言えるでしょう。」

一刀（・・・あれえええええ？）

華侖「一刀つち、どうかしたつすか？」

一刀「い、いや・・・ちよつとイメージの相違が。」

自分が知っている三国志とあまりに違っていたので、混乱した。

燈「そちらに手紙を送ってきた際も、贈り物はほんの手土産程度だったのではない？」

華琳「ええ。大量の賄を持ち込んだなら突き放すつもりだったけれど、手紙の文面も礼を尽くした物だったし、土産の趣味も悪くなかったわ。」

燈「恐らく、その文面で感じた通りの人物よ。ただ、そんな性格だし、朝廷では苦勞しているようだけれど。」

華琳「でしょうね。あそこは、正しい者には生きにくい世界だわ。」

純「まあ、俺だったら息が詰まりますよ。」

香風「・・・賄賂を沢山送った人が、強い。」

華琳「官軍の動きも妙だったし、今後はあちらを援護する場面も増えるでしょうね。」

華琳「ああ・・・そうだわ、純。あなた、その賊討伐の時、孫堅に会ったでしょう。」

純「はい、久しぶりに会いました。相変わらずスゲー戦いぶりでしたよ。」

華琳「そう。息災のようね。」

純「他にも、娘の孫策も注目ですね。彼女は、母譲りの武勇の持ち主です。その他に

も、黄蓋、程普といった宿将や、周瑜といった名うての軍師もおりました。我らにとつて大きな壁になるかと。」

純「しかし、稟が言っておりますが、孫堅は行動が軽はずみで、結果を急ぐあまり性急な姿勢が見受けられ、近いうちに至るとの事です。実際、先の戦では『江東の虎』の異名に相応しい戦ぶりでしたが、無理な姿勢が見受けられました。」

華琳「そう。ご苦勞だったわね。今回の討伐の恩賞だけど・・・」

純「それでしたら、俺の部下にお与え下さい。」

華琳「分かったわ。皆には、相応の恩賞を与えるわ。」

純「ありがとうございます。」

華琳「それでは、他に何か報告すべき意見はある?」

桂花「いえ。朝廷の動きは、私の知人を通じて探らせておきます。」

燈「あちらの監視は、私に預けてもらって構わなくてよ。香風さんも色々知っているだろうし。」

香風「んー。あんまり頼りにされても、困る。」

桂花「結構よ。こちらはこちらでするわよ。」

と桂花は燈に対抗心むき出しだった。

華琳「・・・競いすぎてお互い尻尾を掴まれないようになさい。上に睨まれてもつま

らないわ。」

桂花「お任せ下さい！」

燈「ええ、心得ていますわ。」

華琳「黄巾党はこちらの予測以上の成長を続けているわ。官軍は当てにならないけれど・・・私達の民を連中の好きにさせることは許さない。いいわね！」

季衣「分かっています！全部、守るんですよ！」

華琳「そうよ。それにもうすぐ、私達が今まで積み重ねてきた事が実を結ぶはずよ。それが、奴らの終焉となるでしょう。」

一刀「・・・どういう事だ？」

華琳「いざれ分かるわ。・・・それまでは、今まで以上の情報収集と連中への対策が必要になる。」

華琳「民達の血も米も、一粒たりとて渡さないこと。以上よ。」

そして、その日の軍議は解散となった。

関所

一刀「相変わらず華琳の考えは良く分かんないな・・・。」

秋蘭「我々には及びもつかん事を考えていらつしやるお方だからな。仕方ないさ。」

一刀「純は、華琳の考えている事を理解できてるのかな？」

秋蘭「純様は、華琳様の考えを理解していないはずだ。あのお方は、そういうのは苦手だからな。」

秋蘭「だが、純様は常に仰つていた。『俺達に出来るのは、分かつとうとする事と、信じることだけだ。だったら俺は、姉上の道をこの武で切り開く』とな。」

一刀「・・・凄いな。」

秋蘭「あのお二人は、互いに互いを信頼し合つておられる、ある意味理想の姉弟関係なのかもしれないな。」

香風「・・・間違っていない事は、大体分かる・・・。」

一刀「・・・だよなあ。」

その時、

純「何の話してんだ、お前ら。」

純が現れた。

秋蘭「純様、いえ、何でもありませんよ。」

純「そっか……。」

一刀「それはそうと、何で今さら国境警備の視察なんだ？しかも冀州との間の。」

純「最近では黄巾党の影響で、各地の出入りが厳しくなっているからな。それが正しく行われているかを確かめる必要があるんだよ。」

秋蘭「もつとも、州は他よりも厳しくないはずだが。」

旅人A「こんにちは、お役人様。」

香風「こんにちはー。」

一刀（とはいえ、こうやって街道でのんびり馬を進めると、旅の人達が時々声を掛けてくれるしな。）

旅人B「どうも、ごきげんよう。お役人様。」

秋蘭「うむ。」

純「ああ。」

一刀（たまに、何か明らかに怪しいものもあるけど……。）

一刀「……なんか、明らかに怪しいのいない？捕まえた方が良くない？」

香風「悪い事してないのに、捕まえられない。」

純「それに、怪しいと思った者全て捕まえていては、兵がいくらあっても足んねーぞ。」

香風「栄華様も、怒る。」

一刀「……そりやそうか。」

そうやって暫く視察をしていたその時だった。

兵士A「捕まえてくれ！関所破りだ！」

という声が聞こえた。

一刀「香風！」

香風「分かつてる。」

純「その必要はねーよ、秋蘭！」

秋蘭「はっ！」

それを聞いた秋蘭は、馬にくくり付けていた弓をひよいと取り上げ、つがえた矢を素早く引き絞った。

秋蘭「……無理に関など破らねば、この場にいる純様は貴様を受け入れて下さったものを。」

そう言つて、秋蘭は関所破りに向けて矢を放った。

関所破り「がっ!?!」

その矢は、関所破りの肩にまるでそこに最初から決まっていたかのように吸い込まれていった。

一刀「……相変わらず凄まじい腕前。」

これには、一刀はもう驚かず

純「おおう。お前また腕上げたな。」

純は額に手をかざして見ながらそう言った。

秋蘭「いえ、まだまだ純様には遠く及びません。それに聞いたことがあるでしょう、長沙の辺りにはこの倍の距離でも外さない弓使いがいることを。」

一刀「純も弓が得意なの？」

純「俺、実は弓が得意なんだよ。」

秋蘭「純様は馬に乗りながら矢を三本つがえた状態で矢を放って、全てど真ん中に命中させたからな。」

一刀「そ、そうなのか・・・!?」

一刀（それは凄いな・・・。）

秋蘭「上には上がいるという事さ。・・・さて、肩ならば致命傷になっていないはずですが。」

そして、純達は関所破りに近づいた。

関所破り「うう・・・痛え・・・。」

香風「お兄ちゃん、この人・・・。」

一刀「ああ。見るからに怪しい奴だな。」

純「関所に払う金がねーのか、後ろめたいと思う気持ちがあつたのだろうか。まあその分、救いようがあるんだがな。」

そう言つて、純は関所破りを見ていると、

純「ん？」

懐に何かを発見した。

一刀「どうしたの？」

秋蘭「どうかなさいましたか？」

香風「純様？」

純「こいつの懐に何か入ってる。・・・何だこれは、手紙か？」

そう言つて、懐から取り出し、広げて見てみた。

純「これは・・・！」

秋蘭「純様？」

純「これを見てみる。」

そう言い、純は秋蘭達に見せた。

一刀「集合場所の連絡・・・？つて事はこいつ、黄巾党の一員つて事か!？」

秋蘭「いきなり情報が転がり込んで来ましたね。」

純「ああ。」

一刀「けど今まで、連中こんなにしつかり連絡を取ろうとなんてしてなかったな。俺、黄巾党の連絡文書なんて初めて見たぞ。」

香風「沢山人が増えたら、ちゃんとしないと駄目。」

秋蘭「もしくは、官僚か野に下った者なりが、官や軍のやり方を教え込んだか……」
一刀「それは……マズイんじゃないの？」

純「誰が何を信じるかなど、俺達が決める事じゃねーよ。……俺達に言えるのは、なまじ知恵を付けた輩の方が与しやすいというだけだ。おい、連れて行け。」

兵士A「はっ。ご協力、感謝致します。」

そう言つて、兵士は関所破りならぬ、黄巾党の連絡兵を連れて行つた。

純「手柄だな、秋蘭。」

とその時純は秋蘭にそう直接褒めた。それを聞いた秋蘭の頬は緩みに緩んでいたのは内緒である。

謁見の間

華琳「大手柄ね、秋蘭。」

秋蘭「・・・はっ。」

桂花「連中の物資の輸送経路と照らし合わせて検証もしてみました。敵の本隊で間違いないようです。その後、凧と沙和を偵察に向かわせましたが・・・。」

凧「はい。張三姉妹と思われる三人組も、見受けられました。」

華琳「間違いないのね?」

沙和「うん。三人がああ歌を歌って、黄巾の兵士達がみんなそれを聞いてたの。すっごく楽しそうだったの。」

華琳「・・・楽しそうだった?」

沙和「なの!」

華琳「分からないわね・・・何かの儀式?」

凧「詳細は不明です。連中の士気はやたらと上がっていたようでしたので、戦意高揚の儀式かもしれませぬ。」

それを聞いた一刀は

一刀「まるでライブだな。」

と言った。

春蘭「らいぶ?また天の国の良く分からんやつか。」

一刀「ええつと・・・大人数で歌手の歌を聴く集會みたいなものだよ。俺が居た世界じゃ、千人や万人単位の集まりもあつたなあ。」

春蘭「万も集まるなど、完全に戦場ではないか。だが、それで声は聞こえるのか？号令や銅鑼ならともかく、歌だぞ。」

一刀「そりやそうなんだけど・・・」

真桜「なんや凄い絡繰があるんやな！流石天の国やな！」

一刀「・・・ああ。そういう絡繰があるんだ。詳細は省くよ。」

春蘭「相変わらず胡散臭い世界だ。」

華琳「・・・で、それは何をする集まりなの？宗教儀式？」

一刀「娯楽の一環だよ。旅芸人の規模が大きくなっただけ。今回は風達の言う通り、兵の士気高揚も兼ねてるんだらうけどね。」

華琳「そう・・・」

一刀「実際に効果があるかは、黄巾党の意味不明な団結や士気の高さを参考にしてくれ。」

華琳「そうすることにしましょう。ともかく、この件は一気にカタが付きそうね。」

華琳「動きの激しい連中だから、これは千載一遇の好機と思いなさい。皆、決戦よ！」
そして、皆は出陣の準備をしたのであつた。

28話

別働隊

華命「愛紗ー。秋姉えー。本隊、到着したそうっすよー。」

一刀達先遣隊が最後の偵察を終えた頃。そんな報告を華命が持つて来てくれた。
愛紗「そうですか。」

秋蘭「そうか。各隊の報告はまとまったか？」

真桜「ちょうど終わったところやで。連中、かなりグダグダみたいやな。」

秋蘭「ふむ。華琳様の予想通りか。」

愛紗「そうだな。」

一刀「なあ。華琳の作戦って結局何だったんだ？」

秋蘭「後で説明するさ。まずは報告を聞かせて貰おう。真桜。」

真桜「はいはい。連中の総数やけど、約二十万。」

これには、

一刀「二十万って!?!おいおいマジか!」

沙和「うはー。もの凄い大軍勢なの……。」

香風「本隊って言っても、多い。」

季衣「それって……僕達だけで勝てるんですかね?」

と、皆それぞれ本隊の数に驚いていた。

真桜「まあ聞きや。総数は二十万やけど、そのうち戦えそうなのは……三万くらいやな。」

愛紗「成程、そういうことか……。」

秋蘭「ふつ。愛紗は分かったようだな。」

一刀「えつ、残りの十七万はどこに行ったの?」

真桜「武器も食料も全然足りてへんみたいなんよ。その割に、さつきもどつかの敗残兵みたいなのが合流しとったから……。」

凧「二十万というのは、その敗残兵も合わせた数ということか。」

真桜「せや。陣のあつちこつちで小競り合いも見えたから、一枚岩つちゆうわけでもないな。見た限りじゃ仲裁もなかったし、指揮系統もバラバラなんちゃうか?」

華命「でも、なんでそういう連中が今頃合流してるんすか?そういうのって、関所で止められるんじゃないんすか?」

華命のその疑問に

秋蘭「大軍ならともかく別れて数名ずつで抜ければ、関所は止めんよ。華琳様がそういう命を出しておられるからな。」

秋蘭がそう答えた。

一刀「・・・えげつないな、華琳。」

一刀（そいつらが略奪でも働けば、純を筆頭に春蘭や真桜達治安維持の部隊が叩き潰すし・・・合流すれば、黄巾党本隊の敗残兵が増える。）

一刀（補給部隊も香風や凧が地道に潰してたはずだから、本隊の負担は多分乗算的に増えていったはずだ。）

真桜「・・・それ、褒め言葉に聞こえへんで。隊長。」

秋蘭「黄巾を旗印に団結を旨とする集団なら、来たものは陣内に取り込むしかないだろうし、拒絶すれば内々に火種を生む遠因となる。」

秋蘭「その結果は・・・見ての通りだ。」

凧「神出鬼没の人食い熊も、太り過ぎればただの的、という事ですね。」

しかし凧の例えは、

真桜「太りすぎたら・・・。」

沙和「・・・イヤな例えなの。」

この二人には不評だった。

香風「……?」

季衣「熊なら僕、いくらでもやっつけるよ!」

華侖「それで、どうするっすか? 作戦は、最初のでいいんすか?」

秋蘭「問題なからう。華琳様と純様の本隊に伝令を出せ。皆は予定通りの配置で、各個攪乱を開始しろ。」

秋蘭「攻撃の機は各々の判断に任せるが……張三姉妹を殺すような真似だけはするなよ。以上だ。」

黄巾党本隊

黄巾党兵士A「張角様! 張宝様! 張梁様!」

人和「何? そんなに慌てて。」

黄巾党兵士A「申し訳ありません! しかし、急用だったもので……!」

天和「急用……?」

黄巾党兵士A 「敵の奇襲です！各所から、火の手が！」

人和 「何ですって！すぐに消火活動を！」

黄巾党兵士A 「各々でやっているようですが、火の手が多いのと誰に指示を受ければ良いかが分ならず……！」

すると、

黄巾党兵士B 「張角様！大変です！火事ですっ！」

黄巾党兵士C 「張宝様！大変です！」

黄巾党兵士D 「張梁様！火事が……！」

色んな報告が三姉妹に届いたので、

地和 「ああもうっ、ちゃんと聞いてあげるから、一列に並びなさいっ！」

収集がつかなくなってしまったのだった。

人和 「く……っ。人ばかり無駄に増えているから……！」

黄巾党兵士たち 「「どうしましょう！」」

人和 「ともかく、敵の攻撃があるならまずはその対処を！火事も手の空いている者が

協力して消して！」

黄巾党兵士たち 「「はいっ！」」

人和 「……まったくもう。」

天和「れんほーちやあん・・・」

地和「人和・・・」

人和「・・・もう潮時ね。誰かが付いてくるかもなんて言っている場合じゃないわ。・・・よつと。」

天和「何？その荷物。」

人和「逃げる支度よ。三人分あるから・・・三人でもう一度、初めからやり直しましょう。それでいいなら、荷物を取って。」

地和「仕方がないわね。でも、二人がいるなら。」

人和「また貧乏との戦いだけど、いい？」

地和「楽しく歌えるなら、そっちの方がずっとマシよ。」

天和「そだねー。ちーちゃんとれんほーちやんがいれば、何度だってやり直せるよね」
♪

人和「そうだ、これも・・・」

その時、人和がある一冊の本を取った。

地和「太平なんとか、だっけ・・・？」

人和「そうよ。これがあれば、いくらでも再起が図れるもの。」

天和「もうそんなのいいよ。二人がいれば何もいらなから、早く逃げようよー！」

そう言つて、三人は逃げる準備を始めたのだつた。

曹操軍本隊

栄華「お兄様。敵陣の各所から火の手が上がりましたわ。秋蘭さん達が行動を開始したようです。」

柳琳「秋蘭様から伝令が届きました！敵の状況は完全に予想通り、当初の作戦にて奇襲をかけると、こちらも作戦通りに動いて欲しいとの事です。」

純「了解……。しかし、流石姉上ですね。こうも黄巾の連中をじわじわと追い詰めるとは。」

華琳「あなたの戦場での働きほどではないわよ。」

純「いえいえ。姉上のお陰で、俺も戦場で武を振るいやすくなるものですよ。」

華琳「そう。なら、いつも通り戦場は任せたわよ。」

純「はっ！桂花、稟、風！指揮は任せたぞ。」

桂・稟・風「「御意！」」

春蘭「しかし、先日はあれ程苦戦したというのに……何ですか、今日の容易さは。」
それに桂花は、

桂花「苦戦したのは春蘭が馬鹿だからじゃないの？」

そう答えた。

春蘭「なんだとう！」

純「少数の兵で春蘭程度をあしらえる器はいても……、あれほどの規模の兵を纏め、扱える器はいなかった。それだけの事だ。」

春蘭「なるほど。私程度を……って純様！それは酷うございます！」

純「はは、冗談だ。」

華琳「あなたなら、あれ程の規模の兵を纏め、上手く扱える事は出来るわ。何せあなたは、大將軍の器なのだから。」

純「ありがとうございます。」

華琳「それより喜雨。燈はともかく、貴女まで来る事はなかったのよ？」

喜雨「ううん。この大陸を散々荒らして、豫州の作物もたくさん略奪して回った連中だもの。その最後くらい、僕にも見届けさせて。」

喜雨「戦場で役に立たない自覚はちゃんとあるから、始まったら邪魔にならない所に退がるよ。後方で良い？」

華琳「後方は奇襲が来るかもしれないから、安全ではないわ。見届けたいと言うなら、燈と共に私の側にいなさい。いいわね？」

桂花「純様。そろそろ、こちらにも動こうと思うのですが。」

純「もうか？もう少し時間があるかと思っただけど……秋蘭達、張り切りすぎじゃねーのか？」

桂花「向こうの混乱が輪をかけてひどいのでしょうか。こちらの準備は出来ていますので、お早くお願いいたします。」

桂花「急がなければ、張三姉妹がこちらではなく身内に殺されかねません。」

純「それは問題だな……分かった。それでは姉上、皆に言葉を。」

華琳「あら、私が？あなたでも良いのよ？」

純「ここは霸王に相応しい姉上が相応しいかと。それに、先の戦では掛けられませんでしたし。」

華琳「そう。分かったわ。」

そして、華琳は前に立ち

華琳「皆の者、聞け！」

華琳「汲めない霧は葉の上に集い、すでにただの雫と成り果てた！」

華琳「奴らを追って霧の中を彷徨う時間はもうお終い。今度はこちらが呑み干してや

る番よ!」

華琳「ならず者どもの寄り合い所帯と、我らとの決定的な力の差……この私に、しつかりと見せなさい。」

そう兵士に鼓舞し

純「総員、攻撃を開始せよっ!」

純によつて全軍に総攻撃の命を下したのだった。

別働隊

一刀「凧。華琳達の本隊が来たぞ!」

曹の旗を掲げた本隊が、大地を揺らしながら突っ込んだ。

凧「流石、予定通りですね……。」

一刀「なら、そろそろ俺達も合流しよう。」

愛紗「北郷殿。私も大丈夫です。」

一刀「……華命達は?」

すると

華侖「一刀っちー！愛紗ー！凧ー！」

沙和「隊長、愛紗ちゃん、お待たせなのー。」

華侖達がやって来た。

一刀「お、来たな。」

愛紗「みんな大丈夫でしたか？」

沙和「大丈夫なの。っていうか、沙和達何もしてないのに向こうが勝手に崩れていったの・・・。」

一刀（そんな、パソコンが壊れたみたいない言い方されてもだな・・・。）

季衣「だから、華琳様と純様も来たし、そろそろかなって。」

華侖「秋姉えや香風は、もう右翼の応援に行つたつすよ！」

一刀「よし、なら俺達も急いで本隊に合流しよう。」

凧「隊長、指示を。」

一刀「現場の指揮は皆に任せるよ。季衣、お願いして良い？」

季衣「うー。僕、そういうの苦手なんだけどなあ・・・誰かやってくれない？」

沙和「そういうの、愛紗ちゃんが得意なの！」

愛紗「いや、そこはご一門の華侖様がやるべきでは・・・。」

しかし

華侖「愛紗の号令、聞いてみたいっす！」

そう言い

沙和「ほらほら愛紗ちゃん、華侖様もそう言ってるの。」

愛紗「やれやれ・・・了解です。なら・・・。」

仕方なく号令を掛けた。

愛紗「これより我らは本隊に合流し、本隊左翼として攻撃を続行する！ただし張三姉妹は生け捕りにせよ！総員、今まで連中に味わわされた屈辱と怒り、存分に返してやれ！」

兵士「応っ！」

愛紗「全軍突撃ーっ！」

そして、黄巾本隊との戦いが始まった。

季衣は、愛用の反魔を振り、黄巾党を吹き飛ばし、凧もそれに負けじと気弾で一氣に数人を吹き飛ばした。

真桜も螺旋槍で敵を一掃し、愛紗は青龍圓月刀で黄巾党を斬り、部隊の巧みな指揮で敵を追い詰めていったのだった。

とある場所

地和「この辺りまで来れば・・・平気かな。」

天和「もう声もだいぶ小さくなってるしねー。・・・でも、みんなには悪いことしちゃったかなあ？」

人和「難しいところだけれど・・・こればかりはどうしようもないわね。正直、私だつてこんな事になるなんて思つてなかつたし・・・。」

地和「けど、これで私達も自由の身よっ！ご飯もお風呂も入り放題よねっ！」

人和「・・・お金ないけどね。」

地和「う・・・。」

天和「そんなの、また稼げばいいんだよ。ねー？」

地和「そう・・・そうよ！また三人で旅をして、楽しく歌つて過ごしましょうよ！」

人和「で、大陸で一番の・・・。」

地和「うん！今度こそ歌で大陸の一番になるんだからっ！」

天和「がんばろーっ！」

天・地・人・命「「おーっ！」」
その時、

天和「あれ、何か多い気が・・・」

一人多いことに気付いた時、

地和「・・・え、ちよつと！あんた誰よ！」

華命に誰かを尋ねたのだった。

華命「え？あたしは華命つす！」

地和「そうじゃない！何者だつて聞いているのよ！」
しかし、

華命「華命は華命なんすけど・・・あれ？じゃあ、華命じゃない何者だつていうなら、
あたしは何者なんすか・・・？」

全く話が伝わっていなかった。

地和「・・・なんだか姉さんがもう一人増えた気がする。」

天和「えー。ちーちゃんひどーい。それに華命ちゃんだつて、華命ちゃんつて名乗つ
てるじゃない。」

人和「姉さん、多分それ真名・・・」

天和「あー。ごめーん。訂正するねー。」

華侖「あはは。大丈夫つす！氣にしないつす！」
すると

沙和「華侖様ー。どこに行っちゃったのー。」

華侖「あ、沙和ー！こつち、こつちつすー！」

沙和「もう。探したのー！」

沙和が馬に乗って頬を膨らませながらやって来た。

地和「なんか増えた……。」

沙和「あつ！」

天和「えつ。」

人和「……まさか！」

すると、

沙和「もしかして、三人つて張三姉妹なの？」

そう言うと、

天和「えー。お姉ちゃん、有名人？」

そう言ったが、

人和「ちよつと姉さん、ここで張三姉妹なんて名乗っちゃダメよ。敵方の追っ手かも
しれないんだから。」

そう注意した。

沙和「沙和、三人の歌大好きなの！いつも歌ってるの！」

華侖「あたしも大好きっす！」

地和「ホント!? ありがとー！」

天和「ほら人和ちゃん。私達の歌を応援してくれてる人が、追っ手なわけないよ。こつちの部隊の偵察の誰かじゃないの？」

人和「そ、そうなのかしら・・・？」

地和「ええっと、揮毫はここでいい？」

華侖「わーい！おつきく書いて欲しいっすー！」

人和「ちよつとちい姉さんもなんでそんなに適応してるのよ。」

地和「え、だつてちゃんと応援してくれる子なら大事にしないと。」

人和「時と場合によるでしょ！」
すると、

愛紗「・・・私もそうだと思うぞ。」

凧「私も同感だ・・・。」

愛紗と凧がやって来た。

華侖「あ、愛紗ー。凧ー。」

天和「あら、二人の友達？」

地和「あなた達も私達を応援してくれてる人？」

凧「それはまあ、応援していいと言えは嘘になりますが……。あなた方の歌にはとても感銘を受けましたし、あの歌がなければ私はここに立っていないでしょうし……。」

愛紗「それは私もだな……。」

天和「ほらね。人和ちゃんは心配しすぎなんだってばー。」

愛紗「いや、そうでもないさ。」

沙和「なの……。ごめんね。応援はしてるけど、沙和達その追っ手なの。」

天和「えええええ……。」

華侖「大人しく捕まって欲しいっすー。」

地和「ちよつと、あんたまで曹操軍の一員ってこと!？」

天和「どうしよう……。もう護衛の人達もいないよー？」

地和「くうう……。まだあんな事やこんな事もしてないのにー!」

人和「だから言っただじやない。時と場所を考えろって……!」

愛紗「……。とはいえ、乱暴にするつもりはない。大人しく付いて来るなら、悪いようにはしないと約束しよう。」

人和「・・・付いて行かなかったら？」

沙和「えー。困っちゃうの・・・。」

地和「もしかして、その一際大きい圓月刀でちい達を斬り殺すの!？」

愛紗「いや、殺しはしない。」

凧「うむ。幸い私は無手の心得があるからな。お主らを傷付けずに捕まえることは出来る。」

天和「でも、痛いんでしょ？お姉ちゃん、痛いのは嫌だなあ。」

その時、

黄巾党兵士E「張角様っ！」

黄巾党の残党がやって来た。

凧「!？」

黄巾党兵士F「テメエ！俺達の・・・」

しかし、

愛紗「はあああっ!!」

ズバッ・・・

全員「!!?!？」

話が終わる前に彼らは愛紗によって斬り殺された。

愛紗「・・・それで、お前達は私達に付いて来るのか。もし断れば、両手両足をへし折つてでも連れて行くぞ。」

愛紗はそう言つて殺気を出すと、三姉妹は顔を真つ青にしながら首を縦に振つた。

その時の愛紗の様子は、まるで修羅のようだったと、その場にいた皆は語つていたのであつた。

29話

曹操軍本陣

純「姉上、これは黄巾党指揮官の首です。奴らを殲滅させ、残りは捕虜にしました。」
純は左手に持った首を華琳の前に投げた。

華琳「捕虜にした者は、纏めて郷里に送り返させなさい。」

純「はっ！」

華琳「……で、あなた達が……張三姉妹？」

振り向いた華琳の目の前に並んでいるのは、愛紗達が連行してきた三人の少女だった。

地和「え、ええつと……あ、あの……その……うつぶ。」

しかし、純が首を持って来たから三姉妹の顔は青ざめ振るえてしまい、地和に至っては吐き気を催していた。

華琳「ごめんなさいね、弟は戦になるとこうなるから。」

人和「え、あ……はい、大丈夫です。」

華琳「季衣、間違いない？」

季衣「はい。僕が街で見届けたのと同じ人達だと思います。」

喜雨「・・・この三人が、張三姉妹。」

そして、その三姉妹を喜雨は一刀の隣で見つめていた。

華琳「喜雨。思う所は色々あると思うけれど。」

喜雨「・・・分かつてるよ。」

一刀（沛国は、城から村々に至るまで、どこもかしこも黄巾党に荒らされてるものな・・・。）

一刀（張三姉妹が直接手を掛けたわけじゃないにしても、農業指導をして回ってた喜雨からすれば何とも言えない気持ちになるはずだ。）

喜雨「無理を言つて同席させてもらったんだから、大人しくしてるよ。華琳様にこれ以上迷惑は掛けないから。」

一刀「けど、どうしてこんな事をしたんだ。見たところ普通の旅芸人みたいだけど・・・？」

天和「みたいじゃなくて、普通の旅芸人だよ。」

人和「・・・色々あったのよ。」

華琳「色々では分からないわよ。子細に話しなさい。」

地和「……やっぱり、話したら斬る気じやないの？」

華琳「それは話を聞いてからね。あなた達が黄巾党を率いて各地の略奪を行ったといふなら、私達も相応の対応をせざるを得ないわ。」

地和「ちい達がそんなことするはずないでしょ！」

天和「そうだよ。お姉ちゃん達だって巻き込まれたんだから！」

その時、

喜雨「自分達でこの騒ぎを巻き起こしておいて……！」

天和と地和の被害者ぶる態度に喜雨は怒りの声を上げた。

華琳「喜雨。」

喜雨「……分かつてる。悪かったよ。」

それに華琳は止めたのだった。

地和「その子は？」

華琳「沛国の農業を指導していた子よ。今は□州と豫州の村々を巡って、働いてくれているわ。」

華琳「沛国は、黄巾党の大規模な襲撃を受けて、城まで落とされ掛けたの。勿論村々の被害も相当なものだったわ。私の隣にいる弟が中心にやらなかったら、今頃どうなっていたか……。」

人和「……。」

淡々と語る華琳の言葉に、思う所もあつたのか、人和はしばらく黙つていたが、

人和「……分かつたわ。全て話す。」

天和「人和ちゃん？」

人和「ただし、私達三人の命を助けてくれる事が条件よ。そうでなければ、私は何一つ口にしないわ。」

華琳「いいでしょう。」

そして、人和は、自分達がこれまで辿つてきたこれまでの道程を話し始めたのだった。

秋蘭「各地を歌つて回つて、気が付いたらおかしな信奉者が増えていたと。」

天和「うん。夜、厠に起きたら壁の向こうからこつちを見てる人とかもいたし……怖かつたあ。」

栄華「……これだから男なんて油断出来ないのですわ。気持ち悪くて、臭くて下品で汚くて。少しはお兄様を見習つて欲しいですわ。」

桂花「ええ。使つた後の厠に入つて匂いを嗅ぐとか、お風呂に忍び込んで脱ぎたての下着を集めるとか、まだ温もりの残る寝台に乗つてゴロゴロするとか、人としての品性

を疑うわ。」

一刀「張梁はそこまで具体的には言っていないぞ、桂花。」

一刀（つていうかなんでそんなにストーカー事例が生々しいんだよ。）

しかし、

栄華「……。」

栄華は温もりの残る寝台に乗ってゴロゴロするという言葉聞いて思う所があるのか、少し目線を逸らした。

人和「ただその頃には、護衛を申し出てくれるきちんとした子達もいたから……そのうち、その子達と行動するようになって」

凧「……その規模が、気が付いたら大きくなりすぎていた。そういうことか。」

人和「ええ。最後のあたりは噂を聞いた子達がどんどん来るようになって、完全に収拾が付かなくなってたけど。あれ、あなた達の策略でしょ。」

華琳「さあ、どうかしらね。」

一刀「……じゃああの黄色い布も、張三姉妹を応援してます、つて見分ける印っただけだったの？」

人和「ええ。それで簡単に区別が付くでしょう。……もつとも、私達の歌も聞いた事のない連中にまで利用されるようになったのは誤算だったけれど。」

華琳「それにしても．．．やはり太平要術の書は、貴女達が持っていたのね。」

天和「うん。応援してくれてる、っていう人にもらったんだけどー。逃げてくるとき、置いてきたの。」

華琳「そう．．．。」

人和「私達の天幕は陣の中枢部にあるから、あの火勢では恐らくもう灰になっているはず。」

人和「色々凄い事が書いてあつて、ただの書物ではないとは思っていたけど、やはり曰くのある書物だったのね。」

華琳「ええ。けれど、そう．．．あの書は灰になったのね。」

純「姉上。もう一度、あの陣に火を放ちましょう。」

華琳「ええ、そうね。誰かに悪用されては、また今日のような事態になりかねないわね。」

純「はい。秋蘭、あの陣にもう一度火を放っておいてくれ。」

秋蘭「承知致しました。」

天和「それで、これから私達をどうするつもり？これで私達の知っている事は全て話したけど．．．。」

華琳「そうね．．．。貴女達から見た、黄巾党の事は分かったわ。」

華琳「喜雨。」

喜雨「何？」

華琳「貴女はどうしたい？少なくとも、ここで一番彼女達に憤りを感じているのは貴女でしょう？」

喜雨「僕……？」

一刀「そうか。だから、華琳は……」

喜雨「……そうだね。」

喜雨「でも、それは……みんな同じだよ。村を焼かれたり、襲われたりした人達の気持ちなら、確かに僕が一番聞いていると思うけど……」

喜雨「黄巾党の情報を集めたり、街を守って戦ったり、城を落とされたり……悔しい気持ちは、多分村以外のみんなも同じだと思うから。」

思う所があるのか、喜雨は自らを納得させるように拳を強く握り、きつく目を閉じていた。

喜雨「最初に言った通り……戦場では純様、このような話し合いは華琳様の判断に従うよ。」

華琳「そう……」

人和「やはり、都に連れて行って処刑するの？それとも、塩漬けにした首を晒し者に

する？」

地和「ちよつと、やつぱり殺すんじゃない！」

天和「やだー！お姉ちゃん死にたくなーい！」

天和「どうせ死ぬなら、せめて好きな人を作つて、美味しい物たくさん食べて、思いつきり歌つて可愛いお婆ちゃんになつて、可愛い孫の笑顔に囲まれて死にたかつたー！」

一刀「それ、完全に天寿を全うしてるよな。」

華琳「・・・ふむ。」

華琳「死なずに済む方法も、ないわけではないわよ。」

地和「・・・どういふ事？」

天和「えっほんと？お姉ちゃん死にたくない！するする！なんでもする！」

人和「命乞いが早すぎるわよ姉さん。せめて条件を聞いてからにして！」

華琳「太平要術の書のおかげかどうかは知らないけれど、あなた達の人を集める才覚は相当なものよ。」

華琳「それを私のために使うというのなら・・・その命、生かしてあげても良いわ。」

地和「何？どういふこと？まさかちい達を兵士の慰問の道具にするとかじゃ・・・！」

華琳「・・・半分は間違つていないわね。」

天和「えーっ！やだーっ！お姉ちゃん、初めては好きな人がいい！」

その時、

ヒュッ、ザクッ

天・地・人「「!?!」」

地和の横に槍が飛んできて、地面に刺さった。

華琳「純。」

一刀「お、おい、純!?!」

純「すいません。ちよつと野良犬が横でキャンキャンうるさかったので、黙らせるために槍を投げたのですが、少々手元が狂ってしまいました。」

華琳「・・・そう。」

純「ご安心を。次は確実に仕留めます故・・・。」

そう言つて、純は槍を手に持った。

地和「ひっ!?!」

天和「あ、あの・・・!?!」

その際、天和と地和の顔は、青を通り越して真っ白になり、涙目になっていた。

一刀「お、おい、純!!」

華琳「やめなさい、純。その槍を下ろしなさい。」

純「・・・御意。」

華琳の声を聞いて、純は槍を下ろした。すると、天和と地和は完全に腰が抜けてしまい、後もう少しで漏れてしまうところだった。

人和「・・・詳しく聞きましょう。姉さん達も良いわね？」

その時、天和と地和は壊れたロボットののように首を素早く縦に振った。

華琳「賢明ね。これ以上私の弟を怒らせない方が良いわよ。我が『黄鬚』は、貴女達を殺すのは造作もないから。」

天・地「コクコク。」

人和「分かったわ・・・。」

華琳「私が大陸に覇を唱えるためには、今の勢力では到底足りない。だからあなた達の力を使い、兵を集めさせてもらおうわ。」

華琳「あれだけの賊を熱狂させ、ここにいる将達にも少なからずの影響を与えた、その歌の力でね。」

人和「兵を集める？その為に働けど・・・？」

華琳「ええ。活動地域は・・・そうね。私の領内なら、好きに動いて構わないわ。通行証も出してあげる。」

すると、

地和「ちよっと。領内ならって、それじゃ私達が行きたい所に行けないって事じゃな

いっ！」

立ち直った地和が文句を言ったが、

人和「・・・待つて。ちい姉さん。」

地和「何よ。」

人和が止めた。

人和「・・・曹操。あなた、大陸に覇を唱えるということは・・・これから自分の領

土を広げていく気なのよね。」

華琳「ええ。」

人和「そこは私達が旅出来る、安全な所になるの？」

華琳「貴女達のためではないけどね。」

人和「・・・分かったわ。その条件、飲みましょう。その代わり、私達三人の全員を

助けしてくれる事だけは譲れないわよ。」

華琳「交渉の必要もなさそうね。私達が欲しいのは貴女達三人だもの。一人でも欠け

ては、利用価値が落ちてしまうわ。」

地和「利用価値って・・・人和、こんなヤツら相手に何勝手に決めてるのよ！姉さん

も何か言つてやって！」

しかし、

天和「えー。だってお姉ちゃん、難しい話ってよく分かんないし……。そう返されてしまったので、

地和「あーもう役に立たないわねっ！」

地和は頭を抱えたのだった。その姿を見ていた秋蘭は、

秋蘭「……。」

春蘭「……どうした秋蘭。なぜ私を見る。」

秋蘭「いや……。何でもない。」

自分と照らし合わせてしまった。

一刀（気持ちは良ーく分かるぞ、秋蘭。）

稟「……。」

純「……悪かったな、稟。」

稟「……はい。けど、まだ純様はマシです。」

稟も、純の事を少し見たのだった。

人和「でも、一つだけいい？」

華琳「何かしら？」

人和「私達が歌って、あなたの兵を集める。その方針は理解したわ。」

人和「けど、私達はお尋ね者よ。その件はどうするつもり？もみ消すの？」

燈「……これだけの規模の騒乱になつては、もみ消すのはもう無理でしょうね。」

華琳「別に。」

人和「別につて……！」

華琳「あなた達、ひとつ誤解しているようだけれど……あなた達の正体を知っているのは、恐らく私達だけよ。」

地和「……へ？ どういうこと？」

華琳「そうよね、桂花。」

桂花「はい。あんた達、ここ最近華琳様の領を出てなかつたでしょ。」

人和「それは、あれだけ周りの搜索や国境の警備が厳しくなつたら……出て行きたくても行けないでしょう。」

桂花「だから現状、首魁の張角が旅芸人だつてくらいは知られてるけど……朝廷や他の諸侯達の間でも、張角の正体は不明のままなのよ。」

地和「え、何が言いたいのか？ 意味分かんないんだけど。」

華琳「誰を尋問しても、張三姉妹の正体を口にしなかつたらしいわよ。……大した忠誠じゃない。」

榮華「それに、真に断罪されるべき薄汚い連中……この騒ぎに便乗した盗賊や山賊は、そもそも貴女達の正体を知らなかつたようですよわね。」

華琳「そいつらのデタラメな証言が混乱に拍車を掛けてね。確か、張角の今の想像図は……一刀。」

一刀「……これか？」

そう言われて一刀が見せたのは、ヒゲモジヤの大男の姿絵で、それも、腕が八本、足が五本、おまけに角がシツポまで生えていたのだった。

天和「えー。これがお姉ちゃん？お姉ちゃん、こんな怪物じゃないよー!？」

地和「いや、いくら名前に角があるからって、角はないでしょ……角は。」

華琳「……まあ、この程度という事よ。私達でさえ、季衣が張角の名前を口にするまでは尻尾も掴めなかったわけだし。」

華琳「後は……そうね。今の名前を捨てて、真名で呼ばれるというのもアリかもしれないわね。」

地和「ちよつ！そんなこと……!」

天和「あ、その手があるねえ。」

地和「姉さん!?!ちい達の真名を誰にでも呼ばせるなんて……ありえないわよ!!」

人和「……いえ、案外悪くないかもしれないわ。」

地和「人和まで!？」

人和「信頼を置いた者にしか許されない真名を呼んでも構わないとなれば、応援して

くれる子達にとって・・・私達は、名前を呼ぶだけでも特別な存在になれる。」

地和「うう・・・ちいの真名は、ちいだけのものなの。」

人和「ちい姉さん。もともと選択肢なんか無いのよ。ここで断れば、私達はこの場で殺されても文句は言えないわ。さっきの槍のように。」

地和「・・・。」

それを聞いて、地和の顔はまた青ざめた。

人和「それに、この騒ぎはまだ暫くは尾を引くはず。どこの州も、旅芸人の出入りは厳しく言われるでしょう。」

人和「そこを、生かしてくれる上に、活動するための資金を出してくれて、自由に歌っていいなんて・・・正直、破格の条件だと、私は思う。」

人和「・・・活動資金も出してくれるのよね？」

華琳「構わないわね、栄華。」

栄華「それは・・・貴女達の働き次第ですわね。」

栄華「案としては悪くありませんけれど、それが私達が兵を集める経費に勝る効果を出せないようでは・・・お金を使う価値はありませんもの。」

人和「もちろん、やるからには成果は上げてみせるわよ。私達としても当分は情報収集が必要だけれど・・・その結果次第で援助を打ち切ってもらっても構わないわ。」

栄華「あら。少しはお金の使い方が分かつている方がいらつしやるようですわね。」
人和「当然。誰にモノを言つてるの？」

一刀（え、何この空気・・・。）

栄華「・・・。」

人和「・・・。」

そして、この二人の間に火花が散り、そして、

栄華「・・・結構。なら、良い報告を期待させていただきますわ。」

地和「けど、援助の打ち切りはともかく・・・用が済んだからって、殺したりしないわよね？」

華琳「栄華の言うように、用済みになったら支援を打ち切るだけよ。」

華琳「けれど、大陸一の歌い手になるつもりなのでしょう？もし本当にそうなれたら、そもそも私の支援が必要かさえ怪しい所ね。」

そう言い、華琳は三姉妹に発破を掛けた。

地和「・・・面白いじゃない。なら、あなたがちい達を切るより早く、ちい達の方からあなたの支援なんかもういらなくなって言つてやるんだから。」

華琳「期待しているわよ。・・・喜雨もこれで良くて？」

喜雨「うん。・・・一つ付け加えるなら、これからも辺境の村は回り続けて欲しいか

な。あなた達が来てくれて嬉しかったって言ってる人、結構多いんだ。」

天和「あ、それならお姉ちゃんも分かる！小さな村の人達って、お姉ちゃん達の事、すつごく喜んでくれるんだよね。もちろん行くよー！」

地和「よし！なら決まり！」

天和「・・・はいいんだけど。えーっと。結局、私達は助かるって事でいいのかな？」

人和「そうよ！しかも、これからも歌い続けられるのよ！」

華琳「ああ、そうだ。」

地和「ちよつと・・・まだあるの!?これ以上の条件は飲めないわよ！」

華琳「舞台上立つ者なら、幕引きはすべきでしょう？次の舞台に立つ前に、まずそれをなさい。・・・この幕引きの報酬をもって、最初の援助とさせてもらうわ。」

人和「・・・断れば、その時点で支援打ち切りって事ね。」

地和「幕引きって・・・いったい、何をさせるつもりなのよ。」

そして、幕引きの後、三姉妹が、仲間に加わったのであった。

☒ 州・陳留

華琳達は陳留に帰還したが、

一刀「・・・ええつと、だな。」

帰つて早々に招集をかけられた。

香風「おなかすいた・・・。」

季衣「うん・・・。」

そんな不満な顔をしているのは香風や季衣だけではなく、真桜や沙和も同じ表情だった。

一刀「華琳。今日は会議はしないんじゃないんじやなかったの？」

華琳「私もする気などなかったわよ。あなた達も宴を開くつもりだったのでしょう？」

真桜「宴会・・・あかんの？」

真桜がそう言うと、

華琳「私はそのために報奨を与えたつもりだったのだけけれど・・・私だって春蘭と
聞で過ごすつもりだったわよ。」

一刀「おいおい、そういうことは・・・。」

一刀（もつと小さな声で言ってくれ。）

純「あはは・・・姉上らしいですね。」

燈「とはいえ、都から大將軍直々の急使が到着したとなれば、応じないわけには行かないでしょう。」

一刀「大將軍直々の急使・・・!?」

一刀「・・・ええつと、それ、式典とか兵士をずらつと並べたりとかしなくて良いの?」

燈「急ぎだから、略式で良いと言われたのよ。」
すると

霞「・・・すまん。皆疲れとるのに集めたりして。すぐ済ますよつて、堪忍してな。」
急使のメンバーの一人張遼がそう苦笑いしながら言った。

霞「しつかし、アンタが『黄鬚』曹彰か・・・。」

純「そうだが・・・。」

霞「いやー、生で会えるなんて、ホンマサイコーやなー!!ウチ、アンタにメツチャ憧れとるんよ!!」

純「そうか。それは悪くないな。けど、アンタも強そうだな・・・。」

霞「ホンマか!?!黄鬚に褒められるなんて、武人冥利に尽きるわー!!」

それを見た純は、優しく頭を撫でた。

霞「あ……ええな、これ。メツチャ気持ちエエ……。」

すると、張遼はウツトリした顔をしたのだった。それを見た秋蘭、稟、栄華、愛紗は指をくわえて見ていたのだった。

華琳「純、その辺にしなさい。」

純「ああ、申し訳ございません。」

華琳にそう言われて、純は張遼から離れた。

霞「あつ……。」

すると、張遼は名残惜しそうな声と表情をしたのだった。

華琳「張遼殿。あなたが大將軍・何進殿の名代？」

霞「や、ウチやない。ウチは名代の副官……ああ、うん。ねねは補佐やから、ウチが副官やな。」

華琳にそう言われた張遼はすぐに顔を引き締め、そう答えた。

春蘭「なんだ。將軍が直々にといいのではないのか。」

その言葉に、

霞「あいつが外に出るわけないやろ。椅子にふんぞり返って賄の銭数えるんで忙しいんやから。」

張遼はそうはつきり言った。その時

?? 「呂奉先殿のおなりですぞー！」

呂布「……。」

呂布とその補佐らしき人が入ってきた。

?? 「曹孟徳殿、こちらへ。」

華琳「はっ。」

呂布「……。」

しかし、呂布は何も言わず広間の上座でブーツと突つ立つたままだが、純をじつと見つめていた。

?? 「えーつと、呂布殿は、此度の黄巾党の討伐、大義であつた！と仰せですぞー！」

華琳「……は。」

呂布「……。」

?? 「して、張角の首級は？と仰せなのです！」

華琳「張角は首級を奪われることを恐れ、炎の中へと消えました。残つた跡をくまなく探させましたが、もはや骨の欠片すらも燃え尽きており……。」

呂布「……。」

?? 「ぐむう……首級がないとは片手落ちだな、曹操殿。と仰せなのです！」

華琳「……申し訳ございません。」

一刀「なあ、春蘭。」

春蘭「女狐に聞け。」

一刀「なあ・・・燈。大將軍って、そんなに偉いの？」

燈「大將軍は、官軍の頂点にいらっしやるお方よ。天子様に直にお目通り出来る数少ない職の一人ね。」

一刀「・・・当たり前だけど、州牧より偉いんだよな。」

燈「それを聞くのも烏滸がましいくらいにね。」

桂花「当代の大將軍は何進と言つてね。皇后の姉の元肉屋よ。」

一刀「・・・肉屋ねえ。」

呂布「・・・。」

??「今日は貴公の此度の功績を称え、西園八校尉が一人に任命する・・・という、天子様のお達しを携えて来た。と仰せなのです！」

華琳「は。謹んでお受けいたします。」

呂布「・・・。」

??「任命式は近日、禁中にて行われる。日取りは改めて伝えるゆえ、待つように。と仰せなのです！」

呂布「・・・。」

??「これからも天子様を支える諸侯の一人として、日々の職務を全うするように。……

では、用件だけではあるが、これで失礼させてもらう。と仰せなのです！」

呂布「……おわり？」

??「そうですぞ。ささ、恋殿！こちらへ！」

霞「……ま、そゆわけや。堅苦しい話で時間取らせてすまんかったな。後は宴会で

も何でも、ゆつくり楽しんだらええ。」

霞「ほななー。」

そう言い、呂布達はその場を後にした。

華琳「……。」

一刀（怒ってる。……間違いなく怒ってる。それも、ハンパなく。）

凧「……。」

真桜「……。」

沙和「……。」

季衣「……。」

春蘭「……。」

華命「……。」

柳琳「……。」

一刀（皆純を見てるな。まあ確かに、この場合は純に任せた方が良いかもしれないな……。）

そう思つて、一刀も純の方を見た。

純（つたく、しよーがねーな……。）

そう思つた純は

純「姉上。」

華琳に話し掛けた。

華琳「話し掛けないで！」

しかし、華琳はまさに怒つてる雰囲気ですう言い、純を鋭く睨みつけ、絶を突きつけた。

一刀「……っ！」

それを見た一刀は恐怖を感じたが、

純「……。」

純はそれに臆する事なく華琳を睨み返した。

華琳「悪いけれど、今何か話し掛けられたら、あなたに斬り掛かってしまいそうなのよ。」

純「でしたら、俺はその刃を受け入れ、喜んで死にしましょう。ですが、死ぬ前に一つ

直言を申し上げても宜しいでしょうか？」

華琳「……良いわ。言いなさい。」

純「姉上のお怒りはご尤もです。ですが、そのお怒りをその手に持つてる絶で皆を斬り殺しては、当主としての器が知れますよ。」

華琳「……。」

純「まずはそのお怒りを鎮め、またの機会に秘めて下さい。そして、その時が来ましたら、その刃で姉上の覇道に反目する敵を斬り殺して下さい。」

華琳「……。」

純「……。」

そのまま長い沈黙が流れ、緊張がこの部屋を支配した。

一刀（華琳……。純……。）

それは一刀だけじゃなく、その場にいる皆も緊張し、汗が流れた。そして、

華琳「……ふう。」

華琳は純に突きつけた絶を下ろし、一つ息を吐いた。

華琳「……そうね。あなたの言う通り、私が間違っていたわ。」

純「ありがとうございます。」

華琳「いいえ、礼を言わなければならぬのは私の方よ。良く言ってくれたわ、純。」

純「いえ、とんでもありません。」

華琳「ねえ、純。」

純「はっ。」

華琳「私はこの大陸を全て手にする事が出来るかしら？」

純「姉上以外の何者に、それが叶いましょう。不安でしたら、俺が姉上の道を切り開き、邪魔する奴らを倒します。姉上はその後を進んで下さい。」

華琳「・・・そう。春蘭、閨に行くわよ。」

春蘭「はっ！」

華琳「一刀達も明日は二日酔いで休んでも目を瞑ってあげるから、思い切り羽目を外すと良いわ。」

一刀「・・・そうさせてもらうよ。」

華琳「純もそうしなさい。」

純「では、お言葉に甘えて。」

そして、黄巾党の戦いは終わりを告げ、朝廷からの次の使者が来るまでの日々を、いくらか穏やかに過ごすことになったのであった。

曹姉弟の過去

華琳と純は同じ年の姉弟であるが、腹違いであり、純が一日遅く生まれたため、純が弟である。

純の母親は、純を生んですぐに亡くなってしまったため、父親曹嵩は純を引き取り、娘の華琳同様、可愛がった。

そして二人は、幼くしてすぐに非凡な才を発揮し、華琳は霸王としての才を、純は武人として、または指揮官としての才があつた。曹嵩は、その二人を父親として、または曹家当主として愛しており、将来は姉が弟を、弟が姉を助け合うような仲になつて欲しいと願つた。

その願いの通り、二人は非常に仲が良く、お互い力を合わせ、助け合つてきた。そして、二人は部屋でこんな話をした。

純「姉上、俺今度の戦に出る事が決まりました！初陣です！」

華琳「そう、良かったじゃない！」

純「はいっ！その戦で、俺は姉上の初陣の手柄を超えてみせますよ！」

華琳「言つたわね。けど、あなたならきっと超えられるわ！」

純「へへっ。それに、俺は机の上で書き物するなんて嫌ですから、戦場で父上を驚かせるぐらい活躍した方が良いでしょう。」

そう言つて、純は頭の後ろで手を組んで仰向けに寝ていたが、目を輝かせていた。

華琳「ふふっ、相変わらずね。」

純「そして、これからもこの腕で父上を助けられるようになってみせますよ！」

華琳「・・・でもそれには、あなたはもう少し勉強に力を入れた方が良いでしょう。あなた、頭は悪くないのだから。」

純「俺は博士ではなく、衛青と霍去病のような將軍になりたいんですよ。それに、そういうのは姉上に任せますよ。」

華琳「全く、あなたはいつもそれね。」

純「良いじゃないですか。俺は戦場で敵を斬り殺し、姉上は父上がやっている難しくて良く分かんねー仕事を手伝う。これで父上を支え合えますよ。」

華琳「全くあなたは・・・。けど、一理あるわね。」

純「でしょ。だから、共に父上を支えましょう！」

華琳「ええ！」

そう言い、お互い笑い合つたのだった。その様子を見ていた

曹嵩（相変わらず仲が良い・・・。この二人なら、曹家は安泰じゃ。そして、この乱

れた世を治める事が……)

曹嵩は目を細めながら見ていたのだった。

その二人の絆が更に深まったきっかけが起きた。それは、曹嵩が病に倒れた事である。この時純は、秋蘭と一緒に賊討伐に遠征に行っていたため、不在だった。

華琳「お父様、お加減はいかがですか？」

曹嵩「……華琳か。どうやらわしも……ここまでのようじゃな……。」

華琳「何を言っているのですか!!お父様はきつと良くなります!!弱気にならないで下さい!!」

曹嵩「……いや、自分の事は……一番理解しておる。……その前に、一つお主に言い遺したい事がある。」

そう言つて、曹嵩は寝台から起き上がった。

華琳「……何でしょう、お父様。」

曹嵩「……兵を率いて戦場に駆け、天下の争いに与するような事においては……お前は純に遠く及ばぬ……。」

華琳「はい。それは重々理解しております。私は、純の武勇と軍才には遠く及びません。」

曹嵩「……されど才ある者を用いて国を発展させる事については……お前は純よ

り遙かに勝っている。戦の事は全て純に任せ……お前は国の事を考えて互いに力を合わせ、助け合い、そして……大業を成せ。」

華琳「はい、お父様。そのお言葉、胸にしかと刻みます。」

曹嵩「……それを聞いて安心した。……春蘭、華命、柳琳、栄華……。お前達も……。華琳と純の事を頼んだぞ……。」

それを聞いた春蘭達は

春・命・柳・栄「はっ!!!」

涙を流しながら拱手した。そして

曹嵩「……良き人生じやった……。」

そう言い、曹嵩は息を引き取った。

華琳「お父様！」

春蘭「曹嵩様ー!!わあーっ!!」

華命「曹嵩様ー!!目を開けて下さいっすー!!」

柳琳「いけません、曹嵩様!!」

栄華「曹嵩様!!」

華琳「お父様!!目をお開け下さいっ!!お父様ー!!」

彼女らがどんなに呼びかけても、曹嵩は二度と目を開ける事はなかったのだった。

華琳「・・・春蘭。」

春蘭「はっ！」

華琳「純達に遣いを出しなさい。」

春蘭「はっ、直ちに。」

華琳「栄華。お父様の葬儀の準備を。」

栄華「お任せ下さい。」

そして、華琳の命で行動が開始された。

黄鬚隊

その頃、純は賊を平定し、秋蘭と共に戦後処理をしている所だった。そこへ

兵士A「曹彰様！曹彰様！」

春蘭が送った遣いの兵士がやって来た。

純「一体何事だ？」

兵士A「曹操様の命です。すぐにお戻り下さい！」

純「何があつた？」

兵士A「曹嵩様が・・・お亡くなりになつた・・・。」

純「・・・何だと!？」

秋蘭「・・・!？」

兵士の言葉に、純と秋蘭は目を見開き驚いた。

兵士A「曹嵩様は亡くなる前に、曹操様に曹家を任せ、曹彰様は姉曹操様と共に力を合わせ助け合うようにと。」

それを聞いた純は

純「・・・分かつた。すぐ戻ると伝えてくれ。」

眉間にしわを寄せた状態でそう言った。それを見た秋蘭は

秋蘭（純様・・・。）

胸が締め付けられる気持ちになつたのだつた。

曹嵩霊前

曹嵩の霊前には、華琳を含めた一門がいた。

兵士B「申し上げます、曹操様。曹彰様が戻られました。」

その時、兵士がそう伝えてきた。それを聞いた華琳は

華琳「分かったわ。」

そう言つて、兵士を下がらせた。すると

純「父上ー!!」

純の声が響き渡り、

純「父上!!」

純が秋蘭と共に戦装束の状態で見えた。そして

純「父上!!」

霊前に駆け、跪いて

純「父上ー!! 一目お会いしようと、賊を平定した知らせと共に昼夜兼行で駆け戻ったのです!! 姉上と共に力を合わせ父上を助け大業を成そうと誓ったのです!! 父上は志半ばではありませんか!! 戻って下さい!! お願いです父上ー!!」

泣きながらそう言い顔をうずめた。それを見た秋蘭は

秋蘭「純様……。」

目に涙を浮かべながら純の傍に寄つて、優しく抱き締めた。すると純は、秋蘭の胸に

顔を埋め、秋蘭はまるで赤子をあやすかのように頭を撫で、背中をポンポンと叩いたのだった。

華琳「純……。お父様は、私達に全てを託して逝ったわ。だから、お父様の思いを無駄にははいけないわ。」

華琳「辛いのは分かるわ、私も辛い。けど、いつまでもそうやって泣いては、お父様が浮かばれないわ。だから、私と一緒に大業を成しましょう。」

その時、華琳は涙を流しながら純にそう言った。

純「……そうですね、姉上。俺がこうして泣いては、父上も浮かばれませんね。」
それを聞いた純はそう言つて泣き止んだ。

華琳「私が曹家の後を継ぐ！大業を成すため、皆よろしく頼むわ！」

全員「はっ!!!」

華琳「純、曹軍の全兵馬をあなたに託すわ。皆も、戦では私ではなく純に全て従いなさい！」

純「謹んでお受け致します！」

春・秋・命・柳・栄「はっ!!!」

これには、純を含め皆拱手した。そして、華琳と純との間の絆は益々強くなり、曹一門の結束も同じく一気に強まったのであった。

30話

廊下

真桜「うう……。心臓、バクバクいうてるう……。」

沙和「だよねえ……。緊張するの……。」

一刀「別にただの状況報告会なんだから、いつもの調子でやれば良いんだよ。緊張する事無いって。」

真桜「そりや、隊長は華琳様達にはちよくちよく会うとるからええやろうけど……。ウチら、そない滅多に会えへんねんで！緊張もするわ……。」

沙和「それに、華琳様の前で報告するなんて初めてだし……。会議だつて、普段は座つてお話聞いているだけなの。」

沙和「あうう、背中結び目、曲がったりしてないかな？ないよね？ないよね？」

一刀（ちよつと会議で報告するだけだつてのに……。二人の様子を見てみると、見てるこつちまで緊張しなきゃいけない雰囲気になつてくる。）

凧「……。」

一刀「ほら、風を見ろよ。凄く落ち着いてるだろ。二人もこのくらいだな……」
風「……」

沙和「ね。隊長」。

一刀「ん？」

沙和「風ちゃん、固まってるだけなの」。

風「……」

一刀「……そうなのか？ 風」

それを聞いた一刀は、風に話しかけるが、

風「……」

一刀（うわ微動だにしねえ！）

全く動かなかった。

一刀「つか、しつかりしてくれよ皆」

それを見た一刀は、少し心配になってきた。

真桜「ええつと……どうやったかな、手の平にこう大って書くんやったっけ……？」

一刀「そりや人だろ」

沙和「確か、落ち着く呼吸法っていうのもあったよねえ……ひっひっふー、ひっひっふー」

一刀「そりやラマー……お産の時にやるやつだろ。」
すると

真桜「あれ？何で隊長がそんなん知ってるん？」

と言われ、

沙和「実は、もう隠し子が……」

と言われたので、

一刀「そんなのいるわけないだろ！」

と一刀は怒鳴ったのだった。

真桜「いやーん、不潔ー。」

一刀「つて真桜ーっ！」

沙和「きやー。助けてー。妊娠させられるうー。」

凧「……。」

その時、

桂花「……何をやっているの、あなた達。」

一刀「お。もう時間か？」

桂花がやって来た。

桂花「遅れて行って華琳様のご不興を買っても知らないわよ。」

一刀「おう、すまん。」

桂花「気安く近寄らないでよ。妊娠させられちゃうでしょ。」

と桂花はそう言つてその場を後にした。

真桜「や、やっぱり隊長……」

沙和「しつかり前科が……」

一刀「おいおい！桂花はいつもあんな感じなんだつてば！知ってるだろ！」

真桜「ううう……もうすぐ始まると思つたら、改めて緊張してきたあ……」

凧「……」

沙和「隊長ー。報告の所だけで良いから、替わつてほしいのー。」

一刀「ほらほら、行くぞ。お前ら。」

そう言い、一刀達は謁見の間に入った。

謁見の間

栄華「次、経理部門の報告をお願いします。」

文官A「はっ！」

と会議が進み、三羽鳥も死ぬほど緊張していたが、

真桜「……ぐう……」

沙和「……むにやむにや……」

一刀「……寝るなー。お前らー」

後ろの席にいるはずの二人からは、寝息が聞こえていた。華琳が玉座にいるため、後ろを振り向くことが出来ない一刀は、小声を投げたのだが、全く反応も無かった。

一刀「そして風はいい加減動けー」

風「……」

隣の風は未だに硬直状態から抜け出せなかった。目は開いたままだが……

純「軍備の増強はどうなっているんだ？」

桂花「はい。街に新しい職街を作り、戦で流れてきた職人の受け入れと、生産力の強化を行わせています。」

桂花「人材の発掘も随時行わせていますので、当面の人材には不足しておりません。」

純「そっか。ではそちらは、引き続き人材の確保に全力を注ぐようにな。」

桂花「はいっ。」

純「それで、兵力の増員は？」

人和「はい。地方巡業は予定通りの日程で終了しています。」

人和「舞台後の揮毫会にはこちらの期待以上の参加がありましたから、私達の活動に
応えた地方からの徴兵応募はこれから動きがあると思われまます。」

華琳「期待させて貰うわ。それから、次の巡業先と今回の動員数の最終報告は早急に
私と純に提出するように。」

人和「お任せ下さい。」

華琳「次は・・・徴兵応募者への対応だけれど・・・。」

三羽烏らの出番なのだが、

一刀「おい、真桜！」

真桜「・・・むにや・・・あとちよつとー・・・。」

一刀「沙和！」

沙和「・・・ふみゆう・・・もう朝あ・・・？」

一刀「凧！動いてくれ、凧ー！」

凧「・・・。」

完全に沈黙していた。

純（しゃーねーな・・・。）

その様子を最初から見ていた純は、

純「一刀、頭下げろ。」

一刀「あ、ああっ！」

そう言つて、一刀の頭を下げさせ、三人の額に向けて碁石を投げた。

凧「・・・!!」

真桜「あだっ!!」

沙和「いたっ!!」

すると、三人の額に見事命中した。その時

春蘭「楽進！李典！于禁！」

凧「・・・っ！」

真桜「・・・ひやいつ！」

沙和「・・・ふわ!!」

秋蘭「貴様ら、主君の御前だぞ！何を腑抜けているか！」

春蘭と秋蘭の怒号が響いた。これには

凧「・・・！」

真桜「・・・。」

沙和「・・・ふみゆうう。」

三人は身を縮こませてしまった。

一刀「すまん、春蘭。」

春蘭「北郷！何だ貴様まで！」

一刀「悪いんだが、三人とも緊張しすぎてて、どうにも報告が出来そうにないみたいだ。」

華琳「なら一刀。上官のあなたが代わりに報告なさい。後の進行に差し支えるわ。」

一刀「ああ。現状、新兵の訓練は順調に進んでる。三人とも独自のやり方で訓練を進めてるけど、目立った遅れは出ていない。」

一刀「このまま進めれば、予定通り本隊に引き渡せる筈だ。」

一刀「沙和の隊は若干遅れ気味だけど、まあそこは調整の範囲内。引き渡しまでには何とか出来るだろう。」

純「三人とも別のやり方・・・成程、そういう事か。」

一刀「純も察した通り、新兵にも個性があるからな。それに会わせて、訓練の導入方法を三種類作ってるんだ。」

一刀「勿論、最終的には三隊とも本隊に加えられる戦力として運用出来るようにするよ。」

一刀「でもその過程は個性を上手く利用した方法を使った方が、互いに負担が少ない・・・という純の方法を使ってみたんだ。」

純「やるじゃん、一刀。」

一刀「ありがとう。」

華琳「……一理あるわね。本隊の責任者として、一刀の意見をどう思うかしら？純。」

純「悪くないと思います。俺と同じ手法でやっているのなら、問題ありません。」

華琳「そう。あなたがそう言うなら、何も言うこと無いわ。」

純「はっ。一刀。新兵の育成も、より迅速かつ練度の高い訓練を課せられるようにな。」

一刀「徹底させる。」

華琳「ならば、次の議題だけれど……」

そう言つて、会議が進んだ。

一刀「……ふう。」

一刀（とりあえず、何とかなつたな……）

沙和「ありがとー！隊長ー！」

真桜「隊長、カツコ良かったで！」

凧「……。」

一刀「次からはちゃんとお前らでやれよ……。」

真桜「分かつてるって。任してな。」

凧「……。」

沙和「おーい。凧ちゃん。もう終わったのー。」

凧「……。」

一刀「いつ治るんだ、こいつ。」

そして、それ以後も話は進み、

栄華「お姉様、これで一通りの議題は終了しました。」

長い会議は終了したかに思えた。

華琳「そう。まだ一人、報告を受けていない気がするわね……北郷一刀。」

しかし、華琳は一刀を指名した。

一刀「……へっ!?!」

華琳「市街の治安はどうなっているの？警備はあなたに全て任せている筈だけれ

ど……報告をなさい。」

一刀「え……ああ……えつと……。」

真桜「隊長！ほら、さつきみたくこう、がつーんと！」

沙和「隊長ー！頑張ってー！」

凧「……。」

一刀「その……だな」

沙和「どうしたの？隊長。」

真桜「さつきはあんなにスラスラ言えたやないの。いきなりそんなに詰まって、どしたん？」

一刀「バカ。さつきのは、お前らが準備してた原稿を丸覚えしてただけだっつもの！」

真桜「うっわ、カツコ悪う・・・。」

純「一刀、まずは落ち着け。それからゆっくり話せ。」

一刀「あ、ああ・・・。」

純にそう言われた一刀は、一旦深呼吸をした。そして

一刀「最初に考えてた人数が揃ったんで、一町一舎の体制が整いそうだ。新人は本隊と合同で訓練させてるから、それが終わったら実行に移れると思う。」

華琳「警備隊の訓練を本隊と合同で？純は知ってたの？」

純「はい。警備隊の新人の中には、いずれは本隊に転属したいという者がいると一刀から聞きましたので。だから、訓練も最初から同じ流れにした方が後々良いだろうと俺の独断で決めました。」

華琳「それは別に構わないけど、肝心の治安はどうなっているのかしら？」

一刀「えっ!？」

華琳「現状の治安の様子よ。良くなっているの？悪くなっているの？」

一刀「えつと・・・今の体制でも、事件が起きてどうにかするまで、前より早く動けるようになってる。だから、全体的には良くなってるんだと・・・思う。」

一刀「訓練中の新人が戦力にでもなれば、もつと治安は良く出来る筈だ。」

華琳「効果自体は出ているのね。なら・・・具体的な数字を後で報告するように。前よりや思うでは、どの程度の効果が出ているのか分からないわよ。」

一刀「・・・うう、分かった。」

一刀（勢いで言ったところも、全部お見通しか。相変わらず容赦ないぜ。）

華琳「それからもう一つ聞くけれど、この方法をこの城下以外にも普及させる価値はあるかしら？」

一刀「この城下以外にも？」

華琳「領内の主要な都市も、同じ方法で警備力の強化を図ろうと思っているの。出来る？」

一刀「規模がいきなり大きくなるな・・・。ちよつと考えさせてくれ。」

華琳「なら、次の会議までに考えを纏めておくように。」

一刀「分かった。」

純「それでは、本日の会議はここまでとする！」

春・秋「一同、解散！」

そして、会議は終わった。

真桜「終わったー！」

沙和「ねえねえ隊長、お昼ご飯、食べに行こうなの。」

一刀「そうだな。報告書も作らないといけないし、隊舎に戻る前に何か食べて帰ろうか……。」

真桜「それ、勿論隊長の奢りよね？」

一刀「……いや、寧ろ今日はお前らが出せよ。」

沙和「えーっ!?折角、可愛い部下がお願いしてるのにー。」

凧「……。」

真桜「てか、凧。ええ加減、そのネタも飽きてきたで。」

凧「……ネタじゃない。」

真桜「ちゃんと喋れるやん！」

その時、

華琳「一刀、ちよつと。」

華琳が純と一緒に現れた。

真桜「ひゃああつ！」

沙和「か、華琳様っ!?純様っ!?」

凧「……っ！」

華琳「付き合ってくれるかしら？」

一刀「ああ。そりゃ、良いけど……どうしたんだ？」

純「良いから付き合え。それと、お前らも次は無いからな。」

真桜「は、はい……。」

沙和「ふみゆうう……。」

凧「……。」

純からの厳しい言葉に、流石の三羽鳥もシユンとなった。

純「しかし、お前達の最近の警備隊としての活躍は聞いている。三人共、頑張れよ。」

これには

凧「はっ！」

真桜「ありかとう、大将！」

沙和「とつても嬉しいのー！」

三人は感激した様子で拱手したのだった。

華琳「純。」

純「すいません、すぐ行きます。」

廊下

一刀「すまん、華琳。」

華琳「・・・何よ、いきなり。」

一刀「あの三人、ホントに頑張ってるんだ。ただ、今日は華琳や純、そして桂花達が全員揃ってるし、大きな会議だったから変な具合に緊張しちゃって・・・」

華琳「ああ。その件は見なかった事にしてあげるわ。それに、純が釘を刺しただろうし。」

純「恐れ入ります。」

一刀「スマン、徹底させる。・・・って、その話じゃないのか？もしかして、さつき
の全国化の話？」

華琳「それは次の会議までで良いと言ったでしょう。」

一刀「具体的な数字も後で持って行くから・・・」

純「一刀。姉上が聞いてーのはそういう事じゃねーよ。」

一刀「えっ？」

すると、華琳は足を止めて

華琳「・・・あなた・・・普段は普通に出来るくせに、純と違って自分から空気を読もうとすると本当にダメね。」

そう一刀に言った。

一刀「よ・・・良く言われるよ。」

一刀（じゃあ、何の話なんだ？）
すると

純「先日貰ったお前の案で作った狼煙台だよ。ちゃんと機能しててな。それを姉上は話しかかったんだよ。」

と純は一刀にそう言った。

華琳「ええ、その事よ。」

一刀「あ、完成したんだ。早かったな。」

華琳「その事を純にも確認を取っていたわ。まだ仮設状態で、本格的な設営はこれからだけだね。」

純「ただ、先日の実験で十分な成果があったから、既に工事を始めさせている。」

一刀「そつか。そりゃ良かった。」

華琳「けど、あの狼煙台・・・あなた自身の案ではないわね？」

一刀「……ああ。俺の国に昔いた、有名な武将の使っていた方法だよ。」

純「ふうん……。」

華琳「やはりあなたの国は……」

一刀「どうかした？」

そして、そのまま三人は城壁の上に着いた。

華琳「この辺りなら……良いわね。」

純「……。」

一刀「……華琳？」

華琳「一刀、正直に言いなさい。」

一刀「……うん？」

華琳のただならぬ雰囲気に、一刀は頷いた。

華琳「初めて会ったあの日、あなたは私の名を知っていた。地名や他の単語は全く理解できない、異国の民のあなたが……私と純、そして春蘭の名前にだけは、反応した。」

一刀「確かに俺は、曹操の名を知っていた。曹彰も、夏侯惇も、夏侯淵も、荀彧達もだ。」

華琳「では、桂花や季衣が私の部下になる事も知っていたというの？」

一刀「ある程度予想は付いていた。いつ曹操の部下になるかまでは分からなかったけ

ど、名前を聞いた時は……彼女達がか、と思ったよ。」

一刀「ただ、俺の知ってる曹孟徳、曹子文とここにいる華琳と純は明らかに別人だし……他の皆も同じだ。それに、凧や真桜達が俺の部下になるのは、流石に予想出来なかつたよ。それは、愛紗が純の部下になるのも同様な。」

純「そうか……。」

華琳「あなたの知っている歴史に、あなた自身の名は？」

一刀「北郷一刀という名は、影も形も無いね。」

華琳「別人の名になっている可能性は？」

一刀「それは否定できないけど……曹操の周りに出所不明の側近がいたなんて話は、聞いた事無いんだよな。」

華琳「成程……あなたの参入で、歴史の進むべき道が狂っていく可能性もある……という事ね？」

一刀「否定は出来ないな。それがどういう結果を生むのかも。」

華琳「……そう。」

純「そつか……。」

一刀「すまん。この先何が起こるか分かれれば、少しは助けになれたんだろうけど……。」

華琳「構わないわ。予言とも妄想とも取れないあなたの言葉を助けにしようとした、私の甘さだもの。」

純「姉上……。」

一刀「意外だな……華琳がそんな弱音を吐くの。」

華琳「……弱音？私が？あなたに？」

一刀「ああ。以前朝廷からの使者の時と同様に弱音みたいな事を言ったじゃないか。でも、華琳も人間なものな……。この先どうなるかっておい！」

その時、一刀の言葉が言い終わるよりも早く、華琳は絶を一刀に突きつけようとした。

純「姉上。」

しかし、純がその間に入って止めた。

華琳「どきなさい、純。」

純「姉上、一刀はつい口を滑りましたが、悪気があつて言ったわけではありません。ここは怒りを鎮めて、その刃を収めて下さい。」

そう、純は華琳に諫言した。

華琳「……ふう、分かったわ。」

すると、華琳はスツと絶を下ろした。

華琳「一刀。」

一刀「は、はいっ！」

華琳「今回は純に免じて大目に見るけど、これに懲りたら二度とそんな事は口にしない事ね。それに、私が弱音を言える真の相手は、純だけよ。」

一刀「わ、分かった・・・。」

一刀「そうだ、華琳。俺の知ってる歴史だから、参考にならないかもしれないけど：」
華琳「役に立つかどうかは私が判断するわ。言ってごらんさい。」

一刀「この先、この大陸では黄巾の乱みたいな事が沢山あつて・・・数え切れない程の戦いが起こる事になる。」

華琳「今の私達の予想が、そのまま現実になるという事ね。」

そう言い、華琳は一刀に向けていた威圧感を消した。

一刀「この威圧感を、純は平然と受け止めていたんだな・・・。何て奴だ・・・！」

華琳「それにあまり遠くの事を知ってしまうと、目先の判断が狂いかねないわ。」

一刀「そっか。」

華琳「私の話はそれだけよ。一刀も早く戻りなさい。あの子達が、お腹を空かせて待っているのでしょうか？」

一刀「あいつらの事だから、先に帰つてると思うんだけどなあ・・・。」

華琳「そんな人望の無い上官なら、その方が問題よ。早く戻りなさい。」

一刀「はいはい。けど、何で純も呼んだんだ？純は、こういう話は好きじゃ無い筈だが？」

華琳「さつきみたいに、私にちゃんと意見を言えて止める事が出来るのは、純だけだからよ。」

一刀「そつか……。それじゃ。」

一刀（やつぱ、この二人は本当に凄い信頼関係だな……。俺も、純みたいに信頼されないとな……。）

その時、一刀はそう決意してその場を後にしたのだった。

華琳「……。私が弱音……。か……。」

純「けど、確かに姉上は弱音に近い発言をしていましたよ。珍しいですね、姉上が俺以外の者に弱音を言うなんて……」

華琳「一刀に言ったあれは弱音じゃないわ。それに、私があなたに弱音を言うのは当然よ。だってあなたは、私の大切な弟なんだから。」

純「……。そうですか。」

華琳「……。あら？」

純「姉上？」

華琳につられて、純も城下を見ると

真桜「んもーっ。隊長、どこで油売ってはったん！ウチもう、餓死するかと思うたわー！」

沙和「そうだよお……。やっぱり今日は、隊長の奢りなのー！」

凧「……。」

一刀「だから、急いで戻ってきただろ！つつか、凧もいい加減自分で歩いてくれーっ！」

沙和「……あつ！まさか隊長、純様公認で華琳様と……！」

真桜「あちやあ……。もしかして、ウチらものすつごいお邪魔やった？氣い利かせ、先に帰った方が良かった？」

一刀「おいおい、何でそんな方向にばっかり考えが行くんだよ……。っ！ちゃんと真面目な話してたつつの！」

凧「……。」

一刀「だから凧もいい加減歩いてくれってばー！」

一刀が三羽鳥と仲良くしていたのだった。

華琳「……何よ。案外、人望あるんじゃない。あいつ。」

純「・・・そうですね。」

それを見た華琳と純はそう言い

華琳「ふふっ。」

純「ははっ。」

互いに笑い合ったのであった。

31話

純の部屋

愛紗「純様、私の分の書類を纏めておきました。」

稟「私の方も纏めておきました。」

風「風もですよ。」

純「うむ、ご苦労だったな。」

そう言つて、純は三人分の竹筒を確認した。本来、純はこういう書類は得意ではなく、他の人に任せていたのだが、稟曰く

稟「純様が信頼してくれるのは非常にありがたいことですが、自らご確認していただくかないと意味がありませんよ。」

と稟に言われてしまい、それ以来自分でも確認を取っていた。

純「ふむ・・・」

そして、純は一つ一つ丁寧に確認していた。

純「三人とも、中々良い査定だな。これなら、兵達に与える恩賞をしつかり与える事が出来る。」

純の言葉に

愛紗「ありがとうございます。」

稟「はっ。」

風「はい。」

三人とも、頭を下げた。

純「では、これは榮華に提出する事とする。お前達、ご苦労だったな。今度何かお礼するよ。」

風「ホントですか！約束ですよ！」

稟「ちよつと風！」

純「稟は嫌か？」

稟「い、いえ、私は……純様のお役に立てたのならそれで……」

純「愛紗もか？」

愛紗「わ、私も……稟と同じお考えです……」

純「分かった。今すぐ決めろとは言わねーから、何か思いついたら言つて。」

稟「か……考えておきます。」

愛紗「わ．．．私も．．．考えておきます。」

純「分かった。そんじや、また後で。」

そう言い、純は部屋を後にした。

純「栄華はまだ居るかな．．．。」

そう言い、純は栄華の執務室の前に立った。

純「静かだな．．．。どっかで休んでんのかな？」

そう思った純は、執務室の扉を開いた。すると

栄華「すう．．．すう．．．。」

純「栄華？寝てんのか？」

栄華は執務室の机に突つ伏して、静かに寝息を立てていた。

純「疲れてんだな．．．。」

開け放たれた窓から気持ち良い風が入り込み、栄華の前髪を揺らしていた。

純（まあ、良い天気だしなあ．．．。俺だったら、木の下で昼寝すんな。稟に怒られるけど．．．）

純「起こすのも悪いし、待つか。」

そう思った純は、近くにあつた椅子を引き、栄華の寝顔が見える位置にそつと座った。

そして、栄華の頭にそつと手を添え、頬に触れたりした。

純（栄華……）

すると、自分自身も少し眠くなつていくのを感じた。

純（ちよつと寝るか、俺も……）

そう思つた純は、そのまま眠つたのだつた。

暫くして

栄華「んっ……ああ、思つたよりも長く眠つてしまつたようね……」

栄華が目を覚ました。

栄華「んんっ、んっ……お陰で頭もスッキリしたし、お仕事を再開させて……えっ
？」

背伸びして、仕事を再開しようとしたら

純「……すう……すう……」

純が横で寝ていたのだつた。

栄華「お、お兄様……!？」

これには栄華もびっくりしたのだが、純が持つてる竹筒を見て

栄華「恩賞の査定を提出に参つたのですね……」

と何しに来たのか察したのだつた。

栄華「しかし……」

栄華は純の寝顔を見て

栄華「やっぱり、お兄様の寝顔は・・・可愛らしいですわ・・・。」

そう言った栄華は、純の頬や髪に触れたりした。そして

栄華「・・・スンスン。」

純の匂いを嗅いだりしていた。

栄華「はあく・・・お兄様・・・。」

その行動は少しエスカレートし、純の服に顔を当てて擦り寄せるほどだった。

栄華「お兄様・・・お兄様・・・。」

そして、自ら純を抱き締め堪能していた。その時、栄華は自身が持っているぬいぐるみを見て

栄華（お兄様・・・）

ある事を思い出していた。

それは、栄華がまだ幼かった頃だった。

その日、栄華は誕生日を迎え、それぞれが栄華にプレゼントをあげた。華琳や春蘭、秋蘭、華命、柳琳はそれぞれ首飾りや耳飾りをあげたりし、栄華の誕生日を祝った。

栄華「お兄様は私に何をあげますの？」

純「それは見てのお楽しみだ。栄華、ちよつと目を瞑って手を出して。」

栄華「はい、こうですか？」

純にそう言われた栄華は、目を瞑り手を出した。すると、純はある物を栄華の手に置いた。

栄華（な、何でしょうこれは・・・？非常に柔らかいですわ・・・。これは一体・・・？）

そして、

純「目を開けな。」

栄華「はいっ！・・・わあああ♪」

栄華が目を開けると自身の手に兎らしきぬいぐるみがあり、口には何かを入れるのに使うチャックらしき物が付いていた。

純「この前、お前と一緒に街に出ただろう？」

栄華「はい。」

純「その時お前がこういうぬいぐるみ欲しがってたのを見てたんだよ。それで、材料を揃えて作って、何かを収納できるぬいぐるみを栄華に作ろうと思ったんだ。」

栄華「えっ!?!これってお兄様を作ったんですか!!」

純「ああ、こういうのを作るのは初めてだったから、世辞にも店頭で売れる物じゃねーんだけどな・・・。」

そう言われてよく見ると、僅かに糸も飛び出ていて縫い目なども見えており、とても店頭に出せる物ではなかった。

しかし

栄華「いいえ、お兄様の作った物なら、どんな高価な物よりも千金の価値がありますわ……。大切に致します……。」

と栄華はぬいぐるみを大事に抱き締め、大粒の涙を流しながらそう言った。それを見た純は、少し慌てたのだった。

それ以来、栄華は今でもそのぬいぐるみを大事に使っており、それと同時に純に強い想いを寄せるようになった。後に秋蘭に気付かれた後も、秋蘭と一緒に純と触れ合ったりした。

栄華「お兄様……。チュ。」

そして、栄華は純の唇を奪った。そして、純から離れ頭と頬を撫でた後、そのままそつとして仕事を始めた。

開け放たれた窓から吹く優しい風が、二人を包み込んだのだった。

3 2 話

陳留・城下

店主「へいお待ちー。」

秋蘭「さて、こんなものですかね。」

純「ああ、そうだな。」

純と秋蘭は、今陳留の城下で食材の買い出しをしている。その訳は、昨日純が言ったある一言がきつかけだった。

回想

純「なあ、秋蘭。」

秋蘭「はい、何でしょう？」

純「いきなりでわりーんだけど、お前の手作り料理食べてーな。」

秋蘭「突然どうしたんですか？」

純「いや、何か唐突に食いたくなつた。」

秋蘭「ふふっ、そうですか。では、何を食べたいですか？」

純「そうだな。お前の飯は最高に美味いからなあ。うーん……。」

そう言つて、純は少し考え込んだ。そして、

純「そうだ、焼売。」

秋蘭「焼売ですか？」

純「ああ、焼売食べてー。お前、出来るよな？」

秋蘭「ええ、作れます。」

純「なら、一緒に食おうぜ。ダメ、かな？」

そう言つて、純は秋蘭の顔を覗き込んだ。すると、

秋蘭「……はい！構いません！」

と秋蘭は嬉しそうな顔をした。

純「よっしゃ!!なら、早速仕込みの材料買いに行こう!!」

秋蘭「はい。」

回想終了

そして、二人で一緒に乾物屋に行き、仕込みの材料を買った。その時の秋蘭は、純に
久し振りに料理をせがまれた事で、普段より気持ちが弾んでいたのだった。それが他の
材料を買いに純と一緒に往つてる今でも、その気持ちは続いていた。

純「秋蘭、荷物は俺が持つよ。」

秋蘭「え、しかし・・・良いのですか？」

純「構わねーよ。ほれっ。」

そう言つて、純は荷物を持った。

秋蘭「ありがとうございます。」

純「気にすんな。さて、次は皮の材料だな・・・。」

そして、材料の買い出しを終えたのだった。

厨房

純「さて、始めるか。」

秋蘭「はい。」

そして、厨房に着いた二人は、焼売を作った。

純「秋蘭、皮の練り具合、こんなもんで良いか？」

秋蘭「はい。その程度です。」

純「分かった。なら、今度は肉を切るな。」

秋蘭「はい、お願いします。」

そう言った秋蘭だったが、秋蘭の手元には、さつきまでピチピチと跳ねていた筈の大きな川エビが見事なむき身に変わっていた。

しかし、もちろんそこで秋蘭の手は止まらず、表皮をむいた大量のタマネギを端から真つ二つにし、みじん切りにした。

秋蘭「純様、肉はどんな調子ですか？」

純「ああ、これでどうだ？」

秋蘭「完璧な大きさです。今度はそれを三つに分けて、タマネギと一緒に混ぜて下さい。」

純「了解。」

そう言つて、純は肉をタマネギと一緒に混ぜた。

純「秋蘭、食器は？」

秋蘭「用意しました。純様、どんな塩梅ですか？」

純「ほい、これ。もう少し混ぜた方が良いよな？」

そう言つて、純は肉を見せた。

秋蘭「そうですね、お願いします。」

そして、第一陣を練り終え、現在純は第二陣に突入していた。第一陣の方は、

秋蘭「……。」

秋蘭のワンアクションで、あつという間に見事な焼売に大変身した。しかも、

純（俺の大きさに合わせてるな……。）

純に合わせて、普通よりも大きい焼売だった。

純「そろそろだな。」

秋蘭「はい。」

すると、

純「何か、本当に夫婦みてえだな、俺達。」

そう純が言うのと、

秋蘭「はい……。」

秋蘭は幸せそうな顔でそう言った。すると、秋蘭の動きが少し加速し、先程の倍近い速さで焼売が並べられた。

秋蘭「さて、蒸しますね。」

純「ああ。」

すると、

純「秋蘭、お前も食おうぜ。」

秋蘭「え、しかし……良いのですか？」

純「良いんだって。だって、お前と食いてーし。……ダメかな？」

そう言つて、純は覗き込んでそう言った。それを見た秋蘭は

秋蘭「……はい!!」

そう言つて、純に抱き付いた。そして、焼売が出来上がり、二人で一緒に食べた。

純「……流石秋蘭。また上達したな。」

秋蘭「光栄の至り。」

そうやって、秋蘭は喜色満面の笑みを浮かべた。それを見た純は、
秋蘭「あつ……。」

秋蘭の頭を優しく撫でた。すると秋蘭は、純に寄り添うようにくつついた。

純「はは。どうした、秋蘭？」

そうやって、純は秋蘭の顔をのぞき込んだ。

秋蘭「いえ、少し、このままで。」

すると、秋蘭は顔を真っ赤にしながらかう言つた。そして、二人で仲良く焼売を食べたのだつた。

33話

稟は、資料を持って歩いてきた。その時ふと中庭に目をやると、

純「……すう。」

純が、中庭の木の下で横になって眠っていた。稟が純を目で追ってしまったのは、ただ偶然そこにいたからではない。

稟（純様……）

彼女は、彼の優れた軍才を愛していたが、彼と接する時間が多くなるほど、彼の人柄を知りそして、愛したのであった。

純の部屋

純「さて、今日はどうすっかな……」

この日の純は休暇を取っており、一日部屋で過ごすか、どこかに出かけるか、迷って

いた。すると、

稟「純様。稟です。入っても宜しいですか？」

純「ちよつと待つて。．．．良いぞ、入れ。」

扉が開き、稟が部屋に入った。

稟「失礼します。」

純「どうした稟？」

すると、

稟「えつと、純様。もし宜しければ今日、一緒に出かけませんか？」

稟は顔を赤らめながらそう言った。

純「え？俺と？」

稟「そうです。」

純の一言に、稟はそう言つて眼鏡のフレームを軽く上げ掛け直した。

純（稟つて、あまり買い物とかしねーからちよつとびっくりだな．．．）

と思つてゐると、

稟「あの．．．純、様？私では困るでしょうか？」

稟が俯きがちにしながら寂しそうな表情をした。

純「ううん、そんなわけないよ。行こう行こう。」

それを見た純は愛おしく思い稟の髪を撫で、頬に手を添えながらこつちに顔を向かせた。

稟「・・・はい。」

それに対し、稟は頬の手の上に掌を重ねて相好を崩して柔らかい笑みを浮かべたのであった。

純「それじゃあ、行こうか。」

稟「はい。」

そう言つて、二人は互いに手を取り、腕を組みながら街に行つたのであった。そして、二人で買い物したり、商品を見たりなどして、充実した時間を過ごした。そして、二人は純の部屋にいた。

純「今日は楽しかったな。」

稟「はい。そうですね。」

純「明日もどっか行こうよ。」
すると、

稟「純様・・・明日は仕事ですよ。」

稟は眼鏡のフレームを上げ、ジトツとした目で純を見た。

純「はは、冗談だよ。」

稟「全く……。」

そして、稟は純の隣に座った。

純「そうだ。稟、お前に渡したい物があるんだ。」

そう言つて、純は懐から髪飾りを一つ取り出した。その髪飾りには、椿の花に鈴がついていた。

稟「これは……。」

純「お前には、何度か助けて貰つてゐるからな。そのお礼。」

純は、少し恥ずかしそうに言つた。

稟「はい。ありがとうございます。」

そう言つて、稟は髪飾りを大事そうに胸に抱き締めたのだ。そして、髪飾りを付けて、稟「どう……でしょうか？」

と純に尋ねた。

純「うん。とても似合つてる。買って良かった。」

と言つた。それを聞いた稟は、純に抱き付き、胸に顔を埋めたのであつた。

純「稟……くすぐつたいって。それに俺、風呂入つてねーからくせーぞ。」

稟「良いんです。私には好きな匂いですから。」

そう言つて、稟は顔を擦り寄せたり、匂いを嗅いだりし、時々恍惚な笑みを浮かべた

りしたのであった。

34話

司隸・洛陽

一刀「これが・・・都。」

季衣「でっかい。」

春蘭「どうだ、驚いたか。」

栄華「・・・別に春蘭さんが誇るところではありませんでしょう?」

一刀「ああ・・・驚いた。」

一刀は、以前華琳が陳留なんて大した事無いと言われていたので、その意味がやっと理解できた。

純「はは、そっか。」

春蘭「当然だ。この大陸で一番大きな都だぞ。いかな天の国とはいえ、ここよりも大きな都などありはすまい。」

一刀「ああ・・・うん。」

一刀（まあ、東京の区内にでも足を伸ばせば、ここよりも賑やかな場所は勿論あるんだけど……。）

見慣れた東京の街と、映画のセットにしか見えない古代中国の建物で作られた超巨大都市じゃ、驚きの質が違っていた。

季衣「陳留も大きいって思ってたけど、もっと大きい街があるんだねえ。すごいなあ……。」

一刀「だよな……。華琳達は初めてじゃないんだよな。」

華琳「ええ、勿論。」

純「当然。」

燈「それより、急ぎましょう。西園軍の任命式、遅れるとそれだけで印象が悪くなりそうです。」

一刀「まだ時間は余裕があるんじゃないの？式典は昼からの筈だろ。」

栄華「ああ……。北郷さんは初めてでしたわね。」

一刀「何、禁城つてところは入るのが大変とかそういうのがあるの？」

華琳「あら、分かっているんじゃない。今からだと少し急がないと厳しいわね。」

純「そうですね。皆、急ぐぞ。」

一刀「おいおい……。マジか。」

そして、そのまま少し急いで朝廷に向かったのだった。その後、ボディチェックに持ち物検査などを行ったため、城内には入れたのは、結構な時間が経ってからだった。

朝廷

季衣「ほへー・・・。」

一刀「季衣、声出てる。声。」

季衣「あっ！」

一刀（まあ、思わず声が出ちやう気持ちも分かるけどさ・・・。）

一刀（こんな所、現代でもそれこそ何とか博物館とか美術館とか、世界遺産クラスの観光地になるレベルだもんな。）

純「一刀、俺達はこっちだ。」

そう言われ、一刀は後列に向かった。その際辺りを見渡すと、中には見覚えのある顔も混じっていた。

純も同様に、密かに見渡していた。

純（何進、皇甫嵩殿、呂布、田豊もいる……。後董卓と賈コウもいるな……。）
その際、

皇甫嵩「……。」

純「……。」

皇甫嵩と目が合ったので、ちよつと会釈をしたら皇甫嵩も会釈をしたのだった。その横で

栄華「……ああ、この前仕立てさせたお衣装を着せたら、どれだけ似合う事でしょう……はあはあ。」

純「……栄華、止めろ。」

燈「純様の言う通りですわ。」

栄華がかなり危ない状態で董卓を見ていた。しかし、この広間には全体的にピリピリした空気が漂っており、

何進「……。」

特に苛立ちを隠していないのが、中央の椅子の脇に立っている何進だった。その時、
??「遅くなりましたわ、失礼！」

と、高飛車な声が聞こえた

何進「誰だ！名を名乗れ！」

袁紹「あら。この私に、名乗りが必要ですよ……？」
と人を食った返事をしたが、

何進「……いいから早く席に着け、袁本初。」
と言ったのだった。

一刀「あ、怒られなかった。」

純（相変わらずだな、麗羽……。）

その様子を見た純は、そう思っていると、

何進「これで全員揃ったな。では、式典を開始する。」

何進「天子様の御前である。控えよ！」

一刀「控えよ……」

純「俺達と同じようにしろ、一刀。」

燈「ええ、顔を上げては駄目よ。」

一刀「り、了解……」

そして、純達は平伏した。その上から、

霊帝「……皆、此度は大義であつた。今後も朕の西園軍を支える八校尉の一員として、一層奮励努力するように。」

皇帝の気怠げな声が聞こえた。

何太后「続いて、尚書令・劉協様。」

劉協「皆の者、お、面を上げよ。」

そうして顔を上げた。すると、

栄華「・・・まあ♪」

玉座の間に立っていたのは、栄華好みの少女であった。

数時間後

栄華「・・・まったく。なんですの、あの方々は。」

と、式典が終わった後、栄華は一番不機嫌さを露わにしたのであった。

一刀「栄華はあの尚書令？とかいう子の所でもの凄く嬉しそうにしてたじゃないか。」
純「まあ栄華、そう不機嫌になるな。」

栄華「眼福だったのはあそこだけですわ。しかし、お兄様は感じませんでしたの？あの大將軍というかたに・・・。」

純「まあ、確かにこの式典の大半を占めたのは、何進大將軍の演説だったしな。」

純（まあ、いつも通り難しくて良く分かんなかったけどな・・・）

栄華「それに西園軍は天子様の軍なのです。それなのに、事あるごとに我が軍、我が軍と・・・。」

一刀（まあ、元々偉そうな物言いの上に完全な上から目線だったから、栄華が怒る気持ちも分からないでもない。）

栄華「お姉様はあのような方に仕えるために八校尉を拝領したわけではありませんの！お兄様も同じ気持ちではありませんの！」

すると、

華琳「控えなさい、栄華。どこで誰が耳をそばだてているか分からないわよ。」

と華琳がたしなめた。

純「そうだ。今は落ち着け、栄華。」

栄華「あ・・・失礼致しましたわ。私ったら、何をこんなに熱くなって。」
すると、

董卓「いずれにしても、八校尉は名誉官職ですから。実際に軍があるわけではありませんし、恐らくはこの先も同じでしょう。」

と董卓は言った。

一刀「・・・そうなの？」

董卓「はい。本来は黄巾党に対抗すべく設立された軍なのですが、黄巾党は既に皆様
が討伐してしまいましたので。」

春蘭「……。」

一刀（で……春蘭と季衣は例によって、何が無礼だったのか良く分かってないみた
いだな。）

一刀（何を言ったか分かたら、また暴れるんだろうなあ。特に春蘭は。）
すると

春蘭「……お前のその顔は分かるぞ。また無礼な事を考えている顔だ。」
と春蘭に言われた。

一刀「そ、そんな事無いよ。」

栄華「でも、今日は春蘭さんは大人しくしていらつしやいましたわね。私よりも春蘭
さんが怒るかと思いましたが、それ以上は間違ったけれど。」

春蘭「ふむ……大將軍の物言いが腹立たしいのは間違いないが、それ以上に腑に落
ちん事があつてな。……なあ、秋蘭。」

秋蘭「なんだ姉者。」

すると、

春蘭「どうしてあんな雑魚が大將軍を名乗っているのだ？」

一刀「ちよおま！」

春蘭がこの場で絶対に口にしてはいけない事を言った。

純「春蘭……。」

すると、

季衣「あー。それ、僕も思いました。」

燈「季衣ちゃんまで……。」

季衣も春蘭の意見に同調した。

春蘭「だが禁軍数十万の頂に立つ大將軍だぞ？ 実力を隠している様子でもなし、あれなら十人束にしても季衣の方が強かろう。」

一刀「だから……。」

燈「隣に天子様の奥方がいらしたでしょう？ あの方が、何太后。その姉君が、あの何進殿よ。」

一刀「……ああ、肉屋」

純「一刀！」

董卓「しっ！ その言葉もいけません！」

一刀「ご、ごめん……。」

純「お前ら、城を出るまで黙ってる。」

華琳「純の言う通りよ。その話は帰り道でゆっくり聞いわ。」

春蘭「……はあ。」

季衣「……はい。」

一刀「……分かった。」

純「栄華、お前もだ。」

栄華「うう……どうして私まで、このお三方と同列に……。」

董卓「でしたら、孟徳殿。この後はどうなさいますか？」

華琳「もう陳留に戻るわ。ここにいては、泰山府君にいくら寿命を伸ばしてもらつても足りそうにないもの。」

董卓「そうですか……。それでは、門の所までお送り致します。」

華琳「ええ、よろしくお願いするわ。」

董卓「今日はお会いできて光栄でした。今後も、朝廷のために力を尽くして下さいませ。」

華琳「こちらこそ。貴女と話が出来て、足を伸ばした甲斐もあったというものよ。」

董卓「後、子文殿。義真殿が、子文殿に会いたいと。」

純「分かった。それでは姉上、ちよつと。」

華琳「ええ。すぐに戻りなさい。」

純「はっ。」

そう言い、純はその場を後にした。

皇甫嵩「……。」

純「皇甫嵩殿。」

皇甫嵩「曹彰さん！」

皇甫嵩が振り向くと、純が拱手していた。

純「お久し振りで、皇甫嵩殿。」

それを見た皇甫嵩は

純「！こ、皇甫嵩殿……！」

皇甫嵩「ああ、お会いしたかったです……！」

真つ先に純に抱き付いたのだった。

純「ええつと……豫州での賊討伐以来でしたね。」

皇甫嵩「はい！あの日から、どれだけ待ちわびていたか……！」

そう言い、皇甫嵩は純の背中に回した腕を更に強く抱き締めた。

純「皇甫嵩殿こそ、息災で何よりです。それに、あれ以降もご活躍なさったとか。」

皇甫嵩「いいえ、曹彰さんのご活躍と比べたら、私など微々たる物です。曹彰さんのご活躍は、ここ洛陽の民の間でも有名でした。それを聞いて、私も胸が熱くなりました！」

純「そ、そうでしたか……。それで、皇甫嵩殿。俺に何用で？」

皇甫嵩「ただ、曹彰さんとお話したかったです。先程の式典で目を合わせてから、もう我慢が出来なくて……。」

純「そうですね。しかし、昔はよく、共に賊討伐しましたね。」

皇甫嵩「ええ。その度に、あなたの武勇に何度も助けられたわ。」

純「こちらこそ、皇甫嵩殿の的確な采配に助けられましたよ。」

皇甫嵩「ふふっ。けど、もうあなたは、私の手が届かない所まで成長し、立派な將軍になった……。」

純「まだまだですよ、俺は。衛青と霍去病のような將軍になるまでは。」

皇甫嵩「そう。あなたは変わらないわね……。」

純「……。」

皇甫嵩「……。」

そして、二人はそのまま見つめ合ったまま、時が過ぎた。

皇甫嵩「あつ……」

純「それでは皇甫嵩殿、俺は陳留に戻ります。」

皇甫嵩「そう……。」

すると、皇甫嵩は寂しい顔をした。それに対し

純「また会いましょう。」

そう言い、純は皇甫嵩の顔を覗き込んで言った。

皇甫嵩「はい……また。」

そして、純は拱手してその場を去った。

皇甫嵩（曹彰さん……。）

その後ろ姿を、皇甫嵩は胸に手を当てながら見ていたのだった。

それからしばらくが経ち、何進が暗殺され、その後董卓が実権を握ったという情報が入った。そして、不正を働いた役人の大粛正を董卓が行つてると聞いた栄華は、精神的ダメージを受けたのであった。

35話

陳留・大通り

一刀「・・・平和だなあ。」

と一刀が警備をしながらそう独り言を言った。たまに黄巾党の残党が現れても、訓練を積んだ兵達であつさり討伐できる。

一刀「本当に都じゃ、董卓が暴れてるのか・・・？」

華琳が送った使者は董卓に会う事が出来ず、警備の合間に都から来た隊商からの話では、血生臭い宮廷の話が枚挙に暇が無い。

そう色々考えていると、

??「あのお・・・すいません。」

一刀「ん？何ですか？」

後ろから声を掛けられたので、振り返った。

??「ちよつと教えて欲しいことがあるんですけど・・・構いませんか？」

一刀「何でしょう？道に迷いました？それとも、盗難でも？」

?? 「えっと、お城・・・」

?? 「の前に、美味しい料理を食べさせてくれるところ、教えてくれよ！」

?? 「ちよつ！文ちやあん！」

文醜「いいじゃんか斗詩。あんなバカでかいもん、別に逃げはしないって。」

顔良「うー。まったくもう、しょうがないなあ・・・」

文醜「それに、腹が減っては戦は出来ぬって言うだろ！まずは腹ごしらえだよ。な、兄ちゃんもそう思うだろ！」

一刀「あはは・・・で、どこに案内すれば良いのかな？」

文醜「料理屋がたくさん並んでるところ！」

一刀「あー。料理街ね、向こうに屋台通りがあるから・・・そこで良い？美味しい店も沢山あると思うよ。付いてきて。」

文醜「おお！兄ちゃん、気が利いてるじゃんか！」

と言われながら、一刀は料理街に案内したのだった。

文醜「おおおーっ！斗詩、見ろよ！すげー！屋台がたくさんある！」

顔良「そりや、屋台通りつていうくらいだし・・・」

一刀「それじゃ、俺はこの辺で・・・」
すると、

文醜「なんだよ兄ちゃん、あんたも一緒に食べていきなよー。どうせ昼飯、まだなん
だろ？」

と誘われた。これには

一刀「え？確かにちょうど良い時間だけどさ。」

顔良「ちよつと、文ちゃん。悪いよ。」

文醜「気にするなつて。旅費ならたつぷりもらつてるんだし！」

顔良「だからつて、旅費ならなおのこと大事に使わないと・・・。帰つてから真直ちや
んに怒られるよ。」

顔良がたしなめた。

文醜「それより何か？あたいのオゴリが食べられないつてののか？」

一刀「いや、そんなワケじゃないけど・・・」

文醜「なら決まり！兄ちゃん、どつかオススメのお店、教えてくれよ！さつきそう言つたよな！」

一刀「え、美味しい店があるとは言ったけど、教えるとは誰も・・・」
その時、

華侖「季衣！一刀つちがいるつす！おーい！おーい！」

華侖が声を掛けてきた。

一刀「華侖に季衣か！助かった！」

華侖「あ、もしかしてお仕事中だったつすか？」

季衣「・・・でも、助かったつてなに？」

一刀「いや、この人達にオススメの店を紹介する事になったんだけどさ。季衣、どこか心当たりない？」

季衣「この辺り？まかせてよー！」

文醜「ん？このちびつ子、詳しいのか？」

顔良「ちよつと文ちゃん、失礼だよう・・・。」

季衣「・・・兄ちゃん。誰、このぼさぼさ。」

文醜「・・・ぼさぼさ・・・。」

一刀「こら、季衣。そんな事言つちやダメだろ。失礼じゃないか。」

季衣「うー。」

顔良「文ちゃんも落ち着いてつてば。」

文醜「むうう……。」

一刀「えーつと、彼女はこの辺りの料理屋にすごく詳しいから、きつと美味しいお店も教えてくれますよ。」

華命「一刀つち、なんでそんなに棒読みなんすか。」

顔良「へええ……。良かったね、文ちゃん。」

文醜「……ふうん。こんなちびっ子が詳しいのかねえ。」

季衣「この街に来たばかりのぼさぼさよりは、詳しいと思うけどねー。」

文醜「なんだとう……!!」

季衣「なんだよう……!!」

一刀「おいこら、季衣……。」

顔良「文ちゃん……。」

文醜「ふー……。」

季衣「むー……。」

華命「それはいいから、お腹すいたつすー。季衣ー。」

一刀「そ、そうだな。とにかくその店に行こうぜ。そちらのあなたも、構いませんか

？」

顔良「はい。なんていうか・・・すみません。」

一刀「いえ、それを言うならこちらこそ・・・」

季衣「いいよ！そっちのぼさぼさに、絶対美味しいって言わせてやるんだから！見てもよ！」

文醜「へつ。あたいの舌は厳しいぜ？ちびつ子程度の選んだ店で、そうそう美味しいなんて言わないっての。」

季衣「むーっ！」

文醜「しゃー！」

そして、季衣がオススメのお店に入っていったのであった。

料理店

文醜「うまーい！」

一刀（はやっ！）

文醜「おお・・・こんな美味しいの食べた事無いぜ！斗詩も食ってみろよ！びつくりするほど美味しいから！」

顔良「もう食べてるよう・・・。」

季衣「へええ・・・お姉ちゃん、いい食べっぷりだねえ。」

文醜「そういうお前もなかなかじゃん。見直したぜ！」
すると

一刀「あ、俺の肉・・・！」

季衣「へへーん。油断してる方が悪いんだもんね。」

一刀の肉が季衣に取られてしまった。

文醜「良い事言うなあ。全く、油断してるとすぐぱくつとやっちゃうぜ！」

一刀「うおつ！姉さんまで・・・！」

今度は文醜にも取られてしまった。

顔良「文ちゃん、いい加減に・・・って、私の分まで取っちゃダメだよ！」
そして、

華命「あ・・・あれ。あたしのお肉もなくなってるっす！」

華命も取られてしまった。

文醜「油断大敵、つてね。それに、兄ちゃんのおゴリなんだから足りないなら注文す

りや良いだろ。お姉さん、おかわりー!」

一刀「いやちよ!?いつ俺のオゴリになった!」

季衣「僕もおかわりー!」

華侖「あたしもおかわりっすー!」

??「はいはい!すぐ持つてきまーす!」

顔良「すいません、すいません。お金はちゃんと払いますから・・・!」

一刀「そう言つてもらえると助かるけど・・・なんか、季衣が二人いるみたいだ。」

顔良「はあ。私も、文ちゃんが二人いるみたいに見えます。」

文醜「それにしてもこれ、美味しいなあ。南皮でもこんな美味しい店、なかなかないぜ!」

季衣「うーん。何かこの味、どこかで食べた気がするんだよなあ・・・こんな美味し

いお店の味、僕が忘れる筈無いんだけど・・・。」

一刀「え?ここ、行きつけの店じゃないの?」

季衣「違うよ。秋蘭様が美味しいって教えてくれたから食べに来てみたの。初めてだ

よ。」

その発言に

文醜「・・・んだお前。まさか、そんな店でこのあたいと勝負しようと思ったのか?」

文醜はちよつと反応し、ピリピリした雰囲気になった。

文醜「良い度胸してるじゃねえか・・・ああ？」

文醜「気に入ったっ！そのイチかバチかの勝負度胸、ちっこいってのに大したもんだっ！あたいの事、猪々子って呼んで良いぜ！」

季衣「おーっ！なら、僕の事も季衣って呼んで良いよ！いっちー！」

文醜「いっちーか！良いなあ、気に入った！今日は良い日だ！すっげー良い日だっ！」
そのやり取りに

一刀「えーつと、あれって・・・真名？」

と一刀は顔良に尋ねた。

顔良「・・・はい。真名です。」

それに、顔良はそう返した。

一刀「真名ってそこまで軽いもんじゃ・・・」

そう言い、華命を見た。

華命「むぐむぐ・・・何すか？一刀っち。」

一刀「・・・何でもない。」

一刀（・・・いや、まあ、真名一つで取っても色んな考えの人がいるよな。）

文醜「軽くなかないっ！あたいが、いっちーの事を認めた・・・って、あれ？」

季衣「二人ともいっちーじゃ、呼びにくいねえ。」

文醜「なら、きつ……」

顔良「文ちゃん、それは多分ダメ！」

季衣「じゃあどうしようか。許緒の方で何かするかなあ……」

文醜「許緒かあ……。なら、きよつちーかな。」

季衣「おー、良いんじゃない？ いつちー。」

文醜「よし、きよつちー！」

季衣「いつちー！」

??「はい大皿、これとこれ……追加ですー！」

文醜「ご飯おかわり！」

季衣「こつちもおかわり！」

華命「あたしもおかわりつすー！」

??「は、はあいつ！」

給仕の子は、一刀達のやり取りなんか見向きもしないでパタパタと厨房へ戻った。

一刀「で、君達、この街に何しに来たの？ 見たところ、武術もやるみたいだけど……」

顔良「分かるんですか？」

一刀「……まあ、一応、ね。」

顔良「はい。ええと、ですね……」

その時

秋蘭「失礼する。」

一刀「あ、華琳に純。秋蘭も。」

華琳と純、そして秋蘭と喜雨がやって来た。

華琳「あら。一刀達も来ていたの。」

純「よお、一刀。」

一刀「おう。それに喜雨も一緒なんて珍しいな。」

喜雨「この店には、僕の回る村で獲れた野菜を卸してるんだよ。大口で定期的に買ってくれるお客さんがいると、村の収入が安定するからね。」

一刀「成程なあ……。色々やってるんだ。」

華琳「……。そちらの二人は？」

一刀「美味しい料理屋を案内してくれて頼まれたんで案内したら、こんな事にね……。」

顔良「お兄さんにはお世話になってます。」

華琳「相変わらず、若い女の子には優しいのね。一刀。」

一刀「いや、俺は仕事だから……」

華琳「……。」

顔良「……。」

文醜「……。」

一刀「ちよつとお。初対面の人が誤解するだろー!」

純「あはは……。」

??「あ、いらつしやいませ!曹操様、曹彰様、夏侯淵様、今日もいつものでよろしいですか?」

顔良「っ!」

文醜「……?」

秋蘭「うむ。華琳様と純様もよろしいですか?」

華琳「ええ。それでお願ひするわ。」

純「俺もそれで頼む。」

喜雨「僕も同じもので。」

??「はいつ。すぐお持ちしますねー!」

そう言つて、給仕は厨房に向かった。

一刀「何?三人とも、よく来るの?」

純「まあな。」

華琳「まだ若いのに、大した腕前よ。本当は城に欲しいのだけれど……。」

一刀「・・・断られたの？」

華琳「ええ。親友に呼ばれてこの街に来たのだけれど、結局合流出来なかつたらしいのよ。それで、手掛かりが見つかるまでここで働いているんですって。」

一刀「親友ねえ・・・。この街も人はどんどん増えてるし、名前だけじゃ中々見つからないだろうな・・・。」

華琳「あら。あなたでも出来ないの？」

一刀「中々、つて言っただけだよ。・・・警備隊を動かして聞き込みをすれば、多分何とかなるよ。」

華琳「任せるわ。友人の消息が分かれば、その友人ごと召し抱える手もあるでしょうし。」

一刀「まあ良いか。・・・警備隊まで動かすのは流石にどうかと思っただけど、華琳直々の命令だもんな。」

華琳「それに、困っている女の子を助けるのは、あなたの仕事なのでしょう？」
その時、

??「お待たせしましたー！」

その給仕が料理を持って来た。

一刀「あの、お姉さん。」

?? 「はいっ。ご注文ですか？」

純 「コイツがお前の友人を探してくるそうだ。良かったら、特徴を言ってみたらどうだ。」

?? 「え、本当ですか？」

一刀 「そういうのが仕事だしね。その子も料理人なの？」

?? 「いえ、食べる方は大好きなんですけど・・・料理はさっぱりなんです。ただ、私を呼んでくれたって事は、料理のお店で働いてるんじゃないかな・・・と。」

一刀 「その手紙には仕事の事は書いてなかったの？」

?? 「住み込みの仕事が見つかったから、来いだけしか。ただ、私が呼ばれるくらいですから、彼女も給仕か、力仕事の裏方をしているのかと。力自慢の子なので。」

純 (内容も内容だが、来る方も来る方だろ・・・。)

そんなことを純は思っていた。

一刀 「ふーん。食べるのが大好きな、力持ちか・・・。流石にそれだけじゃ、手掛かりが少なすぎるな。」

一刀 「そうだ、名前は？真名じゃないほう。」

?? 「ええつと、真名じゃない名前なら、許緒・・・」

その回答に

一刀「……。」

華琳「……。」

純「……。」

秋蘭「……。」

喜雨「……。」

呆れつつ、季衣を見た。

季衣「……にや？」

その時、

??「あーっ！」

その給仕が季衣を見た瞬間、大声を上げた。

季衣「あー。流琉ー♪どうしてたの？遅いよう。」

流琉「遅いよじゃないわよーっ！あんな手紙よこして私を呼んだと思つたら、なんでこんな所にいるのよーっ！」

季衣「僕こそぞーっと待つてたんだよ。城に来て書いてあつたでしょー！」

流琉「お城つて、ホントにお城だったの!?季衣の事だから、ずっとどこかの大きな建物をお城と思つてるのばかり……。」

季衣「ホントにお城ですよねえ、華琳様。」

そして純は

純「……ふうーはあー……。」

ゆつくりと殺気を出したのだった。これには、

季衣「……。」

流琉「……。」

季衣と流琉は、武器を下ろしてしまい、

純「季衣、給仕、そこまでだ。」

季衣「は、はい。」

流琉「す、すいませんでした。」

腰が抜けてしまった。これには、

文醜「……。」

顔良「……。」

華命「……。」

文醜、顔良、そして華命も固まってしまった。

純「姉上、止まりました。」

華琳「ええ。ご苦労だったわね。」

純「御意。」

秋蘭「……ふう。」

一刀（あ、相変わらずスゲー……。）

華琳や秋蘭、一刀は除いて。とはいえ、一刀は未だにビビっていたが、以前は季衣と流琉同様腰が抜けてしまったのでまだマシな方だった。

純「それで、この陳留に何用で参った。顔良、文醜。」

顔良「は、はい！主、袁本初より言伝を預かり、南皮の地より参りました。こんな場面で恐縮ではありますが、曹孟徳殿、至急お目通りを願いませんでしょうか？」

華琳「……あまり聞きたくない名前を聞いたわね。」

純「はは。」

華琳「まあいいわ。席を用意させましょう。」

そう言つて、料理屋を後にしたのだった。

謁見の間

華琳「袁紹に袁術、陶謙、公孫贊、西涼の馬騰まで……よくもまあ、有名どころの名を並べたものね。」

顔良「董卓の暴政に、都の民は嘆き、恨みの声は天高くまで届いていると聞いております。今も続く官の大粛正に、禁裏も血の臭いで満ちているとか……。」

文醜「それをなげいた我が主は、よをただすため、董卓をたおすちからをもったしよこののかたがたに……。」

一刀「手本になるくらい見事な棒読みだなあ……。」

華琳「持つて回った言い方は止しなさい。あの麗羽の事だから……どうせ、董卓が権力の中樞を握ったことへの腹いせなのでしょう?」

これには、

顔良「う……っ。」

凶星の反応をした。

華琳「そういえば、以前黄巾の討伐で董卓がそちらに出向いた時、麗羽は賄を要求したとか……どうせ断られた怨みも引きずっているのではなくて?」

文醜「……げっ。」

華琳「大粛正とて、都で不正を働いていた官に行っただけと聞くわよ。どちらが悪か

は、判断の余地があると思うけれど？」

顔良「で、ですが……官軍の中でも賢人の誉れ高い蘆植殿を幽州に流したという話も……」

華琳「……蘆子幹殿の流刑は何進が大將軍だった頃の話でしょう。」

文醜「……よく知ってますねー。」

華琳「よく聞こえる耳があると、知りたくない事も入ってくるのよ。」

純「俺もその情報は入っている。しかし稟、一体何人隠密がいるんだ……？」

燈「顔良殿、先程あげた諸侯の中で、既に参加が決まっている方々は？」

顔良「先程あげた挙げた皆様は既に。今も、流れを見ていた小勢力や、袁家に縁のある諸侯達を中心に、続々と参戦の表明を受けております。」

純「その中に孫堅もいるだろう？」

顔良「孫堅……ですか？文ちゃん、知ってる？」

文醜「んー。袁術様の所の怖い女かな……？」

顔良「その方なら、おそらく袁術様と一緒に参戦されるのではないかと。」

純「そうか……。悪いな、変な事聞いてしまった。」

顔良「いえ……」

華琳「桂花。私はどうすればいい？」

桂花「はい。ここは参加されるのが最上かと・・・。」

桂花「華琳様。これだけの英傑が一挙に揃う機会など、この先あるとは思えません。ここで大きな手柄を立てれば、華琳様の存在は諸侯の間で一層盤石な物となります。」

一刀「でも・・・良いのか、華琳。今判断の余地はあるって言ったばかりだろ？」

華琳「前に言ったわよ、一刀。心構えはしておけと。」

一刀「・・・。」

一刀（ああ・・・そうか。あの時点で、華琳はもう心構えてやつを済ませてたのか。）

一刀（でも、知ってる人と戦うのか・・・。陳留を留守にしてる栄華も・・・帰ってきて今回の件を知ったら、悲しむだろうな。）

一刀「それで・・・良いんだな。董卓の側が正義だったとしても。」

華琳「正義など、立場が変わればいくらでも変わるものよ。」

華琳「・・・ただ、正しい事が勝つとは限らなくても、勝たなければ正しいとは名乗れないのよ。」

燈「それに私達が動かなくても、既に周りは動いています。ならば、それに乗るのも一つの道。」

華琳「顔良、文醜。麗羽に伝えなさい。曹操は、その同盟に参加する、とね。」

顔良「はっ！」

文醜「ありがとうございます！これであたい達も、麗羽様にお置ききされなくて済みます。」

一刀（袁紹も文醜達にお置ききするのか。この界限、そんな奴らばかりなのか？）
そして、華琳達は参加を決め、季衣と流琉の喧嘩も収まり、それぞれ真名を交換したのであった。

36話

連合の参加を表明してから数日後、華琳は兵を率いて出陣した。そして、

桂花「華琳様！袁紹の陣地が見えました！他の旗も多く見えます！」

目的地まで目の前に着いた。

香風「華琳様。向こうに馬の影。」

顔良「曹操様！ようこそいらっしやいました！」

華琳「顔良か。久しいわね。文醜は元気？」

顔良「はい。元気すぎるくらいですよ。」

華琳「結構な事だわ。・・・で、私達はどこに陣を張れば良いのかしら？案内して頂戴。」

顔良「了解です。それから曹操様。麗羽様がすぐに軍議を開くとの事ですので、本陣までおいでいただけますか？」

華琳「分かったわ。純、顔良の指示に従って陣の構築をしておきなさい。それから桂花は、どこの諸侯が来ているのかを早急に調べておいて。」

純「分かりました。栄華と愛紗も手伝ってくれ。」

栄華「分かりましたわ。」

愛紗「はっ！」

桂花「御意。」

華琳「私は麗羽の所に行つて来るわ。春蘭、秋蘭、燈……それから一刀は、私に付いてきなさい。」

春蘭「はっ！」

秋蘭「了解です。」

一刀「……俺も？ 凧達の指揮は？」

華琳「純に任せておけば良いでしょう。良い機会だし、他の將の顔も見ておくと良いわ。」

一刀「……了解。」

一刀（そうだな、それも……経験つてやつか。）

そして、本陣に向かったのだった。

連合軍本陣

華琳が天幕に入ると、

袁紹「おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

耳に響く高笑いが聞こえた。

一刀「な、何だ・・・!?」

華琳「・・・久し振りに聞いたわね。その耳障りな笑い声・・・麗羽。」

袁紹「華琳さん、よく来てくださいましたわ。」

華琳「・・・。」

一刀（そうだよな・・・ここに来るまでも、袁紹の話が絡むと途端にこの表情になつてたもんな。）

袁紹「あら、純さんは？」

華琳「・・・純なら、今陣の構築をさせているわ。」

袁紹「あら、そうですね。・・・真直さん！」

田豊「はいっ！」

袁紹「純さんに使いを。陣の構築が終了次第、諸侯と同じように来なさいと。」

田豊「し、しかし麗羽様！曹彰殿は曹操殿の弟君であつて、諸侯ではございませんよ

！」

袁紹「構いませんわ！同列に迎え入れなさい！」

田豊「し、しかし……！」

袁紹「真直さん……！」

田豊「……御意。」

袁紹に強引に言われた田豊は、曹軍の陣営に使いを送ったのだった。

一刀「……なあ、華琳。」

華琳「何かしら？」

一刀「何で袁紹は、純をそのような待遇で迎え入れるんだ？」

華琳「……麗羽は、純の事を大層気に入っているのよ。」

一刀「そ、そうなのか……。でもそれって……」

華琳「ええ。私にとつても、純にとつても迷惑な話よ。」

袁紹「さーて。これで主要な諸侯は揃ったようですわね。華琳さんがびりつけつですわよ、びりつけつ。純さんもこのような姉を持つて可哀相ですわ。」

一刀（つてちよつ！華琳に何て事を……！）

華琳「……はいはい。」

一刀（え？華琳も流した……!?春蘭は……っ！）

春蘭「……。」

一刀（こつちもスルーなのか。完全に袁紹の暴挙は許容範囲というか……。まあ、純の時点で度が過ぎてる気が……。）

秋蘭「……。」

一刀（……これはあれだ。諦めてる感じだ。）

袁紹「それでは純さんがまだですが、最初の軍議を始めさせていただきますわ！」

袁紹「知らないお顔も多いでしょうから、まずそちらから名乗っていただけますこと？ ああ、華琳さんはびりっけつですから、一番最後で結構ですわよ。本当に純さんが可哀相ですわ。おーっほっほっほ！」

一刀「……それにしても、あれが袁紹か。」

燈「ええ。北の南皮を治めているのは知っているわね。袁紹は三公を輩出した名家の出身で、官位も恐らくここに揃った一同の中では一番上の筈よ。」

一刀「だよなあ。西園八校尉の式典でも、筆頭って言われてたし。」
すると

袁紹「そこ。何をくつつちやべってますの！」
と叱られた。

一刀「あ、す、すいません……。」

??「……始めて良いか？」

一刀「はい。お願いします。」

そして、それぞれ自己紹介を始めた。

公孫賛「幽州の公孫賛だ、よろしく頼む。今回は徐州の陶謙殿の軍と連合で参加させていただく。徐州からは……」

??「雷々だよー!」

??「電々でーす!」

公孫賛「……おい、お前達!ここで名乗るときは真名じゃなくて名前を名乗れとあれほど……」

糜竺「あ、そうだった……」

糜芳「電々、間違えちゃった……」

公孫賛「……良いからやり直せ。」

糜竺「ええつと、陶謙様の名代で来た、雷々……じゃなくつて、糜竺だよ!徐州の軍を率いるよ!よろしくー!」

糜芳「その補佐の、糜芳でーす。……えへへ、ちゃんと出来た!」

袁紹「……いつからここは年少の私塾になりましたの。」

華琳「……陶謙殿の発言力も衰えたと聞いていたけれど、人材も不足しているよね。」

袁紹「まあ結構ですわ。次の方！お願い致しますわ。」

劉備「あ．．．はい。平原から来た劉備です。こちらは、私の軍師の諸葛亮。」

諸葛亮「宜しくお願いします。」

劉備「ええつと、私達も、幽州と徐州の連合に入れさせていただいています。宜しく
お願いします！」

一刀（劉備と諸葛亮か．．．。やっぱりこつちの世界じゃ、女の子なんだな。）

一刀（この時期はまだ三顧の礼は済んでない筈だけど．．．もうそのくらいは誤差の
範囲内だよな。）

一刀（寧ろもう蜀で王様やっても驚かないぞ。）

馬超「涼州の馬超だ。今回は母の馬騰の名代としてここに参加することになった。」

馬鉄「補佐を務める馬鉄です。よろしくお願いします。」

袁紹「あら、馬騰さんはいらっしやいませんか？」

馬超「最近、西方の五胡の動きが活発でな。袁紹殿にはくれぐれもよろしくと言付
かっているよ。」

袁紹「あらあら。あちらの野蛮な連中を相手にしては落ち着く暇がありませんわ
ねえ．．．。」

馬超「．．．ああ。すまないが、よろしく頼む。機動力のある相手なら任せてくれ。」

袁術「袁術じゃ。江南を治めておる。まあ、皆知つておろうかの！ほっほっほ！」

張勳「私は美羽様の補佐をさせていただきます、張勳と申します。」

孫策「丹陽の孫策よ。袁術と同じく、揚州の代表として参加させてもらうわ。こちらが、副官の程普と軍師の周瑜。」

孫策「実際に軍を率いるのは母の孫堅だけれど・・・今は席を外しているから、私の挨拶で代えさせてもらうわね。」

一刀「あれが孫策かあ・・・。」

一刀（オーラが凄いなあ・・・。）

そして

袁紹「次。びりつけつの華琳さん、お願いいたしますわ。」

華琳達の順番になった。

華琳「・・・典軍校尉の曹操よ。こちらは我が軍の夏侯惇、夏侯淵、陳珪・・・それから、北郷一刀。」

その瞬間

一刀（な、何だ・・・!?何で俺の所で、場がざわめくんだ・・・?）

皆の目が一刀に注目したのだった。

袁紹「あーら。その貧相なのが、天からの遣いとかいう輩ですの?どこの下男かと思

いましたわ。純さんと違って、みずぼらしいですわ。」

一刀「て、天から・・・!?おい、華琳。いつの間に・・・」

華琳「黄巾の前から、適当に噂は流しておいたのよ。まさか、ここまで広まっているとは思わなかったけれど。」

華琳「悪い噂は千里を走ると言うけれど、変わった噂も千里を走るのね。」

一刀「他人事みたいに・・・」

その時、

袁紹軍兵士A「申し上げます！曹彰殿が参りました！」

純が来たとの知らせが入った。

袁紹「通しなさい！」

袁紹軍兵士A「はっ！」

そして、それに入れ替わるように

純「遅参の段、御免なれ。」

純が入り拱手した。

袁紹「構いませんわ。それより、お久し振りですわ純さん。」

純「ああ、麗羽も息災で何よりだな。」

袁紹「ええ、純さんもお元気そうで。しかし、どこかの誰かさんと違って、純さんは

相変わらずお優しいですわね。」

純「・・・どうも。それより麗羽、自己紹介したいのだが。」

麗羽「ああ、そうですわね。純さん、お願い致しますわ。」

純「はっ！典軍校尉曹操が弟、曹彰でございます。こちらは副官の関羽と、軍師の郭嘉です。」

と純は拱手し自己紹介した。それを見た各諸侯は

孫策（曹彰か・・・あの時見たけどやはり、凄い風格だわ。確かに母様や粹伶、祭達まつりが負けたのも納得だわ・・・。）

馬超（久し振りに見たけど、また強くなってるな・・・あの日のこと、覚えているだろうか・・・。）

興味、懐古といったそれぞれの視線で混ざっていた。

袁紹「まあ、凜々しくて見事な自己紹介ですわ！ささつ、純さんはこちらへ！
そう言われ

純「ああ。」

純は華琳の隣だが、麗羽に最も近い位置に座ったのだった。

華琳「ごめんなさいね、純。」

純「いえ、お気になさらず。」

この際、華琳と純はそんな話をしたのだった。

袁紹「さて、それでは・・・最後はこの私、袁本初ですわね！」

それに続いて袁紹も自己紹介をしようとしたのだが

華琳「それは皆知っているから、いいのではなくて？」

公孫贊「だな。有名人だから、みんな知ってるだろ。」

袁紹「そ、それはそうですけど・・・っ！」

糜竺「雷々も知ってる！」

糜芳「電々もー！」

馬超「軍議を円滑に進めるための名乗りだろう？なら、いらないんじゃないか？」

と言われたのであった。

袁紹「うう・・・三日三晩考えた名乗りですのに・・・。」

純（それ、ゼツテーなげーやつだ・・・。）

袁紹「ま・・・まあ、仕方ありませんわね。それだけこの私が名を知られているとい

う証ですわ！おーっほっほっほ！」

一刀（ポジティブシンキング凄いなこの人。）

袁紹「では、紹介も終わりましたし、軍議を始めさせていただきますわ！」

袁紹「僭越ながら、進行はこの私！このわ、た、く、し！三公を輩出した袁家の長、袁

本初が行わせていただきますわ!」

袁術「むう……袁家の長は、この妾じゃぞ。」

華琳「良いから早く始めなさい。」

田豊「あ、袁紹様の補佐は、不肖この田豊が務めさせていただきます。」

袁紹「さてでは、最初の議題ですけれど……このわ」

公孫賛「現状の目的と確認だろ?」

袁紹「え……ええ、そうですわ。この私が集めた、反董卓連合の目的ですけれど……」

華琳「都で横暴を働いているという董卓の討伐、でいいのよね。」

華琳「西園軍の任命式の頃は中郎将だったはずだけれど、今はどれだけ官位を上げて

いるの?」

袁紹「さあ?どうせ大した役職では……」

しかし

公孫賛「聞いた話だと、相国だそうだ。」

その言葉を聞いて

紹・術「「なあああああんですつてええええええええ!／なんじやおおおおおつ!」」

袁紹と袁術は、驚きの声を上げた。

馬鉄「……んー?相国って?聞いた事のない官位だけれど、そんなに偉いの?」

袁紹「え、え、え、偉いなどというものではありませんわ……。相国など、どうして董卓さんなんかが……。董卓さんが相国……。」

一刀「ねえ、相国つて」

春蘭「私に聞くな。」

燈「私達朝臣に与えられる中では最高位の官職よ。」

純「？祖に仕えた蕭何様、曹參様以来、長らくあのお二人の大業を成した者がいなかったため、空位になっていたんだ。」

一刀「へえ。」

華琳「三公より上となると、袁家の立場も形無しね。」

袁紹「ぐぬぬ……！」

袁紹「なんたる専横、なんたる横暴。これは私達だけではありません……。私達の父祖に対する侮辱ですわ！」

袁紹「ただでさえ空丹様を玉座から引き下ろし、許せないと思っていた所にこの所業……。！許せません、絶対に許せませんわ……。！」

一刀「……。なあ、今言った真名つて」

燈「天子様から賜ったのでしょね。」

袁術「おのれ董仲穎。西涼の田舎者と思うておれば……。」

馬超「・・・あの。あたしの故郷も西涼なんだが。」

馬鉄「聞こえてないみたいだよ。」

華琳「なつてしまったものは仕方ないわ。理由は何であれ、朝廷をほしいままにする董卓は誅しなければならぬ。・・・次の議題は何かしら？」

その後、都までのルートや配置、先鋒を決め、その際孫堅が入ったりしたが、総大将が袁紹と決まり、解散となったのであった。

陣外

孫堅「曹彰！」

純「ん?・・・おお、孫堅殿。久し振りだな！」

孫堅「応よ!お前の活躍は聞いたぞ、随分と活躍したようだな。」

純「俺なんて大した事じゃねーよ。どちらかと言えば、これは姉上の手柄だからな。」

孫堅「ふん。相変わらずだな、お前は。」

純「それで、何の用だ?わざわざ挨拶をしに来た訳ではあるまい。」

孫堅「お前の姉曹操に用があるのよ。」

華琳「私かしら？」

孫堅「ほお……。弟同様、良い面構えになったな。」

華琳「あらそう。」

孫堅「それはそうと、お前んとこの弟には、随分と借りを作ってしまったな。」

華琳「別に構わないわよ。賊退治も手伝つて貰つたし、純も楽させて貰つたから別に良いと思うわ。」

孫堅「そうかい。じゃあ、戦場だな。」

そう言い、孫堅はその場を後にした。

一刀（軍議の途中で入ってきたから見たけど、あれが孫堅……。本当に虎みたいだった……。）

華琳「さ、私達の陣に戻るわよ。」

そう言い、陣に戻つたのだった。

連合軍本陣

袁紹「……ああもうつ、何もかもが台無しですわ！あのクルクルと戦狂い……!!
純さんの前で恥をかかせて!!」

袁紹「私が、どんな想いでこの連合を集めたか……幽州や徐州の田舎者どもに頭を
下げたか……ギギギ……」

文醜「まあ、實際あの話は長いですからねー。無くて正解でしたよ。」

袁紹「何か仰いまして!!」

文醜「……何でも。」

田豊「落ち着いて下さい、麗羽様。連合の作戦は、まだ始まったばかりです。」

田豊「どさくさ紛れでしたけど、連合の盟主の座は無事、麗羽様になったではありませんか。」

袁紹「ま、まあ……そうですけれど?」

田豊「何より……幽州連合は、自分達が領土的に大きな発言力を持っているという
自覚がありません。」

田豊「今のうちに懐柔して味方に取り込んでしまえば、揚州の袁術殿は勿論、孟徳殿
を抑える事も可能です。」

袁紹「それは分かっていますけれど……うう、純さんと違ってあの芋っぽい方々に
これ以上頭を下げるのは、私の誇りが……矜持が……」

袁紹「幽州と青州の半分だけあれば、このような事をするハメにはなりませんでしたが、の……どうして徐州と同盟など……」

田豊「ご辛抱下さい。全ては戦いの後のため。董卓を討ち果たした後に、大陸の覇権を握る為の準備です。」

袁紹「……そうですわね。私はここで終わりではありませんもの。」

袁紹「それにあのエセ相国に引きずり下ろされた空丹様の無念に比べれば……私の誇りなど、ものの数に入りませんわ。」

と本陣でそのような話をしていたのであった。

37話

汜水関

孫堅「……袁術殿まで、参られたのか。」

袁術「同じ揚州勢で、お主だけに先鋒の榮譽を持つて行かれてたまるものか。……打ち合わせ通りで良いのじやな？」

孫堅「ああ。こちらが主力を引き受け、そちらが門を目指す。荒事はこちらに任せよ。……近付けば、無事は保証出来んぞ？」

袁術「……ヒツ！じや、じやから、敵なぞ好きなだけ食い散らかして良いと言うておろうが！戦は全てお主に任せる！」

袁術（うう……勝手に強い奴と戦つてくれて、並の手柄に興味が無いのは御しやすくて良いが……どうしてこうも戦いたがるのじや。野蠻人は理解出来ん。）

孫堅「……つと、向こうも出てきたみたいだな。分かつてるじやねえか。」

張勳「大人しく籠城するかと思いましたが、向こうにも戦の事しか考えられない人がいるんですねー。」

孫堅「戦狂い大いに結構！ならば・・・テメエらも行くぞツ！」

孫策「応っ!!」

そして、先鋒の孫軍と董卓軍の戦闘が始まった。

曹軍

一刀「・・・始まったな。」

凧「はい、そうですね。」

沙和「隊長ー。見ているだけで良いのー？」

一刀「良いんだってさ。指示あるまで戦闘態勢のまま待機つてのが、純の命令だしな。」

真桜「ま、今んとこはこつちが有利みたいやし、大丈夫やろ。」

その時

純「よっ、お前ら。」

純が愛紗を連れてやって来た。

一刀「純・・・。」

凧「お二人は、どうしてこんな所に？」

純「姉上に『後方は何とかするから、あなたは最前線にいなさい』って言われてな。」

一刀「そっか……。愛紗も純の同行？」

愛紗「うむ、そうだ。」

純「えーつと……。今んところ、孫堅と袁術の攻撃は始まったばつかな。迎え撃つて

いるのは、呂布と……。あれは、華雄か？」

愛紗「はい、恐らくは。」

すると、その華雄の部隊が、呂布の部隊に先駆けて、真つ直ぐ孫軍に向かっていた。

一刀「あれ。孫堅さんを迎え撃つのは呂布じゃないのか。」

純「華雄は好戦的な武将だし、孫堅と戦いたがつたんじゃねーのか？」

愛紗「成程、華雄が孫堅相手に時間を稼いで、その間に呂布が袁術を叩くという事で

すね。」

純「ああ、恐らくその意図だろう。」

それを聞き、一刀は戦場を見ると、確かに呂布の部隊は華雄の部隊からワンテンポ遅れて袁術に接敵していた。

一刀（ああ、敵陣に突っ込んだのに旗の動く勢いが全然衰えないな。呂布無双ハンパねえ。）

凧「純様。袁術の軍勢、撤退し始めてる気がするのですが？」

一刀「え!? まだ戦闘、始まったばかりだぞ。」

純「確かに撤退し始めてるな……。」

愛紗「純様。これは、良くないではありませんか？」

純「これじゃ、孫堅が囲まれてしまうな。愛紗。」

愛紗「はっ。誰か！」

黄鬚隊兵士A「はっ！」

愛紗「袁術、孫堅の部隊を救援する。純様に続くのだ！」

黄鬚隊兵士A「はっ！」

そう言われ、黄鬚隊の兵士は全兵士に救援の準備をさせた。

純「一刀達も、しっかりついてこいよ。」

一刀「ああっ！」

凧「はっ！」

真桜「了解や！」

沙和「分かったのー！」

汨水関

孫堅「せいやあああああああつ！」

華雄「ぐうつ！・・・こ、こいつ、何という！」

孫堅「なんだなんだ、最初の勢いはもう終わりか！この程度じゃ、俺の薄皮一枚削れねえぞオツ！！」

華雄「おおおおおつ！せめて、腕の一本は貰っていく！」

孫堅「ほう。雑魚にしちやあマシになって来たじゃねえか！」

その時

孫堅「何だ・・・あの銅鑼は。」

後方から銅鑼の音が聞こえた。

程普「炎蓮様!! 袁術の軍が後退を始めました！」

孫策「はああ!? アイツ、もう逃げたの!?!」

孫堅「そんなに驚く事でもねえだろ。」

華雄「・・・隙ありっ！」

しかし、華雄の不意打ちに

孫堅「この程度が隙になるかよッ!!」

孫堅は対応したのだが

華雄「・・・今だあッ!!」

呂布「・・・ッ!」

孫堅「ぐおっ・・・!」

そこに呂布が入ったのだった。

孫策「母様ッ!!」

孫堅「なんだア、テメエ、他の奴らとは気が違うな・・・。」

呂布「・・・呂布。」

孫堅「ほう?あの噂の飛將軍、呂奉先か。面白エ奴が出てきたな。今度はテメエが俺と遊んでくれるのか?」

呂布「遊んでるつもり・・・ない。」

孫堅「そうつれない事を言うなよ。こっちはそのつもりで来てんだからよお!」
そう言つて、孫堅は呂布に突っ込んだのだった。

一方、現場に到着した純達は途中劉備の軍勢と合流し

純「孫堅の軍勢は、呂布と華雄の軍に囲まれてる!俺が先鋒を取る!一刀は趙雲と張飛と共に退路の確保を頼む!」

一刀「分かった!!」

趙雲「承知した!!」

張飛「合点承知なのだ!!」

鳳統「星さん、お願いします!!」

純「行くぞ!!無理に攻めきらず、敵の包囲に大穴を開けるぞ!!」

黄鬚隊「!!おおおーっ!!」

孫堅達を救出するため、純の指示で一氣に汜水関に向かったのだった。

孫堅「オオラオラオラオラア!!」

呂布「・・・しつこい。」

孫堅「いいぜいいぜ!噂通りの強さだな呂奉先!」

程普「皆!炎蓮様を援護するわよ!」

しかし

孫堅「来るな!コイツの相手は俺だ!」

と一蹴した。

孫策「ああもう、そんなに血が出るのに・・・っ!なんでそんなに頑固なのよ!」

太史慈「……親子そっくりだよ。」

孫策「自覚はあるけど言われると梨晏でもイラツとするわね。」

太史慈「そうやってイラツと出来るうちはまだまだ余裕あるよ！いけるいける！」

孫策「……はいはい、そうね。」

その時、関の声が聞こえた。

太史慈「何だろう、敵の増援かな……？」

孫策「いや、違うわ。……曹彰！」

太史慈「曹彰って、『黄鬚』曹彰！」

純「孫策！ここにいたか！」

孫策「久し振りね。梨晏、曹軍よ！」

純「知ってると思うが、袁術は既に後退した！そちらの撤退の支援に来た！」

孫策「それはありがたいけど……大人しく退がってくれるかしら。」

純「手足の骨折つても逃げさせるぞ！血路を開くぞ！」

孫策「ふうん。なら、行くわよ！」

そして、孫堅の救出作戦が始まった。

汜水関・董卓軍

霞「あの旗は……『黄鬚』曹彰やないか」

陳宮「霞殿！あの丘の向こう……次の増援の旗はどこか見えますか？」

霞「流石にあんだけ遠いと……ああ、旗はまだ見えんけど、あの旗の色と兵の動きやと曹彰の姉の曹孟徳か。潮時やな。」

陳宮「ですな。では、撤退ですぞ！銅鑼を鳴らすのです！」
しかし

陳宮「……聞こえていないようですな。」

現場は全く聞こえていなかった。

霞「ああもう、あのイノシシ共が……。撤退の援護をしてくる！後は任せたで！」
そう言い、張遼は関を出たのだった。

しかし、張遼が出撃した間に、汜水関は連合軍、特に黄鬚隊の稟と風が指揮している部隊と華琳率いる本隊が侵入してしまったのだった。

純「追い付いた！」

孫堅に辿り着いた純は、孫堅と呂布との間入って、それぞれ大小の刀で止めた。

呂布「・・・っ!!」

孫堅「テメエ・・・曹彰!!」

純「孫堅殿！早く撤退しろ！」

純はそう孫堅に言った。しかし

孫堅「うるせえガキが！人の戦いの邪魔するんじゃねえ！」

呂布との戦いでスイツチが入っていた孫堅は、聞く耳を持たなかった。

それに腹が立った純は

純「退き際を読めねー程冷静さを欠いてるバカが・・・意固地になつてんじゃねー!!」

と言つて

孫堅「ぐほあっ!!」

孫堅を後方に蹴飛ばしたのだった。

孫堅「ガハッ・・・小僧・・・テメエ・・・!!」

純「愛紗！孫策！孫堅殿を連れて撤退しろ!!」

愛紗「純様!!」

孫策「けど・・・!!」

すると

呂布「・・・ッ！」

ガギン！

純「つと！つぶねー！ほらよつと!!」

ガギン！

呂布が攻撃を仕掛けてきたので、純は軽くなりました。

純「早くしろ!!」

愛紗「・・・御意!!」

孫策「分かったわ!!母様っ!!」

孫堅「はーなーせー!!離しやがれーっ!!」

孫策「そういうわけにもいかないのっ!!」

愛紗「孫堅殿!!落ち着いて下さい!!」

そう言い、愛紗と孫策は孫堅を担いで下がったのだった。

純「さて・・・ようやく集中できた。」

呂布「・・・やっぱりお前、初めて会った時から違った。」

純「ほお、そうかい。なら、行くぞ!!」

呂布「・・・行く。」

その言葉を合図に、両者は激突した。戦闘が始まると、両者はまず、正面から激しくぶつかり、呂布の方天画戟と純の太刀が、火花と金属音を周囲にまき散らした。

ガギン！ガギン！ガギン！

それを見た太史慈は

太史慈「・・・凄い。これが『黄鬚』曹彰・・・。」

次元の違いに呆然としており

華雄「嘘・・・だろ・・・!?あの呂布と真つ向からやり合える者がいるなんて・・・。」

華雄も呂布と渡り合える武人が目の前にいる事に驚いていた。そんな中でも、両者の戦いは続き、

ガギン！ガギン！ガギン！

勝負が全く見えなかった。その時

霞「せやあああああつ!!」

純「おっと！」

呂布「・・・ッ！」

太史慈「何!?!」

霞「恋！華雄！撤退すんで!!」

張遼が入ってきたのだった。

華雄「お……おう！」

呂布「……分かった。」

しかし

董卓軍兵士A「大変です、張遼様!! 汜水関が、連合軍に侵入されました!!」

霞「何やて!?! アカン、急ぐで!!」

華雄「お……おう！」

呂布「……分かった！」

純「張遼……。」

霞「曹彰、今日は退かせてもらうで。アンタらとの勝負は、また今度や！」

純「分かった……。」

霞「ああ、血気盛んやけど、意外に冷静なのが来るわー!! とにかく、お前ら、撤退するんぞ!!」

そう言つて、張遼達は撤退したのだった。そして、連合軍は汜水関の突破に成功したのであった。

38話

連合軍本陣

袁紹「華琳さん！何を考えていらつしやいますの！」

華琳「孫堅達は壊滅寸前だったから、純が己の判断で救援したまでよ。それに、我が軍の指揮権は弟に委ねているから私が口を出すまでも無いわよ。その後に、反撃を受けると厳しいだろうと判断したから、追撃を引き受けようと思ったのだけけど？」

純「麗羽、現場判断だった故、連絡が行き届かなかった。申し訳なかった。」

そう言つて、純は袁紹に謝罪した。

袁紹「そ、そんな・・・!!別に純さんを責めてるわけでは・・・」

純「それでも、結果的にそう見えてしまった事は否定しない。麗羽、本当に済まなかった。」

と純はまた袁紹にそう言つた。

一刀（さ）、流石だな純は。こういつた交渉は苦手だと言つていたけど、結構出来てる

じゃないか……。」

その様子を見た一刀は、純の袁紹に対しての対応に舌を巻いた。

孫策「そんなに熱くならないで、袁紹。……結果的に、私達も助かったのだから。」

華琳「純と孫策もこう言っているのだし、それでいいのではないかしら？」

袁紹「ぐ、ぐぬぬぬぬぬ……っ！分かりましたわ！純さんのお顔に免じて、今回は大目に見ますわ！」

純「助かる。その代わり、詫びと言っちゃ何だが、次の虎牢関一番乗りは、麗羽が取つても構わない。」

純「ただ……追撃が必要になった場合、誰かに引き受けて貰えると助かるんだが。」

袁紹「なら、私……」

華琳「錦馬超、あなた達はどうか？」

袁紹「……ッ！」

馬超「ああ、あたし達は遠慮しとくよ。野戦ならいくらでも引き受けるけど、砦攻めは得意じゃないし、わざわざ残党を追い回すだけってのもなあ。」

華琳「そう。なら、他に誰かいないかしら……袁術は来ていないし。」

袁紹「で、でしたら、追撃は私が引き受けてもよろしくてよ！虎牢関の一番乗りは、今度こそ私達袁家一門ですわ！」

華琳「……はいはい。なら、それでいいわね。」

一刀（……なんとまあ、分かりやすい挑発に乗って。）

純（相変わらずチョロいな……。）

そして、華琳と純、そして一刀は一緒に天幕を出た。

曹操軍陣営

桂花「お帰りなさいませ、華琳様！いかがでしたか？」

華琳「虎牢関攻略の指揮権は引き受けてきたわよ。とはいえ、殆ど純がやってくれたけどね。」

純「すいません、勝手に進めてしまつて。」

華琳「構わないわ。実質、我が軍を指揮しているのはあなた。気にしてないわ。」

純「ありがとうございます。これで良いんだな、桂花。」

桂花「はい。ここで呂布と張遼を破れば、華琳様の名は一気に高まるでしょう。」

一刀「ただ……そのぶん強敵なんだろ？」

香風「多分、都で一歩強いのが呂布。」

秋蘭「うむ。今は董卓のもとでその実力を遺憾なく發揮していると聞く。張遼も、黄巾党の時の燻っていた様子とはわけが違うぞ。」

純「姉上、もし張遼を我が陣営に引き入れたいのなら、春蘭が最適ですよ。」

華琳「あら、どうして私が張遼を欲しいと思つてしていると気付いたのかしら?」

純「初めて会つた時から欲しそうな顔をしていたではないですか。」

華琳「相変わらず鋭いわね。なら、どうやったら捕まえられるかも考えているのでしよう。」

純「はい。彼女の強みは個人の武よりも用兵です。兵を奪い取つた上で捕らえるのであれば、兵は桂花が。張遼は春蘭が何とかしてくれるでしょう。」

桂花「お任せ下さい!」

しかし、

春蘭「わ……私ですか!」

まさか自分が言われるとは思わなかつたのか、春蘭は驚いてしまった。

華琳「あら、してくれないの?春蘭。桂花はしてくれるようだけれど?」

桂花「……ふふん。」

春蘭「くう……っ!張遼!とき、ものの数ではありません!十人でも二十人でも、

お望みの数だけ捕らえて参りましょう！」

一刀「おいおい……。ほんともう、皆も華琳の挑発に乗りすぎだろ！ 焚き付ける方もどうかと思うけど。」

春蘭「北郷、何だその目は！ 何か言いたい事でもあるのか？」

一刀「いや、別に無いけど。」

春蘭「けど何だ！ 言いたいがあるならばつきり言えば良いだろう！」

一刀「……。春蘭は本当に華琳の事が好きなんだなあ、つてき。」

春蘭「当たり前だ！ 既に身も心も華琳様に捧げているのだぞ。これ以上何をもって華琳様への忠誠を示せと言うのか！」

純「よし。張遼は桂花と春蘭に任せる。見事捕らえてこい！」

春・桂「はっ！」

華琳「それで、呂布の事だけ……。純、あれと戦ってどうだったかしら？」

華琳のその言葉に、皆純に集中した。

純「そうですね……。一応小手調べだったんですが、結構強かったですね。」

一刀「えっ!? あれで小手調べだったのか!？」

純「ああ、そうだけ。まあ、呂布もあれでまだ本調子じゃ無かったようだしな。」

一刀「マジか……。」

華琳「そう……。次は勝てそうかしら？」

純「お任せ下さい。俺もまだ本気を出しておりませんので。」

華琳「分かったわ。純、黄鬚の力、この私に見せて頂戴！」

この言葉に

純「御意！」

純は拱手して答えた。その様子を見ていた秋蘭と栄華は不安が心に湧き上がったのだった。

そして、軍議は終わり解散となった。

虎牢関

華琳「……。でてきたわね。連中は籠城という言葉を知らないのかしら？」

桂花「恐らく華雄の独断でしょう。」

純「春蘭でもしねーぞ、こういう事は。」

春蘭「純様、どうして私を引き合いに……」

一刀「おい、後続の部隊も出てきたぞ。旗は呂と張だつてき！」

純「華雄の独走に引きずり出された、という所か。まあいいや、一刀は他の部隊に通達してくれ。本作戦は、敵が関を出て来た場合の対応で行うと！」

一刀「分かった！三人とも、行くぞ！」

凧・真・沙「二はっ！／任しとき！／分かったの！」

華琳「・・・さて。流琉。」

流琉「お側に。」

華琳「確かこれが初陣になるのよね・・・。汜水関では遠巻きに見ているだけだったけど、実際に相手を目の当たりにして、どうかしら？」

流琉「正直・・・ちよつと怖いです。熊や虎を退治した事はありませんけど・・・」

それを聞いた華琳は

華琳「・・・純と同じ事が出来る子がいるとはね。」

と引き気味に言った。

季衣「大丈夫だよ！僕も一緒に戦うから、頑張ろう。ね！」

流琉「うん！」

純「さて。流琉が大丈夫なら行動を開始するか。」

華琳「ええ。純、皆に言葉を。」

純「はっ。」

そして、純は馬を前に出した。

純「聞け！曹の旗に集いし勇者達よ！」

純「この一戦こそ、今まで築いた我ら全ての風評が真実である事を証明する戦いだ！」

純「黄巾を討ったその実力が本物である事、あまねく天下に知らしめてやれ！」

純「総員突撃！敵軍全てを挽き潰せ！」

そして、虎牢関の戦いが始まった。

39話

虎牢関

「虎牢関の戦いは、曹操軍の活躍で優勢に進めていた。

華雄「くうう……っ！」

霞「あーっ、やっとおった！このどあほう！とつとと関に戻るで！」

華雄「霞！離せ、私はまだ戦える……っ！」

霞「どんだけアホ晒しやあ気が済むんや！そういう事は、虎牢関の上から言い！
そう言い、霞は華雄を連れて撤退しようとした。

華雄「はーなーせー！」

霞「撤退や！撤退！虎牢関に戻れば、まだ十分戦えるわ！皆もはよ戻り！」

呂布「……霞。」

霞「今取り込み中や！」

呂布「……ねねの伝令。」

霞「何や。手短にな。」

董卓軍兵士A「はっ！先程買駆様より連絡があり、非常事態あり。虎牢関を放棄し、至急戻られたしとの事！」

霞「何やて・・・!?誤報とちやうやろな。」

董卓軍兵士A「印は董卓様のものだったそうです。陳宮様は、既に撤収の準備を始めておいでです！」

霞「何や詠の奴！自分がおつたら何とかなる言うて、なつてへんやないか・・・！」
そう言い、霞は買駆に対して不満を言った。

呂布「・・・霞。」

霞「次から次に何や！ウチ、一人やねんぞ！」

呂布「・・・関に人。」

霞「人つて・・・ちよつ、やばっ！奴らに突入されたら、ウチら帰る所がなくなるで！」

呂布「・・・先に行く。」

霞「任せた！だああ、華雄もさつきと来い！」

華雄「う、うう・・・。」

そう言い、張遼らは撤退したのだった。

文醜「おらあ！総員駆け足ー！ここを抜けりや、虎牢関はあたいらのもんだぞつ！」

顔良「皆さん、急いで下さーい！」

袁紹軍が、虎牢関に入ろうとしたその時

呂布「・・・させない。」

顔良「きゃー！」

呂布が立ちほだかった。

文醜「お、呂布じゃんか！勝負だつ！」

呂布「・・・邪魔！」

そう言つて

文醜「どわあつ!？」

顔良「きやああつ！」

顔良と文醜を弾き飛ばした。

趙雲「大丈夫か、二人とも！」

顔良「な、何とか・・・。ありがとうございます。」

文醜「ひやーつ。死ぬかと思つたあ・・・！」

呂布「死んでない・・・頑丈。」

文醜「当たり前だ！あたいらがどれだけ麗羽様のお仕置きに耐えてきたと思つてんだ

よー！」

呂布「……?」

趙雲「お主らは退がっている。ここは我々が引き受ける！」

文醜「えーっ。あたかもまだまだやれるぜ！」

顔良「ダメだよ文ちゃん、ここはこの人達に任せて、私達は本隊の指揮を！」

文醜「うーっ。次はコテンパンにしてやるからなー！」

そう言つて、文醜は顔良と共に本隊の指揮のため引揚げた。

呂布「……やつと減った。次は……」

張飛「次は鈴々が行くのだ！」

趙雲「待て鈴々！一人では無理だ！」

張飛「大丈夫なのだ！でええええいつ！」

呂布「……遅い。」

張飛「にやにやー!?こいつ、強いのだ……っ！」

趙雲「だから無理だと言つたらう！これと一対一でやれるのは曹彰殿くらいだ！」

孫策「……あら、劉備の軍も来ていたのね。」

趙雲「孫策殿……?」

呂布「……また増えた。」

孫策「母様に傷を負わせた分、一当てしないとね。」

趙雲「そうか……。濟まないが、助力を頼めるだろうか？」

孫策「良いわよ。そのつもりだしね。」

趙雲「感謝する。」

孫策「それに、強い相手と戦えるのは、嫌いじゃないわ。」

趙雲「よし！ならば、三方より一斉に掛かるぞ！」

張飛「分かったのだ！」

孫策「ええ！」

そして、三人は一斉に掛かったが

呂布「……だから、邪魔！」

趙雲「くうっ！」

張飛「うひやあっ！」

孫策「ぐっ！」

呂布に一蹴された。その時

霞「でりやあああっ！」

孫策「……きやつ！何、割り込み!？」

趙雲「ちいつ！鈴々、大丈夫か！」

張飛「だ……大丈夫なのだ！誰なのだ！」

孫策「ちよつと。正々堂々……じゃないけど、人の勝負に割り込むなんて何考えてるのよ！」

張遼が入ってきた。

霞「じゃかあしい！お前らに構うとる暇はあらへんのや！」

霞「恋！そんなん相手にしてへんで、本隊叩くで！道はウチが開いたる！」

華雄「ぐむむむー！離せー！」

呂布「……分かった。」

そして、呂布達はその場を後にした。

孫策「ちっ！」

張飛「待つのだー！勝負するのだー！」

趙雲「今は退け、鈴々。相手も状況が悪い。無理をしてこちらが傷つけば、桃香様が悲しむぞ？」

趙雲「確か、割り込んできたのは張遼だ。呂布と張遼に揃われては、曹彰殿がいなければいくら何でも分が悪すぎる。」

張飛「うう……次は鈴々が勝つのだ……。」

孫策「趙雲の言う通りね。あれに勝つには、曹彰を頼るしかないわね。総員退け！作

戦は失敗した！」

張飛「総員、下がるのだ！撤退なのだ！」

趙雲「撤退！撤退！砦の上から矢が来るぞ！」

孫策「けど・・・呂布と張遼、あの二人が揃ってるなら・・・この砦攻め、長い戦いになるかもしれないわね。」

しかし翌日、誰もが予想しなかった情報が入ってきた。

純「・・・何？虎牢関が、無人だと？」

栄華「はい。袁紹さんが偵察を放ったところ、中は呂布どころか猫の子一匹いなかったそうですわ。」

香風「にやーん。」

純「どういう事だ？」

稟「畏の可能性は低いかと。」

風「そうですね。呂布さんも張遼さんも健在な現状、その意味すらないかと。」

桂花「はい。私も同感です。」

一刀「都に立てこもって、本土決戦したいんじゃないの？」

秋蘭「虎牢関が陥ちた後ならまだしも、今の段階でそれをする意味はないだろう。向こうは将の一人も欠けていないのだぞ？」

一刀「……だよなあ。」

凧「他所から挙兵があったとは考えられませんか？」

桂花「そもそも挙兵したい諸侯が集まったのが、この連合軍なんだけど？」

燈「ここにいる以外の諸侯で、呂布と張遼の二人を呼び戻す程の勢力を用意出来る者は……恐らく大陸にはいないでしょう。」

一刀「小規模な敵なら、誰か将を一人回せば済む話か……。」

華琳「それに都での籠城戦となると、民にも心を配らねばならない。それをするくらいなら、兵しかいない関で籠城した方が遙かに負担が少ないわ。」

真桜「やつぱりかなあ？」

華琳「連中にとつて、籠城して稼ぐべき何らかの 때가 満ちたか……あるいは」

一刀「あるいは？」

純「都で何か起きたという事ですな。」

華命「起きたつて、何がっすか？」

純「それは分かんねー。」

華琳「ええ、私もよ。でも、少なくとも、虎牢関を捨ててでも優先しなければならぬ事態としか言えないわ。」

春蘭「むう……華琳様でもお分かりにならないとは、一体何が起きているのだ。秋

蘭。」

秋蘭「私に聞かれても分かるものか。」

桂花「いつその事、どこかの馬鹿が功を焦つて関を抜けに行つてくれれば良いのですが……」

純「流石にねーだろ。春蘭でもそこまでしねーぞ。」

春蘭「だから純様、どうしてそこで私を引き合いに出すのですか……」

柳琳「お兄様。今偵察の兵から、袁紹さんの軍が虎牢関を抜けに行つたと報告が！」
この報告に

華琳「……」

純「……」

桂花「……」

稟「……」

風「……」

秋蘭「……」

一刀「……」

華琳をはじめ、皆呆れた表情を浮かべた。

柳琳「……どうかなさいましたか？」

純「……つたく。」

華琳「汜水関の時は散々言ったクセに、今度は自分が抜け駆けとはね。」

一刀「まあ、袁紹が無事に抜けられたら、罨は無いつて事で良いんじゃないか？」

純「そうだな。」

華琳「たまには馬鹿に感謝するのも悪くないかもね。」

純「麗羽が無事に関を抜け次第、俺達も移動を開始するぞ。」

そして、連合は無事虎牢関を抜け、洛陽を包囲したのだった。

40話

連合軍が洛陽を包囲して既に数日が過ぎたが、未だに落ちる気配は見せなかった。

黄鬚隊天幕

流琉「純様、只今戻りました！」

純「ご苦労だった。状況はどうだった？」

季衣「……全然ダメでした。上からもああも反撃されたら、手も足も出ないですよ。」
流琉「劉備さんの軍も攻めてましたけど、状況は同じようでした。今は袁術さん……つていうか、孫策さんが攻めてますけど、多分変わらないんじゃないかと。」

純「……そうか。分かった、下がって姉上の護衛をしろ。」

そう言い、季衣と流琉を下がらせた。そして、天幕に残ったのは、純と秋蘭に愛紗と稟、そして風のみとなった。

純「……時間がねー、早く決着を着けねばな。」

秋蘭「はい。この連合は、元々連携が取れてる訳でもありません。あまり長く城攻め

が続くようなら、士気も下がりますね。」

愛紗「そうだったら、連合の敗北が必至かと。」

風「そうですね。あまり長引かせるわけにはいかないかと。」

純「うむ……。」

すると

稟「純様。私に一つ策があるのですが。」

と稟が純に言った。

純「何だ？言ってみろ。」

稟「はっ。今までのような散発的な城攻めを止めて……そうですね、一日を六等分にして一つの隊が六分の一ずつ攻めるといふの如何かと？」

愛紗「それはつまり……。」

秋蘭「一日中時間を問わず攻め続けるという事か？」

風「おおー！稟ちゃん、流石ですねー！」

宝慧「やる事全てがえげつねーな姉ちゃん。」

純「……成程。朝も昼も晩も攻められたら、数で劣る向こうはたまんねーな。」

稟「はい。試してみる価値はあるかと。」

純「よし、その策を採用する！姉上に相談しよう！」

稟「はっ！」

そして、純は華琳のいる天幕に行き、稟が提案した策を話した。それを聞いた華琳は華琳「・・・良い策ね。」

一刀「うわあ、えげつないなあ・・・。」

桂花「稟の頭つて、どうなってるのよ？」

華琳「早速麗羽に伝えなさい。」

純「俺で良いのですか？」

華琳「ええ。この軍の実質指揮しているのはあなたよ。それに、麗羽がちゃんと耳を傾けてくれるのはあなただけよ。全て任せるわ。」

純「分かりました。」

そして、早速連合軍本陣の軍議で純は提案した。

連合軍本陣

馬超「・・・攻め続ける？ どういう事だ？」

張勳「うわ……えげつないですねえ……。」

袁術「七乃、どういう事なのじゃ！妾にも分かるよう、説明してたも！」

糜竺「電々、分かる？」

糜芳「分かんない……。雷々は？」

糜竺「雷々も分かんない……。」

袁紹「純さん、今も我が軍は間断なく攻め続けていますわ。やり方をどう変えろと？」

公孫贊「……間断なくう？」

袁紹「……何か文句ありますの？」

公孫贊「いや、別に……。」

純「簡単な事だ。今の皆が攻めている散発的な城攻めをやめて、一日を六等分に
て……。」

諸葛亮「そうして、一つの隊が六分の一ずつ攻め続けるといふ事ですか？」

純「その通りだ。」

孫策「成程ね……。」

周瑜「中々良い策だ……。」

周瑜（恐らく彼の軍師郭嘉の策だな……。流石のキレ者だ。）

袁紹「しかし純さん、一日の六分の一しか攻めないようでは、いつまで経ってもお城

が陥ちませんわよ！」

袁術「麗羽姉様の言う通りなのじゃ！残りを昼寝されたら、たまらんぞ！」

・・・しかし、袁家の馬鹿は伝わっておらず

純「・・・。」

華琳「・・・。」

公孫贊「・・・。」

諸葛亮「・・・。」

馬超「・・・。」

一刀「・・・。」

孫策「・・・。」

周瑜「・・・。」

皆呆れた表情を浮かべたのだった。

袁術「な、なんなのじゃ？」

袁紹「何ですの、その目は・・・。」

田豊「お二方、あくまでも一隊がの話です。それが六隊あったらどうですか？」

袁術「六分の一が、六個あるのかえ・・・？」

糜竺「六分の一って何・・・。」

糜芳「一個のリングを、六つに分けるんだよ、雷々。その一個が、六分の一だよ。」
糜竺「だったら分けたリングはウサギさんにしようよ！電々。」

糜芳「良いよ！ウサギさんリング、可愛いもんね！」

田豊「大事なのはそこじゃないでしょう！その六つに分けたリングを、六つ合わせたらどうなると思う？」

糜竺「ええつと・・・」

糜芳「ええつと・・・」

袁紹「・・・一日が全部埋まってしまいますわ！」

純「そういう事だ、麗羽。朝も昼も晩もなく攻められたら・・・数で劣る向こうとしてはたまんねーだろう。」

純「数で勝る今のうちでなければ、試せない作戦だ。ここまですれば、向こうもすぐに音を上げてくると思う。麗羽、どうする？」

麗羽「流石純さんですわ！あなたの策、採用しますわ！」

この策は、董卓軍には結構こたえ、買収はやむなく、最終決戦に臨んだのだった。

霞「これが最後の決戦・・・やな。」

華雄「三万か・・・。これで、よく保ったものだ。」

霞「どつかの馬鹿が無茶せんかつたら、もうちよつとおつたんやけどなあ・・・。ま、今更言うても仕方ないっちゃ仕方ないけど。」

霞「恋。用意はええか？」

呂布「・・・全部倒す。」

霞「その意気や！楼杏もスマンかったな・・・。こんな争いに巻き込んでしもうて・・・。」

皇甫嵩「別に構わないわ。私は、自分の意志でこの戦に参加したまでよ。」

霞「そうか・・・。詠、ねね、城の守りは宜しゆうな。」

買駆「ええ。任せておいて。」

陳宮「恋殿の後背はしっかりお守りするのです！」

董卓軍兵士A「張遼様！敵軍は四方から取り囲み、いつでも攻められる状態になっています！」

霞「連中、楚の歌あ歌つとるか？」

董卓軍兵士A「え、あ・・・いえ。」

霞「やれやれ。ここまでやつといて、洒落の効かん奴らやなあ。……ま、ええわ。景気づけに……お前ら、聞けえ！」

呂布「……。」

華雄「……。」

皇甫嵩「……。」

買駆「……。」

霞「……つて、誰も喋らんのかい！」

呂布「……苦手。」

華雄「かつ、かつ、かつ！」

霞「どもるくらいなら黙つとき！」

皇甫嵩「詠さん……。あなたがやるべきでは？」

買駆「……はい。」

そして

買駆「皆の者、今までよく頑張った！ここが最後の決戦だ！この戦いに勝てば、再び心安らかに眠れるあの日々が帰ってくるだろう！」

買駆「しかし、もし退けば、この悪夢の日々は永劫の先まで続く事となる！」

買駆「我らが平和を、我らが天子様を、禁城を穢す逆賊共をお護りするのだ！総員、戦

闘用意！」

曹操軍陣営

風「報告っ！城の正門が開きました！」

純「見えている。なら・・・お前ら、聞けえ！」

純「お前ら、今までよく頑張った！ここが最後の正念場だ！この戦いに勝てば、長い遠征を終え、故郷の地を再び踏む事が出来るだろう！」

純「けれど、もし奴らをあの城の中に押し戻してしまったら、この遠征は永劫に続くこととなる！」

純「我らが平和を、我らが天子様を、禁城をほしいままにする逆賊どもから取り戻すのだ！総員、戦闘用意！」

桂花「門より敵部隊出撃！突撃してきます！」

純「・・・さあ、誰が俺達の相手をしてくれんのかなあ。総員、突撃いっ！」

そして、この戦の最終決戦が始まった。戦いは一進一退の攻防となったが、次第に董

卓軍が押され始めたのだった。

霞「・・・やれやれ。西涼の連中も、やっと撒けたか。」

霞「けど、どう見てもこつちの負けやなあ……。月と詠、上手く逃げられたやろか。」
すると、

春蘭「待て！貴様が張遼かつ！」

春蘭が張遼の前に現れた。

霞「あちやあ・・・このクソ忙しいときに。一騎打ちの申し込みなら、もう締め切つとるで！」

春蘭「そんなことは知らん！否というなら、私との勝負に応じるまで追いかけるまでだ！」

霞「その目・・・アカンっちゆうても仕掛けてくる目やな。」

春蘭「・・・ふむ。貴様の目も、剣に映る私の目と同じように見えるが？」

霞「・・・なんや、そうか。あー。あかんなあ。自分の事は、出来るだけ殺しとるつもりやったんやけど・・・。」

そう言つて、霞は飛龍偃月刀を構え、

霞「……せやな。ま、最後まで自分のしたいことしてもバチあたらんやろ。詠にもそう言うとするしな。……名あ名乗りい！」

そう言った。

春蘭「我が名は夏侯元讓！主の覇道を切り開き、立ち塞がる何者をも打ち倒す、曹孟徳の剣である！」

霞「元讓いうたら、夏侯姉妹の手が付けられんほうか！」

霞「ウチの名乗りは今さらいらんやろ！……来いや！」

春蘭「良い心がけだ。ならば行くぞ、張文遠！」

そして、

霞「おおおおおっ！」

春蘭「でやああああああっ！」

両者の刃は激突した。

孫策「……せえいつ!!」

太史慈「流石呂奉先だねー！やっぱり強いねー!!」

呂布「……邪魔!!」

太史慈「……ぐっ！」

孫策「流石に一筋縄ではないわね!!母様に傷を負わせたのだから、せめてと思っただけど……」

呂布「……っ!!」

その時、呂布の鋭い攻撃が孫策に来た。

孫策「……っ!!」

その時

ガチン!!

呂・策・太史「!!?!」

純「間に合ったか。」

純が間に入り、太刀で呂布の一撃を止めた。

純「孫策、もう限界だろう。ここは任せろ。」

孫策「……そうね。流石に限界かも。」

そう言った孫策の足は、震えが来ていた。

太史慈「雪蓮……。」

孫策「退くわよ、梨晏！」

太史慈「うん!!」

孫策「曹彰……頼んだわよ。」

そう言つて、孫策達は下がった。

純「待たせたな、呂布。ここからは俺が相手だ。連戦になるが、大丈夫か？」

呂布「大丈夫。」

そして、純と呂布は互いに馬上でそれぞれの武器を構えた。

黄鬚と飛將軍

互いにそう呼ばれ敵に恐れられた猛将二人は激突し、互いに馬上から一振りを交えるが互いに防いだ。両者は即座に馬首を返し追撃し、呂布の方天画戟が純と馬共々、首を斬り飛ばそうとするが純は馬の首を逸らさせ胴を右へ回転させ太刀で受け流した。

純は呂布に近づき太刀で脇腹を狙うが呂布は方天画戟を引き戻し防ぐ。攻防入れ替わりながら純と呂布は馬を走らせ乱撃を繰り返す。

その様子を見ていた華琳は

華琳「何合になったのかしら？」

柳琳「一五〇合程です。」

華琳「まだ勝負はつかないようね。」

柳琳「ついておりません。」

華琳「優勢なのは？」

柳琳「互いに互角です。」

華琳「そう……。二人とも、疲れ知らずね。」

栄華「けど、あのお兄様と相対して討たれない武将は初めてですわ。」

華琳「ええ、そうね。」

華琳（純……。死なないで。）

栄華（お兄様……。）

そう話しながら見ていた。そして、二人の打ち合いは続いたが

呂布「……。」

呂布が一步退いた。

純「呂布？」

呂布「馬が疲れてる。馬を換える。」

と呂布は言った。

純「はっはっは！そうか！なら、俺も馬を換えるでしょう。」

そして

純「はっ！」

呂布「はっ！」

互いに陣へ引揚げた。

呂布隊

陳宮「恋殿に赤兎馬を!!」

呂布隊兵士A「御意!」

陳宮「恋殿。流石曹彰は『黄鬚』と謳われし猛将なのです。気をつけて下さいなです!!」

呂布「・・・分かった。」

陳宮（赤兎馬を使うときは恋殿が本気を出す時……。ここまでとは・・・流石『黄鬚』曹彰なのです・・・。）

曹操軍本陣

純「姉上！僭越ながら俺に絶影をお貸し下さい!!」
と華琳に言った。

華琳「分かったわ！栄華、絶影を！」

栄華「分かりましたわ！」

そして

純「季衣！流琉！あれを持って来い!!」

と言った。

季衣「は、はいっ!!」

流琉「分かりました!!」

華琳「あれとは何かしら？」

柳琳「私もさっぱり……。」

栄華「私もですわ……。」

華琳の疑問に、柳琳と栄華は首をかしげた。暫くすると

季衣「純様！持って来ました!!」

流琉「こちらです!!」

季衣と流琉が愛紗の持つる青龍偃月刀にそっくりな偃月刀を持つて来た。

純「うむ。」

それを見た純は、

純「はあああつ!!」

それを思い切り振り回し

純「流石真桜だな。中々良く出来ている……。」

と呟いた。

栄華「お兄様、絶影ですわ。」

純「ありがとう、栄華。」

栄華「お兄様……。」

その時、栄華は心配そうな表情で純を見た。それを見た純は

栄華「あ……っ。」

純「心配するな。」

と栄華の頭を優しく撫でたのだった。そして、絶影に颯爽と乗り

華琳「呂布は流石の強さ。気を付けなさい。」

純「ご心配なく!!見事勝利をご覧に見せましょう!!」

そうやって、

純「はっ！」

純は絶影を駆けさせた。

呂布「はっ！」

呂布の方も赤兎馬に乗って駆けた。

純「はあああっ!!」

呂布「・・・っ!!」

そして、互いにぶつかり合い、呂布の方天画戟と純の偃月刀が、火花と金属音を周囲にまき散らし再び激しい一騎打ちを繰り広げた。

孫策「・・・凄い。」

太史慈「二人だけ、世界が違うよ・・・。」

孫堅「二人もそう思うか。」

孫策「母様っ!？」

太史慈「お加減はっ!？」

孫堅「こんな傷、大した事ねーよ!!まあともかく、これが天下で一二を争う武人同士の激突だ。」

孫堅（恐らく呂布の馬は赤兎馬。噂では、あの馬を使うときは本気を出す証だとか。

それほどの強さとはな．．．曹彰。」

愛紗「これが純様と呂布の本気か．．．」

愛紗（まるで次元が違う．．．!!）

一方春蘭と張遼は激戦の末春蘭が一騎打ちを制し、説得の末張遼は降った。それと同じに張遼と共に戦っていた皇甫嵩も降った。そして、皆で呂布との戦いの様子を見に行くとちょうど純と呂布の激しい一騎打ちが繰り広げられていた。

春蘭「これが純様の本気．．．」

秋蘭「ああ、あんな純様を見たのは初めてだ。」

霞「ホンマかいな!?!けど、ウチも恋の本気初めて見たわ。あの赤兎馬を使う時は、恋が本気になった証拠や。」

春蘭「そうなのか!?!」

霞「ああ。それ使わずとは．．．中々やるな、曹彰は。」

それを聞いた春蘭は

春蘭「ふん!!これが我らが自慢の『黄鬚』と呼ばれし純様なのだ!!」

そう言って、胸を張った。

春蘭「しかし．．．まだ純様の背中すら見えていない。」

秋蘭「姉者．．．」

春蘭「だからこそ、目指し甲斐ある。常に私の遙か前に居てくれる。武人として私は幸せなのかもしれないな。」

秋蘭「姉者……ふつつ、姉者の言う通りだな。」

張遼「惇ちゃんも妙ちゃんも前向きやな。けど……ホンマやな。」

皇甫嵩（曹彰さん……。）

その横で、皇甫嵩は潤んだ瞳で一騎打ちを見ていたのだった。

一方の劉備軍の趙雲と張飛も

趙雲「これが一二を争う猛将同士の激突か……。」

張飛「凄いのだ……。」

この一騎打ちに呆然と見ていた。

そんな中、両者の一騎打ちは続き再び一五〇合程となった。

ガギン！ガギン！

純（コイツ、俺の本気について来やがる!!）

呂布（速い！動きについていくので精一杯……!!）

ガギン！ドン！ギン！

純（このままじゃ、先にバテるぞ!!）

呂布（恋が先に疲れきっちゃう。）

尚も斬り合いが続き、両者ともそう思っていたが、

純・呂（でも、スゲー楽しい!!／スゴく楽しい!!）

そんな気持ち芽生えていた。

純「ははっ！中々やるじゃねーか!!」

呂布「そっちこそ!!」

両者ともそう笑顔で言っただのだ。

純「けど・・・そろそろ終わらせねーとな。」

呂布「っ!?どうして・・・」

純「戦の勝敗が完全に連合に傾いてる。このまま続けても多分、邪魔が入る。」

純「それに、俺もお前も、互いに限界だろ?」

呂布「・・・ん。」

そうお互い、肩で息をしていた。

純「次でけりを付けるぞ!!」

呂布「うん!!」

そう言つて、互いに武器を構えた。そして

純「はあああっ!!」

呂布「ああああっ!!」

互いに馬を駆け、武器を振るった。そして

純「終わりだっ!! 呂布!!」

そう言った純は、呂布の脇腹に斬撃を加え呂布は何とか防いだが完全に防ぎきれずドオン!

呂布「がはっ!」

呂布は赤兎馬から落馬したのだった。

純「ふう……」

その時

「!!」
「!!」
「!!」

戦場を激しい歓声が鳴り響いた。二人は気付かなかつたが、多くの将兵が観戦していたのだ。

呂布「ぐっ。」

呂布は、戟を杖代わりにして立ち上がった。そして、

呂布「負け……。ちゃった。でも……。楽しかった。」

呂布は純にそう言った。

純「そうか……。俺もだ。」

と純もそう返し、それと同時に、呂布は倒れた。すると、

陳宮「恋殿ー！」

陳宮達呂布隊がやって来た。

陳宮「恋殿！しつかりするのです！」

純「安心しろ。まだ生きてる。」

純は、陳宮にそう伝えた。そして、

陳宮「恋殿を担ぐのです！」

と呂布隊に命令した。

陳宮「見逃すのですか？」

純「あいにく、そんな余裕はねーよ。」

陳宮「……今日は恋殿の負けなのです！でも次は必ず恋殿が勝つのです！」

そう言つて、陳宮と呂布隊は戦場を離脱したのだった。そして、それをきっかけに董

卓軍は完全に崩れ、連合軍はその勢いに乗って洛陽に突入したのだった。

4 1 話

禁城

一刀「ここが・・・禁城・・・。」

それは、以前一刀が華琳達と一緒に訪れた時とはあまりにも変わり果てていた。

真桜「もう殆ど制圧も終わつとるなあ。どうすんの、隊長。」

一刀「どうするって、それは勿論・・・。」

一刀（勿論・・・何を、どうするつもりなんだ？今董卓を探したところで、俺は・・・どうしたいんだ？）

沙和「・・・どうしたの？隊長。」

凧「隊長？」

一刀「いや・・・何でもない。」

一刀（そうか。まずは、会って、事情を聞いて・・・。聞いてもないのにその先の事を悩んでも仕方ない。）

一刀（もし本当に、あの時の董卓が別人なら。）

一刀（そして、本当の意味で禁城をこんな姿にした元凶だというなら、その時は……。）

一刀「……うん。」

一刀「まずは、城内に誰か残ってないか探そう。出来るだけ傷付けずに、捕らえて捕虜にしてくれ。……それが向こうの要人なら情報も集められる筈だ。」

凧「はっ！」

真桜「了解。」

沙和「分かったのー！」

一刀「……はあ。」

三人に指示を出し、散らばっていくその姿を見届けた一刀は、全身からどつと力が抜けるのを感じた。

一刀（この先……歴史が俺の知る通りに動くなら、反董卓連合で顔を合わせた面々と何度も戦う事になる。）

一刀（今日まで董卓達と戦ってきたのと、同じように。）

一刀「知らない方が幸せって……こういう事か、華琳。」

そう青い空を見上げて呟いたのだった。そして一刀達は華琳達と合流したのだが、その前に何と天子様を見つけたのだった。

洛陽

一刀「もう復興が始まつてるのか……。」

あの激しい戦いから一夜明けて、華琳は兵を城内に入れて、道路や倒壊した建物を片付けさせ始めていた。

一刀「でも、勝手にこんな事して良いの？許可っているんじゃないの？」

華琳「古い知り合いに言つて、既に貰つてあるわよ。」

一刀「……また桂花？それとも、燈？」

桂花「またとか言わないでよ！」

燈「私達ではないわよ。」

純「姉上、それって……。」

華琳「ええ。あなたが察した通りよ。」

一刀「華琳と純にも都の知り合いなんていたんだな。情報収集で、そういう自分の繋がりには使わないのに。」

華琳「出来る事ならあまり使いたくなかったのだけれどね。非常時なら、そうも言うていられないわ。」

一刀「そっか……。」

その時

袁術「あーっ！いたのじや麗羽姉様！」

袁紹「見つけましたわっ！華琳さん！あら純さん、ご機嫌よう♪」

華琳「……またうるさいのが。」

純「あはは……。」

季衣「あ、いっちー！元氣ー？」

文醜「おー。きよっちーも流琉も元氣そうで何よりだ。」

顔良「こんにちは、曹彰さん、北郷さん。」

純「うむ。」

一刀「こんにちは。」

袁紹「そんなことより何ですの、この工事は！また私達に無断で……！」

華琳「大長秋から許可はいただいてあるわよ。問題があるようなら、確認して貰って

も構わないけれど？」

その発言に、

袁紹「な……っ！大長秋……!？」

袁紹は驚いたが、

袁紹「ま、真直さん。確認なさい。その書類、偽物ではなくて？」

脇に控えている田豊に命令し、書類を持っていく燈から受け取り、確認をさせると、田豊「……いえ。間違いなく本物です。この通り、大長秋の璽印もしっかりと。本物だった。」

袁術「なんでおぬしのような奴が大長秋と繋がりを持つておるのじゃ！」

華琳「私と純の祖父が何代か前の大長秋だったのよ。」

袁術「ずるいのじゃ！それを言うたら、妾達とて三公を輩出した名門袁家の出身じゃぞ！」

華琳「あらそう。なら、今の三公に許可を取つておけば良かったのではなくて？」

袁紹「く……っ！点数稼ぎも良いところすわ！」

華琳「私は必要なことをしているまでよ。文句を言われる筋合いはないわ。」

その横で

一刀「大長秋つて何だ？文醜。」

文醜「大中小つて何だ？斗詩。」

顔良「・・・ええつと、確か・・・」

燈「皇后府を取り仕切る宦官の最高位よ。華琳様と純様のお爺様は、以前その地位にあつたの。」

文・季・一「・・・ふうん。」

顔良「分かつてないふうんだね、三人とも・・・。」

燈「今は天子様も相国以下の官職も軒並み不在だから・・・都の事を取り仕切つているのは、健在なあの辺りの方々になるようね。」

季衣「・・・とりあえず、凄く偉いつて事だけは分かつたよ。」

文醜「だな。それだけ分かりや十分だ。」

顔良「いいんだ・・・。」

といった話をしていた。

袁紹「ええい、猪々子さん、斗詩さん、真直さん！こんな所にいる場合ではありませんわっ！行きますわよっ！」

袁術「木を見て瓶なのじゃ！」

文醜「ひゃ、ちよつと、麗羽様ー！」

顔良「きやーっ！引つ張らないでー！」

田豊「そもそもどこに行くんですか！まずそれを決めないと！」

袁紹「走りながらお決めなさい！」

田豊「いくらなんでも無茶言わないで下さいよーっ！麗羽様ーっ！」

そして、袁紹は振り返って

袁紹「それでは純さん、またどこかで♪華琳さんっ！」

華琳「……ん？」

袁紹「この、タマ無しーっ！」

純には良い笑顔で対応したが、華琳にはコメントしづらい言葉を言い残したのだった。……袁家のお嬢様が何言ってるか。

華琳「……。」

純「……。」

顔良「ちよつと麗羽様、下品ですよー！」

そして、その場を後にした。

純「そりやそうだ……。姉上にあるわけねーだろ。」

華琳「本当よね、全く……。」

一刀「何だったんだ、あいつら。」

一刀（つていうか、女の子が玉とか言うな。）

華琳「さあ?・・・あら?」

純「如何なさいました?」

一刀「華琳?」

華琳に続いて、皆も視線を追った。すると

流琉「あれ・・・?」

季衣「あ、ちびっ子!」

劉備「はいっ!まだありますから、慌てなくて良いですよ!」

張飛「星!ご飯、足りないのだ!もっと持って来て欲しいのだ!」

趙雲「鈴々。お主、自分で食べているのではなからうな!」

劉備「二人とも、手伝って。」

劉備達一行が、民に炊き出しをしていた。

純「あれは劉備達ですな。」

一刀「そうだね。」

華琳「彼女達も早いうちから城に入っていたと聞いたけれど・・・あの趙子竜が炊き出しね。」

華琳「けれど、何をしてもまず民のため・・・か。」

一刀「それは華琳も一緒だろ?公共の道や橋を優先的に直させてるの、知ってるぜ?」

これには

華琳「……。」

華琳は顔を真つ赤にしたのだった。

純「姉上、照れなくても良いのでは？」

季衣「ホントだー！華琳様、顔真つ赤ー！」

華琳「……うるさいわね。」

一刀（からかいすぎたかな？そつぽ向かれちゃった。）

華琳「けれど、劉備か……。その名、心に留めておきましょう。燈、榮華に言つて、劉備にこちらの予備の糧食を届けるよう手配しておきなさい。」

桂花「しかし華琳様。あの劉備という輩、いづれ華琳様の覇業の障害に……。」

華琳「でしようね。けれど、その時は正面から叩き潰せば良いだけよ。違つかしら？」

桂花「……御意。」

そして、ある程度街を回っていると

春蘭「ここにいらつしやいましたか。華琳様。」

秋蘭「純様も。」

春蘭と秋蘭がやって来た。

季衣「あ、春蘭様！」

流琉「秋蘭様も！」

華琳「言われた通り、ちゃんと季衣と流琉を連れてくる文句はないでしょう？」

春蘭「それは構いません。それと、華琳様に会わせたい輩がおります。」

そう言つて春蘭は、

霞「……どもー。」

霞を華琳の前に出した。

華琳「……そう。見事純に言われた役目を果たしたわね。」

純「良くやったな、春蘭。」

春蘭「はっ！」

純「それで秋蘭、後ろにいる者は？」

秋蘭「純様に会いたいと申す者です。前に。」

そう言つて、秋蘭は一人の女の人を前に出した。その者は

楼杏「曹彰さん……！」

皇甫嵩だった。

純「やはり皇甫嵩殿も参戦していたのか……。」

楼杏「はい。けど、私は曹彰さんとは戦いたくなくなかつた……。」

楼杏「もつと穏やかな場所で再会したかつた……！」

純「皇甫嵩殿……。けど、我らに降るといふ事は……」

楼杏「ええ。私は、あなたの軍に加わるわ。」

純「えつと……。俺に、ですか？」

楼杏「ええ、そうよ。」

純の疑問に、皇甫嵩はハッキリと述べた。

純「姉上、宜しいですか？」

華琳「それで構わないわ。純のために働くと言うならね。」

純「分かりました。それでは皇甫嵩殿、俺の真名は純です。今後とも宜しく頼みます。」

華琳「私の真名は華琳よ。」

楼杏「私の真名は楼杏よ。けど純さん、私に敬語や敬称は不要よ。」

純「しかし、俺にとってあなたは尊敬する理想の武人なのです。流石に……」

楼杏「良いの。あなたにとってあなたは主、私は臣下よ。そこは弁えなさい。」

それを聞いた純は

純「……。分かった。なら、これからも頼む、楼杏。」

楼杏「ええ、宜しく。」

華琳「楼杏殿、あなたの事は弟から聞いているわ。人格と実力を兼ね備えた非常に優

れた武人であると。今後とも、弟の事をよく支えるように。」

楼杏「当然です！純さんのため、この身全てを捧げます！」

そう言つて、楼杏は拱手したのだった。

こうして、大陸の諸侯達を巻き込んだ反董卓連合の戦いは終わりを告げたのであつた。

秋蘭の一日

秋蘭「……む、朝か。」

目が覚めると目の前には最愛の人の寝顔が見える。まず私はこのお方の顔をゆっくりと撫でたり、手を取って私の頬に当てる。そして、

秋蘭「……ふむ。」

私は純様の胸の上に寝転び胸に頬を当てたり、純様の右腕を自分の頬に当てたりする。これだけで私の心は満たされる。

そして、満足するまで一通り弄ぶと私は最後に

秋蘭「ん〜♪」

純様の頬に自分の頬を擦りつける。きっと私でも驚くぐらいにだらしない顔をしているに違いない。この姿は、誰でも見せることは出来ない。

そして、満足するまで抱き締めたり擦りつけたりは後には、窓を開け、純様の頬を撫でて

秋蘭「純様、朝ですよ。」

そう声を掛ける。そしたら、

純「ん……おはよう、秋蘭。」

いつものように笑って目を覚ますのだ。私はこの優しい笑顔が大好きで堪らない。

純「さて、朝飯食おう。」

秋蘭「はい。」

そして、朝の準備に向かう。こここのところ戦は無く、穏やかな日々が珍しく続いている。

理由は、反董卓連合で我らは董卓を撃退したので諸侯の動きも暫くは無いだろうし、力を蓄えているところだ。

我等といえれば先の戦が終わって以来、内政などで力を蓄え次に備えている。変わらず忙しい日々だが穏やかなものである。

この日も、私と純様は休暇を取っている。先の戦で純様が呂布相手に壮絶な一騎打ちをしたからだ。あれは本当に怖かった。もし純様が負けて死んでしまったら、そう考えるだけでゾツとする。そうなったら、私はこの世界で生きていけない。おそらく純様の後を追っていただろう。

けど、こうして純様は勝ち生きている。それだけで私は満足だ。

この日も、私と純様は街に出ている。その時、純様は立ち止まり腕を組む私の方を見た。すると、純様は私の左手を取り、青く綺麗な手袋をはめてくれた。

秋蘭「これは？」

純「だ。この間の戦でお前、左手を怪我してただろう？」

覚えてくれていた。凄く嬉しい。私が先の戦で少し無理な速射をしたときに怪我をしたのだ。それを覚えてくれていただけで無く、私の事を気遣ってこのような物まで用意してくれたのだ。

私は人目も気にせずその場で頬に口付けをした。嬉しくて周りの目など一つも気にならなかった。

秋蘭「ありがとうございます、嬉しいです。」

純「そっか……。良かった、喜んでくれて。」

そう言われ、私は純様の腕を組んだ。そして、そのまま私達は城に帰ったのだった。そして、夕食を済ませ、風呂に入り、共にそれぞれに部屋に向かう。

しかし、私は違う。ある程度時間が経ったら、私は純様の部屋に向かう。そして、こっそりと部屋に入り、純様が寝ている寝台に入る。そこからは私の至福の時間だ。栄華は純様の匂いを嗅いでいるのだが私は違う。私は、純様の色んな所を噛んでいる、それも甘噛みだ。いつからかは分からないが、噛む癖がついていた。よく分からないが、噛み跡を見ると、純様と一緒にいる気がしたまらないのだ。

秋蘭「ん〜♪」

その時

秋蘭「あ……。」

純様の腕が私の身体を抱き寄せたのだ。どこうと考えたのだが、純様の腕に抱き締められる感触が何とも心地よく、そのままの状態では眠ったのだった。

栄華の想い

純「さてと……これで先の戦で活躍した兵達に恩賞を与える事が出来るな……。」
純は、愛紗達を書いた兵達の恩賞の資料を持って栄華の執務室に向かっていた。そして、栄華の執務室の前に立った。

純「変だな、今は休憩の時間じゃない筈だが……。」
そう思った純は執務室の扉を開けた。すると

純「栄華？寝てんのか？」

栄華は執務室の机に突っ伏していた。

純「ん？」

しかし何か様子がおかしいと思った純は、よく見ると

栄華「はあ……はあ……。」

顔にはじつとりと汗をかいていて、全体が少し赤みを帯びていた。それに加え、寝息もどこか苦しそうで、喘ぐようにも聞こえた。

純「栄華、おい栄華！」

純はそう言って肩を揺すって声を掛けたが

栄華「あ、う・・・ん、んんっ・・・」

栄華の反応は鈍かった。そして、純は栄華の汗ばむ頬に触れた。

純「スゲー熱じゃねーか！」

と感じた純は誰かを呼び、栄華を部屋まで運んで寝台に寝かせた。

栄華の部屋

栄華「ん、んんっ・・・あら、ここは・・・」

栄華「私の部屋？どうして・・・私は執務室で仕事を・・・」

栄華「くっ、頭が・・・体も・・・」

純「気が付いたみてーだな、まだ寝てろ。」

栄華「ふあっ!?!ど、どうしてお兄様が私の部屋にっ！」

純の声に気付いた栄華が、がばっと体を起こした。

純「お前、執務室の机で突っ伏していてな、明らかに体調が悪かったから、俺がお前の部屋に運んだんだよ。」

栄華「そうですか。お兄様、ありがとうございます。」

純「大した事じゃねーよ。」

栄華「それで、私の病状は……」

純「医者曰く過労だ。日頃の無理が祟ったんだろうよ。」

栄華「過労……そんなの病気でも何でもありませんわ。」

純「まあ風邪とかとは違うかもしれないけど、休息が必要な事に変わりねーよ。」

純「お前の仕事は、桂花や稟がやってくれてるから、今日のところは何も心配せずゆっくり休め。」

栄華「お三方は忙しいでしょうに……私が不甲斐ないばかりに。それに、稟さんはお兄様の軍師。申し訳ないですわ。」

純「自分で自分の事をそんな風に言うな。栄華は十分やってくれている。」

栄華「でもっ……こうして倒れてしまって……」

純「それについては、ちょっと反省しろ。」

純「仕事中に倒れてしまって悔しい気持ちは分かる。俺も、もし兵の調練の最中に倒れてしまったら、申し訳ない気持ちで一杯になってしまう。」

純「けど、あまり一人で背負い込むな。もっと周りを頼れ。」

栄華「……分かりました。今日のところは休みます。」

純「そつか……。そんじゃあ、俺は食堂で飯持つてくるから。」

栄華「……。お願いします。」

そして、純は部屋を後にした。

栄華「……。行きましたわね。」

栄華「はあ……。お兄様は、私のために言ってくれました。やっぱりお兄様は、優しいお方ですね。」

栄華「けど……。私は、お姉様の金庫番なのです……。しかし……。お兄様は誰かを頼れと言ってくれた。」

そして、栄華はぬいぐるみを抱き締めて

栄華「……。何故です。何故……。お兄様は……。私の心をこうも乱すのですか……。」

栄華「好きで好きでたまりませんわ……。はあ、はあ、お兄様……。」

涙を流しながらそう言ったのであった。

それから暫く経ち

純「待たせたな、栄華。」

純がお粥を持つて来た。

栄華「お兄様、ありがとうございます。」

そして、純は傍に座り、お粥をレンゲで掬って

純「ほら・・・栄華。」

栄華「はい、お兄様・・・。」

栄華に食べさせた。そして

栄華「ごちそうさまですわ。」

全部食べきった。

純「全部食ったようだな。そんなじゃあ、ゆっくり寝な。」

そう言つて、純は部屋を出ようとしたが

ギョッ

純「ん？」

栄華は純の服の裾を掴んだ。

純「栄華・・・？」

すると

栄華「好き・・・。」

純「え・・・？」

栄華「お兄様の事が・・・好き・・・なのです・・・。小さい頃から、ずっと・・・。」

と栄華は純に告白した。

栄華「もう抑えたくても抑えられないのです。お兄様には秋蘭さんがいる事が分かっ

ても、抑えられないのです。」

と栄華は目を潤ませながらそう言った。それを聞いた純は

純「そうか……。栄華……。俺も、お前の事、好きだよ。秋蘭と同じくらい……。」

栄華「え……。っ？」

純「そのぬいぐるみをお前にあげてからだと思う、お前の事が気になったのは。その日から、お前の事好きだったよ。」

それを聞いた栄華は頬に涙が伝い、口元を抑えた。

栄華「嬉しいですわ、お兄様……。」

純「けど、俺には秋蘭が……。」

栄華「分かっていますわ。お兄様には、秋蘭さんがいる事を。そして、愛し合っている事も。でも、構いませんわ。お兄様は、自身を好きでいてくれる人皆を幸せにして下さい。」

純「栄華……。」

栄華「けど今は、私だけを愛して下さいまし。」

純「……分かった。」

そう言つて、互いに抱き締め合い、口付けを交わしたのであった。

楼杏の想い

楼杏「純さん、楼杏です。宜しいでしょうか？」

純「うむ。入れ。」

そして、楼杏がカツカツと軍靴を鳴らしながら純の部屋に入った。

楼杏「お呼びと聞いて、参上致しました。」

純「そう畏まるな、俺と楼杏の仲だ。楽にしてくれ。」

楼杏「・・・分かりました。」

楼杏「純さん、私にご用というのは？」

純「うむ。稟と風、そして愛紗とも話し合っただが、楼杏にはこれから俺が率いる隊の指揮の一部を任せたいのと、愛紗達に、今までの戦で培った経験と知識を伝えて欲しいのだが。」

楼杏「えっ・・・？私が兵の・・・つまり、純さんが率いる黄鬚隊の兵の一部の面倒と皆に将としてのイロハを教えろと？」

純「そういう事だ。楼杏の将としての実力は、俺がよく知っている。俺や皆も、何度か戦に出て経験を積んできた。けれど、楼杏ほど将としての経験はしておらず、愛紗達

にとつて、楼杏は生きた手本だ。頼めるかな？」

そう言われ

楼杏「身に余るお言葉。是非とも拜命致します。」

と拱手した。

純「そうか！では、頼むぞ！」

楼杏「はっ！」

その日以来、楼杏は軍のあらゆる面に関して、今まで培った経験と知識を余す事なく伝えた。それは愛紗だけじゃなく、春蘭や秋蘭らにとつても、目から鱗が落ちる事でもあった。

そして、楼杏が直々に指揮を執った練兵でもしつかりとした練兵を見せ、純に隊の一部を任されたのだった。

純の部屋

純「今日の練兵、ご苦労だったな。」

楼杏「純さん、ずっと私の練兵を見ていたわね。どうだったかしら？」

純「うむ。久し振りに見たがやはり、楼杏の練兵は基本に沿っている。実に楼杏らしい堅実な練兵だったな。」

楼杏「何事も基本に沿う事が大切だからね。」

純「そうだな。」

純「それで、練兵してみたの感想はどうだった？」

楼杏「ええ。純さんが鍛えただけあつて、皆優秀な兵ばかりね。呑み込みも非常に早かつたわ。」

純「そうか、それは良かった。」

すると

楼杏「ふふっ……。」

楼杏が突然笑つたのだった。

純「?どうした？」

楼杏「いえ、あなたとこうして二人つきりで話すのは久し振りだなんて……。」

純「そういえば、そうだな。」

楼杏「始めて会つた時から、あなたは武勇と軍才に優れていたわ。その時思つたの、いつかこの子は、大陸を轟かす強い将軍になれるつてね。」

純「そうだったんだ。楼杏に言われるなんて、光栄の極みだよ。」
すると、楼杏は純の手を優しく握り、指を絡めた。

純「楼杏？」

楼杏「そして、あなたはいつも私の心を簡単に乱してしまう悪い御方……。」

そう言い絡めた指を更に強め、純の頬に手を添え

楼杏「んっ……。」

純に口付けをした。

純「えっと……楼杏？」

楼杏「好き……。」

すると、楼杏は純に告白した。その溢れた想いは、留まる事は出来ず、純を抱き締め
た。

楼杏「あなたが好きなの、純さん。好きすぎて、苦しくて夜も眠れない。」

純「楼杏……。」

楼杏「正妻にしろだなんて言わない。序列は最後で良いの。だから……だから、私
と恋仲になって下さいっ!!」

それを聞いた純は

楼杏「あっ……。」

楼杏を強く抱き締めた。

純「こんな武骨者だけど、良いんだね。」

楼杏「ええ。もうあなたしか考えられない。ああ・・・純さん・・・。」

そう言い、楼杏は純の胸板に顔を埋めた。そして、純は楼杏の顎に手を添え

純「楼杏・・・。」

楼杏「純さん・・・。」

楼杏も両手を純の頬に添え

純「んっ・・・。」

楼杏「んっ・・・。」

口付けをしたのだった。そして、その夜二人は一つになったのであった。

稟の想い

稟「純様っ！」

廊下に、稟の声が聞こえた。それはもう、耳がキーンとするレベルの声だった。

稟「曹操殿も今ではないと仰いましたが、では、いつがその時なのですか！」

稟「今こそが充実の時と私は考えます！何故、純様らしくない懦弱なお考えで水を差されますか。」

そう言い、鼻息荒く稟は純にそう進言していた。

純「懦弱かあ……。」

稟「今こそ飛躍の時なのです。……純様はお感じになりませんか？この高まりを。」
そう稟は珍しく両手を大きく振り回し、熱の籠もった弁を続けている。

純「確かに、反董卓連合が終わり、皆が群雄割拠している。それに、先日は青州での黄巾の残党を平定し、その中から精鋭を選んだ。それによって兵の数も増え、精強な軍隊になったな。」

先日、青州での黄巾残党が反乱を起こし、兗州まで侵入したのだが、純の活躍で反乱を平定し、降伏した中から兵を選んだのだ。そして彼らは、『青州兵』と名付けられた。

稟「そうです！その機を最大限に生かす事を、何故お考えにならないのですか！」

稟「今こそ、この大陸に曹操殿が覇を唱える準備は整ったと言えましょう。将兵達も、曹操殿の大願成就のため、純様をご活躍されるための戦を待ち望んでおります！」

純「確かに。・・・その熱は心地の良い、歓迎すべきものだな。」

稟「では・・・その前に後顧の憂いを断ちましょうという策に、何故採用しないのです！」

純「後顧の憂いか・・・。」

稟「純様も、辺りの山地に巢食う盗賊が跋扈しているとの報告は届いてるはず。何故、それを見て見ぬふりをなさいます。」

稟「純様は、この曹軍全軍の将兵を束ねておられるお方です。曹操殿が何を言おうと、純様のお声で出陣する事が出来ます！」

すると

純「ネズミを殺すのに、虎をけしかけると言うのか？それとも、大願成就の大戦の前に贄の一つを捧げると言うのか？」

と純はそう返した。

稟「に、贄などと・・・。」

純「血を目にすれば人は狂う。俺は大切な将兵に、無意味に血の味を覚えさせる趣味

はこれっぽっちもねーぞ？」

その時、純の目にさつと冷たい輝きが映り込んだ。

稟「しかし民達は盗賊に脅され、喘いでいるのです！それを全軍の将帥として見逃すと仰るのか！」

純「それに、そいつらの生まれは、元々その辺りに住んでいた若い連中と姉上は言っていた。そいつらが力を持て余し、結果暴徒になっているんだ。放つておいても構わねーだろう。」

稟「なんとという愚挙……なんとという愚行！蟻の一穴より堤も崩れる事があるというのに……」

稟「それにこの一事を見逃しては、純様の姉である曹操殿の風評にも障りましょう！」

純「稟……頭に血が上りすぎじゃねーのか？」

稟「そ、そんな事は……！」

純「お前の冷静さとその鬼謀も、向こうに回す相手が小者過ぎると勝手が違うのか？……それとも、そうして頭に血を上らせる理由でもあんのか？」

稟「う……。」

それを聞いた稟は、その自覚があつたのかバツが悪そうな顔をした。

純「姉上もそうかもしんねーが、俺の目には、お前の心配する暴徒など、稚気に満ち

たものには見えねーよ。」

稟「し、しかし……っ！」

純「でもまあ、稟がどうしても言うのなら、制圧部隊を派遣するか。」

稟「……御意！」

純「では稟、兵はどのくらい必要だと考えている？」

稟「そうですね……三千で制圧しましょう。」

純「いや……もつと少なくて出来るぞ。」

稟「では……純様は一体何人で制圧できると？」

それに

純「三人だ。」

と答えた。

稟「え、三人？……まさか！」

純「流石稟、察しが良いな。張三姉妹に一働きさせれば十分だ。ついでに開墾出来るような土地も調査させておきたいのだが、三姉妹だけじゃ足りねーし、人選はお前に任せるとする。しかし、千も二千も動かすなよ。」

稟「む……。」

純「では稟、任せたぞ。」

すると

稟「・・・純様は、暴れるだけの下衆共に職を与え、顎の下を撫でてやろうと仰るのですか！」

稟はそう純に対して強く言った。

純「・・・稟。俺は国を治める立場じゃねーが、そんな俺でも分かる。跳ねつ返りの若者などは必ず居るぞ。そんな若気を窘めるのに、大切な兵を動かす必要はねーよ。」

純「姉上によると、その場合は二つのシヨク、そして少々の娯楽。その三つを与えてやれば、稚氣にまみれた動乱なんか、すぐに鎮圧出来ると言っていたいな。」

稟「むうう・・・。」

純「それに、暴れているとはいえ既に姉上の国の民だ。・・・その若者を無慈悲に討ち滅ぼして、その家族は俺達に頭を垂れてくれるか？」

稟「それは・・・。」

純「そういう事だ。稟、任せたぞ。」

稟「・・・御意。」

純「まあでも、お前のそういう姿見れて楽しかったな・・・。」

稟「そ、それは・・・。」

純「しかし、最近のお前は何だ？秋蘭によると、俺に嫉妬してるらしいな。」

稟「べ、別に嫉妬なんて……！」
すると

純「ふっ。その、隙あらば俺をも刺し貫いてしまおうとする目の奥に……揺れているのは何だ？」

と純は稟に近付いて、耳元でそう言った。

稟「つ……つ、あ。」

それに、稟は純の胸元に両手を置き抵抗しているのだが弱々しい抵抗だった。

純「何を恐れているんだ？ 稟。俺の信頼を完全に得る事が出来るかどうか？ それとも、俺がお前の才を捧げるに足りる器かどうか……か？」

純「けど俺は、お前の事を全面に信頼してるんだぞ。それを疑ってるのか？」

稟「あ、あるいは、暗愚の主として……私はあなたに失望するかもしれません。」

純「ほう……？」

純「そんじやあ、稟……。どうすれば、お前は俺に失望するんだ……お前の策も解さぬ愚か者と感じたらか？」

稟「如何にも。」

純「お前の献策をはね除ければ、即ち俺は無能か。」

稟「あるいは……」

純「なら、今の俺は無能で失望する相手という事か．．．ふつ、はっはっはっは。そして

純「主を侮辱する軍師か．．．ふつ、面白ーな。」

そう言つて、純は稟の腰に手を回した。

純「けど、困つたな、稟．．．。お前がどんなに可愛くても、お前ばかりを構つては、俺の直属の臣下を寂しがらせてしまうな。」

稟「な．．．つ、わ、私がいっ寵愛の話など！」

純「本当は俺を独占してーのか？んちゆ．．．」

そう言い、純は稟の耳に口付けした。

稟「んっ．．．あふっ．．．」

それに稟も益々抵抗が弱まり、腕を純の背中に回そうとする寸前だった。

純「俺の視線を．．．信頼を、一身に集めてーのか？」

稟「あなたではなく、あなたの将帥として、主としての資質を．．．私は欲します！そんなものは．．．んっ、求めては．．．いないっ！」

しかし、稟は残つた理性をフル動員してそう言い返した。

稟「あなたは私の野心です。私の知謀であなたをがんじがらめに、まるで傀儡の人形であるかの如く扱うのが．．．我が目的！」

と更にそう言った。

純「ふっ……あはははは。」

純「お前の思い通りになる主など、この大陸のどこにでも転がっているだろう？なら、どうして俺に仕えた？」

稟「……そ、それは……」

純「俺はそう簡単に、お前の思い通りにはならねーぞ？寧ろ、人形遣いの筈のお前を、繋がった糸でがんじがらめに縛り付けちまうかもな。」

純「それに、もう俺に縛り付けられちまってるかもな。」

稟「そ、そんな事……」

純「そんじゃあ、俺の背中に回してる両腕は何だ？」

稟「！」

その時、稟は自分の両腕が純の背中に回してる事に気付いた。それを解こうと考えたが、逆に強く抱き締めてしまっていた。

純「稟……」

稟「あ……」

そして、二人は顔を近づけ

純「んっ……」

稟「んっ……。」

互いに口付けをした。そして互いに口を離して

稟「純様……。」

純「ん……？」

稟「愛してます……。」

純「ふっ……俺も……。」

そう言い、また口付けを交わし、互いにきつく抱き締め合ったのであった。

愛紗の想い

愛紗「・・・はあ。」

城の上で、愛紗は一人溜息をついていた。

愛紗「たまの余暇に、何をしているのだろうな？私は。」

彼女は、ある悩みを抱えていた。それは、自身の主でもある、純の事である。最初は、憧れの人の下に仕える時、歓喜の声を心の中で上げた。その時は、自身の武をこの人に全てを捧げようとし、日々の鍛錬に勤しみ、今や黄鬚隊の指揮の一部を任せられるほどになった。

そして、彼を間近で見て、その思いは敬意だけでなく、次第に愛も加わっていき、彼を目で追うようになっていった。しかし、

愛紗（純様には、既に秋蘭と栄華がいる。それに稟も楼杏殿も。そのどれもが私とは違って、綺麗で凛々しい方ばかりだ。私が入り込む隙などありはしない・・・。）

と思ひ、諦めようと思つていた。けど、

愛紗（でも、駄目なのだ。どうしても、純様を目で追つてしまう。諦めなきやならぬいのに。胸が苦しい。私はどうすれば・・・。）

と思い、

愛紗「はあ……。」

また溜息をついた。するとそこへ、

秋蘭「愛紗。こんな所で何をやっている。」

愛紗「つ、秋蘭……。」

秋蘭が現れた。

秋蘭「このような場所で、何をしている。」

愛紗「別に何もしていない。そういう秋蘭は何をしている。」

秋蘭「私は今日は非番だから、息抜きするために散策をしていたら、お主がそこで黄昏れていたのを見つけ声を掛けただけだ。」

愛紗「全く……。」

秋蘭「ふふ。……それで愛紗、何を悩んでいる。」

と、秋蘭は愛紗に言った。

愛紗「……別に悩んではない。」

と言われたのだが、

秋蘭「純様が気にしておったぞ。」

と切り出すと、

愛紗「な・・・!?!」

分かりやすく、顔を真っ赤にして驚いた。

秋蘭「ほう、やはり純様の事か。」

愛紗「何故、純様が・・・貴様!?!私の何を知っているっ。」

秋蘭「朝から晩まで溜息ばかりでは、純様でなくても気にするとうものよ。」

愛紗「・・・純様は何と?」

しかし、秋蘭は飄々とした態度をし、話さなかつた。それを見た愛紗は

秋蘭「なんと余裕のない。無手の者をそのような武器で脅すとは、関雲長の名が泣くぞ。」

青龍偃月刀を秋蘭に向けた。

愛紗「お前が、からかうようなことばかり言うからだっ!!」

秋蘭「純様と栄華が情を交わしているため、苦しいのか。」
すると、

愛紗「な・・・!?!」

また愛紗の顔が真っ赤になった。

愛紗「何故秋蘭がそれを知っている。」

秋蘭「そんなの、あのように仲睦まじい姿を見れば、誰だって分かるさ。稟も、純様

の事を好いており、情を交わしておるしな。無論私もだ。後、楼杏もな。」

愛紗「……。」

秋蘭「おや、泣くのか?」

愛紗「誰が泣くか!!」

秋蘭「泣くくらいに可愛げがあれば良いものを……。そうやって強がる。」

愛紗「……っ!?お、お前っ。」

秋蘭「純様は本当に気にしていた。あの方とは長い付き合いだが、相変わらず部下思いのお方だ。」

愛紗「……お前も知っているだろう、純様はそういうお方だ。私達臣下だけでなく、

一兵卒のことも大事にしておられる。」

秋蘭「そういう一面を見て、お主の女をこじ開けたか。」

すると、愛紗はまた青龍偃月刀を秋蘭に向けた。

秋蘭「照れ隠しにも可愛げがない……。私でなければ、仰け反つてるところだ。」
愛紗「……。」

秋蘭「……まあ良い。そんなに深く考えなくても良いと思うぞ。純様なら、お主の
思いを受け取ってくれる。」

愛紗「……そうだろうか。」

秋蘭「そうとも。少なくとも、純様は、人の想いを無下にするような方ではないぞ。」
愛紗「・・・そうか。ここで私が躊躇ったら、意味がない。純様の想いを裏切るのと同じ。今から純様の元へ向かう。済まん、秋蘭。」

秋蘭「何、共に戦う仲間のそんな姿を見てはおれんと思ったからな。」
愛紗「ふつ、感謝する。」

そう言つて、愛紗はその場を後にした。そして、愛紗は純の部屋の前に立ち、
愛紗「純様、愛紗です。入っても宜しいでしょうか？」

と言つた。すると、

純「愛紗か。入れ。」

という声が聞こえたので、

愛紗「失礼します！」

と言ひ、部屋に入った。

純「それで、俺に何のようだ？」

愛紗「えつと、そのですね・・・。」

その姿は、いつもの愛紗にしては珍しくしおらしかった。

愛紗「純様は、栄華と秋蘭に稟、そして楼杏殿をどう思っていますか？」

純「好きだよ。俺にとって、かけがえのない存在だ。」

愛紗「……。」

純「けど、最近もう一人決してなくしちやいけない人を見つけたんだ。」

愛紗「……それは一体……。」

純「お前だ、愛紗。」

愛紗「っ!!。」

純「俺、お前のことも好きなんだ。一臣下としてだけでなく、一人の女として。」

すると、愛紗の目から大粒の涙が零れ落ちた。

愛紗「純様、それは本当ですか……。本当に……。」

純「ああ。嘘でもない。お前のことも好きだ。」

愛紗「純様っ!!」

愛紗は、純の胸に飛び込み、胸に顔を埋めた。

愛紗「ずっと、我慢してたんです。」

純「?。」

愛紗「純様には、秋蘭と栄華に稟、そして楼杏殿がいる。私はあの四人とは違って、綺麗で凛々しくもなく無骨者です。だから、諦めようと思っていました。けど、そう思えば思うほど、純様への気持ちがどんどん強くなってしまい、どうすれば良いのか分からなくなってしまうました。」

すると、

純「お前は無骨者なんかじゃねーよ。」

と言った。

愛紗「えっ？」

純「愛紗は無骨者なんかじゃねー。愛紗は、俺には勿体ないくらいの魅力を持った女子だ。だから、そう自分を卑下すんなよ。俺が辛い。」

そう言い、純は愛紗の背中に腕を回して、強く抱き締めた。

愛紗「本当に、私みたいな女でも・・・？」

純「二度も言わせるな。俺は見た目で判断しねーし、愛紗が俺を好きだって言ってくれた事が本当に嬉しかった。」

愛紗「はい・・・。」

純の言葉が恥ずかしかったのか、愛紗は顔を真っ赤にしたのだが、それが嬉しそうにはにかむように笑った。そして、

純「愛紗・・・。ん・・・っ。」

愛紗「純様・・・。ん・・・っ。」

二人は静かに唇を合わせ、寝台に倒れ込んだのだった。

霞の目覚め

霞「はあ……。」

とある日、霞は上物の酒が手に入ったので月見酒と洒落込もうとしたのだが、何か物足りなさを感じていた。

霞「おつかしいなあ。こんなに良い酒と綺麗な月があるっちゅうのに何か足りひん気がするんよな。」

そう言い、酒を一口飲むが、やはり何か足りなかった。

霞「うーん。こういうときは妙ちゃんに聞くに限るな。」

そう言つて、霞はその場を後にして秋蘭の部屋に向かったのだった。

秋蘭の部屋

秋蘭「ふむ。何か足りない気がする。」

霞「そうなんよ。何が足りひんのかな？」

そう言つて、霞は秋蘭に尋ねた。

秋蘭「そうだな……。最近あつた一番楽しかつたことは何だ？」

霞「へ？一番楽しかつたことか……。せやな……。たまたまなんやけど、純と一緒に街に行つたことかな？」

と霞は言つた。すると、それを聞いた秋蘭はクスクスと笑いながら、

秋蘭「なんだ、もう答えは出たではないか。」

と言つたのであつた。

霞「？どういふこつちや？」

秋蘭「とりあえず、純様を誘うといいぞ。」

霞「そうなん？まあとりあえず誘つてみるわ。」

そう言い、霞は秋蘭の部屋を後にした。

秋蘭「随分と軽い足取りではないか。それにしても、榮華に楼杏、そして稟か……。恋敵が多くて困つたものだ……。」

そう言つた秋蘭だが、その顔には微笑を浮かべていたのだつた。

その後霞は、純の部屋を訪ねたのだが留守で、あちこち探し、そして先程飲んでいた場所に行くつと、

霞「なんや純、ここにおったんか。」

純「ん？ああ霞か。俺を探してたのか？」

純を見つけたのであった。

霞「せやで、一緒に酒でもどうかかなと思つたんよ。」

純「そうか。それじゃあ馳走になろう。」

そう言つて、純は少しずれて霞の座るスペースを作る。霞はそこに腰を下ろし杯に酒を注ぐと純に手渡し、自分の杯にも注いだ。

霞「結構良い酒やで。」

純「霞がそう言うならそうなんだろうな。」

そう言い、純と霞は静かに酒を飲み始めた。二人の間には特に会話はなく、ただ静かに月を見上げていた。その時、

霞「なあ純、隣にそいつが居るだけですつごい満足感が味わえるような奴つてどんな存在なんか？」

と純に質問した。それに純は、

純「うーん、そうだな……。同性なら親友、異性なら恋人、もしくは好きな人じゃねーかな。」

そう答えた。すると、

霞「!!そっかる、好きな人か。」

霞はそう呟いたが、その頬は朱色に染まっていた。

純「俺はそう思ったただけだ。しかし、今日の月は良いな・・・。」

と言い、酒を飲んだ。

霞「へへ、せやなく♪」

霞もそう言い、酒をクイツと飲み干した。その時の霞の表情は、非常に幸せな表情をしていた。そして、二人はその後酒を飲み月を見上げていた

42話

反董卓連合が解散してしばらくの時が過ぎたが、諸侯の小競り合いが続き、乱世は収まることはなかった。ただ、それで華琳達の日常が劇的に変わったかという点、特にそういうわけでもなかった。ただそれは、この先に起こる嵐の前の静けさでしかなかった。

そんな中、純の元に新たな情報が入った。

純の部屋

純「そうか・・・孫堅が亡くなったか・・・。」

稟「はい。襄陽を包囲し、終始優勢だったのですが、劉表の部下である黄祖に射殺され、あえない最期を遂げたと・・・。」

純「・・・そうか。お前の言う通りになったな。」

稟「はい。」

純「それで、その後孫家は怎么样了んだ？」

稟「孫策達は、袁術の下に入ったとの情報です。」

純「そうか。しかし、孫策の事だ。必ず父祖の地を取り戻すぞ。」

稟「はい。」

純「ご苦労だったな、稟。」

稟「ありがたきお言葉。」

純「そんじや、玉座に向かおうか。」

稟「はっ。」

そして、玉座の間に向かったのだった。その間、真桜が作った巨大な櫓の上で華命が服を脱ごうとして柳琳や一刀が必死に止めたのは内緒である。

玉座の間

華琳「……呂布が見つかつた？」

燈「はい。あの戦いの後、南方の小さな城に落ち延び、そこに拠点を構えることにしたようです。」

卓上の地図に置かれた碁石が示すのは、ここから遙か南西にある小さな城であり、周りに大きな勢力もない、殆ど空白地帯みたいな場所だった。

華琳「なるほど……。純、呂布が逃亡し同行していたわね。」

純「はい。華雄と副官の陳宮も、呂布と共に行動をしているという情報が届いてます。」

桂花「……。どうしますか？少数とはいえ、呂布が本気になればこちらはかなりの損害を被る可能性もありますか？……。」

その瞬間、誰かが息を飲んだ。確かに「反董卓連合の戦の時は、純が激しい一騎打ちの末、倒したとはいえ、油断が出来ない相手だ。」

華琳「……。今は放っておきましょう。」

純「……。」

春蘭「何ですと！」

桂花「華琳様。それはいくらなんでも危険すぎます。」

華琳「……。霞。呂布は、王の器に足る人物かしら？」

霞「……。正直、よう分からん。」

霞が華琳に対しての質問にそう答えると、

春蘭「どういう意味だ？まさか、かつての味方だからといって……」

春蘭がそう言った。

霞「んなわけあるかい。……恋が何を考えとるか、分からんっちゆうこつちや。純、正面からやりおうたアンタなら分かるやろ？」

純「……そうだな。」

霞「やろ。」

春蘭「だから、どういう意味なのだ？」

一刀「周りが変な知恵を付けない限り、こつちが手を出さなければ、襲いかかつては来ない、つて事か？」

霞「そんな感じかなあ。軍師の陳宮はそこそこ切れ者やけど、まだまだおこちやまやしな。おまけに華雄は……」

そう言つて、霞は春蘭を見た。

春蘭「ど、どうしてこちらを見るのだ……！」

霞「……別に。」

華琳「あの辺りは治安も悪いし、南蛮の動きにも気を配る必要があるわ。何かするにしても、しばらくは動けないでしょう。」

華琳「それとも、あの辺りの州牧とでも結びつく可能性がある？」

燈「益州州牧の劉璋は、さして軍事には明るくないわ。こちらとの州境にはたびたび偵察を入れているようだけれど……」

一刀（積極的に仕掛けてくるって事は無さそうか。）

華琳「ならば西はそのようになさい。……ただ、監視だけは十分しておくように。」

桂花「華琳様がそう仰るなら……」

華琳「それに今はもつと警戒すべき相手がいるわ。純、情報は集まっている？」

純「はつ。先日の麗羽と公孫賛の争いですが……予想通り、麗羽が勝ちました。公孫賛は徐州の劉備の所に落ち延びたようです。」

一刀「あれ、徐州って他の人の領地じゃなかった？ 連合では騒がしい双子を代理で寄越してた……」

燈「陶謙殿の事ね。」

一刀「そうそう。華琳みたいに、劉備も今回の活躍の褒美で領土を貰ったわけじゃないんだ？」

華琳の場合は今回の働きにより、豫州の西……荊州の北部辺りを朝廷から褒美として貰っていた。それは袁紹、袁術や公孫賛も同じだった。

桂花「あの後、平原の劉備を自身の後継者として迎え入れたのよ。」

一刀「そうなのか……。何か、思う所があつたのかな。」

華琳「陶謙殿は、既に徐州での発言力も落ちていたと聞くわ。劉備の品定めをしていたのは、私達だけではなかったという事でしょうね。」

華琳「……。劉備の何をもって自身の後継としたのか、興味はあるわね。」

燈「調べておきましょう。あちらにも、知己がいらないわけではありませんので。」

桂花「……。」

華琳「任せるわ。」

華琳「……。それにしても、劉備か。董卓を下らせた事といい、可愛い顔をしている癖に一筋縄ではいきそうにないわね。」

その言葉に

一刀「え……。董卓って!？」

栄華「!？」

一刀と栄華は驚いてしまった。

華琳「あら。あなた達は知っているのではなかったの？劉備の元に董卓達がいると。」

一刀「知るわけないだろ……。」

華琳「さつき呂布の所で董卓の事を気にしなかったから、知っているとばかり思っていたのだけれど。あれの事を、随分と気に掛けていたでしょう?」

栄華「そ、それは……」

一刀（そこで見抜くか……。ほんと、こういう所はとんでもなく鋭いよな……。華琳。）

霞「……スマン。見とられへんかったから、ウチが知つとる事だけこつそり教えたわ。」

華琳「そう。……今まで黙っていた事は、かつての主への忠義という事で、不問にしましょう。既にその情報も目新しいものではないしね。」

霞「……おおきに。」

一刀「……ごめん、霞。」

霞「ええけど、もうちよつと自分ら上手に嘘つけるようになりいよ？損するで。」

栄華「そうしますわ……。」

華侖「でも華琳姉え。なんで劉備の所に董卓がいるって分かったんすか？」

華琳「まだ予想よ。ただ、袁紹や袁術が董卓を手に入れたなら、喜々として朝廷に乗り込み、第二の何進になっているでしょうしね。」

栄華「それは間違いありませんわね。」

華琳「いずれにしても、呂布よりはずつと興味深い相手という事よ。それに……。既に将の顔ぶれだけなら、私を凌ぐかもしれないものね、あの子は。」

春蘭「まさか！そのような筈はありません！」

華琳「ふふつ、冗談よ。……引き続き、劉備の調査は任せるわ。良いわね、燈。」
燈「かしこまりました。」

桂花「……。」

華琳「話が逸れてしまったわね。純、話の続きを。」

純「はつ。麗羽は青州や并州にも勢力を伸ばし、河北四州をほぼ手中に納まりました。後は南に下るだけです。」

一刀「……東は海だから分かるけど、北と西は？」

純「北は北狄の地だ。最早俺達の住む地ではねーよ。そして西にあるのは、司隸……天子様のお膝元だ。」

燈「今の大長秋や官僚が、新たな帝を擁立したというしね。最早名ばかりの帝とはいえ、それでも司隸に兵を入れれば逆賊の汚名は免れないわ。」

一刀「それで、次に狙われるのは劉備……か。」

華琳「さあ……。どうでしょうね。」

一刀「どういふ事？」

華琳「純、麗羽が次に狙う相手は誰だと思うかしら？」

純「姉上もアレの性格を分かっただけでいいでしょう。麗羽が次に狙うのは、ここで

しよう。あいつは派手好きです、大きな宝箱と小さな宝箱を出されてどちらか選ぶように言われたら、迷わず大きな宝箱を選ぶ奴ですよ。」

華琳「ふふ、そうね。あなたの言う通りだわ。」

流琉「領地の大きな我々が狙われるという事ですか？」

燈「そのうえ、喜雨のおかげで土地の開拓も盛んに行われているもの。徐州よりは、よほど豊かなはずよ。」

華琳「そういうこと。州境の各城には、万全の警戒で当たるよう通達しておきなさい。・・・それから、河南の袁術の動きはどうなっています？」

桂花「特に大きな動きはありません。州境を偵察する兵は散見されますが・・・その程度です。」

華琳「あれも袁紹に負けず劣らずな俗物だけれど、動きがないというのも気味が悪いわね。警戒を怠らないようにしなさい。」

桂花「はっ。そちらにも既に指示は出しています。」

純「後で稟と風にも手伝わせるよ。稟、風、頼めるかな？」

稟「はい。お任せ下さい。」

風「はい。」

桂花「はっ。ありがとうございます。」

華琳「他の皆は、いつ異変が起きても良いように準備を怠らないこと。そして何か起きた時は純に指示を仰ぐように。良いわね。」

そう言つて、解散となつた。その際、

純「姉上。」

華琳「何? どうしたのかしら?」

純「先程の話ですが、姉上でしたらどちらの宝箱を選びますか?」

といったのを聞いた。すると、

華琳「あら、あなたも私の性格を分かつてて言つてるわね。決まつてるじゃない、両方開けさせて、中の良いところを全てよ。」

華琳はそう答えた。

純「やはりそうですか。姉上らしいですね。」

華琳「ふふ。」

純「はは。」

そして、互いに笑つたのであつた。

43話

冀州・易

袁紹「おーっほっほっほ！これで河北の四州はこの私のものですわね！白連さんの泣きっ面が目には浮かぶようですわ、おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

文醜「おめでどうございますっ！麗羽様ーっ！」

田豊「おめでどうございます、麗羽様！」

顔良「これで覇業の第一歩を踏み出せましたね！」

袁紹「当然ですわ！あの董卓がいなくなった今、この大陸を統一するのはこの私！大將！軍！袁本初ですわっ！」

しかし、

文醜「・・・大將軍？」

文醜は理解できなかつたので、

顔良「ほら。この間の董卓討伐の戦功で、朝廷から新しい官位をもらったでしょ。」

顔良が説明した。

文醜「ああ、前に何進がやってた……」

袁紹「何かおっしゃいますか？」

文醜「……いえ、何でも。」

袁紹「ま、元々袁家は三公を輩出した高貴な家柄ですから、たかが大！将！軍！に格上げされたところで、大した事はありませんけれど。おーっほっほっほ！」

文醜「そうですね。まだ上には相国とかいう……」

袁紹「猪々子さーん。なーにーかー、おっしゃいます!!」

文醜「べ、別に。」

田豊「もう……。せつかく麗羽様のご機嫌が良いのに、なに余計なこと言ってるのよ。」

顔良「それで、次に攻めるのは劉備さんのいる徐州ですか？公孫賛さんもそちらに逃げたみたいですけど。」

田豊「当然ね。まず確実に歩を進めて、最終的に曹操を……」

しかし、

文醜「……は？」

袁紹「……え？」

顔良「え？」

袁紹「何を言っていますの、この娘達は。」
と言われたのだった。

田豊「で、ですが、ここは戦略的にも・・・」

文醜「おいおいおい・・・先約とか前略とかなにノリ悪いこと言ってるんだよ、お前らあ。」

袁紹「次に泣かせてさしあげるのは、華琳さんに決まっているでしょう！」

顔良「えええええつ!? そんな、無茶ですよー！」

田豊「・・・はあ。」

袁紹軍は相変わらず平常運転だった・・・。

陳留・玉座の間

一刀「華琳！袁紹、もう動いたって!?!」

純「麗羽・・・。」

華琳「馬鹿は決断が早すぎるのが厄介ね。」

純「敵の情報は。」

柳琳「旗印は袁、文、顔。敵の主力は全て揃っているようです。その数、州境におよそ三万……」

一刀「え、ちよつと待てよ！そんな大軍が……!？」

純「少し黙つてろ、一刀。……その様子だと、報告にはまだ続きがあるんだろ？」

秋蘭「また、敵の動きは極めて遅く、奇襲などは考えていない様子。むしろ、こちらを挑発しているような印象さえ受けたと、楼杏殿は言っております。」

純「……威力偵察か。」

華琳「ええ。そうかもしれないわね。」

一刀「威力……?」

燈「こつそり情報を探るのではなく、こちらの軍と一度ぶつかつて、それでこちらの実力を計る偵察です。」

春蘭「兵の練度を探るなら、刃を交わすのが一番早いからな。それで大体の力は分かる。」

桂花「自分達の実力を誇示したいのよ。見栄っ張りの袁本初らしいやり口だわ。」

春蘭「で、報告にあつた城は楼杏殿が入っているが、兵はどのくらいいるのだ？三千か？五千か？」

その問いに

柳琳「それが・・・およそ七百。」

そう柳琳が答えると

春蘭「ななひやくう!?!」

と驚きの声を上げた。

秋蘭「城といつても、州境の監視所と変わらんからな。周囲にはもつと兵のいる街もあるが、一番手薄な所を突かれた。」

春蘭「そんなもの、手も足も出んではないか! 攻略が始まれば、籠城したところで半日も保たんぞ! そうなれば、楼杏殿が・・・!」

純「桂花、今すぐ動かせる兵士はどのくらいいる?」

桂花「はい。半日あれば、城の兵から五千。明日には遠征に出ている季衣と流琉が戻りますから、もう一万。北部の駐留軍をかき集めてさらに一万・・・計二万五千ほどかと。」

純「少ねーな・・・。」

華琳「なら、私の親衛隊を加えればどうなる?」

桂花「華琳様!」

華琳「非常時に兵だけ遊ばせておいても仕方ないでしょう。どうなの?」

桂花「なら、もう三千は・・・。」

一刀「それでも三万に足りないくらいか。」

純「しかし、それでこちらの全戦力を集結させてしまいますと、相手の威力偵察にむざむざ乗る形になります。今後の作戦展開に、大きな支障をもたらしてしまうかと。」

稟「はい。純様の仰る通りです。」

桂花「はい。私も純様の意見に同意します。」

華琳「ふむ……。」

純「桂花、何か策はあるか？」

桂花「はい。ここは件の城の放棄を提案致します。」

桂花「袁紹のことですから、小城とはいえ城を落とせば調子に乗ってもつと大きな城を狙いに来るでしょう。もちろん楼杏殿には城を脱出してもらい、楼杏殿を含めて戦力を整え、万全な状態で挑むべきかと。」

桂花「数日あれば、さらに三万ほどは集められるはずです。」

真桜「調子に乗って……そんなもんなん？向こうかて、軍師くらいおるんちゃうん？」

桂花「確かに向こうには田豊もいるけどね。……袁紹がどんな奴か、あなた達も反董卓連合で見たでしょう？調子に乗ったあれが聞くとと思う？」

真桜「……せやな。」

桂花「袁紹さえ退ければ、最初の城を取り戻す事は容易です。私の提案する戦の場所は……」

沙和「え？この城って……！」

稟「なるほど……」。

風「……」。

桂花が目の前の地図で指した場所に、一部は思わず息を呑んだ。

柳琳「前に、季衣さんや風さん達と守った街ですわね。」

燈「ええ。今この街は、北部の軍の駐留拠点となっているの。ここに兵が五千、周囲の城にもある程度の兵が置いてあるから、守備の兵を残して集めても一万の戦力になるわ。」

風「黄巾の騒ぎから、やっと復興したばかりの街でしょう。それをまた戦火にさらすというのですか……？」

桂花「その為の兵士と防壁よ。今使わなくてどうするの。」

稟「はい。私も桂花と同じ意見です。」

風「純様。私情を挟むように申し訳ないのですが、この策には反対です。」

沙和「沙和もなの！」

真桜「ウチも、さすがになあ……」。

桂花「あんた達、そんな感情論で戦ってちや、勝てる戦も勝てなくなるでしょ！戦火にさらされるのが嫌なのは、どこの村や街だって当たり前なんだから。」

真桜「そうは言うけれど、復興したばかりやで!?!まだそれも十分やあらへんのに。」
すると

柳琳「・・・あの。」

柳琳が話しかけてきた。

純「どうした、柳琳？」

柳琳「いえ、お話中のところ、本当に申し訳ないのですが・・・桜杏さんからの報告には、まだ続きがあります。」

純「何だ。」

柳琳「兵の増援は不要だと。」

桂花「そのまま撤退するの？」

柳琳「いえ。守り切るそうで。」

桂花「はああ!？」

真桜「それこそ、なんぼなんでも無茶過ぎひんか？ウチらが秋蘭様と防衛戦したときかて、そないな戦力差はなかったで。」

一刀「そうだよ。だって、三万対七百だろ？しかも城だってそんなに丈夫じゃないっ

て・・・」

一刀（堅固な城なら、攻め手の三分の一の兵力で守り切れるっていうけど・・・四分の一のただぞ?!）

稟「楼杏殿は何を・・・!?!」

純「・・・分かった。ならば増援は送らない。」

桂花「純様!」

稟「純様!」

風「・・・。」

一刀「ちよつとおい、純!」

純「あの人のことだ、何か考えがあつての事だ。秋蘭。」

秋蘭「はっ。」

純「麗羽達を退けた後、こちらに来るよう楼杏に伝えておけ。皆の前で理由をちゃん」と説明してもらうぞ。」

秋蘭「・・・御意。」

桂花「・・・。」

稟「・・・。」

純「二人共、聞いているか?」

桂花「え．．．あ、はい。かしこまりました。」

稟「．．．かしこまりました。」

純「お前達も勝手に兵は動かすな。コレは命令だ。．．．守れなかつた者は厳罰に処す、良いな。」

華琳「皆、分かつたわね。解散！」

苑州・濟陰

楼杏「三万の大軍団。いなしななければ間違はなく、私達の最後．．．か。」

副官A「皇甫嵩様。曹彰様から返事が来ました。増援は送らない代わりに、後で城に来て皆の前で理由を説明しろ、だそうです。」

楼杏「そう、分かつたわ。相手の性格ならば、この作戦は成功すると思うけど．．．。」

副官A「し、しかし、もし袁紹が攻めてきたら．．．！」

楼杏「その時はその時よ。あなた達を逃がし、私はこの城と共に討ち死にする．．．と前なら言っていたかもね。」

副官A「では？」

楼杏「ええ。私もあなた達と共に脱出し、純さんの元に戻る。純さんの夢を叶えるため、まだ死ねないから。」

そう言つて、楼杏は眼下の袁紹軍を泰然としながら見ていたのだった。

袁紹軍本陣

袁紹「・・・あの、斗詩さん？私、報告を聞き間違えたのではありませんわよね？」
顔良「はい。目の前の城は、見張りの兵士くらいしかいないみたいです。多くても、千いかない程度かと。」

袁紹「真直さん。確かに私、相手の手薄な所を選べとは言いましたけれど・・・いくらなんでも、少なすぎませんか？」

田豊「えええ、私達の行動範囲内で一番確実に落とせそうな城を選べって言ったの、麗羽様じゃないですかー！」

文醜「確實っていつても、千はないぜ、千は。こつちは三万の大軍団なんだぜ？」

文醜「もつところ、十万くらいの兵がこう、どーんといる所とか選べば良かったのに……！」

田豊「なんでわざわざ戦力差三倍の相手にぶつかりに行くのよ！」

文醜「あたいが四万、斗詩が三万倒せば、後は五分五分だろ。」

田豊「計算になってないわよ、それ。」

文醜「あ、真直が一万倒すか？」

田豊「軍師の私に無茶言わないで！」

文醜「でも、楽勝な勝負なんて面白くもないだろ。あたいと斗詩の気合と努力と友情で、ものすごい強敵をずがーんと打ち破るのがいいんじゃないか！あ、後愛ね、愛！」

顔良「いや……もつと平和なのでいいんだけど。」

文醜「愛！」

顔良「あー、はいはい。はあ……。」

袁紹「この辺りの街ではいけませんでしたの？兵力が五千とありますけれど。」

田豊「そこは敵が多いからやめようって言ったの麗羽様じゃ……。」

袁紹「……？」

田豊「ああ……覚えてないんですね。」

袁紹「まあいいですわ。そんなしよぼくれた相手なんかちよいちよいつと蹴散らし

て、華琳さんに私の力を示しておあげなさい。猪々子さん！斗詩さん！」

文醜「へーい！」

顔良「分かりました。」

と言った話があったのだった。

陳留

春蘭「糧食は後続に持たせろ。我々が持つのは最小限でいい！とにかく、機動力を高めろ！」

沙和「騎馬隊を優先なの！歩兵は後からで良いのー！」

一刀「お、おい、何やってるんだよ、春蘭！」

愛紗「それに風達も！一体何をやっているのだ！」

春蘭「見て分らんか！出撃の準備だ！」

一刀「見て分かるから言ってるんだよ。純に禁止されてただろ！」

愛紗「そうだぞ、春蘭！純様のご命令に従え！」

春蘭「ふんっ。袁紹ごときに華琳様の領土を穢されて、黙っていられるものか！純様がお許しになつても、この夏侯元讓が許さん！それに、なんとしてでも桜杏殿を助けねば！」

凧「・・・済みません、隊長、愛紗。私も春蘭様と同意見です。それに、あの街を戦火にさらす策にも賛成いたしかねます。」

真桜「春蘭様！出撃準備、完了したので！」

春蘭「よし。先発隊は私が率いる。後続は凧、真桜、沙和。貴様らに任せるぞ。」

凧「はっ！」

真桜「まかしとき！」

沙和「分かったの！」

一刀「こらっ、春蘭っ！待てっ！」

愛紗「待つのだ、春蘭！」

すると、

霞「おいこら！自分ら、何やつとんねん！」

霞もやって来た。

春蘭「ちっ・・・愛紗でも厳しいのに、厄介になった。」

一刀「霞！春蘭が桜杏さんの籠もっている城に応援に行くって……止めるの手伝ってくれよ！」

愛紗「すまない霞、助太刀を頼む。」

霞「……つたく。ここもイノシシか！どあほう！」

春蘭「貴様と愛紗も似たようなものではないか！」

霞「ウチと愛紗は自制効くぶんまだマシや！一刀はさつさと純呼んで来い！」

一刀「わ、分かった！」

そう言い、一刀は純を呼びに行った。

霞「本隊、止まれ！止まれえいつ！」

愛紗「止まれえっ！」

春蘭「貴様ら……！どうしても止める気か！」

霞「当たり前や！もしどうしても行くつちゆうんなら……」

愛紗「私と霞を倒してからにしろ！」

春蘭「上等だ！ならば……行くぞ！」

霞「来い！」

愛紗「止めさせて貰うぞ、春蘭！」

そして、互いに得物を構え、ぶつかった。

袁紹軍

袁紹軍兵士A 「文醜様。兵の配置、完了しました。」

文醜 「んー。」

顔良 「面白く無さそうだね、文ちゃん。」

文醜 「あつたり前だろー。ガキとケンカして勝てとか言われて、やる気の出る奴なんかいるもんか。」

顔良 「もう……。でも、千かぁ……。」

文醜 「こつちは連れてきた兵のうち、麗羽様の近衛以外を全員突っ込んでるんだぜ？半分で行つても半日もかかないだろ。」

顔良 「なんか、本当に弱い者イジメだね……。」

文醜 「頭の良い奴の考える事は、えげつないよなー。あ、斗詩は別な。」

顔良 「……作戦は有効っていうのは分かるんだけどね。」

袁紹軍兵士B 「伝令です！後方の袁紹様から、攻撃はまだかだそうです。」

文醜「うー……。」

顔良「どうする？文ちゃん。」

文醜「うーん……。なんか、熱出そう……。」

顔良「え？この程度で？」

文醜「だつて、百万くらいいると思つたんだもん。とにかくぶち当たればいいやー、くらいに考えてたら、たったの千だけ、千。」

顔良「いや、百万はいくらなんでも無茶……。」

文醜「んー。千かー。千だよなー。んー。」

顔良「しないなら、私が号令かけようか？」

文醜「いや……。よーし、決めた！斗詩、全軍に通達！これより行動を開始するぞつ
！」

そして、顔良と文醜は行動を開始した。

陳留

その頃、春蘭と霞、そして愛紗が激しい戦いを繰り広げていた。その時、
一刀「華琳！純！こっちだ！」

純「お前ら、何をしている！」

華琳「春蘭、やめなさい！」

一刀が華琳と純を連れてやって来た。

春蘭「かつ！華琳様っ！純様っ！」

純「何でもこうなったかは大体察するが、説明しろ。」

霞「今ええ所なんやから、邪魔せんといつてっ！てええええいつ！」

春蘭「・・・くうっ！」

そして、霞が春蘭の剣を吹き飛ばした。

香風「おー。勝負あり。」

霞「さて、今度はウチの勝ちやなあ。春蘭。」

愛紗「ふむ。霞に先を越されたか・・・。」

霞「堪忍な、愛紗。」

春蘭「お、おい、今のは油断して・・・っ！」

純「見苦しいぞ、春蘭。」

華琳「そうよ、春蘭。」

春蘭「うう……華琳様と純様まで……」

純「で、何をしているんだ。答えろ。」

春蘭「い……いかに純様のご判断とはいえ、今回の件、納得いたしかねます!」

春蘭「件の城の指揮官がいくら楼杏殿であっても、七百で城を守るのは不可能です。袁紹ごときに華琳様の領地を穢されるなど……あつてはなりません!」

純「それで兵を勝手に動かしたんだな?」

春蘭「これも華琳様を思えばこそ! 華琳様の御為ならば、この首など惜しくありませんぬ!」

それを聞いた純は

純「……はあ。姉上、こいつにはもう少し説明しておくべきでした。」

華琳「そうね。」

と華琳に言った。

純「……分かった。出撃しろ。」

春蘭「純様っ!」

一刀「純!?!」

愛紗「純様!?!」

霞「おいおいおいおい! それでええんか?」

純「ただし、これだけの兵を連れて行くことは許さねー。お前の最精銳・・・そうだな、三百だけ動かすことを許そう。」

霞「さ・・・、三百やて!？」

香風「純様ー。」

純「ああ、香風も同行したいそうだから、こいつは三百に含まなくて構わねーぞ。少数精鋭で動くなら、数日あれば向こうに着くだろうな。構いませんね、姉上？」

華琳「我が軍を束ねているのはあなたよ。あなたに任せるわ。」

一刀「また無茶な・・・」

純「楼杏率いる城の守備隊と合わせれば千になる。これで勝てないようだったら、お前の決死の覚悟で足りねーところを埋めてみる。・・・春蘭、お前なら出来るぞ。」

春蘭「はっ！純様の信任に応えるため、存分に暴れて見せます！総員、騎乗っ！」

霞「おい、春蘭っ！」

春蘭「腕に覚えのある者だけ私に続け！ただし、城を出る時に三百を越えた者は置いてゆくぞ！出撃！」

香風「それじゃ純様、行ってきます。」

純「ああ。後の事は任せたぞ。」

そして、春蘭達は出撃した。

一刀「お、おい、純。ホントに良いのかよ……!」

霞「いくら何でもそりやひどすぎひん? 七百が千になったかて、相手が三万じゃ足しにもならない。」

愛紗「純様、宜しいのですか!」

純「構わねーよ。どうせ春蘭が到着する頃には終わってるから、三百もいれば十分だ。」

純「後は……賊退治の話が来てるから、霞と愛紗は、凧達三人を連れてお前が出てくれ。……ただし、糧食や矢はちゃんと持つて行けよ?」

霞「そりやかまへんけど……。」

愛紗「純様……。」

一刀「華琳、良いのか?」

華琳「戦の事は全て純に任せてるから、私が口を出すまでもないわ。それに、私は純の判断を信じるわ。」

と華琳はハッキリとそう述べたのだった。

その数日後、

何となく眠れなかった一刀は、城壁の上に向かった。すると

季衣「あ、兄ちゃん・・・。」

既に季衣と流琉が先客として城壁の上の見張り台にいた。

一刀「なんだ。二人とも来てたのか。」

流琉「はい。季衣が寝られないらしくて・・・。」

一刀「ま、そりやそうだろうなあ・・・。」

一刀（遠くまで見えるここなら、春蘭達が戻ってきたら一番に分かるもんな。だから俺も、ついついここに来ちゃったわけで・・・。）

季衣「春蘭様、いつ帰ってくるんだろう・・・。」

一刀「三百の騎馬で急いで行っても、州境だからな。どれだけ急いでも、向こうで何かあればまだ何日かはかかるよ。」

一刀（まだ伝令の兵も戻ってこないくらいだしな。）

季衣「あんな無茶な事するなら、僕も連れて行って欲しかったのに・・・春蘭様の馬鹿。」

一刀「季衣達は盗賊討伐に出てたしな。・・・急ぎだったから仕方ないだろ。」

實際、この二人が戻ってきたときには、既に春蘭は出撃しており、季衣は再出撃を純に求めたが、許さなかったのだった。

季衣「それだつて分かつてるよう……。でも、春蘭様……。無事に帰ってきてくれるよね？ 兄ちゃん。」

一刀「春蘭は殺したつて死ぬような奴じゃないだろ。春蘭と互角に戦える奴なんて、呂布や劉備の所の趙雲くらいじゃないか？ 純と戦つたら負けると思うけど……。ともかく、袁紹になんか、やられたりしないよ……。」

季衣「だよね……。」

そう言つて、季衣は少し涙ぐんでいた。

一刀「あーもう。ほら……。泣くなよ、季衣。」

一刀「皆、色々考えてくれるはずだから。な？」

季衣「分かつてるつてば……。」

ここに来る間も、桂花の執務室の灯りが点いており、様々な件の十手、二十手先の対応を考えている。もちろん純も、稟と風に任せており、今も稟と風は、その先の対応策を考えている。その時

秋蘭「どうした、お前達。……。明日も早いぞ。早く寝ておけ。」

秋蘭が、華命と柳琳、そして栄華を連れてやって来た。

流琉「あ、秋蘭様。」

一刀「皆も寝られない口か・・・。」

華侖「だって、春姉え達、心配つすよ。」

栄華「・・・ですわ。いくら香風さんが一緒と言つても、三万対千でしよう？」

柳琳「はい。お兄様は大丈夫だと仰つていましたけど・・・。」

秋蘭「・・・姉者は無事に帰つてくるさ。私はそれを言いに来ただけだ。それに、私は純様を信じるさ。」

一刀「それを言うだけなら、三人と一緒にここまで来る必要ないだろ。」

一刀（全く、素直じゃないんだから。）

秋蘭「ふっ。想像に任せるよ。」

すると、

季衣「・・・あれっ!？」

流琉「ん?どうかしたの?」

季衣が何かを見つけた。

季衣「ねえ、みんな!あれ・・・あそこ!」

一刀「え?・・・まさか!」

そう言つて、季衣が指差す方向には、もうもうと上がる砂煙が見えた。

栄華「伝令……ではありませんわね。」

柳琳「だいぶ多いですね。……五十、いや、百は超えている？旗印は……」

華命「えつと……夏侯つす！あれ、春姉えつすよ！」

一刀「おいおい……いくらなんでも早すぎないか？向こうで一日戦ったら、帰ってくるのは明日か明後日か……」

秋蘭「戦っていないのだろう。」

一刀「え？それって、どういう……？」

秋蘭「ともかく門を開けに行くぞ。姉者を迎えてやらねば……流琉は華琳様と純様をお呼びして来てくれるか？」

流琉「はいっ！」

そして、一刀達は城門に着いた途端、

季衣「春蘭様っ！」

華命「春姉えー！」

季衣と華命が、春蘭に飛びついた。

春蘭「おお、お前達か……。」

栄華「香風さん！」

香風「お兄ちゃん。」

一刀「ああ、お帰り。香風も無事だったか！」

香風は馬から降りると、一刀にしがみついた。

栄華「あう……香風さん……。」

春蘭「北郷も来たのか。貴様にも心配を掛けたようだな。」

一刀「心配したさ。けど……どうしたんだ？何か、戦ってないみたいだけど……。」

春蘭「うむ、それがな……。」

その時

純「出迎えご苦労だったな、春蘭、香風。」

華琳と純が出迎えに現れた。

春蘭「はあ……。」

純「楼杏も、ご苦労だった。」

楼杏「はっ！」

楼杏も、その場に元気な姿で現れたのだった。

44話

□州・東都

袁紹「おーっほっほっほ！やはり、こちらの方が私らしいですわ！おーっほっほっほ！」

文醜「ですよー！七百の城を三万で落とすとか、あたいや麗羽様っぽくないですもん！」

袁紹「ええ！この大軍団でたった千を蹴散らすなど、この大！将！軍！袁本初にしては、あまりに大人げない行為でしたわ。」

田豊「全くもう……どうして私の言うことを聞かずに、こういう思いつきみたいな作戦行動ばかり……。」

顔良「まあまあ、真直ちゃんも落ち着いて……。」

田豊「それに、五千の兵がいる駐屯地を攻めるとか、これももう威力偵察じゃなくって、普通に侵攻じゃないですかー！」

袁紹「別にどちらでも構いませんわ。どうせ華琳さんと事を構えるなら、陥とすのでしよう?」

田豊「それは陥としますとも。陥としますけど、それまでには補給の段取りとか諸侯との調整とか色々ですね。政治的なあれやこれやがですね。」

文醜「まあいいじゃんか。七百の城を潰しても大人げないって言われるだけだし。だつたら、五千の城とがつつり戦つた方がそれっぽいじゃん。」

袁紹「そうですね。私の覇道の第一歩となる戦は、せめてこの程度の規模はありませんと!斗詩さんもそう思いますわよね?」

顔良「あ、あはは。それはまあ。」

田豊「・・・うう、もう敵の領地内の調査が出来たと思うしかないわね。斗詩、周辺の地域調査はどう?」

顔良「うん。そっちはちゃんと終わつてるよ。ここに来るまでの地形も、兵を出して調べさせてる。」

田豊「ホント、アンタだけが頼りだわ。：城攻めが無事に終われば良いんだけど。」
顔良「とりあえず、敵の兵も五千か六千くらいだから、応援が来るまでに何とかなるんじゃないかなあ。」

袁紹「そうですね!次の作戦は、素早さが命ですわよ!日が昇つたらばーつと仕掛け

霞「袁紹に遠慮はいらへんで！」

愛紗「総員、突撃いいいっ！」

凧「我らの街を狙う薄汚い盗賊共を、華琳様の領地から追い払うのだ！攻撃、攻撃いっ！」

真桜「どうせこっちは少数や！思いつきり引つかき回して、後は混乱に任せるだけでええ！終わったらとつととずらかるで！」

沙和「・・・お姉様あ、愛紗ちゃん。なんか、沙和達の方が盗賊みたいなの。」

霞「考えたら負けやで、沙和！」

愛紗「霞の言う通りだ、沙和！皆の者！朝日が昇るまでには撤退するぞ！行けーっ！！」
こうして、袁紹の三万の兵を撃退したのであった。

陳留・玉座の間

真夜中の緊急会議でありながら、城にいた主要メンバーの全員が、予定時間に集まっ

た。

一刀（形はどうあれ、楼杏さんはもちろん、春蘭達の事も心配してたんだな・・・）。
純「・・・さて、説明して貰おうか、楼杏。何故あの状況で、増援がいらなと言ったのか。」

楼杏「はつ。相手は三万の袁紹軍でしたが、前線指揮官の文醜は、情報によると派手な戦が好きですから、たった七百の城など相手にしないだろうと思つたのです。」

春蘭「・・・ふむ。」

楼杏「・・・ただし、ここで華琳さんから純さんがもし増援を送つたら、向こうもケンを売られたと思つてしまいます。」

楼杏「袁紹達の性格だと、特に華琳さんから売られたケンカは絶対買つてしまします。・・・そしたら我らは全滅し、城も半日は保ちません。」

桂花「なるほど・・・。袁紹と文醜の性格をよく調べていたようですね。」

稟「けれど、向こうにも軍師の田豊がいたはずですよ。」

風「それに、抑え役の顔良もですね。」

楼杏「あの二人が、軍師や抑え役の言葉をちゃんと聞くと思えないわ。特に今回は絶対に負けない戦だったから、油断を油断とも思わなかつたのではないかしら？」

純「・・・分かつたか？春蘭。」

春蘭「はあ。だが、楼杏殿……。もし袁紹が七百の手勢を与しやすしと見て、総攻撃を仕掛けてきたらどうしていたのだ？」

楼杏「もしそういう事態になれば、七百の兵を逃がし、私は城と共に討ち死にするつもりだったわ。」

春蘭「なっ……。!?」

その発言に、春蘭はもちろん、華琳と純以外の他の皆は絶句した。

楼杏「……。と、以前の私ならそう思っていました。」

秋蘭「……。今は違うのか？」

楼杏「はっ。城に火を放ち、皆でこの城を脱出しようと考えていたわ。七百の兵ならそれも十分可能だから。それに、私の命は、既に純さんに捧げているわ。純さんの夢を叶えるため、私はまだ死ねないから。」

純（楼杏……）

春蘭「下手に数が増えると、逆に動きが取れないと？」

楼杏「三千の兵では上手いかなかったと思うわ。」

純「……。どちらにせよ、春蘭の増援は必要なかったということだ。」

華琳「ええ、そうね。」

春蘭「ならば、どうして行かせたのですか。それに香風まで。」

純「念のためにな。それに、元々は香風に任せるつもりだったけど、二人いても問題ねーだろ。」

春蘭「・・・むう。それでは完全に子供の使いではありませんか。」

純「行きたいと言ったのはお前だぞ、春蘭。」

その時、

柳琳「お兄様。いま霞さんと愛紗さんから早馬の連絡が入りました。楼杏さんの城から駐屯地に移動中の袁紹軍を捕捉、本日 of 早晩にも奇襲を掛けるとのことです。」

霞からの知らせが来た。

純「分かった。」

一刀「・・・盗賊って言うからどこに行かせたのかと思つたら」

華琳「ふふ。やはりそういうことだったのね。」

純「威力偵察ですから、ちゃんと一当てはさせました。感謝はされても、恨まれる筋合いはありませんよ。」

華琳「ええ。あなたの言う通りね。」

純「霞や愛紗、風達のことだから、そちらの奇襲の心配はないだろう。お前も見事な指揮だったな、楼杏。」

楼杏「いえ。追撃の兵を出して下さって、ありがとうございます。」

純「今後ともよろしく頼むぞ。」

楼杏「はっ！」

そう言つて、楼杏は拱手した。それを見ていた桂花は、

桂花「・・・どこかの脳筋も見習つて欲しいわ。」

春蘭「おい桂花、それは私の事を言っているのか？」

桂花「別にあんたなんて一言も言つてないのだけど。」

春蘭「貴様ーっ!!」

一刀「落ち着けて、春蘭！」

そんなことを言つて春蘭を怒らせたのだった。

45話

陳留・玉座の間

楼杏の活躍から暫くが経ち、新たな情報が入った。それは、袁紹が劉備達のいる徐州の州境を越えたという情報だった。

華琳「そう。麗羽が。」

純「……。」

一刀「……あんまり驚かないんだな。」

純「可能性としてはありえたさ。……まさか本当にやるとは思わなかったがな。」

華琳「ええ、そうね。」

稟「袁術相手で手一杯の劉備を見て、好機と思ったのでしょうか？」

純「いや、違うと思う。」

華琳「ええ、袁術に徐州を一人占めされるのが、急に惜しくなったのでしょうかね。」

一刀「惜しくなったって、そんな、子供じゃあるまいし……。」

華琳「大して変わらないわよ。・・・風、お茶をもう一杯貰えるかしら？」

風「はい。純様もいらいますかー。」

純「ふっ、貰おうか。」

一刀「で、どうするんだ？これから。」

華琳「どうするも何も、それはこれから決める事よ。」

純「皆はどう考える？稟、言ってみろ。」

稟「はい。徐州の遠征軍には袁紹、文醜、顔良という敵の主力が揃っています。この機に南皮へ攻め入り、徹底的に袁紹を叩くべきではないでしょうか。」

燈「・・・賛成です。もしくは遠征軍の後背を断ち、浮き草となった袁紹軍本隊を叩くべきかと。血の巡りの絶えた頭脳も、頭脳を失った手足も、いずれも敵とはなりえません。」

といった意見も出た。すると、

桂花「反対です。袁紹も袁術も先見の明のない小物ゆえ、今は大軍でも、放っておけば勝手に根腐れを起こします。」

桂花「しかし、劉備はいずれ華琳様の前に立ち塞がるでしょう。これを期に、まずは徐州を攻め、劉備を討つべきかと。」

榮華「私も桂花さんの意見に賛成ですわ。面倒な種は先に省くに限りませう。」

といった意見も出た。

一刀（おお、見事に意見が分かれたな・・・。）

華琳「純は？」

純「俺、ですか？」

華琳「ええ。我が軍を束ねているのはあなただし、最も戦に長けているのもあなたよ。あなたの意見を聞きたいわ。」

純「そうですね・・・」
すると

稟「袁紹と袁術を先に叩くべきですよね？」

桂花「劉備に決まっていますよね！」

稟「袁紹です！」

桂花「劉備！」

と稟と桂花がそう言い合った。

一刀「待て待て待て！純が困るぞ！」

それを見た一刀はそう言って二人を止めた。

華琳「それで純、どうなのかしら？」

純「・・・難しい事を考えるのは苦手なので、上手く言えるか分かりませんが・・・」

華琳「構わないわ。遠慮なく言ってみなさい。」

純「・・・麗羽と袁術を叩くべきっていう意見も劉備を討つべきという意見はどちらも正しいです。」

純「ここは・・・劉備と同盟って手はどうかと思います・・・」

華琳「同盟？」

純「はい。劉備は恐らく、徐州から出る気はないと思います。だったら、同盟を組めばそつちを警戒する必要はなくなるかと。」

純「それに状況次第では、俺達が麗羽や袁術と戦う時にもう一方の勢力を足止めしてくれるかもしれませんし。」

華琳「成程。麗羽と袁術を討伐した後に併合すれば、ちようど良いわね。」

一刀「いやいやいや・・・なんでそういう方面に考えが行くんだよ。別に純はそこまです言っていないだろ。」

純「別に併合したからって、状況は変わんねーと思うぞ。」

華琳「ええ。豫州の最初の頃のように、実質の支配は彼女に任せるといふ手もあるのだし。」

一刀「けど、向こうから仕掛けてこないなら呂布みたいに放っておけば良いだろ。・・・風はどう思う？」

しかし、

風「……ぐー。」

・・・寝ていた。

桂花「寝るなっ！」

風「……おおっ。寝てませんよ？」

一刀「いや、どう見ても寝てただろ。」

風「でー。劉備さんをよつてたかつて袋叩きにするんですか？それとも、袁紹さんの所に火事場泥棒に入るんですか？」

風「あとは、えーと……劉備さんをだまし討ちでしたっけ？」

稟「……。」

桂花「……。」

榮華「……身も蓋もない言い方をなさいますのね。」

華琳「けれど、それが世間の風評でしょうね。……私にも前科がある以上、同盟の話も向こうは危うく思うのではないかしら？」

燈「あら、私のせい？」

一刀「豫州は、燈から差し出したんだろ？」

華琳「事実はそのみだけけれど、世間がちゃんとその話通りに取るかはまた別問題だわ。」

あれは真実よりも、えてして盛り上がりのある方を好むものだから。」

純「ふむ……。」

華琳「いずれにしても、私は弱い者虐めをする気も、火事場泥棒をする気もないわ。今は次の動きで最善手を打てるよう、力を溜める時でしょう。」

こうして、袁紹の対策が決定したのだった。

徐州・琅邪

袁紹「おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

文醜「進め進めー！目指すは劉備の本拠地だー！」

顔良「麗羽様あ……。ホントに良かったんですか？」

袁紹「何がですか？」

顔良「だって、劉備さん達、袁術様と戦ってて大変なのに……。」

袁紹「そんな私の知ったことではありませんわ！そもそも、美羽さんなんかに必死になつている劉備さんが悪いんですよ。ねえ真直さん！」

田豊「ええ……まあ、流石に火事場泥棒感が半端ない気はしますけど、そうですね。」
文醜「そうそう。所詮この世は焼肉定食……空しいぜ。」

田豊「それ、何か違うない？」

文醜「……そうだっけ？」

顔良「文ちゃん……そんな所カツコ良く言っても、全然カツコ良くないよう。」

袁紹「それに、こんな広い土地を美羽さんに一人占めさせるなんて……この間お夜食を食べていたら、だんだん腹が立つてきましたの！」

顔良「はあ……。」

文醜「結局は思いつきなんすね……。」

袁紹「閃きと言つて欲しいですわね。」

田豊「そうは言つても、策を考えるのは私なんですから……少しは気を使って欲しいです。……しかもどうせ聞いてくれないのに。」

袁紹「ともかく、南にかかりつきりの劉備さんのお城はスツカスカのがらつがらに決まっていますわ！今のうちに私達の物にしてしまえますわよっ！」

文醜「おー！」

袁紹「声が小さいですわっ！」

三人「「おーっ！」」

田豊（・・・七百の城を落とすのは渋るくせに、ガラガラの城を落とすのは平気なん
だもの。我が主ながら、ホント読むのが面倒くさいわね。）

一方、淮陰の袁術は、

袁術 「はあ!? 麗羽が攻めてきたのかえ!?!」

魯肅 「はい。密偵から連絡があつて、もう徐州の州境あたりにいるみたいなんです
よー。」

袁術 「し・・・信じられんのじゃ! 普通、そんな火事場泥棒のような真似はせんであ
ろ!?!」

孫策（・・・あなたがいつもしてる事じゃない。）

袁術 「孫策! 何か言うたかや?」

孫策 「べつにー。」

袁術 「とにかくこのままチンタラしては、徐州の良い所は全部麗羽に取られてし
まうのじゃ!」

袁術「せめて七割……いや、八割は制圧せねば攻め損じやぞ！包、策を考えよ！」
魯肃「ひやわわ。策を考えろって言つても、美羽様包の話とか全然聞いてくれないじゃないですかあ！」

魯肃「それに向こうの軍師、將軍達の連携の隙とか包の指示の合間とか、遠慮ナシに突いてきて……こつちが見透かされてるみたいでむちやくちや怖いんですけどー。」

張勳「包ちゃん。何か仰いました？」

魯肃「……うう、何でもないです。」

魯肃「……ひやわわ。仕官先、間違えたかなあ。」

孫策「……ここの軍師も大変そうねえ。」

袁術「ええい、役に立たんやつめ。……ならば孫策、おぬしらの部隊で総攻撃を掛けるのじゃ。それで劉備をやっつけて、徐州を一気に妾のものにしてみせるのじゃ！」

孫策「……言うだけなんだから、楽なものよねえ。」

袁術「返事は！」

孫策「はいはい。」

袁術「はいは一度でよいのじゃ！」

孫策「はい。」

魯肃「……て言つても、ここの将も大変そうなんですよねえ。」

劉備軍

趙雲「・・・袁術も本気の様子か。」

張飛「さつきの戦いで、もうみんなへトへトなのだ。・・・ここでさつきよりも多い相手が来たら、きつと持ち堪えられないのだ。」

趙雲「それに、城の事がある。風鈴殿や詠がいるとは言え、今の城の兵だけでは袁紹は防ぎきれまい。」

すると

諸葛亮「・・・うーん。」

龐統「やつぱり、あれかなあ・・・。」

諸葛亮「・・・でもあれは厳しいし、あれも無理があるし。」

龐統「だよねえ。あつちが立てば、こつちが立たなくなるし。」

と諸葛亮と龐統が、何か策があるのか、話し合っていた。それを見た趙雲は

趙雲「何か良い策があるのか？朱里、雛里。」

と尋ねた。

諸葛亮「ないわけでは……ないのですが。」

龐統「朱里ちゃん……。」

諸葛亮「ううん、やっぱりダメです。この策を実行すれば、きつと沢山の犠牲が出ちやいます。」

趙雲「しかし……この窮地を乗り切るためには、多少の犠牲はやむを得んのではないか?」

張飛「星!」

趙雲「分かっているさ。心優しい桃香様は、一人の犠牲も出したくないのだとな。」

張飛「けど……!」

趙雲「しかしな、鈴々よ。そのような超常の一手、そうそう打てるものではない。故に我々は、出来る限りの最良手を打つしかないのだ。」

そう趙雲は冷静に返した。

張飛「むう……。」

趙雲「朱里。その策、私に授けてみせよ。この趙子龍、見事果たしてみせようではないか。」

張飛「星……。」

趙雲「大丈夫だ鈴々。私一人ならどうとでもなる。桃香様をしかと守るのだぞ。」
その時

劉備「・・・ダメだよ。」

劉備「そんなのダメ！絶対ダメ！みんな無事に生き残るの！」

劉備の声が、全体に響き渡った。

趙雲「しかしですな、桃香様。他に方策がない以上、打てる手を打たねばなりません。
それに、世の中には出来る事と出来ぬ事が・・・」

劉備「・・・あるよ。一つだけ。」

趙雲「まさか・・・降伏ですか？」

劉備「ううん。降参はしないよ。・・・袁紹さん達のやり方は絶対間違ってると思う
から・・・。」

趙雲「だったら何を・・・？」

劉備「朱里ちゃん、前に言ってたよね・・・」

諸葛亮「・・・はい？」

この決断に、皆は猛反対したのだが、

劉備「皆が生き残るため。」

と強引に事を進めたのであった。

46話

陳留・玉座の間

香風「ねむい……。」

一刀「ほら香風、起きて。眠いのは分かるけど、もうちよつとだから頑張つて！」

真夜中に、純から突然の集合命令が下され、眠そうな目をこすっていた。

真桜「つちゆうか隊長、なんで香風と一緒になん。まさか……。」

一刀「……その廊下で力尽きてる所を拾ったんだよ。ほら、起きて！」

香風「お兄ちゃん、抱っこー。」

そう言われ、一刀は香風を抱っこした。

真桜「でも何やの、こんな時間に集合で。隊長は聞いたる？」

一刀「俺も知らないよ。今から徐州に強襲を掛けるとかでもないだろうし。」

真桜「ありえそうなんが嫌やなあ。けどそれなら、せめて寝る前に言うて欲しかったわ。」

一刀（とはいえ、前にいる軍師組も緊張してる様子はないし……そもそも夜に動くなら、準備は昼のウチにするものだよな。）

風「……。」

一刀「おはよう、風。流石に早いな。」
しかし

風「……。」

一刀「……風？」

反応がなかったため、様子を見ると

風「……。」

真桜「……寝とる。」

一刀「目を開けたまんまか。器用だなあ。」

目を開けた状態で寝ていた。

沙和「……すー。」

風「……むにやむにや。」

華命「ぐー。」

一刀（こつちは全力で寝てるし。っていうか華命に至っては大の字かよ！堂々としたもんだな！）

一刀「おい、皆、起きろー！」

風・沙「……おおっ！」

一刀「反応まで一緒かよ……。」

柳琳「姉さん。姉さんも起きて、ほら。」

華侖「むにやむにや……もう脱いでいいすかー？」

柳琳「姉さん！」

愛紗「華侖様！はしたないですよ！」

楼杏「そうですよ、華侖様！」

桂花「そこ！うるさいわよ！」

稟「風、早くこちらに来なさい。あなたの場所はこちらでしょう。」

風「おおっ。すっかり忘れてました。」

皆それぞれに定位置に着いたところで、華琳と純、春蘭と秋蘭が入って来た。

華琳「全員揃ったようね。急に集まってもらったのは、他でもないわ。純。」

純「先程早馬で、徐州から州境を越える許可を受けた輩がいる。」

燈「……州境を？」

華琳「ええ。入りなさい。」

??「……は。」

そう言われて、入ってきたのは

凧「な……。」

真桜「何やて……！」

桂花「趙雲……!？」

趙雲だった。

華琳「見覚えのある者も多いでしょうけれど、一応、名乗ってもらいましょうか。」

趙雲「我が名は趙子龍。徐州を治める劉玄徳の家臣にして、それを支える者である。」

霞「なんで趙雲がこないな所に……」

一刀「華琳に助けを求めに来たって事か？」

華琳「残念だけれど、少し違うわね。説明してくれるかしら？」

趙雲「……私は、孟徳殿の領地の通行許可を求めに参りました。」

愛紗「……まさか!？」

楼杏「そういう事!？」

純「愛紗、楼杏。気付いたか。」

愛紗「はい。これはあくまで推測なのですが……」

楼杏「私も愛紗さんと同じですが……」

純「構わねーよ。言ってみる。」

愛紗「はっ。恐らくあの劉備の事ですから、仲間のために戦うのが嫌だから荊州か益州に逃げようと考えているのかと。」

楼杏「そのために、華琳さんの領地を通らせて欲しいと言った事では……。」
純「流石だな、愛紗、楼杏。」

趙雲「……関羽殿と皇甫嵩殿の言う通りです。我々は、益州へ向かいたいのです。」
稟「なんと無謀な……。」

季衣「ねえ、益州って遠いの？」

柳琳「はい。一番近い道を通っても、豫州から荊州の北側まで全部を横断する事になりますよ。」

季衣「え……それってものすごく遠くない!？」

桂花「ものすごく遠いわよ。だから、無謀だつて言ってるの。」

一刀（俺達が遠征や賊討伐で自分達の領の端から端まで動くだけでも大騒ぎなのに、他人の領でそれだけの距離を動かなくて……一体どうするのか、検討も付かない。）

真桜「けど、袁紹や袁術と正面からぶつかるよりは、マシやと思うで。命あつての物種や。」

凧「それはそうだが、我々とて別に徐州と同盟を組んでいるわけではないだろう？」

栄華「同盟どころか、目的地の益州も含めてこちらの仮想敵の一つですわ。」

秋蘭「……だが、そのどちらかに逃げると言ってもアテはあるのか？ 漠然と逃げるだけでは、もはや軍とは呼べんぞ。」

その問いに

趙雲「それは……。」

趙雲は怜悯な顔を歪ませ俯いた。

華琳「既に向こうから打診もあつたのではなくて？ 劉姓の誼もあるでしょうし、東西から私を牽制する同盟を結ぶというのは、理に叶っているもの。」

燈「益州州牧の劉璋は軍事にはさして明るくない人物と聞きますし、劉備さんの率いる将が客将としてでも陣営に加わるのは、悪い話ではないでしょうね。」

華命「えーつと、結局それって、どういう事つすか？」

桂花「……劉備達有力な将を率いた一大集団を、わざわざ私達の敵国に送る手伝いをしろつて事よ。」

一刀「更に無茶苦茶度が増したな。」

趙雲「……。」

華琳「とはいえ趙雲も、それは重々承知の上のようですね。この策が通るとは思っていないようなのよ。……そうでしょう？」

趙雲「……それを承知で、お願いに参りました。」

霞「主も無茶なら、それを頼みに来る将も無茶やなあ。正気やないで。」

趙雲「それでもだ。」

霞「気合入つとんなあ。なんでまた、そないに頑張るん？」

趙雲「確かに張遼の言う通り、私も無茶だと思つている。しかし、我々が生き残る可能性としては、これが最も高い選択でもあつた。」

霞「そつか……。しかし、その忠義、誰かさんにそつくりやなあ。なあ春蘭。」

春蘭「わ……。私はこんなに愚直ではないぞ！」

しかし

華琳「……。」

純「……。」

桂花「……。」

秋蘭「……。」

春蘭「誰か何とか言えよ！」

皆にスルーされたのだった。

華琳「だからこれから、その返答をしに劉備の元へ向かおうと思うのだけれど……。
誰か、付いて来てくれる子はいるかしら？」

徐州・彭城

一刀「何だかんだで全員か・・・。人気者だな、華琳は。」

華琳「純ほどではないわ。付いてきた将の殆どは、純を慕っているし、準備をやったのは全て純だしね。」

一刀（そう言う割には満更でもなさそうだよなあ。）

桂花「で、純様はともかく何でアンタまで付いてくるのよ。」

一刀「何でって言われてもな・・・。」

趙雲「・・・感謝します、孟徳殿。」

華琳「さあ。私達はまだ協力するとも敵対するとも言っていないわよ。その言葉は、無事に事が済んでから聞く事にするわ。」

趙雲「それでも、主に会っていただけると、言っただけ言っただけから。」

華琳「・・・そう。」

秋蘭「純様、先鋒から連絡が来ました。・・・前方に劉の牙門旗。劉備の本陣のようです。」

純（州境ギリギリだな．．．）

華琳「なら趙雲。あなたの主の所に案内して頂戴。純と後何人か一緒に付いてきてくれる？」

純「分かりました。」

一刀「．．．純は確定なんだな。」

華琳「相手の陣に行くのだから手持ちの中で一番強い者を連れていくのは当たり前でしょう。」

一刀「成程．．．。」

桂花「華琳様！この状況で劉備の本陣に向かうなど、危険すぎます！罨かもしれないん！」

春蘭「桂花の言う通りです！せめて、劉備をこちらに呼び出すなどさせては．．．？」

華琳「でしょうね。私も別に、劉備のことを信用しているわけではないわ．．．けれどそんな臆病な振る舞いを、この私がして良いと思う？」

純「．．．はあ、全く。」

春蘭「．．．ぐっ。」

華琳「だから趙子龍。もしもこれが劉備の罨だったなら．．．貴方達はこの場で残らず死んでもらう事にするわ。特に、我が弟の実力は知ってると思うけど。」

趙雲「それはありませんゆえ、ご随意に。」

華琳「それで……純以外に誰が私を守ってくれるのかしら？」

春蘭「はっ！」

季衣「僕も行きます！」

流琉「私も！」

純「なら、春蘭、季衣、流琉、霞……それから、愛紗と楼杏、稟と燈、一刀も来い。残りの皆はこの場に待機。秋蘭、桂花、指揮は任せた。」

純「趙子龍の確約も取ったから、中で異変があつたなら、あの陣で動く者は俺達以外残らず塵殺しろ。」

秋蘭「はっ。」

桂花「華琳様、お気を付け下さいませ。春蘭、季衣、命に替えても華琳様のことをお守りするのよ！」

春蘭「言われるまでもないわ。」

季衣「うんっ！」

華琳「では趙雲。案内を。」

そして、劉備達のいる本陣に向かった。

劉備軍本陣

劉備「曹操さん!!」

華琳「久しいわね、劉備。連合軍の時以来かしら？」

劉備「はい。」

華琳「私達の領地を抜きたいなどと・・・また、随分と無茶を言ってきたものね。」

劉備「すみません。でも、皆が無事にこの場を生き延びるためには、これしか思いつかなかつたので・・・」

華琳「まあ、それを堂々と言う貴方の胆力は大したものだわ。・・・いいでしょう、私の領を通ることを許可してあげる。」

一刀（え!?ちよつと、即決かよ!）

それを聞いた一刀は驚き、その横で

純「・・・やはり即答か。という事は。」

稟「純様、宜しいのでしょうか？」

純「・・・どうせ姉上の事だ、ゼッテー何か要求してくるよ。」

純と稟は小声で話していた。

劉備「本当ですか！」

春蘭「華琳様!？」

純「まあ、劉備とこの陣の状況を見れば、長々と話す余裕もねーだろう。難しい話をしないで手短かに済ませた方が良いよ。」

それを聞いた

劉備「曹操さん・・・曹彰さん・・・。」

劉備はホツとした表情をした。

華琳「移動に使う街道はこちらで指定させてもらうわ。物資と糧食の手配もしてあげる。・・・で、益州に向かう兵はどれほど?一万?二万?」

その質問に

劉備「え、ええつと・・・。」

劉備は目を泳がせ

諸葛亮「十五万です。」

後ろから諸葛亮が人数を言った。これには、

春蘭「じゅ・・・っ!？」

純「・・・。」

春蘭は驚きのあまり絶句し、純は眉間にしわを寄せたのだった。

華琳「……それだけの兵がいて、戦わないというの？」

劉備「あ、いえ……兵は二万もいません。後は……」

諸葛亮「話を聞いた徐州の都の民が、我々と行動を共にしたいと。」

華琳「呆れた。それを真に受けて、全部連れて行くというの？ どうせ年寄りや子供もいるのでしょうか？」

劉備「それでも……平原から付いてきてくれた人もいますし、見捨ててはいけませんから。」

純「……稟、燈、こちらでも糧食を都合するとして、何とかなりそうか？」

燈「移動の大半は豫州ですから、物資の余裕はなくてもありません。こちらで隊を先行させれば何とか……。途中の開拓村で、希望者を受け入れるという手もありますし。」

稟「後半の荊州北部も、それまでに物資の確保を行えば不可能ではないと思います
が。」

純「……そうか。」

華琳「……ふむ。」

その様子を見た劉備は

劉備「あの……、曹操さん？ 曹彰さん？」

不安な顔で見ている。

華琳「……いいわ。そこはこちらで何とかする。」

華琳「けれど、その十三万の足手まとい、例え一人でも賊へと墮としたら、生きて私の領を出られないと知りなさい。良いわね？」

劉備「もちろんです！ありがとうございます！」

華琳「それから通行料は……そうね、趙雲でいいわ。」

その言葉に

劉備「……え？」

劉備の表情は、安堵から一変、驚愕に染まった。

一刀「何……？」

純「やはりそうか……。」

純は、こうなると思ったのか、別段驚きもしなかった。

一刀「純は予想してたのか？」

純「いや、いくら俺でも分かるぞ。お前、何で分かんなかったんだよ。」

一刀「うっ……。」

華琳「何を不思議そうな顔をしているの？旅芸人でも関所で通行料くらい払うわよ？当たり前でしょう。」

劉備「え、でも、それって……！」

華琳「それをこちらにこれだけの難事を押しつけておいて、まさか一銭も払わずに通れるとでも思っていたの？ 冗談よね？」

華琳「それに、貴方達の大切な十五万が無事に生き延びられるのよ？ もちろん、ここから追撃に来るだろう袁紹と袁術はこちらで何とかしてあげましょう。」

華琳「その代価をたった一人の將の身柄であがなえるというなら……、安いものだと思わない？」

趙雲「……桃香様。」

劉備「それは……。」

劉備「そう……ですね。」

華琳「……。」

そして

劉備「ありがとうございます、曹操さん。」

と言った。これには

諸葛亮「桃香様っ!？」

張飛「お姉ちゃん！」

諸葛亮と張飛は驚きの声を上げた。しかし

劉備「……でも、ごめんなさい。」

華琳「あら。」

劉備「星ちゃんは私の大事な妹です。鈴々ちゃんも朱里ちゃんも……他の皆も、誰一人欠けさせないための、今回の作戦なんです。」

劉備「だから、星ちゃんがいなくなるんじゃないや、意味がないんです。こんな所まで来てもらったのに……本当にごめんなさい。」

そう言つて、劉備は頭を下げた。

華琳「そう。流石、徳をもつて政事を成す劉備だわ。……残念ね。」

趙雲「桃香様……私なら。」

劉備「言つたでしよ？星ちゃんがいなくなるんじゃないや、意味がないって。朱里ちゃん、他の経路をもう一度調べてみて。袁紹さんか袁術さんの州境あたりで、抜けられそうな道はない？」

諸葛亮「……はい、もう一度洗い直してみます！」

そして、諸葛亮が地図を広げてもう一度安全な道がないか調べようとした。

一刀「なあ、華琳。」

その時

華琳「劉備。」

劉備「……はい？」

純（……まずい！）

華琳「甘えるのもいい加減になさい！」
と一喝した。

劉備「……っ！」

華琳「たった一人の将のために、全軍を犠牲にするですって？寝惚けた物言いも大概にすることね！」

劉備「で……でも、星ちゃんはそれだけ大切な人なんです！」

華琳「なら、その為に他の将……張飛や諸葛亮、そして十三万の貴女を慕う民が死んでも良いと言うの？」

劉備「だから今、朱里ちゃんに何とかかなりそうな経路の策定を……！」

華琳「それが無いから、貴女達は今、ここにいますのでしよう？……違うかしら？」

劉備「……そ、それは……。」

華琳「諸葛亮。」

諸葛亮「はひっ！」

華琳「そんな都合の良い道はあるの？」

諸葛亮「そ……それは……。」

華琳「郭嘉。大陸中を渡り歩いたあなたなら分かるわよね？どう？」

その問いに

稟「ありません。」

稟は即答した。

稟「まず十三万の民を連れた時点で、現実的ではありません。とはいえ、一番安全な経路を使ったと仮定して、追跡を振り切りつつの行程であれば・・・そうですね」

稟「目的地に一万も辿り着ければ、御の字ではないでしょうか。それは、曹操軍一の精鋭である純様の部隊である黄鬚隊でも、同じでしょう。」

劉備「・・・つ。朱里ちゃん・・・。」

諸葛亮「・・・。」

劉備「そんな・・・。」

稟「旅というのはそれほど過酷なものなのですよ。それは、一から兵を集めて挙兵したあなた方も十分ご存じなのでは？」

劉備「・・・。」

華琳「現実を受け止めなさい、劉備。あなたが本当に民の為を思うなら、趙雲を通行料に、私の領を抜けるのが一番なのよ。」

華琳「それでも民の脱落は出るでしょう。けれど、こちらはその民を受け入れる余裕

もあるわ。耕す土地も与えられる。」

趙雲「桃香様、私の事は大丈夫ですから……。」

劉備「曹操さん……だつたら……。」

華琳「それから、あなたが趙雲の代わりになる、などという寝惚けた提案をする気なら、この場であなただを叩き斬るわよ。それこそ十三万の民全てを道に迷わせる行いだわ。それに、国が王を失つてどうするつもりなの？」

劉備「……！」

華琳「……どうしても趙雲を譲る気はないの？」

劉備「……。」

華琳「まるで駄々っ子ね。今度は沈黙？」

劉備「……。」

一刀「おい、華琳。そういう言い方は……。」

純「一刀、お前は黙つてろ。姉上の言っている事、間違つてないぞ。」

一刀「け、けど……。」

華琳「いいわ。あなたと話していても埒が明かない。……勝手に通つて行きなさい。」

劉備「……え？」

華琳「聞こえなかった？ 私達の領を通つて良いと言つたのよ。……益州でも荊州で

もどこへでも行けば良い。」

一刀「華琳！」

春蘭「華琳様！」

劉備「そ、曹操さん……ありがとうございます！」

華琳「ただし。」

劉備「……通行料ですか？」

華琳「当たり前でしょう。……先に言っておくわ。あなたが南方を統一した時、私が弟に、必ずあなたの国を奪いに行かせるわ。通行料の利息込みでね。」

劉備「……。」

華琳「そうされたくないなら、私達の隙を狙ってこちらに攻めてきなさい。そこで私と弟を殺せれば、借金は帳消しにしてあげる。」

劉備「……そんなことは。」

華琳「ない？なら、私の弟が滅ぼしに行つてあげるから、せいぜい良い国を作つて待つていなさい。」

華琳「あなたはとても愛らしいから……私の側仕えにして、存分に可愛がつてあげる。」

劉備「……。」

華琳「純、霞。劉備達を向こう側まで案内なさい。街道の選択は純に任せるわ。」

純「良いのですか姉上、俺を案内役にして。」

華琳「麗羽達なら、純がいなくても十分に戦えるわ。逆にここで純を使う方が無駄なよ。」

純「そうですか。稟、道の選択を頼む。」

稟「はっ。」

純「愛紗と霞は俺と一緒に劉備軍の先頭。楼杏。」

楼杏「はい。」

純「お前は、劉備軍の後ろから脱落者が出たら俺に報告してゆっくり来い。」

楼杏「分かりました。」

華琳「それでは私達は戻るわよ・・・劉備、あなたがした選択・・・間違っていないければ良いけれどね。」

劉備「・・・間違つてなんかいません。それを、絶対に証明して見せますから！」

華琳「良い返事だわ。・・・帰るわよ！」

そう言い、華琳達は自分達の軍に戻り、純の部隊と霞の部隊は劉備軍の案内に向かったのだった。

47話

劉備と交渉を終え、道案内を純に任せたとその帰り道

一刀「……大層な悪役ぶりだったなあ。」

華琳「あら、そうかしら？」

一刀「でも……本当に劉備さんのために言っただよね？」

春蘭「お前、華琳様の大きな愛が分らんのか！」

一刀「分かっているよ。だから、劉備さんにああいう厳しい事を言っただろ？」

華琳「……この時代を徳と理想だけで乗り切ろうなんて、余程の世間知らずか頭のおかしな賢人だけよ。彼女がどこまで行けるのか、見て見たいじゃない？」

春蘭「華琳様。また悪い癖が……」

華琳「まあ、南方の呂布や南蛮を何とかしてくれるというのだから、こちらにもちゃんと利はあるわよ。……純が併合しやすくなるかもしれないしね。」

一刀「え？ ホントに純に攻めさせる気なの？」

華琳「当たり前でしょう。冗談だと思っただの？ それとも、純の実力を疑っているのかしら？」

春蘭「北郷……まさか……」

一刀「い、いや……そういう意味で言ったわけじゃ……!」

一刀（たまに、華琳のどこまでが本気なのか分からなくなる……）

桂花「華琳様! お帰りなさいませ!」

風「交渉はどうになりましたか?」

華琳「劉備達は自領の民を連れ、私達の国を抜けて益州へ向かう事になったわ。道案内は純に任せているわ。麗羽の追撃は我々が引き受ける。」

華琳「桂花、兵の配置は?」

桂花「対袁紹用の布陣で完了しております。」

華琳「ふふ、流石ね。皆も、桂花の指示に従ってちようだい。」

春蘭「はっ!」

季衣「分かりましたー!」
すると

桂花「しかし、良かったのですか、華琳様?」

華琳「どうかしたの、桂花?」

桂花「純様に道案内をさせて。確かに我が軍は精鋭ですが、純様がいるといないのでは兵の士気に関わります。」

と桂花は、華琳にそう言った。

華琳「そうね。でもね、桂花。私の精銳が、純がないから戦に負けるなんて事があつてはいけないの。確かに純は呂布を倒した程の実力でもあるから、大陸一の武将よ。だけど、我が軍には優秀な将が大勢いる。いつまでも純、純と純に甘えるわけにはいかないの。分かった？」

桂花「はい。浅はかな事を言つて申し訳ございません。」

華琳「別に良いわ。その代わり、この戦必ず勝つわよ。」

桂花「はっ！あなた達、急ぎなさい！袁紹は短気だから、劉備達の撤収の報を受けた途端に動くわよ！」

そして、作戦が始まった。

袁紹本陣

文醜「麗羽様麗羽様麗羽様——！」

袁紹「むにゃ……何ですの、明日になさい……。」

文醜「二度寝してる場合じゃありませんよ！大変です！劉備達が陣の撤収を始めたつて報告が入ったんですよ！このままじゃ逃げられちゃいますよー！」

それを聞いた袁紹は

袁紹「・・・なあんですつてえ！真直さん！真直さんはもう起きていらつしやいますの!?!」

目が覚めて田豊を呼んだ。

田豊「もちろんですよ。今斗詩に追撃部隊を編成させています。・・・なんですが」

袁紹「何ですか？」

文醜「何か劉備達とあたいらの間に、曹操の軍が割り込んできてるみたいなんですよね・・・。」

袁紹「はあああああ!?!何ですの、火事場泥棒がもう一人増えましたの!?!」

田豊「いえ。曹操は劉備を守るように動いているようですよし・・・劉備が救援を出したのではないかと。」

袁紹「許せませんわ!!猪々子さん、向こうが陣の展開を終える前にさつさと追撃をお掛けなさい！」

文醜「だから今準備させてますつてば！あ、美羽様はどうしましょ。」

袁紹「起きてこなければ放っておくだけですわ！劉備の首級はこちらで一人占めです

わよ！」

文醜「うっわ。ここに来てそこまで・・・」

袁紹「何か言いました？」

文醜「いえ、別にー。」

田豊「ほら猪々子、さっさと行くわよ。向こうの軍師はどうせ桂花でしょうから、こちらあの穴掘り小娘の性格を元に作戦を立てておいたわ。」

文醜「あー。あの男嫌いのー。」

田豊「そうそう。あいつの性格からするとね・・・」

曹操軍

桂花の指示で一刀が合流したのは、凧と香風の率いる部隊だった。

一刀「・・・この人数で大丈夫なのか？凧。」

凧「桂花様は大丈夫だと仰っていましたか・・・」

一刀「桂花が・・・？不安だな。」

香風「凧ー。敵の先鋒が見えたー。」

凧「数はどのくらいいる？」

香風「・・・分かんない。多分、多い。」

一刀「ざつくりだなあ・・・。」

凧「桂花様からは、数が分からなくても問題ないと言われましたが・・・。純様がいない分、私達がいっしょにしなければなりません。」

一刀「そうだな。」

凧「総員、攻撃準備！」

凧の声と同時に、部隊の全員が弓矢を構えた。すると、月明かりの中、夜の中を動く袁紹軍らしき集団が見えた。

凧「連中の掲げた松明を狙え。・・・撃てっ！」

相手に気取られないように、号令は小さなものであったが、振り下ろした腕に合わせ、数百の矢と凧の気弾が天に放たれ、一斉に敵陣へと降り注いだ。

袁紹軍

文醜「ん、どしたー？夜なんだから、静かに動けー。」

袁紹軍兵士A「文醜様！敵の奇襲ですっ！敵の数は不明！ただし降り注ぐ矢の数からするに、かなりの大人数の様子！」

文醜「どこの軍だよ！まさか曹操か!？」

顔良「文ちゃん。もしかして、曹操さんに待ち伏せされたんじや・・・。」

文醜「待ち伏せって、真直の言った通りか!？」

顔良「だったら文ちゃん、真直ちゃんの作戦通り、一気に突撃する?？」

文醜「んー・・・でもこれ、いつもみたいに突撃ーってやったら、思いつきり反撃食らうやつじゃね?？」

顔良「それはまあ・・・そんな気しかしなわね。でも、文ちゃんが珍しい。」

文醜「あたいだって戦場の空気くらい読むってば。それに兵がこんだけビビってりや、突撃したってたかがしれてるしなあ。」

文醜「まあいいや。全軍転進！いちいち曹操なんか相手にすんな！別の所から劉備達を追い掛けるぞーっ!？」

そして、袁紹軍は文醜の命令で撤退していった。

曹操軍

一刀「ホントに退いてったよ……。」

風「凄いですね、桂花様の予測は……。」

香風「夜の奇襲と突撃は、周りが見えないから怖い。」

一刀「そりやそうか……。相手の数も分からなけりや、疑心暗鬼にもなるわなあ。」

風「では隊長。北郷隊は次の行動に移ります。」

一刀「ん、お願い。相手にこちらの動きを気取られないようにね。」

風「はっ。」

一刀「桂花の予測が正しいとすると……次に文醜達が動くのは、沙和の所かな。」

沙和達

栄華「沙和さん。敵の追撃軍、確認出来ましてよ。」

沙和「ありがとなの！なら、皆弓の準備をするの！」

季衣「うー。弓って、苦手なだけだなあ・・・。」

栄華「季衣さんは、手近にある大きな岩を放り投げると言われていませんか？」

季衣「あ、そっちの方がいいや。・・・とりあえず、敵部隊の方に思いつき投げたら良いんだよね？」

沙和「なの。今回は、矢もとにかく敵のいる方に飛ばせば良いって言われたのー。」

季衣「なら・・・よつと！」

栄華「・・・いつ見ても、そんな大きな岩をお兄様以外の人が抱えられるのが信じられませんか。私、一番軽い弓を引くので精一杯ですのに。」

季衣「慣れたらどつてことないよー。沙和ー、もう投げていい？」

沙和「もうちよつと待つの！」

曹操軍兵士A「敵陣の先端、射程圏内に入りました！」

沙和「よーし。それじゃ、総員、てーっ！なのー！」

そして、沙和の命令の下、一斉に矢が放たれた。

袁紹軍

袁紹軍兵士B「文醜様！また敵の矢です！それに、何やら巨大な岩まで飛んできて：

！」

文醜「なんだそりゃ!?!」

顔良「敵の新兵器とかじゃないの!?!文ちゃん！」

文醜「だーもうっ！向こうは慌てるどころか万全じゃねえか。斗詩、別の道つてある？」

顔良「うん。多分、もう二箇所くらいなら・・・。」

文醜「じゃあそつちだ！総員、もっかい転進！矢と岩が飛んでくる前に急げーっ！」

曹操軍本陣

曹操軍兵士B「夏侯淵様から伝令です！曹純隊の一撃を受けて、袁紹の追撃軍が引き

返したとのこと！夏侯淵様達は北郷殿達と合流、次の作戦に向かうそうです！」

華琳「これで三度目・・・見事な采配だわ、桂花。」

桂花「文醜の思考は単純ですから、あれの性格を知っていれば、動きを読む事は難しい事ではありません。」

桂花「それに軍師の田豊も机上の理屈を振りかざすばかりで、兵の心情を汲む事を知りません。」

桂花「闇の中を降り注ぐ矢の恐怖を理解して策を与えていれば、こうはならなかったでしょうけれど・・・ふっ。」

華琳「そう。それで次はどう動くのかしら？」

桂花「彼女の我慢に四度目はありません。次は相手を見ずに突っ込んで来るかと。」

華琳「・・・なるほどね。」

桂花「袁紹の主力はそれでカタが付くでしょう。後は秋蘭達が予定通りに動いてくれれば、今夜は上々かと。」

袁紹軍

文醜「だあぁ……っ。もう、曹操の軍、どんだけ展開してるんだよ……！」

顔良「これだけ街道を封鎖してるんだから、十万はいるんじゃないかなあ……。」

文醜「もういいっ。次は一気にぶち込む！真直も突っ込めって言ってたし、知らん！」

顔良「もう。文ちゃんってば、知らんじゃないよ！落ち着いてよう。」

文醜「元々あたいは、こういうチマチマしたのって大っ嫌いなんだよ。それにほら、意外と、相手は何百しかいなかったとか、そういうオチだったりさ。」

顔良「……流石に無いと思うけど。」

文醜「するかも知れないじゃん。だから、次は……。」

袁紹軍兵士C「報告！前方に敵部隊を発見！」

文醜「よし！なら突撃するぞ！突撃ーっ！」

顔良「だから、ちよつと文ちやあんっ！」

曹操軍

華命「敵部隊、撤退していくつすよ！」

春蘭「なんだ、もうか。まだひと当てしかしておらんぞ。」
すると、

華琳「ふふつ。次は嫌でも全力で戦ってもらう事にするわよ、春蘭。」

華琳が現れた。

春蘭「ああ、華琳様！このような所にまで……。」

華琳「袁紹もこの一撃で懲りたでしょうから、今日は攻めてこないはずよ。後は秋蘭だけ……。」

桂花「華琳様。今伝令が来まして、袁術の陣への夜襲、成功したそうです。袁術軍は袁紹軍を追うように、徐州北方に逃亡したとのこと。」

華琳「そう。なら問題ないわね。春蘭。」

春蘭「はっ！こちらも撤収させます。」

真桜「総員、撤収や！さっさとずらかるでー！」

華琳「さて、ひとまず今夜は何とかなったけれど……。これに勝ち残れなければ後はないのは私達も同じ……。か。結局純を頼ってしまうわね。」

と、華琳はそう呟いたのだった。

48話

陳留・玉座の間

純「……ほお、敵軍が集結していると。」

秋蘭「はい。どうも袁紹と袁術の両軍が、官渡に兵を集めているようなのです。」

栄華「徐州の制圧は予定通りに進んでいますけれど、沿岸部はまだ完全ではありませんから……。袁術達には、そこと海路を利用された形ですわ。」

一刀「でも、それって意味があるのか？袁紹と袁術が南北から別々に攻めてくるって予想だったろ？」

一刀（どう考えても、袁術は徐州や豫州の南側を削った方が俺達へのプレッシャーになるし、補給だつてしやすいだろうに。）

華命「でも、兵士の数は倍になるっすよ！」

風「指揮系統が整っていないと、ただ人が増えるだけになりますけどねー。」

桂花「うまく連携が取れなかった場合、互いの足を引っ張り合つて、むしろ味方に不

利になる事の方が多いわ。連合や黄巾の時を覚えているでしょう?」

一刀「ああ。袁紹と袁術で連携は・・・無理だろうなあ。」

純「こちらとしてはやりやすくなった。」

華琳「ええ、二面作戦を取らなくて良い分ね。」

季衣「・・・数が増えたのに、楽になる・・・?」

流琉「あはは、分かってない顔だね、季衣。」

季衣「そういう流琉は分かってるの?」

流琉「うん。秋蘭様に色々教わってるもの。」

季衣「・・・うー・・・どういう意味ですか、春蘭様あ。」

春蘭「うむ。二面作戦を取らなくて良くなった分、こちらにとっては楽になったということだ。」

純「・・・どう楽になったんだ?言ってみろ。」

春蘭「そ、それは・・・おい北郷!その辺りについてちよつと説明しろ!」

一刀「俺がかよ。」

春蘭「お前がだ!」

一刀「はあ・・・最初の作戦だと、季衣と流琉は別々に行動する予定だったろ?けど、今回は敵が一つに纏まってくれたから、季衣と流琉は一緒に戦えるようになったわけ

だ。」

一刀「季衣と流琉が組めば、一人で戦うよりずっと楽で強いだろ？」

季衣「あー。そういうことなんだー。」

一刀「その反対に、敵は仲の悪い奴が共同で戦う事になるから、連携が取れない分やつけやすくなるかも〜って事だ。」

流琉「仲が悪いって、季衣と張飛さんみたいですか？」

一刀「そういう事。季衣と張飛が組んで、流琉の時みたいにやりやすくなると思う？」

季衣「無理！ありがと、兄ちゃんの説明、すつごく分かりやすかった！」
すると、

春蘭「お、お前……。」

春蘭は一刀を驚きの表情で見ている。

一刀「何だよその目は……。同類だと思ってた？俺、純に色々教わってるし。」

春蘭「くつ、北郷如きにバカにされるとは……！」

純「はあ……春蘭、お前も少しは一刀を見習え。」

華琳「そうよ、春蘭。」

春蘭「……は、はあい。」

純「ともかく。……兵を集結させて戦えるというなら、こちらに負ける要素は何も

ねーな。ただ、唯一警戒すべきは……」

秋蘭「……孫策の一党ですか。」

純「そうだ。袁術の主力には春蘭、お前に当たってもらおう。第二陣の全権を任せるから、孫策が出て来たらお前の判断で行動しろ。」

純「季衣、流琉は春蘭の補佐に回れ。」

春蘭「御意！」

季衣「はいっ！」

流琉「分かりました！」

華琳「純、麗羽に相對する第一陣はどうするのかしら？」

純「はい。栄華に任せます。」

栄華「お、お兄様、私ですの？」

純「行軍中は輜重隊を任せるが、戦闘の間は指揮を取れ。官渡なら、あれが出せるだろう。」

栄華「……はい。かしこまりましたわ。」

すると

霞「ちよいちよいちよい！何で栄華やねん。袁紹とやるなら、ウチがやりたいわ。」
霞が待ったをかけた。

純「ほお、随分と張り切っているな、霞。」

霞「まあな。反董卓連合ん時の借りやらなんやら、色々あるからな。」

華琳「純、どうする？」

純「……分かった。なら指揮は霞に任せる。栄華は補佐に付け。他に誰の補佐が欲しい？」

霞「それなら、凧達三人がええなあ。一刀、貸してくれへん？」

一刀「そりや、俺は良いけど……良いのか？純。」

純「元々入れようと思っていたから構わねーよ。一刀は、華命達と一緒に本陣に詰めてくれ。」

一刀「了解。」

純「愛紗と楼杏も頼めるな。」

愛紗「御意。」

楼杏「畏まりました。」

純「どこかで暴れる機会はきつとある。それまで、闘気は内に秘めておけ。」

愛・楼「はっ!!」

桂花「というわけで、第一陣にはこちらの秘密兵器の講義を受けてもらうわよ。霞も良いわね？」

霞「・・・なんや？どんな兵器なん？」

桂花「秘密兵器は秘密兵器よ。それ以上はまだ教えられないわ。」

霞「うー・・・あんまり面倒なのは、勘弁して欲しいんやけど。」

純「そもそも第一陣はその運用と護衛が目的の部隊だ。敵部隊との直接戦闘は、第三陣の秋蘭と香風が当たれ。」

霞「ええーっ！なんでやねんっ！」

秋蘭「承知しました。」

香風「はい。」

霞「うわー・・・貧乏くじ引いたあゝ・・・。ならウチ、普通に第三陣に入るときや良かったやん・・・。」

純「話を最後まで聞かずに勇み足を踏んだのはお前だぞ。今さら変更はしねーぞ。」

華琳「ふふ、そうね。純の言う通りよ。」

霞「あうう・・・しゃあないかあ。」

純「官渡という立地からも、相手の指揮権は袁術ではなく麗羽にある。桂花は麗羽の軍師の考え方を予測して、基本戦略を立ててくれ。」

桂花「でしたら、一つ策がありました：：将を何人が回していただきたいのですが。」

純「構わん。誰が良い？」

桂花「はい。柳琳と華命、それから香風の三名を。」

一刀「・・・結構な戦力だな。」

桂花「それだけ重要な策なのよ。代わりに、成功すれば相手に致命傷を与えられるわ。」

純「分かった。三人も良いな？」

命・柳・香「分かったつす！／分かりました！／はい。」

純「稟と風は桂花を補佐し、広い戦場をくまなく把握出来るようにしてくれ。」

風「分かりましたー。」

稟「了解です。」

純「他の皆も戦の準備を整えておけ。相手はどうしようもない馬鹿だけれど、それでも河北四州と、江南を治める袁一族だ。慢心していると、足を掬われるぞ。姉上、宜しいですか？」

華琳「あなたに従うわ。これより我らは、大陸の全てを手に入れる！皆、その初めの一步を勝利で飾りなさい。良いわね！」

こうして、戦に向けての準備が始まった。

☒州・官渡近く

一刀「なあ、真桜ー。」

真桜「何や〜?」

一刀「桂花が散々引つ張ってる秘密兵器って、何なんだ? 凧も沙和も教えてくれないんだよ。」

真桜「秘密兵器は秘密兵器や。それ以上はまだ内緒やで。・・・つつーか、どうせ言うても分からんやろ?」

一刀「それは凧達だって同じだろ。」

桂花「真桜、もうすぐ官渡よ。例のアレは到着し次第、すぐに準備を始めてちようだい。」

真桜「はいな。したら、ちやっちやと組み立ててまうわ。」

一刀「ああ、やつぱり組み立て式になったのか。」

真桜「まあなあ。そこだけは隊長に感謝しとるけどな。・・・ほな、隊長もしつかり生き残りいや。」

一刀「頑張るよ。真桜達こそ気を付けてな。」

一刀（……っていうか、感謝してるならついでに教えて欲しいんだけど。）

官渡・袁紹軍

袁紹「おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

文醜「うわ、何すか麗羽様このお立ち台。」

袁紹「おーっほっほっほ！素晴らしいでしょう。これだけ大きな櫓があれば、私の威光もより遠くまで届くのですわ！おーっほっほっほ！」

文醜「そんなことのために……。」

顔良「違うよ、文ちゃん。これ、本当は上に弓兵を昇らせるために作ったの。」

文醜「弓兵……？ああ、なるほどな。矢を射るんなら、高い所からの方が有利だもんな。でも、どこからこんな資材調達してきたんですか。」

田豊「私が頑張つて用意したに決まってるでしょ！麗羽様、別働隊も、予定通り出発致しました。」

袁紹「結構ですわ。真直さん、今回は大活躍ですわね。」

田豊「ふふん。私達軍師が本気を出せば、こんなものですっ！ああ、策を弄し、直接対決をする前に敵陣に致命的な一撃を加える・・・なんて軍師らしい仕事！」

田豊「私、今間違いなく輝いているわよね！」

袁紹「真直さんも本気を出したようですし、これで我が軍の勝利は間違いなしですわ！おーっほっほっほ！」

顔良「それはいいですけど麗羽様ー！そこから曹操さん達の様子、見えませんか？」
袁紹「しつかりはつきり見えますわよ！ウチや美羽さんの所に比べて・・・多くありませんわねえ。この人数なら、まさに勝ったも同然ですわ！おーっほっほっほ！」
顔良「じゃあ、何人くらいいますかー？後、陣形はどんな感じですかー？」

袁紹「沢山ですわー！なんだかばーっと並んでいますわよー！」

文醜「・・・斗詩。悪いことは言わないから、その辺の兵士を昇らせた方がいいぜ。」
顔良「・・・うん。そうするよ。」

顔良「真直ちゃんも珍しく機嫌が良いけど、それが逆に心配だなあ・・・大丈夫かな。」

曹操軍

官渡に辿り着いた華琳達が見た物は、辺りを埋め尽くす袁一族の連合軍と、巨大な櫓の列だった。

華琳「……あの櫓は厄介ね。あそこから陣形を読まれたり、矢を射かけられたりしてはたまらないわ。」

純「その為の秘密兵器ですよ、姉上。」

桂花「そうです。真桜、用意は出来ているわね？」

真桜「完璧や！任しとき！」

秋蘭「……純様、袁紹が出て来ました。あの櫓も一緒です。」

華琳「……動くの!?あの櫓は。」

純「無駄な所に手を掛けてるなあ……あいつは。」

華琳「ホントね……。」

純「……まあいつか。行つて来るから、準備をしとけよ。いつでも攻められるようにな。」

桂花「御意！」

そして、華琳と純は袁紹と対峙した。

袁紹「おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

華琳「……そうして見下されると、なんだか無性に腹が立つわね。」

純「あはは……。」

袁紹「華琳さん、高い所から失礼致しますわよ。純さんも、ゴメン遊ばせ。おーっほっほっほ！」

華琳「笑うだけしか能が無いのかしら？随分と毛並みも悪くなっているようだし、もう年ではなくて？」

袁紹「なあんですつてえ！誰が目尻に小じわの目立つてきたオバハンですつてえ！」

華琳「……流石にそこまでは言っていないわよ。」

純「どんな耳してんだよ、つたく……。」

袁紹「だまらっしやい！たかが宦官の孫の分際で生意気ですわよ！純さんと違って！」

純「……姉上、俺も宦官の孫なんですけどね。」

華琳「ええ、そうね。けど、その宦官の孫の千ちよつとの手勢に、この間良いようにされていたのはどこのどなたかしら？」

袁紹「……へ？」

華琳「あら。気付いていなかったの？それは失礼。名門袁家の一族の目は、家柄と役職しか見えない節穴だったのを忘れていたわ。」

純「・・・はあ。」

袁紹「な・・・な・・・な、な、ななな・・・っ！」

袁紹「良いですわ！ここであなたを叩き潰して、この櫓の上からそのクルクル髪を吊してあげますわ！」

袁紹「最初はびよんびよん元気に撥ねているでしょうけれど、そのうち元には戻らなくなってしまうでしょうね！そしてその横で、純さんと婚礼を・・・おーっほっほっほっ！」

純「俺、流石にコイツと婚礼は遠慮するわ・・・。」

華琳「残念。その前にあなたを打ち倒して、河北四州と袁術の江南、丸ごと頂く事にするわ。だから、そんな光景が見られるのは、あなたの歪んだ妄想の中だけになるでしょうね。」

袁紹「本性を現しましたわね、性悪小娘！でも残念ながら、この大陸に覇を唱えるのはこの私、袁本初ですわっ！」

華琳「本性を現したのはどちらだか。まあ良いわ。さっさと私の徐州を出て行って、南皮を明け渡しなさいな。」

袁紹「わ、私の・・・私の徐州ですって・・・!?純さんだけならまだしも、この徐州は、この私の物ですよ！」

純（あ、俺は良いんだ……。）

袁紹「猪々子さん、斗詩さん！櫓を用意！弓兵に一斉射撃をお命じなさいっ！」

華琳「あら残念。撃ち方なら、こちらの方が……」

その時

ドカーン！！

袁紹「……へ？」

華琳「……少し早かったようね？」

純「そうですね。」

豪快な音が響き、櫓を一つ破壊したのだった。

第一陣

栄華「おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

沙和「栄華様が壊れたの……。」

栄華「う、うるさいですわね……。お姉様とお兄様の手前遠慮していましたけれど、

一度やってみたかったんですの。」

霞「確かに、違和感全然ないな……。で、どうやった？」

栄華「……なかなか悪い気分ではありませんわね。クセになつてしまひそうですわ。」

栄華「コホン。それはともかく、大成功ですわね、真桜さん！」

真桜「せやろ？ 流石ウチの最高傑作や！ ホンマ大将に感謝や！」

凧「真桜。投石機の次弾装填、終わったぞ！」

真桜「よっしゃ！ 沙和、照準はどないや！」

沙和「距離良し！ 方向良し！ 目標、次の櫓に合つてるの！」

真桜「ほんなら、もういっちょ、撃てーいっ！」

ヒュー……ドカーン!!

霞「命中や！ これで半分くらい潰せたな。後半分、気合入れて行きいっ！」

真桜「それはええけど、姐さんと栄華様も手伝うてえな。この石、結構重いねんて！」

霞「えー。ウチ、箸より重い物持った事あらへんもーん。当たったかどうか見たるか

ら、な？」

栄華「私も無理ですわ……。そういうのは、力自慢の皆様にお任せ致します。」

真桜「……。」

霞「ほら、凧を見てみい！ 黙々と働いて……。ええ子やなあ。後でアメちゃん買うた

るさかいな。」

凧「・・・出来れば、ご飯の方が。」

栄華「なら、今回は特別に宴会の予算を出して差し上げますわ。もう一息、頑張つて下さいまし！」

霞「ほらほら、次は照準合わせえ！向こうの一番奥の櫓、あれにするで！いつこ倒しや、宴会のごちそうがひと皿増えると思ひ！」

沙和「照準、合わせたの！」

霞「なら、撃てーっ！」

真桜「ちよつと、ウチの台詞ー！」

本陣

ドカーン!!

袁紹「・・・えーと。」

華琳「残念。自慢の櫓は、役立たずのようね。」

袁紹「あ……あんなの卑怯ですわっ！あんな遠くからでつかい岩を飛ばすだなんて、どんな妖術を使ったんですの！」

華琳「そんな物は使っていないわ。ただ、私の自慢の弟と、少しだけ賢い子がいただけのことよ。」

袁紹「ま、まあ……こんなものは序の口ですわ。本命は……」

その時

純「ん？」

華琳「……何？」

本陣後方から動きがあった。

袁紹「あらあら、華琳さんの陣の後方からですわね。私の別働隊が、少々おいたをしてしまったようですわ。」

袁紹「驍の悪い子達で、申し訳ありません。おーっほっほっほー！
その様子を

華琳「……。」

純「……。」

二人は冷めた様子で見ている。

曹仁隊

袁紹軍兵士A「撤退、撤退ーっ！」

華侖「そつちのやる事なんかお見通しっす！弓隊、あつちの方を狙うっす！撃てーっ！」

袁紹軍兵士B「うわっ！まずい、退け、退けえっ！」

柳琳「あんな所に伏兵がいたの．．!?姉さん、よく分かったわね。」

華侖「何となくそんな感じがしたっす！それより、このまま一気に敵の奇襲部隊を追い払うっすよ！」

柳琳「うんっ！誰か、お兄様に迎撃成功の連絡を。鎬矢をお願いします！」

曹操軍兵士A「了解です！鎬矢、放てーっ！」

本陣

袁紹「……なんですよ、あの鎗矢は。」

華琳「ああ、その鎗の悪い連中を、私の隊が打ち破ったようね。全く、自分の所の兵くらい、自分で躡けておきなさい。」

純「あはは……。」

袁紹「な……なんですってえええええ!!」

すると、袁紹軍の後方からも変化が現れた。

袁紹「ちよ!?今度は我が軍の後方ですって……っ!まさか!」

徐晃隊

袁紹軍兵士C「撤退、撤退ーっ!」

香風「……あつた。糧食。」

曹操軍兵士B「徐晃様。火を放つてよろしいですか?」

香風「……うん。もつたいないけど、やって。」

曹操軍兵士B「はっ!糧食と補充の矢に火をかける!森には燃え広がらないよう注意

しろよー！」

香風「シヤンは追撃する。あとよろしく。」

曹操軍兵士C「了解です！」

本陣

袁紹「か、か、かかか・・・華琳さんっ!!!」

華琳「ああ。これらの作戦を計画したのも、我が軍を率いているのも純だから別に謝らないわよ。」

袁紹「くうう・・・っ！なら、この決着は正面からつけさせていただきますわ！」

華琳「はいはい。」

純「・・・おい、そう言っている間に、自慢の櫓もお前のが最後だぞ。」

袁紹「ちよっ！まさか！」

袁紹「ひやあああああああああああーっ！」

純「あ、落ちた。」

華琳「あら。三公を輩出した名門汝南袁氏の当主が、随分とはしたない声を。」

袁紹「お、おのれおのれおのれーっ！後で泣かせてあげますから、覚えてらっしゃい！」

華琳「はいはい。それが自分にならないようにね。」

袁紹軍本陣

田豊「麗羽様！後方の輜重兵が襲撃を受けて・・・！」

袁紹「分かっていますわ！」

田豊「それに、曹操軍の後方を叩きに行った韓猛も、どうやら失敗らしくて・・・。」

袁紹「ですから、それも存じていますわ！」

袁紹「あのクルクル小娘……この私に、純さんの前で私にこれだけの恥をかかせて：

絶対に許しませんことよ！」

袁紹「総員、攻撃の用意を！礼儀を知らない野犬の群れを、我が名門に仕えるあなた達で存分に躡けて差し上げなさい！よろしくて！」

曹操軍本陣

桂花「お疲れ様でした、華琳様、純様。」

純「後で真桜には褒美を与えておくようにな。」

華琳「けど、あの投石機は大したものだわ。純の発案でしょ。あなたはやはり、戦の天才ね。」

純「はは。まあ、ただの思いつきですけど・・・。」

桂花「承知致しました。曹仁隊・徐晃隊の両部隊は、そのまま遊撃に回しております。」

純「あれで少しやり過ぎな気もしたけど・・・麗羽相手ならあれくらい分かりやすい方が良いでしょう。お前の褒美も後で取らせるからな。」

桂花「はいっ！」

華琳「純、皆に言葉を。全て任せるわ。」

純「はっ。皆、これからが本番だ！向こうの数は圧倒的。けれど、協力も連携も知らねー、黄巾と変わらぬ烏合の衆だ！」

純「血と涙に彩られた調練を思い出せ！あそこで培われた団結と連携をもつてすれば、この程度の相手に負ける理由などありはしねー！いいな！」

純・紹 「全軍、突撃！」

そして、官渡の戦いの、河北の覇者を決める最後の決戦が始まった。

49話

文醜「でええええええええええええええええええいっ！」

季衣「たりやあああっ！」

ガキン!!

文醜「へへん！やるじゃねえか、きよつちー！」

季衣「あつたり前だろ、いっちー！」

文醜「なら、こつからは本気で行くぜ！」

季衣「こつちだつて！」

顔良「もしかしたら、今回油断してたのは、こつち…かもね。」

流琉「そうかもしれないね。けど…だからって、遠慮はしませんから！」

顔良「うん！」

文醜「はああああああつ！」

季衣「はああああああつ！」

その時、季衣と文醜の間に

香風「シャンだよ。」

香風が入った。これには、

季衣「ちよつと香風、僕達の戦いの邪魔しないで・・・っ！」

季衣は文句を言ったが、

柳琳「季衣さん、流琉さん！部隊から突出しすぎです！お二人は春蘭様の補助だったでしょう！」

柳琳の言葉に、

季衣「え・・・？あつ！ほんとだ、いつの間に。」

自身の今いる状態に気付いた。

文醜「いつの間に・・・。」

顔良「・・・いや、文ちゃん。一応私達の動きは、真直ちゃんの指示だったからね？
作戦通りだからね？」

季衣「ならどうしよう。僕らが退がったら、いつちー達が・・・。」

香風「ここはシャンがやる。」

柳琳「周りの敵は私と姉さんで・・・あら、姉さん？」

香風「華命様は、もう戦ってる。」

華命「ここはあたし達に任せるっすー！早く退がるっすよ！」

文醜「何だあ？あたいと斗詩の二人を、このちびっ子その二、一人で相手にするって

か？」

香風 「不足？」

文醜 「いいや。・・・上等！」

季衣 「なら・・・いっちー、またね！」

文醜 「おう！また美味しいもん食いに行こうなー！」

流琉 「柳琳様、ここはよろしくお願いします！」

柳琳 「・・・よろしいのですか？あの二人を見逃して。」

文醜 「十分戦ったしなー。それに・・・あたいと斗詩を組ませてくれるっつーんなら、それはそれで楽しいってもんだ！」

顔良 「もう・・・っ。でも油断しちやダメだよ、文ちゃん。」

文醜 「当然！なら、行くぜ！」

香風 「・・・来い。」

柳琳 「ならこちらも行きます。姉さん！」

華侖 「分かってるっす！」

その時

曹操軍兵士A 「申し上げます！西の方角より、騎馬の群れとみられる一団が！」
と言う知らせが入った。

柳琳「えっ!?!どこの騎馬隊ですか?」

曹操軍兵士A「それが、砂煙が多く、よく見えません!」

香風「・・・何だろう?」

華命「柳琳。」

柳琳「私もよく分からない。袁紹さんの方もよく知らないみたいね。」

そう言つて、顔良と文醜の様子を見ると、

文醜「斗詩ー。何だあの騎馬の群れは?」

顔良「分からない。真直ちゃんから聞いてないし・・・。」

顔良、文醜も知らない様子だった。

柳琳（私達の味方かしら。それとも・・・。）

すると、次の知らせで、その正体が分かった。

曹操軍兵士B「騎馬隊の正体が分かりました!旗は馬の旗印!西涼の馬一門です!」

華命「えっ!?!」

柳琳「西涼の!?!」

香風「・・・!?!」

その先頭には

翠「西涼の馬騰が娘、马超推参!!今こそ、友である曹子文を助けるため、袁紹軍と袁

術軍を攻撃する!!お前ら、西涼の騎馬隊の力を袁紹と袁術に見せつけるぞ!!」

馬超が立っており、袁紹軍に突っ込もうとしていた。

顔良「ぶ、文ちゃん!!」

文醜「ああ!!麗羽様が危ない!!退いたら攻撃されるし、退かなかつたら本陣が危ない!!どうすりゃ!!」

顔良と文醜は、予想外の出来事に混乱したのだった。

袁家本陣

田豊「ちよっ!?!何でそこで西涼が!?!」

魯肅「ひやわわ、こっちも予想外ですよー!まさか、西涼が来るなんてー!」

袁紹軍兵士A「田豊様、本陣が踏ん張りきれません!!」

田豊「ああもう、どうすればいいのー!!」

その横で

袁術（・・・どう考えても、もう負け戦なのじゃ。のう、七乃。）

張勳（そうですねー。そろそろ逃げた方が良いかもしれませんよ、お嬢様ー。）
袁術と張勳がそこそと逃げようと話していた。

袁紹「何か仰いまして！」

袁術「いや、別に何も言っていないのじゃ。のう？」

張勳「はいー。言つてませーん♪」

袁紹「ああもうっ！これだけの戦力差があれば華琳さんなんかチツチキチーのすばーんだと思いましたがに！それに、何故西涼の田舎者が華琳さんに味方を・・・真直さん？」

田豊「ですからそれが分かってたら何とかしてましたし何とかなつてたなら何とかなつてたんですよー！」

魯肅「・・・だいぶ訳が分かんなくなつてますよう。」

袁術「七乃。ぼちぼち逃げるとするのじゃ。」

張勳（はい、お嬢様。殿はいつも通りに孫策さんにお任せで良いですか？」

袁術（うむ。そうと決まったら、さつさと孫策に伝令を送つて撤退するぞ。）

張勳「分かりましたー。包さーん。私達は撤退するので、孫策さんに殿を任せるつて伝令、お願いしますねー？」

魯肅「分かりまし：：つて、えっ!? いやちよ、美羽様、七乃様っ!? ええええええ：：つ

!!!!
」

袁術「我が袁家の為に働けるのじゃ、光榮である！それでは任せたぞよー！」

魯肅「えええ、本気ですかあ．．．それって孫策さんだけじゃなくって、包も切り捨てじゃないですかあ．．．そんなあ．．．」

袁紹「やつぱりここは、一旦下がって戦力を立て直して．．．しかし、三公を輩出した我が名門袁家がそんな．．．。いえ、負けてしまつてはなおのことご先祖様に申し訳が．．．。」

袁紹「そうですね！美羽さん達に立て直しの時間稼ぎを押しつけ．．．もとい、お願いして．．．！」

そう思った袁紹は、袁術を読んだが、

袁紹「美羽さーん、一度兵を退いて、陣形を立て直しますわよ。ですからその間の．．．って、あら？」

袁紹「美羽さん？美羽さーん!？」

袁術はいつの間にかいなくなっていた。

曹操軍第二陣

春蘭「はああつ！」

孫策「くつ……！流石夏侯元讓……天下に響く勇名は伊達ではないということね！」

春蘭「当然だ！しかし、貴様も江東の虎の娘とはよく言ったものだ！なかなかやる！」
孫策「いつまでも誰かの娘って言われるのも癪なんだけどねー。ま、袁術なんかの食客でいるうちは仕方ないけど。」

その時、

魯肅「あ、黄蓋さん！あそこ、あそこですー！孫策さん、いましたよー！」
魯肅と黄蓋がやって来た。

黄蓋「策殿お！本陣の袁術から連絡が来た！撤退するゆえ、殿を務めろと！」

孫策「……そんな暇、あるわけないでしょ！この状況を見ろつていうのよ……全く。」

しかし、

春蘭「……ふむ。」

それを見た春蘭は、

孫策「……え？ちよつと夏侯惇、どういう……？」
劍を下ろしたのだった。

春蘭「どうした。撤退するのだろう？」

孫策「……見逃してくれるってこと？」

それに対して春蘭は

春蘭「撤退するなら好きにしろ。その代わり、次はもう一度勝負しようではないか。」
と孫策に言った。

孫策「……そう。なら、ありがたく受け取らせてもらうわ。……行きましよう、祭。」
黃蓋「うむ。さらばだ夏侯元讓。」

魯肅「し、失礼しまーす。」

そう言つて、孫策達はその場を後にしたのだった。

春蘭「……。」

季衣「春蘭様ー！」

春蘭「季衣、流琉。無事だったか。」

流琉「はいっ。あの騎馬は……？」

春蘭「後で話す。とりあえず部隊をまとめろ。追撃の用意に掛かるぞ。」

季衣「分かりました！」

春蘭「しかし、西涼が我らに味方するとは……。」

流琉「はい。私も驚きました……。」

季衣「あの馬超は、純様と仲が良いみたいですね。」

春蘭「そのようだったな……。」

本陣

桂花「袁術、袁紹とも、こちらが押し切れそうですね。」

純「そうだな。袁術の側は撤退を始めているようだしな……。栄華、麗羽が動いた

ら、そちらの追撃はお前に任せるぞ。」

栄華「承知致しましたわ。」

一刀「袁術側の追撃はどうするんだ？」

純「それは春蘭に任せてある。アイツなら上手くやるだろう。」

稟「念のため、伝令を出しておいては？春蘭様の事ですし、戦に夢中になって忘れて
いるかもしれません。」

桂花「私も稟の意見に賛成です。」

純「・・・そうだな。春蘭に全権を任せた事、もう一度伝えておいてくれ。」

風「袁紹側も撤退を始めたようですよ。」

栄華「でしたらお兄様、行つて参ります。」

純「ああ。秋蘭にもよろしくな。」

栄華「出られるものは続きなさい！この大戦の総仕上げ、私達の手で果たしますわよ！」

そう言つて、栄華は出撃したのだつた。

華琳「しかし、まさか西涼が味方に付くなんて・・・。」

純「俺も予想外でした。」

一刀「純もなのか？」

純「ああ。馬超とは反董卓連合以前に会つた事はあるのだがな。」

華琳「へえ、そうなのね。」

桂花「稟・・・。」

稟「私もここまでとは思っておりません。」

風「・・・ぐう。」

稟・桂「寝るな!!」

風「……おおっ!? 西涼という予想外が起きて、つい……。」

稟「はぁ……。」

桂花「全く……。」

その頃、孫策は袁術の後背を突き、袁術を撃退したのだった。その様子を見ていた春蘭達第二陣は、

季衣「春蘭様あ。」

春蘭「何だ。」

季衣「袁術の追撃、しなくて良いんですか？」

春蘭「せんでいい。奴らが華琳様の領土に逃げ込まんよう、見張っておれば十分だ。」

流琉「春蘭様。本陣から、追撃の催促が来てますけど……どうしましょうか？」

春蘭「それは純様のご命令か??」

流琉「いえ、稟さんです。」

春蘭「なら捨て置け。」

流琉「良いんですか？」

春蘭「私は純様から第二陣の全権を預かっているのだ。純様のご命令が無い限り、どう動くかは私の自由だ。」

これには、

季衣「良いのかなあ・・・？」
季衣もそう思ったのだった。

本陣

稟「何と・・・！」

稟は、春蘭が追撃命令を無視したことに驚いていた。

稟「純様！春蘭様がこちらの追撃命令を聞かず、待機しているようです！」

純「・・・。」

稟「この機会を逃しては袁術を討てません！純様の御名において追撃のご命令を！」

純「いや、その必要はねーよ。」

稟「ですが・・・！」

純「春蘭には全権を預けてある。あいつが最善と判断したんなら、それが最善なんだろう。」

稟「は、はあ・・・。」

すると、

桂花「純様、偵察から連絡が入りました。孫策が袁術を裏切り、背後から攻撃を仕掛けているそうです。」

桂花から、孫策が袁術を裏切ったとの報告が届いた。

純「春蘭は？」

桂花「こちらの陣営に迷い込んだ兵を捕まえるくらいはしています、それだけです。」

純「そっか……。」

一刀「……なあ、純。」

純「ん？」

一刀「もしかして……こうなる事を予想してたの？」

純「まあな。」

一刀「成程……。華琳、どうせ益州だけじゃなく江東の平定も純に任せるのか？」
華琳「勿論。けど、私も加わるかもしれないかもね。もつとも、純がどう動くか知っ

ていたとしても、孫策はこの道を選んだと思うわ。……純。」

純「はっ。」

華琳「麗羽を蹴散らしたら、河北四州の平定を全てあなたに任せるわ。」

純「おつ、良いんですか？」

華琳「ええ。あなたも、暴れたかったでしょう。この中から、武将を好きに連れて行きなさい。」

と、華琳は純に河北四州平定の全権を委ねたのだった。

純「了解しました。では、霞！愛紗！楼杏！進撃の準備をする！直ぐに支度しろ！」

愛紗「御意！」

楼杏「畏まりました！」

霞「ホンマか!？」

純「ああ。三人とも、存分に暴れて見せろ！」

愛紗「はっ!! 今回の戦闘に出れなかった分暴れさせていただきます!!」

楼杏「私も、純さんの期待に応えていただきます！」

霞「ヨッシャー!!! 純、おおきに♪」

純「では姉上、これにて。ああ後、西涼の皆の対応、頼みました。」

華琳「ええ、分かったわ。」

純「一刀、またな。」

一刀「ああ、気を付けてな。」

純「行くぞ!! 河北四州を平定し、姉上の領地とするぞ!!」

純「『黄鬚』曹彰に付いてこい!!」

兵士「「おおーっ!!」」

そして、純率いる河北四州の平定部隊は出陣したのだった。そして純達が出撃した後、栄華達が帰ってきて、華琳に報告した。

華琳「・・・そう。麗羽達は逃がしたの。」

栄華「・・・申し訳ございません。こちらの想像以上に素早い相手だったもので・・・。」

華琳「まあいいわ。ここから兵を集めて南皮に向かったとしても、純が既に全てを制圧していると思うから、もはや間に合いはしないでしょう。栄華はここに残って、凧達は他の制圧を援護なさい。」

栄華「はい。」

凧「はっ。」

華琳「それと、あなたが馬超ね。」

翠「ああ。あたしが馬超、字は孟起だ。よろしくな。」

一刀（まさか、馬超までも味方するなんて・・・。凄いな、純の名前は・・・。）

華琳「今回の援軍、感謝するわ。あれで一気に袁紹・袁術を打ち破れたわ。」

翠「これはあくまで、あたしの判断だ。感謝するまでもねーよ。」

華琳「そう。今後ともよろしく頼むわね。私の真名は華琳よ。」

しかし

翠「すまないが、あたしは曹彰殿の命令しか従わないって決めてる。だから曹操、あなたに真名を預けねーよ。」

と返した。これには

一刀「ちよ．．．!?!」

一刀は驚き

春蘭「き、貴様ー!!」

桂花「なっ!?!」

栄華「お姉様に何てことを．．．!!」

春蘭と桂花、そして栄華が激怒したが

華琳「やめなさい、春蘭、桂花、栄華。」

華琳が止めたのだった。

春蘭「か、華琳様．．．。」

桂花「し、しかし．．．いくらなんでも」

栄華「お兄様の命令しか従わないとしても、あの態度は．．．。」

三人とも、それぞれそう言ったが、

華琳「いいからやめなさい。」

そう言つて、華琳は三人を止めた。

華琳「別にそれで構わないわよ、馬超。馬騰は息災かしら。」

翠「ああ。母さんは、未だに元気だ。」

華琳「そう。改めて、よろしく頼むわね。」

翠「ああ!!」

華琳「さて、軍を撤収させるわよ。河北の事は全て純に任せて、私達は榮華と共に、戦後処理をするわよ。」

華琳「それから・・・孫策の動きはどうなっている?」

桂花「はい。袁術の本隊を撃破した後、冀州方面に向かう姿を目撃した兵がおります。恐らく来た時と同様、海路を使うか徐州を抜けて、江東に戻るのではないかと。」

華琳「そう。流石にここから追うのは不可能でしょうね。・・・春蘭。」

春蘭「はっ・・・。」

華琳「今ここに純はいないけど、何が言いたいかは分かるわね?」

春蘭「は。孫策を見逃した事、いかような処罰でも・・・。」

華琳「あなたに第二陣の権限を与えたのは純よ。・・・次にあれと刃を交えるときには、もう曇りはないわね。」

春蘭「この後に奴と交える刃は、全て華琳様の意志によつてのみ振るわれるでしょ

う。」

華琳「なら良いわ。今純が河北四州平定の指揮をしているから、直ちに出陣して、純に従って見事活躍してごらんなさい。」

春蘭「はっ！」

すると

翠「曹操。すまないが、あたしも行くぜ。」

と翠も出撃すると言ったので、

華琳「ええ、構わないわよ。春蘭、良いわね。」

春蘭に伝えた。

春蘭「はっ！馬超と共にすぐに純様と合流し、河北四州を華琳様の領土に組み込んでご覧に入れますよう！」

そして春蘭と翠は、純率いる平定部隊と合流した。そして、河北四州は純の八面六臂の活躍で見事平定し、華琳の支配下に置く事に成功したのであった。

秋蘭と夜に響く旋律

純の部屋

純「・・・ん、何だ？」

深夜、どこから聞こえてくる旋律に純は目を覚ました。純は身体を起こし、その耳を澄ましてみた。

純「この音色・・・笛か。」

純（音色から察するに、姉上ではない。多分アイツだな・・・。）
そう思った純は

純「折角だし、行ってみるか。」

廊下を出て、笛の主を探したのだった。

城を出て、中庭を歩いた。空を見上げると、無数の星と美しい月が煌めいていた。部屋にいた時よりも、笛の音色は大きくなっている。

純「どこだ・・・？」

寝静まった城内を見渡しても、まだその主は見えない。どうやら、音は風に乗って流れてきていた。

純は指を湿らせて天に掲げた。緩やかな風が、南東に向けて吹いていた。

純「・・・裏庭か。」

そして、純は裏庭に足を運んだ。城内の林道を抜けて、裏庭へと出る。すると、それは正解だったらしく、笛の音は徐々に大きくなっていった。

純「この辺りの筈なんだが・・・」

純は月明かりを頼りに、辺りを見渡した。そしたら

純「・・・やっぱり、秋蘭だったか。」

秋蘭が、東屋の屋根の上で横笛を吹いていた。すると、静かに笛の音が止み、東屋の屋根の上の上っていた秋蘭が、純の方を見下ろした。

秋蘭「純様・・・何故ここに？まさかとは思いますが、散歩ですか？」

純「お前の笛の音が風で流れてきたんだ。それを辿ってここまで来たんだよ。」

秋蘭「それは申し訳ございません。起こしてしまいましたか・・・ここなら城までは届かないかと思っていましたのです。」

純「気にすんな。恐らく俺以外他の連中は気付いてねーよ。」

秋蘭「そうですか。それなら良かったです。」

そう言つて、秋蘭はホツと胸をなで下ろした。その曲線が、月の光を受けて更に艶やかに感じられた。

純「秋蘭、俺もそつち行つて良いか？」

秋蘭「はい、構いませんよ。」

そう言つて、秋蘭は承諾した。それを聞いた純は、ひよいと屋根の上に乗つた。吹き抜ける風が非常に気持ちよかつた。

そんなに高い場所に乗つた訳でもないのに、月が先程よりも大きく綺麗に見えた。

純「秋蘭の笛を聴くのは久しぶりだな。」

秋蘭「私も笛を吹くのは久しぶりです。しかし、華琳様と比べたら楽の才は劣りますよ。」

そう言つて、秋蘭は謙遜したが

純「そんな事ねーよ。お前の笛も、中々心が安らぐぞ。綺麗な音色だし。」

と純は秋蘭の笛を褒め称えた。

秋蘭「ふふっ……ありがとうございます。」

そう言つて、秋蘭は頭を純の肩に乗せた。それに純は、秋蘭の頭を抱いた。

純「それに曲も……この地域に伝わる伝統的な舞踊曲だよな。」

秋蘭「はい。以前たまたまその舞踊を目にする事がありまして、その音を記憶し、再

現したのです。」

純「成程・・・俺には無理だがな。」

秋蘭「純様は楽は好まなかったですからね。」

純「よく父上に叱られていたがな。しかし、俺の性に合わん。」

秋蘭「純様らしいですね。」

そう言つて、秋蘭は口元を抑えて笑つた。

秋蘭「・・・さて、もう遅いです。そろそろ城に戻るとしましょう。」

そう言つて純の肩から頭を起こし、立ち上がろうとしたが

純「おいおい、待つてくれ。もう少しお前の笛を聴かせろよ。」

と言ひ、純は秋蘭の手を掴んだ。

秋蘭「し、しかし純様・・・」

そう言つて秋蘭は断ろうとした。

純「折角ここまで来たんだ。一曲だけでも頼むよ。」

秋蘭「しかし・・・」

純「ダメ・・・かな・・・？」

しかし、純の上目遣いに

秋蘭「・・・わ、分かりました／＼／」

秋蘭は顔を真っ赤にしながらそう言い、再び笛を吹いた。静かに旋律は流れ、穏やかな笛の音に、純は耳を傾けた。

純（不思議な曲だな・・・）

その曲自体は明るいのだが、どこか胸を締め付けられるような切なさが感じられた。そう思わせるほど、秋蘭の奏でる音には、美しく澄んだ透明感があつた。柔らかな月明かりを受けながら、秋蘭は旋律を奏でていった。

秋蘭は曲を吹き終えると、ゆっくりと笛から唇を離した。照れているのか、彼女は純から視線を逸らしていた。

秋蘭「ど・・・どうでしょうか？」

純「スゲー良かったぞ。感動した。」

それを聞いて

秋蘭「そ、そうですか・・・！それは良かったです！」

秋蘭は照れながらも嬉しそうな笑みで言い、また純の肩に頭を寄せた。

純「秋蘭・・・」

そして、お互いに口付けをし、抱き締め合ったのだった。

稟、益々想いが強くなるの事

稟は廊下を歩いていると、純が廊下に立っていた。

稟（今日は軍議の筈。何をしておられるのか・・・。）

そう思った稟は

稟「純様、このようなところで何をしていらつしやるのです？軍議ではないのですか？」

そう言つて尋ねた。

純「あんな退屈な会議、俺が出る必要ねーよ。」

と純は言つた。これには

稟「な・・・何たる怠慢・・・！」

と、眉間にしわを寄せた。

純「今回の軍議、姉上も同席していねーんだ。無論お前も。重要性など、たかが知れている。」

稟「つ・・・ああ言えばこう言う、そのような甘言で。」

と稟はそう言つて純に説教しようとした。すると、

純「甘言？へえ、嬉しいな。俺の言葉で稟も、少しは甘い思いをしたんだな。」
そう言つて、純は稟にくつついた。

稟「わつ、わつ、わ．．．!?純様あ。」

純「相変わらず面白ーな、お前．．．。下らねー経過報告なんかより、お前を構つて
いる方がずつと面白ーよ。」

稟「どこに触っているのですかあ、純様?!」

純「この前は俺の抱擁を受け入れたのに、今度は拒むのか?．．．憎いな。」

稟「これ以上私を呆れさせないで．．．いただきたい。」

そう言つて、稟は純の抱擁に抵抗していたが、いつも通り弱々しい抵抗だった。

純「それだよ．．．お前はいつも一生懸命だから面白ーんだよ．．．ふつ。」

稟「ふあ．．．つ!?耳につ、お、おやめ下さい。」

純「えーつ、何でー?」

稟「そ、その．．．。」

その様子を見た純は、

純「ふつ．．．その目、たまんねーな。」

純「さらに力づくで、俺の物にしようかな。」

稟を見てそう言つた。

稟「立場を利用して……そ、それは暴君の振る舞いですっ！人心が離れ……っ」
そう言ったが

純「……ふっ。」

稟「は、離れ……離れて……」

稟は益々抵抗が弱くなり、更に純に身を預けてしまう寸前で、頭の中に靄がかかったかのようにいつもの冷静な思考が奪われていく。

稟（だ……駄目です……。ちゃんとしつかり……お諫めしなければ……）

しかし、僅かに残った理性が稟の頭の中の靄を少しだけ振り払った。

純「そんな言い方しなくてもいいだろう。俺は稟の事が好きなんだ。愛してるんだ。だから、時にはからかうようなことを言うし……」

純「いつも、一緒にこうしたいと思ってるんだぞ。」

稟「はっ、は……は、う、上に立つ者が色に狂うなど、それこそ傾国のひやうんっ
!？」

純「相変わらず可愛い声だな、稟。」

稟「い、今のは違います！純様が、私の……」

純「稟の……どこを触ったんだ？」

稟「お、お、お尻、を……」

純「ふっ、よく言えたな・・・。」

そう言った純は

純「でもさ、稟？俺がお前に捉われて政務と軍務が手につかなくなる事と、お前で満
足して普段の倍の政務と軍務をこなすこと・・・どちらがこの国の為になると思う？」

純「俺の筆頭軍師であるお前の見解を聞きたいな。」

と稟に尋ねた。

稟「ずるい、です・・・そのような聞き方。」

稟はそう言って純の顔を見上げた。その目は、いつもの凜々しい参謀の目ではなく、
どこか恍惚に満ちた蕩けた目だった。

純「ふっ、お前のその顔が一番好きだな・・・そうやってどこか惚けた状態で俺を見
上げてくる目。」

稟「そ・・・そんな事は・・・。」

純「無いと言い切れるか？」

稟「・・・恐ろしいお方です、純様は。」

純「・・・恐ろしいのが気持ちいいんだろ？」

稟「・・・。」

純「素直になりな、稟。そうすれば、もつと幸せになれる。俺に身を委ねれば良いん

だぞ。」

そう言つて、純は稟の顔に近付いていった。

稟「だ……駄目……。」

しかし稟は目を背け抵抗しようとしたが、目が離せなくなり、それどころか純の背中に腕を回していた。

そして

純「んっ……。」

稟「んっ……。」

口付けをしたのだった。

稟（もう……駄目……。純様……私をもっと……もっと求めて下さい……。）
すると、稟は更に密着し、背中に回して腕を強く抱き締め、催促するかのようになだやかな動きをした。

それに純は、更に稟を強く抱き締め、彼女の想いに応えたのだった。

そして、互いに唇を離れた後、稟は純の手を取って自身の頬に添え

稟「純様……。ああ……純様……。」

と恍惚した顔を浮かべながら言った。それを見た純はすぐに稟と一緒に部屋に連れて行つたのであった。

楼杏の悩み

楼杏の屋敷前

純「洛陽時代から思っていたが、質素な屋敷を取るんだな……。」

純「まあ、これが楼杏なんだけどな……。俺達曹家の屋敷だと、楼杏程ではなかつたけど見た目慎まやかだったし、俺の進言で少し防衛機能を兼ねた屋敷だったんだけどな……。」

そんな事を思いながら屋敷の使用人に取り次いで貰い、入ったのだった。

楼杏「純さん！」

純「楼杏。」

そう言い、互いに抱き締め合い、口付けをした。

楼杏「何の用かしら？」

純「練兵の帰りに少し立ち寄った。非番に関わらず、済まないな。」

楼杏「構わないわ。わざわざありがとう。」

そして

楼杏「誰か！」

使用人「殿、お呼びですか？」

楼杏は使用人を呼んで

楼杏「酒と肴を用意してくれないかしら。純さんと酒を酌み交わすの。」

と言った。しかし

使用人「それが・・・」

楼杏「どうしたのかしら？」

使用人「今の俸禄は、官渡と河北四州の平定で戦死した兵の子供の援助に……。俸

禄は暫く来ず、酒や肴をかうお金がありません。」

と使用人は言った。

楼杏「ならば・・・」

すると、楼杏はある箆笥から衣服を取って

楼杏「この衣服を質に入れて、酒と肴に交換すれば良いわ。」

と言った。

使用人「しかし・・・」

楼杏「行きなさい。」

そして、使用人は衣服を持って質に入れ、酒と肴を買った。

楼杏「どうぞ。」

純「・・・楼杏。」

楼杏「どうしたのかしら？」

純「急な来訪であつたにも関わらず、自身の衣服を酒と肴に換えてまで俺をもてなしてくれるとは、心を打たれた。お前のその細やかな気遣いに一献、捧げよう。」

楼杏「そんな、大袈裟よ。あなたは主、私は臣下。臣下が、主をもてなすのは当然。私は、当たり前な事をしたまですよ。」

楼杏「私があなたに従つたのは、昔からの仲だけではないわ。その武勇と軍才で、水に苦しむ人々を助けるのを協力しようと思つたからよ。」

その言葉に

純「皇甫義真はやはり皇甫義真。大義に徹し、些かも揺るぎないと褒めた。」

楼杏「ふふつ、褒めすぎよ。」

そう言い、互いに一献飲んだ。

純「そういえば、あれからあの商人はこの屋敷に来たか？」

楼杏「いいえ。あの日以来、この屋敷に来てないわ。」

純「そうか……。」
すると

純「楼杏、済まなかったな。」

と純は楼杏に謝罪した。

楼杏「えっ!？」

これには、楼杏は驚いた。

純「あの日、感情に任せてあの商人に怒鳴ってしまつて。賄賂を断るにしたつて、アイツが優秀な商人なら、あんな言い方はマズかつたなつて……」

楼杏「別に構わないわよ。曖昧な態度を見せたら、ずつと誤解されるもの。」

楼杏「現に、最初に賄賂を送つてこられた時、私は黙つて、あの商人を突き返した。だけど、その意味を完全に誤解していた。」

純「ああ。賄賂の額が不足していたつて勘違いしてたな。」

楼杏「ふふつ、だからあれで良いの。私こそ、あの日純さんにつまらないものを見せまして、申し訳なかつたわ。」

楼杏「それに、あなたがあんなに怒る姿を見たの、初めてだわ。今回私の屋敷に訪問したのは、その為ね。」

純「ああ。本当に済まなかった。けど、お前とは洛陽時代から知っている。だから、あ

の態度には腹が立つて……」

純「お前が侮辱された気がしたんだ……。それで遂……する」と

楼杏「……ううん、本当に良いの。私、とても嬉しかったわ。」

楼杏は嬉しそうな表情をしながら、純の頬に手を添え

楼杏「それだけ、私の事を大切に思ってるのよね……。それが伝わって、とても嬉しかった。それと同時に、益々あなたの事を愛したわ。ありがとう。」

そう言つて

楼杏「んっ……。」

純に口付けをした。それに純も

純「楼杏……。んっ……。」

楼杏に口付けをした。そして、お互い抱き締め合い、寝台に倒れ込んだ。

純「楼杏……。」

楼杏「純さん……。」

そして、そのまま一夜を過ごしたのであつた。

霞の恋

純「さてと・・・、仕事も一段落したし、秋蘭のトコに行くか・・・。」

仕事を一段落終えた純は、秋蘭の部屋に向かって、一人廊下を歩いていた。すると、

純「おっ。」

真つ直ぐに続く廊下を、霞が歩いているのを確認した。

純「霞〜！」

霞「ん？」

純が呼ぶと、霞はキョロキョロと辺りを見回した。

霞「お。」

そして、純の姿を認めると、彼女は跳ねるようにして純の元に走ってきたのだ。

霞「純や〜ん！偶然やなく。」

純「ああ。」

霞「こんなところで、なにしてんの？どっか行くん？」

純「ああ、ちよつとな。秋蘭に呼び出されて、あいつの部屋に行くところだ。霞は？」

霞「ウチは本日の業務終了したからな。何しようかなー・・・つて。」

純「ブラブラしてるとつてどこか。」

霞「ブラブラちやうよ！・・・仕事を探してるねん。」
と言い、霞の視線はフラフラとしていた。

純「そうか・・・。まあ、そういうことにしとくか。」

霞「おおきに！純のそーいうとこ、めつちや素敵やと思うで♪」

純「・・・悪びれねーな。誉めても何も出ねーぞ。」

霞「あ、可愛くない。そーいうとこは好かんわ。」

それを聞いた純は、

純「なんでだよっ!!」

と、霞に裏拳を入れたのだった。

霞「あはは!!ノリえーなあ!!」

純「はは。そんじゃあ、俺秋蘭のトコ行くわ。」
しかし、

霞「ああつ、ちよつと待つて!!」

霞は、純の服の袖を握って止めたのだった。

純「何だ、どうした？」

霞「あんな、純は秋蘭のトコ何しに行くん？」

純「何しにって？」

霞は、

霞「楽しいことがあるんちゃうん？」

そう言つて大きな猫目を更に丸め、興味津々といった様子で、純の顔を覗き込んだ。

霞「なあなあなあ、隠さんと教えてえな。」

純「・・・お前、よっほどヒマなんだなあ。・・・まあ、一人で来て下さいって言われたから、茶か何かだろう。」

霞『『一人』で？』

純「ああ、一人だ。まあ、いつもの事だよ。」

霞『『一人』で『部屋』？』 『いつもの事』？』

純「ああ、そうだが。」

すると、

霞「はっはーん・・・。」

霞の目が、にやりと細めた。

純「何だ？」

霞「・・・それはアレやろ、ア・レ。」

と言つた。

純「……ふっ、そうかもな。」

霞「せやつてー!!純と秋蘭は、もう皆が羨ましがる程仲ええんやからー!!」

純「あはは。」

その時、

霞「……なあなあ、純。」

霞が純の耳元に近づき、囁いた。

純「ん?何だ?」

すると、

霞「あ、あのな……その……えつと……。」

いつもの霞と違って、顔を赤くして、もじもじとしながらはつきりしない。

霞「うーんと、えーつと……あの……。」

純「どうしたんだ?霞らしくねーぞ。」

と純は霞の頭をポンポンと撫でて促した。

霞「やー……せやかて、しやーないやんかー。」

純「良いから、遠慮せず言ってみな。俺と霞の仲だろ?」

そう言うと、

霞「……うん……えつと、その……笑わへん?」

と霞はしおらしく言った。

純「笑わねーよ。ほら、言ってみな。」

それを聞いた霞は、

霞「その・・・そういうのって、どんな気持ちなん？」

と、顔を赤くし、もじもじしながら尋ねた。

純「それって・・・、男女の営みか？」

それを聞いた霞は、

霞「こくん」

と頷いた。

霞「や、あのな・・・ウチ、そういうコトに、あんま免疫無いねん。」

霞「あんまっちゅーか、全然。全く。」

純「全然無い・・・ってコトは、恋をしたこともない・・・とか？」

すると、

霞「こくん」

また霞は頷いた。

純「・・・そうなんだ。」

霞「せや。ウチは元々、武官の生まれの家やんか？せやから子供の頃からずうつと、武

芸一筋でやってきてん。」

霞「何の疑問も持たんと、それを極めることだけを考えたつた。」

霞「それで氣いついた時には、軍に仕官してて・・・あれよあれよつちゆう間に、一軍を任せてもらえるようになって・・・ほんで今やから。」

純「そつか・・・。」

霞「けど、最近純を見ると、胸がかあつと熱くなるんよ。それと、一緒にいると楽しいし、ドキドキするし、他の女の子と一緒にやと、何かモヤモヤしてしまうんよ。」

純「・・・。」

霞「けど、この気持ちが本当に恋かどうかも分からん。だから純、ウチに恋をよく教えて欲しい!!」

純「俺が？」

霞「せや、お願い・・・。」

そう言つて、霞は純の服の裾を掴んで、上目遣いに見つめた。

純「じゃあさ、今度時間があるときに、少し二人つきりで過ごしてみるか。」
すると、

霞「ホンマか!! やったー♪いよつ、純すつてきー!!」

霞の表情がぱあつと明るくなった。

純「まったく、相変わらず調子良いな。」

霞「へへ。そんで、二人つきりで過ごして、そんでどうするん？」

純「それはお楽しみな。」

そう言つて、純は霞の頭を優しく撫でた。

霞「そつかー。へへ、楽しみにしてる。」

そう言つて、霞は嬉しそうな顔でぴよんぴよんと跳ねた。

純（コイツにもこんな悩みがあつたんだな・・・。）

そんなことを思っていると、

霞「・・・あ、そうや。」

ふと霞がはつと何かを思い出し、

霞「純、秋蘭に呼ばれてたんやね。」

純にそう言つた。

純「ああ、そうだったな。」

霞「ゴメンゴメン、引き止めてもて。はよ行きや！秋蘭待ちくたびれてるかもしれへんで。」

純「ああ、じゃあまたな。」

霞「うん！ウチとは次回っちゆうことで！楽しみにしてるでえ。」

純「ああ、分かった。」

霞「おーきに！ほな、またなー♪」

そう言い、純と霞は別れたのだった。

霞（これって・・・ウチは純の事・・・好き、やのかなあ・・・。せやったら、ウチメツチャ嬉しいかも！だって、初めての恋の相手が純やもん!!）

その時、霞はそう思いスキップしながら廊下を歩いていたのは内緒である。

栄華の気持ち

栄華の執務室

栄華「今日は良い天気ですわ。」

さつきまでやっていた書類の整理をある程度終えた栄華は、窓から空を見上げてそう言った。

気持ち良い陽気のお陰で、リラックスした気分になる。

栄華（少し昼寝しましょうかしら・・・。）

そう思っている

秋蘭「栄華。」

秋蘭が栄華の執務室に入ってきた。

栄華「あら、秋蘭さん。何か用ですか？」

秋蘭「用という用はないが、お前に少し聞きたい事があつてな。」

栄華「私に・・・ですか？」

そう言い、栄華は首を傾げた。すると、秋蘭は栄華の耳元へ行き

秋蘭「純様とは良い所まで行ったのか？」

と耳打ちしたのだ。

栄華「ぶっ！」

栄華「な、なななな・・・」

これには、栄華は噴きだしてしまった。その様子を見た秋蘭は

秋蘭「成程・・・。その様子だと、もう最後まで・・・」

栄華「し、秋蘭さん！そ、その・・・はしたないですわよ！」

言いかけたが、栄華は顔を真っ赤にして止めた。

秋蘭「ははは！成程、そこまで進展していたか！」

栄華「そ、それはまあ・・・。私とお兄様は、恋人関係ですし・・・」。

栄華「手を握ったり・・・肩や腰に触れたり・・・く、口付けをしたり・・・してま
すわ。」

栄華「そして最後は私の部屋の寝台か、お兄様の部屋の寝台で一緒に・・・ああ、恥
ずかしいですわ。」

そう言い、栄華の頭から湯気が出ていた。

秋蘭「成程・・・。結構良い所まで進展しているな。」

栄華「秋蘭さん……」

秋蘭「けど、お主は勿論、皆も知ってる事だが、純様は生まれてすぐに母君を亡くした。華琳様の母君が可愛がってくれたが、あの御方は、母の愛情を求めている。」

栄華「ええ、知っておりますわ。」

秋蘭「そのせいか、ああ見えて純様は寂しがり屋でもあり、甘え気質な御方だ。だから、純様を良く支えてやってくれよ。」

秋蘭「しかし、好敵手も多いから、互いに頑張ろうではないか。」

栄華「当然ですわ！」

そう言つて、栄華は秋蘭にそう言ったのだった。

そしてその夜、

栄華（うう……緊張してきましたわ。）

栄華は純の部屋の扉の前まで来ていた。

栄華（けど、迷っているわけにはいきませんわ！）

意を決した栄華は大きく息を吸った。

純「栄華か？」

栄華「……っ!?!」

その時、扉越しから純の声が聞こえた。それに栄華は一瞬混乱したが

栄華「え、えっと、お兄様、今大丈夫ですか？」
と声を掛けた。

純「良いぞ。入れ。」

そう言われ、栄華は部屋に入った。

純「こんな時間にどうした？」

栄華「そ、その、えっと・・・」

しかし栄華は、なんと言ったら良いのか分からず、言い淀んでいた。しかし、純は栄華が来た事に純粹に喜んでいいのか、機嫌が良い雰囲気を感じてきた。

それを見た栄華は、徐々に落ち着いてきた。

純「どうした？何か様子が変わるぞ。」

すると

純「えっ!？」

栄華は純に抱き付いた。

純「ど、どうしたんだ、栄華!？」

すると

栄華「スンスン。」

栄華は純の匂いを嗅いでいた。

純「栄華、何やってんだ？」

栄華「お兄様の匂いを匂ってるのですわ。」

純「お前、その為に来たのか？」

栄華「それと、お兄様に触れたくて……」

純「そ、そうか……。けど、俺臭いだろ？」

栄華「いいえ。いつもの事ですが、とても良い匂いで好きですわ。」

と言い、栄華は純の胸に益々顔を埋めた。そして

栄華「はあああ……」

時々変な声を出しながら匂いを嗅いでいた。

純「栄華……」

そう言つて、純は栄華を呼ぶと、栄華は顔を見上げた。すると、いつもの顔とは違つ

て、目はトロンと蕩け、恍惚した顔だった。

純「悪い、栄華。今日は覚悟してくれ……」

そう言つた純は

栄華「ふえ……？」

栄華を強く抱き寄せ、寝台に倒れた。そして、そのまま朝を迎えたのだった。

愛紗の気持ち

日が天高く昇った穏やかな天気の後。

純は城内にある中庭で一人、刀に手を添えた格好で静かに佇んでいた。

純「……ふう。」

息と一緒に余計な力を抜き、集中力を研ぎ澄ます。そして、目を瞑ってイメージする。純（数は……、二十人で軽く準備運動すつか。）

そして、刀を抜き、

純「っ！」

本当に今自分の周りに二十人の敵がいることを想定して、刀を振った。その動きは、周りから見れば、流麗の舞を舞っているかのような動きを見せた。

そして、最後の一人を斬り捨てたのだが、

純（次からは数増やすか……。）

といったことを思った。そして、

純「いつまでこそそそ見てんだ。出てこい。」

と声をかけた。すると

愛紗「お気づきでしたか。」

愛紗が出て来た。

愛紗「ここそそ見るつもりはありませんでした、お許しを。」

純「別に良いけど・・・。」

愛紗「純様は、剣術意外にも弓と槍、そして戟も扱えるとか。」

純「まあな。でも、刀と弓以外はそんなに得意じゃねーけどな。」

愛紗「ご謙遜を。先の反董卓連合での呂布との一騎打ちでは、私の使ってる青龍偃月

刀を基に作られた武器をいとも容易く操っていたではありませんか。」

純「そりや嬉しいな。お前に褒められるなんて。」

愛紗「いえ。それに私は憧れ、仕えてこの武を振るつてみたいと思いました。」

純「そうか。最近では、兵法も学んでいるらしいな。先の河北四州の平定の時、奇策

を巡らして敵を撃破したな。」

愛紗「兵法に関しては、風に教わっているお陰です。それにあの時は、風に授けられ

た策を実行しただけです。」

純「それは俺もだぞ。俺も、稟か風の策に従ってそれを実行してるだけだからな。」

純「そのお陰で、俺は戦場でより武を振るえる。しかし、稟はそれを才覚だと言つて

いたな。」

愛紗「才覚？ただ授けられた策を聞き、実行する事がですか？」

純「うむ。稟曰く、『万全の策があつても、それを実行できるかどうか。それを才覚ではないでしょうか。』と言つていた。」

愛紗「成程……。稟らしい発言ですね。」

純「ああ。だから、俺はそんな稟を尊敬しているよ。」

それを聞いた愛紗は

愛紗（流石純様と稟だ。互いに信頼し合っている。主従としても。恐らく、男女の關係でも、信頼し合っているのだらうな……。）

そう思いながら聞いていた。すると

純「お前の事も尊敬しているぞ、愛紗。」

と純に言われた。

愛紗「えっ？」

純「お前がいると、兵の気持ちも引き締まるし、戦でも良く兵を統率している。先の河北四州の平定では、お前の活躍も光っていた。感謝する。」

そう言つて、純は愛紗の頭を優しく撫でながら褒めた。

愛紗「い、いえ、私は大したことをしておりません。私の兵が頑張つたおかげです。」と、愛紗は顔を真っ赤にしながらそう言つた。その姿は、いつも凜々しく兵を纏め、そ

の武勇を大いに振るう関羽將軍ではなく、関羽と言う一人の少女の姿であった。

純「そうか。では、これからも頼りにしているぞ。」

愛紗「はっ!!」

すると

純「愛紗……。んちゅ……。」

愛紗「ふあっ!?!純様……。」

純は愛紗に口付けをしたのだった。はじめは驚きで身体を強ばらせたが

愛紗（ああ……。純様……。あなた様がないと、私は……。私は……。もつと……。もつと感じさせて下さい……。）

次第に力を抜き、自らも純の首に腕を回して、口付けを受け入れた。そして、お互い抱き締め合い、熱い口付けを交わした後、純の部屋に向かったのであった。

50話

一刀「皆にも負担掛けっぱなしだなあ。・・・さて。後は、何があつたかな。」

官渡の戦いで勝利した華琳は、河北四州に加え徐州に馬一門の涼州を新たに手に入れその広大な領地を支配下に置いた。

しかし、その反動で直面した緊急の課題は、兵力不足であつた。その課題解決のために、凧と沙和にはいつも以上の強行ペースで新兵の育成を任せただつたが、二人には警備隊の仕事もあるため、その疲労を一刀は心配した。しかし

凧『私達に出来ることは任せて下さい。ただ、時々で良いから、隊長も詰所に顔を出して下さい。』

沙和『なの！真桜ちゃんも、もうひと月くらい詰所に隊長が来てないってぼやいてたの。』

と言つた。

一刀（ここまで勢力が拡大したんだ。周りも警戒するわけだ。翠達馬一門がいなかったら、もっと負担が掛かっていただろうな・・・。）

そんなことを考えていると、

香風「お兄ちゃん。」

香風が一刀の服を引っ張っていた。

一刀「そつか、香風の遠征の話を聞くんだつたな。この前は栄華の護衛で并州に行つてたんだつけ？」

香風「・・・うん。凧達のお話が終わるの、待つてた。」

一刀「だつたら・・・ご飯食べながらで良い？香風もお昼、まだだよな。」

香風「それでいい。ご飯もいっしょ。」

そして、一刀は香風と一緒に食堂へ向かおうとしたその時、

霞「何やつとんねん！」

真桜「せやかて、これだけは譲られへん！」

霞と真桜の言い争いの声が聞こえた。

一刀「・・・。」

香風「・・・お兄ちゃん。」

一刀「・・・ああ、うん。放っておくわけにも、いかないかあ。」

そう言つて、一刀と香風は声のする方へ向かつたのだつた。

一刀「・・・何やつてんの？二人とも。」

真桜「ん？ああ、隊長と香風か。」

香風「ケンカ？」

霞「二人ともええ所に来た！ちよつとウチの話、聞いてくれへん？」

一刀「別に良いけど：：霞、朝の軍議で、お昼には稟と幽州の州境警備に出ると言つてなかつた？」

香風「うん。向こうで、稟が準備してた。」

霞「それにも必要な事なんや！稟の奴は待たしとつたらええ！」

一刀「え、何？そんなに大事な事なの？」
すると

霞「せや！これ、見てみ！」

霞がいつも使っている偃月刀を一刀に見せた。

香風「おー。ぴかぴか。」

一刀（そうだ。言われて見れば新しくなつてゐるような・・・。）

霞「せや。こないだの遠征で折れてもうたから、真桜に新調してもらてん！」

一刀「成程なあ。このところ遠征ばかりだし、そりや武器だつて傷むよな。」

真桜「柄も刃も材料ぜんぶ一から見直して、組み合わせ方も強度が出るように工夫しとる。姐さんが少々乱暴に使うたかて、絶対に壊れたりせえへんよ！」

一刀「この間から工房に籠もつたのは知つたけど、相変わらず器用だな。」

一刀（そういえばいつものドリル槍も自分で作ったって言ってたし、純が呂布と一騎打ちした時に使ってた偃月刀も、愛紗の青龍偃月刀をモデルに作ったらしいし、官渡では投石機も作ってたもんな。）

一刀「でも、何か問題があったの？武器がパワーアップしたなら良い事じゃない。」
香風「・・・重くなった？」

霞「んー。ちつと重うなった気はするけど、そこは不満やない。勢いも付くし、振り回した時の釣り合いも取れるしな。具合は前よりええくらいや。」

霞「こんだけ回せるようになりや、それこそ空かて飛べるかもな。」

香風「ほんと!？」

霞「え、なんや？そこ、そないに食いつくとこか？」

香風「空が飛べるの・・・だいじ。ホントに飛べる？」

霞「い、いや・・・ホンマに飛べるんかは、よう分からんけど。」

香風「・・・ざんねん。」

霞「まあそれはええ・・・ええけどな！」

一刀「・・・けど？」

霞「この龍の角が一本増えとるのはどないなっとなねん！説明してもらおか！」

一刀「・・・はあ？龍の角？」

霞「せや！せつかく愛紗と純の偃月刀と並べてエエ具合になるようにしとつたのに、台無しやないか！どないしてくれるんや！」

一刀「・・・え、そんなこだわりがあつたんだ。いつから!？」

霞「純が恋と一騎打ちしたときと、この軍に参入して、愛紗と話したときからや！ホンマおもしろい奴やで！」

霞「元々ウチも似たような武器使うてたから、ならちつと合わせてみようかって言うてやつてみたんやけど・・・」

一刀（なんだそりや。お揃いの携帯ストラップを付けて喜ぶ学生みたいだな。）

霞「こつとお気に入りやつたのに、それをなー！まだ半年も経ってへんのに、お前なー！真桜ー！」

真桜「せやかて強化したんやから、角増やさんと強そうに見えんやろ！」

霞「何が強そうにや！いじらんでも十分強いやねんから関係ないやろ！はよ直しや！」

真桜「直さへん！十倍強うなつたら、十倍強う見えんとアカンやろ！どうしてもそこ直せつちゆうんなら、牙の数を倍にさせてもらおうで！」

霞「アホかーっ！そんなん直すて言わんわ！もつと台無しやろ！」

一刀「あ・・・一つ、聞いて良い？」

霞・真「何やー!」

一刀「……それは武器としての機能に、どんな問題があるの?」

霞・真「ないで!」

一刀「……すまん何が問題なのか分からん。」

霞・真「何やて!」

香風「ごだわり、大事。」

霞「せやろー!ほら、分かる奴は分かってくれるんや。真桜、さっさと直し!」

真桜「ごだわりだけならウチかて同じや!香風はウチの事を応援してくれとんのやろ?」

香風「うー。お兄ちゃん……。」

その時

風「あー。お兄さん、こんな所でご休憩ですかー。」

稟「あのー、一刀殿。霞を見ませんでしたか……?」

稟と風がやって来た。

一刀「んー……見ての通り。」

真桜「見ての通りあるかい、誤魔化さんといて!隊長、強化の極意っちゅうもんをたっぷり教えたるさかいな……!」

霞「ならウチかて、恋との一騎打ちで純がどんだけ凄かったか、そして河北四州の平定ん時の愛紗の活躍がどんだけ凄かったかがつり聞かせたるわ！」

一刀「いやちよつと待つて！出撃は！」

稟「・・・まあ、暫くなら構いませんよ。純様は曹操殿の面会に同席してますし。」

一刀「面会？　そういえば朝廷の使者が来るとか言つてたつけ。」

風「いえ、それは先程済みまして・・・。今は趙雲さんにお会いしてますよー。」
と言つた。とまあそんなこんなで、霞達もその面会に向かつたのだつた。

玉座の間

霞「・・・おお、ホンマや。ホンマに趙雲がおる。」

燈「静かに。挨拶中よ。」

その玉座の間には、趙雲の他に嚴顔と魏延がいた。

趙雲「曹孟徳殿。先日は大変お世話になりました。」

華琳「到着の報は純と燈、そして霞から聞いていたし、こんなに早く礼状を寄越さな

くても良かったのよ。まだ旅装も解き終わっていないでしょうに。」

趙雲「無事な到着を、きちんとした形で報告したいという、桃香様の強いご意志でしたので。」

華琳「相変わらず劉備には甘いよね、趙雲。」

趙雲「周りが厳しいですから、少しくらいは。それでは・・・焰耶。」

魏延「はっ。こちらが我が主、劉玄德からの親書となります。」

そして、魏延は親書を渡した。

華琳「・・・そう。」

一刀「・・・あの副官達、見ない顔だな。」

燈「片方は嚴顔。益州州牧、劉璋殿の部下ね。恐らく劉備様が華琳様に使者を出すと
言うから、お目付役として付けられたのでしょうか。」

一刀「劉備も益州に入ったばかりだしな。そのくらいされても仕方ないか。」

一刀（というか、他州の太守と散々悪巧みしまくってた怪しい人が言うと、説得力半端ないな・・・。）

燈「もう一人は・・・確か、荊州を通っていた頃に押しかけて加わった将の筈よ。・・・

純様。」

純「確か魏延だったな。結構劉備に夢中になってたな。」

霞「せやつたなあ……」

真桜「……大将、それどのくらいや？」

純「んー。春蘭と桂花を足して二で割ったくらいかなあ。」

一刀「……うわあ、それは。」

真桜「……あかん奴やないの。」

その間、華琳は手紙の封を切り、紙に記された文に内容を目で通していく。十分な時間をかけ、劉備の手紙を読み終えた後

華琳「返事は数日中にしたためるから、今日は退がりなさい。部屋は城内に用意させているけれど……」

趙雲「お心遣い、痛み入ります。ですが急な訪問でしたし、既に城下に宿を取らせましたので……本日は、これにて。」

華琳「そう。ならば、手紙を用意したら使いを向かわせるわ。」

そして、趙雲達は悠然と礼をしてその場を後にした。すると、華琳は頭を抱えて疲れたような表情をしていた。

純「姉上、大丈夫ですか？」

華琳「ええ、いつもの頭痛だから、大丈夫よ。」

純「まあ、なんでかは察しがつきますが……」

風「おやおや。お医者様をお呼びしましょうか？」

真桜「それとも、そんな手紙やったん？」

華琳「医者結構よ。手紙は・・・興味があるなら好きに見ても構わないけれど。」

そう言つて、華琳は小さく溜息をついて、紙にしたためられたそれを純達に渡した。

純「これは・・・何というか・・・」

真桜「ホンマに何やこれ・・・」

一刀「流石の俺でも言いづらい内容だな・・・」

純「城下に宿を取つたという事は、視察のためだろうな。」

華琳「そうね。けど、別に構わないわ。見られて困る物はないし。」

純「そうですね。それより稟、霞、これから幽州だろう？早く行きな。」

霞「せやつたわー！そんじゃあ、行つて来るわ！」

稟「では純様、行つて参ります。」

純「うむ。」

そう言つて、稟と霞はその場を後にした。

華琳「・・・ふう。」

香風「華琳様、まだ頭痛い？」

一刀「だったら無理しないでよ？」

華琳「そうも言つてられないわ。」

真桜「あのよう分からんお手紙の返事をどうするかか？」

華琳「そちらも頭が痛いけれどね。先程、都の大長秋から使者が来たのよ。」

純「司隸をあげるでしたね。」

華琳「ええ。」

一刀「・・・は？」

真桜「くれるつて、はああ・・・っ!?司隸つて、あの朝廷のお膝元かいな。」

華琳「正確には、司隸の警護と維持管理の権限だけどね。」

純「まあいずれにしても、これを受ければ司隸に公然と兵を入れられるようになるな。」

一刀「そこまで権限があるなら、実質領地になるのと一緒だよなあ。」

一刀「・・・受けるの？」

華琳「勿論。反対？」

一刀「反対というか、何というか・・・」

燈「・・・人は今よりもつと足りなくなるわね。」

真桜「それに、周りからめつちや警戒されると思うんですけど。」

風「朝廷には新たな天子様がおりますが、その天子様を好き勝手にするとか、専横を

働くとか、都を陳留に移すんじゃないかとか、色々言われる可能性も出て来ますねー。」

一刀（・・・凄い。びっくりするほどメリツトがないぞ。）

一刀「流石に・・・遷都はしないよな？」

華琳「するわけ無いでしょう。守ってあげる分には構わないけれど、権力争いはあの壁の中でして欲しいわ。」

華琳「・・・あのいざこざに付き合うくらいなら、劉備の文通相手でもしていた方がいくらかマシよ。」

真桜「どんだけ都嫌いやねん、華琳様。」

純「あはは・・・。それでは姉上、俺は例の件がありますので、これにて。」

華琳「ええ、分かったわ。」

そう言つて、純はその場を後にした。

そして一刀も、自身の仕事に戻ったのであった。

51話

純の部屋

純「悪いな、手伝わせちゃって。」

栄華「良いんですの、お兄様。お兄様は、私達が遠征に出ている間に仕事全てを引き受けたのですから。」

柳琳「はい。これくらいは当然です。」

秋蘭「風達は一部北郷がやっていると見え、栄華、私に柳琳……こちらは季衣と姉者の分か。軍師達の分を除けば、ほぼ全てではありませんか。」

栄華「流石に引き受けすぎではありませんの？」

純「しよーがねーだろ。俺も本当は遠征に出たかったが、姉上にこのような雑務をさせる訳にはいかねーしな。」

秋蘭「……そうですか。」

純「それに、苦手とはいえ、この手の書類はまあ分かるしな。」

と純は述べた。純がやっている雑務を、ちようど遠征から帰ってきた秋蘭と柳琳、そ

して栄華が純の部屋にやって来て、仕事を手伝っていた。

栄華「人不足の影響、ここに極まれりですわね……。遠征部隊は、翠さんが加わったから何とかありますけど……。」

純「本当だったら楼杏を残そうか迷ったんだけど、翠の事を考えたらな……。」

栄華「そうですね……。」

柳琳「稟さんが、出自を問わない各地の人材の発掘に力を入れていっていると聞いていたから……。それが軌道に乗るまでの辛抱ですね。」

純「まあ、確かにあいつは各地を旅してたし、その辺のツテはあるだろうな。」

と純もそう言った。すると、

流琉「皆さん、お茶の用意が出来ましたよ。お仕事、少しお休みになつては如何ですか?」

栄華「あら流琉さん、気が利きますのね。」

流琉がお茶を持ってやって来た。

純「栄華、そっちの都市計画と予算案、おかしな所はあつたか?後、張三姉妹の陳留と司隸での公演の件も。」

栄華「司隸の公演って……。三人の都合、付きましたのね?」

純「まあ一刀がやってくれたんだけどな。豫州公演が終わったから、次は河北四州か

徐州だ……つて所を無理矢理にな。姉上も司隸を優先するようにと言つてたしな。」

秋蘭「はい。終わりが見えたとは言え、河北四州は落ち着いていません。……民の燻りは都の方が大きいでしょうし、張三姉妹で発散させた方が良いでしょう。」

純「そうだな。」

秋蘭「しかし、まさか司隸まで加わるとは思いませんでした。今、司隸は誰が回つているのですか？」

純「香風が行っている。元々都の回りの賊退治もしてたし、土地勘があるからと。」

栄華「嬉しい悲鳴……と言いたい所ですけど、それが本当の悲鳴になりそうで心配ですわ。」

その時

流琉「……凄いです、純様。」

と唐突に流琉が純を褒めたのだった。

柳琳「……どうしたの、流琉さん。」

流琉「いえ……純様は武人としての印象が強かったのですし、この手のものは苦手だと仰つていますが、そういつたお仕事をいとも簡単に裁いているのに驚いてしまいまして。なんだか、華琳様みたいです。」

純「……そんなことねーよ。」

流琉「いえ、そんなことはありません。」

純「政で姉上と比べたら、俺なぞ足元にも及ばねーよ。それに俺、こういうのは苦手だし。」

栄華「けれど、そう思うのも仕方ありませんわ。お兄様は、お父上である曹嵩様ご存命の時から戦の事は全て任されておりましたから。」

秋蘭「ああ。それに純様は、文官にも丁寧に接しますからな。」

純「お前らな……。」

桂花「そうです。私は、華琳様に仕える事が出来て、幸せですが、純様に仕える事になつても同じです。」

純「桂花、やめろ。入ってきたからには、益州の件だろ？」

桂花「はい、そうです。」

秋蘭「益州か……。この所、向こうの偵察も増えているのだろうか？」

桂花「ええ。間者からも、向こうも戦の準備をしてるって話が多いわね。」

桂花「益州全体でも好戦派の意見が強いそうだし、あまり気乗りしていないのは趙雲くらいではないかしら？ 彼女、話の分かる人だし。」

純「今日明日攻めてきてもおかしくねーな。つたく、姉上も大胆なことをするな。」

純「まあ、お前と風は、皆の遠征の予定を色々調整してくれてるけどな。」

桂花「はい。劉備や孫策に国境を越えられても、陳留に着くまでにこちらの戦力を集結できるようにしております。」

秋蘭「さて。では純様、私は柳琳とそろそろ出立の準備をします。申し訳ありませんが……」

純「構わねーよ。十分助かった。すまん、忙しい中。」

栄華「私はもう少し余裕がありますから、最後までお手伝いさせていただきますわ。……次は何をすれば宜しいのですか？」

流琉「でしたら、私もお手伝いします！」

純「ああ、だったら……」

そして、純達は残った仕事を片付けたのだった。

益州・諷陵

劉備「・・・はあ。」

魏延「こんな所にいらつしやったのですか、桃香様。」

劉備「焰耶ちゃん・・・！お帰りなさい、どうだった？」

魏延「はい。曹孟徳からの返事、受け取って参りました。敵顔様を成都までお送りしていたため、帰参が遅くなってしまい、申し訳ありません。」

劉備「ううん、大丈夫だよ。・・・星ちゃんは？」

魏延「城内を探しておいでです。後で来るでしょう。」

諸葛亮「それと、焰耶ちゃんと一緒に桔梗さんをお送りした時に、劉璋様から改めて曹操さんの攻略の相談をされたのですが・・・。」

劉備「え、それはこの郡の太守を任された時、お断りするって言ったよ？もちろん、曹操さんが弟の曹彰さんに命じて攻めてきたら防衛は引き受ける約束だけ・・・。」

魏延「益州を守るために必要な事だそうです。曹操相手にこちらの力を示す事が出来たなら、益州州牧の座を譲っても構わないと。」

劉備「それは・・・」

諸葛亮「それに曹操さんは、時が来たら弟の曹彰さんに全てを任せてこちらを攻めると公言していらつしやいます。勿論それは、事態の引き延ばしを提案したこちらにも非はあるのですが・・・。」

諸葛亮「・・・正直、曹操さんの力は弟の曹彰さんの活躍で既に私達が益州入りした時と比べても更に大きくなっています。司隸を勢力下に置いたという情報も入っていますし。」

魏延「司隸を・・・？あいつ、いずれは天子様もその手に収めるつもりなのでは！」

諸葛亮「それは分かりませんが、最早こちらと同盟を結ぶ利がないのは確かです。今は江南の孫策さんと連携を取り、天下を三分するしか策は無いかと。」

劉備「天下を・・・三分・・・。」

諸葛亮「ただ、和平を進めるにせよ、天下を三分にするにせよ、今の太守では立場が釣り合いません。劉璋さんの要求を呑み、益州州牧となつてから大々的に行うべきです。」

劉備「・・・。」

魏延「それに、このような州境の太守を任されたのは守るだけでなく、攻めに回る事も見越しての事でしょうし・・・。」

魏延「私が見る限り、今の曹操は周囲を守る兵は少ない。先制を掛けるには絶好の機会かと。」

劉備「え・・・焰耶ちゃん？」

劉備「私・・・出発する時、言ったよね？焰耶ちゃんには星ちゃんと一緒に、曹操さ

んの治めてる街がどれだけ平和か見てきて欲しいって……」

魏延「それは承知してはいますが、私は武人です。私の仕事は戦う事であって、街作りや、酔った巖顔様のお相手をする事ではありません。」

魏延「そのような事は、朱里様や文官の皆様になんか任せておけば宜しいかと。」

劉備「焰耶ちゃん……。」

魏延「曹操攻め、桃香様がお嫌と言うなら、私の独断という事にしていただいて結構です！曹操を倒した後、私を処断して下さいな！」

劉備「そ……そんなの駄目だよ！どうして私の夢のために、焰耶ちゃん達にそんな思いをさせなきゃいけないの!?!」

魏延「そのお気持ちがあるからこそ、我々は桃香様のために働けるのです。桃香様の理想の礎となるなら、本望。」

劉備「益州までの旅の途中でも言ったでしょ？皆が一緒じゃないと意味がないんだって……話し合う以外、他に良い方法はないよね、朱里ちゃん。」

諸葛亮「……申し訳ありません、桃香様。」

諸葛亮「私達には……徐州にいた頃にも増して、全てが足りないのです。その中から出来る事を見つけ、選んでいくしか……」

諸葛亮「……ですから、どうかご決断を。」

劉備「……。」

諸葛亮「桃香様。」

魏延「桃香様。」

劉備「私は……。」

そして、劉備はある命令を下したのであった。

5 2 話

真桜からある知らせを持って来た一刀は、華琳のいる玉座の間に行った。その道中

純「一刀？」

一刀「純！ちようど良い所に！」

純に会った。

純「どうした？」

一刀「実は・・・」

一刀は、純に真桜からの知らせを耳元で伝えた。

純「・・・分かった。姉上の元に行こう。」

一刀「ああ！」

そして

純「姉上、宜しいですか？」

しかし、そこにいたのは華琳だけでは無く、桂花もいた。しかも、情事をしている真つ最中だった。

華琳「純、どうしたの？一刀も一緒だけど？」

純「……はあ。」

桂花「んあ、華琳、様あ……。」

一刀「……いや、何やってんだ、お前ら。」

華琳「ふふっ。桂花がどうしてもここで行きたいと言うからさせてあげていたのよ。どう？桂花。」

と華琳は桂花に尋ね、その後続きを促した。

桂花「純様？北郷？……って、純様あ!?北郷!？」

純「姉上、お取り込み中大変申し訳ございません。ご報告があります。」

華琳「良いわよ。桂花も、ちゃんと聞いておくのよ。」

桂花「ふあい……。」

純「劉備が戦の準備をしているとの情報が入りました。狙いは十中八九、こちらだと
思います。」

華琳「そう。ふふっ、釣れたのは、劉備か。」

華琳「さ、桂花。あなたも服を着なさい。」

桂花「そ、そんな……華琳様あ、これだけでは、私……」

華琳「ふふっ。足りないのなら、その怒りと苛立ち、全て劉備に向けるといいわ。」

桂花「……はい。分かりました。」

華琳「良い子ね。この戦が終わったたら、今度こそたつぷりと可愛がつてあげましょう。今日の不満など、全て吹き飛んでしまいうくらいに……ね。」

桂花「あ……本当、ですか？」

華琳「ええ、本当よ。」

桂花「はいっ！」

一刀「桂花……。」

すると

桂花「……ッ！」

桂花は一刀の声を聞くと、キツと睨みつけた。

華琳「あらあら。桂花ったら、やる気十分ね。」

華琳「……さて、純。例の件は終わったかしら？」

純「既に完成しております。俺の予想だと、間違はなくそこに来るかと。」

華琳「なら良いわ。純、あなたに全て任せるわ。劉備を撃破しなさい。」

純「御意！ではすぐに出陣します！」

そう言つて、純は玉座を後にした。

一刀「華琳、例の件つて？」

華琳「出城の改修よ。劉備が通るであろう出城に純は予想して改修したのよ。」

一刀「そうだったんだ……。」

一刀（いつの間にそんな準備を……。）

華琳「一刀、あなたもすぐに準備しなさい。皆が集まったら、純の援軍に向かうわよ。」

一刀「あ、ああ！」

そして、一刀も準備を始めたのだった。その後、劉備達は純が改修した出城に向かっているとの情報が入り、純は二万の黄鬚隊を率いてその出城に入ったのであった。

劉備軍

劉備「そう。曹操さんは曹彰さんを近くの出城に移させたんだね。」

諸葛亮「はい。そちらに自身の戦力を集中させているようです。」

鳳統「陳留を取るには、その出城を落とさなければなりません。まずは曹彰さんがいる出城を落としましょう。」

劉備「分かった。その出城に向かって進軍しよ。」

鳳統「承知しました。」

星「しかし・・・曹彰率いる軍は全て精銳揃い。落とすのに苦労するな。」

鳳統「しかし、曹操さんの軍は曹操さんが頂点では無く、弟の曹彰さんが実質頂点に立っております。曹彰さんを討てば、敵は牙を失い、我らの勝利は確実でしょう。」

諸葛亮「また、曹操さんはこの出城に曹彰さんを送りましたが、曹彰さんは攻めはせず守りに徹して積極的に攻めないはずです。しかし、我らはここまで来た勢いがあります。この勢いに任せて、一気に攻めましょう。」

劉備「うん・・・。」

星「桃香様、如何なさいましたか？」

劉備「ううん、何でもない。」

劉備（どうしてこうなっちゃったのかな・・・。話し合いという手段があるのに・・・。）
その時、劉備はそう心の中で思っていたのだった。

出城

純「来たか・・・。」

愛紗「かなりの大軍だな・・・。」

風「報告によると、凡そ五万との事ですー。」

純「そうか・・・。」

黄鬚隊兵士A「曹彰様！劉備が出て来ました！」

純「分かった！」

風「純様ー。気を付けて下さいですよー。」

純「うむ。では、行つて来る！愛紗、来い！」

愛紗「はっ！」

そう言つて、純は愛紗を連れて城をでた。

純「よく来たな、劉備。ちゃんと姉上の寝首を掻きに来たところは褒めてやろう。・・・

ようやくこの時代の流儀が理解できたようだな？」

劉備「曹彰さん、あなたの姉である曹操さんのやり方は、間違つてます！」

純「・・・何を言うかと思えば。」

愛紗「・・・。」

劉備「そうやつて、力で国を侵略して、人を沢山殺して・・・」

劉備「それで本当の平和が来ると思つてるんですか？」

純「本当の平和・・・かあ。」

愛紗「……。」

劉備「そんな、力が物を言う時代は……黄巾党のあの時に終わらせるべきだったんです！」

純「なら、どうしてお前は反董卓連合に参加したんだ？あれこそ、麗羽達諸侯が力で董卓をねじ伏せようとした……ただの茶番劇だったじゃねーか。」

劉備「それは都の人達が困っていたからです！」

純「都の民に炊き出しをしたいだけなら、別に軍を率いる必要はなかっただろうが。それこそ、自分達だけで都に行けば良かったんだよ。」

劉備「けど、それだけじゃ……意味が無いはずですよ！もつと根本的を何とかしないと！だから私達は、連合に参加して……」

純「それこそ、お前の大嫌いな武力を使つてな。」

劉備「……っ！」

純「官は腐り、朝廷も力を失っている。けれど、いくら俺でも分かる。無駄なもの常にある。それを正し、打ち壊すためには……名と力が必要なんだよ。」

純「今、お前が背負っているような……強く大きな力と、勇名がな。」

劉備「私の背中にあるのは、力なんかじゃない。志を同じくした……仲間です。」

純「同じ事だ。志を貫くためには力が必要だ。その力で全ての不条理と戦い、打ち壊

し、その残ったものからでなければ平和は生まれねー。」

劉備「違います！ちゃんと話し合えば、戦わなくなつて理解し合う事は出来るんです！」

純「・・・じゃあ、何でお前は兵を率いてここに来たんだよ・・・。」

劉備「え・・・。」

純「連合の時でも、虎牢関や汜水関に使者を送ろうとは言わなかつたよな。」

劉備「・・・っ！」

純「姉上が自分の代わりに俺に攻め入ると言つていたから、話す必要はねーと見たんだらう？」

劉備「そ、それは・・・。」

純「力とはそういうもんだ。相手が拳を握つていれば、怖くなつて殴り返そうと思つてしまう。」

純「殴られるかも、殴られるだらう、そして・・・殴られる前に、殴つてしまえ・・・とな。」

純「だから、俺は姉上に代わつて先に拳を示す。殴つて、殴つて、殴り抜いて・・・降つた相手を、姉上は慈しむ。姉上に従えば、もう殴られることは無いと教え込む。」

劉備「そんな、無茶苦茶な・・・！そこまでずつと戦い続ける気ですか！」

純「そうだ。幼い頃、姉上とそう誓った。」

劉備「！」

純「話し合いで妥協できる程度の理想など、理想とは言わねー。……城の一つもくれば良いとか、お前の理想の片手間で済ませられる条件だったんだろう。」

劉備「そ、それは……！」

一方、純と劉備の舌戦を横で聞いていた愛紗は

愛紗（あいつらも軍を動かしているというのに、何故自分達が正しいと言い切れるんだ。私はああいう輩は苦手だ。何せ、自分達が絶対に正しいと思ひ込んでいるからな……。理想を抱くのは否定せぬが、矛盾も理解せねば。）

と思っていた。

純「けれど、俺と姉上の理想はお前の片手間で済まねーぞ。俺はどうあれ、お前を叩き潰す。お前の大嫌いな、力と兵と命をぶつけて……。」

純「お前が正しいと思うなら、今こそ俺を叩き潰し、その勢いで陳留を攻め落とせ。その時は、姉上はお前の前に膝を折る事だろう。首を取るなりお前の理想に従わせるなり、好きにすれば良い。」

劉備「この兵力差で……曹彰さんは本当に勝てると思ってるんですか？」

純「ふっ……負ける戦はしねー主義なんだよ、俺は。」

劉備「曹彰さん。もしここで降参してくれたら・・・曹操さんの国は、曹操さんに良せても良い、そう思っているんです。だから・・・降参して下さい。」

愛紗（何言ってるのだこの者は・・・？）

純「・・・ほう。平和が一番と言いながら、兵力を盾にこちらを恫喝するつもりか？」

劉備「そ、そういうワケじゃ・・・っ！」

純「力づくなのは嫌いじゃねーぞ。・・・けれど、そんな話は俺に膝を折らせてからにしな。」

劉備「どうしても・・・戦わないとダメですか？」

純「つたりめーだろうが。俺が納得しねーんだよ。そうしなければ、俺は明日にでもお前を裏切つて、全力でお前の城だけでなく、益州全域に攻め入つてやる。それでも良いんなら、お前のしたいようにしな。」

劉備「・・・分かりました。戦いたくはないけれど、私は貴方を叩き潰します。それで・・・納得してくれるんですよね？」

純「ああ、それで良いぜ。愛紗、行くぞ。」

愛紗「はっ。」

そして、舌戦は終わり、それぞれの陣に戻った。

風「お帰りなさいませー、純様。」

純「うむ。しかし、劉備軍は実に意気盛んだな。先程の舌戦で兵の様子を少し見ても、全く疲れを見せていない。」

愛紗「では、私が精兵を率いて、決死の一戦をしてきます！」

純「良いぞ！流石愛紗！その勇気を褒めてやろう！」

純「どうだ、戦いに行くか？」

黄鬚隊将「「戦います!!!」」

黄鬚隊将A「しかし曹彰様、敵には勢いがあります。兵法では、守って戦わぬのが上策。氣勢が衰えるのを待ちましょう。」

純「お前の言う事は尤もだ。されど兵法にそうあるなら、敵も同様に考えるはずだ。」

純「敵軍の隊列をしかと見ろ。正面は整然としているが、陣の中には隙間がある。向こうは、少数である俺達を甘く見てる。」

純「だから勝機があるのだ。不意を突いて一気に攻めれば勝てる！」

愛紗「成程……。」

純「愛紗！」

愛紗「ここに！」

純「下にいるのは、劉備の義理の妹である猛将張飛だ。」

純「あの者は、反董卓連合で見たから知つてと思うが、見た目とは裏腹に万夫不当

の猛者だ。お前に五百の精兵を与えたら、城を出て奴と干戈を交えるか？」

それを言われて

愛紗「やります！」

と愛紗はやる気十分な顔で答えた。

純「流石だ！太鼓を鳴らし、お前に威勢を付けてやるぞ！」

それを聞いた純は、そう言つて愛紗の肩を叩いた。

愛紗「感謝します！」

そう言つて、愛紗はその場を後にした。

黄鬚隊将A「曹彰様。張飛は五千の兵馬を率いています。たった五百の兵で、関羽殿

を戦わせては、行つたきり戻つては来られません。」

純「構わねー。行つたきりにさせるのが、はじめから狙いだ。」

その将に、純はそう答え

黄鬚隊将B「どういう意味だ？」

黄鬚隊将C「つまり玉砕か？」

風「・・・。」

風以外の周りの者は動揺したのだった。

純「太鼓を鳴らせ！」

黄鬚隊兵士B「はっ！」

そして、太鼓を鳴らし

愛紗「皆の者、付いて来い！行くぞ！」

「「「おぉーっ!!!」」

愛紗は五百の兵を率いて突撃した。

劉備軍本陣

諸葛亮「舌戦では曹彰さんはああ言いましたが、恐らく我が軍を攻めてきません。我らは数を活かして攻めるべきです。」

劉備「うん……。」

その時

劉備軍兵士A「大変です!!敵が城から出て参りました!!」
城から兵が出て来たとの知らせが入った。

諸葛亮「はわわ!そ、そんな……!?!」

趙雲「落ち着け、朱里！数は！！誰が出撃した！！」

劉備軍兵士A「数は五百！！旗印は関！！関羽です！！」

これには、本陣は動揺したのだった。

前線

愛紗「行けー！！徐州での恩を忘れた不義の軍を叩き潰すのだ！！」

愛紗は五百の兵を巧みに操り、劉備軍の前線を崩していた。その攻撃に、

劉備軍兵士B「うわーっ！！」

劉備軍兵士C「た、助けてくれーっ！！」

劉備軍は混乱の渦と化した。

愛紗「うおー！！」

劉備軍兵士D「ギャーッ！！」

劉備軍兵士E「な、何て強さだ！！に、逃げろーっ！！」

愛紗「よし、かなり混乱しているな・・・。」

その時、

張飛「待つのだ!! 鈴々が相手するのだ!!」

張飛が愛紗に声を掛けた。

愛紗「・・・良いだろう、覚悟せよ!!」

張飛「行くのだ!!」

そして、愛紗と張飛の一騎打ちが始まった。両者は正面からぶつかり、二人の武器が、火花と金属音を周囲にまき散らした。

ガギン! ガギン! ガギン!

両者の対決は、最初は互角で進んだが、時間が経つと、

愛紗「ふっ、中々やるな!!」

張飛「はあ、はあ、そっちもなのだ!!」

張飛の方が息切れしてきた。

愛紗「しかし、お前の体力は限界の様だな。」

張飛「はあ、はあ、そんなこと無いのだ!!」

愛紗「強がるのはよせ!! 命取りだぞ!! はあっ!!」

ガギン! ガギン! ガギン!

そして、

張飛「あっ!？」

張飛のバランスが崩れたのを愛紗は見逃さず、

愛紗「貫ったあ!!」

愛紗は青龍偃月刀を振り下ろそうとした。その時、

ガチン!

愛・張「!？」

趙雲「大丈夫か、鈴々!!」

張飛「星っ!？」

趙雲が間に入り、龍牙で愛紗の一撃を受け止めた。

趙雲「鈴々、動けるか？」

張飛「う、うん。けど、もう限界なのだ・・・。」

趙雲「ここは私に任せろ!!」

張飛「けど、星!!」

趙雲「鈴々!!」

張飛「・・・分かったのだ、星。」

そう言い、張飛は下がった。

趙雲「ここからは私が相手だ、関羽。連戦になるが、大丈夫か？」

愛紗「まだまだ行けるぞ、私は！」

趙雲「そうか……。なら、参るっ!!」

そして、両者は激突したが

愛紗（流石に撤退したいところだが、厳しいな……。このままでは全滅だ……。）
愛紗は、今の状況を見て玉砕すると思っていた。

出城

黄鬚隊将A「曹彰様、すぐに撤退させて下さい！」

黄鬚隊将B「曹彰様、撤退させて下さい！」

黄鬚隊将A「関羽殿が率いていた五百の兵の内、残りは百名程です！」

純「良いぞ、まだ殺せる！もつと殺せ！」

しかし、純はそう言っていた。

黄鬚隊将A「関羽殿の兵は、じき全滅してしまいます！」

純「良いぞ、さあ殺せ！」

そう言つて

純「下の様子をよく見ろ。」

と皆に言つた。

純「僅か五百の兵で、五千の敵軍を大いに疲れさせている。敵の最前線は乱れているぞ。」

純「素晴らしい！良いか命令だ！」

「「はい、曹彰様!!」」

純「俺は勇士十名を引き連れて、愛紗と兵達を救う!!それまで、風の命令に従え!!」
と言い

黄鬚隊将A「曹彰様!!それは無謀です!!曹彰様!!」

純は制止を振り切つて突撃した。

最前線

愛紗「お主、中々やるな!!」

趙雲「そちらもな!!」

一方最前線では、愛紗と趙雲が壮絶な一騎打ちをしていた。

趙雲（しかし、何て強さだ・・・!! 私では到底勝てぬ。しかし、五百の兵も今残り少ない・・・。ここで此奴を討ち取れたら・・・。）

その時

「「わあーっ!!!」」

愛紗「何だ?」

趙雲「出城の方面からだ・・・?」

愛紗の後方、つまり出城の方面の様子が変わったのだった。すると

純「愛紗を救うぞ!!俺に続けーっ!!」

純が先頭に立って、突撃してきたのだった。

劉備軍兵士F「う、うわーっ!!曹彰だー!!」

劉備軍兵士G「曹彰が来たぞー!!」

愛紗「じ、純様!」

趙雲（見たところ十騎程しかいないぞ! たったそれだけで、あの包囲網を突破したのか!?)

この突撃に、愛紗は勿論だが、趙雲に至っては絶句してしまったのだった。

純「愛紗!!」

愛紗「純様!!」

純「急げ!!撤退するぞ!!」

愛紗「はっ!!」

そう言い、愛紗も馬に乗り、純と共に撤退した。しかし

純「マズいな・・・」

愛紗「純様？」

純「まだ兵が残っている。このままではあいつらは死んでしまう。俺はあの兵を救いに行く!!」

まだ兵が残っているのに気付いた純は、一度戻ると言った。

愛紗「しかし純様!?敵兵のど真ん中ですよ!？」

純「ソレがどうした!!俺にとって、あいつらは共に戦ってきた同志だ!!見捨てるわけにはいかねーよ!!」

そう言い、純は敵陣に突撃した。

純「うおーっ!!」

劉備軍兵士H「うわーっ!!曹彰だー!!」

劉備軍兵士I「『黄鬚』曹彰がまた来たぞー!!」

そして

純「お前ら、大丈夫か!!」

黄鬚隊兵士「曹彰様!!ありがとうございます!!」

純「よし、撤退するぞ!!」

黄鬚隊兵士「はっ!!」

純は兵士全員を助け、出城に撤退した。

そして、出城に入ると、

愛紗「純様ーっ!!」

愛紗が純に抱き付いてきたのだった。

純「愛紗!」

愛紗「純様、良かったです!!」

と愛紗は泣きながらそう答えた。すると、

愛紗「あっ……。」

純「心配掛けたな……。」

そう言い、愛紗の頭を撫でたのだった。

風「純様……。」

純「風か……。済まなかったな、無理を押し切ってしまった……。」

風「いえ・・・無事で何よりですよー。」

と風も笑顔でそう答えた。

純「風、劉備軍の前線は？」

風「愛紗ちゃんも純様の活躍で、崩壊してますよー。恐らくですが、劉備軍の士気は最悪の状態かとー。」

純「そうか・・・。」
すると

黄鬚隊兵士「曹彰様はまさに天上のお方です!!」

と兵士達は皆跪いて拱手し、頭を下げたのだった。

純「このまま姉上達が来るまで守り切るぞ!!」

「はっ!!」

これにより、黄鬚隊の結束力はまた更に強くなったのであった。

5 3 話

城の攻防戦が始まってから約一ヶ月が経過した。劉備軍は、最初の愛紗達の奇襲で混乱し、士気も落ちたが何とか持ち直し、城攻めを開始した。

張飛・趙雲一行

張飛「星―！朱里と雛里から作戦の指示を貰って来たのだ！」

趙雲「朱里と雛里は何と？」

張飛「この紙に書いて貰って来たのだ！」

そう言つて、張飛は趙雲に紙を渡した。

趙雲「何々・・・？・・・成程、軍師殿も可愛い顔をして、中々にお人が悪い。」

張飛「どうするのだ？」

趙雲「まずはな・・・」

出城

愛紗「急いで組み立てろ！敵は待つてはくれぬぞ！」

黄鬚隊兵士A「はっ！」

一方の純達も、真桜から託された秘密兵器の組み立てをしていた。

黄鬚隊兵士B「しかし関羽様、関羽様自ら手伝わなくても……」

愛紗「気にするな。私も好きでやっているのだ。それに、私達は同志ではないか。そこにいる純様も同様だぞ。」

そう言つて指を指すと

純「ほら、材料！」

黄鬚隊兵士C「はいっ！」

純「これはどこに？」

黄鬚隊兵士D「こちらです、曹彰様！」

純も作業に入つて手伝っていた。

黄鬚隊兵士B「曹彰様……」

愛紗「ほら、我らも続けるぞ！」

黄鬚隊兵士B「はっ！」

張飛・趙雲一行

趙雲「さて、軍師殿の指示だと、確かこの辺りに使われなくなった用水路が……」

張飛「星！あつたのだ！」

趙雲「よし。誰か、灯りを持ってこい！我々はここから突入する！」

そして、趙雲達は諸葛亮と鳳統の指示に従って用水路に入った。

張飛「……真つ暗なのだ。もう誰も使っていないのかな？」

趙雲「こんな所に用水路がある事自体、忘れ去られているのだろう。軍師殿も資料がなければ気付かなかつたというからな。」

張飛「ふうん……」

その時

張飛「……ん？」

趙雲「どうした、鈴々？」

張飛が何かに気付いた。

張飛「何か切れたような……これは……糸？」

趙雲「何？」

すると、用水路が一気に崩れ始めた。

趙雲「……しまった、罨か！」

張飛「撤退！撤退なのだーっ！」

これにより、損害を多く出したのだった。

劉備軍

魏延「撃て、撃てえっ！狙いは適当で構わん！とりあえず、城の中に届けば良いっ！」

張飛「え、焰耶ああ……」

魏延「ど、どうしたんだ？」

趙雲「けほっ！連中にしてやられた。抜け穴を封鎖しおったわ。そちらはどうだ？」

魏延「こちらもあり効果は出ていない。……あれを見てくれ。」

魏延にそう言われて城を見て見ると

趙雲「何だ、あの丸太は。……上から落ちてくるのか？」

魏延「ああ。そうなのだが……」

張飛「また昇つていくのだ……」。

丸太が下に落ちては城壁の上に昇つていった。

魏延「どうも向こうには、ああいう絡繰に詳しい輩がいるらしい。昇る場所を変えても城壁の上を動かせる上、何度も落ちてくるから、どうにもならん。」

趙雲「あれに兵を掴まらせてみては？」

魏延「やってみたが昇る間は良い的になるだけだった。」

趙雲「なら、あの邪魔な綱を切るしかないか……」

魏延「それもやったが、狙う間はずつと的だ。それに、随分と丈夫な綱を使っているから、火矢が当たっても効果が無い。」

趙雲「そうか……」。

華琳「皆、急ぎなさい！一刻も早く、純のいる出城に到着するのよ！」

春蘭「はいっ、華琳様！」

華命「はいっす！」

一刀「しかし華琳、少し急ぎすぎだ！これじゃ、到着する頃には兵士が疲れ切っちゃうよ！」

秋蘭「北郷の言う通りです！このままでは、足手まといになるだけです！」

柳琳「お姉様！北郷さんと秋蘭さんの言う通りです！」

栄華「お姉様！ここは落ち着いて下さいまし！」

華琳「けど、このままでは純が！」

一刀「まだ純が死んだわけじゃない！今ここで焦って無理に急がせて、到着して俺達が負けたら馬鹿げてるぞ！」

しかし

華琳「馬鹿で結構！それは私にとって褒め言葉だわ！」

華琳は焦るあまり冷静さを欠き、一刀達の言葉に耳を傾けなかった。

華琳「純にもしもの事があれば、私は……」

それに一刀は

パシン

華琳「・・・っ！」

秋蘭「っ!？」

春蘭「ほ、北郷!？」

華命「か、一刀っち・・・!？」

柳琳「一刀さん・・・!？」

栄華「北郷さん・・・!？」

華琳の頬を平手打ちしたのだ。

一刀「それが馬鹿って言ってるんだよ！」

華琳「かず・・・と・・・?」

一刀「この一戦で純は負けたという知らせが届いたか!死んだという知らせが届いたか!」

一刀「まだ来てないだろ!・・・まだ純は負けてもいないし、死んでもいない!」

一刀「それとも、天下の曹孟徳は弟の曹子文の実力をその程度にしか見ていなかったのか!」

華琳「・・・っ!」

一刀「純は『黄鬚』と呼ばれ、あの『飛將軍』呂布にも勝った天下一の猛将であり、華琳以上の軍才を持っているんだろ！その弟に対する信頼もその程度なのか！」

華琳「……。」

一刀「大丈夫。純は、必ず持ち堪えてくれる。それまでに俺達が間に合えば、こつちの勝ちだよ。」

華琳「……一刀。」

秋蘭「北郷の言う通りです。純様は、この程度では死にません。」

霞「せや！なんとって、純は『黄鬚』と呼ばれし天下一の猛将やからな！」

稟「純様は簡単には死にません。なんとって、私の主ですから。」

桂花「華琳様！」

それを聞いた華琳は

華琳「ふふつ……そうね。」

と一言言った。

一刀「少しは落ち着いた？」

華琳「……ええ。焦るあまり、冷静さを無くしていたようね。」

華琳「さあ皆、行くわよ！」

全員「「はっ!!!」」

そして、進軍を再開したのだった。

出城

純「矢を持って！」

黄鬚隊兵士「はっ!!!」

純「丸太を落とせっ！」

ドーン

劉備軍兵士「うわぁーっ!!!」

純「今度は一斉に引き上げろ！」

純「弓兵、構え！丸太に寄ってきた兵を残らず打ち殺せ！」

純「撃てーっ！」

そして純も

純「ふっ！」

自ら弓を持ち、矢を放った。それにより、劉備軍は更に甚大な被害を受けたのだった。

劉備軍

趙雲「やれやれ。これでは武将というより工兵だな。」

諸葛亮「こちらもそれほど兵が多いわけでもありません。兵糧も残り少なくなつてますし、勝つための手段は一つでも多く打っておかないと・・・」

趙雲「そうだな。しかし、ここまで粘るとは思わなかつたな。」

鳳統「はい。私もここまで敵が粘るとは思いもしませんでした。短期決戦で勝負を付けるつもりが、完全に狂つてしまいました。」

趙雲「流石の軍師殿も、これは予想外だったというわけか。」

諸葛亮「はい。お恥ずかしながら・・・。」

趙雲「ふむ・・・。兵の士気も我らは下がっているのに対し、向こうは更に上がり続けていますな。」

劉備軍も、純の異常な粘りに閉口し、焦りの感情が溜まっていた。

出城

純「さあ。」

黄鬚隊兵士E「ありがとうございます。」

純「すまん、連日の戦闘で苦勞を掛けるな。」

黄鬚隊兵士F「今さら何を言いますか、曹彰様。」

純「そうか。さあ、食え。」

黄鬚隊兵士G「はっ、ありがとうございます。」

黄鬚隊兵士H「感謝します。」

純「ほら、水だ。」

黄鬚隊兵士I「ありがとうございます。」

その頃、純は兵士達と共に食事をしていた。

その時

純「何だ、この音は？」

遙か彼方から破裂音が木霊した。すると

燈「純様。鎗矢をお願い致します。」

燈の声が聞こえた。

愛紗「純様、今の音は……って、燈!?!」

風「おやおや。燈さんではないですかー。」

燈「無事で何よりだわ。それより純様。先程のは、華琳様達が上げた我々への反撃の

狼煙。こちらにも、相応の返答を。」

愛紗「華琳殿が!?!という事は……!?!」

純「……分かった。鎗矢を放て!」

黄鬚隊兵士「はっ!!」

そう言い、鎗矢を放った。すると

愛紗「純様!地平の向こうに大量の兵が!」

兵らしき集団が現れた。

風「さっきの鎗矢が反撃の合図だとすれば……」

風「旗印は、紫の旗色の曹を中心に、夏侯、楽、許、郭……それに紺碧の張旗に馬

旗。みんな、お味方ですねー。」

これには

愛紗「何と……!?!華琳殿が救援に来るまでまだ時間が掛かるはずだ!?!」

純「稟か……。」

愛紗は驚いたが、純はどうして早く救援が来たのか察したのだった。

曹操軍

華琳「間に合ったわね!!」

一刀「そのようだね!!」

霞「うっしや!!」

稟「急いだ甲斐がありました。」

星「そうだな。」

霞「全くや。稟もええ道選んでくれたからやで!」

華琳「そうね。郭嘉、ご苦労だったわね。」

稟「当然のことをしたままでです。それに、礼ならこの戦いに勝ってから言っ
て下さい。」

霞「なんや、つまらんやつぢやなあ……。ま、ええわ。この戦いに勝ったら、一杯

奢つたる！」

稟「はい。楽しみにしていますよ。」

華琳「ふふ。霞、程々にね。」

一刀「はは!!」

季衣「華琳様！春蘭様！城の旗は健在ですよ！純様達はご無事です！」

春蘭「当たり前だ！我らの純様だぞ、そう簡単に負けるはずがあるまい！」

華琳「そうよ、季衣。純は、私が最も信頼する弟なのよ。」

季衣「はいっ！」

春蘭「だが窮地であることには変わりない！急ぎましょう華琳様！一刻も早く、純様を劉備の包囲網からお救いしましょう！」

一刀「ち、ちよつと春蘭・・・！」

季衣「ちよつと、春蘭様ー！そんなに急いじや、皆疲れちやいますよー！」

春蘭「ここまで持ち堪えた我らが精兵が、今さら疲れたなどと言うものか！全速力！」

華琳「もう、春蘭つたら・・・。」

流琉「秋蘭様、城から反応がありました。あれは。」

秋蘭「うむ。城の側もこちらの動きに同調して、突撃を掛けてくださるのだろう。」

流琉「さすが秋蘭さま。全てお分かりなんですな。」

秋蘭「……すまん。今のは全て私の勘だ」

流琉「え……そうなんですか？」

秋蘭「だが、純様の事だ。ご健在である以上、こちらの動きを見れば全て理解して下さるさ。」

一刀「凄いなー、秋蘭は。」

華琳「そういうことよ、流琉、一刀。」

流琉「そうですね。なら、こちらも……。」

華琳「ええ。郭嘉の作戦に従い、連中の背後から一気に叩きなさい！」

秋・流「はっ！／＼はいっ！」

沙和「あ、あの上にいるの、純様みたいなの！おーい、純様ー！」

真桜「いや、流石にこの距離じゃ見えへんやろ。しかし、ここまでよく持ち堪えとるわ。」

凧「そうだな。」

華琳「ふふっ、純だからこそ出来るのよ。」

沙和「そうなのー！沙和だったら、こんな大軍相手に勝てるか分からないのー！」

真桜「せやなー。」

沙和「もう接敵するのー！戦闘準備よーい！」

華侖「純兄ーっ！お待たせっすー！」

香風「華侖様、さすがにここからじゃ、聞こえない。」

一刀「そうだぞ、華侖。ここからじゃ、流石に純は聞こえない気が……」

華侖「そんなことないっすよ。ほら、返事が聞こえるっすよ。」

香風「……ほんと？」

華侖「そう思えば、きつと聞こえるはずっす！頑張れば、きつと何でも何とかなるっす！」

華琳「ふふっ、華侖らしいわね。」

一刀「はは、そうだな！」

香風「頑張れば、空も飛べる？」

華侖「もちろんっすよ！空が飛べたら、ここから純兄の所までだつてひとつ飛びっす！」

香風「それ良い……！シャンも頑張る！」

華侖「その意気っす！」

栄華「それにしてもお兄様、なんとという無茶を……。」

柳琳「大丈夫よ、栄華ちゃん。お兄様の事だから、きつとこうなる事も予想済みだつたはずよ。そうですね、お姉様？」

華琳「ええ、そうよ柳琳。」

栄華「そうですわよね・・・そうですわよね・・・。」

柳琳「ふふつ。なんだかいつもと逆みたい。」

柳琳「いつもは姉さんを心配する私を、栄華ちゃんが元氣付けてくれるのに。」

栄華「だって、心配なんですよ。お兄様は、強くて優しくて義理堅い理想の殿方で・・・それが、こんな敵陣に囲まれて・・・！」

柳琳「なら、早くお兄様を助けに行きましょう。」

栄華「ええ、そうですわね！私達が行けば、あれしきの軍勢・・・！」

華琳「そうよ、栄華。純は、簡単に死にはしないわ。だって、私の弟なんだから。」

翠「純殿、よくぞご無事で!!」

楼杏「翠さん、純さんは、そう簡単にやられないわ。」

華琳「そうよ馬超。純は、あのような輩にやられないわ。だって、私の自慢の弟なんだから。」

翠「そうだな。よし、奴らに西涼の騎馬隊の力を見せつけるぞ!!」

楼杏「ええ!!純さん、今すぐお助けします!!」

出城

愛紗「皆……。」

風「純様。作戦はどうなさいますか？」

純「この機を逃すわけねーだろ。」

純「愛紗、一万五千の兵馬を城門に集めろ!!俺が率いて出陣する!!愛紗も一緒に来い!!風は、残りの兵を率いて城を守れ!!」

愛紗「はっ!!」

風「はいー!!」

純「皆の者、ついてこい!!」

黄鬚隊兵士「はっ!!」

そして、純達一万五千の兵馬は、城門前に着いた。

純「よく聞け!!外にいる奴らは、徐州での恩を忘れ、この国を征服しようとした不逞の輩だ!!そんな奴らに天は味方しない!!何故か!!それは恩を忘れ、この国を私利私欲で制圧しようとしたからだ!!その様な輩に、天は味方せぬ!!俺と共に突撃し、姉上達と共に、奴らを打ち払うのだ!!」

黄鬚隊兵士「おおーっ!!」

純「行くぞ!! 残る力を全て怒りに変えて奴らを叩き潰せ!! 突撃―!!」

曹操軍

華琳「皆、戦闘準備は出来ているわね!」

霞「おう! 待ちくたびれたわ!」

華琳「春蘭と季衣、流琉で一気に突撃を掛け、劉備達の背後を叩きなさい! 霞と秋蘭、柳琳はその隙を突き、崩れた相手を根こそぎ打ち砕くのよ!」

春蘭「はっ!」

季衣「分かりました!」

華琳「華命、香風、栄華は遊撃よ! 自由に動き、奴らの動きを縛り付けなさい!」

華命「お任せっすー!」

一刀「俺達は援護に回る! 三人とも、頼むぞ!」

凧・真・沙「はっ! / 任しとき! / お任せなの!」

華琳「我らが目指すはただ一つよ!」

華琳「劉玄德を打ち払い、我が弟を救う事よ！」

春蘭「はっ！」

季衣「はいっ！」

秋蘭「はっ！」

流琉「もちろんです！」

華琳「全軍、突撃!!」

こうして、純の救出作戦が始まった。

54話

純「ふっ!!」

劉備軍兵士A「ぐはっ!!」

愛紗「はあっ!!」

劉備軍兵士B「ぐふっ!!」

純「愛紗、まだまだ行けるな!!」

愛紗「当然です!!」

純「よし!!お前ら!!お前らの怒りはこの程度か!!まだまだ力はあるはずだ!!今までの分全てを、奴らにぶつけろ!!容赦はするな!!」

純の発破に

黄鬚隊兵士「二「おおーっ!!」二」

黄鬚隊は更に勢いを増し、劉備軍を屠っていった。

趙雲「く・・・っ。これが曹彰率いる黄鬚隊の実力か!守りも強かったが、攻めに転じたら更に強い!奇襲が成功したのも納得だ!これに主力が加わったため、面倒になった!」

その様子を見た趙雲は、悔しさに顔を歪ませた。

霞「アンタが趙雲か!!」

趙雲「貴様・・・張遼っ!」

霞「応!忙しいとコスマンけど、一戦お相手願おうかつ!」

そう言つて、霞は趙雲に攻撃した。

趙雲「くうっ!」

霞「どや・・・っ!飛龍偃月刀の一撃・・・っ!」

趙雲「相変わらずやるな・・・!だが、今はお主を相手にしている暇は無いのだ!」

霞「そう言わんと、もつとちゃんと相手してえな!せやないと、ウチかて本気出せへんやろ!」

そう言つて、霞は趙雲に更に猛攻を仕掛けた。

趙雲「・・・ぐっ!一撃一撃の攻撃が・・・重いつ!」

霞「へへ・・・!やはり、切れ味も強度も、前とは比べものにならへんで・・・!いざ、尋常に・・・」

と構えたのだが、

霞「・・・と言いたいトコなんやけど、やっぱ止めるわ。」

趙雲「・・・はっ?」

霞「そないな迷いのある武と戦うても、なーんもおもろくないねん。ほら、撤退せえ。」
そう言い、霞は得物を下ろした。

趙雲「・・・全軍、撤退せよっ!!」

そして、趙雲は撤退を始めたのだった。

香風「はああああっ!!」

秋蘭「香風が敵を抑えている間に、何としてもここを抜くぞ! 槍隊、弓隊の斉射が終わり次第、前進! 弓隊、撃てーっ!」

劉備軍武将A「うわーっ、何て強さだ!! 退け!! 退けーっ!!」

華琳達の援軍で形勢が逆転し、劉備軍は大敗を喫したのだった。

劉備軍本陣

張飛「雛里! 右翼と左翼はもう退がったのだ! 殿は、星が任せろって!」

鳳統「分かりました。鈴々ちゃんはこのまま、本陣の援護をお願いします!」

張飛「うう・・・春巻頭と決着が付けられなかったのは残念だけど、しょうが無いの

だ……。分かったのだ。」

そう言つて、張飛はその場を後にした。

諸葛亮「……。ふう。やはり、兵力が揃つた曹軍は強いですね。あの状況から巻き返されるとは。曹彰さん自らが率いる黄鬚隊はそれ以上の強さですし。」

劉備「……。うん。」

鳳統「桃香様。……。大丈夫ですか？」

劉備「……。うん、大丈夫だよ。ありがとう、雛里ちゃん。」

そして、劉備達は撤退したのだった。

出城

華琳「純！良くやつてくれたわ！」

純「ありがたきお言葉。しかし、それらは全て俺の部下の働きのおかげです。あいつらを労つて下さい。」

華琳「分かったわ。後で彼らにも労つておくわね。」

純「はっ！感謝します！」

一刀「純！」

純「一刀！ありがとな！」

一刀「大した事じゃないよ。純こそ、良く無事で！」

純「皆のお陰だ。皆がいなければ、俺はこの出城と共に運命を共にしてた。」

一刀「そうか。」

純「とりあえず、ようやく一息つけた。」

華琳「そうね。」

純「姉上、とりあえず城内は、凧達に任せ、追撃はやりたい者が自分から言ってく
ると思うのでそれらに任せようと思います。」

華琳「ふふっ、良いわよそれで。」

純「ありがとうございます。しかし、稟のおかげにしては予想以上に早かったです
ね。」

華琳「それには訳があるわ。けどそれは、皆が集まってから話すわ。」

純「承知しました。」

華琳「特に秋蘭と栄華、霞に郭嘉に楼杏殿は、あなたのことを一番心配していたから、
可愛がつてあげなさい。」

純「分かりました。．．．ふう。」

華琳「久し振りに疲れた顔してるわね。」

純「まあ、さすがに今回は疲れましたね。」

そう言つて、純はその場に座り、城壁に背を預けた。

華琳「．．．そう。」

すると

華琳「．．．。」

純「姉上．．．？」

華琳は純の頭を優しく撫でたのだった。

華琳「本当にありがとう。おかげで、私はまたあなたに助けられたわ。」

純「いえ、俺は大したことは．．．。」

華琳「それでもよ。本当にありがとう。」

純「．．．。」

そのまま、純は暫く華琳に頭を撫でられていた。それを見ていた一刀は、少しモヤモヤした気持ちになったのだった。

そして、主だった者が皆やつて来た。すると

秋・栄・稟・楼・霞「！！純様——／お兄様——／純様——／純さ——ん！／純——！！！！」

純「うおっ!!」

秋蘭を筆頭に、栄華、稟、楼杏、霞が純に飛び付いた。

秋蘭「本当に、本当にご無事で何よりです!!」

栄華「良かったですわ、お兄様!!」

稟「純様!!よくぞご無事で!!」

楼杏「純さん!!ああ、純さん!!」

霞「ぐすつ純ー!!」

そう言つて、皆純に抱き付いた。

純「心配掛けたな・・・。」

そう純は、秋蘭達に優しく言つた。それを見た愛紗は、羨ましい顔をしていた。

春蘭「じゅんざまー!!よくぞごぶじでー!!」

純「はは!!泣くなよ、春蘭。」

桂花「純様、ご無事で何よりです。」

純「桂花も、よく姉上を支えたな。春蘭も。」

桂花「はっ!」

春蘭「ずずつ、はいっ!!」

純「それで姉上、皆とどうやって合流したのですか?霞と稟に至つては、幽州まで行つ

ていた筈では？」

華琳「それはね、燈が事前に手紙を出してたのよ。ごく近いうちに州境は間違ひなく破られるとね。」

純「へえ、燈が。」

燈「はい、私がやりました。」

純「つまり、この場にいる全員……」

華琳「ふふつ、そういうことよ。」

純「そうですか……。それよりお前ら、一旦離れな。」

純がそう言うのと、秋蘭達は一層強く抱き付いてしまった。

純「お、おい、お前ら。」

華琳「もう少しそのままでもいいさせておきなさい。あなたのこと、本当に心配してたんだから。」

純「……はっ。」

純「しかし、結論から言わせていただく、皆命令違反と言うことですね。」

華琳「ええ、そういうことよ。けど、皆をどうするかは、あなたに任せるわ。」

純「俺がですか？」

華琳「ええ。我が軍を束ねてるのはあなたよ。私が口を出す事では無いわ。」

純「分かりました。ならこの件は、今まで以上に働いて貰う事で償って貰うぞ。もちろん燈、お前も含めてな。」

燈「寛大なるご処置、感謝致しますわ。」

春蘭「ありがとうございます！ですが私にとって、純様のご無事が何にも勝る恩賞です！」

愛紗「それで純様、追撃部隊はどうしましょう。何名か、名乗り出ている者がいるのですが……。」

純「それは誰だ？」

愛紗「季衣、流琉、霞の三名です。」

純「そうか……。」

春蘭「純様！私も是非追撃隊にお加え下さい！」

純「春蘭を入れるにしても……随分不安な面々だな。栄華か柳琳を入れ……いや、栄華も似たようなものだし、柳琳は他のことで任せたいからな……。」

すると、

華命「だったらあたしが行くつすーっ！」

と華命も名乗り出た。

純「……ああ。悪いが、愛紗、お前が率いる。」

純「前線は春蘭や華命が十倍働くだらうから、後曲で押さえに回るだけで構わねーぞ。」

愛紗「私で宜しいのですか？」

純「ああ。お前にはそれが出来ると思って任せたのだ、お前の好きにやれ。春蘭も華命も、愛紗の指示にはしっかりと従えよ。」

愛紗「御意！」

春蘭「はっ!! 我らに戦を挑んだ者がどうなるか、しっかりと叩き込んで参ります!!」

華命「はいつす!! なら、行って来るっす!!」

純「・・・押さえは任せたぞ、愛紗。」

愛紗「はっ。」

そう言つて、愛紗と華命、そして春蘭は追撃の準備に掛かった。

純「宜しいですね、姉上。」

華琳「ええ、構わないわ。さあ、陳留に戻るわよ！」

そして、華琳達は陳留に戻つたのであつた。

秋蘭の想い

秋蘭「純様、いますか？」

純に用があつた秋蘭は、純の部屋の前にいた。しかし

秋蘭（反応が無いな・・・。）

と思つた秋蘭は、扉を開けた。すると

純「すう・・・すう・・・。」

純は寝台ですやすやと寝ていた。

秋蘭「全軍の将兵を束ねている身でもあるからな・・・疲れも我らの比じゃない・・・。」
そう言つて、秋蘭は純が寝ている寝台に近付いた。

純「すう・・・すう・・・。」

秋蘭「・・・。」

そして、誰も見ていない事を確認した秋蘭は、布団の中に入り、純の隣に寝た。

秋蘭「・・・ふふっ。」

そして、純の顔を撫でてウツトリとした笑みを浮かべた。

秋蘭（相変わらず寝顔、可愛いな・・・。）

いつも圧倒的な武勇と類い稀なる統率力で皆を纏め、曹軍を勝利に導いている。それと同一人物とは思えない寝顔に、秋蘭は愛しいと思っていた。

そして、純の顔を自身の細くしなやかな指でなぞる。すると、純は慥つたように顔を歪め、その度に秋蘭緩んだ顔が更に緩んだ。

そして、秋蘭は純を抱き締めて

秋蘭「純様・・・愛してます・・・。」

と言い

秋蘭「んっ・・・。」

口付けをした。すると

純「・・・。」

純は目を覚まし、聞いていた。それを見た秋蘭は

秋蘭「聞いていらしたのですね！ご無礼を働きました！すぐここを・・・。」

と言い、抱き締めていた腕を解き寝台から出ようとしたが

ギョッ

秋蘭「純様!?!」

純は秋蘭の腰を抱き

純「どこも行くな。」

と言った。

秋蘭「純様……。」

純「スンスン……。良い匂いだなあ、秋蘭。」

秋蘭「純様。擦りたいですよ。それに、私少し汗かいたので、汗臭いですよ。」
と言ったが、言葉とは裏腹に抵抗は弱く、再度抱き締めようとしていた。

純「そんな事ねーよ。スゲー良い匂いがするよ。んっ。」

そして、今度は秋蘭の首筋を甘噛みした。

秋蘭「んあ……。じ、純様あ……。」

それに、秋蘭は普段出さない声を出した。

純「どうした、秋蘭。変な声出して。」

秋蘭「じ、純様が、あ……。私の……。ん……。首筋を……。」

純「ん？首筋が何だって……。？んちゅ。」

秋蘭「く……。首筋を……。ああっ！」

すると、今度は首筋の甘噛みから口付けに切り替えた。

秋蘭（ああ……。駄目……。これ以上は……。）

純「秋蘭……。」

秋蘭「ふあ……。は、はい……。んっ!？」

そして、次は純に唇を奪われ、舌を絡められた。それに秋蘭も

秋蘭（も・・・もう・・・駄目・・・。ああ・・・純様・・・。）

普段だったらあり得ない程蕩けた目をした状態で、純の口付けを受け入れ、自身も純の舌に自分の舌を絡めた。そして、二人は暫くそのまま満足するまで抱き合い、快楽に身を委ねたのであった。

栄華の募る想い

朝飯を食いに、一刀は食堂に向かっていた。すると

華命「あつ、一刀っち！おはようっすー！」

季衣「おはよう、兄ちゃん。」

途中華命と季衣に会った。

一刀「二人ともおはよう、今から朝飯？」

華命「そうっすー！一刀っちもっすか？」

一刀「ああ、そっだよ。一緒に食べようか。」

季衣「うんっ！」

そして、一刀は華命と季衣と一緒に食堂へ向かった。その道中

純「おう、一刀。」

一刀「おはよう、純。」

純「ああ、おはよう。華命も季衣も、おはよう。」

華命「純兄、おはようっすー！」

季衣「おはようございます、純様。」

純に会った。

純「三人とも、これから飯か？」

一刀「そうだよ。純もか？」

純「ああ。一緒に食おつか。」

一刀「良いぜ。二人も、良いよな。」

華命「良いっすよー！」

季衣「僕も構いません。」

そう言つて、四人は一緒に食堂へ向かい、朝飯を食つた。

華命「そういえば、聞いたつすか？」

すると、華命がそう切り出した。

一刀「ん？何を？」

季衣「兄ちゃん知らないの？おっくれってるー。」

一刀「だ、だから何の話？」

これには一刀は分からなかったが

純「三姉妹の公演か？」

純がそう言つてフオローすると

華命「そうつす！久し振りにあの子達がこの地に帰ってくるんすよー！」

と華命が言った。

季衣「兄ちゃん本当に知らないの？」

一刀「ああ、勿論聞いてるよ！俺も警備隊として当日は出向く事になってるんだ。」

華命「おおー、そうだったんっすね！」

季衣「警備隊かあー、良いなあ・・・きつと近くで見られるんだろなあ。」

一刀「警備も結構大変だぞー。押し寄せる男達を抑えないといけないんだから。」

華命「皆いつも盛り上がってるっすからねー。」

純「あれは確かにスゲーよな・・・。」

一刀「盛り上がるのは良いんだよ。でも、皆興奮しちゃってるから、もう凄い力で

さ・・・」

季衣「ある意味戦場だもんね、最前列とか凄そう。」

一刀「まさにその通り。警備だつて命がけだから、舞台に近い所で警備してる人間は、

殆ど歌を聴いてる余裕はないんじゃないかなあ。」

華命「折角の公演なのに、それは勿体ないっすねえ・・・。」

一刀「まあ、ああいうのは内側じゃなく、外から見てる方が楽しめるって事だな。」

華命「おおー、なんか一刀っちが業界人っぽく見えるっす！」

一刀「ただの警備隊だけどね。」

純「はは。」

季衣「当日、兄ちゃんはどんな仕事をするの？」

一刀「俺は……」

その時

栄華「朝から女の子に声を掛けるなんて、お盛んですわね。」

栄華が後ろからそう声を掛けたのだった。

一刀「え、栄華……いや俺は別にそんな……」

純「おはよう、栄華。」

季衣「おはよう栄華様。」

華命「おはよっすー。」

栄華「お兄様、おはようございます。お二方も。」

一刀に対する冷たい態度とは打って変わって三人に、特に純に対しては柔らかい笑顔で挨拶を返した栄華。

一刀（いつも通りの対応だなあ……悲しいくらいに……。）

栄華「お兄様、私もご一緒しても宜しいでしょうか。」

純「良いぞ。」

そして、栄華は純の隣に座った。

華侖「えいかふあほうへんひいくつすか？」

栄華「もう、華侖さん……口に物を含みながら話すのははしたないと、いつも言っているではありませんか……。お兄様もいるのですよ。」

華侖「んぐつ……えへへ。」

華侖「それで、栄華は公演に行くつすか？」

栄華「公演……ああ、近く行われる天和さん達の。」

季衣「そうそう、僕達楽しみにしてるんだー。」

華侖「歌を聴いてるとほわわーってなつて、キラキラの衣装がとっても可愛いんですよー。」

栄華「ほう、キラキラの衣装ですか……成程……。」

季衣「あ、でも……栄華様は忙しいから……。」

すると

純「いや、行くよ。そうだよな、一刀。」

と純が答えた。

一刀「ああ、そうだよ。ちようどその事を話そうと思つてたんだ。」

華侖「純兄、仕事は大丈夫なんすか？」

純「一応愛紗が代理でやってくれる。栄華は公演の視察に向かうんだけど、俺はコイ

ツの護衛なんだ。」

季衣「成程……。」

栄華「お兄様、無理を申して、申し訳ありませんわ。」

純「気にすんな。あまり傍を離れんなよ。」

栄華「はい……。」

それを見ていた

季衣「栄華様、純様の事が本当に好きなんだねー。」

華侖「そうつすよー！純兄と栄華は、昔っから仲良しつす！」

一刀「羨ましい……。」

三人はそれぞれの思いで見ている。

それから数日後、純は栄華と一緒に公演の視察に向かった。

栄華「思ったより大がかりなものになっているのですわね……。」

純「そうだな。」

すると純は自然と栄華にくっついて見た。

栄華「ひゃ!?お、お兄様……!!」

純「ん？」

栄華「あ、あの……近すぎでは……。」

純「今さら恥ずかしがる事でもねーだろ。」

栄華「それは・・・そうなのですが・・・」

純「まあそれはそうと、天和達に挨拶に行くぞ。」

そう言つて、純は栄華の手を取つた。

栄華「・・・。」

それを見て、栄華も純の手を握り返して天和達の控える部屋に一緒に行つたのだつた。

控え室

天和「あーっ、純様に栄華さんっ！私達に会いに来てくれたの♪」
すると

栄華「まあ、素敵なお召し物ですわね♪」

地和「公演だもの、これくらい当然よ。」

栄華「どの衣装も斬新で・・・それでいて皆さんの可愛らしさを引き立てていますわ・・・。」

栄華「これは次に作っていただく服の参考になりますわね．．．」
栄華は三姉妹の衣装を見て興奮した。

純「．．．おい、栄華。」

人和「視察にいらつしやつたんじや．．．」

栄華「え？あ、ああ、そうですね！ええ、勿論その通りですわ。」

栄華「そ、それで．．．準備の方はどうなっていますの？順調ですか？」

人和「ええ、おかげさまで。この調子でいけば、支援の必要がなくなる日も遠くないと思います。」

栄華「それは大変結構。ですが、無理はなさらないで下さいね。必要な物があればしつかり申請して下さいまし。」

栄華「人和さんの申請書は、大変整理されていて、数字にも説得力がありますから、出来る限り対応させていただきますわ。」

人和「ありがとうございます。では、必要な時は、遠慮無く申請させてもらいますね。」
栄華「そうして下さい。私としても、こんなに可愛らしいお姿を見られるのなら：」
栄華「も、もといっ！皆さんのお役目の重要性は、よく理解しているつもりですの
で．．．」

人和「は、はあ．．．」

純「しかし、三人とも、ホントによく似合ってんな……。」

天和「へへえ♪」

地和「そう思う！」

人和「……ありがとうございます。」

それを聞いた三姉妹は、嬉しそうな表情でそう言った。その横で

栄華「こほん……とにかく、今回の公演もそうですが、あなたたちの興行には、国費も使用されています。」

栄華「兵を集めたり、民を慰撫するという大切なお役目がある事をお忘れ無きよう、お願いしますわね。」

人和「は、はい……心得ています。」

栄華「宜しい、では。」

と栄華が少し不機嫌な雰囲気を出しながらその場を後にし

純「おい、栄華。」

それを純が追ったのだった。

地和「……何なの、あの人。」

人和「さ、さあ……。」

天和「栄華さんは純様の事が大好きだから、ヤキモチ妬いちやっただよ。」

それを見た三姉妹はそんな事を言っていた。

栄華「……。」

一方の栄華は、唇を尖らせながら不機嫌そうに歩いていた。

純「待って、栄華。」

その後ろで、純は栄華の手を取り

純「俺の傍を離れんなよ。」

と言ったら

栄華「私は放っておいて、天和さんに夢中になって、お兄様ははしたないですわ

よ……。」

と栄華は唇を尖らせた状態でそう言った。

純「そんなじゃねーって。栄華、ヤキモチか？」

栄華「そ、そうですね！お兄様が天和さんに夢中になってるから……！」

純「ははっ、悪い悪い……。」

そう言つて、純は栄華の頭を撫でた。

栄華「あ……もう、お兄様つたら……。」

それに栄華は、少し機嫌を取り戻したのだった。

純「それで、三姉妹の公演を見るんだろ？」

栄華「ええ、それがどうかしましたの？」

純「その・・・大丈夫か？」

栄華「何がですか？」

純「いや・・・一刀から聞いたんだけど、栄華にとつては、ちよつと刺激が強いんだよ。」

栄華「えつ？それって・・・」

純「まあ・・・生まれれば分かる・・・。とにかく、俺から離れるなよ。」

そう言つて、純と栄華は関係者席に座つた。

そして、公演が始まつたのだが、

「「わあーっ!!!」」

栄華「な、何ですの・・・何なんですのこれはあつ!？」

その意味が分かつた栄華は、純の身体を抱き締めながら悲鳴の声を上げた。そんな声も、会場を埋め尽くす人のざわめきで、あつという間にかき消されてしまった。

栄華「右を見ても男つ、左を見ても男つ・・・前も後ろもつ・・・男男男おつ!」

純「一応、ここは関係者用の特等席だから、一般の客とは少し離れてるけど・・・」

栄華「そ、それはそうなんですが・・・!」

栄華「ああ・・・お兄様の匂いでまだ立っていられますが・・・」

純「いや、雰囲気から察するに、まだこれからなんじゃねーか……。」

栄華「これ以上の地獄絵図が存在するのですかあつ!？」

純「……辛いなら、無理すんなよ。」

栄華「い、いいえ……これも私の仕事ですから……ちゃんと視察しなければ……」
そして、一曲目が始まろうとするその時

栄華「お兄様……。」

純「ん?」

栄華「絶対に……絶対に離れないで下さいね。」

と栄華は純の身体に抱き締めた腕を更に強く締めた。

純「分かった……離れねーから。」

と純は栄華の耳元でそう言った。そして、一曲目がもうすぐ終わる時

栄華「う、うぷ……も、もう……げ、限界……。」

栄華が限界だったので、

純「とりあえず会場を出て、控え室で休ませて貰おう。」

純「歩けるか?」

と純は言った。

栄華「いえ、ちよつと……。」

しかし、栄華は歩けなさそうだったので

純「分かった。俺が支えてあげっから、しつかり捕まれよ。」

栄華「あつ……」

純は栄華の肩を抱き寄せて、男達の群れをかき分けながら出口に向かい、天和達が使っていた控え室に着いた。

控え室

純「とりあえず座りな。」

栄華「ええ……。」

栄華の肩を抱いたまま、適当な長椅子に腰掛けた。控え室にいても、会場の盛り上がりや三姉妹の歌が聞こえてきた。

純「大丈夫か？」

そう純が問いかけると

栄華「……まだ……もう少しこのままで……」

栄華は青ざめた表情のまま、力なく答え、純の背中に手を回した。それを見た純は、冷たい水を飲ませてあげたかったのだが、栄華が胸に顔を埋め、背中に手を回したまま放そうとしなかった。

栄華「あの子達の公演は、いつもあんな感じですよのね？」

純「そうなんだろうなあ……。あれを見ると、黄巾党を作り上げた話も、真実味を帯びてきたよ。」

栄華「そうですわね……。ううう……。」

純「よく頑張ったな、栄華。」

栄華「これもお役目ですから……。」

純「何か冷たい水でも飲むか？俺、用意すつから……。」

そう言うよ

栄華「んっ……。」

純「！」

栄華は純の唇に口付けをしたのだった。

純「栄華……。」

そう言つて、純は唇を離したが

栄華「駄目ですわ、お兄様……。んっ……。」

栄華はそう言つて更に口付けをして、純の口に舌を入れたのだつた。それに純も、応えて栄華の舌に自分の舌を絡めた。

栄華「んんっ……！」

すると、栄華は純の背中に回していた腕を更に強くした。それに純も、栄華の背中に手を回してきつく抱き締めた。

栄華「んんっ……お兄様……。もっと、感じさせて下さいまし……。」

そう言つて、更に口付けをした。そして、唇を離すと

栄華「お兄様……愛してますわ。私の全てを感じて下さい……。」
頬を染め、トロンとした瞳で純の頬に両手を添えながらでそう言つた。

純「……分かつた。」

そして、二人はまたきつく抱き締め合いながら口付けをしたのであつた。

霞の想い

普段動物や虫達がさざめき合うこの場所も、皆シーンと静かで、夜空には美しい月と星があるだけだった。

その中で、純は一人未だ来ぬ待ち人を想い、ふうつと息を吐いた。

純「もうそろそろかな・・・。」

そう言つて岩場に背を預け、耳を澄ました。すると小川が流れる涼しげな水音に混ざつて、木々の枝葉が揺れる音が聞こえた。

霞「・・・純ー？」

そして、待ち合わせの相手である霞の声も聞こえた。

純「霞！こつちだ、こつち。」

霞「おー、純ー！お待たせ。」

霞「どないしたん？いきなりこんなとこに・・・。」

そう言いかけた霞だが

霞「・・・っ・・・。」

小川の周りがある、所狭しと沢山の蠟燭が立てられ、一本一本火が灯っていた。それ

は、まるで闇の中に浮かぶ幻想的な光景であつて、霞は見開いて動きを止めたのだつた。

霞「……これ……」

純「……綺麗だろ？」

霞「綺麗、やけど……え、これ何？どうかしたん？」

純「おいおい……この前の約束、忘れたのか？」

霞「約束……」

しかし、霞はまるで思い当たらないのか、ぽかんと口を開けて首を傾げて

霞「……この時期、なんか祭りでもあつたかいな？」

そう言った。この台詞に

純「……本気で忘れてんじやねーか。」

純はがつくりと項垂れた。何時間も掛けて用意したのだから、尚更だろう。

霞「ちよ、ちよと待つて！思い出す！」

純「良いよ、もう……」

純のへこんだ雰囲気

霞「や、お願いやからへこまんとつて！思い出すて！絶対に思い出すから！」

霞は必死の形相でそう言い、頭を押さえて唸り始めた。

霞「祭りがちやうんやつたら、何かの祝い事……？うう……何があつたつけなあ……」

霞「あ！他にも誰か来るのん？」

純「来ねーよ。お前と二人つきりに決まってるだろ。」

霞「決まってるやろ、て．．．もしかしてそこんところが、重要やったりする？」

純「．．．どうだろな。」

霞「．．．ふたり、きり．．．」

純「．．．。」

そして

霞「．．．あんな、純。」

純「んだよ。」

霞「ウチの勘違いかもしれへんし、思い上がりかもしれへんし、違ったら凄いい恥ずかしいねんけど．．．」

霞「．．．これって『雰囲気』やったり、する．．．？」

と尋ねた。それに対し

純「．．．それ以外、何があんだよ。」

純がそう答えると

霞「嘘．．．」

と驚いた。

純「それとも、これじゃ足んねーか？」
すると

霞「ちやう！ちやうよ!!」

大袈裟なくらい首を左右に振って、霞は純の言葉を否定した。

霞「だつてまさか、あんな約束、純が覚えててくれるなんて思わんかった……!」

純「覚えてるに決まつてんだろ。……俺だつて楽しみにしてただ。」

純の言葉に

霞「純……。」

霞はほんのりと頬を染め、瞳を潤ませた。

霞「どうしよ……めっっちゃ嬉しい……。」

この姿に

純「あんまし可愛い事言うんじゃねーよ。こっちが照れんだろうが。」

と言った。

霞「だつて……。」

純「ほら、美味しい料理と霞の大好きな酒。ちゃんと用意してるからさ。」

と純は岩場の多いこの場所で、比較的座りやすい、大きな木の根元の部分に霞を誘い、腰を下ろさせた。

霞「純、ウチも何か手伝わんでええのん？」

純「良いから良いから。今日ぐらいやらせてくれよ。」

そう言つて純は落ち着かない霞を手で制し、並べておいた料理皿の上から、埃除けの布を取り去つた。

霞「うわああ、美味しそやなー！」

純「悪いな、つまみ系のもんばつかで。」

霞「ウチはこういうんが大好きや。・・・なあ、これ全部純が運んできてくれたん？大変やつたんと違う？」

純「大した事ねーよ。・・・で、後はコレ！」

安心させるように、霞の頭を優しく撫でつつ、隠しておいたとつておきを茂みから取り出した。

純「これがねーと始まんねーよな。」

霞「わーい♪お酒やお酒やー！」

そして、純は盃になみなみと酒を注いで

純「ほい・・・どうぞ。」

霞に手渡した。

霞「ありがとう。」

純「ん……しよっと。」

そして、純は霞の隣に腰を下ろし、自身の分の盃にも酒を注いだ。

純「そんなじゃあ、乾盃だ。」

そう言つて、盃を霞に向け差し出すと、霞は上目遣いに悪戯っぽい笑みを浮かべ

霞「乾盃つて……何にやの？」

と言つた。

純「そうだなあ……。んじゃあ、宙天に輝く銀月の美しさに。」

しかし

霞「……へ？」

霞の反応が鈍かつたので

純「いやだから、宙天に輝く銀月の美しさに。」

と再びそう言つたら

霞「……それ、誰に教えてもろたん？」

と笑いを堪えるような表情で言つた。

純「何が……？」

霞「いや、今の台詞、誰かに教えてもろたんやろ？」

純「……姉上から……だよ。」

すると

霞「あはははははっ！や、やっぱり・・・っ。」

と堪えきれず笑ってしまった。

純「何で分かったんだよ！」

霞「ははははっ・・・だって、純にはそんな言葉、似合わんって!!」

純「・・・悪かったな。」

霞「あはははははっ・・・」

どうやら霞は相当ツボったらしく、腹を抱えて笑い続けた。それでも酒だけは零れないうように死守していた。

純「・・・俺もそう思ったんだけど、場の雰囲気盛り上げるためには、こういう言葉も必要かなと思ったんだよ。」

霞「・・・あはははははっ・・・」

純「・・・あんまり笑うんじゃねーよ・・・。」

霞「ははははっ・・・ご、ごめんごめん！だっておもしろいやもん・・・っ。」

純「・・・帰んぞ、俺。」

霞「ああっごめんっ！もー笑わへん！笑わへんから待ってー。」

純「・・・ホントか？」

霞「ホンマホンマ！宙天に輝く、銀月の美しさに誓うから！！」
すると

純「ふっ……。」

純も笑ってしまった。

霞「な、おもしろいやろ？」

純「だな。……じゃ、改めて……。」

霞「へへっ……乾盃。」

純「乾盃。」

そして、二人は盃を合わせ、微笑みを交わしながら酒を飲んだ。

大木を背にくつろぐと、二人の間には穏やかな時間が流れた。

霞「……うん、美味しい。良い香りの黄酒やね。」

純「それは良かった。霞のために奮発したからな。」

霞「ウチのためて……いややわそんな、うまい事言うても、何も出えへんで？」

純「別にそんなつもりじゃねーよ。霞のために用意したのは本当だし、この料理だつて、灯りだつて、全部霞のためだからな。」

これには

霞「……。」

純「霞？どつたの？」

霞は嬉し恥ずかしい表情をした。

霞「・・・純がモテる理由、少しは分かった気がする。」

純「はっ？んな事ねーよ。」

霞「何言うてんの。秋蘭を筆頭に、栄華、稟、愛紗、楼杏。みいゝんな純にめろめろや。」

純「・・・一刀には負けるよ。」

霞「まあ、一刀は華琳を筆頭にキリが無いからなく。」

霞「でもな・・・ウチ、正直純は顔が良いからモテるんやと思つた。」

霞「腕っ節も強いしな。」

純「んな事ねーよ。」

霞「んな事あるつて！せやけど、一緒に戦つたり仕事したりしてるうちに、純の魅力はそんな事じゃない。そういう次元の話やないつて、ウチにも分かつてきてん。」

純「俺には分かんねーな。」

霞「にははは♪そーいうのんも純のええところやと思うで。」

純「・・・そつか。」

霞「・・・。」

純「……。」

そして、二人の間に沈黙が流れた。すると

霞「……。」

霞が純の肩に頭を置いた。

純「霞？」

それに純は少し驚いた。すると

霞「あんなあ、純……。」

純「ん？」

霞「……好き……。」

と言った。

純「……。」

霞「ウチ……純の事が……メツチャ好きやねん。」

純「……霞。」

霞「抑えられへんねん。好きで苦しいねん。いつも、純の事が頭に浮かんでしまうねん。我慢出来へん。」

純「……霞。」

すると

ギョッ

霞「純!?!」

純は霞を抱き締めた。

純「俺も……お前の事……好きだよ。」

霞「!?!……ホンマか。」

純「ああ……。お前のその天真爛漫で明るい所や、時々見せる可愛い仕草に、俺はお前が好きになった。」

霞「純……。」

純「けど……。俺には……。」

霞「構へん。秋蘭達がおろうが、関係あらへん。ウチも愛してくれたら、それでええ。」

純「霞……。」

霞「けど……。今は……。今だけは……。ウチだけ考えてくれへんか?」

と霞は潤んだ瞳で純を見上げた。

純「……。分かった。」

そう言った純は

純「んっ……。」

霞に口付けし、それに霞も

霞「純……んっ……」

純の背中に手を回し、口付けをしたのだった。そして、二人は一つとなり、その様子を美しい月と星が優しく見守っていたのだった。

楼杏の気持ち

涼州方面にまた五胡の軍勢が現れたという知らせを受け、純は楼杏を派遣し、翠と一緒に迎え討させた。

だが、相手は単なる偵察のつもりらしく、早々に退散していった。

そして、楼杏が陳留に帰還した翌日。

純「楼杏。」

楼杏「純さん。」

いつも通り、互いに抱き締め合った。

純「昨日は、よく眠れたか？」

楼杏「ええ。やっぱり陳留は良いわね。自分の家の寝台はどこよりも落ち着くわ。」

純「そうか。」

楼杏「けど・・・一番はあなたの・・・」

純「ん？」

楼杏「い、いえ、何でも無いわ!!」

純「そう。でも・・・流石に疲れた顔をしてるな。」

楼杏「そうかしら？長旅だったけれど、戦は一度も無かったわ。拍子抜けだったわね。」

純「それじゃあ、逆に暴れ足りねーんじゃ？」

楼杏「正直ね。あなたと私が鍛えた兵の強さを五胡の者共へ見せつけてやろうと思っ
ていたのに。」

純「ははっ。」

楼杏「それと・・・」

すると、楼杏は両手で純の頬に添え

楼杏「あなたの顔を見ていると、帰ってきた事を実感するわ・・・。」

と言い、両手で純の顔を撫でた。

純「楼杏・・・。」

純も、楼杏の頬に触れ、柔らかい感触を味わった。そして

純「んっ・・・。」

楼杏「純さん・・・んっ・・・。」

楼杏の唇の口付けをしたのだった。そして互いに唇を離し

純「楼杏・・・。」

楼杏「純・・・。」

お互い抱き締めた状態で見つめ合った。そして

純「楼杏。今日もお前には、休みをやってるんだ。俺も今日非番だから、一緒に付き合わないか？」

と純がそう切り出した。

楼杏「良いのかしら？」

これには、楼杏は目を見開いて驚いた。

純「ああ……。駄目、かな……。？」

そう言つて、純は楼杏を見つめた。すると

楼杏「ふふっ。良いわ、今日は一緒に付き合いますよ。」

と柔らかい笑みを漏らしそう答えた。

純「そうか。じゃあ、一緒に行こう。」

楼杏「ええ。」

城下

楼杏「さて……どうしようかしらね？」

純「一応何軒か楼杏と店を回る気だったけど、それでも良いか？」

楼杏「ふふ、純さんが連れて行ってくれるの？」

純「うん。」

楼杏「なら、お言葉に甘えて。」

そう言つて、楼杏は純の手に指を絡めて握つた。それに純も、握り返したのだった。

そして、一緒に美味しい料理屋に行つて舌鼓を打つたり、とある店で耳飾りを買つて、それを楼杏にあげたりした。そして、二人っきりの時間を存分に楽しみ、夜も更け、最後は楼杏の屋敷で美味しい料理を楽しんだ。そして

純「んちゅ……。んっ……。楼杏……。」

楼杏「んちゅ……。はあ……。純さん……。」

寝台の上で、抱き締め合いながら、深い口付けをしていた。そして

楼杏「あああア……。純さん。」

純「ん……。楼杏……。」

互いに求め合い、愛し合ったのであった。

稟の気持ち

純の部屋

純「ふっ、流石の手腕だな。栄華も喜んでいたぞ。」

稟「あ、ありがとうございます、純様っ。ですが、私はっ、そのっ……」

純「お前の慧眼は、軍略だけでなく、金策にも通用するとは。流石我が子房だな。」

稟「いえ、そのっ、今回は栄華様に意見を求められた以上、半端な知識でお答えするわけにはいかないと思っただけでございます……！」

すると

純「ふっ、俺のために身を粉にして、新たな分野に挑戦し、瞬く間に一流の知識を身に付ける……お前の献身に敬意を払う。」

純「しかし、困ったな。お前のそんな献身に、俺は何で報いてあげれば良いんだ……？」

と目を細め

純「金品程度では、お前の働きに相応しくねーし。」

稟「そ、それはっ……!!」

純「もし望みがあるんなら、お前のその口から聞かせて貰いてーな……。」
と言いながら稟を抱き締めようとすぐ傍に寄った。

稟「い、いけません純様っ……!!こ、こんな昼間からっ……!!」

それに対し稟は純の胸に手を当てて抵抗し

純「ん？俺の可愛い稟は、一体何をされると思ったんだ？」

稟「わ、私の口からはそんな事、とても……っ!!」

視線を逸らしながらそう言った。

純「言いな、稟。お前の望みは俺が叶えてあげる……。それが例えどんなふしだらな事でもな……?」

稟「そ、そのような色欲に狂ったお言葉……。将兵を束ねる曹軍全軍の将帥としてあるまじき事……っ!!」

と言ったのだが、言葉とは裏腹に抵抗してる手の力は段々弱まり、段々頭に靄が掛かり始めた。

稟（ああ……。駄目……。駄目です……。また……。流されて……。ああ……。!!）

純「そんな言葉を俺に言わせるくらい、お前が可愛いと言う事だよ、稟……。俺をあまり困らせんな？」

稟「ひ、一人の臣にそのような事を仰るなど、到底看過できる事では……」
そう言って抵抗しているのだが

稟「で……出来る……事では……」

更に頭に靄が掛かり、唇からは涎の筋が出来ており、目もトロンとしており、段々と抵抗を弱めてしまっていた。

純「ん？どうした、稟。段々と抵抗が出来なくなっているようだが……」

稟「そ、そんな事は……ああ、ありません！」

純「そうかな？……んちゅ。」

すると、今度は稟の首筋に口付けをした。

稟「あ……じ、純様……」

それにより、稟は熱い吐息を漏らし完全に抵抗を止めてしまった。そして

稟「あ……あの……純様……。そ……その……」

稟は純の唇を物欲しそうに眺めていた。しかし

純「駄目だ。……ん……ちゅ。」

察した純はそうさせずに、稟の胸を服越しに舐めた。

稟「あ……そこ……だ、駄目です……」

純「何が駄目なんだ？」

稟「その……あつ……」

純「本当はもつと気持ちよくなりてーんだろ。既に抵抗してねーしな。」

稟「そ……そんな事……。あつ……」

稟（も……もう……。駄目……。な、流されちやいけないのに……。ああ……。）
そして、稟の僅かに残った理性は崩壊し、頭の中が完全に靄がかつた。

稟「も……もつと……。もつとお……」

と言い、稟は純を抱き締めてしまっていた。そして、純は稟の望みを叶え、互いに求め合ったのだった。

愛紗の危ない行動

純の部屋

愛紗「純様……。」

寝ている純の耳元で、愛紗の囁く声が聞こえた。

純「ん……。」

目を開けると、そこには戦場の凜々しい顔ではなく、綺麗で見惚れてしまう笑みだけだった。

純「愛紗……。」

そして

純「んっ……。」

愛紗「んっ……。」

目覚めの口付けをした。

愛紗「お目覚めですか？」

純「うむ……。」

そして、純は身を起こした。

純「どうやら、お前と愛し合い、その艶やかな黒髪を梳りながら眠ってしまったようだな。」

愛紗「はい。そうでしたよ。」

純「お前の髪、気持ち良くてな。」

愛紗「ふふっ。でしたら、私ももつとこの髪を手入れしますね。」

純「そうか……。そんじゃあ、朝飯食いに行こう。」

愛紗「はい。」

そして、純と愛紗は一緒に食堂に行つた。そして、純は兵の視察に出かけたのだった。

一方の愛紗は純の部屋にこっそり入り、周りを見渡した。

愛紗「誰もいないな……。」

そして、純の寝台に入り、枕に顔を埋めた。

愛紗「スンスン……。純様あ♪」

そう言つて、純の枕を匂つた。

愛紗「スンスン……。はあく♪」

枕に限らず、布団も匂い、恍惚の笑みを浮かべていた。

愛紗（あく）。少し汗臭いが、それがまた良い♪）

愛紗「純様あ……。もういつそ、このままで……」
と言いかけたが

愛紗「違う！」

と身体を起こした。

愛紗（あ、危ない……。！午後から兵の訓練だというのに、危うくこの匂いに嵌まり、
抜け出せなくなるところだった……。危ない……。）

愛紗「早く準備しなければ……」
しかし

愛紗「……。じ……。準備……。しな……。けれ……」

枕を抱き締め、布団にくるまるまっていたため

愛紗「スンスンスン……。純様あ♪」

匂いの誘惑に負けてしまった。

愛紗（良い匂いだ……。）
しかし

愛紗「むう……。」

すぐに顔をしかめた。

愛紗（中々この寝台から離れられない。こんな姿は特に見せられないな。特に、純様

は勿論、秋蘭には……)

と思っていたが、いつの間にかわずかに開いていた扉の先に

秋蘭「……。」

秋蘭が見ていた。

愛紗「……。」

秋蘭「……。」

それを見て愛紗は一気に汗が出て

愛紗「し、秋蘭!!こ、これはだな……!!」

と慌てて何か弁解しようとしたが

秋蘭「……。」

愛紗「し、秋蘭?」

秋蘭に口到人差し指を当てられた。

秋蘭「まあ落ち着け。お前のそれ、やっているのはお前だけでは無いぞ。」

愛紗「えっ……!」

秋蘭「私も同じ事をしているし、稟に栄華もやっているぞ。」

愛紗「そ、そんな……。」

それを聞いた愛紗は、ガクンと項垂れた。

愛紗（まさか、栄華殿はともかく、稟もやっているとは……常に冷静沈着で、直言も辞さないあの稟が……!）

愛紗「まさか、楼杏殿もか？」

秋蘭「楼杏殿は見たことが無いからなあ。あのお方は自らの屋敷を持っているから難しいと思うが、可能性は無きにしても非ずだな。」

秋蘭「ともかく、お前が恥ずかしがる事ではないさ。けど、正妻の座は譲らぬぞ。」
と秋蘭は言った。

愛紗「私もだ、秋蘭。負けぬぞ!!」

秋蘭「そうか……では、互いに頑張ろうではないか。」

そう言つて、秋蘭は部屋を出ようとしたがその寸前で

秋蘭「その布団は、流石に洗つておけよ。お前の下の唇の涎で濡れているからな。」
と言つてその場を後にした。それを聞いた愛紗は

愛紗「秋ー蘭ーっ!!」

と目を吊り上げて怒鳴つたのであつた。

55話

西涼

韓遂「……確かに、約束するのだな。」

劉備使者A「はい。我が主劉玄德は、貴殿が馬騰を討ち、その後曹孟徳を倒した暁には、西涼一帯をお任せすると。」

韓遂「そうか。ワシは馬騰ら一族が曹操に降り、その犬となったのが気に入らぬ。馬騰も老いたものじゃ。かくなる上は、馬騰を討ち、曹操を討ち、国のために奉公するでしょう！」

劉備使者A「ありがとうございます。それを我が主がお聞きになったら、さぞお喜びになるかと。」

韓遂「では、今日は退がるが良い、使者殿。部屋は城内に用意させておる。」

劉備使者A「お心遣い、痛み入ります。ですが、この知らせをすぐに我が主にお届けしたいので、これにて。」

韓遂「そうか……。なら、手紙を用意したらすぐに呼ぶとしよう。」

そして、劉備の使者はその場を後にした。

閻行「韓遂様、宜しいのですか？」

韓遂「何がじゃ？」

成公英「いくら何でも、我らには馬騰殿を、そして劉備に従い、曹操を討つ理由がありません。」

韓遂「良いのじゃ。ワシは元々この西涼を我が物にしたかつたのじゃ。しかし、世の者はこの西涼は、ワシと馬騰の二人が統治していると思っておる。それが気に入らぬ。ならば、ここで馬騰を討ち、その勢いで曹操を討ち、西涼を支配するのじゃ。」

閻行「しかし、それは自滅の道です！曹操には弟の曹彰がおります。彼と干戈を交えるのは危険です！」

韓遂「そんなの、やってみねば分からぬ！」

成公英「韓遂様！」

韓遂「もう決めた事じゃ。何も言うな！」

そう言つて、韓遂は二人を黙らせた。そして、韓遂は関中軍閥を率いて蜂起し、馬騰に不意打ちを食らわせたのだつた。

馬騰「くううっ!!韓遂め、卑劣な事を!!」

鶯「母さん！」

馬騰「鶯か！お前は蒼と蒲公英を引き連れて、□州の曹操へ落ち延びろ！」

鶯「母さんは！」

馬騰「あたしは残つて、韓遂らに一矢報いる！」

蒼「母様！それは駄目だよ！蒼も残る！」

蒲公英「そうだよ、おば様！全員で仕掛ければ、韓遂に一死報いれるよ！」
しかし

鶯「……駄目よ。母さんの言葉に従いましょう。」

と馬休は馬鉄と馬岱にそう言った。

蒼「鶯ちゃん!？」

蒲公英「鶯は悔しくないの!？」

これには、馬鉄と馬岱はそう馬休に言った。すると

鶯「悔しいに決まってるでしょ!!」

蒼・蒲「……っ！」

と大声を出し、馬鉄と馬岱は驚いた。

鶯「でも……だからって私まで一緒に行くなんて言ったら、誰も止める人がいなくなっちゃうじゃない。」

鶯「それに、□州の陳留には曹操さんの弟の曹彰さんに従っている翠姉さんがいる。

そこに行けば、韓遂を討伐出来るよ。」

鶻 「ここで皆出ちやつたら、母さんの気持ちを無駄にしちゃうよ……。」
と馬休は泣きながらそう言った。

蒼・蒲 「……。」

これには、馬鉄と馬岱は黙るしかなかった。

馬騰 「そういう事だ。お前達は生きる。生きれば、きっと良い事がある。だから、死ぬな！」

馬騰 「鶻！二人を、そして、翠の事は頼んだぞ!!」

鶻 「はい、母さん!!」

そして

鶻 「行こう、二人とも!!」

蒼 「嫌だ！母様ーっ!!」

蒲公英 「離して、鶻!!おば様ーっ!!」

二人を連れてその場を後にした。

馬騰 「……行つたか。」

そして、馬騰は自らの得物である槍を構えた。すると

韓遂軍兵士A 「馬寿成、覚悟しろっ!!」

韓遂軍が既に侵入しており、馬騰を討ち取ろうとしていた。

馬騰「あたしの首は、そう簡単に取れないぞ!!死にたい奴だけ掛かってこい!!」

そう言つて、馬騰は韓遂軍に単身突撃した。その槍は、娘の錦馬超と呼ばれし翠以上の腕だった。

しかし、多勢に無勢で、馬騰自身も傷だらけとなつた。そして

韓遂軍兵士B「うおーっ!!」

ドシユ

馬騰「グハツ・・・!!」

韓遂軍の兵士の槍が、馬騰の腹に刺さつた。

馬騰「フフツ・・・。そなた、この馬騰を討ち取るとは、見事だ!!しかし、韓遂にはこれだけ伝えておけ!!お主のその行動は、いずれは我が身を滅ぼすぞ!!そして、私が死んでも、我が娘と『黄鬚』曹彰が貴様を討ち取るぞ!!」

そう言い、馬騰は息絶えたのだった。そして、韓遂は西涼を奪い取つたのだった。

その数日後、馬休達は敗残兵と共に、何とか陳留まで逃げ延びたのだった。

諸葛亮「そうですか。全て、成功しましたか。」

問者A「はっ。韓遂が西涼を制し、馬騰を討ち取ったと。」

諸葛亮「そうですか。下がって下さい。」

問者A「はっ。」

鳳統「朱里ちゃん。」

諸葛亮「うん。これで、西涼は何とかなった。この勢いで曹彰さんを討ち取れば、曹操さんを滅ぼせる。そして、桃香様の理想が叶う。」

鳳統「うん。全ては、桃香様の理想のため……。」

陳留・玉座の間

華琳「西涼が失われたですって？」

桂花「はい、韓遂率いる関中軍閥が、馬騰を討ち取ったと。」

春蘭「何と……！」

秋蘭「……。」

華琳「……そう、馬騰が……。」

霞「馬騰のおばちゃんが……。」

純「……この事、翠は知ってるか？」

稟「はい。今、馬騰の娘の馬休と馬鉄、そして従妹の馬岱と一緒にいます。」

純「……そうか。」

桂花「華琳様。韓遂のこの行動、何か裏があるかと。」

風「風もそう思いますねー。」

華琳「誰かに誘われたわね。……恐らく、劉備の軍師、諸葛亮と鳳統の策ね。」

純「無きにしても非ずですね。」

華琳「ええ。」

一刀「劉備はそれを知っているのかな？」

榮華「恐らく、知らないと思いますわ。」

桂花「ええ。それに、劉備はこのような事を好む人じゃないと思うし。」

一刀「……そうか。」

その時

バーン

玉座の間の扉が凄いい音を立てて開いた。

一刀「な、何だ!？」

春蘭「何やつ!？」

その音の正体は

翠「純殿!!」

翠が思い切り開けた音だった。

純「翠!今は軍議中だ!」

翠「そんな事は分かてる!純殿、母様の仇を討つため、あたしを先鋒にしてくれ!」

純「……」

翠「韓遂の奴、母様と一緒に西涼を良く治めていた。けど、官渡で袁紹を撃破して以来、韓遂は変わった。まさか、こんな行動をするなんて……!」

翠「あたしは韓遂が許せない!韓遂を討ち取り、西涼を取り戻したい!純殿、あたしを先鋒に!!純殿!!」

それを聞いた純は

純「分かった!討伐が決まったら、お前を先鋒にする。しかし、その気持ち、俺にも分けてくれ。お前と共に、西涼を取り戻す!!」

と翠に言った。

翠「ありがとう、純殿!!」

それを聞いた翠は、泣きながら拱手した。

純「姉上。韓遂を討伐し、西涼を取り戻しましょう!!」

華琳「初めからそのつもりよ。桂花。」

桂花「はっ。西涼を取り戻すのであれば、まずは前線基地の確保が必要となります。まず第一段階として……」

そう言い、桂花は地図を広げ基石を置いた。その場所は、涼州に近い場所だった。

純「……潼関か。」

桂花「はい。渭水を渡る拠点は必要ですし、長安は涼州から容易く手が届く位置にあるので、ここが一番都合が良いのです。」

純「成程……。」

華琳「なら、その役目を純、あなたに任せるわ。潼関にて前線基地を確保し韓遂を撃破しなさい!その後、西涼を平定するのよ!」

純「御意!ならば、愛紗、楼杏、霞、翠、稟を引き連れて出陣します!」

華琳「任せたわ。そして、西涼を平定した後の事は全て任せるわ!」

純「はっ!ではこれにて。翠、霞、稟、行くぞ!」

翠「ああ！この錦马超の槍の冴えを、奴らに見せつけてやる!!」

霞「よっしゃ！馬騰のおぼちやんの仇、ウチも協力したる！」

稟「私も西涼平定に協力します。」

そう言い、純はその場を後にした。そして、純は兵を率いて潼関に出陣したのだった。

西涼

韓遂「ほう？曹軍が潼関に着いたと。」

閻行「はい。曹操は弟の曹彰に任せ、潼関にて前線基地を作るものかと。」

韓遂「望む所じゃ！ワシ自ら率いて討ち取ってやる！」

成公英「しかし韓遂様！相手は『黄鬚』曹彰です！彼奴は戦に長け、あの呂布を一騎打ちで勝つた程の勇将です！簡単には勝てません！」

韓遂「我らには関中の軍閥がおる。奴らを率いて攻めれば、流石の曹彰とて無理に決まっておる！」

韓遂「出陣じゃ!!軍閥達にもそう伝えよ!!」

そうやって、韓遂達も出陣したのだった。

56話

陳留

一刀「西涼が攻めてきたあ!？」

その話題が出たのは、純が潼関に着いた報告があつて間もなくだった。

華琳「声が大きいわよ、一刀。ゆっくりお茶も飲めないでしょう。」

一刀「ごめん。けど、なんで・・・いくら何でも早すぎない?」

華琳「西涼の機動力ならこの程度は範囲内よ。」

一刀（マジか・・・。流石に急展開過ぎる気がしたけど、それだけスピードのある相手って事か。）

秋蘭「だからこそ、稟もこちらでの準備に時間を掛けていたのだろう。」

一刀「成程なあ。で、被害は?純の事だから大丈夫だとは思うけど・・・。」

風「稟ちゃんの報告では、特に大きな損害は出ていないそうですよー。」

一刀「そつか・・・良かった。」

しかし

華琳「・・・本当にそうなら良いのだけれどね。」

と華琳は言った。

一刀「どういう事？」

華琳「私ね、前に郭嘉の報告書を純に頼んで見た事があるんだけど、彼女の報告書は、感情を省いて客観的になり過ぎる所があるわ。」

華琳「それに、涼州の皆は五胡の侵攻と常に戦っていた連中よ。騎馬が主力だから機動力も高いし、戦慣れもしているわ。」

華琳「恐らく大兵力の激突よりも、少数での奇襲や神出鬼没の遊撃が中心でしょうね。」

一刀「そ、そうなのか・・・。」

華琳「けど、純はきつと期待に込えてくれる。必ず韓遂を倒し西涼を平定し、返す刀で漢中も平定してくれるわ。」

と華琳は力強くそう言った。

潼関

愛紗「純様！関中軍閥が襲撃してきました！」

純「そうか。稟、後方は任せた！」

稟「はっ、お任せ下さい。」

純「楼杏は、いつも通り陣の作業を頼む！」

楼杏「はい！」

純「残りは俺と来い！行くぞ！」

愛紗「はっ！」

翠「応！」

霞「今日も返り討ちにしたるわ！」

そう言つて、純は愛紗、翠、霞と共に出撃した。そして、今日もあつさりと返り討ちにしたのだつた。

韓遂軍本陣

韓遂「ぐぬぬ……。思ったよりやるのう。」

閻行「連中に急襲したり、挑発したりしても中々崩れませんか。」

成公英「このままでは、潼関に基地が完成し、我らが不利になります。」

韓遂「しかし、奴らの疲れもかなり溜まっておる筈じや。潼関の基地も、あと数日は掛かる筈。それまでに、何とか曹彰を討ち取るぞ！関中諸侯にもそう伝えよ！」

閻・成公「はっ！」

しかし、連中は気付かなかつた。翌日の朝、潼関の基地は完成してしまつた事に。

潼関

純「楼杏、良くやったな！」

楼杏「私は大した事してないわ。皆が頑張ってくれたお陰でもあるし、純さんも時々手伝ってくれたお陰で、工事も捗つたわ。」

稟「流石にもう少し掛かると想定してたのですが、驚きです。」

愛紗「とは言え、喜んでばかりもいられません。」

霞「ああ、韓遂の連中がまた攻めてきたで。」
そう言われ、陣の外を見た。

翠「・・・普段よりも砂煙が多い気がするな？」

稟「敵もこちらの前線基地が完成したのを見て、焦っているのでしょう。」

翠「・・・純殿、どうするんだ？」

純「勿論、追い払う。皆、頼むぞ！」

翠「応！」

愛紗「はっ！」

霞「了解や！」

楼杏「分かりました！」

稟「純様、後方はお任せ下さい！」

韓遂軍

韓遂「まさか・・・報告は本当だったのか!？」

閻行「こども早く・・・!!」

成公英「流石『黄鬚』曹彰ですね。・・・韓遂様、如何なさいますか?」

韓遂「決まっておるじやろう! 潼関を陥とす! 奴らを殲滅させるのじや!! 我らは二十万、向こうは十万じや! 勝てぬ筈がなろう! 関中諸侯にもそう伝えよ!」

そして、韓遂は関中諸侯に攻撃の命令を下した。

純「皆、よく聞け! 奴らは、欲にかられて西涼の英傑である馬騰殿を卑劣極まりない手で殺し、西涼を我が物にしようとした不逞の輩だ! ここで奴らを叩き潰し、西涼を取り戻し馬騰殿の手向けとする! 皆、俺と共に奴らを叩き潰すぞ!!」

そう言い、純は兵を鼓舞した。

「「おおーっ!!」」

愛紗「純様! 敵、動き始めました!」

純「なら、総員、攻撃開始ー!」

そして、両軍入り乱れての戦いが始まった。戦いは、一進一退の攻防となった。

愛紗「相も変わらず、流石西涼の騎馬だ!」

韓遂軍兵士A「うおおおっ!!」

愛紗「はあああつ!!」

韓遂軍兵士A「がはっ!」

愛紗「しかし、我らも負けるわけにはいかぬ!」

愛紗は鋭い目をしながら敵を斬り伏せていった。

霞「流石愛紗や! 腕も、騎馬隊の動きも様になつとる!」

韓遂軍兵士B「ぬおおおつ!」

霞「うおりやあああつ!!」

韓遂軍兵士B「がはっ!!」

霞「ウチも負けるわけにはいかんなあ・・・!」

それも見た霞も、韓遂の兵を斬り捨てていった。

翠「うおおおつ!! 韓遂はどこだー!!」

韓遂軍兵士C「うわーっ!!」

翠「どきやがれーっ!!」

翠も、その自慢の槍で、敵を殺していった。

韓遂軍兵士「うおおおつ!! 曹彰、覚悟ーっ!!!」

韓遂軍の数十人かが純に襲いかかったが、

純「うおりやああああつ!!」

韓遂軍兵士 「「ぎやあああつ!!!」」

純は一太刀であっさりと全滅した。

楼杏 「総員、敵の騎馬の動きに慌てないで、落ち着いて対処しなさい!!」

楼杏も、皆ほどの武勇は無いが、巧みな統率と指揮で敵を翻弄し、倒していった。数の差はあったが、曹彰軍の圧倒的な士気の高さと、西涼は馬騰がいてこそ強さを發揮できたため、韓遂達の形勢は益々不利になっていった。

韓遂軍兵士C 「韓遂様！我が軍はほぼ瓦解！関中諸侯も、ほぼ壊滅です!!」

韓遂軍兵士D 「閻行様、成公英様が討ち死になさいました!!」

韓遂 「何じやと!?!? . . . かくなる上は、ワシ自ら突撃して、曹彰の首を取ってくれる!!」

そう言って、韓遂は馬に乗って单身突撃していった。

韓遂 「うおおおおっ!!」

愛紗 「何だ!?!」

霞「ありや、韓遂やないか!？」

楼杏「まさか、単騎で突っ込んで来たの!？」

これには愛紗達は驚いてしまった。

韓遂「曹子文、覚悟おおっ!」

そう言つて、韓遂は純を攻撃しようとしたが

翠「うおおおっ!!」

ガギン

韓遂「ちっ!何やつじゃ!」

翠「あたしは西涼の馬騰が娘、馬孟起だ!」

翠がすぐ馬で駆けつけて純を守った。

韓遂「くっ!馬騰の小娘か!そこをどけ!」

翠「どくものか!母の仇、取らせて貰うぞ!!はあああつ!!」

そう言つて、翠は馬を走らせ韓遂を攻撃した。韓遂も馬を走らせ翠に攻撃をした。互いに馬上からの一振りを防ぎ、両者はすぐに馬首を返し追撃し、攻防入れ替わりながら乱撃を繰り返したが

韓遂「はあ、はあ・・・」

韓遂の方が次第に押され体力が尽きてしまった。そして

翠「はあああつ!!」

ドシユ

韓遂「グハツ!!」

翠の銀閃が、韓遂の腹を貫いた。

韓遂「フフツ……見事じゃ。流石馬騰の娘じゃ。」

翠「……何か言い残す事があるか。」

韓遂「……ワシは西涼欲しさに……このような事を起こした。しかし……ワシは悔いは無い! 例え悪名を残そうと……韓文約の名を後の者が覚えてくれれば……ワシはそれで良い!!」

韓遂「马超!! 地獄で……待っているぞ!!」

そう言い残し息絶えた。そして翠は、韓遂の首を取って

翠「韓遂は、この馬孟起が討ち取ったー!!」

と首を掲げて言った。

「「うおおおつ!!」」

これに、曹彰軍は皆勝利の雄叫びを上げたのだった。

純「皆、勝ち鬨だー!! 陳留におられる姉上に聞こえるほどの勝ち鬨を上げるぞー!!」

そう言つて、純は

純「うおおおっ!!」

太刀を天に掲げて雄叫びを上げた。

愛・霞・翠「うおおおっ!!」

これに、愛紗と霞、そして韓遂を討ち取った翠も雄叫びを上げた。

曹彰軍兵士A「皇甫嵩様は叫ばなくても良いのですか？」

楼杏「良いのよ。私の性に合わないわ。」

曹彰軍兵士A「そうですか・・・。」

楼杏「けど、心の中で雄叫びを上げているわ。私も、この勝ち戦は嬉しいわ。」

曹彰軍兵士A「はいっ!!」

潼関

純「この勢いで一気に西涼を、そして漢中を平定するぞ!!」

愛紗「はっ!」

霞「応!」

翠「了解だ！西涼を取り戻し、漢中も取る！」

楼杏「しかし、ここは華琳さんの指示を待つべきでは？」

純「その必要はねー。姉上の返事を待っている間にもし劉備達が西涼を攻めたら面倒になる。それに後の事は全て任せてくれる。ここは一気に西涼と漢中を攻め、平定すべきだ！」

稟「私も純様の意見に賛成です。兵は神速を尊びます。今行かねば、劉備は涼州は勿論、漢中にも兵を出してきます。また、西の羌族も恐らく涼州に乱入してくるでしょう。」

稟「今のうちに涼州、漢中を平定しておかねば、面倒な事になります。ここは一気に涼州をそして漢中を平定すべきです！」

純「そういう事だ。皆、翠は見事韓遂を討ち取る大手柄を挙げた。お前達も、俺と共に手柄を挙げ、共に勝利を喜び合おうぞ!!」

この言葉に、皆奮い立ち、涼州平定に向かって出陣したのであった。

57話

純率いる曹彰軍は、潼関を出陣してから破竹の勢いで涼州を制圧していった。

純「ここには劉雄がいる。奴らを殲滅するぞ!!」

「「おおーっ!!」」

そして、劉雄率いる賊はほぼ壊滅した。

純「次は梁興だ!!」

次は梁興討伐に動き、攻撃を仕掛けた。そして

純「うおおおおっ!!」

梁興「ギャーッ!!」

純「梁興を討ち取った!!この地は、俺達が制圧したぞー!!」

「「おおーっ!!」」

梁興も討ち取った。

愛紗「ここまでやれるとは、正直思わなかったぞ・・・。」

霞「ウチもや・・・。純の強さを本当に実感出来るで・・・。」

翠「流石純殿だぜ!!このまま、あかし達の父祖の地を取り戻してやるぜ!!」

楼杏「翠さん……。けど、純さんの武勇と軍才はいつ見ても流石だわ……。」

稟「しかし、もう少し時間が掛かると思っておりましたがこうも早く……。純様は、我々の常識を遙かに凌ぎます……。」

その様子を見ていた諸将は、驚きと敬服の思いで見えていたのだった。

純「良し！この勢いで残りを平定して、漢中も平定するぞ!!」

「「おおーっ!!」」

そして、純は出陣した。その際羌族も侵攻してきたのだが

純「うおりやああつ！」

羌族兵士「「ギャアアツ!!」」

羌族武将A「な、何だあのガキは!?今二十人いた筈だぞ!?一瞬で斬り殺しただど!?」

羌族武将B「何て強さだ!?総員防御態勢を取れ!!あの流れを押し留めろ!!」

純「その程度の防備で俺を止められるかあつ!もつと分厚い壁を持って来い!!」

羌族兵士「「ガアアツ!!」」

純の圧倒的武勇の前に、羌族は形勢が不利になっていた。

霞「……。なあ、愛紗。」

愛紗「何だ、霞?」

霞「何かウチらが、というか純が弱い者虐めしてる感半端ない気がしてきたで……。」

愛紗「……考えたら負けだぞ、霞。」

霞「まあ……せやなあ……。」

それを見ていた愛紗と霞は、羌族に同情してしまった。

楼杏「純さんが敵を圧倒しているわ。純さんに続いて一気に敵を倒しなさい！」

翠「おっしやー!! あたしも負けてらんねーなあ!!」

稟「我が主ながら、本当に常識を疑います……。まさに軍師泣かせですね……。」

そして、羌族を完膚なきまでに叩きのめし、潼関で韓遂を討つてから僅か二ヶ月で涼州を完全に平定したのだった。

純「俺達は勝った!! 西涼を取り戻した!! 馬騰殿の無念を晴らしたぞ!!」

「「おおーっ!!」」

翠「純殿、ありがとう!! 母様も、これで報われるよ!! 本当にありがとう!!」

これに、翠は涙を流しながら跪いて拱手した。

純「こちらこそ、感謝する! 西涼奪還は、お前の働きあってこそだ! 馬騰殿の御霊も、きつと喜んでるぞ! これからも、皆と共に道を切り拓こう!!」

それを見た純は、そう言つて翠の肩を叩いた。

翠「ああ!!この錦马超、これからも純殿の一番槍として、道を切り拓いてやるぜ!!」
純「頼むぞ!!」

そして、純は将兵に振り返り

純「皆、西涼の奪還、良くやってくれた!!しかし、まだまだ終わらねー!!次は漢中だ!!漢中を平定して、陳留におられる姉上に勝利を届けるぞ!!」

「「おおーつ!!」」

そう言った。そして、涼州平定の勢いのまま、返す刀で漢中に出陣したのだった。

陳留

華琳「そう・・・涼州を平定したのね。」

秋蘭「はい。羌族含めて全て滞りなく完了したとの知らせです。」

この知らせを聞いて

一刀「いやいやいや、潼関で韓遂を討ってまだ二ヶ月だぞ!!そんな簡単に平定出来るのか!?!」

一刀（いつもの事だけど、純の武勇は常識を疑うな．．．）

一刀は驚きのあまり混乱してしまい

春蘭「流石純様です!!」

華侖「純兄は凄いつすー!!」

柳琳「そうね、姉さん。」

栄華「しかし、相変わらずお兄様の強さは常識の範囲外ですわ．．．。」

桂花「軍師泣かせの武勇ね．．．。」

風「ぐうー。」

桂花「寝るなっ!!」

風「おー！現実離れしていたので遂．．．。」

桂花「全く。」

皆もそれぞれの反応をした。

華琳「そうね。けど、流石我が弟だわ。秋蘭、純は今どうしているのかしら?」

秋蘭「はっ。今漢中に向かっている模様です。」

華琳「そう。」

一刀「良いのか、華琳?」

華琳「何がかしら?」

一刀「いくら何でも華琳の指示なく勝手に漢中を攻めちやつて……。」

華琳「別に構わないわよ。西涼を奪還した後の事は全て任せてあるから。それに、それが良いと判断したからこそその漢中攻めなんでしょう。」

一刀「そうか……。」

華琳「それに、これから金輪際、私は二度と戦に出るつもりはないわ。」

一刀「えつ、それつて……。」

華琳「ええ、孫策と劉備の事、そして周辺の異民族は全て純に任せるつもりよ。私は玉座で収まり、治政一本に集中する。そうすれば、純も何かとやりやすくなるわ。」

春蘭「何と……！」

秋蘭「……。」

柳琳「お姉様……。」

華命「華琳姉え……。」

桂花「華琳様……。」

風「……。」

華琳「今後戦がある時は私は出征しないわ。皆も、そう心得なさい。」

そう言い、皆拱手したのだった。

一方純達は、漢中に侵攻した。当然そこを劉備達は見逃さず、両者は激突した。

純「うおりやあつ！」

蜀軍兵士「ギャアアツ!!」

純「オラオラー!!どきやがれーっ!!」

純が最前線に立ち武勇を振るう。

愛紗「純様に続けー!!」

霞「ヨッシャー!!暴れるでー!!」

翠「錦马超の槍の冴え、蜀に植え付けてやる!!」

楼杏「皆、一人一人確実に仕留めなさい！」

しかし、あまりにも圧倒的速度で涼州を平定したため、劉備の軍勢はろくな準備が出來ずに純率いる軍の前に劉備達は敗北してしまったのだった。

張飛「撤退、撤退なのだーっ！」

趙雲「退けーっ!すぐに曹子文の軍が来るぞ、我々は他隊が退がるまで、防壁を作る

!総員、構えよ！」

劉備「……。」

敵顔「くううっ！これが噂に聞く『黄鬚』曹彰の実力か・・・!!」

諸葛亮「まさに軍師泣かせの武勇です・・・。雛里ちゃんがいても同じ結果だったと思えます・・・！」

敵顔「そうか・・・。軍師殿にそうも言わせるとは・・・。先の戦でも聞いていたが、やはり曹彰の強さは化け物じみておるな・・・。」

趙雲「桃香様、ここも既に危険です。殿は私が務めます故、朱里達と共に撤退を。」

劉備「・・・ごめんなさい。無事に帰ってね、星ちゃん。」

趙雲「無論です。・・・桔梗、桃香様達は任せた。」

敵顔「心得た。さ、桃香様、朱里、こちらに。」

諸葛亮「桃香様！」

劉備「う、うん・・・。」

敵顔「おのれ・・・結局、漢中は守れずじまいか。」

諸葛亮「すいません。まさか、こうも早く涼州を平定するとは予想外で、上手く対処出来ませんでした。軍師として情けないです。」

敵顔「いや、腹立たいのは己に對しても同じ事。・・・曹彰は誠に化け物じゃ。そして、彼が率いる兵も同じく化け物じみた精強さじゃ。」

諸葛亮「仮に南蛮の警戒に回していた恋さんを入れても、同じ結果だったでしょ

う。・・・残念です。」

劉備「・・・朱里ちゃん、これからどうしよう?」

諸葛亮「曹彰さんの目的は漢中の制圧まででしょうから、ひとまずそこは諦めるしかありません。南蛮からの侵攻も始まっている今、我が軍の戦力で二正面作戦は不可能です。」

厳顔「やはり諦めるしか無いか・・・いよいよ以て腹立たしい。」

諸葛亮「悔しいですが、南蛮を押さええて漢中に侵攻しても、恐らく今日のように敗北するかと。」

厳顔「羌族を使うという手もあると思うのじゃが・・・」

諸葛亮「それもやってみました。しかし・・・」

『『『真の強き王である曹子文に逆らうなど、天地がひっくり返ってもせぬ!!!』』』

諸葛亮「と返されてしまいました。」

厳顔「何と・・・異民族をも従わせ、心服させるとは!」

諸葛亮「かくなる上は、江東の孫策さんと連合を組んで、曹操さんに対抗するか……。」

劉備「朱里ちゃん……。」

劉備（私は……どうしたら勝てるんだろう……？）

そして、劉備達は撤退をしたのだった。

純「勝ったぞ!! 漢中を手に入れたぞ!!」

「「「おおーっ!!」」」

愛紗「おめでとうございます、純様！」

霞「ホンマようやくたわ!!」

翠「流石純殿だぜ!! あたし達父祖の地だけじゃなく、漢中も平定するなんて!!」

楼杏「ここまでの速さでやってのけるとは思わなかったわ……!!」

稟「純様、おめでとうございます！」

それに、皆は揃って祝福の声を述べた。

純「いや、俺だけじゃねー。皆の活躍があつてこそだ!! 皆に感謝する!!」

それに対し、純はそう言つて愛紗達だけじゃなく、その場にいる一兵卒にも拱手して

お礼を言った。それを見た者は、皆揃って純に跪いて拱手した。

純「皆立ってくれ。そして、俺の話聞いてくれるか？」

そう言い、純は皆を立たせた。

純「皆！俺は難しい事は分かんねーから上手く言えねーけど、この先どうなるか分かんねー。」

純「けど・・・いや、だから俺は、お前達と一緒に姉上の覇業を共に見て見たい！」

純「行くぜ！魏に『黄鬚』曹彰あり！俺達は一つだー！！」

そう言い純は太刀を天に掲げた。

「「「おおーっ！！」」」

それを見た将兵は、皆揃って雄叫びを上げた。こうして、僅か三ヶ月という驚異的なスピードで純は涼州を含め、漢中も平定したのだった。

58話

涼州、そして漢中を平定した純は、華琳に呼び戻され陳留に帰還した。その際、純は万が一のために涼州、漢中にそれぞれ強固な砦を築かせてそこに精兵を入れて帰還したのであった。陳留到着後、純を迎えたのは

栄華「お帰りなさいませ！お兄様！」

栄華だった。

純「ただいま、栄華。．．．別に、何もここで出迎える必要はねーぞ。」

栄華「遣いも受けましたし、見張りから遠くにお姿が見えたと報告がありましたので．．．いてもたってもいられなくて、お姉様に許可を貰って来たのですわ。」

栄華「ああ．．．数ヶ月見ない間に御髪もお衣装も砂だらけで。お風呂とお召し物の支度をさせていますから、お姉様に報告した後、すぐにお使い下さいまし。」

純「ああ、ありがとう。」

栄華「それはそうと、お兄様は流石ですわ！お兄様は数ヶ月前、西涼の奪還に行き、私の懸念を余所に『向かうところ敵なし』との知らせが頻繁に届き、返す刀で行った漢中でも劉備軍と戦闘になっても立て続けに勝利したのですわ！」

栄華「お姉様は特に心配しておりませんが、皆様は心からお喜びですわ！」

純「ふつ、ありがとう。けど、全ては皆の奮戦のお陰でもある。皆がいたからこそ、西涼と漢中は平定出来たんだ。」

栄華「ふふつ、やはりお兄様はお兄様。何も変わりませんわ。」

純「栄華。姉上は、何故俺を呼び戻したんだ？」

栄華「お兄様の戦勝を祝う宴で呼び出したのですわ。」

純「ただの戦勝祝いで、わざわざ呼び出したのか？」

その疑問に

栄華「宴は行いますが、お兄様を呼び戻した本当の理由は違いますわ。涼州と漢中は平定しましたが、お姉様は、お兄様をいたく気に掛けていて、早くあなた様に戻って来て欲しいのですわ。」

と答えた。

純「成程……。」

それを聞いた純は、華琳らしいと納得したのだった。そして、そのまま玉座の間に入行った。

玉座の間

純は玉座の間に入ると

純「姉上、ただいま戻りました。」

と言ひ、跪いて拱手し、それに続いて愛紗、楼杏、霞、翠、稟も続いて跪き拱手した。華琳「純、今回の活躍は既に私の耳に入っている。西涼の奪還だけじゃ無く漢中も平定し、劉備も撃退したと。良くやったわ!!」

純「愛紗、楼杏、霞、翠が奮戦し、稟が策を授けてくれたお陰でもあり、俺の手柄ではありません。」

華琳「そんなこと無いわよ。」

純「またこれは、姉上の英断のお陰でもありません。姉上の英断無くして、西涼奪還と漢中の平定はありませんでした。」

純「全ては姉上含め皆の力です。我が将兵には、姉上が直々に労つてくれる事を願つております。」

それを聞いた華琳は益々感激し、

華琳「分かったわ。純、本当にありがとう。」

と言い、席を立ち上がり、純に近づき頭を撫でたのだった。

一刀（華琳って、本当に純を大事にしてるんだな……。素直に顔が見たいと言えば良いのにな……。）

その様子を見ていた一刀は、内心苦笑いしながら思った。

純「それで姉上、俺を呼んだ理由は？ただの戦勝祝いで呼んだわけではありませんまい。」

華琳「ふふつ……。あなたは相変わらず鋭いわね。」

華琳「あなたの顔が見たくてね。それで呼んだのもあるけど、実は、あなたに頼みたい事があるのよ。」

それを聞いた純は

純「何でしょう。」

と拱手して答えた。

華琳「最近孫呉の動きが気になってね。あなたに防衛の要である合肥に行つて欲しいのよ。」

純「合肥ですか……。」

華琳「ええ。そこに行つて、孫呉を迎撃して欲しいの。頼めるかしら？」

純「お任せ下さい。」

それに純は拱手し、即答した。

一刀（合肥つて確か、張遼がガチ無双した戦いの地だよな。純も前回劉備が攻めた時、同じようなやり方で劉備と戦い、華琳の援軍で撃破した。）

一刀（純の性格上、同じ事をすると思うな・・・。）

その時、一刀は純を見てそう思った。

華琳「ありがとう。それで、兵馬の数はどうするのかしら？」

純「そうですね・・・。一応俺の子飼いで二万で行きます。」

華琳「分かったわ。では、あなたに任せるわ。」

華琳「それと、皆には伝えただけど、今後私は二度と戦に出ないわ。これから私はこの玉座にて座り、あなたの勝利の報告を待つわ。」

と純にそう言った。

純「然程までのご信任、申すべき事はありません。ご期待に添えるよう、粉骨砕身致します！」

それに純は、嬉しそうな表情で拱手しながら言い、風呂に入りに行った。

一刀「なあ、華琳。」

華琳「何かしら、一刀？」

一刀「前から軍の事、戦の事は純に任せてたけど、華琳が戦に出なくても良いのか？」

と一刀は華琳にその疑問をぶつけた。

春蘭「北郷・・・お前、華琳様の考えに文句があるのか！」

一刀「ち、違うつて春蘭！」

秋蘭「止めろ姉者。北郷は別に、純様の實力を疑つて聞いたわけじゃない。気になつたから華琳様に聞いたまでだ。」

華琳「そういう事よ春蘭、劍を下ろしなさい。」

春蘭「は・・・はい。」

華琳に言われて、春蘭は劍を下ろした。

華琳「別に良いのよ。私がいたら、純も己の武勇と軍才を發揮できない。それでは私は勿論、純自身も将兵も困るわ。離れた方が、互いに心地良いのよ。現に、今回の涼州、漢中平定でもそうだけど、純だけで行つた戦は大きな戦功を挙げているしね。」

華琳「それに、お父様の遺言でも、戦は純に全て任せ、私は国の事を考えるように言われたしね。」

一刀「それで、二度と戦に出ないと・・・。」

そして

華琳「私は常に純を信じているわ。純は期待を裏切らない、必ず劉備と孫策に勝てるわ。」

と強い意志を込めた目をしながらそう言った。それを見た一刀は、その姿の華琳に見惚れてしまったのだった。

蜀・成都

魏延「何故だ朱里!?何故漢中を攻めないんだ!!曹彰が不在の今、攻めるのに絶好の機会ではないか!!」

諸葛亮「焰耶さん、確かに涼州と漢中に曹彰さんはいません!しかし、涼州と漢中それぞれに強固な砦を築いております。そのまま出陣したら、我が軍の被害は前回の比ではありません!」

魏延「そんなの、やってみなければ分からないか!」

諸葛亮「また、曹彰さんの率いる兵は死をも恐れない百戦錬磨の精鋭であり、曹彰さん本人も一騎当千であり、天下に誇れる名将です!私か雛里ちゃんが行くのは勿論、焰耶さんや星さん、そして巖顔さんが挑んでも勝ち目はありません!」

この発言に

魏延「き、貴様ー！」

魏延は顔を真っ赤にして怒ったのだが

敵顔「止めんか、焰耶!!」

と敵顔に拳骨を食らった。

魏延「き、桔梗様・・・!!」

敵顔「焰耶!ここは軍師殿の意見に従うのだ!!」

魏延「し、しかし桔梗様・・・!」

敵顔「軍師殿の意見は的を得ておる。今のお主では、曹彰がいなくても勝てぬわ!」

魏延「し、しかし・・・!」

趙雲「焰耶、別にお主の実力を疑っているわけではない。お主と曹彰では、くぐった

修羅場の数が違う。私でも勝てぬ。」

趙雲「ここは我慢せよ。」

黄忠「焰耶ちゃん、ここは朱里ちゃんの意見に従いなさい。」

趙雲と黄忠のこの発言に

魏延「・・・分かった。」

魏延は顔を歪めながら言ったのだった。

劉備「それで朱里ちゃん、私達は何をすれば良いのかな?」

諸葛亮「今私達は孫策さんと連合を組んでいます。この連合で、曹操さんに対抗するしか道がありません。そして、孫策さんは孫権さんを使って合肥を攻める模様です。」

朱里「そこで、孫権さんの軍に援軍として加わり、合肥攻略の手助けをするべきかと。」

劉備「分かった、それで行こう。誰に行かせるのかな？」

諸葛亮「・・・焔耶さんに任せます。焔耶さん、お願いできますか？」

これに

魏延「・・・分かった。」

魏延は複雑な表情で言ったのだった。

劉備「焔耶ちゃん、無理しないでね。」

魏延「無論です！合肥全ての敵を討ち果たしてご覧に入れましょう!!」

そして、魏延は兵を率いて出陣したのであった。

59話

合肥

純「久し振りに見るな・・・長江。」

目の前に広がる大河を見て、純はそう呟いた。

愛紗「純様は、見た事があるのですか？」

純「一度だけな。」

霞「せやったら、そう感じるわなあ・・・。」

翠「あたしは初めてだぜ・・・。」

楼杏「私は一度だけ見た事あるわ。」

それぞれ色んな思いで長江を見ていた。

愛紗「純様、どうなさいますか？」

純「んー、俺はもう少し長江を見てる。お前達は稟に従って色々準備してきてくれ。」

愛紗「はっ。」

霞「了解や！」

翠「分かった！」

楼杏「純さんも気を付けて。この辺りはもう孫策さんの勢力圏なんですから。」

純「ん、分かってるよ。お前らも無理せず、休める時はしっかり休めよ。」

そう言い、純は皆に指示を出した。それに愛紗達は、合肥城に戻ったのだった。

純（まさか、今度ここに来る時は戦の時だと思っていたが、本当にその通りになるとはなあ……。）

純（それに、姉上はもう二度と戦に出ないか……。その分、俺としてはやりやすくなったと思うし、ここまで俺を信頼してくれてるんだ。昔姉上と約束した、覇道を成し遂げるため、この武で姉上の道を切り拓く……！）

そう思い、数分程長江を見ていた。

純「……！」

その時、後ろで人の気配がしたので腰の太刀に手を掛け振り向くと

??「え、ええと……。その……。ごめんなさい。」

桃色の長い髪で、蒼眼である見ず知らずの少女がいた。

純「悪い……。遂……。」

それを見た純は謝罪すると

?? 「いえ・・・構わないわ。ごめんなきさい、驚かせちゃって・・・。」

その少女は気にしてないという雰囲気です謝罪した。

純 「こちらこそ悪いな・・・。」

純 (何か誰かに似てる顔してんな・・・。)

その際、純はそう思いながら彼女の謝罪を受け入れた。

?? 「それより、何か考え事?」

純 「んー。考え事って言うより、嬉しい事かな?」

純 「俺、家の主でスゲー仕事が出来る姉がいるんだけどさ。元々外向きの仕事を全て任されたんだけど、姉も外に出る事もあったんだ。けど、今後は姉は二度と外に出ず、外向きの事は俺一人でやらせるって言われたから、信頼に応える為頑張らなきゃななって思ってた。」

純 (このくれーのぼかしだったら大丈夫かな?)

と彼女に言いつつ、そんな事を心の中で思った。

?? 「そう・・・。それは良い事ね、羨ましいわ。」

純 「そういうアンタは?」

純にそう言われた少女は、言葉を探し選ぶようにゆっくりと喋りだした。

?? 「私も、あなたと同じくとても仕事の出来る姉がいるの。私はずっと内の仕事をし

ていたのだけれど・・・少しは外向きの仕事を覚えろと言われて、外回りと一緒に随分と沢山の新人を任されてしまつて。」

純「成程ね・・・。急に色々やれつて言われても、難しいよな・・・。」

純（落ち着いた感じの女子だな・・・。ウチで言うなら、雰囲気は違うけど栄華みてーだな。）

??「ふふつ。けど、姉には姉の考えがあるのだろうし、仕事も覚えれば、もつと役に立てるのは分かるのだけれど・・・。」

純「それは難しいな・・・。」

??「ええ・・・。」

そう言つて、少女は溜息を一つついた。

??「・・・と、ごめんなさい。知らない人相手についついお喋りしてしまつて。」

純「気にすんな。誰しも悩む時もあるさ。」

??「そう。」

純「けど、あくまで俺の感覚だけ・・・。アンタのそういう所つて、武器になると思ふぞ。落ち着いてて、雰囲気優しいっつーか・・・話しやすいっつーか。」

??「ふふつ、そう言ってくれると少しは自信が付く気がするわ。・・・ああ、迎えが来たようね。」

そう言われ、純は彼女の視線に目をやると、こちらに手を振ってる何人かの女子の姿が見えた。

??「なら、今日はありがとう。短い間だったけれど、楽しかったわ。」

純「そつか……。そんじや、お互い頑張ろう。」

そして、その少女は手を振る集団の方に駆けていって、そのまま街の方へと消えていった。

純（話してる最中気付いたが、孫堅にそっくりだな、見た目が。孫堅の娘か……？）

その時、純はそう思い少女の後ろ姿を見ていた。その時

愛紗「純様、準備が終わりました。」

愛紗がそう言って戻ってきた。

純「分かった。では、行くとするか……。」

愛紗「はっ。」

そう言い、純は合肥城に行ったのだった。

周泰「蓮華様。先程の方は？」

孫権「さあ？どこかの豪族の御曹司のようだったけれど。」

先程純と話していた女子は孫権、字は仲謀。孫堅の娘であり、孫策の妹である。

甘寧「合肥には既に敵部隊が入っていると聞きますし、間諜かもしれませぬ。くれぐれも、お一人で出歩く事はなさいませぬよう。」

孫権「ええ、ごめんなさい。」

孫権「・・・それよりも、本隊は？」

甘寧「先程、建業を出たと伝令が届きました。至急合流するようにと。」

孫権「分かったわ。なら、すぐに合流地点に向かいますし。そのまま合肥を落とすわ。」

甘寧「はっ。」

孫権「・・・ふう。話しやすい雰囲気では何とかなる仕事なら、私ももっと気が楽なのだけれど。」

その時、孫権はそう思いながらその場を後にしたのであった。

60話

合肥

合肥に戻った純は、稟の知らせを聞くために城の執務室に入った。

愛紗「何と!？」

霞「十万か・・・!？」

楼杏「かなりの数ね・・・!？」

翠「スゲーな・・・!？」

合肥攻めの兵の数を聞いた皆は、それぞれ驚きの反応をした。

純「そうか・・・。」

翠「このような小さい拠点に十万か・・・。」

愛紗「その報告は本当か、稟?」

稟「建業の周辺に出していた物見からの報告なので、概ね間違つてはいないかと。訓練や盗賊退治に出すような兵力でもありませんし、進路は南ではなく、こちら側です。」

純「合肥は建業の目と鼻の先だ。そこに俺ら置いといて、遠回りして陳留攻めはねーだろうな。」

霞「せやなあ。ここには純という大物がおるしな。」

純「稟、敵の指揮官は？」

稟「孫策の妹の孫権です。」

純「孫策じゃねーのか。．．．それで、孫権の実力は？」

稟「今まで江南の統一に力を注いでいたようですね。かなり堅実な戦いをする方ですよですし、奇策で寡兵を補えそうにないですね。」

純「まあ、大軍でこの合肥を包围しようとしているからな。陳留に知らせは？」

稟「既に出しました。．．．が、増援が来るにせよ何にせよ、当面は私達だけで何とかする必要がありますね。」

純「そうか．．．。」

稟「それともう一つ。成都から軍が出陣したとの情報が入りました。その軍を率いる將軍は魏延。」

純「恐らく、孫権の軍と合流し、この合肥を攻略する算段か．．．。」

稟「はい、そうだと思います。」

霞「で、純。どないするん？合肥を放棄するんか？」

純「まさか……。ここは守るしかねーだろ。」

この言葉に

愛紗「純様!?!」

翠「純殿!?!」

楼杏「何か策があるんですか?」

愛紗と翠は驚き、楼杏は純にそう尋ねた。

純「包囲が完成する前に、敵を叩く。こつちから少数で仕掛けてやる。・・・それで連中がどんだけ本気かも分かるしな。」

純「その一当てで向こうの士気が落ちたら、儲けもんだ。そこから本隊を持って来てもう一撃叩いても良いし、その後の籠城でも、気合の入り方が全然変わってくるしな。」

この言葉に

愛紗「・・・それしかありませんね。」

霞「せやな・・・。」

愛紗と霞は目を閉じて言った。

翠「愛紗!?!霞!?!」

愛紗「翠、ここは覚悟決めてやらねばならん。」

霞「愛紗の言う通りや。それに、ここ抜かれたら、陳留まで落とされるんと一緒やか

らな。」

楼杏「翠さん、二人の言う通りよ。ここは私達で守り切りしましょう。」

翠「なら、誰が最初に向こうに奇襲を仕掛けるんだ？」

翠の言葉に

純「言い出しつぺの俺に決まってるだろうが。」

純は不敵な笑みを浮かべながら言った。

純「しかし、一人くらいは補佐が欲しいな。誰かもう一人いないかー。」

この言葉に

霞「なら、ウチがやるわ。」

霞が言った。

愛紗「霞……。」

楼杏「霞さん……。」

霞「楼杏はともかく愛紗も得意やろうけど、こういうのはウチの方が上や。」

翠「霞……。」

霞「翠は魏延の対策をすればええ。純も恐らくそのつもりやと思うし。」

純「そうだ。翠、頼むぞ。」

翠「あ、ああ……。」

純「良し。なら、まずは俺と霞が仕掛ける。で、相手の動き次第で愛紗と楼杏辺りの隊がもう一発入れて、引っ込んで籠城・・・こんな所かな。」

純「城はとりあえず稟、任せたぞ。もしもの事があつたら、そのまま逃げろ。・・・これで良いな？」

稟「・・・分かりました。この方針を基本に置いて進めましょう。しかし純様、私は決してあなたを死なせません。」

その時、稟は決意を込めた目で純にそう言ったのだった。

呉軍本陣

孫権「敵は二万なのね、穩。」

陸遜「はあい。しかも、その二万は曹彰さんの子飼いの兵なので、曹魏の全軍でも最精銳の軍です。」

孫権「・・・そう。」

甘寧「将は曹彰だと聞くが、軍師は誰だ、明命。」

周泰「はいっ！調べてきた所、郭嘉という方だそうですね。」

呂蒙「曹彰の懐刀ですね。曹彰の武勇が目立ちますが、郭嘉の知謀も曹彰軍の勝利に貢献しています。」

陸遜「そうですねー。亞莎ちゃんは相変わらず勉強熱心ですねえ。流石です。」

呂蒙「いえ・・・これも冥琳様に教わった事ですから。」

甘寧「曹彰だけでも厄介なのに。面倒だな。」

孫権「亞莎。曹彰の勝ち戦全てに、郭嘉が関わってるわけね？」

呂蒙「はい。先の涼州での韓遂の反乱ですが、韓遂を討ち取った後、すぐさま涼州と漢中を圧倒的な速さで平定しました。曹彰の武勇と果断さ、そして将兵の精強さもあつたと思います。郭嘉のある言葉で賛同したのもあり、このように圧倒的な速さで平定出来たのです。そのため、漢中の支援に向かった劉備も、ろくな準備が出来ずに敗北したのです。」

孫権「そのある言葉とは？」

呂蒙「はい。確か、『兵は神速を尊ぶ』でした。」

孫権「『兵は神速を尊ぶ』か・・・。」

陸遜「中々言い得て妙ですねえ・・・。」

呂蒙「蓮華様。如何なさいますか？」

孫権「こちらは奇をてらわず、正攻法で肅々と攻めるつもりよ。私は例え敵兵が百でも手を緩めるつもりは無いし、変えるべき標的も合肥を越えた先にしかないわ。」

陸遜「そうですねえ。こちらは新兵も多いですから、複雑な動きは混乱を呼びます。」
陸遜「何より、数は最大の武器です。敵の動きに揺らぐ事なく、確実に攻撃を行うのが一番かと。そうすれば、流石の曹彰さんとその子飼いの兵も敗北は必死かと。」

孫権「二万の守兵には申し訳ないけれど、こちらは十万の兵で圧倒させてもらいます。皆も良いわね？」

甘・呂・周「二はっ！／はい！／はいっ！二」

そして、孫権達は明日の城攻めのため、休息を取ったのだった。

61話

合肥

純「さあ皆、食べ食べ！最後の飯だ、遠慮なく食べ！明け方には出るぞ！」

霞「おおきにな、純ー!!」

「「おおーっ!!」」

その日の晩、純は共に同行を申し出た兵達と城の庭で盛大に夕食会を開いていた。

楼杏「物騒な事言わないで下さい・・・純さん。」

それを聞いていた楼杏は、眉間にしわを寄せながらそう言った。

純「構わねーって。こんな死ぬのが分かってる作戦に付いてくるんだ、今さらそのく
らいでガタガタ言う奴なんかいるかよ。なあ？」

黄鬚隊兵士A「そうですよ！我らは曹彰様と一つですから！そんな事より肉、美味い
です！」

霞「ホンマやなー!!」

純「そうかそうか。けど、腹一杯になりすぎるなよ。動けなくなったら遠慮なく置いていくからな！」

黄鬚隊兵士A「ははは、分かってますよ！とりあえず死ぬほど食います！」

純「分かってねーじゃねーか、馬鹿！死ぬのは食った後だぞ！」

霞「せやで！純もええツツコミやなー！」

そう言つて、純はその兵士の頭を叩きながら、上機嫌で笑つた。叩かれてる兵だけじゃなく、その他の兵も、霞もだ。

楼杏「・・・純さん。」

純「ん？」

楼杏「必ず戻つて下さい。」

純「あはは。お前にそう言つて貰えると、生きて戻らなきゃって思つちまうなあ・・・。」

純「援護は頼むぞ、楼杏！霞も、共に暴れようぜ！」

楼杏「はい！私と愛紗さんの二人で、何とか支えてみせます！」

霞「応！ウチもメツチャ暴れたるわ！」

そう言つて、霞は気合を入れた顔で答えたのだった。

そして、夜が明けて

純「行くぞお前ら！『黄鬚』曹彰に付いてこい!!」

霞 「暴れたるでー!!」

「「おおーっ!!」」

純は霞らと一緒に出撃したのだった。

蜀軍

魏延 「出立したのは曹彰と張遼か。・・・まだ仕掛けなくていいんだな？」

孫乾 「合肥攻めの主役はあの方々ですもの。好機を待ちましょう。」

孫乾 「私達が打つべきは、戦況を覆す回天の一手。場を見極め、焦らず、狙いを定めて・・・確実に当てるように致しましょう。」

魏延 「分かった。任せよう。」

その時

「「ワーツ!!!」」

魏延 「何だ、何の騒ぎだ？」

孫乾「分かりません……。」

前方より騒がしい声が聞こえた。すると

蜀軍兵士A「で、伝令！前方より、敵の奇襲部隊が！」

魏延「何?!旗は！」

蜀軍兵士A「それが、まだ夜が明けきつてないため、良く見えません！」

魏延「何と!？」

孫乾「マズイですわ!？」

奇襲を受けたとの知らせが入り、魏延と孫乾は動揺してしまった。

翠「おりやああつ!!前方にいるのは敵軍だ!!遠慮なく叩き潰せ!!」

「「おおー!!」」

翠の奇襲で蜀軍は大混乱に陥ってしまった。

しかし、大混乱に陥ったのは蜀軍だけではなかった。

呉軍本陣

甘寧「奇襲だ?! 穩!

陸遜「は、はいっ! 完全に不意を突かれましたあ。今は不寝番の亞莎ちゃんが、第一陣を率いて対応に出ています!」

甘寧「くそっ。私も出る! 明命は蓮華様をお護りしろ!」

周泰「分かりました!」

甘寧「確かに奇襲ならば早暁というが……十万の我々を相手に、どれだけの兵で攻めてきたのだ、彼奴ら!」

孫権「思春……気を付けて。」

甘寧「蓮華様は本隊の展開をお願い致します。それまでの時間は、こちらで率いた兵で稼ぎます!」

孫権「分かったわ。急ぐわよ、明命、穩!」

周泰「はいっ!」

陸遜「分かりましたあ!」

合肥

純「おりやああつ!!」

呉軍兵士A「グハアツ!!」

呉軍兵士B「ガハアツ!!」

呉軍兵士C「ウワアツ!!」

呉軍兵士D「ひいひいっ!お助けええっ!」

純「何だ何だ、齒応えがねーぞ!!江南の兵は腰抜けの集まりか!テメーらア!」

純「逃げんじやねーよ、向かって来いよー!!俺は死に場所を探しにここに来たんじや
!」

純「俺を殺さねーんなら、テメーら十万の首、皆俺で刈り取ってやるぞ!!うおりやあ
あつ!」

そう言つて、純は呉軍兵士をどんどん斬り捨てていった。その時

霞「純、敵陣に動きがあつたで!」

霞から敵に動きがあったと聞いた。

純「やつとか！ならお前ら、次はあの集団にぶちかましてやんぞ！死にたい奴だけ付いて来い！」

純『『黄鬚』曹彰に付いて来いー!!』

霞「お前ら、純に遅れを取ったらアカンでー!!突撃やー!!!」

「『おおーっ!!』」

そして、純達は敵陣に突っ込んでいった。

純「おらおらおらあ！『黄鬚』曹彰のお通りだー!!怪我しなくなったら、すっこんどけ!!」

霞「純速いでホンマー!!涼州、漢中平定でも付いていくので大変やったのにー!!」

霞「けど、頑張って付いていくでー!!」

呉軍も必死に止めようとするが

純「うおりやああっ!!」

呉軍兵士E「グハーッ!!」

呉軍兵士F「ガハアッ!!」

霞「うりやああっ!!」

呉軍兵士G「グフッ!!」

呉軍兵士H「ウワアツ!!」

純と霞の前に手も足も出なかった。そして

純「気張るぞ、お前ら!俺達にしか出来ねー速さを見せてやんぞ!」

純の発破に

「「おおーっ!!」」

霞「おっしやー!!やつたるでー!!」

黄鬚隊は益々士気が上がり、霞も気持ち益々昂ぶった。そして、そのまま突破したのだった。突破しても当然敵陣のど真ん中なのでまだいるが

純「まだまだ止まらねーぞ!『黄鬚』曹彰の恐ろしさ、そして黄鬚隊の恐ろしさ、とくと見せてやらー!!」

「「おおーっ!!」」

霞「ウチも、張文遠の恐ろしさを見せつけてやるでー!!」

それでも純達の勢いは止まらなかった。

純「何だ何だ孫策の兵はこの程度か!」

霞「おらおらおらあ!まだまだやでー!」

そして、そこも突破していくと

呂蒙「曹彰!これ以上好きにはさせない!」

呂蒙が率いる部隊に出くわした。

純「お？ようやく骨があるっぼい奴のご登場だな。」

霞「そのようやな。」

純「おい、テメーが孫権か？」

呂蒙「孫権様がこんな所に顔をお出しになるものか！」

純「んだよつまんねーな。さっさと孫権を出せ！」

呂蒙「この狼藉者めっ……その首、我が君に捧げる！」

純「やってみな。行くぞ!!」

霞「ヨッシャー!!」

「「「おおーっ!!」」」

純「ここを抜いたら帰んぞ！最後の踏ん張り所だ！」

霞「応！お前ら、最後まで気張りい！」

「「「おおーっ!!」」」

そして、呂蒙の部隊と交戦した。呂蒙の部隊の方が数が上だった

呂蒙「くっ……何という勢い。まるで稲妻……！」

純「テメーらこんなへなちよこばつかで、本気で戦う気あんのか！こんなんでこの『黄鬚』を討ち取れると思つたら大間違いだぞ!!」

純達の圧倒的な勢いに完全に押されてしまったのだった。

魏軍援軍

華侖「え、もう始まつちやつたんすか!？」

柳琳「そうみたい。流石稟さん、判断が早いわね。」

栄華「そうですわね。・・・急ぎましょう。」

この時、華琳からの援軍が合肥に到着したのだった。

合肥

純「うおりゃああつ！」

呉軍兵士 「「グハアツ!!」」

呂蒙 「総員、防御態勢!あの流れを押し留めて!」

しかし

純 「その程度の防備でこの俺が止められるかあつ!もっと分厚い壁を持って来い!」

呉軍兵士 「「ガアアツ!!」」

純にあつさり斬り捨てられた。この惨状に

呂蒙 「くつ!これが曹彰・・・これが曹子文・・・これが『黄鬚』・・・!申し訳あり

ません、蓮華様つ!」

呂蒙は心が折れかけていた。

呉軍兵士I 「呂蒙様、危ないっ!ぐあああつ!」

呂蒙 「・・・っ!」

呉軍兵士J 「お、お逃げ下さいっ!」

純 「んだその田舎芝居は!俺の前に立ったんなら、覚悟決めろっ!」

呂蒙 「お、おのれ・・・!・・・きやああつ!」

純 「今は亡き孫文台が鍛えたと言うが、将も兵もそんなもんか!江南の連中は変わらず雑魚か!」

その時

霞「純、危ないっ!!」

甘寧「はあああつ!!」

純「おっと・・・!?」

呂蒙「し、思春様っ!」

甘寧「亞莎、無事か!」

亞莎「は、はい、何とか!」

純「ふっ・・・やつと面白くなってきたな。」

霞「せやなあ・・・。」

甘寧「既に蓮華様や穩の本隊も動き出した。お前も続け!」

呂蒙「し・・・しかし・・・!」

甘寧「早くしろ!私では、あの一撃で曹彰を止めるので精一杯だ!それに張遼も!早

く行け!」

呂蒙「は・・・はいっ!」

純「いいねー!こつからが本番だー!!」

しかし

純「・・・と言いたい所だが、退くぞ、霞!」

と純は霞にそう言った。

霞「何でや！こつからが本番やのにー！」

純「奇襲はあらかた成功した。愛紗と楼杏も、良い具合で一発入れたしな。それに、姉上からの援軍も来たようだしな。」

そう言われて霞もよく見ると、後方で何か動きがあるのと、新たに三つの曹の旗が確認できた。

霞「なら、しゃーないなあ・・・。」

純「そういう事だ。引き上げんぞ！」

そう言つて、純達は馬首を切り替えて急ぎ撤退しようとした。

甘寧「待て曹彰！ここまで我らに被害を加えたんだ！刺し違えてでも、貴様を討つ!!」
すると、仲間の呉軍の兵士を殺され呂蒙も被害を受けたのを見て冷静さを欠いた甘寧は、純に攻撃を仕掛けた。

純「この俺を討つだあ？やってみろ。」

甘寧「っ!？」

しかし、後ろを向いた状態ながらの純の圧倒的覇氣と殺気に、甘寧は鈴音を落とし棒立ちになり

甘寧「あつ・・・あつ・・・。」

涙を浮かべてしまったのだった。それを尻目で見た純は

純「ふんっ！この程度で怖じ気づくとはな……。行くぞ。」

霞「ああっ！」

そう言つて、合肥城へ撤退した。

甘寧（な……。何て覇氣と殺氣だ。まるで虎……。！それも、雪蓮様と亡き炎蓮様以上のだ……。！）

一方、先程純に覇氣と殺氣を当てられた甘寧は、棒立ちのまま身体を震わせ涙を流し続けたのだった。

そして、純のこの奇襲は大成功に終わり、呉軍は奇襲による混乱で同士討ちもあり、一万の死傷者を出した。一方救援に向かった魏延達の軍も、翠の奇襲の影響で甚大な被害を受けたが、何とか切り抜け、呉軍に合流したのであった。

6 2 話

呉軍本陣

孫権「魏延……救援に来てくれた事、心より嬉しく思う。そして、曹軍の奇襲を受けたとはいえ、よく逃れたわね。」

魏延「いえ。このような状態で救援もままならず、大変申し訳ございません。」

甘寧「……しかし、劉備が本場に援軍を寄越すとは思ってもみなかったぞ。先の曹彰との戦では二度惨敗を喫し、今回は馬超の奇襲に手も足も出なかったと聞いたが。」

魏延「何だと……貴様こそ、曹彰の前に手も足も出さず、涙を流したと聞いたが……！」

甘寧「……貴様！」

この状況に

孫権「思春！口が過ぎるわよ。」

孫乾「焰耶様。ここは穩便に……。」

この二人は窘めた。

甘寧「ぐ……つ。」

魏延「……むう。」

孫乾「そう思うのも当然の事ですわ。我々の主、劉玄德は曹孟徳の弟曹子文に手痛い敗北を喫したのは事実。」

孫乾「しかし共に曹操と戦う盟友への援軍も寄越さぬとあつては、同盟を結んだものとしての名折れ。十万の大軍の前にはほんの僅かな兵ですが、存分にお使い下さいませ。」

孫権「分かったわ。その力、頼らせて貰う。」

魏延「では、今後の攻めは如何様に？」

孫権「曹子文の武勇とその子飼いの兵の精強さは、我らの予想を越えていた。まさに『黄鬚』の異名に相応しく、こちらの兵の肝胆を寒からしめるものだったわ。だからこそここは足並みを乱さず、進み続ける事が大切よ。」

孫権「増援が加わったとはいえ、こちらの戦力は向こうよりも遙かに優勢。城を取り囲み、そのまま押し潰すわ。」

魏延「……ふむ。承知致しました。」

しかし

甘寧「敵の奇襲に対応出来なかつた余所者の手は借りん。この後は、我々でカタを付ける。」

と言つた甘寧に対し

魏延「ほほう。その奇襲を防げず、あまつさえ敵将の前に怖じ気づき、涙を流した輩が、何を嘯る。」

魏延もそう言つて言い返した。

甘寧「何……」

魏延「……やるか？」

これには

孫権「思春！」

孫乾「焰耶様。」

また二人が止めたのだが

甘寧「……ちつ。」

魏延「……ふんつ。」

天幕の空気は更に悪くなった。

呂蒙「あうう……。大丈夫なんでしょうか、穩様……」

陸遜「さあ……。？こればかりは、やってみないと分かりませんねえ。」

この状況を見た呂蒙と陸遜は、不安になったのだった。

合肥城

愛紗「もうすぐ奴らが来るぞ！準備を急げえ！」

霞「ぎょうさん応援が来たから、これなら十万相手の籠城戦も乗り切れるで。柳琳、ホ
ンマにありがとうな！」

翠「確かにそうだな！」

柳琳「お姉様が、もしもの事を考えて・・・私達に援護をお命じになったんです。」

霞「おー！流石華琳やな！」

柳琳「しかし、来てみたら予想以上の戦果でしたね。」

華侖「純兄は凄いつすよ！あんな大軍相手にどンドン斬り込んでいつて！」

栄華「・・・。」

愛紗「しかし、お三方が来てくれたお陰で、私と楼杏殿は良い具合で敵に一撃を加える事が出来ました。ありがとうございます。」

楼杏「私からも、ありがとうございます。」

そんな話をしていると

純「おお柳琳達！救援感謝するぞ！」

純がやって来た。

愛紗「純様。此度の活躍、お見事でした。」

翠「流石純殿だぜ！」

稟「相変わらず、あなたの武勇は軍師としての常識を疑いますね。」

霞「ホンマやで！ウチも付いてくので精一杯やったわ！」

楼杏「とはいえ、私はどうなるか不安でしたけど・・・良かったです。翠さんの奇襲

も成功したようですし。」

華命「純兄は凄いつすよー！」

そして、愛紗達は口々にそう言った。

純「しかし、皆の奮戦のお陰だ！翠も奇襲、見事だったぞ！」

愛紗「はっ！」

楼杏「ありがとうございます！」

稟「はっ！」

霞「おおきに！」

翠「ありがとう！」

それに純は、そう言つて皆を褒めたのだつた。

栄華「・・・どうして、お兄様はいつもいつも。」

しかし、その中で栄華は、腕を震わせ怒りを必死に抑えながら眩きを漏らした。

純「どうした、栄華？」

彼女の様子に気付いた純は、栄華に近付くと

栄華「っ!!」

パンツ

純「っ!?!」

栄華に頬を叩かれたのだつた。その時、栄華は目に薄らと涙を浮かべながら唇を噛みしめていた。

愛紗「栄華様!?!」

楼杏「栄華様!?!」

稟「栄華様!?!」

翠「栄華!?!」

霞「栄華!?!」

華命「栄華!?!」

柳琳「栄華ちゃん!」

これには、皆が驚いてしまった。

純「何しやがる・・・!」

これに純は怒ったが

栄華「どうして、どうしていつもお兄様はそうなんですか!!」

純「栄・・・華・・・?」

栄華の剣幕に言葉を失ってしまった。いつも純を見つめる栄華の瞳は、とても優しげなものなのだが、今は怒りに満ち溢れていた。

栄華「お兄様は、そうやっていつも一人で無茶をして・・・!いくらお姉様の霸道の為とはいえ、やり過ぎですわ!」

栄華「もしかして、自分が強いから戦に関して助けが無くても何でも出来ると、本気で考えているのですか!」

栄華（――やめて。）

純「栄華!俺はそんな事一度も思った事・・・」

栄華「いいえ、思ってますわ。そうじゃなかったら、いつもこんな無茶をしませんわ!」

栄華（――違いますわ。こんな事を言いたいのではありませんわ。）

栄華（――私はただ・・・）

栄華（――お兄様の助けになりたかったただであって、こんな酷い事、言いたくありませんわ!）

純「ちげーって、栄華！俺は・・・」

栄華「つ！来ないで下さいまし!!」

弁明する純を、栄華は強く拒絶した。

純「・・・!？」

その時

翠「栄華、お前・・・!」

栄華「つ、あ・・・」

翠に怒鳴られ、そこでようやく栄華は冷静さを取り戻した。だが時既に遅く、目の前には、傷ついた表情をした純の姿があった。

栄華「あ、わ、わた・・・私・・・」

自分は今、何を言っていたのか。純に非は無かった。

けれど、純の自ら大軍団に突入したという危険極まりない行動、その姿勢を頼もしいと思いつつ心配で堪らなかった自分と元気な姿を見れて安心した自分、そういつた気持ちがちがごちゃ混ぜになり、今まで蓄積されていた思いが、思わず爆発してしまったのだっ

た。

栄華「っ！」

純「栄華！」

それがいたたまれなくなつて、これ以上純の顔を見る事が出来なくなつた栄華は、そのまま駆けてどこかへ行つてしまつたのだつた。

翠「ほつときなよ、純殿。いくら何でもあれは言い過ぎだぜ。」

それを追い掛けようとする純を、翠はそう言つて止めたのだが

純「良いんだ、翠。アイツにどう思われても構わねー。栄華は、俺にとって大切な人の一人なんだからよ。」

と言ひ、純は栄華を追い掛けに行つた。

翠「純殿……。」

愛紗「翠、お前の気持ちは良く分かる。けど、これは純様と栄華様の問題だ。私達がいちいち口を出す権利は無い。」

霞「愛紗の言う通りや。翠、ここは純に任せた方がええ。」

その言葉に

翠「……分かつた。純殿を信じよう。」

翠はそう答えたのだつた。

柳琳（・・・お兄様、栄華ちゃんをお願いします。）

その時、柳琳は純の背中を見てそう思ったのであった。

とある部屋

栄華「・・・うつ・・・ぐすつ。」

一方栄華は、とある部屋の寝台に顔を埋め、声を押し殺しながら涙を流した。

栄華「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・。」

そして、ずっと謝罪の言葉を口にしていた。それは勿論、純に対してだ。

本当はあんな事を言うつもりはなかった。にもかかわらず、純を傷付けてしまった。悔やんでも悔やみきれず、こうして泣いていた。

ガチャ

栄華「っ!？」

その時、扉の開く音がして

純「栄華・・・。」

純の声が聞こえた。

栄華「……お、兄様……。」

それに栄華は、顔を上げた。すると

栄華「お、お兄様……!？」

純は、栄華を抱き締め

純「……悪かった。」

と謝罪した。

栄華「……えっ？」

これには、栄華は混乱してしまったのだが

純「そこまで心配させてしまって、本当に悪かった。けど、俺は幼い頃姉上に誓ったんだ。目標とする衛青と霍去病のような將軍になって、姉上の覇道に貢献するって。その為に、俺は最前線で將兵と共に武をふるってんだ。」

純「けど……お前にはいつも心配を掛けてしまったな。本当に悪かった。」

栄華「……お兄様。」

すると

ギョッ

純「！」

栄華は純の背中に手を回して強く抱き締めた。

純「栄華……。」

栄華「こちらこそごめんなさい、お兄様。やはり、お兄様は何も変わっていないのに、あんな事を言つてしまいましたわ。お兄様……。」

そう言つて、栄華は大粒の涙を流した。

それを見て、純も抱き締めてた腕を更に強めた。やがて、どちらからともなく身体を離し、互いにそれを名残惜しみながら、見つめ合いそして

純・栄「……んっ……。」

どちらからともなく、口づけを交わした。

ただ食欲に相手を求め、貪るように唇を合わせていき、いつまでもいつまでも……交わし続けたのだつた。

63話

合肥城

榮華と仲直りした純は、すぐに軍議を開いた。

華命「純兄、策はどうするんすか？皆で脱ぐんすか？」

柳琳「ね、姉さん!？」

純「いや、脱がねーよ。成功した奇襲をまた使うか、稟？」

稟「そうですね。今日と同じので良いと思います。」

愛紗「しかし、手抜きを感じがするぞ。」

榮華「それに、同じ策を向こうは警戒してはるはず。上手くいかないかと。」

稟「いえ、これを逆手に取れば良いのです。」

この言葉に

純「……そういう事か。皆、とりあえず肉を焼くぞ。」

華命「お肉つすか！賛成つすー！」

純は肉を焼くよう命じ、全軍で肉を焼いたのだった。

呉軍本陣

孫権「……この時間に炊事の煙？」

周泰「はい。城の中央から、月明かりでも分かる程の大きな煙が立ちのぼってですね。お肉の匂いと、賑やかな声が沢山……。」

魏延「連中、今日の夜襲の前にも宴を開いておりました。恐らく、死兵を送り出す手向けかと。」

甘寧「今夜も夜襲があるというのか？まさか。」

呂蒙「その可能性も無きにも非ずですね……。」

陸遜「そうですねえ。亞莎ちゃんの言う通りかもしれないですねえ。」

陸遜「向こうの戦力も限られてますし、曹彰さんを軸に置くなら、やはり今日のような夜襲が一番じゃないかと。まだこちらの軍には、今日の恐怖も残ってますし……。」

孫権「……あり得るわね。向こうの軍師は、奇策の使い手でもあるし、曹彰は常識

外れの武勇と軍才。相互が合わされば・・・」

陸遜「まさに虎に翼ですねえ・・・。」

甘寧「ならばこちらにも不寝番を強化するまでです。明命、向こうに気付かれないように、見張りの数は昨日の倍にしておけ。」

周泰「はいっ！お任せ下さい！」

こうして、呉軍は夜襲への警戒態勢を布いたのだった。

合肥城

愛紗「次の肉焼けたぞ！お前ら、遠慮なく食べよ！」

「「おおうっ!!」」

翠「んんーうめー!!？愛紗もほら、楼杏も食べよ!!？」

楼杏「え、ええ・・・食べるから翠さん、落ち着いて・・・。」

愛紗「そうだと翠、そんなにがつついて、はしたないぞ!!？」

愛紗の注意に

翠「そういう愛紗の両手にも、美味そうに焼けた肉があるじゃねーか!!？」
と翠は言った。これには

愛紗「いや・・・これは」

愛紗は苦笑いした。

華侖「むぐむぐ・・・お肉美味しいっす！ーももつと食べるっすよ！」

柳琳「ち、ちゃんと食べてるから。・・・でも、私達もご一緒して良かったんですか
？」

柳琳の疑問に

純「食料も十分備蓄はあるから、大丈夫だ。」

と答えた。

栄華「確かに備蓄に余裕はありますけれど・・・」

すると

霞「なんやなんや、そないに景気の悪い顔してからに。」

霞がやって来た。

純「おお、霞！」

霞「ほい純、肉！後、稗も今日はちよつとなら酒飲んでええって。」

純「おお、そうか！許可を貰ったか！」

それに

栄華「え、霞さん、これからお兄様と一緒に奇襲作戦ではありませんの？それをどうしてお酒まで……！」

栄華はそう尋ねた。

純「むぐむぐ……ゴクン。奇襲？」

栄華「お兄様、さっきのお話の時、稟さんと一緒に作戦は今日と同じと言ったばかりでは……」

純「んー。んな事、言っただけ？」

それに純がそうとぼけると

稟「言いましたよ、純様。」

とちようど来た稟に言われてしまった。

純「おお、稟か。」

純「今日の肉は、戦の仕切り直しで食おうと思っただのなんだが。」

栄華「なら奇襲は？」

これには

純「お前、酒飲んで奇襲すんのか？」

純にそう言われ

栄華「……。」

栄華は黙ってしまった。

稟「それに、向こうも思ってるはず。一度成功した策を、二日連続で再び仕掛けてくるはずだ……と。」

柳琳「まあ……それは。」

華命「なんだかごちゃごちゃしてきたつす。」

純「とにかく、腹一杯になったら、お前らは明日に備えて寝ろ。明日も籠城戦だ。」
そう言つて、純は肉を片手にその場を後にした。

翌日・呉軍本陣

周泰「ふああ……おはようございます。」

呂蒙「奇襲……ありませんでしたね。」

甘寧「ああ。こちらの警戒に気付かれたのだろうか……明命。」

周泰「ふえっ!? 警備の数は気付かれないように、待機の兵しか増やしてませんよ!」

孫権「まあ・・・奇襲がないに越した事はないわ。今日こそは敵の城を落としましよ
う。」

周泰「はいっ！頑張ります！」

そして、呉軍の城攻めが始まった。

合肥城

愛紗「投石用意・・・撃てーっ！」

ヒュー・・・ドーン！

愛紗「良し！どンドン撃つのだっ！」

それを見た

霞「愛紗・・・それウチもやりたかったのに・・・。」

純「あは・・・。」

霞は涙を流しながらそう言い、純は苦笑いをした。

あの奇襲から数日が経った。孫権は攻撃こそしてくるが、十分な増援を得た純達は堅

実に防衛出来ていて、戦況は一進一退だった。

稟「純様。こちらの調子は？」

純「順調だ。向こうも俺と霞、そして投石機を警戒して、あんまり派手に仕掛けてこねーしな。」

純「それに・・・敵の士気も明らかに落ちてる感じだしな。」

稟「成程・・・。」

翠「こつちはちゃんと飯も食ってるし、休みもしっかり取れてるから気合十分だしな！」

それに対し純達は毎晩肉を焼いていた。糧食の備蓄に余裕はあり、栄華も少し文句を言うくらいで、誰が反対するわけでもなくそれどころか、将兵皆が飯が美味いって大喜びしていた。

華命「でも、お肉はちよつと飽きてきたっす・・・。」

翠「それはあたしもだな・・・。」

純「そうか・・・稟。」

稟「でしたら、今夜は魚を焼いて食べましょう。」

華命「お魚!?あるんすか！」

稟「はい。孫家が攻めてくる前に仕入れておいた、海の魚の干物が沢山ありますの

で。」

純「まあこの辺は、陳留に比べて海が多いからな……。つーか、いつの間に。」

稟「私も食べてみたんですが、中々美味でしたよ。」

純「よし、今日は魚だな！お前らーっ！今日の晩飯は魚だぞー！気合入れてけー！」
 「「おぉーっ!!」」

呉軍本陣

甘寧「まだか！まだ攻めて来んのか、あいつらは！」

一方呉軍は、未だに奇襲を仕掛けてこない為疲労困憊になっており、甘寧は苛ついていた。

孫権「もう向こうの夜の食事は、日常と見た方が良さそうね。」

周泰「そうですね。昨日の夜はお魚を焼いてたみたいですし。」

これには

甘寧「……魚だと？」

甘寧は驚いてしまった。

周泰「偵察に行つたら、何だか香ばしい匂いが漂つてきて……お猫様がとつても喜びそうだなあつて。」

孫権「魚はともかくとして、この状況はまずいわね。」

陸遜「はい。流石に連日の警備強化で、こちらの兵も元気がなくなつてますし……。」

呂蒙「何より、曹彰と張遼が攻めてくるといふ噂に尾ひれが付いて……かなり兵達に不安が広まっているようです。」

これに

甘寧「そのような噂、箝口令を出せば済む事ではないのか？」

甘寧がそう言ったのだが

陸遜「それは逆効果でしょうねえ。……穩達が言わないようにつて言つちやうと、それが真実だと言っているも同じですから。」

と陸遜は意味が無いと言つた。

孫権「噂は消えるまで待つしかないわね。」

呂蒙「敵ながら、向こうも城を良く守っています。与し易い敵ではないのは確かですし……。」

甘寧「蓮華様。こうなつたら、建業に救援を求めては。」

孫権「流石にそれは・・・雪蓮姉様に何と言えば良いのか分からないわ。この時点で、こちらの被害が甚大とは言え、敵兵はこちらの半分もいないのよ?」

甘寧「ぐ・・・確かにそうですが。」

陸遜「いずれにしても、攻城戦は始まったばかりです。陳留攻めを考えれば急ぐ必要はありますが、ここで焦つても仕方ありません。落ち着いていきましょう。」

孫権「・・・そうね、それしかないか。」

この状況に、そうするしか無かつたのだつた。

合肥城

霞「肉、焼けたでー!皆じゃんじゃん食い!」

そして更に数日が過ぎ、純達は変わらず贅沢に飲み食いしていた。

純「ん?何か今日の肉、いつもよりメツチャうめーな?」

柳琳「はい。いつも同じお肉では飽きてしまうので、流琉さんから一刀さんに前に教えて貰ったタレに漬けておいたんです。」

稟「それが良い具合に食べ頃だと聞いたので、今日はそれを食べようという事にしました。」

純「成程ね……。。」

そして

純「……。稟、今夜辺り、奇襲を仕掛けてみたら良いんじゃないか？」

純は稟にそう言った。

稟「そうですね、敵の状況を考えたら、ちょうど良い時期ですしね。」

純「よっしゃ！なら……。霞！」

霞「なんや、純！」

純「今夜、奇襲仕掛けてみようぜ。」

純は、不敵な笑みで霞にそう言った。

霞「お、ええなー！」

それに霞は、満面の笑みでそう答えた。

純「よっしゃ、ならお前ら！これ食い終わったら出陣の準備をしろ！この勢いで一気にあいつら、追い払うぞ！」

「「おおーっ!!」」

そう言って、純は霞と一緒に奇襲の準備を始めたのだった。

64話

呉軍本陣

孫権「何・・・こんな時間に騒がしいわね。不寝番の兵が喧嘩でもしているの？」
辺りの騒がしい声に、孫権は目を覚ました。すると

陸遜「蓮華様、大変です。敵の奇襲ですよ！」

陸遜から奇襲を受けたとの知らせを受けた。

孫権「な・・・今頃になって!？」

これには、孫権は驚きを隠せなかった。

陸遜「奇策と曹彰さんの噂に振り回されすぎました・・・。うう、申し訳ありません。」

孫権「謝るのは後になさい。状況は！」

陸遜「もう思春ちゃんも明命ちゃんも出てます。魏延さんも、さつき出ましたあ。」

孫権「なら、前に出た皆が攻撃を止めている間に、本隊も態勢を整えましょう！」

陸遜「はいっ！」

孫権「うう……孫呉の領地を取り戻す戦いならともかく、どうしてこんな所で振り回されて……！」

これには、孫権はそう言つて悔しさを滲ませたのだった。

合肥

呉軍兵士A「うわああああっ！曹彰だあああ！」

呉軍兵士B『『黄鬚』が来た、『黄鬚』曹彰が来たぞおおおっ！』

呉軍兵士C「こっちは張遼だあああ！」

呉軍兵士D「張遼が来た、張遼が来たぞおおおっ！」

純「んだよ、つまんねーな！うおりやああっ！」

霞「ホンマや！こいつら、腰抜けだらけか！がーっ！」

大混乱の呉軍に、純と霞は雄叫びを上げたら

呉軍兵士E「わああああ！お助けえええっ！」

更に混乱してしまった。

純「やはり、敵の士気はダダ下がりだったか。しかも、俺と霞の名前聞いて逃げ出す程か！」

霞「純、そうやけど深追いはアカンで！」

純「分かかってるよ！こんだけ引つ掻き回しや、十分だろ。戻んぞ！」
そう言つて、純は霞と一緒に引き上げた。

愛紗「・・・凄いな、純様は。」

楼杏「相手は完全に混乱しているようね。・・・悲鳴しか聞こえないわ。」

朝焼けの中で逃げ惑う敵兵の姿は、地獄絵図そのものだった。

翠「純殿は、歯応えがなさ過ぎて、霞以上にキレてるだろうぜ・・・。」

愛紗「翠か・・・。どうだった？」

翠「ああ。回りには伏兵や、そういう兵力はいなかったぞ。魏延も孫権の部隊の立て直しに追われてるようだしな。」

稟「なら愛紗、号令を。」

愛紗「ああ。」

そして、愛紗は自身の馬を前に出し、

愛紗「聞けえ！既に敵陣は純様のお陰で混乱の極みにある！敵兵の数は我らの倍だが、そこから生まれる混乱は、それを遙かに超えるだろう！それはこちらのつけ込む隙となる！」

愛紗「私達の先には、我らが主、曹子文がおる！純様に遅れを取るな！」

愛紗「総員、突撃ーっ!!」

黄鬚隊に号令を出したのだった。

純と霞の方も、呉軍に猛攻撃を仕掛けた。対する呉軍も、魏延と一緒に迎撃していたのだが、完全に押されてしまい

純「ハッハッハッ！正面から戦っても、こっちの方が上のようだな！」

霞「ホンマやなあ！ハハハ！」

呉軍兵士F「うわああつ！『黄鬚』曹彰が来たぞーっ！」

呉軍兵士G「こっちは張遼だ！張遼が来たぞーっ！」

逃げる兵がどんどん増えていった。

魏延「こら！逃げるな！戦え！」

魏延も必死に止めたが止まらなかった。

陸遜「ううん・・・敵への恐怖が広がって止まりませんねえ。」

孫権「訓練気分で、数を頼みにしたのが仇となったか・・・！」

呉軍は、完全に大混乱に陥り、一方的に屠られてしまうのだった。

純「うおりやああつ！邪魔すんじゃねえつ！」

呉軍兵士「「グハツ!!」」

霞「邪魔すんやつたら、容赦せんでえつ！」

呉軍兵士「「ギヤアアツ!!」」

純「ちつ！数ばつかり多くて進めねーな！お前ら、足止めんじゃねーぞ！回り込んで斬り込むぞ！」

霞「ヨツシャー！純に続くでーつ!!」

黄鬚隊兵士「「おおーつ!!」」

その時

魏延「うおおおおつ！曹子文、覚悟おおおつ！」

魏延が横から純を攻撃しようとした。しかし

ギンツ

霞「じゃかああしい！純の邪魔すんなや！」

ガギンツ

魏延「が……っ!? 一撃……だどっ!?」

霞にあっさり止められた。

霞「そないな大振り、分かりやすいに決まっとするやろド阿呆!」

霞「純! コイツの相手はウチに任せて、早く呉の本陣へ!」

純「頼んだぞ!」

それを聞いた純は、馬を加速させたのだった。

魏延「ま、待てっ! 曹子文! ……ぐっ!」

霞「お前の相手はウチや!」

魏延「……ちいっ! どいつもこいつも、私の邪魔ばかり!」

翠「うおりやああっ! どきやがれーっ!」

呉軍兵士H「う、うわあああ! コイツもつえーぞ!!」

呉軍兵士I「俺、知ってるぞ! 錦馬超だ!」

呉軍兵士J「うわーっ! 錦馬超もいるなんてーっ! 逃げろーっ!」

この姿に

翠「……。」

翠は逆に驚いてしまった。

愛紗「どうしたのだ、翠？」

翠「い、いや……あたしの名は、江南まで広がってたのかと思つてな。」

愛紗「まあ、お主の勇名は天下に轟いていたからな。」

楼杏「ええ。西涼の錦馬超と言つたら、中央でも有名でしたもの。」

翠「そ……そうなのか。」

愛紗「それより、戦つてるときも思つたのだが、此奴ら皆新兵だな？」

楼杏「ええ。恐らく十万というのは、新兵の訓練も兼ねた構成だったのでしよう。」

翠「何か、新兵で純殿が敵つて、災難だな。」

愛紗「……だな。この先、兵として使い物になるか否か……。」

楼杏「けど、今のところ動きが鈍いのも事実ね。私達で手分けして、中をかき回した

ら隙だらけよ。」

翠「そうだな。」

すると

呂蒙「見つけました！敵の將軍と思われます、包囲して下さい！」

呂蒙の部隊が現れた。

翠「……ん？新兵らしくない奴が来たぞ。」

呂蒙「こちらの主力を新兵と見抜きましたか……。」

呂蒙「ですが、三日会わざれば刮目して見よ。新人と侮ってばかりでは、痛い目を見ますよ。」

翠「……ふん。お前、面白い奴だな！」

愛紗「しかし、言う事は間違っていないぞ。油断するなよ、翠！」

楼杏「ええ、行くわよ！」

そう言つて、愛紗達は呂蒙の部隊と交戦した。

華侖「久し振りの攻勢っすよ！総員、突撃っつ！」

「「おおーっ!!」」

柳琳「姉さん達の切り開いた所をこじ開けて下さい！敵に立ち直る隙を与えないように！」

栄華「周辺を警戒なさい！お二人の攻撃を邪魔させてはなりません！」

その時

曹操軍兵士A「グハッ！」

曹操軍兵士B「ぎゃあっ！」

誰かに曹操軍の兵士が斬り殺された。

栄華「華侖さん、誰かいますわ!」

華侖「二人はやらせないっすよ!てやあーっ!」

ガギンツ

周泰「・・・っ!私を止めるとは、やりますね!」

華侖「そのくらい朝飯前っす!朝ご飯は食べてきたっすけど!」

柳琳「姉さん、気を付けて!」

栄華「ええ!そちらの方、お出来になりますわよ。」

華侖「任せるっすよ!」

呉軍本隊

甘寧「左右の亞莎と明命も苦戦していますね。」

これには

孫権「そんな・・・十万の兵が、半数ほどしかいない兵にこうも容易く・・・」
孫権はシヨックを受けていた。

甘寧「完全にしてやられました。成程、河北の袁紹や西涼の韓遂ら関中軍閥、そして羌族を打ち破つてきたのは、伊達ではないという事か。」

その時

呉軍兵士K「うわああーっ！」

呉軍兵士L「そ、曹彰だーっ！『黄鬚』曹彰が来たぞーっ！」

呉軍が純が来たと大混乱になった。

甘寧「・・・曹彰だど!?弓隊、前へ！我らの部隊を抜けてきた所を集中攻撃せよ、味方に当てるなよ！」

その前方には

純「うらああっ！」

純が先頭で馬を走らせて呉の兵士をなぎ倒していた。

甘寧「撃てーっ！」

それを見た甘寧は弓隊に命令し、矢を放たせたが

純「そんなへ口へ口矢が当たるかボケエエツ！」

と言いながら

ズバツ！ザシユツ！

飛んでくる矢を捌き、そして

ガシツ！ガシツ！ガシツ！

純「これでも喰らいなっ！」

と一気に三本の矢を掴んで太刀を納刀し、背中に背負っていた弓に矢をつがえ、放つた。

呉軍兵士「「ガハアツ!!」」

すると、その矢は三本とも呉の兵士に命中し、射殺した。

甘寧「な・・・何という奴だ！近衛、前へ！」

これに甘寧は、慌てて近衛隊を前に出したが

純「でやあああああっ！」

ズバツ！ザシユ！

呉軍兵士「「がああつ!!!」」

一気に数十人が純に斬り殺されたのだった。

甘寧「ぐつ、踏ん張れ！この先に、何としてでも届かせるな！」

その時

呉軍兵士M「我らが主よ、この戦線はもう駄目です！ここは我らに任せて、一度お退

き下さい！」

と呉の兵士がそう必死に孫権に言った。

孫権「お前達……。」

その兵士の後方では

純「ほうっ！近衛っつー事は、守ってる奴は偉い奴か！なら、もっかい行かせて貰うぞーっ！」

と純はその存在に気付き、再び斬り込み始めた。

甘寧「……蓮華様。彼等の言う通りです。後方には穩もおりません。ここは我らに任せて……。」

しかし

孫権「何を言っているの、思春。この軍の指揮官は私よ？そんな私が最初に逃げ出すなど……。」

と聞かなかつたが

甘寧「ここで貴女を失つては、それこそ雪蓮様や小蓮様に申し開きが出来ません。ほら、行けっ！」

孫権「し……思春っ！思春！」

甘寧は孫権の馬を強引に走らせて、孫権を逃がしたのだった。

甘寧「蓮華様・・・どうかご無事で。」

純「うらああああっ！」

ズバツ！ザシュツ！

呉軍兵士「グハアツ!!!」

呉軍兵士N「ぐうっ！か、甘寧様あつ！」

甘寧「お前達、良く時間を稼いだな！その見事な散り様、この甘興覇、生涯忘れはせんどぞ！」

そして

純「成程ねー。次の時間稼ぎはこの前俺にビビって泣いたテメーか！」

純がそう言つて現れた。

甘寧「あの時とは違う！それに、貴様の時間が止まってもなお、そのような減らず口が叩ければ良いな。」

純「ハハハ！面白ー！それに、良い目してんな、アンタ！相手してやるから、名は何て言う？」

甘寧「我が名は甘寧！字は興覇！曹子文、貴様を黄泉路へと案内する者だ！」

それを聞き

純「良く言つたな！なら、この『黄鬚』をやれるもんならやつてみな！でやああああ

あつ！」

甘寧「はあああああつ！」

純と甘寧は馬を走らせて激突した。

魏延「ちいっ！強い！」

霞「当たり前や！お前は・・・そうでもないみたいやな。」

魏延「うるさいっ！私の腕が未熟な事くらい、私が一番良く知っている！だからこそ・・・！」

すると

孫乾「焰耶様、遅くなりました。こちらはお任せを。」

孫乾達がやって来た。

魏延「ああ、頼んだぞ、美花！」

そう言つて、魏延はその場を離れた。

霞「待ちやがれ！・・・っ！」

孫乾「申し訳ありませんが、行かせるわけには参りません。」

霞「ちっ・・・回り込まれたか。」

孫乾「皆様、倒そうとはせず結構ですわ。足止めに集中して下さいませ。．．．敵から、引き離すように。」

劉備軍兵士A「ハッ！」

霞「面倒やなあ．．．。」

船着場

陸遜「蓮華様！」

孫権「穩！本隊は！」

陸遜「もう亞莎ちゃんと明命ちゃんにも撤退の指示を出しています。蓮華様も、早くこちらの船に。」

これには

孫権「そんな．．．！我ら孫家の者がどうして部下より先に逃げられるというの！」
そう言つて孫権は反論したが

陸遜「んー。思春ちゃん達孫家の将や兵も、多分同じ事を言うので．．．そうなる」と、

どっちも逃げられなくなっちゃうんですよ。」

陸遜の言葉に

孫権「……。」

孫権は悔しさに顔を歪ませた。

陸遜「まずは蓮華様がお逃げになれば、残る皆さんも安心して逃げられるんです。で

すから、ね？」

そして

孫権「……分かったわ。けれど、この悔しきは絶対に忘れないから。」

と言い、船に乗った。

陸遜「はい。それは大事な事だと思います。船を出して下さい。」

呉軍兵士〇「はっ！出港、出港せよー！」

華侖「……はあ、はあ。中々やるつすね！」

周泰「そちらこそ！」

華侖「やあああつ！」

周泰「きええええいっ！」

一方の華命と周泰は、一進一退の一騎打ちをしていた。

柳琳「うう・・・姉さん、大丈夫かしら。」

栄華「華命さんは大丈夫ですわ！それより、自分の事を心配なさいまし！柳琳！」

柳琳「わ、分かってますけど・・・っ」

栄華「上の動揺は兵にも伝わりますわよ。いくら虎豹騎が優秀と言っても・・・しかし」

虎豹騎A「曹純様が怯えておられる！」

虎豹騎B「おのれ！お前ら、我らが曹純様をお守りするぞ！」

虎豹騎C「曹仁様の応援に集中していただくのだ！」

虎豹騎「「おおーっ!!」」

動揺どころか逆に一つになったのだった。これには

栄華「ああ・・・例外もありますのね。」

と栄華は逆に引いてしまった。

周泰「・・・ぐっ！私の速さに付いてくるなんて・・・。」

その時

呂蒙「明命！穩様から、撤退の命令が！」

呂蒙がそう伝えに来た。

周泰「わ、分かりましたっ！……この勝負、お預けします！」
そう言つて、周泰は呂蒙と一緒に撤退した。

華佗「え!?もう終わりっすか！待つっすー！」

柳琳「姉さん、その人の相手はもう良いわ！敵兵の追撃に移りましょう！」
そして、途中で愛紗達と合流し、呉軍の追撃に移つたのだつた。

渡し場

ズバツ！

甘寧「ぐっ！」

一方の甘寧は、純との一騎打ちをしていたが、実力差は圧倒的であらゆる所を怪我し、遂に脇腹に大きな深傷を負つてしまった。

純「やるなあ……甘寧。けど、今のでテメーはもう終わりだ。」

甘寧「ぐっ……！この程度、大した事ではない！」

純「強がんじゃねーよ。今のはかなりの深傷だ、もう動くのもキツイだろう。楽にし

てやる。」

甘寧「ふんっ！まだ私は死ねない！この辺りにさせて貰おう！・・・はっ！」
そう言つて

純「な・・・身投げしたと!？」

甘寧は水中に飛び込み、孫権達が乗っている船へ向かつて泳いだのだった。

純「あの傷でもまだ泳げるとはな、何て奴だ。」

そう言つて、甘寧が泳いだ後には血が流れてるのを見ていた。

純「さてと、残りはどうなってるかな・・・。」

そして、渡し場を後にしたのだった。

呉軍

呉軍は船で撤退し、その途中

陸遜「蓮華様、あそこです、あそこに！」

孫権「思春！捕まりなさい、手を伸ばして！」

甘寧「蓮華様……！」

甘寧を船に上げた。

甘寧「……申し訳ありません、遅くなりました。」

孫権「いえ、無事で良かった……」

しかし

グチュ

孫権「……え？」

孫権の手には大量の血がこびり付いており、甘寧を見ると

甘寧「……ぐっ！」

甘寧の身体には至る所に傷があり、中でも脇腹の裂傷は誰が見ても重傷だと分かるものだった。

孫権「どうしたの思春、この傷は！」

甘寧「……どうという事はありません。……どれもかすり傷です。ぐっ……。」

しかし、甘寧は主を心配させないためそう言ったのだが、見る見る顔色が悪くなつていき、そのまま倒れてしまった。

孫権「思春！ 穩、すぐに軍医を！」

陸遜「わ、分かりましたあ!!」

甘寧「蓮華様……。」

孫権「思春、今の私がいるのは貴女のお陰よ!!決して貴女を死なせはしないわ!」
そう言つて、孫権は甘寧の手を握つて涙を流しながら言つた。

孫権（曹子文……この屈辱、絶対に忘れないわよ。次こそは、必ずあなたを討つて
見せる!!）

そう思いながら、甘寧の手を強く握つたのだつた。

そして、合肥攻めは、呉軍は四万の死傷者を出す大敗北を喫したのであつた。

65話

合肥城

純「何!?あの船に孫権がいたのか!」

稟「建業に入れた密偵の話によると、そうらしいです。」

純「んだよ。甘寧なんか無視して捕まえときや良かったな、顔は知らんけど。」
そう言つて、純は悔しそうな顔をした。

稟「しかし、いづれ顔を合わせる事もあると思いますよ。」

愛紗「はい。純様が、華琳殿の覇道を切り拓けば、この先何度も戦う事になるかと。」

純「・・・ま、楽しみが先になつたつて事でいつか。」

栄華「そういえば霞さん。あの魏延という劉備の武将と戦つたと聞きましたけれど
?」

霞「ああ。純と一緒に呉の本陣に突撃しとつたら横から純に不意打ち食らわせたろう
としとつたからなあ。動きが大振りやつたから分かりやすかつたけど。」

霞「けど、純は気付いてた風やったけどな。」

純「まあな。霞がやらなくても、返り討ち出来たからな。」

霞「せやろな。」

純「まあ、俺を狙うというのは、間違つてねーけどな。」

栄華「ええ。お兄様は、我が軍の全てを掌握しておりますわ。その要であるお兄様を砕いておこうというのは、当たり前のお考えですわ。」

栄華「確か北郷さんが、お姉様とお兄様はつーとつぷ体制と仰つてましたわね。」

純「つーとつぷ体制？ んだそれ？」

栄華「上に立つ者が二人並び立つ事だそうですわ。」

純「そうか……。けど、上に立つ者は一人だけなんだけどな……。」

華命「でも純兄がいなくなるのは寂しいつすよー。」

柳琳「そうですね。特に栄華ちゃんと愛紗さん、霞さん、桜杏さんに稟さん、そして、陳留におられる秋蘭さんが悲しみます。」

栄華「そうですね。お兄様がいなくなるなんて、想像したくありませんわ。」

純「分かつてるよ。」

そう言つて、純は皆を落ち着かせた。

栄華「さて……。今回の戦も落ち着いたようですし、私達は本国に戻りますわ。」

純「そうだな。俺も一度、姉上に戦の報告のため戻るとするか。」

霞「せやな。暫くはここも静かやろうし、ウチに任しとき。」

純「そつか。なら霞、ここの守りはお前に任せる。楼杏は、霞を良く補佐してくれ。」

楼杏「お任せ下さい。」

華命「だつたら今夜はお別れ会つすね！皆でまた、お肉焼くつすよー！」

そして、純達はその日の夜は肉を食べ、合肥に霞と楼杏を残して陳留に帰還したのだった。

建業

孫策「・・・そう。合肥攻めは失敗か。」

孫権「十万もの兵を預かっておきながら、四万の死傷者を出す大敗北を喫してしま
い・・・申し訳ありません、雪蓮姉様。」

孫策「・・・まあ良いわ。それだけ曹彰の軍は戦慣れしてて尚且つ精強だったという
事でしょ。」

孫策「思春の容態は、どうなのかしら？曹彰と一騎打ちしたと聞いたけど。」

孫権「脇腹の深傷を含め、多くの傷を受け意識不明の重体でしたが、何とか命を繋ぎました。」

孫策「そう、良かったわ。思春にはまだ死んで欲しくないものね。」

孫権「はい……。」

孫策「魏延も加勢、助かったわ。」

魏延「いえ。我らこそ一臂の力ともなれず、主にも面目が立ちません。」

孫策「曹彰の二度目の奇襲でも、力戦してくれたと聞いてるし、劉備には私からも言うておいてあげるわよ。」

これに

魏延「感謝致します。」

魏延はそう言つて頭を下げた。

孫策「さて……話を聞いたら曹彰はまた強くなつたわね。楽しみね……。」
そう言つた孫策だったが

周瑜「楽しみは良いが、もう合肥に兵は出さんぞ、雪蓮。」

と周瑜は釘を刺した。

孫策「ええええええ……！ちよつとお、ここは私が格好良く出て行つて、颯爽と合

肥を攻め落とす所じゃないの!？」

これには孫策は文句を言ったのだが

周瑜「新兵が大半とは言え、十万の兵が損害を受けたのは大きいからな。もう暫くは戦力の整え直しだ。」

周瑜「それに・・・これ以上合肥を攻めても、落ちないだろう。仮に落としたとしても、曹彰なら、合肥を一日いや、半日で落とせる事が出来る。」

この発言に

孫権「・・・。」

孫権の顔は先程より曇った。これに孫策は

孫策「ほら、蓮華の傷に塩を塗り込むような事言っていないで、そこを何とかするのが軍師の仕事でしょ。」

そう妹を庇い、周瑜に言ったのだが

周瑜「何とかするのは仕事だが、何ともならん事を何ともならんと伝えるのも仕事だ。」

と返されたので

孫策「ぶーぶー。」

と頬を膨らませたのだった。

陸遜「それにしても・・・曹彰さんの武勇と軍才は、見事ですなえ。大軍だろうとそうでなからうと、全ての将兵を自らの手足の如く巧みに操りますからあ。」

陸遜「潼関で韓遂を討つてから僅か三ヶ月で涼州、漢中を平定し、その後合肥にて数の差関係なく我が軍を破ってしまいましたあ。」

周瑜「ああ。あの速さは私は想定外だった。あれで、私の算段がかなり狂ってしまった。」

孫策「その時の冥琳はいつになく焦った感じだったわね。」

周瑜「・・・雪蓮にはバレていたか。」

孫策「何年の付き合いよ。」

周瑜「・・・そうか。」

孫策「しかし、今後とも劉備と手を組まなければ、勝つのは無理そうね。」

孫策「魏延、今後とも宜しくと劉備に付け加えて言っておくね。」

魏延「はっ。」

そして、その日の話し合いは終わったのであった。

66話

陳留

合肥から戻った純は、建業攻めのための準備をしていた。その息抜きで、少し外の空気を吸いに外出していた。

純「この前会ったアイツ・・・元気にしてっかなあ・・・。」

その時、ふと合肥の近くで会った少女を思い出していた。

純（あれから、結局それつきりになっちまったんだよなあ・・・。それにあの女子、もしかしたら孫堅の娘なのかもしれないねーな。何か似てるし・・・。）

純（まあ、似てるってだけでその娘と判断するのも良くねーんだけどな・・・。）
そんな事を思っていると後ろから人の気配がしたので振り返ると

純「あつ・・・。」

??「あ・・・えつと・・・ごめんなさい、また驚かせちゃって。見覚えのある後ろ姿だったから、もしかしたらと思つて。私の事、覚えてますか？」

以前合肥で会った少女がいた。

純「ああ、久し振り！息災だったか。」

??「ええ。」

そして、二人で街を歩き、近況報告をしていた。

純「・・・そっか。あの仕事は、失敗しちったのか。」

??「ええ。その後・・・担当を外されてね。姉様から、次はこちらに行くように言われてしまった。」

純「そっか・・・。」

??「あなたが羨ましいいわ。しつかり結果を残して、姉の信頼に応えるんだから。」

純「俺は大した事してねーよ。俺の周りの者が支えてくれたら何とかなつたんだ。俺一人の力じゃねーよ。」

??「そう・・・。それに比べて私は・・・。」

すると、自分と比べたのか、元気が無い雰囲気になった。

純「・・・けどさ。」

??「え？」

純「担当替えしてまで外回りを続けるなんて・・・アンタ、姉に大切にされてるんだな。」

?? 「そうかしら？正直、顔も見たくないのだと・・・」

純 「んー。前の仕事に向いてないと思われたんだと思う。けど、本当に見限られたなら、元の部署に戻されて終わりなんじゃねーのか。」

?? 「元の部署に・・・そうね。」

純 (その姉、ウチの姉上に似て、不器用そうだな・・・。)

純 「多分アンタの姉は、アンタに色々な物を見て来て欲しいんだと思うぜ。前は中の仕事つて言つてたし、陳留は初めてなんだろ？」

?? 「ええ・・・。揚州を出た事も、数える程しか。」

純 「・・・この後はどこに行くんだ？揚州に戻んのか？」

?? 「いいえ。都に寄つてから、陸路で益州に向かうようにと・・・。それも・・・もしかししたら？」

純 「今は色々思う所があるかもしれないけどさ。その積み重ねが、この先役に立つ事もあると思うぜ。俺はその姉を知らねーし、難しい事も分かんねーから、断言出来ねーけど。」

それを聞いて、少女は

?? 「・・・うん。なんだか、そんな気がしてきたわ。」

と少し表情が晴れた様子になった。

純「そう前向きに捉えた方が、良いんじゃないかな？」

??「・・・ふふつ。貴方と話していると、世の中には色んな考えがあるのだとびつくりするわ。」

純（・・・少し元気になったようだな。）

純「でも・・・都に寄ってから陸路で益州って事は、漢中を通って成都に行くんだよな？」

??「こちらの地理はそこまで明るくないのだけれど・・・そうなのかしらね？それが何か？」

純「今漢中や陽平関辺りは、前の戦であね・・・曹操の領地になって劉備と完全に相対する事になってきなくせーんだよ。遠回りになるけど、都を出た後は、荊州から回って成都に行く方が安全かもな。」

純（つぶねー、思わず姉上って口にしそうだった。流石に彼女の前で姉上って呼ぶわけにはいかねーよな。俺が曹孟徳の弟の曹子文だってバレたらメンドクセーしな。）

??「そうなの・・・。詳しいのね。」

純「ま、仕事柄な。」

??「そう・・・。」

その時

一刀「純ー！」

純の後ろから一刀の声が聞こえた。

純「ああ！」

??「・・・と、ごめんなさい。また長話に付き合わせてしまったわね。」

純「気にすんなって。俺もアンタの事気になってたから、今日は会えて良かったよ。」

??「ありがとう。それじゃ、またどこかで。」

純「ああ。良い旅を。」

純はそう言つて拱手した後、その場を後にしたのだった。

純「悪い、一刀。」

一刀「いや、大丈夫。それより、さっきの女の子は？」

純「ああ。前合肥の近くで会つた者だ。」

一刀「合肥で？」

純「うん。それで、少しぼかした内容で話をしたんだけど、仲良くなつてな。」

一刀「そうなんだ・・・。」

純「あ、名前聞き忘れちつた・・・。」

一刀「まあ、いつかそのうち会えると思うよ。」

純「そうだな。それより、何か用か？」

一刀「ああ。華琳が呼んでた。多分、建業攻めの事だと思う。」

純「・・・分かった。」

純（やっぱあの子、孫堅に似てんなあ・・・。穏やかそうな雰囲気だけど・・・。）

孫権「物言いはともかくあの雰囲気からして、やはりどこかの豪族の御曹司ね。それに、あの時はよく見てなかったけど、結構腕の立ちそうな感じだったわ。」

孫権（でも、土地に詳しいのはともかくとして、曹操の所で言い間違えたのって・・・？それと、さつき彼の名を呼んだのは真名のようなね。確か曹操の弟の曹彰の真名は、確か・・・）

その時

黄蓋「おや、蓮華様。このような所でどうなさいました？」

孫権の護衛に付いていた黄蓋が片手に酒瓶を持って現れた。

孫権「何をつて・・・貴女を探していたのよ、祭。買物に出ると言つて、いつまで経つても帰つてこないんだから。」

黄蓋「ははは。ですが、陳留の良い酒を手に入れましたぞ。いくつか試し呑みもしましたが、安酒ながらこれがなかなか。」

そう言つて、黄蓋は酒瓶を揺らしていた。

孫権「はいはい。なら宿に戻りましょう。明命や美花達も待ちくたびれているわよ、きつと。」

黄蓋「無論です。蓮華様も是非お付き合ひ下され。・・・蓮華様？」

孫権「そ・・・そうね。帰つたらね。」

すると、少し嬉しそうな表情で孫権は言つた。それを見た黄蓋は

黄蓋「はて。以前合肥の近くでお会いした者でもお考えか？」

と言つた。

孫権「・・・！いい、いえ、そんな事!？」

黄蓋「ははは、蓮華様も良いお年だ。そのくらいの浮いた話があつても誰も驚きはせぬよ。・・・して、どこの輩ですか？」

孫権「前も言つたでしょ。一度会つて、少し話ただけであつて、どこかの豪族の御曹司のようだったつて・・・。」

孫権「それに・・・結構腕の立ちそんな感じだったし・・・」

黄蓋「ふむ。豪族の御曹司であつて、尚且つ腕の立ち、恐らく兵も持っているはず。いつその事、召し抱える手もありますが・・・」

孫権「だ・・・だから、そういうのじゃないつてば!」

黄蓋「ならば、そろそろ帰りませうか。……そう睨まずとも、明命達には黙っておきますとも。」

そう黄蓋は言つたのだつた。

孫権「全くもう……。」

孫権（しまった。またあの人の名前、聞きそびれちやつた。）

孫権（けど、何だろう……？彼に会うと、胸が熱くなつて……。この気持ちつて……？）

そんな事を思い、宿に向かつた孫権だつた。

67話

玉座の間

純「姉上、お呼びと聞き参上致しました。」
すると

霞「純ー！ 久し振りやなー！」

楼杏「純さん、只今戻りました。」

霞と楼杏が玉座の間にいた。

純「おおー二人とも、ご苦労だったな！」

霞「ま、ちよつと休みつてだけで、すぐ合肥にとんぼ返りやけどな。」

純「そつか……。姉上……」

華琳「ええ。あなたを少し驚かせようと思つてね。」

純「成程……。姉上らしい。」

純「それで、状況はどうなんだ？」

楼杏「一進一退ね。今合肥を攻めてくるのは主に程普や呂蒙のといった将さんだけど、向こうも牽制以上に仕掛けてくるつもりもないようね。」

霞「恐らくやけど、純とウチが蹴散らした分の兵を育てるので手一杯なんやないかな・・・？」

純「成程・・・。」

華琳「なら・・・建業攻略の準備は整ったから、今度はこちらから攻める番ね。」

純「ひとまず、長江の渡河地点として濡須口を確保しようという話になっていますが・・・その辺の話もコミで一事帰還させたって事ですか。」

華琳「そういう事よ。」

華琳「けど、今日は酒を振る舞おうと思ってるの。あなたも付き合いなさい。」

純「分かりました。なら、あの酒を使うのですね？」

華琳「ええ。今日はそのつもりよ。」

純「なら、久し振りに姉上の楽も聞きたいですね。昨日の夜、姉上は琴を弾いてましたよね？」

華琳「ええ、そうよ。」

一刀「え、昨日の琴って、女官や楽士の誰かが弾いてたんじゃないのか？無茶苦茶上

手かつたぞ？」

栄華「お姉様なら、あのくらい当然ですわ。琴もですけれど、鼓も打つし笛や笙もお吹きになりますわよ。」

一刀「マジか……。」

栄華「けど、お兄様は楽はお好みになりませんかでしたわね。」

一刀「そうなのか？」

純「まあな。」

すると

華琳「その事、純はよくお父様に叱られていたわね。」

と華琳はからかうような顔で言った。

純「俺の性に合わないの。」

これに純は、そう言つて顔を背けた。

一刀（純らしい……。）

そんなこんなで、夜を迎えたのだつた。

一刀「純。華琳が俺達にくれる酒って、そんなに良い酒なのか？」

純「ああ。なんでも、天子様に献上する予定だった酒の一部だからな。」

一刀「へえ。そこまで……！」

霞「なら、ウチらも味わって飲まんとな！」

純「そうだな。皆と一緒に飲むか！」

霞「ええな、それ！ええやろ、愛紗！」

愛紗「そうだな！」

一刀「良いのか、純？」

純「兵にやる分は別にしてるし、構わねーよ。美味ー酒は皆で飲んだ方が美味ーよ。」

純「そうだ、翠と楼杏に秋蘭そして稟と風も呼んでおくか。」

霞「ええな、それ！純の軍団全てを呼ばんとな！」

純「なら、今日は月が綺麗だし、良い場所取って皆で飲むか！」

霞「よっしゃ！ならそれで決まりや！ほな、また後でな！」

そう言つて、霞は翠と楼杏に秋蘭、そして稟と風を呼びにその場を後にしたのだつた。

純「一刀も遠慮無く飲んで良いぞ。」

一刀「ああ！」

純「そんじゃあ、俺は場所取ってくる。」

そう言い、純もその場を後にした。

その時

一刀「……あれ。この音って。」

どこかで琴の音が聞こえた。

一刀「……。」

一刀は琴の音に誘われるように、音のする方へ足を向けた。そして、東屋に到着する
と

一刀「……本当だった。」

華琳「ああ、一刀。どうかしたの？」

月光の下、華琳が細い指でゆったりと琴を爪弾いていた。

一刀「いや……琴の音が聞こえたからさ。華琳が弾いてるのかなと思って。」

その姿に見惚れた一刀だったが、すぐに華琳の言葉にそう答えた。

華琳「少し興が乗ってね。暇なら聞いて行きなさい。」

一刀「あ、良いんだ。」

華琳「別に秘密にしているわけではないもの。聴衆が貴方でも、いないよりは良いでしょう。」

一刀「なら、ありがたく聴かせてもらおうよ。」

そう言つて、一刀は東屋の一角に腰を下ろして、琴の音に集中するため、そつと瞳を閉じた。

華琳「そういえば、一刀にこうして聴かせるのは初めてだったかしらね。」

やがて聞こえてきたのは、いつもよりずつとクリアな、華琳の音色だった。

一刀「琴の音は前から時々聴いてたけどね。女官か楽士の誰かが弾いてるものだとばかり思つてたよ。」

華琳「そう……。」

そのメロディは、以前一刀が聴いたのと同じ穏やかなものだった。ただ一つ違うのは、それが遠くから聞こえるのではなく、目の前で奏でてくれるつて事だった。

それは一刀の想像した以上に幸せで、心地の良い時間だった。

一刀「……華琳は、さ」

華琳「……何？」

一刀「ずつとこうしてるつもりはない？」

この質問に

華琳「ないわよ。」

華琳はあつさり答えた。それも平然としたもので、メロディも揺らがなかった。

華琳「孫策の振る舞いでも、劉備の理想でも、この大陸を守る事は出来ないもの。」

一刀「……。」

華琳「……何？」

一刀「いや、一言でそこまで返されちゃうと、言うことなくなっちゃうなって。」

一刀（たつた一言で五手も十手も読むのが華琳だつて、勿論知つてはいるんだけど。）

一刀（思考が早すぎて、こつちがそれに追い付けない。純はお姉さんの華琳を信じているとはいえ……。）

華琳「劉備の理想が気高く、美しいのは否定しないわ。けれどそれは、大陸だけではない……その先までを全て平和にした後に掲げるべき理想よ。」

一刀「今掲げても、董卓みたいになるって事？」

華琳「既に董卓が血抜きを終えている分、少しはマシでしょうけれどね。」

一刀「……でも、朝廷は綺麗になつたけど、戦場に流れる血は変わらないよね。」

華琳「それはあの子も分かっているでしょう。」

一刀（分かつててなお、旗を掲げる事をやめない……か。）

一刀「辛いな。」

華琳「それがあの子の選んだ道だもの。私達が口を挟む筋合いはないわ。」

華琳「そういう意味では、まだ孫策の方が現実を見据えているでしょうね。」

華琳「……もつとも、あれも進む道を血に染めるばかりで、その先に平和な世があ

るようには思えないけれど。」

一刀「霞がよく言ってる、戦いにしか生きられないってやつ?」

華琳「まさに、江東の虎と言われた孫堅そのもの……虎の子は虎とは良く言つたもののだわ。」

一刀「だったら……華琳は?」

華琳「……私?」

一刀「前に、占い師に言われただろ。……乱世の奸雄か、治世の能臣だつて。」

一刀「……華琳が純の活躍で大陸を手に入れて、戦いが終わって……治世になったら、華琳はどうなるのになつて。」

一刀（治世の理想に生きる劉備。乱世でしか生きられない孫策。なら、どちらの生き方も示された華琳は……。）

しかし

華琳「さあ……どうかしらね。」

手元からのメロディは、その問いにも乱れなかった。けれど、弾いた弦の一言は、さつきまでよりどこか楽しそうにも聞こえた気がした一刀だった。

華琳「ただ一つ分かってるのは、私が純の活躍で大陸に覇を成したなら……私は誰に仕えるわけでもなくなるといふ事だけだ。」

一刀（そつか。主となった時点で、もはや臣じゃなくなるんだもんな。）

一刀「・・・結局、能臣の華琳は見られないままか。」

華琳「ふふっ。それは貴方の妄想の中だけに留めておきなさい。」

そう華琳は言った。すると

華琳「ただ・・・そうなった後に心配なのは、純ね。」

と言った。それと同時に、僅かにメロデイが乱れた。

一刀「純？なんで？」

華琳「あの子は生まれながらの武人。孫堅と孫策によく似て、乱世にしか生きられない子よ。もし泰平の世が来たら、純はどうなってしまうのか。私が一番憂いているのは、そこね。」

そう言い、華琳は姉の顔になった。

一刀「・・・華琳は純の事、しっかり考えてるんだな。お姉さんの顔になってるよ。」

華琳「当然よ。私にとって、純はたった一人の大切な可愛い弟よ。あの子にもしもの事があったら、私は迷いなく命を絶つわ。」

そう言い、華琳は強い意志を込めた目でそう言った。

一刀「そつか・・・。」

一刀（ホント、弟思いの優しいお姉さんだな・・・。）

その時

純「お、一刀、やっぱりここか。それに、姉上も。」

純が皆を連れてやって来た。

一刀「純・・・それに、皆も。」

純「姉上の琴の音も聞こえたからな、だから皆も連れてきた。」

純「姉上、お邪魔でしたか？」

華琳「構わないわ。」

季衣「時々聞こえてくる琴って、華琳様だったんですねー。ずっと誰だろうって思っていました。」

栄華「でも、こうして皆で聴くのも久し振りですわね。・・・昔よりも、随分と人が増えた気がしますけれど。」

桂花「ほら。アンタはどきなさいよ。そこは私が座るのよ!」

一刀「はいはい。俺は十分楽しませてもらったから、今度は皆が聞いて。」

喜雨「霞さん、そのお酒って、もしかして・・・」

霞「せやで。ウチらがもううた酒やから、誰と飲んでもかまへんよな? 華琳ちゃん。」

華琳「勿論。好きになさい。」

燈「なら、ありがたくいただきますましよう。流琉ちゃん。」

流琉「はい……皆さん、盃は行き渡りましたか？」

真桜「ここまで揃ったんなら、とりあえず乾杯やな！」

沙和「え、乾杯とかするの？何に？」

純「そうだな。姉上と……我らが曹魏に！」

しかし

華命「そ……ぎ？曹魏って何すか？」

と華命が聞いた事ない言葉を口にした。

純「昔、姉上と一緒に話した時、もし新しい国を興すならどういった国名が良いか話したんだ。その時に決めたのが、魏なんだ。」

純「良いですよね、姉上。孫策も呉を名乗ってますし。」

華琳「そうね。それも良い機会かもしれないわね。……純。」

純「はっ。ならば、改めて……姉上と、我らの国・曹魏に！」

「乾杯!!」

そして、皆酒が進んだ頃

華命「華琳姉え、純兄。あれ、あれやって欲しいっす……！」

と華命が華琳と純にそう言った。

華琳「そうね。あれをやるのは久し振りだけれど……」

純「まあ、いっちょやってみますか？」

華琳「・・・そうね。」

一刀「・・・あれって？」

秋蘭「琴を奏でながら、即興で詩をお作りになり、それを純様が剣舞するのだ。私達も聞くのも見るのも久し振りだな。」

一刀（即興って・・・アドリブって事か？）

そう思っている

華琳「さて・・・」

華琳は、琴の調子を確かめるように一音鳴らした。

華琳「純、準備は良いかしら？」

純「大丈夫です。姉上も、いつでもどうぞ。」

そして、琴の音色と、穏やかな華琳の声。そして、純の美しい剣舞が始まった。

「酒に対しては当に歌うべし・・・」

「人生幾何ぞ・・・」

「譬えば朝露の如し・・・」

「去る日は苦だ多し・・・」

「慨して当に以て懐すべし・・・」

「幽思忘れ難し……」

「何を以てか憂ひを解かむ……」

「惟だ杜康有るのみ……」

これを見ていた皆は

桂花「ああ……華琳様……純様……」

春蘭「内容は分かりませんが、とても良かったです……！それに、純様の剣舞も、中々でした！」

秋蘭「純様……」

栄華「ああ……お兄様……」

稟「純様……」

楼杏「純さん……」

など、華琳の美しい歌声とその詩、そして純の剣舞に見取れ、感動していた。

一刀（す、凄い……。この有名な詩を生で聞けるなんて……）

一刀も、史実曹操が唄った詩を生で聞けて、感動していた。

華琳「ふふっ、ありがとう。」

純「久し振りだったから、どうかなと思ったが……満足できたようで何よりだ。」
すると

純「姉上、もう一曲やりましょうよ。」

と純が言った。

華琳「ええ、そうね。」

すると

春蘭「おおっ!!もう一度ですか!!」

霞「もういつちよやー!!」

と周りも盛り上がったため、もう一曲弾き、純も舞った。

「神亀寿しといえども、なお竟る時あり……」

「騰蛇は霧に乗ずるも、終には土灰となる……」

「老驥は櫪に伏すも、志は千里に在り……」

「烈士暮年壯心やまず……」

「盈縮の期は、但に天のみに在らず……」

「怡の福は、永年を得べし……」

「幸甚だ至れる哉……」

「歌いて以て志を詠ず……」

そして

桂花「ああ……華琳様……純様……」

春蘭「先程同様、内容は分かりませんが、とても良かったです……！純様の剣舞も、中々でした！」

秋蘭「純様……。」

栄華「ああ……お兄様……。」

稟「純様……。」

楼杏「純さん……。」

皆それぞれ大きな感動を呼んだ。

一刀（これも有名な詩だ……。凄い……。）

一刀も、違う感動をした。

純「姉上、見事な詩でしたよ。」

華琳「ふふつ。あなたも、中々の剣舞だったわよ。」

純「ありがとうございます。」

そして、宴は更に大盛り上がりになったのであった。

68話

揚州・濡須口

愛紗「攻めろ攻めろ、今日こそあの城砦と土塁を突破するのだ！総員、攻撃の手を緩めるな！」

楼杏「突撃なさい！濡須口を落としたり、長江を渡る足がかりが出来るわ！頑張りなさいっ！」

この日、純率いる十万の兵は、濡須口を攻めていた。

純「稟、今日はどうだ。行けそうか？」

稟「・・・難しいでしょうね。こちらもいくつか策は打っておきましたが、むこうはそれに一切反応するつもりがないようです。」

純「・・・そっか。」

しかし、呉の粘り強さに苦戦していた。

霞「出て来んと、叩きようもないか。」

稟「驚嘆すべき我慢強さというか、守将の鑑と言うべきか。今までに集めた情報では、

孫権はここまで粘りのある将ではなかったはずですが……。」

純「攻めはからつきし苦手だが、守りは強いって事か。」

霞「そういう事やな……。」
すると

翠「純殿、すまん！濡須口の連中、投石機も読んでいた！奇襲部隊が仕掛けてきて……」
翠から投石機が襲われたとの知らせが来た。

純「攻めてきたか！」

翠「いや、投石機だけ壊して、さっさと撤退していったぞ。」

稟「完全に時間稼ぎをするつもりなのでしょう……仕方ありません、潮時です。」

純「クソツ……今日もか……。」

霞「ウチの出番、今日もナシや。」

純「翠、撤退の指示を出せ！合肥に引き上げるぞ！」

翠「分かった。撤退、撤退だーっ！」

そして、純達は撤退した。

呂蒙「蓮華様。敵部隊、引き上げていくようです。」

孫権「そう。思春が敵の伏兵を上手く退けてくれたのね。」

周泰「・・・追撃なさいますか？」

孫権「不要よ。曹彰と張遼相手に追撃を出して、痛い目を見ても仕方ないもの。濡須口を通さなければこちらの勝ちよ。」

甘寧「蓮華様、戻りました。」

孫権「ご苦労様、思春。敵の仕掛けは？」

甘寧「ご命令通り、秘密兵器らしきものの破壊のみ行つて参りました。・・・追撃は必要ないのですよね？」

孫権「ええ。向こうがこちらに付け入る隙は、小指の先ほども見せないように。」

その様子を

程普「・・・。」

程普はじつと見ていた。

孫権「どうかした、粹怜。攻めないのが不満？」

それに気付いた孫権が、そう尋ねると

程普「まさか。こうも状況が良い方に傾けば、少しは反撃しようという気にもなるでしょうに。その欲のなさ、お見事です。」

と程普は返した。

孫権「母様や姉様だったら攻めていた？」

程普「ふふつ、間違いない。」

孫権「けれど……私は私よ。それに、曹彰もこちらが出て来るのを望んでいるでしょうしね。」

孫権「この濡須口は合肥に次ぐ孫呉の守備の要。城砦も整っているし、亞莎の作ってくれた土塁も効果が出ているわ。向こうの誘いに乗る必要はどこにもないもの。」

孫権「確かに曹彰を見逃すのは悔しいけれど……この気持ちは、大事に取っておけば良いのよ。いずれ来る反撃の時にね。」

その言葉に

程普「……ふふつ、お変わりになりましたね。蓮華様。」

と程普は言った。

孫権「そうかしら？」

程普「ええ。大殿達とは違いますが……孫家の一員としての風格が、一層強くなつたように思います。」

孫権「そう。」

孫権「だとしたら・・・あの旅のおかげでしょうね。」

程普「あら、良い出会いでも？」

孫権「さあ・・・どうかしらね。」

陳留・玉座の間

華琳「・・・そう。濡須口は落ちないか。」

華琳に建業攻めの状況報告を終えたのは、改めて合肥から戻ってきた純が遣いに送った兵だった。

曹彰軍兵士A「申し訳ありません。濡須口の守将を任された孫権が、思いのほか手強く・・・。合肥で十万の兵を率いていた時とは別人のようでした。」

一刀「純が自ら指揮しても、なおそれか・・・。」

華琳が魏を名乗るようになってから暫くが経ち、再開した呉との争いは、濡須口と合肥の間にラインを作ったまま、一進一退が続いている。

桂花「あの純様がここまで苦戦するとは、予想外ね。」

宝譚「敵が乗らねえ事には、策も何もねえしなあ。」

曹彰軍兵士A「相手が全く出て来ないので、曹彰様もそうです。張遼様もイライラしてましたよ。」

一刀「・・・とはいえ、敵が攻めてきた時には彰来々と遼来々の名が轟くわけだもんな。曹魏全軍の指揮官と合肥の守将としても外せない、か。」

華琳「それで、純は今後どうすると？」

曹彰軍兵士A「はっ。曹彰様は、郭嘉様の意見に従い、上流に拠点を作る予定です。」

華琳「そう。桂花。」

桂花「はい。恐らく稟が考えてる場所は・・・」

そう言つて、桂花は広げられた地図の建業の場所に指を置いて見せ、そのまますぐ脇にある長江を辿り、濡須口を過ぎ、更に遡つて・・・ある一点で止まった。

桂花「・・・この辺りかと。」

春蘭「皖城？」

桂花「この辺りの要害ではあるけれど、濡須口よりは手薄な場所よ。ここを前線基地として押さえた後、改めて長江渡河の確保に移るか。」

華琳「そう。ならあなた、純に伝えなさい。皖城の攻略は貴方達に委ねると。私の援

軍が到着する前に、攻略を終えておくようにと。」

曹彰軍兵士A「はっ！ではこれにて。」

そう言い、兵士はその場を後にした。

華琳「秋蘭、風、真桜、沙和、風。」

秋・風・真・沙・風「はっ。／はっ／はっ／はいなのー／はいー。」

華琳「貴方達は四十万の兵を率いて純の援軍に向かいなさい。」

「「「「御意!!」」」」

そして、秋蘭達は、華琳の命により、四十万の兵を率いて合肥に向かったのだった。

合肥城

純「……。」

稟「本国からは何と？」

純「ああ。姉上の援軍が到着する前に皖城を攻略するようにと。」

稟「そうですね。」

愛紗「であれば純様。皖城の攻略は私と楼杏殿にお命じ下さい！」

純「……。」

楼杏「愛紗さん!？」

愛紗「ただでさえ濡須口を突破出来なかったのだ。この位はしておかねば、汚名の返しようもないだろう。」

翠「……確かにそうだが。」

純「……なら、皖城攻略、お前達に任せる。頼むぞ！」

愛紗「はっ！ではこれにて。」

そう言い、愛紗はその場を後にした。

純「楼杏。」

楼杏「はい？」

その際、純は楼杏を呼んだ。

純「愛紗は、先の濡須口攻めの責任を感じて気負っている。何とか補佐してくれ。」

楼杏「ええ、初めからそのつもりよ。お任せ下さい。」

純「ああ。頼むぞ。」

そう言い、純は楼杏を送り出したのだった。そして、程なくして皖城攻略完了の知らせが、純の元に届いたのだった。

そして、秋蘭達四十万の援軍が、合肥に到着したのであった。

69話

揚州・建業

孫策「・・・そう、曹彰は合肥から動かさずか・・・。」

太史慈「だねえ。それ以前に、劉備の方を先に何とかするもんだと思ってたけど。」

周瑜「蜀の諸葛亮は、漢中には堅固な砦があるため、迂闊に攻められないと言っていた。謂わば漢中全体が堅固な要塞のようなものだ。その間にこちらを落とせば良いとも思っているのだろう・・・舐められたものだ。」

黄蓋「いずれにせよ、儂らが南部を統一するまで待つて、その上前をはねるつもりなのじゃろうな。効率が良いと言えばそれまでだが・・・あまり褒められた方法ではないのう。」

孫策「曹操としては、弟の曹彰に多すぎたお釣りの取り立てを任せただけでしょ。確かに官渡で夏侯惇から貰ったお釣りはちよつと多かつたわ。」

孫尚香「もしかして姉様・・・！」

孫策「まさか。父祖から受け継いだこの江東の地、ようやく国まで興したつていうのに……むぎむぎくれてやるものですか。」

魯肅「うう……やっぱり戦争になるんですねえ。」

孫尚香「あつたりまえでしょ！曹彰なんてシャオが追い払っちゃうんだから！」

張昭「だが、曹彰の武勇と軍才は確かだ。姉の曹操も援軍を出してきたため、その数五十万だ。濡須口を総攻撃する算段だろうな。」

周瑜「それか……」

その時

程普「……大変よ。」

張昭「どうした粹伶。お主、濡須口に行つておつたのではないのか？」

程普「急使が来たからこちらに伝えに来たのよ。皖城が落とされたわ。合肥から別働隊が出ていたみたい。」

程普が皖城陥落の知らせを持って来た。

張昭「……何じやと!？」

黄蓋「ふむ……一足遅かったか。」

魯肅「皖城が押さええられたつて事は……濡須口から渡るの諦めて、もつと上流から長江を渡るつもりなんでしょうねえ。」

孫策「で、冥琳。どうするの？策はあるんでしょ？」

周瑜「皖城が落とされるのも考えの内にはある、案ずるな。」

孫策「なら、冥琳に今回の作戦の全権を任せるわ。呉の大都督として私達の総力を使い、『黄鬚』曹彰を追い散らしてみせなさい。」

周瑜「任せよう。」

孫尚香「どんな作戦なの？シャオも今回は出番、あるわよね！」

周瑜「無論です。小蓮様は、濡須口で思春達と合流し、皖城の奪還にお向かい下さい。濡須口は蓮華様がいれば大丈夫でしょう。」

孫尚香「分かったわ！」

周瑜「梨晏と包は使者として長江を遡り、成都へ向かってくれ。何をすべきかは……分かるな？」

太史慈「もう……しようがないなあ。」

魯肅「ひやわわ……分かりますけどー。梨晏様の補佐つて、包よりもっと偉い誰かが行くべきじゃないんですかあ!？」

周瑜「手が足りるならそちらに回している。」

太史慈「私は考えるの苦手だから、包、任せたらねー。」

魯肅「……うう。この国、新人使いがホントに荒いですよう。」

孫尚香「なら、すぐに出陣の支度をしてくるわね！」

周瑜「粹怜殿。濡須口から戻ったばかりですまないが……」

程普「蓮華様一人だと流石に心配だし、思春達の後詰めに入るわ。私も小蓮様を手伝ってくるわね。」

そう言い、孫尚香と程普はその場を後にしたのだった。

周瑜「それから、祭殿には……」

そう言いかけた時だった。

黄蓋「……ふむ。包までこき使うて、それで何とかなる戦か？」

周瑜「……何だと？」

黄蓋が突然変な事を言い始めた。

黄蓋「何もかも読みが甘くないかと言うておるのだ。机の上でただ思いつくだけなら、それこそ袁術でも万策を思いつこうが……ここは、戦場じゃぞ。」

魯肅「ひやわっ?! 祭様？」

周瑜「どういう事だ? 何か言いたい事があるなら、今の内に言っておいてもらおうか。」

黄蓋「いかな権謀術数を用いようと、十万の兵で『黄鬚』と名高い勇将、曹彰率いる五十万の大軍団は迎え撃てぬ……そういう事だ。軍師殿。」

周瑜「聞き捨てならんな。その五十万の兵を一万の兵で迎え撃てるようにするのが我ら軍師の仕事・・・私はそう思っていたのだが？」

周瑜「それに、曹彰軍は確かに精鋭だが、隙も多い。兵は水辺の戦いに慣れておらず、南部特有の病に抗う術も持ち合わせていないだろう。」

周瑜「そこを突けば、多少の戦力差など・・・」

黄蓋「あくまでも理想であろう。実際には、五十万の軍勢を目にすれば、威に圧されて自然と膝を折るのが人の常というものだ。ましてやその軍勢を率いるのが、あの『黄鬚』曹彰なら、尚更の事。」

張昭「祭、言い過ぎじゃぞ。慎まんか！」

これには張昭も注意したが

黄蓋「そうはいかん。儂は堅殿から孫家の事を託されたのだ。」

黄蓋「儂が生きておる間に孫家の血筋が絶えたとあつては、堅殿に顔向けが出来んのでな。それは雷火、お主も同じであろう？」

黄蓋にそう言われ

張昭「・・・むう。」

口をつぐむしかなかった。

太史慈「魏の連中が強敵なのは確かだけど、今から負けた後の事まで話してもしよう

がないでしょ?」

黄蓋「袁術に呑まれた轍を踏むのかと言うておるのじゃ!」

周瑜「・・・っ!」

黄蓋「策殿。此度の相手はあまりにも強大。袁術や合肥などと同じように考えていると、痛い目どころでは済みませんぞ?」

孫策「けど、袁術は倒したわよ。」

黄蓋「・・・曹孟徳に大きな借りを作つてのう。そして此度は劉玄徳にも借りを作ろうとしておる。」

黄蓋「手段を選ばぬ事が悪いとは言ひませぬ。大殿とて、不意討ちやだまし討ち、他にも表には言えぬ勝ち方で何度も戦場を生き延びてこられた。」

孫策「なら、祭はどうすれば良いと?」

その質問に

黄蓋「・・・降伏なさいませ。」

と言つた。

魯肅「ひやわわ!」

孫策「何ですつて・・・!」

これには孫策は目つきを鋭くしたが

黄蓋「揚州の州牧を条件に出す程度なら、曹彰も姉の曹操に伝えて降伏を受け入れましょう。そうすれば、孫家の血筋も、この地の安寧も保たれるでしょう。」

黄蓋「あの姉弟は、袁術のような愚か者とは違います。寧ろ策殿に通じる所も多い……。」

黄蓋「……あるいは一度下るフリをして、改めて時機を待つのも策かと。」

孫策「……。」

魯肅「あ、あうう……梨晏様あ、どうするんですか、これえ。」

太史慈「それを考えるのが軍師の仕事でしょ……。」

その時

周瑜「……ふう。文台様の代から仕える宿将も、老いぼれたものだな。」

周瑜がそう黄蓋に言った。

黄蓋「……何じゃと?」

周瑜「戦わずして王の座を譲り渡すぐらいなら、国など名乗るべきではない。初めから曹彰の陣営にでも何でも加わっておけば良かったのだ。」

黄蓋「ふん。国同士の駆け引きも知らぬヒヨッコが……」

周瑜「何と言われようと、今の私は呉の大都督として雪蓮から全軍を預けられた身。

あまり無礼ばかり口にするようなら……。」

黄蓋「ははは。力づくで来るか？面白い。大都督の肩書き如きで、この黄公覆を黙らせる事が出来ると思うなよ！」

この一色触発の状況に

魯肃「ら、雷火様あ……。」

魯肃は張昭に助けを求めたが

張昭「……。」

張昭は腕を組んで黙ったままだった。

魯肃「ああもうこの人、分かっているのか分かってるフリなのか分かってないんだか、見分け付かないんですけど……面倒臭い……！」

張昭「せめてそういう事は心の中でぼやけ、包。」

魯肃「ひやわわわ！」

孫策「……祭、冥琳。」

周・黄「はっ。」

孫策「戦を挑まれた以上、私の中に戦わずして負けを認めるといふ選択肢はないわ。そして、江東の地を奪われる屈辱も……袁術の一度だけで十分よ。」

黄蓋「……。」

孫策「それに、もし私が志し半ばで倒れたなら、その遺志は濡須口の蓮華が継いでく

れる。蓮華の後は小蓮がね。だから……私が死んでも、孫家が途絶えはしない。」

太史慈「雪蓮！そんな話、やめてつてば……！」

黄蓋「……ふむ。後継ぎを決めていただけるのは、儂としても重畳なのだが。」

周瑜「祭！」

黄蓋「別に死ねと云うておるのではないわ。後継者が決まっておれば、無用な諍いも後継者争いも起きぬ。それを喜んだだけだ。」

周瑜「……ぐぬぬ。」

孫策「なら、祭……」

黄蓋「しかし、それはあくまでも後継者の問題が解決したのみ。儂とても、策殿に死んで欲しゆうはない。それは雷火、お主らも同じではないか。」

張昭「……当たり前だ。誰が主の死を願うものか。」

孫策「……そう。分かったわ。」

張昭「雪蓮様！」

周瑜「雪蓮。ここは私が。」

孫策「……。」

黄蓋「……。」

周瑜「……。」

そして、暫くの沈黙の後

周瑜「祭。貴公は、今回の戦線から離れて貰う。軍の規律を乱し、臆病者として振舞った処罰は……追って沙汰をする。退がるが良い。」

と周瑜は黄蓋に処罰を言った。

黄蓋「……やれやれ。主に生きる道を説けば罰せられ、死へと追いやる佞臣はそのままか。」

黄蓋「それでよろしいのか、策殿。」

孫策「……全権は冥琳に預けてあるわ。従いなさい。」

黄蓋「それが御大将のお考えであるならば……失礼する。」

そう言い、黄蓋はその場を後にした。

魯肅「ひやわわ……行っちゃいましたねえ。」

太史慈「うう……シャオちゃんが出た後で良かったねえ。あんな所、絶対に見せられないよ。」

張昭「……祭も分かってそうしたのであろうがな。」

魯肅「ホントに面倒臭いですよ……この人達。」

周瑜「さて。というわけで、ここからの策を改めて説明させて貰おう。……雷火殿。」

張昭「うむ。シャオ様と粹恰には後で儂から伝えておこう。」

孫策「……。」

その周瑜の様子を、孫策は凝視していた。

周瑜「……どうした？」

孫策「……何でもないわ。話を続けて頂戴。」

周瑜「ああ。分かった。」

そして、周瑜は今後の作戦を話したのだった。

70話

揚州・皖城

呂蒙「皖城が見えてきましたね……。」

孫尚香「……むー。本当に魏の旗が立ってるわね。」

陸遜「どうしますかあ、小蓮様。兵は十分な数がいますし、このまま攻城戦に入っても良いですけど。」

孫尚香「そんなんじや、曹彰が来るまで取り返せないわよ。もう二、三日しかないんだし……日が昇るまでには何とかしたいわね。」

この発言に

甘寧「朝までにですか？それはまた強引な。」

と甘寧は言ったが

孫尚香「そのくらいいしないと間に合わないわよ。城を落とした後は、曹彰を迎え撃つ準備だつてしなくちゃいけないんだし。」

孫尚香「濡須口は負けない戦いをすれば良かっただろうけど、ここは勝ちに行かないか、勝てないんだからね！誰か、良い策はない？」

周泰「そうですね……。日が昇る前に城壁を登って、忍び込むというのはどうでしょう？」

孫尚香「良い考えだけど……。出来るの？」

周泰「あの壁を見る限り、そんなに難しくはないですよ。」

孫尚香「よし。出来るならそれでいきましょう。なら、行くのは明命と、シャオと……しかし、孫尚香も攻め手に入ろうとしたので

甘寧「お待ち下さい小蓮様！指揮官が敵の城に率先して忍び込むなど、危険過ぎます！」

と甘寧が止めた。

孫尚香「皆が命を懸けて戦ってるのに、シャオだけ安全な所になっていられないよ。ただでさえシャオは経験も実力も足りてないんだから、このくらいはしなきゃ。」

甘寧「そこまで御自覚いただいているなら、そのお気持ちだけで十分です。……明命、城に忍び込むのは、私とお前だ。」

周泰「分かりました！」

呂蒙「でしたら、私と小蓮様で陽動をすれば成功率も上がるかと。穩様は我々の後詰

めと支援をお願い出来ますか？」

陸遜「大丈夫ですよ。小蓮様、それで宜しいですか？」

孫尚香「むむむ……仕方ないわね。」

孫尚香「なら、作戦はそれで良いわね！皆、行動開始よ！」

そして、孫尚香率いる部隊は、皖城奇襲作戦を始めたのだった。

皖城近く

純「皖城が奇襲されたと。」

合肥を出て、皖城へと向かっていた時に、皖城の守備兵がその報告をした。

皖城守備兵A「はい！気が付いたら城壁の中に忍び込まれて……関羽様と皇甫嵩様が応戦しておりますが……」

純「……悩んでも仕方ねーな。後続は護衛と共にこのまま進軍、前衛は俺に続け！

秋蘭！」

秋蘭「はっ！攻撃部隊は、全速で進め！」

そして、皖城に向かつて、全速力で進軍した。

皖城

愛紗「純様、申し訳ありません！」

純「皆は無事か？」

純達が到着した時、愛紗達は皖城から撤退し、合流した所だった。

楼杏「皆、何とか脱出出来たわ……。」

稟「とりあえず状況を聞かせて下さい。」

愛紗「ああ。夜明け前に奇襲があり、いつものように籠城で応戦したんだが……そっちは陽動で」

楼杏「気が付いたら、城門を乗り越えてきた兵に門を開けられた後だったわ……。」

秋蘭「成程……。門を開けられては、数刻と持つまい。」

翠「確かに……。」

愛紗「ああ。使いの兵を出した後、何とか敵を追い出そうと粘ってはいたのだが……」

日が昇る頃には城を追い出されてしまった。面目次第もありません。」

愛紗「敗因はひとえに、孫権の堅実な戦いぶりに慣れきっていた我々の慢心です。この処罰は、如何様にも。」

そう言つて、愛紗は自らの首を差し出した。

風「とはいえ・・・この場合は、兵に損害がない事を評価すべきですね。愛紗ちゃん達でなかつたら、ここには誰も立つてないかもしれないかもしれません。」

純「取られたものはまた取り返せば良い。それに、この大事な時期に俺にとつて大切な仲間を二人失うわけにはいかね。」

純「処罰は保留だ。この遠征が終わるまでに、今日の失策を取り返す手柄を立ててみせろ。・・・良いな?」

それを聞いた愛紗は感激し

愛紗「御意!」

と拱手し言つた。

純「うむ。・・・さて、問題は敵の将が誰かだな。」

稟「純様のような展開速度と奇策を使う将ですね。孫権は濡須口でしょうし、孫策ならもつと力に任せて押し込んでいきますし・・・と言つても、純様も力づくで攻めますが。」

純「おい、稟。」

愛紗「陽動側に立っていたのは……桃地に孫。少なくとも、合肥に攻めてきた將の中では見た事のないものでした。」

純「ふむ……確かにそのような旗は見てねーな。」

風「だとしたら、末娘の孫尚香さんかもしれませぬねー。孫策さんに負けず劣らずの苛烈な性格だと聞いてますが。」

純「そうか……。」

その時

秋蘭「純様！城門が開いて、敵の將が出て来ました！」

皖城の城門が開き、孫尚香が出て来た。

純「噂をすればなんとやら……だな。」

秋蘭「如何なさいますか？」

純「俺が出る。皆も支度しろ。」

そう言い、純は馬を前に出し、孫尚香と対峙した。

純「……お前が、そちらの指揮官か？」

孫尚香「ええそうよ！我が名は孫尚香！江東の虎、孫堅の末娘よ！」

純「そうか……孫堅の娘か。成程ね、この皖城を一瞬で取り返した手並みを見れば、
領ける。」

孫尚香「ふんふん……そうでしょ？この江東に攻め入ってきた事、骨の髄まで後悔させてあげるんだから！」

純「そうか……。しかし、『黄鬚』の力を侮らないで貰いたいな。」

孫尚香「ムキーツ！城を取り返されたくせに偉そうに！そんな異名、弱いから所詮格好つきたいだけの名前でしょ！」

純「……だとしたら、どうする？」

孫尚香「そんなの、決まってるでしょ！」

そう言うと、孫尚香は、合図を送った。すると、城から一匹の大きな虎が現れた。その虎は、通常の虎よりも一回り大きい虎だった。

純「ほお、随分デケー虎だな……。」

孫尚香「ふんふん……そうでしょ？アンタなんか、この子に食い殺されちゃいなさい！」

そして

孫尚香「行きなさい!!」

そう虎に命令した。すると、虎は純達めがけて走り出した。

純「ふんっ！」

しかし、純はそれに動じる事なく虎めがけて馬を駆けた。

孫尚香「馬鹿ね！この虎は普通の虎よりも大きく、力も強いよね！」
それを見た孫尚香は、鼻で笑いながら言い

孫尚香（それに明命と少し似てる剣を持つてるけど、明命と違って少し反ってるわね。けど、アイツはそれを抜いてない。やっぱり、所詮名前だけなのね・・・。）

蔑む感じで純を見ていた。

ガガガ

純めがけて爆走する猛虎に対し

ガガガ

馬を駆ける純。すると純は、馬の鬣を強く掴み、鞍に片足を掛けた。

そして、獲物目掛けて飛ぶ猛虎に、同時に純も馬を高く跳躍させた。

空中で純は鬣を引っ張り、馬の頭と猛虎の頭を激しく打ち付けた次の瞬間、純は鞍から跳躍し、

純「うおおおっ!!」

ドシュツ!!

手刀を猛虎の背中に叩き込み、深々と突き刺さったのだ。

ドドオオン!!

そして、猛虎の体は、大地に激しく叩きつけられ、その猛虎の背中からは鮮血が迸っ

た。

孫尚香「え!？」

これに、孫尚香は顔面蒼白となった。孫尚香だけじゃなく

甘寧「!？」

周泰「ひっ!？」

呂蒙「そんなっ!？」

陸遜「ありえないですよー!？」

皖城内の甘寧達も同じ顔をしていた。そんなのを余所に

純「じつとしてろ!？」

背中に貫いた腕を笑いながらブチャ、グチャつとこねくり回して

純「今すぐ楽にしてやる!？」

と言い、そして

ジュバツ

純は、その猛虎の背中から手を引っこ抜いた。その手には、何と猛虎の心臓が握られていたのだった。

これを見た孫尚香は

孫尚香「な、何アイツ……!?江東に住んでいるあの虎をこうも容易くなんて……!？」

何なのよアイツ・・・!?

あまりにも現実離れた光景に呆然とし、恐怖の顔色を浮かべていた。一方

秋蘭「あれくらい当然だ。」

風「・・・ぐう。」

稟「寝ないで下さい!!」

風「・・・おお!?あまりにも現実離れた光景に遂・・・。」

稟「全く・・・。」

曹彰軍兵士A「流石曹彰様だぜー!!」

曹彰軍兵士B「御大将の膂力を舐めて貰ったら困るぜ!!」

曹彰軍兵士C「見たか、江東の者共!!」

純率いる軍は、皆賞賛の声で満ち溢れ、一部は現実逃避のあまり寝るほどだった。

それを余所に

純「どうした?」

純は不敵な笑みを浮かべながら立ち上がり

純「怖じ気づいたか、江東の虎の末娘!」

猛虎の心臓を、後方へと放り捨てた。それを見た孫尚香は

孫尚香「な、なら・・・こ、江東の兵の恐ろしさ・・・た、たつぷり教えてあげるん

だから！」

怯え且つ涙目でそう言い、皖城に戻ったのだった。

それを見た純は、自軍に戻り

純「総員、攻撃準備！江東の連中を、遠慮なく叩き潰せ！」

純「夕刻までに、決着を着けるぞ！」

「「おおーっ!!」」

そして純達は、皖城へ総攻撃を開始したのだった。

71話

皖城はあつさりと陥落し、純達は城内に入った。

愛紗「伏兵の存在に気を付けろ！ 周辺を警戒しつつ、城内の制圧を急げ！」

楼杏「愛紗さん。」

愛紗「楼杏殿。どうでしたか？」

楼杏「一通り見てきたけど、畏はなかったわ。ただの空城だわ。」

愛紗「そうですか。別に空城の計ってわけではなかったか・・。」

楼杏「ええ。細かいところも見ておくけど、恐らく大丈夫だと思うわ。」
すると

純「楼杏。畏はなかったか？」

と純が現れ、楼杏にそう尋ねた。

楼杏「ええ。特にそれらしい物は見当たらなかったわ。」

純「そっか。なら、予定通りここは前線基地として使わせて貰おう。皆にも、そう伝えろ。」

愛紗「御意！」

楼杏「分かりました。」

そう言われ、愛紗と楼杏はその場を後にした。

純「稟・・・敵は動揺してたとはいえ、敵は籠城する気はなかったのかな？引き際を見て、あつさりと退いた感じだったし・・・。拠点を構えておけば、俺達の動きはある程度縛れる筈なのに・・・。」

稟「これは周瑜の策かと。恐らくですが・・・顔見せと実力を計るつもりだったのではないかと。」

純「そうか・・・。この後周瑜がどんな手を打ってくるか・・・！」

そう言いながら、純は稟と一緒に歩いた。それを見た稟は

稟（最近の純様は、益々覇気が強くなった気がしますね・・・。それも武人としての覇気だけじゃなく、実際に見たわけではないのですが、どこか西楚の霸王項羽に匹敵するかの如く・・・。）

稟（けれど、どのような道を歩もうと、私は貴方様の傍を離れるつもりはありません。

例え悪鬼羅刹の道に落ちようとも、私はそれに付いていくまで・・・！）

そう思いながら純を見ていたのだった。

呉軍

甘寧「大丈夫か。皆、怪我はないか？」

陸遜「はい、大丈夫ですよ。ただ……」

そう言つて、陸遜は後ろを振り返つた。そこには

孫尚香「……うつ……ぐすつ。」

甘寧「小蓮様!？」

孫尚香が、涙を流し縮こまつてしまつていた。

甘寧「やはり、先程の……」

陸遜「はい。冥琳様の作戦通りなのですが、小蓮様がこのように……。先程曹彰さんがあつさりと虎を倒してしまい、先陣を切つて皖城を攻撃し我が軍の兵を斬り殺すその姿に恐怖を感じてしまったのでしよう……」

甘寧「そうか……。やはり、『黄鬚』の異名は伊達じゃない……!」

呂蒙「穩様!後方部隊、合流しました!」

甘寧「穩……どうすれば良い?」

陸遜「私達にとって大事なのは、曹彰さんを長江に渡らせない事です。向こうに合わ

せて時間稼ぎをするのではなく……こちらがやりたいようにやるのが一番なんですよお。」

陸遜「それに、今の小蓮様では、籠城しても意味なかったと思いますよお。」

甘寧「……そうだな。撤退するぞ！」

そして、孫尚香率いる軍は、撤退した。そして、孫尚香の代わりに穩が指揮を取ったのだった。

益州・成都

魯肅「えつと……お初にお目に掛かります、劉玄德殿。私の名は魯肅。我らが孫呉の主、孫策よりの書状を持って参りました。」

その頃、太史慈と魯肅は成都に到着しており、魯肅は使者としての挨拶の練習をしていた。

魯肅「いや、参上致しました、の方が良いですかねえ。」

太史慈「おー。上手い上手い、やれば出来るじゃん。包。」

魯肅「もう・・・やれば出来るじゃん、じゃないですよー！梨晏様が堅苦しい挨拶はどうしてもイヤだつて言うから、仕方なくやってるんですつてばあ。」

魯肅「包だつてこういうの苦手なんですよ・・・。うう、ちゃんと練習しとかないと、絶対に嘔むか頭の中真つ白になっちゃいますよう。」

そう言い、魯肅は泣き言を言うが

太史慈「別に大丈夫だつて。蓮華様の話じゃ、劉備つてそんなに堅苦しい事言わない性格らしいし。」

と太史慈はそう言った。

魯肅「だからつて初っ端から梨晏様みたいに馴れ馴れしくして良いわけないじゃないですかあ！包がいなかったらどうするつもりだったんですか。」

そう言われ

太史慈「んー・・・お初にお目に掛かります、劉玄德殿。我が名は太史慈。我らが孫呉の主、孫策よりの書状を持って参上致しました・・・こんな感じ？」

太史慈は挨拶をやってみたが、まさに完璧だったため

魯肅「ひやわわ！ちゃんと出来るじゃないですかー！」

と魯肅はそう返した。

太史慈「そりゃ出来るよ。面倒くさいからイヤだっただけで。」

魯肅「あうう・・・包、完全にハメられました・・・もう世の中の全部が信じられませんか・・・何もかも滅びれば良いのに・・・」

太史慈「向こうには包が代表って言うてあるから、頑張つて♪」

??「あの一。失礼します。」

太史慈「あ・・・」

魯肅「・・・ひやわわ！何ですか!？」

一人の少女が部屋に入ってきた。

??「一応、謁見の間の準備が出来たんですけど・・・どうしましょう?」

魯肅「す、すいません。謁見の間に行く前に、もう一回だけ練習させてもらつて良いですか?この人がアテにならないんで、あなたで。」

??「はあ・・・練習。」

魯肅「え、えーつと・・・お初にお目に掛かります、劉玄德殿。私の名は魯肅。我が孫呉の主、孫策よりの書状を持って参りました。」

魯肅「ああ・・・とりあえず何とかなりそうですよ。本番の劉備さんも、あなたくらいホワツとしてお話ししやすそうな感じだと楽なんですけど。」

??「あ、あはは・・・だったら大丈夫じゃないかなーと思うんですけど。」

魯肅「そうですねえー。」

劉備「えーっと、私はその劉玄德なんです。」

少女のカミングアウトに

魯肅「・・・はい？」

魯肅は一瞬考えが追い付かなかったが

魯肅「ひゃわわー!？」

理解した瞬間、驚いてしまった。

劉備「お二人は堅苦しい場所が苦手って聞いたので・・・お話はこちらと謁見の間、どつちが良いかなって聞きに来たんですけど。」

魯肅「な、ななな、なんで一国の王がわざわざそんな侍女みたいな事してるんですかー

！包、完全に侍女だと思ってましたよ!!」

太史慈「え、でも雪蓮もよくやるよね。」

魯肅「ああもう、ホントに何もかもが信じられませんかー!!」
こうして、魯肅達は劉備に出会えたのだった。

魏延「これが・・・呉の大船団。凄まじい規模ですね。」

孫策「ええ。この濡須口から目的地までは、まだまだ掛かるけれどね。」

周瑜「・・・しかし、梨晏達とは入れ代わりになってしまったな、諸葛亮。」

諸葛亮「そうですね。ですが、結果的には良かったと思います。」

諸葛亮「成都是詠ちゃんに任せていますし・・・周瑜さんと私達の考えが同じと分かりましたから、既に向こうも動き始めているでしょう。」

周瑜「・・・ふむ。そうだな。」

孫策「ま、曹彰の軍は神速だけどそれはあくまで地上での話。今回は水軍のためゆっくり来るだろうから、そこまで慌てなくても良さそうだけどね。」

孫権「姉様。船団はこのまま長江を遡るのですか？」

孫策「今のところ、荊州あたりの水軍が封鎖しているという話も聞かないしね。早い内が良いでしょ。」

孫策「荊州の水軍なんか物の数じゃないけど・・・相手が相手だし、余計な戦いをしないに越した事はないもの。」

孫権「そうですね。しかし、諸葛亮と冥琳の作戦は分かりましたが・・・曹彰は乗っ

てくるでしょうか？」

孫権の懸念に

諸葛・周「はい。／＼ええ。」

と諸葛亮と周瑜はそう返事をした。

孫権「・・・。」

孫策「私も乗るに賛成よ。・・・実際に直接相まみえた事も話した事もないけれど、母様から話を聞いてた限り、あれはそういう子でしょ。」

周瑜「いずれにしても、このまま正面对決をすればこちらは押し負けてしまいます。戦力に余裕があり、蜀との同盟が成っているうちに、背水の陣を敷くのも策の一つかと。」

諸葛亮「そして・・・それを背水の陣にしないのが、私達の役目です。」

これに

孫権「・・・分かりました。」

孫権はそう答えた。

孫策「なら蓮華。分かったついでにシャオを迎えに行つてあげて。濡須口は粹恰に任せたので良いわ。」

孫策「それに・・・シャオの様子が気になるし・・・。」

魏延「情報では、皖城には張遼こそいないものの、曹彰は来ているとか。」

孫権「分かったわ。・・・諸葛亮、魏延を借りても構わない？」

諸葛亮「はい。こちらの護衛は必要ありませんから・・・焰耶さんが良いのであれば。」

魏延「勿論お供します！是非同行を、孫権殿！」

そして、孫権は魏延と一緒に出陣したのであった。

72話

皖城

甘寧「棧橋に火を掛けよ！敵を倒すのは後で良い！資材を焼き、施設を壊す事を優先しろ！」

周泰「食料にも火矢を！燃えたかどうかは確かめなくて構いません、誰かの矢は当たります！」

呂蒙「一当てしたら、すぐに離脱を！」

一方純達は、呉軍の神出鬼没に攻撃するのに対応していたが、苦戦していた。

真桜「風、糧食に火が……！」

沙和「風ちゃん、こつちももう無理なの！防備の手薄な所を、一点で突かれたの！」

風「くっ……撤退！撤退するぞーっ！」

純「……そうか。渡河拠点の設置は、また失敗したか。」

真桜「はい。長江の川岸に兵を展開し、作業を始めた時点で奇襲が入りよって……糧食と資材を焼かれて、作業を続ける事も出来なかつたですわ。」

沙和「連中、妨害のための攻撃に集中しているようで……先日の皖城攻めと同じく、動きが早いために手に負えないの。」

純「もう一度や二度じゃねー。なんであいつらがあつさり撤退したか……このためだつたとはな。」

風「前は、河に近寄つた所で攻撃されました。また、長江の側から船に乗つて、直接仕掛けてきた時もありましたし。」

稟「合肥からこちらに来る輜重部隊も度々襲われていますから、これ以上長江寄りに拠点も移すわけにはいきませんしね。」

純「そうだな……。しかし、孫尚香は情報によると戦意喪失したと言うが、甘寧達は健在だ。面倒だな……。」

純「皖城に籠もつては出来ねー策だ。合肥から霞を呼ぶべきか？」

風「んー。合肥の押さえも必要ですし、今霞ちゃんを呼ぶとそちらを叩かれてしまいそうですね。」

稟「建業で大きな動きがあるという情報もありますし……補給線は伸びてしまいま

すが、次は本隊ごと動かすしかありませんね。」

純「・・・そうだな。」

稟「建業では、こちらに降伏する案を出した黄蓋が周瑜に棒で打たれたという噂もある程ですし・・・孫尚香の動きを見るだけでも、徹底抗戦の意思は明白です。」

その時

愛紗「純様！石亭を出た輜重隊が襲撃を受けたという報告が！」

輜重部隊が襲撃されたという報告を受けた。

風「おー。見事に隙を突かれましたねー。」

純「分かった。俺が出る。愛紗、準備は？」

愛紗「既に秋蘭と翠に。」

純「なら、すぐに出立する。稟、ここは任せたぞ！」

稟「はっ！純様もお気を付けて。」

そして、純は愛紗達と一緒に輜重隊救援のため出立したのだった。

甘寧「ちっ！流石に対応が早い、そうそう何度も上手くはいかんか！」

周泰「けど……これだけの兵で輜重隊を守ろうなんて、無茶ですよ！」
そう言い、周泰は攻撃をした。

曹彰軍武将A「くっ！何としても守り抜くぞ！」

曹彰軍武将B「うむ！すぐ応援も来る、それまで持ち堪えるのだ！」

それに対し、輜重隊を守る守備隊も、何とか粘っていた。

呂蒙「受け止める必要はありません！総員、そのまま回避！弓部隊、火矢を！」
そう言い、呂蒙は輜重に火矢を放った。

曹彰軍武将A「しまった……！」

曹彰軍武将B「これでは、糧食が……！」

甘寧「だからと言って周囲に気を配らなすぎだ！はあああつ！」

曹彰軍武将A「……ぐっ！」

その時

愛紗「はあああつ!!」

ガキン！

甘寧「……ぐっ！増援か！いくら何でも早すぎる！」

純「お前ら、大丈夫か！」

曹彰軍武将A「曹彰様！それに……！」

翠「……総員、連中を取り囲めえ！」

純達救援部隊がやって来た。

甘寧「くっ……！そろそろ退き時か！」

呂蒙「……マズイです！今度はこつちが取り囲まれました！」

甘寧「穩に応援を！」

その時

曹彰軍兵士A「ぐわっ！」

曹彰軍兵士B「ぎやあっ！」

秋蘭「な、何だっ!？」

別の方向から矢が飛んできた。

甘寧「この矢、どこから……！」

周泰「穩様の応援にしては、予定の方向が違います！これは……
すると

魏延「曹……子文ーっ!!」

魏延が鈍砕骨を純目掛けて振り下ろそうとしてきた。

愛紗「純様！」

しかし

純「ふんっ！」

ガキン！

魏延「・・・ちっ！」

それを純があっさり受け止め、流した。

翠・甘「魏延／魏延殿!!」

そして

孫権「思春、大丈夫!？」

孫権もやって来た。

甘寧「大丈夫です！それより蓮華様、どうしてここに・・・!?」

孫権「雪蓮姉様から、もう十分時間は稼げたという指示を伝えに来たのよ。それと・・・

小蓮の様子も・・・」

その横で

魏延「曹子文！覚悟！」

魏延が再び純に攻撃を仕掛けたが

ガキン！

魏延「うわっ!!」

純「その程度の実力で、この俺を討てると思ったか！」

魏延「くううつ！な、何て強さだ！？不意の奇襲も、全く動じてない……！」

純との実力差は圧倒的で、すぐ不利になった。

愛紗「純様！お下がり下さい！」

翠「ああ、ここはあたし達に任せてくれ！」

その途中、愛紗と翠が魏延の相手を務めた。

純「分かった！そちらは任せたぞ！」

純はそう言つて、敵の増援に目を向けると

孫権「……え？」

純「……！」

そこにいたのは

孫権「……曹彰……子文？」

純「孫権か……。」

以前合肥と陳留で出会った少女だった。

孫権「あなた……が……？」

純「そうか……やっぱりアンタが……。」

孫権は混乱して頭が追い付かないのに対し、純はそうだったかと現実を受け入れていた。

秋蘭「純様！撤退しましょう！」

すると、秋蘭がそう純に声を掛けた。

純「分かった！撤退するぞ！」

それに対し

甘寧「蓮華様、ここは退きましょう！魏延殿も！」

孫権「・・・待つて！あなたが・・・あなたが曹彰つて・・・！嘘だと言って！」

甘寧も撤退する事を孫権に伝えたが、孫権は純が曹彰という現実には未だ追い付けないでいた。

純「・・・孫権、戦場で会おう！そして、我らと雌雄を決しよう！はっ！」

しかし、純はそれ以上孫権の言葉を聞く事なく、馬首を巡らせて、一気に戦場を離脱したのだった。

孫権「・・・そんな・・・彼が・・・曹彰だなんて・・・！嘘・・・嘘よ・・・！」

その時、孫権はシヨツクのあまり口元を抑え涙を流しながらそう言ったのだった。

73話

皖城

純「呉軍は赤壁で陣を展開しているか……。」

愛紗「はい。建業を出た船団が長江を遡上しているとの情報も入ってきました……
恐らく、間違いないかと。」

純「では稟、風、俺達はどうすれば良いと思う？」

稟「はつ。我々は皖城を放棄し、合肥まで退きます。」

風「そして、そこから北に抜けて荊州へと向かうが良いかと。」

純「ふむ……。」

翠「このまま赤壁に向かうのではないのか？ 荊州なら、合肥まで引き返さずに真っ直ぐ進む方が早いんじゃないか？」

翠の疑問に

秋蘭「先の甘寧達の焼き討ちで、糧食が心許ないのだ。このまま呉の領土を赤壁まで

抜けるより、遠回りでも補給に余裕の出来る魏の側を通るべきなのだ。」

稟「それに、荊州の水軍と合流する必要もありますから、相手が水軍を使う以上、こちらにも水軍を出さねば話になりません。」

秋蘭と稟がそう答えた。

純「そういう事だ。……皆、準備を急げ！」

そして、純達は準備を始めたのだった。

赤壁・呉軍

孫権「……うっ……ぐすっ。」

孫権は、先の戦闘で純と予想外の再会をして以来、部屋に閉じこもり、毎日寝台に顔を埋め声を押し殺しながら泣いていた。

甘寧「蓮華様……今日は少し外の空気を吸ってみませんか？」

孫権「……そういう気分じゃないわ。」

甘寧「で、でしたら……雪蓮様と共にお話するのは……」

孫権「……何も話す事はないわ。」

甘寧「れ、蓮華様……」

孫権「出てって……」

甘寧「……え？」

すると、孫権は寝台から顔を上げ

孫権「出てってって言ってるの!!」

そう叫ぶと自分の枕を投げて甘寧にぶつけ、そのまま寝台に潜り込んでしまった。

甘寧「……申し訳ありませんでした。失礼します。」

それを言われた甘寧は、言われたとおり部屋を出たのだった。

孫権「……ぐすつ。どうして……どうしてあなたは曹彰なの……!!」

孫権「何で……初めて好きになった人が……敵なの……!!」

孫権「何でなの……何で……ぐすつ……」

そして、また孫権は寝台の中で涙を流したのだった。

甘寧（蓮華様……）

その様子を扉越しから聞いていた甘寧は、何とも言えない気持ちになり、組んでる腕の力を強めたのだった。

一方の孫尚香の方も

孫尚香「……うつ……ぐすつ。」

皖城の一件以来、恐怖により殻に閉じこもってしまった。

孫策「シャオ……。」

孫策も定期的に様子を見に来ているが、変わらなかった。

孫策「また……来るからね。」

そう言い、部屋を出るといった状態だった。

孫策「……ふう。」

周瑜「雪蓮……。」

孫策「冥琳……。」

周瑜「相変わらずか……。」

孫策「ええ……。余程、皖城での曹彰の強さに堪えたのでしよう。戦う前に、シャ

オが放った虎を素手で倒してるしね。」

周瑜「その後の曹彰の攻撃も凄まじかったと聞いた。」

孫策「ええ、私もシャオや思春達にも聞いたわ。」

回想

純「攻撃開始ーっ!!」

曹彰軍兵士「「おおーっ!!」」

純の命で、曹彰軍は一気に皖城に向けて突撃した。

甘寧「構え！撃てーっ！」

それに対し、呉軍は甘寧の命で弓部隊が一気に構え、矢を放った。
しかし

純「はっ！」

純が先頭に立って皖城の一部の陣を馬で駆け入り

純「うおおおおっ!!」

呉軍兵士「「ギヤアアツ!!!」」

呉軍の兵士を以前呂布との一騎打ちで使った偃月刀で斬り殺していった。

愛紗「純様に遅れを取るな！我らも続くぞーっ!!」

曹彰軍兵士「「おおーっ!!」」

それに愛紗達も続いた。

純「ハッ！」

呉軍兵士A「グハッ！」

純「うりやああっ!!」

呉軍兵士B「グワッ!!」

純は、馬を駆け呉軍をどンドン斬り殺していった。

その時

純「危ねっ!?!」

呉軍の弩が放たれ、それを避けて進み、途中馬がやられたが怯む様子も見せず

純「弩に気を付けろ!!」

と自軍の兵に言った。その際

純「ハッ!フッ！」

その弩がある場所に向かって二回ほどストップしつつその場に到達し

呉軍兵士「うわっ!!」

呉軍の兵士を蹴飛ばし斬り殺し

純「フンッ！」

偃月刀を華麗に振り回して弩が装備された櫓の車輪を壊した。

そしてその櫓を

純「うおおおっ!!」

自らの腕で倒した。それと同時に城門が開き

曹彰軍兵士「「おおーっ!!」」

曹彰軍は一気に城内に突入したが

甘寧「退け!ここは退くのだ!!」

周泰「ここは潮時!!退くのです!!」

呉軍はあつさりと撤退したのだった。

回想終了

周瑜「・・・という話だったな。」

孫策「私も概ね同じ内容よ。」

周瑜「しかし、本当に曹彰の強さは人智を超えてるな。」

孫策「ええ、そうね。」

すると

孫策「それと冥琳・・・祭は本当に私達を曹彰に投降させたかったのかしら？」
という事を周瑜に尋ねた。

周瑜「・・・どうして私に聞くの？」

孫策「さあ？」

周瑜「・・・今となつては知る由も無い。今は戦力にならない味方より、敵が思い通りに動いてくれる事を期待するだけだ。」

孫策の問いに、周瑜はそう答えた。

孫策「あ、そう。・・・ふーん。」

周瑜「・・・何か言いたい事があるのか？」

孫策「ううん。もう無くなつたわ。・・・色々と分かつた事があるから。」

周瑜「そう。・・・良かつたわね。」

孫策「ん。良かつたわ。」

周瑜「それより・・・本当にこの案に曹彰は乗ってくる、と考えているのか？」

周瑜の問いに

諸葛亮「はい。必ず。」

と諸葛亮は言つたのだつた。

その頃、黄蓋は建業にて謹慎中だったが、鳳統によつて脱出し、赤壁に向かつたのだ

が、これはある作戦であるのは内緒である。

74話

荊州・烏林

純「なあ稟、お前の考えを聞かせてくれ。諸葛亮と周瑜が打つ策は何だと思う？」

稟「我が軍は数は多けれど、水上の戦いには慣れておりません。それに、この土地の風土にも慣れておらず、体調を崩す兵も現れ、厭戦気分の状態になると思います。」

稟「その状態の我が軍を破るために敵が行う策はただ一つ。それは……」

稟「火計です。」

純「火計？」

稟「はい。そして、その火計を上手く使うのが、矢です。その矢を上手く回収する方は、私の予想ですが、諸葛亮と周瑜は船に藁人形を使って、多くの矢を回収させる考えかと。」

純「成程……。ならば、藁人形に関しては、火矢を放っておくか。」

稟「はい。それが宜しいかと。」

純「ふつ、諸葛亮と周瑜の驚く顔が目に浮かぶ。」

そう言い、純は不敵な笑みを浮かべたのだった。そして、次の日の払暁、広大な長江の向こう側、つまり敵側から何艘もの小舟が曹彰軍の陣に流れてきたが

秋蘭「アレは全て藁人形だ！全て火矢で焼き尽くせ！」

火矢で全て焼き尽くされ、矢も殆ど無かったのだった。

赤壁・呉蜀連合軍

周瑜「舟が戻ってきたか。だが・・・思ったほど矢は刺さっておらん。」

諸葛亮「・・・はい。」

魯肅「ひやわわ・・・乗ってるのが藁人形って分かっても、気持ち悪いですね。矢が刺さってるのに平然としてますよ、あれ。」

そう話していると

諸葛亮「星さん、白蓮さん、お疲れ様でした！皆さんご無事ですか？」

公孫賛と趙雲が戻ってきた。

趙雲「ああ。全て焼かれはしたが、兵は無事逃げてこちらで回収している。大事な。」

公孫贊「けど朱里。連中、あつという間にこちらの策を見破ってきたぞ。」

公孫贊「矢は・・・そうだな。十万を調達するどころか、全てかき集めても百あるかどうかだと思う。」

諸葛亮「そうですか・・・。」

魯肃「えええ!?これを藁人形って見抜くとか、近寄りすぎたんじゃないですかあ?」

趙雲「まさか。敵との間合いはこちらで確認してから向かっただろう。それ以上は近付いておらん。」

公孫贊「それに、調達した矢も、全て火矢で使われた矢だしな。」

趙雲「・・・連中に余程目の利く奴がいたのだろうな。面目ない。」

趙雲の謝罪に

周瑜「問題ない。寧ろ、十万の矢よりも貴重な情報が得られた。」

周瑜はそう答えた。

諸葛亮「やはり・・・こちらの策が見抜かれているようですね。」

趙雲「誰かこちらに間諜が?」

周瑜「いるのは違いないだろうが、そやつらの所為ではないな。そもそもこの策は、我

ら五人と舟を漕がせた信頼の置ける兵しか知らん。抜けようがない。」

諸葛亮「相手は多分、こちらの策を知っていたのでしよう。仕掛ける前……いや、私がこの策を思いつく前から。」

魯肅「思いつく前から見破るって、意味が分かんないんですけど？ 諸葛亮さん、大丈夫ですか？ 色々と。」

周瑜「恐らく、曹彰の懐刀の郭嘉だろう。」

諸葛亮「はい、恐らくは。曹彰さんが涼州・漢中を平定出来たのは、曹彰さん本人の武勇と果断さもあつたのですが、それを後押ししたのが郭嘉さんです。そのお陰で、私達は漢中で負けました。あの方の知謀と先見の鋭さは、流石としか言いようがありません。」

と諸葛亮はそう言ったのだった。

烏林

純「……やはり、風土に馴染めてねーな。病人が出てる。まだ深刻な影響が出てる

わけではねーんだけど、どこもちらほらと出始めてる。葉を大量に持って来て正解だったな。稟に感謝しなければ……。」

そんな事を考えていると

純「ん？何か騒がしいな」

少し騒がしい事に気付いた。すると

凧「純様、侵入者です！」

凧から侵入者の知らせが来た。

純「侵入者!? 命知らずな奴もいるもんだなあ。」

凧「それが、門番もあつさり突破した所を見ると……かなりの手練れかと。」

純「ほお、手練れねえ……。」

凧「純様?」

その時、凧は手練れと聞いた純の目が輝いてるのに気が付いた。

秋蘭「純様！」

真桜「大将！」

すると、今度は秋蘭と真桜がやって来た。

純「秋蘭、真桜！侵入者だつてな？」

秋蘭「はい。今霞と愛紗が先行しているのですが……どうも一筋縄ではいかない予

感がします。」

純「俺も行く。お前らも来い！」

そう言い、純は秋蘭達を連れて行った。

愛紗「はあ・・・はあ・・・はあ・・・。何だ此奴は！」

霞「かなり出来るで！」

そういう愛紗と霞の前には一人の女性、そして離れた所に少女がいた。

??「何だ何だ。二人の持つてるその偃月刀は飾りか？」

霞「ンなわけあるか！ウチの一撃・・・もう一度受けてみいっ！」

愛紗「私も行くぞ！はあああっ!!」

そう言い、霞と愛紗は攻撃したが

??「その気合と根性は見上げたものじゃし、筋は悪くない。しかし・・・」

愛紗「・・・なっ!?!」

霞「何やて・・・!?!」

避けられてしまい

??「少々我慢が足りんな。出直してこい。」

霞「がはっ！」

愛紗「ぐっ！」

腹部にそれぞれ一撃をくらってしまった。

沙和「そんな！愛紗ちゃんとお姉様がやられちゃったの!？」

真桜「姐さん、愛紗！大丈夫か!？」

純「へー。つえーな。」

その時、純達は現場に到着し、純はその女と霞、そして愛紗の間に割って入った。

秋蘭「純様！」

霞「純、邪魔すんなや！」

愛紗「純様、危険です！お下がり下さい！」

純「お前ら、少し頭を冷やして黙ってる。」

そう言い、秋蘭と愛紗、そして霞を落ち着かせた。

そして、純はその女の方に向き直る。

??「ふっふっふ。久し振りだな、小僧。」

純「はっ？アンタとどっかで会ったっけ？」

??「・・・前に亡き孫文台様が存命の時に会ってるはずじゃが？それに、儂とも手合

わせもしておるぞ？」

純「ふんっ、覚えてねーな。孫堅と手合わせしたのは覚えてんだが、アンタは記憶にねーな。って事は、アンタ相当弱ーんだな。俺は基本的に雑魚は覚えねーからさ。」

この言葉に

??「・・・何じゃと・・・。」

その女の顔が怒りで歪んだ。

純「少しでも自分の武に自信があんなら掛かってきな。瞬殺してやつから。」

??「はっ！言ってくれる。あまり舐めた・・・。」

純「御託言わずに掛かってきな。・・・俺の大切な人を馬鹿にしてタダで済むと思っ
てんじゃねーぞ・・・。」

そう言う純から凄まじい威圧感が溢れ出した。

??「・・・これは・・・かなりヤバイのう。あの時からまた更に強くなっておるし、立っ
てるのもやつとじゃ・・・。」

そう言う女は、膝が震えつつも集中を高めていたが

純「フンッ！」

既に純の拳が彼女の腹にめり込んでいた。

??「かはあっ!？」

そのまま女は糸の切れた操り人形のようにだらりと純にもたれかかったのだった。

純「……………つてありや、ちよつと小突いただけなのに……………」

??「あわわ……………」

その時

稟「純様！」

稟が現れた。

純「ああ、稟か。黄蓋、連れてくけど、良いか？」

秋蘭「……………覚えていてではありませんか。」

純「……………つたりめーだろ。」

稟「全く……………とりあえず連れて話を聞きますが、その前に起こして下さい。それ

と、そちらの少女も。」

??「は、はい！」

純「分かった。黄蓋、起きろ。」

純は黄蓋の背中を叩いた。すると

黄蓋「うう……………もう少し優しく出来んのか。」

黄蓋が目を覚ました。

純「そいつは無理だ。さて、こっちに来い。風、沙和、席の用意を。」

黄蓋「うむ。」

凧「はっ。」

沙和「分かったの！」

秋蘭「純様。私も是非同席を……！」

愛紗「私も……！」

霞「ウチもや……！」

純「ああ。黄蓋、構わねーか？」

黄蓋「無論だ。それこそ、儂が曹彰を弑するやもしれんしな。」

この言葉に

秋蘭「貴様……！」

愛紗「その言葉……！」

霞「聞き捨てならんで……！」

秋蘭と愛紗、そして霞はそれぞれ武器を構えた。

黄蓋「冗談に決まっておろう。そう殺気を垂れ流すでないわ。」

そして、純達は黄蓋を連れて行ったのであった。

75話

烏林・曹彰軍本陣執務室

黄蓋との面会は、仮設された執務室でやる事となった。

愛紗「我が軍に降りたいだと・・・？」

黄蓋「左様。我が盟友・孫堅の夢見た孫呉は、最早彼の地にはない。・・・ならば儂の手で引導を渡してやるのが、呉の支えを任された者の責務であろう。」

秋蘭「周瑜との間に諍いがあったと聞いたが・・・原因はそれか？」

黄蓋「やれやれ、もう伝わっておるのか。・・・その話、どこから聞いた？」

秋蘭「どこからでも良からう。それが事実であったかどうかだけ聞いているのだ。」

黄蓋「・・・真実だ。それを証拠に、ほれ・・・。」

そう言つて、黄蓋は後ろに結び上げられた長い髪を無造作に掴み、大きく開いた背中を純達に向けた。すると

純「成程・・・。」

そこには、無数に打たれた傷跡があつた。

黄蓋「・・・ふん。弓を扱う者としては、背に逃げ傷が無いのが自慢じゃつたのじやがな。ここまで打たれては最早誇れもせんわ。」

純「それが、周瑜に打たれたという痕か？」

黄蓋「赤子の頃は襁褓も替えてやつたというに・・・。我らの孫呉を好き勝手にかき回した挙げ句、あろうことかこの仕打ちだ。」

これには

愛紗「何だ。ただの私怨ではないか。」

そう愛紗は言つた。

黄蓋「まあ、そう思われても仕方ないじやろうの。しかし関羽よ。」

愛紗「・・・私の事を知っているのか？」

黄蓋「反董卓連合では孫策殿のもと、袁術の陣にいたのな。お主の活躍は、見事じやつたぞ。」

愛紗「・・・思い出した。そなたが・・・」

黄蓋「そうじや。良く覚えてくれたな。とは言え、先のはお主も本気では無かつたであらう?」

愛紗「・・・むう。」

黄蓋「さて……お主らも考えてみよ。もし志半ばで曹彰が倒れた時、曹軍の全てを継いだ者達が……無能で、今までの方針を変え、曹彰の志を踏み躪るような真似をしでかしたとしたら……一体どう感じるか？」

この問いに

愛紗「この手で斬り捨てる！」

と愛紗は即答した。これには、愛紗だけじゃなく

稟「私も、許せません！」

翠「あたしもだぜ！」

楼杏「私もです！」

秋蘭「私もだ。遠慮無く殺して貰う！」

霞「ウチもや！」

風「……」

愛紗同様、純を慕っている者全て同じ事を言った。

黄蓋「はっはっは！中々皆に信頼されておるな、曹彰は！しかし、そういう想いをしておるのじゃよ。今の儂は。」

愛紗「むう……」

黄蓋「このような時代だ。時に戦に負け、滅ぼされる事もある。袁術の元に居た頃も

屈辱ではあつたが、それを雪ぐ日を夢見て、恥を忍んで生きておつた。」

黄蓋「じやが、それを果たした先にあつたものはどうだ。儂は……あのようなヒヨツコに好き勝手をさせるために孫呉の再興に手を貸したわけではない！」

稟「純様……。」

純「黄蓋。ならば、我が軍に降る条件は？」

黄蓋「まずは孫呉を討ち滅ぼす事。」

純「……ふむ。」

黄蓋「そして……全てが終わつた後、この儂を討ち果たす事。」

愛紗「……何と。」

秋蘭「貴公……死ぬつもりか。」

黄蓋「孫呉を滅ぼして、おめおめ生き残る気などあるものか。死に場所をくれれば、それで良い。」

純「……分かつた。ならば孫呉の討伐に、お前を加える事を許そう。すぐに軍議を開くから、お前も参加し、偽りの孫呉と戦う上での意見を述べる。良いな？」

黄蓋「御意。」

そして、曹彰軍に黄蓋が加わつたのだつた。

赤壁・呉軍

この日、孫権は久し振りに外に出た。

孫権「……。」

孫権（曹彰……貴方は、本当は私の正体を知っていたの……？知っていて、近付いたの……？）

孫権（次に会った時は……でも、もし確かめられるなら……）

そして、そんな事を向こう岸の敵陣を見て考えていた。すると

孫尚香「あ……蓮華姉様。」

孫権「……シヤオ。どうかした？」

孫尚香「ううん。ちよつと隣、良い？」

孫権「勿論。あなたも、外に出る事が出来たのね。」

孫尚香が、孫権の隣に立った。

孫尚香「……うん。」

孫権「……。」

孫尚香「この長江の向こう岸に……曹彰達がいるんだよね。」

孫権「ええ、そうね……。」

孫権「……怖い？」

この問いに

孫尚香「……うん。皖城のが、いつも夢の中に出てくるもん。」

孫権「……そう。」

孫尚香「けど、雪蓮姉様と冥琳の率いる建業の水軍に、水の上で勝てる敵なんているわけないよ。」

孫尚香「それに……一応劉備達の水軍もいるしね。曹彰が来るまでに連携の訓練もしたみたいだし、にわか仕込みの荊州水軍が勝てる筈が無いと信じるわ。」

と孫尚香はそう言った。

孫尚香「……。」

孫権「……。」

そして、少し間を置き

孫尚香「……祭、さ」

孫尚香「今、どこに居るのかな。」

と言った。

孫権「そう．．．あなたも聞いたの。」

孫尚香「うん．．．冥琳と喧嘩して、罰を受けた所で．．．建業から抜け出したつて。」

孫尚香「．．．ねえ、蓮華姉様。」

孫尚香「祭．．．あそこにいたり、しないよね？」

孫権「向こう岸に．．．？まさか。」

孫権「冥琳とは色々あつたみたいだけど、すぐに戻ってくるわよ。きつと何かの必勝の策を思い付いて．．．その準備がしたいから、城を出てるだけよ。」

孫尚香「．．．うん。」

孫尚香「大丈夫．．．だよね。」

孫権「シャオ．．．。」

孫尚香「シャオ達の事、嫌いになつたわけじゃない．．．よね？」

孫権「当たり前でしょ．．．孫呉の事を誰よりも大切に思っている祭が、シャオの事を嫌いになる筈が無いわよ。」

それを聞いて

孫尚香「．．．うん．．．うんっ。」

孫尚香は我慢してたものが溢れた。それを見た孫権は

孫権「大丈夫だから。大丈夫だから．．．ね。」
妹を抱き締めて優しく囁いた。

孫尚香「うん．．．ぐす．．．つ。姉様あ．．．。」

孫権（そうよね．．．。大丈夫よね、祭。きつと何か、そうすべき事情があつたのよね．．．。）

孫権（それに曹彰、貴方も．．．）

そう思いながら、孫権は向こう岸の敵陣を見ていたのだつた。

周瑜「．．．そうか。祭殿は、曹彰軍の陣営に加わつたと。」

諸葛亮「はい。黄蓋さんと共に行つた雛里ちゃんの密使で。」

周瑜「そうか。これで、何とかなれば良いのだが．．．」

その時

諸葛亮「ゴホッ、ゴホッ．．．。」

諸葛亮が突然口元を抑えてむせた。

周瑜「どうした諸葛亮？．．．風邪か？」

そう周瑜が尋ねると

諸葛亮「いえ、少しむせただけです。お気になさらず。」
と答えたため

周瑜「・・・そうか。私も大概の事は言えないが、あまり無理をするなよ。」
と周瑜は言った。

諸葛亮「・・・はい。」

しかし、諸葛亮の掌には、鮮血が付いていたのだった。

76話

曹彰軍本陣執務室

純「・・・それは確かか？」

稟「はい。地元の漁師の話によると、この土地の風は北西方向に吹くのが基本ですが、一日だけ東南の風が吹く日があるという事です。」

純「すると・・・東南つて事は・・・俺達側だ。・・・そうか！稟、お前はこれを予測したのか！」

稟「はい。恐らく諸葛亮と周瑜はこれを待つております。その状態で火攻めを受ければ、我が軍は壊滅です。」

純「・・・そうだな。」

その時

黄蓋「曹彰。曹彰はいらっしゃるか？」

執務室の外から黄蓋の声が聞こえた。

純「黄蓋か。入れ。」

そして、黄蓋は鳳統と一緒に執務室に入った。

黄蓋「少々話をしたいのじゃが・・・構わんか？」

純「酒の相手ならお断りだ。悪ーが、今はそういう気分じゃねーんだ。」

これに

黄蓋「やれやれ。酒は百薬の長、かの神農大帝も大いに楽しんだというに・・・」

黄蓋はそう言った。

純「聞いた事ねーよ。それで、酒席に誘いに来ただけなのか？」

黄蓋「いや。昼の魏の訓練を見ておつての、少々気になった事があつたのじゃが・・・」

純「何だ？」

すると

黄蓋「・・・その前に、少々人払いを頼めんか？」

黄蓋はそう純に対し言った。

それに対し

純「稟の事なら、気にする必要ねーよ。」

稟「わっ!?!じ、純様・・・!」

純はそう言つて稟の頭を優しく撫でた。

それを見て

鳳統「あわ……。」

鳳統は何かを察したのか顔を赤く染め

黄蓋「……ははは。成程成程、それは儂と酒を呑む気になれんのも当然だな。我ながら、何とも間の悪い事をしたものだ。」

黄蓋は笑いながらそう言った。

純「分かつたんなら、早く用件を済ませてくれ。俺は途中で邪魔されて、ちと機嫌が悪ーんだ。」

黄蓋「そうよの。ならば、手短に……。」

そして

黄蓋「今日の訓練、随分と船酔いの兵が多いように見えたが……あれは一体どうした事だ？」

と黄蓋は眉間にしわを寄せながら言った。

純「返す言葉もねーな。こちらの主力は陸での戦ばかりでな。実戦での舟戦の経験は数える程しかねーんだ。」

純「舟を操るのは荊州の水軍なんだが、こちらの舟の扱いはともかく、本隊ほど戦慣れしてねーしな。」

黄蓋「ふむ．．．想像した通りか。孫呉の兵はいずれも船上の戦と操船の技に長けておる。兵の数が上でも、これでは技量で押し切られるぞ。」

純「そこをウチの軍師の策で補う、と言いて―所なんだが．．．そこまで理解しているという事は、何か対策でもあんのか？」

黄蓋「うむ。実はそのために、此奴を連れて来た。」

と言い、鳳統に目を向けた。

純「．．．お前は確か、黄蓋が投降に来たとき、一緒にいたな。」

黄蓋「鳳雛と言つてな。呉で儂が面倒を見ておつた．．．まあ、娘か弟子のようなものだ。」

そして

鳳統「よ．．．宜しくお願いします．．．。」

と鳳統は挨拶した。

純「良いだろう。話せ。」

鳳統「はい。この辺りの漁師達は、船酔い対策や小さな舟を大きく使うため、舟同士を縄で結ぶ方法を使っています。それを船団で応用します。」

純「そーいや、今日の訓練の間にも縄で繋がってる小舟をいくつか見たな．．．。」

稟「はい、私も見ました。」

鳳統「はい。舟同士を繋げば、舟の安定が増しますから酔いにくくなりますし、兵も陸と同じように動けます。」

鳳統「勿論舟の大きさが違いますから、縄ではなく、丈夫な鉄の鎖を使う必要がありますが……」

純「……けど、そこまで頑丈に繋いだら、火計を防げねーな。」

この疑問に

鳳統「この季節、風は長江北岸のこちらから、向こう岸へと吹いています。風下の蜀呉の連合が火計を使う事はあり得ません。」

鳳統はそう答えた。

純「成程……。それで、その鎖はすぐに準備出来るのか？」

鳳統「はい。この辺りでは大きな船も作られていますし、それに使う鎖も用意されていますから。」

黄蓋「実のところ、既に近くの鍛冶屋に話は付けておつてな。許可さえ出れば、いつでもこちらに取り寄せられる状況なのだ。」

純「……そうか。ならば、その交渉は任せたぞ。細かな指示は風に手配しておく。」
そう言うと

稟「わわっ!? 純様……!」

純は稟の肩に手を回した。

鳳統「ふわ・・・っ!？」

純「どうした、稟。黄蓋も用は済んだんだから、少しは気い利かせろよ？」

これには

黄蓋「ははは。堅殿もそうであつたが、英雄色を好むとはよく言つたものだな、子文

殿。夜はまだ長い、存分に愉しんでくれ・・・。鳳雛、行くぞ。」

鳳統「は・・・はい・・・っ。」

そして、黄蓋と鳳統は執務室を後にしたのだつた。

稟「・・・純様。」

純「し。まだ外に気配がある・・・。」

そう言われ

稟「・・・。」

稟は黙つた。

純「それにしても・・・。」

稟「はい？」

純「お前、益々色気が増したな・・・。」

稟「な!?!何を言つてるのですか?!不埒ですよ!。」

純「あはは！・・・ふう。そろそろ良いかな？」

純「しかし、ああまで堂々と火計の予告をされるとは思わなかったな。」

稟「そ、そうですね・・・。」

稟（純様の手が私の身体を優しく……。ああ……。熱くなつて何も考えられなく……。）

純「稟。」

稟「ふえっ？」

純「はは。何だ、そのだらしねー顔は。」

稟「そ、そんな事・・・」

純「このままお前の相手しよっかなあ。少し気分が乗ってきたし……。どうする？」

稟「え・・・そ、その・・・」

その時

秋蘭「・・・純様。」

純「・・・ん。思ったよりも早かったな、秋蘭。」

稟「え・・・？」

秋蘭の声が外から聞こえた。

秋蘭「申し訳ありません。少し急いで参ったのですが・・・もう少し、辺りを回つて

きた方が宜しいですか？」

純「良いよ。稟をからかうのも一段落したし、入りな。誰を連れて来た？」

秋蘭「風を連れて参りました。」

純「そうか。なら、一緒に入れ。」

秋蘭「はっ、失礼します。」

そう言い、秋蘭は風と一緒に入った。

風「おお、稟ちゃん。完全にお邪魔でしたねー。」

稟「ふ、風！」

純「ははは。秋蘭、黄蓋には気取られなかったか？」

秋蘭「はい。翠にも感付かれておりません。」

純「そうか……。」

一連の話を聞いて

稟「もしかして純様。まさか……！」

稟は全てを察した顔をした。

純「ああ。お前の思ってる通り、ある程度の情報は掴んでいた。」

稟「なら何故……？」

純「黄蓋の意見も聞きたかったんだよ。それで、ある程度条件が揃うからな。」

稟「そうですか……。」

純「別にお前を疑ったわけじゃねーからな。そこは安心しろ、な。」
そう言つて、純は稟の頭を優しく撫でた。

稟「あ……はい……。」

すると、撫でられた稟はウツトリとした目をし、それを見た秋蘭は、ちよつとモヤモヤした気持ちになつたのだつた。

純「まあいいや。揃つた事だし、始めるとするか。」

そして、極秘の話し合いを始めたのだつた。

77話

曹彰軍本陣執務室

純「……つてわけだ。」

秋蘭「黄蓋が裏切るのは想定範囲内でしたが、そのような策でこちらを縛るつもりでしたか。」

稟「先程黄蓋と一緒にだった鳳雛ですが、恐らく蜀の鳳統の事でしょう。あまり表には出て来ませんが、臥龍・諸葛孔明と双璧を成す知将だと聞いています。」

純「稟。この先の向こうの手は先程言った通りか。」

稟「はい。恐らくそうだと思います。」

風「恐らくですが、黄蓋さんも計画の全貌は知らずに動いているのだと思います。鳳統さんの正体を知っているかどうか、微妙かと。」

純「すると、周瑜との亀裂もその後の懲罰も、阿吽の呼吸で打ち合わせなく演じた……という事か。」

風「はい。そうだと思いますよ。」

純「それに、策を知っていれば、どうしてもそちらに意識が向く。その手がどんな一手となるかを知らずに専念すれば、俺達にその先を読まれる事はねーしな。」

純「例えるなら、春蘭のあれだな。」

秋蘭「はい、そうですね。」

稟「はい。韓非子にも三人にして迷う事なしとありますが・・・今回の三人は、呉と蜀の軍師達です。」

純「周瑜、諸葛亮、鳳統の三人か、確かに迷わねーな・・・。そしたら、昼間の縄で繋いだ舟は・・・」

稟「この辺りにそんな風習はありません。」

稟「もつと南方には、転覆を防ぐために張り出した浮きを付ける舟はありますが・・・その程度です。」

純「今夜の提案に信憑性を持たせるための誰かの策か・・・。手の込んだ事をする。」
秋蘭「如何なさいますか？」

純「鎖の出方は向こうの出方に任せる。罨を破つたと言外に伝えるのもつまんねーし、一度は乗ってみせねーとな。」

純「黄蓋の提案を受け入れ、罨に掛かったふりをして、罨を仕掛けた狩人を食い殺す

方針で行く。」

稟「はい。それで宜しいかと。」

純「秋蘭は、黄蓋が動いたら対応しろ。正面は愛紗に任せる。」

秋蘭「はっ。」

純「風は火計の対策を。鳳雛との交渉も任せるが、くれぐれも正体を知っている事を

気付かれぬようにな。」

風「分かりましたー。」

純「稟、お前は全軍の指揮を任せる。」

稟「お任せ下さい。それと純様も前線に出ると思いますが、どうかご無事で。」

純「無論だ。」

そのまま極秘の話し合いは終わった。

呉蜀連合軍

孫尚香「祭を見捨てるとは……どういう事!?説明して、冥琳!」

周瑜「聞いての通りです。今回の祭達の策は、必中の策であり危険。故に見捨てる事を決めました。」

周瑜「これは、諸葛亮も同意見です。」

諸葛亮「・・・はい。お辛いでしようが。」

劉備「朱里ちゃん・・・。」

孫尚香「そもそも祭が敵陣にいるって・・・シャオ、そこから聞いてないわよ!？」

周瑜「敵に情報が流れるのを防ぐための策でしたからな。」

孫策「敵を欺くにはまず味方から・・・か。そのやり方は分かるけど、良い気分はしないわね。」

孫権「でも・・・本当に見捨てるしかないの?」

諸葛亮「はい。此度の策はまさしくこちらの起死回生の一手であります。あまりにも危険。誰かが行けば、死地に飛び込むも同然。必ず命を落とします。」

諸葛亮「それは・・・ここで決戦を挑む我らからすれば、敗北に他なりません。」
その時

諸葛亮「ゴホッ、ゴホッ・・・。」

諸葛亮が途中でむせた。

孫権「・・・諸葛亮?」

劉備「朱里ちゃん、大丈夫？」

それを孫権と劉備は気になって声を掛けたが
諸葛亮「大丈夫です。申し訳ございません。」
と言った。

孫尚香「それはそうかもしれないけど、祭だつて見捨てられないわよ！」

その言葉に

劉備「私もシャオちゃんの意見に賛成だよ。」

と劉備も同調した。

趙雲「桃香様……。」

その時

鳳統「朱里ちゃん……。」

諸葛亮「雛里ちゃん!? どうしたの！」

黄蓋と一緒にいるはずの鳳統が戻ってきた。

鳳統「……黄蓋さんが、帰れつて。この役目は老兵のやる事だつて。」

鳳統「それと……孫策さんと周瑜さんに伝言です。」

周瑜「承ろう。」

鳳統「『我が孫呉の為に咲かせる徒花、踏みつけ進め。歩みを止めるな』……です。」

孫策「……祭。」

周瑜「咲いても意味なき花……か。」

孫策「……あの馬鹿。」

周瑜「我らは東南の風が吹き、祭達が曹彰の船に火を付けたその時、我らは一気呵成に突撃する。」

孫尚香「そんな事したら、祭は……」

周瑜「既に祭も覚悟の上です。……お辛いでしようが。」

孫尚香「……。」

諸葛亮「でしたら皆さん。次の大きな動きは黄蓋さんが動いてからになります。それまで、しつかり準備を整えておいて下さい。」

劉備「……。」

こうして、呉蜀の作戦会議は終わった。

諸葛亮「ゴホッ、ゴホッ……。」

諸葛亮「ハア……ハア……。」

諸葛亮「私の身体……どうか……持って下さい……。」

諸葛亮「せめて・・・曹彰を倒し・・・桃香様の理想が叶うまで・・・」
会議が終わった後、諸葛亮は皆がいない場所で手に付いた鮮血を見て、そう呟いたの
だった。

しかし

鳳統「そんな・・・朱里ちゃん・・・」

その様子を偶然見てしまった鳳統は、諸葛亮の病に気づき驚きを隠せなかったの
であつた。

78話

曹彰軍

その日の夜、純は外の空気を吸いに出ていた。

純「……。」

純（鎖で船酔いする兵も減った。さて……。）

その時

純「風向きが変わった……。」

純は背後から吹いていた風が、対岸からに変わったのに気付いた。

純「成程。稟が言っていたのはこれか……！」

そう言った純は、陣に戻った。

霞「純！」

純「黄蓋が火を放ったか？」

霞「沙和達が怪しい言うた連中が、予想通りの動きをしおったで。今秋蘭と愛紗が対

処に向かつとる。」

純「火事の方は？」

霞「そつちは風が楼杏達に指示を出して、消火に向かつとる。」

純「そうか……。」

霞「後、呉の船団も近付いてきとる。明かりが無かつたから、気付くんが遅れたつて。」

純「今の兵力差なら、地の利を活かすのは当然だ。裏には風向きが変わつた事だけを伝えておけ。俺の軍は？」

霞「とつくに準備完了しとる。出られるで！」

それを聞いた純は

純「ならば俺達も呉の本隊を迎え撃つぞ！」

と言い、出撃した。

呉の船団

甘寧「蓮華様、後もう少して接敵します。」

孫権「・・・そう。」

孫尚香「姉様・・・急ごう。祭を見捨てられないわ！」

孫権「ええ・・・。」

孫尚香（死なないで、祭・・・。）

黄蓋隊

黄蓋達は東南の風を利用して火を使った奇襲を仕掛けたのだが

曹彰軍兵士A「でえええいつ！」

ズバツ

黄蓋隊兵士A「ぐわああっ！」

黄蓋「く・・・っ！韓当！」

黄蓋隊兵士B「こ・・・っ、黄蓋様！お逃げ下さいっ！・・・ぐはっ！」

黄蓋「同じ鎧を着た相手を、ここまで迷い無く攻めるか・・・曹彰め、一体どんな手を使ったというのだ。」

奇襲が上手く行かず、何より同じ鎧を着てるにもかかわらず攻撃されてる事に疑問を感じていた。

しかし、その疑問はすぐに解決した。

沙和「黄色い布を巻いてない相手は敵なの！皆、今日だけは、黄巾を付けてる人を斬らないように戦うの！」

秋蘭「苦しかった黄巾党との戦いを思い出せ！あの時瞳に焼き付いた黄色い布、一瞬たりとも見逃すな！」

愛紗「とは言え、お前達もあの布は巻いていだがな。」

愛紗がそう言うのと

「「おおーっ!!」」

愛紗「返事をするな！」

返事を返されてしまったのだった。

黄蓋「成程な・・・嫌な識別の仕方をするものだ。だがしかし、風は既にこちらに吹いている！火計だけでも成功すれば・・・」

しかし

真桜「消火が間に合わん船は片っ端から外に押し出し！鎖の付け根の絡繰を押せば、鎖はすぐに外れるようにしとる！」

真桜「強度を保ちつつ、簡単に外せる仕掛けなんて無茶ぶりしおつてからに……けど、これがウチの見せ所や！」

真桜「ぼちつとな！」

そう言つてあるボタンを押すと

黄蓋「な……っ！」

風「せーの、で押し出して下さーい！せーの！」

楼杏「慌てないで!!?せーの！」

連結された船が切り離されたのだった。

また

稟「使えそうな船なら、少々壊しても構いません!……風！」

風「はいっ！」

風「はあああっ!!」

気弾でぶち壊したただけでは無く、爆発の勢いで炎を吹き飛ばしながら消して、被害を最小限に抑えたのだった。

黄蓋「気の爆発や破壊で、火をかき消すじやと……?一体、誰がそんな芸当を……」

黄蓋「これほどの将兵を束ね、それぞれの特性を活かし、自らも一騎当千とは……流

石、『黄鬚』曹彰じや……。」

黄蓋隊兵士C「黄蓋様！曹彰の本隊が……！」
すると

黄蓋「く……っ。く、くくく……はははははっ！」

と高笑いした。そして

黄蓋「兵を纏めろ！これより我らは、曹彰に最後の一撃を叩き込む！」

「……はっ！」

そう指示した。

秋蘭「そうはしません！」

すると、秋蘭が黄蓋の前に立ち塞がった。

黄蓋「夏侯淵か！同じ弓使い故、お主との対決も楽しみにしておったが、ちと早いぞ。

出直すが良い！」

秋蘭「純様を狙うと公言する以上、そうはいかんよ。」

黄蓋「まあ、仕方あるまいの……。」

その時

純「その対決、この俺が預かろう。」

愛紗「純様!?!」

霞「愛紗、ウチもおるでー！」

純が現れた。

秋蘭「このような場所に・・・危のうございます、純様！」

黄蓋「ほほう。いきなりお主からか、曹彰！」

純「ふんっ！」

黄蓋「我が計略、ここまで完璧に破られるとは思わなかったぞ！見事じゃ！」

純「テメーこそ、孫呉の宿将に恥じない剛胆無比な振る舞いだつたな。敵ながら見事だ！」

純「しかし、その呉の宿将も、俺達の掌の上で踊るだけだつたという事だな。」

黄蓋「ふんっ！その余裕さをかき消し、その首級を取らせて貰おう！」

純「やって見ろ！」

そして、純達と黄蓋が、激突した。しかし、純達が有利に事を運び、黄蓋を追い詰めていった。

黄蓋隊兵士D「黄蓋様・・・ぐはっ！」

黄蓋「くっ・・・。最早、これまでか。」

黄蓋も、純との一騎打ちに圧倒され、至る所に傷が出来、最早満身創痍だつた。

黄蓋「せめてとも思つたが、『黄鬚』曹彰に一矢報いる事も出来んか。此奴は更に強くなつて先を行く・・・。おのれ・・・。」

純「覚悟は良いか？」

その時

純「……孫策達が来たか。」

純はそう言つて南岸の方に気配を向けた。

黄蓋「……馬鹿なツ！」

これに黄蓋は、驚きを隠せなかつた。

呉軍

孫尚香「急ぎなさい！絶対に祭の所に辿り着くのよ！絶対に、絶対に間に合わせるんだから！」

孫権「祭一人をやらせはしない！総員、櫂を漕ぐ手に力を込めなさい！帰りの事は考えなくて良い、この片道に全てを尽くしなさい！」

「「おおーっ!!」」

孫策「総員、蓮華の乗つてる船に遅れを取つてはならないわよ！」

周瑜「蓮華様……。小蓮様……。」

孫策「こうなること、あなたも望んでたんじやないの？蜀の船団も動き出しているよ
うだけれど。」

周瑜「……。どうだかな。しかし、このまま勢いに乗って、全力で曹彰を叩くのみだ
な。」

孫策「当然！我が国一の忠臣、必ず助け出してみせるわよ！」

「「おおーっ!!」」

蜀軍

劉備「朱里ちゃん、私ね……。誰かを犠牲にする作戦は、やっぱり間違ってるって思
うんだ。」

鳳統「……。黄蓋さん。」

諸葛亮「構いません。ですが、動いた以上は後戻りは出来ませんよ。」

趙雲「桃香様がお決めになられた事だ。全力で支えよう。総員、更に船団の速度を上げろ！孫呉の船に遅れを取るな！」

「「おおーっ!!」」

諸葛亮「では、私は後方で指揮を取ります！前線の事は、皆さんにお任せします！」

鳳統「朱里ちゃん、私は・・・」

諸葛亮「・・・うん。雛里ちゃんは前線の指揮をお願い。」

鳳統「ありがとう・・・」

鳳統「それと朱里ちゃ・・・」

諸葛亮「誰か舟をお願いします。私は後方に戻ります！」

しかし、諸葛亮は鳳統が何か言おうとした事に気付かず、そのまま後方に戻ったのだった。

鳳統「あっ・・・」

鳳統（朱里ちゃん・・・。病は、どこまで進行してるの？）

その後ろ姿を、鳳統は悲しい顔で見っていたのだった。

そして

孫策「祭！」

周瑜「祭殿！」

黄蓋「……策殿！冥琳！」

孫策達が追い付いた。

周瑜「祭殿……ご無事か！」

黄蓋「どうしてこのような場所に来た！この役目は老兵の役目である事を、雛の子に伝えたはずじゃろう。退けい！」

そう言つて、黄蓋は孫策達を退かせようとした。

しかし

周瑜「退きません！貴女をお迎えに上がったのです、早くお戻り下さい！」

そう周瑜は聞かなかつた。

黄蓋「……ふむ。それはちと、難しいのお。」

しかし

黄蓋「……何せ、この様じゃ。」

誰が見ても分かるように、黄蓋は満身創痍で、既に立つてるのもやつとの状態だった。

孫策「祭……。」

周瑜「……祭殿。」

黄蓋「お主に打たれた背中が痛うて、しくじつてしもうたわ。もう年じゃな。」

周瑜「それは……！申し訳ありません、祭殿……。」
この周瑜の謝罪に

黄蓋「良い。もはや一線から退けと、体が言うておるのじやろう。良い頃合いよ。」

黄蓋「それに……やはり『黄鬚』曹彰は強い……。ははは……。」
すると

権・尚香「祭……」

孫権と孫尚香が現れた。

黄蓋「何と、蓮華様に小蓮様まで……」

これには、黄蓋は驚いた。

孫権「祭……。」

黄蓋「おお。お二人とも、最早お目に掛かれぬと思うておりましたが……よもや、ここで叶おうとは。」

孫尚香「祭い……。」

黄蓋「小蓮様にもこの黄蓋秘伝の手練手管、ご教授したかったのじやがな……。」

孫尚香「そんなの、これから教えてくれれば良いじゃない！祭より、ずっと良い女になつてやるんだから……ちゃんと見てなさいよう……！帰りましょう……よ……。」

黄蓋の姿に、孫尚香は涙が溢れた。

孫権「姉様！」

孫策「ええ！皆、祭を助けるわよ！総員……」

突撃しよう！と号令を掛けようとしたその時

黄蓋「来るなっ！ぐうっ！」

黄蓋が満身創痍の身体を押しそう叫び、周瑜に打たれた傷だらけの背中を真つ直ぐに伸ばした。

孫策「祭！」

黄蓋「聞けい！愛しき孫呉の若者達よ！聞け！そしてその目にしかと焼き付けよ！」

黄蓋「我が身、我が血、我が魂魄！その全てを我が愛する孫呉の為に捧げよう！」

孫策「祭……」

黄蓋「この老軀、泰平の世の礎となろう！この赤壁の地より……我が母なる長江の底から江東を守る、盾となろう！」

孫権「祭！」

黄蓋「呉を背負う若者達よ！我が愛しき娘達よ！これからはお主らの望む世を築いていくのだ！思うがままに、皆の力で！」

孫尚香「……祭い！」

黄蓋「しかし、決して忘れるな！お主らの足元には、呉の礎となった無数の英霊達が

眠っている事を！そしてお主らを常に見守っている事を！」

黄蓋「我も今より、その英霊の末席を穢す事となる！」

黄蓋「曹彰！」

純「……何だ。」

黄蓋「儂を討て！そして儂の愚かな失策を、戦場で死んだという誉れで雪いでくれ：！」

純「……良いんだな。」

黄蓋「ふん！『黄鬚』曹彰相手に討ち死になら、武人として本望！」

周泰「祭様！」

甘寧「公覆殿！」

黄蓋「何を泣いているのだ、馬鹿者め！早う撤退の用意をせんか！」

呂蒙「そんな……祭様を置いて……！」

黄蓋「炎の勢いはまだ残っておる。早く逃げねば、雪蓮様達も危ないじやろうが！」

孫策「……祭！」

黄蓋「策殿。最後に一目会えて、ようございました。これからの事、宜しくお頼み申します。」

周瑜「……祭殿。」

黄蓋「冥琳……。その様子なら、心配ないな。」

周瑜「当たり前でしょう……。あなたがいた時より、良い世にしてみせましょう……！」

黄蓋「ならば思い残す事もない……。」

純「もう良いか……？」

黄蓋「ああ……。さあ曹子文！」

そして

純「フンツ！」

ズバツ!!!

黄蓋「……見事じゃ！」

純の「太刀を浴びて、孫呉の宿将黄蓋は討ち死にした。」

策・権・尚香「「祭いいいいいっ！」」

周瑜「貴様ああ……。っ！曹彰！」

周瑜の怒りに

純「俺は一人の武人としての行動を取っただけだ！」

と純は答えた。

孫策「あなた……。言うに事欠いて……。！」

孫尚香「祭……祭……ツ！」

泣きじやくる孫尚香に、もう泣くなと訴えるように、黄蓋は瞳を此方に向けたが、その言葉は漏れる事は無かった。

趙雲「……遅かったか！」

鳳統「そんな……！」

孫策「……趙雲、伏して頼むわ。祭の弔い合戦に力を貸して。」

趙雲「言われるまでもない!!」

鳳統「黄蓋さん……母様……。」

甘寧「まずい……蓮華様、小蓮様、船が沈みます！お早く！」

船の様子を見た甘寧は、そう言つて離脱させるが

孫尚香「いやっ！祭を……祭をつ！祭を連れて帰るの……！」

孫尚香はそう言つて黄蓋の骸がある船に近寄ろうとしたが、既に激しい炎に包まれて
いるため、近寄る事が出来ない。

甘寧「明命！」

周泰「……は、はいっ！小蓮様！」

孫尚香「祭いいいい……っ！！！！」

孫権「祭……。」

そして、抱え上げられた孫尚香達と共に離脱した。

愛紗「純様、この船は最早焼け落ちます！ひとまず離脱を！」

純「分かった！」

そして、純達も焼け落ちる船から離脱したのだった。

曹彰軍本陣

風「純様、お帰りなさいませー。」

稟「黄蓋は……？」

純「あの船人中だ。俺自ら討ち取った。最期まで武人らしかった……。」

それを聞いて

稟「……そうですか。」

と稟は淡々と答えた。

風「恐らく敵は、黄蓋さんの死に団結し、本来以上の力を出してくるかとー。」

風「とはいえそれも、想定の内。存分にその力、更にお振るい下さいませ。」

純「ならば稟、指揮は任せたぞ。」

稟「承知致しました。ならば純様、我らにお言葉を。」

純「ああ……。」

そして

純「聞け！魏武の精兵達よ！」

純「敵将の誇りある死を心に刻め！」

純「その誇りに倣い、我らも自らの誇りを天に向かって貫き通す！」

純「己を信じろ！己を信じる戦友を信じろ！『黄鬚』たる俺を信じろ！そして、霸王たる我が姉曹孟徳に勝利を届けろ！その誇りと共に、進め！魏武の兵達よ！」

そう覇気を全面に出して純は将兵達に鼓舞した。

純「稟！」

稟「全軍突撃！魏武に逆らう敵兵全てを、この長江の水底へ叩き落とせ！」

「「おおーっ!!」」

そして、赤壁の戦いが始まった。

79話

孫策「あああああああつ！」

愛紗「はああああああつ！」

ガキン！

愛紗「ぐっ！流石孫策、凄い気迫だ！」

孫策「当たり前でしょう！今日の私は、この程度では済まないわよ！やああああつ！」

愛紗「だが、貴様を通すわけにはいかんのは私も同じだ！」

ガキン！

孫策「・・・くっ！流石の強さね・・・！」

その時

孫策「！」

孫策は、一つの方向に目を向けた。それは

曹彰「うおりやああつ！」

呉軍兵士「ニギヤアアツ!!」

呉軍の兵士を、数十人単位で斬り殺している純がおり

孫策「曹彰―！」

孫策は憎しみの目を向けた。

愛紗「貴様、よそ見してる暇があるか！」

それを見た愛紗は、攻撃を仕掛けたが

ガキン！

愛紗「!?」

孫策「趙雲！」

趙雲が愛紗の攻撃を止めた。

趙雲「はっ！孫策殿、ここは任せられよ！はあああつ！」

愛紗「・・・くっ！」

孫策「・・・任せたわ！」

それを見た孫策は、純がいる方向へ向かったのだった。

魏延「お前らあつ！このまま一気に押し切れ！黄蓋殿の死を無駄にするな！」

楼杏「だからといって、ここは通すわけには行かないわ！翠さん！」

翠「応！二対一なら、お前に勝てる！」

すると

程普「ごめんなさい。その勝負、二対二にさせてくれない？」

程普が魏延達に加わった。

魏延「お前は・・・？」

程普「私は孫呉の程普。祭の・・・腐れ縁つてところかしら。」

程普「流石に今日は手段を選ぶ気になれなくてね。行かせて貰うわ！」

魏延「承知した！」

翠「楼杏、どうする？」

楼杏「どうするも何も、迎撃するだけよ！」

楼杏「純さんの所へは、行かせないわ！」

魏延「それでも、力づくで・・・！」

その時

魏延「な、何奴!？」

別の方向から矢が飛んできて

秋蘭「二人とも、無事か！」

秋蘭が現れた。

翠「秋蘭!!」

秋蘭「私が援護する！二人は存分に……」

しかし

黄忠「あなた達の好きにはさせないわ！」

魏延「紫苑!!」

魏延達の方向から、黄忠が現れた。

秋蘭「ちつ……貴様、何者だ！」

黄忠「私は黄漢升！劉備軍が将の一人よ！」

程普「長沙の黄忠……！劉備側に付いたとは聞いていたけれど。」

黄忠「ええ。けれど、積もる話は後にしましょう……援護するわ！」

楼杏「秋蘭さん!!」

秋蘭「ぐ……出来る限りの事はする！」

翠「分かった！」

楼杏「ええ！行くわよ！」

孫尚香「てやああああつ！」

ガギン！

凧「ぐつ、孫尚香……近寄つても中々やる！」

孫尚香「今日は絶対に許さないんだから！」

凧「しかし……負けるものか!!」

一方真桜は

糜竺「へへーん、こつちだよー！」

糜芳「こつちこつちー！」

真桜「ええいつ！こいつら、ちよこまかと！」

真桜「こつちか！でえいつ！」

糜竺・糜芳の姉妹に苦戦していた。

呂蒙「……そちらは仕掛けてこないのですか？」

沙和「んー。沙和は戦うの、あんまり得意じゃないの。……そつちは来ないの？」

呂蒙「それは……」

そう言つて他を見ると

孫尚香「ほらほら！防御ばつかじゃ、シャオは止められないわよ！」

凧「だが、純様の所に行かせるわけにはいかん！」

孫尚香が、凧に終始優勢に戦いを進めていた。

呂蒙（おかしい……小蓮様も他の所も押しているように見えるのに……何だか凄

く、嫌な予感がする……。

呂蒙（確かに曹子文を守り切れれば向こうの勝ちだけど……勝ち？）

その時、ある違和感に気付いた呂蒙だったが

沙和「……っ！」

沙和が攻撃を仕掛けてきた。

呂蒙「……仕掛けてこないのでは無かったですか？」

沙和「えっと、それは……何か良い事を思い付いた顔だったから、良くないかなーって。」

沙和「そういうのは、ちよつと分かるの。」

呂蒙「私の思いつきが確かだとすれば……まさか！」

純「はあっ！」

呉軍兵士A「グハッ!!」

純「ふっ！」

呉軍兵士B「グフッ!!」

一方の純も、自身の武勇で、終始圧倒していた。

孫策「はあああつ！」

その時、孫策が現れ

孫策「孫呉の王として曹彰、祭の仇、討たせて貰うわ！」

そう言つて純に攻撃を仕掛けたが

ガギン！

孫策「ぐっ！」

あつさりガードされてしまい

ガギン！

孫策「ぐうっ！」

純の一撃で、後ろに弾かれてしまった。

呉軍兵士「〇孫策様を守れ!!!」

それを見た呉軍の兵士は、一斉に孫策の前に立ち、純に向かつて攻めたが

純「邪魔だ！はあああつ!!」

ズバツ！ザシュツ！ドシュ！ザン！

呉軍兵士「〇ギヤアアツ!!」

純の勢いを止める事は出来ず、あつさりと数十人も倒されてしまい

孫策「皆！ぐうっ！」

孫策も、純の猛攻をガードするのに手一杯となった。そして、呉蜀連合は段々と追い詰められていった。

80話

呉蜀連合軍・本陣

魯肅「ひやわわ・・・これ、ちよつとまずくないですか!？」

周瑜「ああ・・・」。

諸葛亮「・・・はい。このままでは・・・!?!ゴホッ、ゴホッ!」

周瑜「諸葛亮!？」

魯肅「諸葛亮さん!？」

諸葛亮「・・・大丈夫です」。

周瑜「・・・そうか」。

魯肅「でも、何でなんです?我が軍は敵より数は少ないけど、練度はこつちが上なんですよ。それに祭さんの事で、皆絶対に勝つぞつて・・・」

魯肅「なのに、なんでこつちが押し負けてるんですかあ!」

諸葛亮「星さんが足止めを受けているからでしょうか」。

周瑜「ないとは言わんが、全体からすれば影響は軽微だろう。雪蓮や趙雲ばかりが指揮を取っているわけでは……っ！」

諸葛亮「……それですか。」

その時、何かに気付いた周瑜と諸葛亮。そして

周瑜「包。後方の劉備殿に援護の要請を。穩と鳳統がいるから、こちらより状況は良く見えているかもしれんが……念の為だ。」

魯肅「ひやわわ、分かりました！」

周瑜はそう言つて魯肅に命令した。

諸葛亮「まだ取り返せるでしょうか。」

周瑜「分からん。だが、ここで曹子文を討ち取る事が出来れば……あるいは……」
諸葛亮「周瑜さん……。」

その時

呉軍兵士A「周瑜様！第六軍、既に戦闘継続は不可能！七軍、八軍の連絡は来ていらつしやいますか！」

呉軍兵士から、第六軍は戦闘できない旨が伝えられた。

周瑜「……そちらもダメか。」

周瑜「諸葛亮。このままでは、劉備殿の援軍を待つより先に、我らが全滅だ。ここは

一度・・・」

そう言つて、周瑜は努めて冷静に言つた。

しかし

諸葛亮「いえ。ここで曹彰さんを討ち取らなければ、我らに勝利はありません。ここは、無理をしても攻めて討ち取るべきです！」

諸葛亮は冷静さを欠いた状態で、耳を傾けなかつた。

周瑜「諸葛亮！お前も軍師なら、大局を見誤るな！」

諸葛亮「いえ、まだ・・・！」

その時

諸葛亮「!?ゴホッ!ゴホッ!ゴホッ!!」

先程より激しく咳をし、押さえている手から、血が漏れ出した。

周瑜「諸葛亮!」

それを見た周瑜は、彼女を支え

周瑜「誰か医者を！」

医者を呼び、撤退したのだった。

周瑜（・・・すまん、祭殿。）

その際、周瑜は討ち死にした黄蓋に詫びたのだった。

曹彰軍本陣

風「愛紗ちゃん達は敵の将を足止め出来ているのですね。なら、そのまま足止めさせて下さい。艦隊指揮の事は気にせずー。」

曹彰軍兵士A「はっ！」

風「稟ちゃん、そちらはどうですかー？」

そう言つて稟を見ると

稟「第二軍はもう少し苦戦しそうですから、今は防御に徹し、敵船からの移乗を防いで下さい。特に呉の船には警戒するように。」

稟「第四軍は現状維持で構いません。第三軍はそろそろ蜀の水軍を退ける頃ですから、終わり次第第二軍の援護を。」

稟「一軍は相手の左が手薄になるのを見計らつて、分断させて各個撃破、こちらも終わったら二軍の援護に向かつて下さい。」

曹彰軍兵士「はっー！」

稟「続いて第五軍から八軍までですが、いずれも最早相手はまともに動ける状態にありません。このまま一気に制圧をお願いします。それ以降は・・・」

風「聞いておりませんが、全体の指揮は稟ちゃんに任せておけば良いですか。」

風「しかし、この夜戦であれだけ先が読めるとは・・・いやはや恐ろしや。」

稟「城で合肥の戦況を読みつつ一月先の支援を手配するよりは、ずっと楽ですから。届く情報も多くて正確な物が多いですし。」

稟「それにしても・・・黄蓋が討たれてくれて良かった。」

その際、稟はさつと冷徹な目をしながら、そうポツリと呟いた。

宝慧「・・・おお。えげつねー事言つたな、姉ちゃん。」

稟「そうでしょうか？あれのお陰で、憤る呉軍と黄蓋と面識のない蜀軍の間には士気に大きな差が生まれましたから。」

稟「蜀の一部の将もその波に吞まれていますし・・・判断が見えなくなつた連中と、噛み合わなくなつた蜀の兵など、随分と与しやすくなつたものです。」

稟「どちらか一方の軍で同数なら、練度で押し切られていたでしょうが・・・これなら、鈍くとも我々の意図通りに動く魏の水軍で、互角以上の戦いが可能ですし、何より純様の武勇がより活かす事が出来ます。」

それを聞いて

風「血も涙も無いですねー。稟ちゃん。」

そう風は言ったが

稟「血や涙を流して良い事があるのは、訓練の時だけですよ。」

稟は冷静にそう返したのだった。

風「稟ちゃんの頭の戦場には数字しかないのでしょうか？」

稟「そうですね・・・そうかもしれません。」

曹彰軍兵士B「報告です！第二軍が敵艦隊相手に苦戦しています！至急増援求むとの事！」

曹彰軍兵士C「第三軍、蜀の水軍を撃破致しました！次の指示、願います！」

曹彰軍兵士D「第一軍、敵左翼に強襲！分断して、各個撃破に移っている模様！」

曹彰軍兵士E「第五軍、敵部隊撃破しました！ひとまず同様の状況にある六から八軍と一緒に、残存部隊の掃討に移っています。追加のご指示を。」

しかし

稟「いずれも手配は終わっています。貴方達はひとまず休んで、次の伝令に向かえるように待機して下さい。」

と言った。

曹彰軍兵士B・C・D「は？はあ・・・。」

これには、報告に来た曹彰軍の兵士達は皆、首を傾げたが、命令に従ったのだった。風「おー。風も寝てて大丈夫そうですね。」

稟「寝ないで下さいよ。」

宝慧「・・・ホント、姉ちゃんの頭の中はどうなってるんだか。」

純「はあああつ!!」

ガギン！ガギン！ガギン！

孫策「くううっ！」

孫策は、純の攻撃を前に完全に防戦一方となってしまうた。

純「フンツ！中々やるが、大した相手じゃねーな！」

孫策「何ですって・・・！」

純「そのような怒りに曇った眼で、この俺を討てると思ってるのか！」

孫策「あなたが祭を！」

純「戦で死人が出るのは当然だろうが！」

孫策「黙れ！」

純「少し落ち着け。まるでクソガキが駄々をこねているような剣の使い方だ。」

純「すぐに楽にしてやる。はあああつ!!」

ガキン!

孫策「くううっ!」

純「所詮はこの程度の強さか! 覚悟っ!!」

そう言つて太刀を振り下ろそうとしたその時

ガギン!

純「!?!」

程普「雪蓮様! ご無事ですか!」

程普が何とか攻撃を止めた。

孫策「粹怜!?!」

程普「雪蓮様、冥琳から伝令です! 総員、撤退するようにと!」

これには

孫策「く・・・祭の仇を討てないまままで撤退ですって!?!」

孫策は怒りでそう答えた。

程普「くううっ! 大局をお考え下さい!・・・ここで雪蓮様まで討たれては、祭の想

いはそれこそどうなります!・・・ぐうっ!」

しかし、程普は純の攻撃を必死に食い止めながら、孫策にそう諫めた。

孫策「しかし……！」

純「邪魔だ！はあああつ!!」

ガギン！

程普「ぐうっ！し、雪蓮様……！」

そして、遂に純の攻撃に耐えきれなくなってきた。

孫策「……。」

それを見た孫策は

孫策「……分かったわ。撤退するわよ！」

悔しさを押し殺して、撤退したのだった。

蜀軍本陣

劉備「あれが……曹彰さんの本気……。」

一方劉備は、曹彰軍の圧倒的な強さに、呆然としていた。

鳳統「どのような策を前にしても怯まず、圧倒的な武勇と統率力で味方の士気を極限

まで上げ、敵をねじ伏せる……大陸一の猛将である『黄鬚』の異名は、本当に伊達ではありません……。」

鳳統「一部では、かつて西楚の霸王と呼ばれた項羽に匹敵するかそれ以上の力だと言われております……。」

劉備「西楚の霸王以上の力……。」

その時

蜀軍兵士A「劉備様、大変です！諸葛亮様が血を吐いて倒れました！」

蜀軍から、諸葛亮が倒れたとの報告が入った。

劉備「え!?朱里ちゃんは!?!」

蜀軍兵士A「今、周瑜様の陣で休んでおられます！」

劉備「雛里ちゃん!」

鳳統「あわわ……すぐに行きましょう!!」

そう言つて、劉備達は呉軍の陣へ向かったのだつた。

呉軍・周瑜の天幕

劉備「朱里ちゃん！」

劉備達が呉軍の兵士の許可を得て天幕に入ると

周瑜「劉備殿……。それと……。鳳統か。」

周瑜が既におり、その寝台には諸葛亮が眠っていた。

劉備「周瑜さん。朱里ちゃんは？」

周瑜「今は安静している。これまでの無理が祟ったのだろう……。」

劉備「……。そうですか。」

周瑜「それと劉備殿、雪蓮が貴殿に話があるそうだ。ここは私に任せて、雪蓮の天幕に行つてくれないか？」

それを聞いて

劉備「……。分かりました。」

そう言つて、劉備は天幕を後にした。

その際

周瑜「鳳統。お前に言つておく事があるのだが。」

鳳統「……。はい。」

周瑜は鳳統を呼び

周瑜「諸葛亮の事だが、お主、どこまで知っている？」
そう尋ねた。

鳳統「私は……先日、朱里ちゃんが人気が無い場所で血を吐いているのを偶然見て、それで知りました。」

周瑜「そうか……。お前も、最近知ったのだな。」

そう言つて、一つ間を置くと

周瑜「辛いかもしれないが、医者によると、諸葛亮の病はかなり進行している。これ以上無理をすれば、確実に死に至る。」

と周瑜は言つた。

鳳統「そんな……。」

周瑜「すぐに撤退させ、諸葛亮を養生させろ。それしか、彼女は助からん。」

鳳統がシヨックを受けてる中、周瑜はそう鳳統に言つた。

鳳統「……分かりました。」

周瑜「……頼むぞ。」

そして、周瑜と鳳統は、天幕を出て孫策のいる天幕に向かった。その時の話で、呉蜀の同盟は解消されてしまったのだつた。

そして、赤壁の戦いは曹彰軍の圧倒的な勝利で終わったのであつた。

81話

対岸の火事が治まったのは、夜が明けてからだった。しかし、まだそれも完全じゃ無かったため、消え残りや伏兵を警戒して、純達は長江南岸の上陸地点を、少し下ったあたりを取った。

秋蘭「純様。野營地の展開、凧達が作業を始めております。夕刻までには終わるか」と。

純「そっか。．．．夜の損害はどうだった？」

秋蘭「連中の勇み足もあつたのでしよう。あれ程の戦にしては、思ったほどでは。．．．ですが、翠達が。」

純「何だ？」

そう言つて翠達に目を向けると

翠「純殿、ヒドいぜ。黄蓋が裏切るといふなら、あたしに一言あつても良いじゃないか．．．聞けば、秋蘭や稟達は皆知つていたというじゃないか？」

愛紗「私も聞いておりませんが．．．。楼杏殿は？」

楼杏「私も聞いてなかつたけど、私は臣下として、純さんの命に従うまでと思つただ

けよ。」

と翠と愛紗は少し不満な顔で言った。しかし、樓杏はそういう顔をせず、逆に受け入れていた。

純「なら、二人とも。聞いていたらどうしたんだよ？」

その問いに

翠「当然、黄蓋に貼り付いて、反逆などさせねーように・・・」

風「それでは意味がないのです。外と呼応して裏切ったところを叩く予定でしたのでー。」

翠はそう答えたが、風にバツサリ斬り捨てられたのだった。

愛紗「なら、そのように説明していただければ・・・！」

秋蘭「上手く隠せたか、愛紗？」

愛紗「うむむ・・・。」

稟「純様。今後の進路なのですが・・・」

稟「劉備は長江を遡り、蜀へと戻っていききました。孫策達は長江を下り、国境の防備を固めているようです。」

風「孫策さんは最早半死半生です。しかし、手負いの獣程恐ろしいものもないのです。」

稟「先に手薄な劉備を討つという手もありますが・・・如何致しましょう?」
これに

純「勿論、孫策にとどめを刺す。次は陸での戦いになるだろうしな。」
そう純は答えた。

翠「陸か! よつしや、これであたしの馬が活きるぜ!」

愛紗「私も、馬に乗って偃月刀を振るいたいものだ!」

純「流石に、船旅は飽きたか?」

愛紗「はっ。あれの上じや、どうしても偃月刀を振るうのが難しくて・・・。」

翠「あたしもだぜ。西涼の錦馬超の恐ろしき、更に見せてやるぜ!」

純「なら、やはり孫策だな。策は稟、引き続き任せるぞ。」

稟「承知致しました。」

すると

曹彰軍武将A「しかし、孫呉を攻めるか否かは曹操様の指示を仰ぐべきでは?」

と一人の武将は言ったが

純「そんなの待っていたら、孫策達は体勢を立て直してしまう。それこそ、我が軍に不利になってしまう。」

純『将、軍にありては、君命をも受けざるところにあり』とも言う。例え姉上が許可

しなくても、俺は孫呉を平定するため出陣する！」

と純はそう言った。

稟「私も純様の意見に賛成です。今ここで指示を待っていては、好機を逃す恐れがあります。今すぐにでも出陣し、孫呉を平定すべきです。」

純「そういう事だ。このまま孫呉を平定したら、姉上は大陸の覇者に更に近づく。その喜びを共に分かち合い、姉上に勝利を届けるぞ！」

「「おぉーっ!!」」

そして、純達は孫呉の平定に出陣したのだった。

陳留・玉座の間

華琳「……。」

桂花「華琳様……?」

華琳「純が、赤壁にて孫策と劉備の連合軍を撃破したわ。」
これには

春蘭「おおーっ！流石純様だ！」

華侖「純兄、流石つすー！ねー柳琳！」

柳琳「ええ、そうね。」

栄華「お兄様……。」

一刀「ス、スゲー……！」

一同皆喜びの声を上げていた。

華琳「ええ、そうね。」

栄華「それで、お兄様は何と？」

華琳「このまま引き続き、孫呉を平定するため、兵を進めると言っているわ。」

これに

栄華「しかし、お姉様の許可無く進軍するのは……。」

桂花「そうです華琳様。いくら曹魏の兵権を全て握っているからって……。」

栄華と桂花は揃って不安な顔で言った。

華琳「仕方ないわ。我が軍で最も戦に長けている純が、現場でそう判断したのだから、止める事は出来ないし、曹魏の将兵は全て純の命令しか従わないわ。」

華琳「それに、『將、軍にありては、君命をも受けざるところにあり』とも言うし、私は気にしてないわ。」

この二人の問いに、華琳はそう答えた。

栄華「お姉様がそう仰るなら……。」

桂花「……御意。」

これに、栄華と桂花はそう言い拱手した。

春蘭「栄華、桂花。純様は『黄鬚』と呼ばれし勇将なんだ！純様ならば、孫呉をいや、蜀も平定し、華琳様をこの大陸の王にさせてくれるのだぞ！」

華命「そうつすよ！純兄は、大陸で一番強い武人なんすよー！」

その時、春蘭と華命はそう栄華と桂花に言った。

華琳「……。」

一刀「華琳？」

華琳「どうかした、一刀？」

一刀「……いや、何でも無い。」

華琳「……そう。」

この時、華琳の顔が僅かに怯えてるような顔をしていた事に一刀は気付いたのであつた。

82話

荊州・赤壁

翠「やっぱり陸路は良いぜ！二本の足で歩けるのもそうだが、こうやって馬に乗れるってのはとても良いぜ！」

霞「船の上じゃ、青い顔しとったもんなあ……。」

翠「む！お前だつて……。」

霞「ウチ、船の上平気やもん。」

翠「……むう。」

霞「つーか、ゆらゆら揺れるなら馬の上かて似たようなもんやろ？」

翠「いや、全然違うぞ。あんな所で平気な顔してられる方がおかしいんだ！」

霞「まあ、翠は馬と共に育ったからなあ……。」

そんな話をしていると

曹彰軍兵士A「報告です！」

霞 「どないやった？」

曹彰軍兵士A 「呉軍は、この先の夏口に布陣しております。一通りの旗が立っていませんから、総力戦を挑むかと。」

偵察兵が報告にやって来て、孫呉の軍勢が夏口に布陣してる事を報告した。

霞 「ま、あの辺は呉の国境やしな。とりあえず夏口で防ぎたいうちゆう気持ちは分かるな。」

翠 「恐らく連中は、最後の一兵まで死力を尽くす気なんだろうな。あたし達はここで一旦停止。後続の純殿と合流し、連中を総力で叩き潰す。」

霞 「分かった。おいお前らあ、一旦停まるでー！」

そして、一旦進軍停止し、本隊の純と合流した。

夏口・呉軍

孫策「……そう。曹彰達はこちらを正面から蹴散らす構えか。」

周瑜「ああ。挑んでこいと言わんばかりに旗を立てた、堂々とした布陣だな。……どうする?」

孫策「伏兵はないの?」

陸遜「今のところ、ないようですねえ。夏口は慣れない者が伏兵を置くには、あまり適した地でもありませんし。」

孫策「なら、こちらも迎え撃つべきでしょうね。」

これに

孫権「でしたら姉様。我々は……」

孫尚香「シヤオも……!」

孫権と孫尚香も続いたが

孫策「ええ。……皆には孫呉の存亡を掛けて、ここで命を懸けてもらう。良いわね。」

孫権「はっ。」

孫尚香「……今度こそ、祭の仇を取ってみせるんだから! 例えそれが、『黄鬚』曹彰だったとしても!」

孫策「ならば、総員……進撃開始!」

そして、呉軍も進撃を開始したのだった。

夏口

張昭「小蓮様、粹怜。この左翼は私どもが支えます。．．．絶対に勝ち．．．無事に生き残つてくだされ。」

孫尚香「当然よ。任せて、雷火！」

秋蘭「成程、我々の相手は貴公らか．．．孫尚香、程普。」

程普「ええ。祭は酒飲みで絡み上戸で口の悪い、正直どうしようもない奴だったけど．．．あれでも古い付き合いでね。」

孫尚香「祭を討つた曹彰の家来なら、皆祭の仇よ！絶対許さないんだから！」

秋蘭「逃げも隠れもせん。この夏侯妙才、真つ向からお相手させていただこう。」

風「総員、稟様の策に従つて展開だ！」

程普「こちららも全軍展開！連中を蹴散らすわよ！」

孫権「張遼……。」

霞「ウチの相手は孫権か……。」

孫権「合肥の事も、その後の事も、ここで纏めて決着を着けさせてもらおうわ！」
甘寧「蓮華様の仰る通りだ。張遼！」

霞「おう！濡須口の借り、纏めて返させてもらおうで！」

楼杏「私もよ、霞さん！」

呂蒙「それはこちらも同じです！明命！」

周泰「はいっ！」

孫策「……曹彰が出て来たか。なら、ちよつと行つて来るわ。」

太史慈「後の事は任せといて！冥琳が上手くやってくれるから！」

周瑜「お前も働け、梨晏。……だが、気を付けてな。」

孫策「当然。」

そう言つて、孫策は馬を前に出した。

純「……。」

純「……来たか。」

そこには、既に純が馬に乗つて待つていた。

孫策「……赤壁での一騎打ち以来ね、曹子文。」

純「そうだな。けど、ちゃんとまともに話した事は無かつたな。」

孫策「そうね、そうなるわね。反董卓連合の時、顔は見たけど話もしなかつたしね。官

渡の時は、夏侯惇に会つただけだったしね。」

純「その春蘭に、官渡の時お前は随分と借りたようだしな。その分を返させて貰いに
来たぞ。」

孫策「それがこの呉を全てというのは、いくら何でも暴利すぎない？」

純「格安じゃねーか。……返さねーと言うなら、力づくで取つてやるぞ。」

孫策「残念ながら、その取り立てに應じる訳にはいかないわね。」

孫策「この江東は我が孫呉の父祖より伝わる大事な聖地。簡単に取られてしまったら、我が母孫堅、太祖孫武に会わせる顔が無いわ。」

純「けれど、こちらにはこちらの都合があるんだよ。姉上を支え、大陸を一つに統べ、民に本当の平安を与えるため・・・お前達の国も、討ち滅ぼさせて貰う。」

孫策「そんな暴論を掲げて大陸全土に戦果を広げる事が、本当の大義なのかしら？」

孫策「北方を燃やし、漢中を滅ぼし、赤壁まで紅く染めて、多くの者の血を浴びて：そのような輩に屈するわけにはいかないわね。」

純「良いだろう。その力、骨の髄の最後の一滴まで絞り出して・・・見事、我が軍勢に抗ってみせろ。孫呉の誇りとその最期、見届けてあげよう！」

孫策「ならば我が勇氣、我が知謀、我が誇りの全てを賭けて、あなた達を退けてみせるわ！」

純「ならば、俺達曹魏も全力を以て孫呉を制圧しよう。江東にその名を轟かせる小霸王と周公☒の戦いぶり、愉しませて貰おう！」

そして

孫策「孫呉の勇者達よ！この戦、呉の運命を決める大決戦となる！我らが宿敵にして混沌の元凶たる、憎き曹魏を打ち破り、大陸に本当の平和をもたらすのだ！」

純「曹魏の勇士達よ！この戦、我が姉曹孟徳の覇業の大きな一歩となる！その血と命

を以て、我が姉曹孟徳の覇道を阻む巖を打ち砕くのだ！この大陸に、真の平穩をもたらすために！」

純・策 「全軍！」

純・策 「突撃！」

孫策 「ここで奴らを食い止める！絶対に孫呉の領内には入れさせるな！」

純 「ここを突破すれば、建業まで俺達を阻む者はねー！総員奮励せよ！」

愛紗 「純様に遅れを取るな！」

太史慈 「おっと、この軍には私がいるのも忘れちゃ駄目だよー？」

愛紗 「関係ない！純様の道を阻む者は、全て断ち斬るのみ！」

夏口の地にて、両者は激突したのだった。戦いは一進一退の攻防だったが

孫策 「流石、ここまで差し込んだだけの勢いね・・・！」

周瑜 「しかし、我らに退却の目は無い。孫呉の誇りと共に、最後の一兵まで戦い抜くのみだ！」

純 「自ら命を捨てるか・・・ならば、望み通りにしてくれ！」

純 「逃げる兵には構うんじやねーぞ！向かってくる者だけを相手にしろ！敵陣を突破すれば、俺達の勝利だ！」

純達の勢いに、孫呉は段々と押されていったのだった。

張昭「まづいぞ包。これでは前局の小蓮様達が押し切られてしまう！」

魯肅「ひやわわっ!?わ、分かつてますけど、この相手……包の策やシャオ様の動き、全部読んでるみたいな……！」

魯肅「こつちも駄目、こつちも多分読まれてる……あうう。」

張昭「ならばもう、一気に貫くしかあるまい！」

魯肅「それが出来るならとつくにやつてますよう！雷火様まで脳筋になったら全部終わっちゃうんですから、控えて下さいってば！」

魯肅「まともなのが包だけとか、ホント勘弁して下さいよー！」

孫尚香「……ああもうっ！何なの敵のこの動き！粹恰！」

程普「分かつてるけど……こいつら……！」

秋蘭「どうした。黄蓋の仇を討つのではなかったのか？」

この秋蘭の挑発に

孫尚香「う……討つに決まつてるでしょ！ここからシャオの大逆転が始まるんだから！」

孫尚香は強がってそう言った。

しかし

凧「総員、回り込め！相手の機動力を生かせる隙を作るな！」

動きを封じ込められてしまった。

孫尚香「ううう、こうなったら一気に貫くしかないわよ！」

程普「シャオ様、短気は……！」

秋蘭「全てこちらの手の上だ。凧！」

凧「はい！総員、突撃！」

孫尚香「ちよつと、ここで!?!」

沙和「凄いのー。全部稟ちゃんの通りに進んでるのー。」

稟「孫尚香の本領は、奇襲を中心とした機動戦にあります。足さえ封じてしまえば……

いえ、こうして正面から相対した時点で、既に負けは決まっていたのですよ。」

純「うおりやあつ！」

ズバツ！ザシュツ！ドシュ！ザン！

呉軍兵士A「うわあああつ！曹彰だ、『黄鬚』曹彰が来たぞー！」

呉軍兵士B「やつぱり『黄鬚』はこえーよー！」

呉軍兵士C「逃げろーっ！」

純「つたく、齒応えがねーな．．．。」

愛紗「恐らく、合肥からの兵では？」

純「そゆ事ね．．．っと、敵陣を突っ切ったか。良し、お前ら！このまま反転して、

孫策の部隊を叩くぞー！」

曹彰軍兵士「「おおーっ!!」」

そう言い、純は反転して孫策の部隊を攻撃した。

太史慈「突破したの!？」

孫策「相変わらず何て強さなのよ．．．！」

太史慈「雪蓮！連中が反転してきたから防備を固めてるけど、全く効いてない！この

ままでは全滅だよー！」

孫策「くっ！」

その時

呉軍兵士D「大変です！建業への退路が回り込まれました!!」

孫策「何ですって！」

太史慈「そんな……いつの間に……！」

孫策「最早これまでか……。」

孫策（くっ……。私では、『黄鬚』曹彰には勝てない……。）

霞「うらあああああつ！」

呉軍兵士E「うわあああつ！張遼だ、張遼が来たあつ！」

呉軍兵士F「逃げろーっ！」

張遼「ええい、お前ら戦え！ウチがどんだけ怖いんや！ただの人やぞ！」

楼杏「……恐らく、皆合肥からの兵なんだと思うわ。」

霞「そんなん分かるとるけど、ああもう、つまらん！」

霞「……つと、敵陣突つ切つてもうたか。よつしや、このまま反転して、孫権を叩

くでー！」

それに立ち塞がったのは

甘寧「張遼！それ以上は好きにさせるものか！」

甘寧だった。

霞「おお、甘寧か！楼杏、ここはウチに任せてさっさと行きい！」

楼杏「ええ、分かったわ！」

そう言い、楼杏は一部を率いてその場を後にした。

呂蒙「・・・こちらの陣を突破された!?!」

孫権「連中は反転してこちらの背後を突いてくるわよ！防備を整えて！」

孫権（くっ。張遼の突破力の前では、私達の守りはどうにもならないというの……?）

呂蒙「まずいです、蓮華様！我々の背中には、国境が……！」

呂蒙「それと、雪蓮様の部隊がかなり苦戦しております！」

孫権「くっ……！」

呉軍兵士G「大変です！建業への退路が、曹彰の軍勢に回り込まれました!!」

呂蒙「そ、そんな……!?!」

呉軍本陣

周瑜「……まずいな。やはり、これだけの数と曹彰の武勇を真正面から完全に押されては、どうしようもないな。」

陸遜「分かってみましたけど、辛いですねえ。……左翼の包ちやんと右翼の亞莎ちゃんも、そして雪蓮さまの部隊も、戦線を維持出来てません。」

陸遜「それに、建業への退路も回り込まれてしまいましたし……。」

周瑜「くっ……流石『黄鬚』曹彰と、懐刀の郭奉孝か……。せめて敵の兵力を分散出来ればと、戦いを三局に持ち込んだが……。一点突破で曹彰を取りに行った方が良かったらどうか。」

陸遜「んー。それこそ向こうの思うままですね。」

周瑜「……そうだな。」

陸遜「冥琳様あ。ここは、劉備さんの蜀へ行くべきかと……。」

周瑜「……それしか無いか。皆に伝えてくれ。兵を纏め、蜀に向かうと！」

陸遜「わ、分かりましたー！」

この結果に

周瑜「……。」

周瑜は悔しきで顔を歪めたのだった。そして、夏口での戦いは、純達の勝利に終わり、

孫策達重鎮は、戰場を突破して長江の上流へと去って行ったのだった。

純達はその勢いで一気に建業を攻めたのだが、特に大きな抵抗はなく、あっさり制圧し、他の都市も同じく制圧した。そしてここに、呉はある意味滅亡したのであった。

83話

揚州・建業

呉を平定した後、純は暫く建業に滞在し、残る抵抗勢力の排除や蜀対策の軍議を開いていた。そして、建業を中心とした民の慰撫も積極的に行った。その結果、呉の民も皆純に心服し、純達はいつでも蜀攻めが出来る状態となった。

そんなある日の事、陳留から一つの書状が届いたのだった。

純「……。」

稟「純様。陳留からは何と……？」

純「姉上から本国に戻ってくれとの書状だ。」

これには

稟「何故今頃？これから蜀の攻略があるというに……」

愛紗「華琳殿は何をお考えか……？」

霞「せやな。」

翠「分かんねーなあ……。」

稟と愛紗、そして霞と翠は疑問に感じた。

純「それは分からん。けど、言われたからには戻んねーとな。」

純「愛紗、楼杏。建業の事はお前達に任せる。もし蜀の連中が孫策と共に攻めてきたら、守り通せ。風も残すから、何かあつたら風の意見に従え。」

愛紗「御意。」

純「楼杏も風も、愛紗をよく支えてくれ。」

楼杏「はっ。」

風「はいー。」

そして、純は愛紗と楼杏、そして風達十万の兵を残して残りの四十万の兵と共に陳留へ帰還したのだった。

陳留

純「久し振りの陳留だな……。」

秋蘭「そうですね。私達は、ずっと南方にいましたから。」

稟「しかし、曹操殿は本当に何故呼び出したのでしょうか……。」

純「さあな。」

そして、純達は玉座の間に入り

純「姉上、只今戻りました。」

と言ひ拱手し、それに続いて秋蘭、霞、翠、稟、凧、真桜、沙和もそれに続いて拱手した。

華琳「純。呉の平定、ご苦勞だったわね。」

純「ありがたきお言葉！これも全て、皆の働きのお陰です！」

華琳「そう……。皆には、それ相応の恩賞を与えるわ。」

純「はっ！それで姉上、俺を呼び戻して、何かご用ですか？」

華琳「……。それについては、私の部屋で話すわ。」

これには

純「？……分かりました。では、手柄を挙げた将兵と、今建業に滞在している者にも恩賞をお送り下さい」

純は疑問に感じたが、すぐに拱手して了承した。

華琳「分かったわ。では、下がちなさい。」

純「はっ。ではこれにて。」

そして、その場を後にしたのだった。

華琳「・・・ふう。」

一刀「華琳!？」

春蘭「華琳様!？」

栄華「お姉様!？」

桂花「華琳様、どこかお加減が!？」

その際、華琳はどこか脱力したかのように玉座にもたれかかった。

華琳「心配ないわ。ただ、ちよつと疲れただけよ。」

春蘭「・・・そうですか。」

華命「それより純兄、どこか雰囲気変わったつすね・・・。」

柳琳「ええ。私も、何か強い圧迫感を感じた気が・・・。」

桂花「まるで、純様ではない感じだったわね・・・。」

春蘭「何というか・・・覇気が強くなった気がするな・・・。」

一刀「・・・そ、そうだったな。」

一刀（実を言えば、俺も少し気が抜けたら、その場で倒れて気絶してた・・・。）

華琳の部屋

華琳「……。」

華琳は、自身の部屋でどこか怯えてるような顔をしていた。

華琳（あの覇気……先程の謁見の間では、どこか心の臓を掴まれたような感覚に陥ったわ。まるで、純が純じゃなくなってる気がするわ……。）

華琳（私は……あの子を御する事が出来るのかしら……？）

その時

純「姉上、参りました。」

扉の外で、純の声が聞こえた。

華琳「……入りなさい。」

純「はっ。」

そして、華琳の許可を得て、純は部屋に入った。

純「姉上、お話とは一体……。」

華琳「先程も言っただけ、呉の平定、本当にご苦労だったわ。」

純「はい、ありがとうございます。」

華琳「お父様の御霊も、今までも含めてあなたの活躍を喜んでるわ。」

純「そうですね。けど、まだまだです。後もう少しで、俺と姉上が誓った約束を果たせます。」

華琳「ええ。霸道で大陸を統一し、民に平穏をもたらすというね。」

純「はい。残るは蜀のみ。そこを平定すれば、この大陸全ては姉上の手中です。」

華琳「ええ……。」
すると

純「それから、先程玉座の間で言えなかった事ですが、もう一つご報告すべき事があります。」

と跪いて拱手しながら言った。

華琳「純、それは何かしら？立って話しなさい。」

それを見た華琳は、純を立たせてそう言った。

純「その蜀平定の為、建業に滞在している十万の兵に加え、本国の四十万の兵に出撃の準備をさせました。」

これに

華琳「何ですって!?!あなた、何故それを勝手に!?!」

華琳は驚きの表情を浮かべた。

純「姉上。我らと蜀との戦は、いずれにせよ起ります。目下我らの敵は蜀の劉備のみ！その劉備の下には孫策達がおります！今ここで蜀を滅ぼさねば、大陸の平穩は永遠に訪れません！ご心配なく。必ず、姉上に勝利をお届けします！」

それに純はそう強く唱えた。

純「ご納得いただけたなら、俺はこれにて。」

そう言い、純は華琳の部屋を後にしようとした。

その時

華琳「純！」

華琳は純を止めた。

純「何でしょう、姉上？」

そして

華琳「今回ばかりは、私は許さないわ。」

そう華琳は純に対して言った。

純「何故？」

華琳「ここ最近思ってた事よ。確かにあなたには、軍事に関する事全てを任せているわ。けど、この国の王は私よ。」

華琳「けれどあなたは、勝手に兵を動かした。開戦権は無いにも関わらず。」
そして、華琳は純に背を向け

華琳「この国の王はあなたなの？それとも私かしら？」
と言った。

純「!？」

それを聞いた純は、絶句し

純「ははは・・・。」

乾いた笑い声をあげた。そして

純「結構です。よく分かりました。」

純は懐から兵符を取り出し

純「今ここで兵権をお返しし、お裁きを待ちます。」

そう言い兵符を机に置き、華琳の部屋を後にした。

華琳「・・・うつ・・・ぐすつ。」

華琳（純が怖い・・・。もう、あの子があの子じゃ無くなってる・・・。私は・・・ど
うしたら良いの・・・？）

そして、華琳は一人顔を手で覆い隠しながら泣いたのだった。

84話

華琳に罷免された純はその日、酒を飲んでいた。

秋蘭「純様！そのような深酒はお止め下さい！」

稟「純様！お止め下さい！」

それを見た秋蘭と稟はそう諫めたが

純「うるせー。今は飲みてー気分なんだよ、下がれ。」

純は耳を貸さなかった。

秋蘭「純様、お止め下さい！」

稟「純様！」

これに秋蘭と稟は、純の手を押さえたが

純「どけ！」

と押されてしまった。しかし

秋蘭「純様！どれだけ暴力を振るわれようとも、私はあなたをお止めします！」

稟「私も同様です！例え斬られても、あなたをお止めします！」

とまた純の手を押さえた。

純「何？」

そう言つて純は秋蘭と稟を見ると、頭が冷えたのか

純「・・・悪かった。」

と言ひ、酒を止め、秋蘭と稟の頬を撫でた。

秋蘭「いえ、お気になさらず。」

稟「純様・・・。」

それに秋蘭と稟は、純の手に自分の手を合わせた。

すると、純は秋蘭と稟の頬から手を離して

純「水火をも辞さず姉上の為民の為に多くの戦に出て、命を懸けて戦つてきた。まさ

か、こんな末路が待つていたとはな・・・。」

と純はそう言つた。

秋蘭「純様。華琳様は、悪気があつて純様を罷免したわけではありませぬ。お恨みな

きよう。」

それを聞いて

純「フンッ！」

純は机をひっくり返し

純「俺が恨んでいるのは俺自身だ！姉上の気持ち悟らず、戦に明け暮れてしまつた

！何故、姉上の気持ちや想いに気付かなかつたのか！」

と怒りの表情でそう言った。

稟「曹操殿は決断なさいました。それを覆そうとしても、容易ではありません。今は耐えて下さい。純様あつての曹魏なのです！」

それに純は

純「・・・もう曹魏に俺は必要ねー。」

と深く傷ついた表情を浮かべながらそう言ったのだった。

春蘭「華琳様！純様から兵権を取り上げたのは本当ですか!？」

華琳と純との一件があつたその翌日、春蘭は華琳の元に来て、そう尋ねた。

華琳「ええ。したわ。」

春蘭「何故ですか!？」

華琳「純は蜀平定の準備の為に我が国の四十万の兵に出陣の支度を勝手にやった。その為に、兵権を取り上げたのよ。」

春蘭「しかし華琳様！曹魏の全軍が従うのは純様です！もし純様を罷免したと知れ

ば、将兵は皆動揺し、最悪離れてしまいます！」

この言葉に

華琳「では春蘭、あなたも、私から離れるのかしら？」

華琳はそう尋ねた。

春蘭「そ、それは・・・その・・・」

これには、春蘭はどもってしまった。

華琳「・・・下がりなさい。」

春蘭「華琳様！」

華琳「春蘭！」

春蘭「・・・御意。」

そして、春蘭はその場を後にした。

すると今度は

栄華「お姉様・・・。」

栄華が華命と柳琳を連れてやって来た。

華琳「栄華・・・何の用かしら？」

これに

栄華「お兄様の事ですわ。」

栄華はハッキリとそう言った。

華琳「……言いなさい。」

栄華「お姉様。今我ら曹魏は、呉を滅ぼし、蜀との決戦に挑もうとする所です。それに関わらず、曹魏の全軍を纏めているお兄様を罷免するというのはどういう事ですか？」

華琳「……華命と柳琳も、同じ意見かしら？」

華命「あたしも、栄華と同じ意見です。純兄と仲直りして欲しいです……。」

柳琳「お姉様も、お兄様の独断に思う所があるのかもしれませんが、お兄様の行動は、全てお姉様のために動いているのです。お気持ちは分かりますが、どうかお兄様の罷免を撤回して下さい。」

これに

華琳「じゃあ、これからもあの子の独断を許せと言うのかしら？」

と華琳はそう言った。

柳琳「そ、それは……。」

華琳「もう良いわ。下がりなさい。」

栄華「しかしお姉様！」

華琳「下がりなさい！」

栄華「……はい。」

そして、栄華達もその場を後にした。

そして次は

桂花「華琳様……。」

桂花がやって来た。

華琳「桂花。あなたも説教するつもり？」

桂花「か、華琳様……。」

華琳「何も聞きたくないわ。下がりなさい。」

桂花「……御意。」

しかし、桂花は何も言えずその場を後にしたのだった。

そして、華琳はまた顔を手で覆い隠したのだった。

一刀「……はあ。」

この状況を憂い、一刀は溜息をついた。

真桜「隊長、どないしたん？」

沙和「隊長、大丈夫なの？」

凧「隊長、お加減が？」

一刀「いや、体調は大丈夫だよ。ただ……」

凧「華琳様と純様の事ですか？」

一刀「そう。あの二人、俺から見てもとても仲良しの姉弟なのに、華琳が突然純から兵権を取り上げたんだよな……」

真桜「せやな。ウチも驚いた。ウチだけやない、凧も沙和もやろ？」

凧「そうだな。いくら何でも違和感を感じる……」。

沙和「沙和もびつくりしたの。」

真桜「秋蘭様も姐さんも翠も稟もや。他にも、兵達も動揺しとるんやないかな？」

一刀「そうだよな。」

一刀（何で突然……？）
すると

凧「……これは私の憶測にすぎないのですが……」

一刀「ん？」

真桜「凧？」

沙和「凧ちゃん？」

凧「華琳様は、純様の事が恐ろしくなったのではないのでしょうか？」

風がそう切り出した。

一刀「華琳が？何で？」

風「これは私も先の呉との戦いで共に戦っていたので感じた事ですが、最近の純様は、一段と覇気が強くなった気がするのです。」

一刀「ああ・・・成程。」

真桜「言われてみればそうやなー。」

沙和「そうなのー。最近の純様、風格が出て来た気がするのー。」

風「武勇も統率力も、以前より更に強くなりましたし、それに一段と強くなった覇気が加わるので、華琳様は純様を上手く扱えるか不安になったのではないでしょうか？」

真桜「それに曹魏の将兵全てを従え、人望もあるからなー。やったら尚更か・・・。」

一刀「そうか・・・。」

一刀（確かに、臣下が主君以上の人望を持つてしまったら、脅威に感じるよな・・・。歴史がそれを証明してるし・・・。）

一刀（けど・・・あの二人には、そんな道を歩ませたくないな・・・。仲直りして、これからもずっと仲の良い姉弟になって欲しい・・・。）

そう思った一刀は

一刀「ちよつと用があるから。」

と言い、その場を後にしたのだった。

凧「隊長？」

真桜「どないしたんやろ？」

沙和「分かんないのー？」

一刀「華琳、ちよつと良いか？」

そう言い、一刀は華琳の部屋の扉をノックした。

華琳「・・・良いわ。入りなさい。」

そう言われ、一刀は部屋に入った。

一刀「華琳、話があるんだが・・・」

華琳「純の事でしょ？何も聞きたくないわ。」

一刀「華琳・・・。」

すると

華琳「・・・恐いのよ。」

一刀「・・・え？」

華琳「純が恐いのよ。先日、玉座の間で久し振りに見た時、更に強くなった覇気を見

て、どこか心の臓を掴まれ、雰囲気に飲まれる感覚に陥ったわ。まるで、純が純じゃなくなってる気がしたわ。」

華琳「私では、あの子を御する事が出来ない気がしたのよ。」

一刀「だから、純から兵権を取り上げ、罷免したのか？」

華琳「ええ。あの子の人望は、私より遙かに凌ぐ。もし謀反を企んだら、私は押さえられないわ。この曹魏全ての文武百官は、皆純に味方する。それが恐いのよ。」

そう華琳は弱々しく言った。それはいつも一刀や他の臣下が見てる王の姿の華琳ではなく、一人の弱々しい少女のように震えていたのだった。

それを見た一刀は

パシン

華琳「・・・っ！」

華琳の頬を平手打ちした。

華琳「かず・・・と・・・？」

一刀「そんな事、誰が言ったんだ！桂花が言ったのか！それとも他の人がそう言ったのか！」

一刀「誰も言っていないだろ！・・・それに、純はそんな事何一つも考えてない！純は以前こんな事を言っていた！」

一刀「『これから先大陸全ての人間が敵になったとしても、俺は姉上の味方でい続ける。そして、共に死ぬ。』と言っていたんだぞ！」

華琳「・・・っ！」

一刀「これから何があっても、華琳と純はいつまでも仲良しの姉弟でいて欲しいんだ！」

華琳「じゃあ、どうしろって言うのよ!？」

一刀「仲直りしろ！華琳は、純の事が嫌いなのか！顔も見たくないのか！」
それを聞いて

華琳「嫌いなわけ無いでしょう！純は、私にとつてたった一人の大切に可愛い弟なのよ！もしもの事があつたら、私は生きていけないわよ！」

と怒鳴つたのだった。

一刀「だったら、仲直りしな。」

それを聞いて、一刀は優しく華琳に言った。

華琳「けど、私に為す術がないわ。」

一刀「それは簡単だ。兵符をすぐに純に返して、兵権を戻すんだよ。」

華琳「・・・純は、許してくれるかしら？」

一刀「大丈夫。純は、きっと華琳を許してくれるよ。」

そう言われ、華琳はその日のうちに準備をしたのだった。

兵舎

その日の夜、華琳は純が兵舎にいと聞き、兵符を持ってそこに行った。

曹魏兵士A「曹操様！すぐ曹彰様にお伝えします！」

そう兵士が言うと

華琳「私と純は姉弟よ。その必要は無いわ。」

華琳はそう言って兵士の取り次ぎを断り、華琳は中に入った。

そして、暫く待っていると後ろから誰か来る気配がしたので振り返ると純が歩いて来て

純「拝謁致します。」

と拱手して言った。その様子を見た華琳は

華琳「純。どうやら、まだ怒っているようね。」

と言った。

華琳「受け取りなさい。兵符よ、届けに来たの。今回の事、全て私が間違っていたわ。」
そう華琳は言ったが

純「……。」

純は何も答えなかった。

華琳「私とあなたは、腹違いとはいえ、同い年の姉弟。あなたは、私のお母様を実の母の様に大事にしてくれたわね。」

華琳「かつてお父様が亡くなった時、あなたは率先して臣下の礼を取って皆を纏めてくれて、多くの戦にも勝利してくれた。あなたがいなければ、魏は建国できず、私は志半ばで命を落としていたわ。」

純「……っ。」

華琳「亡きお父様は、今際の際にこう言い遺したの。『戦の事は全て純に任せ、お前は国の事を考えて互いに力を合わせ、助け合い、大業を成せ』ってね。」

純「……っ！」

華琳「あなたはこの曹魏にとつて、私にとつてもかけがえのない存在よ。今回の事は、本当にごめんなさい。」

華琳「お父様の遺言に背いてしまったわ。あなたに謝罪するわ。」

そう言い、華琳は拱手して頭を下げようとしたが

純「姉上！俺こそお許し下さい！」

純はすぐに止め、跪いて拱手し謝罪した。

華琳「純……。」

それを見た華琳は、純を立ち上がらせ

華琳「主君と臣下といえど、それ以前に私達は血の繋がった姉弟よ。私は人間だから、過ちも犯してしまうわ。けど弟として、私を許してくれないかしら？」

そう言った。それを聞いた純は

純「姉上、それ以上……仰いますな！」

と華琳に言った。

華琳「では兵符は？」

純「お受け取り致します。蜀の事は、どうなさいますか？」

華琳「あなたに全て任せるわ。」

純「さすれば、ただちに建業に滞在している十万の兵と、本国四十万の兵に出撃の準備をさせて下さい！」

と純は拱手して言った。

華琳「分かったわ。なら、全て任せるわ。そして、この乱世に終止符を打ちなさい！」

純「御意！」

そして、二人の仲は改善され、曹魏の動揺は収まり、蜀平定の準備を進めたのだった。

85話

秋蘭「純様。全軍、集結致しました。」

純「・・・分かった。」

そう言つて、純は目の前の光景を見た。

そこに広がるのは、銀色の荒野。曹魏四十万。建業にいる愛紗達を合わせると、その数五十万。兵士達が掲げるのは、槍、矛、弓……。それは空から降り注ぐ太陽を弾き、さながら鉄刃の海原のようだった。

そして、その兵達は皆、この全軍の総大将である純の言葉を待つていた。

純「聞け！魏の勇士達よ！」

その声と同時に、兵達は己の武器を構え直す。続けざまの金属音が、連なり響く後に生まれた光景は・・・切っ先の揃えられた完璧な風の稲原だった。

純「これより我らは国境を越え、建業にいる愛紗達十万の兵と合流し、劉備率いる蜀への侵攻を開始する！」

純「越えるべき山道は厳しく、敵は名将の誉れ高い趙雲や呂布、孫策となる！激戦となる事は必至だろう！」

純「だが、我らは袁一族を討ち、反乱を起こした韓遂ら西涼の軍閥を制し、赤壁を抜けて孫呉にも勝利し、平定した！」

純「その激戦をくぐり抜けた者はいるか！」

それを聞いて

「「おおーっ!!」」

兵士達は雄叫びを上げた。

純「お前達は、紛う事無き一騎当千、万夫不当の勇士達だ！その力、この戦いの終わりまで曹子文に貸して欲しい！」

純「この戦いが初陣の者はいるか！」

純「お前達の回りには、幾多の戦場を生き抜いた先達がいる！油断も慢心もしてはならぬー！けれど、過度の恐れを抱く事もぬー！」

純「そしてこの戦いが終わる頃には・・・ここに居る者全てが、我が曹魏の誇る英傑の一員となっているだろう！」

純「この大陸に残る国家は、我が姉曹孟徳が王の曹魏と劉備の蜀の二国のみだ。」

純「疲弊しきつたこの大陸を救えるのは、朝廷でも、孫呉でも、ましてや理想だけの蜀でもぬー！我が姉曹孟徳が王として君臨している曹魏、ただ一国のみだ！」

純「今こそ蜀を呑み込んで、姉上と共に我らが大陸の主、大陸の守護者となるのだ！」

総員、出立せよ！曹孟徳が王として君臨している曹魏の威光を、地の果てにまで届かせるのだ！」

そして、純は太刀を抜き、天に掲げた。

「「おおーっ!!」」

それに続いて、鋼の稲原は嵐を受けたように揺らぎ、兵達の喚声は大地を震わせる程で、その声は遠くの山々にまでいつまでも木霊していくのだった。

建業

楼杏「愛紗さん。全軍、集結したわ。」

愛紗「ありがとうございます、楼杏殿。」

一方、建業にいる愛紗も、出陣の準備をした。

愛紗「これより我らは、西へ向かい、蜀を攻める。そして、成都にて純様と合流し、蜀の都成都を攻め、劉備を倒し、この大陸に泰平の世をもたらす！」

愛紗「そのためには、お前達の力が必要だ！皆、その力を、純様に貸してくれ！」

「「おおーっ!!」」

愛紗「いぎ、出陣だ!!」

そして、愛紗達十万の兵も、西に出陣したのだった。

凧「・・・まだ身が震えるようだ。」

沙和「うん。なんか凄かったの・・・。」

真桜「ウチの兵士ってあんなにいたんやねえ・・・。」

凧「それもそうだが、純様の演説もだ。心が昂ぶり、力が湧いてくるような感覚になる。」

沙和「うん。兵達の顔も、とても活気に満ち溢れた顔になったの・・・。」

真桜「加えてあの覇気や。なんつーか、当然見たわけちゃうんやけど、まるで西楚の霸王項羽かそれ以上みたいやったな・・・。」

凧「そうだな。純様の期待を裏切るわけにはいかんな。」

真桜「よっしゃ!なら、この腕を更に振るうで!」

凧「ああ!」

沙和「おうなのー！」

そして、凧達は潼関へ先鋒として進軍したのだった。

到着後、凧達はすぐに防備を整え、敵の城攻めに備えた。

暫くすると

陸遜「思春ちゃん、明命ちゃん。宜しくお願いしますね。」

甘寧「承知した。」

周泰「はいっ！お任せ下さい！」

陸遜らが現れた。そして、潼関への攻撃が始まった。

曹彰軍武将A「流石陸遜だな、中々の攻めだ。」

曹彰軍武将B「どうする？俺達も出て、楽進様の援護に行くか？」

曹彰軍武将A「いや、郭嘉様の指示通り、ここは防御に徹しよう。迂闊に出たら、向

こうの思う壺だ。」

曹彰軍武将A「それに・・・」

曹彰軍武将B「ああ。楽進様達が、上手くやってくれば・・・」

凧「見つけたぞ！真桜！沙和！」

真桜「おう！」

沙和「分かったの！総員、包囲するのー！」

甘寧「ちつ。明命！」

周泰「はいっ！皆さん、火矢の用意！もう隠密行動は不要です、周囲をとにかく混乱と損害を与えて下さい！」

風「させるか！はあああつ！」

それを見た風は、気弾を放って対処した。

甘寧「ちつ！相変わらず面倒な技を使う！」

甘寧「明命、こいつは私が押さえる！キツいかもしれないが、その間に！」

周泰「分かってます！」

真桜「させるかい！お前ら、連中に指一本動かさせるんやない！皖城ん時みたいなきはさせへんで！」

沙和「火矢も撃たせちや駄目なの！攻撃開始！」

曹彰軍武将A「・・・やはり、郭嘉様の予想通り、忍び込んでいたか。」

曹彰軍武将B「皆、踏ん張るのだ！ここを押し切られたら、曹彰様達の来る所がなく

なるぞー！」

陸遜「こちらが頑張れば、思春ちゃん達の援護になりますし、ここを陥とせば、曹彰の歩みは遅くなります！総員、頑張つて下さい！」

その攻めに追い討ちを掛けるように

曹彰軍武将B「おい！陣の内側から火の手が上がったぞー！」

陣の内側から火の手が上がった。

曹彰軍武将A「・・・なら、手はず通りに！」

曹彰軍武将C「了解！何人か俺についてこい！火を消して回るぞー！」

その時

曹彰軍武将B「え、そんな・・・！」

曹彰軍武将A「どうした！増援か！」

曹彰軍武将B「いや違う！あれだ、陣の反対側を見る・・・！」

陣の反対側から新しい旗が来た。

曹彰軍武将A「なんと・・・!?!」

呉軍兵士A「陸遜様！潼関の東に新しい旗が！」

陸遜「その旗は……まさか……!?けど……どうしてこんなに早く……!?」
その旗の正体は

曹彰軍武将A・陸遜「曹彰様!／曹彰さん!」

純率いる軍の旗だった。

純「状況はどうなってる?」

秋蘭「呉軍を相手に何とか持ち堪えてるみたいです!」

霞「よっしゃ!夜を徹して行軍させた甲斐があったつちゆうもんやな!」

純「そうだな。」

そして

純「総員、俺に続けー!潼関にいる仲間を、呉軍から救い出すぞー!」

純「稟、後ろは指揮は任せたぞ。」

稟「お任せ下さい。」

純「行くぞ!『黄鬚』曹彰についてこい!」

秋蘭「遅れを取るな!」

霞 「おっしやあー！ 暴れるでー！」

翠 「純殿に続けー！」

「「「おおーっ!!」」」

真桜 「純様達かいな！ 助かった！」

周泰 「相変わらず何て早さです!？」

甘寧 「くそっ。相変わらず我々の予想を遙かに上回る早さだ！ お前達、火矢は全部使い切れ！ もはや門を開けるのは間に合わん、連中の歩みを鈍らせる事を優先しろ！」

風 「浮き足立っている連中を、このまま押し込むぞ！ 長江育ちの連中を黄河に叩き落としてやれ！」

周泰 「やらせません！ 皆さん、弓兵の防御に専念して下さい！」

陸遜 「敵の本隊が来るまで、何としても一気に攻めるのですよー！」

曹彰軍武将A 「あと一息だ！ 踏ん張るぞー！」

ほぼ同時刻、荊州・江陵

愛紗「ここを攻めるぞ！そして、荊州一帯を平定し、その勢いで蜀に侵攻するぞ！」

「「「おぉーっ!!」」」

愛紗「楼杏殿。指揮をお願いします。」

楼杏「任せて下さい！」

愛紗「風！頼むぞ！」

風「後ろはお任せ下さいなのですー！」

愛紗「行くぞ！純様の夢のため、突撃ー！」

そして、こちらでも蜀に向けての侵攻が始まった。

潼関の方も、純達の驚異的なスピードで到着した事で形勢は逆転し、陸遜達は撤退をした。

陸遜「ううー。予想以上に戦果は上げられませんでしたねー。」

甘寧「くそつ。流石『黄鬚』曹彰だ・・・！最初から士気は高かったが、彼奴が到着した途端、一気に雰囲気が変わった。それに、我らは呑み込まれてしまった。」

周泰「我が軍の中には、合肥の時の兵もいますからね。」

陸遜「しかし、漢中を手に入れましたし、ここで曹彰さん達を食い止めれば・・・」

曹彰軍

純「皆、良くやった！この勢いで、一気に攻める・・・」

純「と書いてー所だが・・・稟。」

稟「はっ。恐らく、漢中は敵の手に落ちたかもしれません。」

秋蘭「何と・・・!?」

霞「漢中が・・・!?」

凧「そんな・・・！」

真桜「ありえへん……！」

沙和「なの……！」

翠「けど、純殿は漢中の至る所に堅固な砦を築いたじゃないか！ そう易々と陥らない筈だぞ！」

稟の言葉に、諸将は動揺したが

純「翠。どんなに堅固な砦を築いたとしても、完璧な砦は無い。」

純「安心しろ。取られたら、取り返せば良い。共に取り返すぞ！」

そう言つて

秋・稟・凧「「御意！」」

霞・真・沙「「おう／なのー！」」

翠「よっしゃー！ やつてやるぜ！」

諸将の動揺を鎮めたのだった。

純「それで稟。敵はやはり、陽平関か？ あそこは、漢中の喉に相応しい重要拠点だが。」

稟「恐らくそうだと思います。しかし、孫尚香と孫策は攻めを得意とする将です。十

中八九……」

純「……孫権か。」

稟「はい。」

純「なら、こちらも全力で叩く。お前ら、行くぞ！」
そして、純達は進軍したのだった。

益州・成都

買駆「桃香・・・こんな所にいたんだ。雪蓮達から連絡よ。」

劉備「雪蓮さんから？どうなったの！」

買駆「漢中の陽平関は、何とか陥としたり。陸遜達は、別働隊として、そのまま曹彰達の牽制のために潼関に向かったんだけど、曹彰達が予想以上に早く到着したため、対応が出来ず撤退したって。」

劉備「・・・そうか。」

諸葛亮「そうですか・・・。流石曹彰さんですね・・・。」

買駆「それと・・・桃香と諸葛亮にとって、受け入れたくない話かもしれないけど・・・」

劉備「・・・どうかしたの？」

買駆「・・・荊州の七郡のうち、五郡が魏に制圧されて、荊州全てが平定されるのも

時間の問題よ。」

これに

劉備「……え!? そんな!？」

諸葛亮「どうしてこんなに早く……!？」

劉備と諸葛亮は驚きを隠せなかった。

買駆「荊州を攻めている関羽率いる十万の兵も曹彰本隊四十万の大軍同様、精鋭なんだけど、それに圧倒されてしまつて、他の郡も次々と投降したらしいんだよね。」

劉備「そんな……。」

劉備（どうして……武力で従えようとする人に降参するの……!?)

買駆の話聞いた劉備は、そう思いながら聞いていた。

諸葛亮「……まずい! このままでは……!？」

その時

諸葛亮「……ゴホッ!ゴホッ!」

諸葛亮が咳き込んだ。

劉備「朱里ちゃん!？」

買駆「朱里!?! アンタ、無茶しないで!？」

これに劉備と買駆は押さえたのだが

諸葛亮「大事ありません！しかし、このままでは……我らは敗北を……ゴホツ！
ゴホツ！」

ビシヤ

諸葛亮は再び吐血した。

劉備「朱里ちゃん!!」

買駆「誰か医者を！誰か！」

そう言い、諸葛亮を退かせた。

そして、純達は陽平関に到着し、愛紗達も、荊州平定まで、後一割ほどとなったのであった。

86話

陽平関・曹彰軍

純達四十万の大軍は、陽平関に到着した。

純「……着いたか。稟、斥候の報告は？」

稟「はい。大体こちらの想定通りです。陽平関に立つのは孫家の旗ですから、敵の大將は孫策です。後は呉の主要な將の皆さんのものが一通りです。」

純「……そうか。趙雲か魏延といった蜀の將達は？」

稟「旗も立ってないですし、奇襲で控えている可能性もありますが……今のところ周囲には見当たりません。」

稟「恐らくですが、成都にて劉備と一緒に最終決戦に向けて力を温存しているのではないかと。」

純「成程……。なら、孫策が出てくるまで待つとすつか……。」

稟「はい。それで宜しいかと。」

これに

翠「珍しいな。いつもの稟なら、もっと策を弄してくるんだけどな。」

そう翠が言ったら

稟「私だって、場の空気くらい読む事はありますよ。翠、あなたも同じでしょう？」
と稟が返した。

翠「まあ、そうだな。」

純「しかし、こういう戦いは久し振りだな。」

稟「それに、今回はこちらが圧倒的に優勢です。向こうが策を弄するのは当然の事ですが、こちらが先手を打って策など弄しては……純様の『黄鬚』としての名声が失われてしまうでしょう。」

翠「成程ね……。」

稟「純様。いつも通り後ろは私にお任せ下さい。」

純「分かった。なら、霞、翠。共に最前線で暴れるぞ！」

霞「よっしゃ！ やったるで！」

翠「腕が鳴るぜ」

純「秋蘭は後詰めを頼む。」

秋蘭「はっ。」

そして、陣を展開したのだった。

陽平関・呉軍

孫策「敵の先鋒は曹彰に張遼、そして马超か。どうやら正面から挑んでくれるようね、ありがたいわ。」

周瑜「やれやれ・・・素直に攻城戦を仕掛けてくれれば良いものを。似た者同士という事か。」

孫策「そう言わないですよ。私はあそこまで無差別に侵略して回ったりはしないわよ？」

周瑜「ふっ・・・どうだかな。そう戦ばかり求めるのはある意味似ていると思うぞ。」

孫策「確かにそうかも。だけど、こればかりは死んでも治らないでしょうね。」

孫策「ま・・・今は蓮華がいてくれるから良いけど。」

周瑜「なら、二人で旅にでも出てみる？」

孫策「旅かあー。それも良いかもね。」

孫策「ま．．．それもこれも全部、曹彰をねじ伏せてからの話ね。」

周瑜「そうだな．．．。雪蓮．．．曹彰に勝てないと弱気になるなよ。」

孫策「ええ、分かっているわ。」

すると

孫権「姉様！」

孫尚香「本隊の準備、ゼーンぶ整ったよー！」

孫権と孫尚香が、本隊の準備完了の報告に現れた。

孫策「ご苦労様。．．．蓮華。」

孫権「ええ。陽平関の守備は任せて。」

孫策「預けたわよ。何があっても、敵は一兵たりともは通さないで。．．．何があつ

てもよ。」

孫権「姉様．．．？」

孫尚香「それって．．．」

孫策「別に深い意味は無いわよ。あなたが背中を守ってくれるから、存分に戦えるつ

て事。」

孫権「．．．はい。」

孫策「曹彰と語るべき事は全て江東の地で言い尽くした．．．。向こうも舌戦無しで

すぐに突撃してくるはず。」

孫策「それを防ぎ、粉碎し、曹彰の頸を取るわよ。」

周瑜「了解した。」

孫策「後、大分手狭になってしまったけれど……二人とも、ここを建業と思いなさい。」

孫権「はい。」

孫尚香「そうね……分かったわ！」

孫策「目指すはあの青に曹の旗印の牙門旗。……待っていなさい、『黄鬚』曹彰……。」

程普「とりあえず、こっちはこれで全部か……。」

張昭「うむ。では、儂は関に戻るが……下は任せるぞ、粹愴。」

程普「任せといて。」

張昭「……儂を一人にしてくれるなよ。」

程普「えー。そうやって甘えられるのなら、もっと若い子が良いんだけど。」

張昭「これまで散々儂を若輩扱いしてきた、良く言うわ。」

程普「それは見かけの話でしょー？中身は私以上の年増じゃない。」

張昭「ふん。そのように言うなら、もう一緒に飲んでやらんかな。」

程普「そつちが寂しくなってくる癖に。」

張昭「・・・死ぬでないぞ。」

程普「ええ。祭にはもうちよつと待っててもらいませよ。」

太史慈「雪蓮、おっそーい！」

孫策「はいはい、ごめんつてば。準備は出来てるわね？」

太史慈「勿論！」

孫策「『黄鬚』曹彰を中心に、左右両翼に張遼と馬超か……。上からも見たけど、ここから見ても一層イヤな配置ね。」

太史慈「大丈夫だよ。例え『黄鬚』曹彰や遼来々、そして錦馬超が相手でも・・・私と雪蓮なら、誰にも負けない。」

太史慈「守るよ、陽平関。」

孫策「ええ。なら、あの戦いの続きといきましょう！」

曹彰軍

純「……。」

翠「純殿。突撃はまだなのか？」

純「まだだ。気持ちは分かるが、我慢しろ。」

霞「翠、相手が動いてから言うたやないか。こつちから先手を打つても、向こうの流れに乗せられるだけやつて。」

真桜「せやでー、翠。」

翠「むうう……。」

真桜（大将と姐さんがおるからまだ気は楽やわあ……。）

その時

曹彰軍兵士A「曹彰様！敵部隊、動き始めました！一気に突撃してきます！」

呉軍が攻撃開始したとの知らせが入った。

純「分かった！」

翠「やつと来たぜ！」

霞「よっしや！暴れるでー！」

純「ならばこちらも動くぞ！敵の初撃を真つ正面から粉碎する！霞！翠！遼来々と錦馬超の力をこの漢中に改めて示し、敵を恐怖に陥れる！」

霞「おう！」

翠「任せてくれ！」

純「己の命を刃に代えて、孫策の頸を取る！皆、『黄鬚』曹彰についてこい！」

純「総員、突撃いいいーっ！」

「「「おおーっ！！」」」

そして、陽平関での戦闘が始まったのだった。

純「この戦いは、この先で待つ決戦の前座に過ぎねー！自らの誇りのため・・・我が姉曹孟徳望む泰平の世のため・・・それに立ち塞がる者は・・・この俺が全て斬り捨てる！！」

孫策「望むところよ！私の命ある限り、この先へ進めるとは思わない事ね！」

純「なら止めてみやがれ！」

その戦闘中

孫尚香「孫家は姉様達だけじゃないんだからね！」

孫尚香が遊撃隊として襲ってきたため

秋蘭「稟の予想通りか。彼奴らを迎撃するぞ！」

秋蘭がそれに応戦した。

戦いは一進一退の攻防だったが

孫策「ふ・・・やっぱり無理か。一度負け怖じ気づいてしまった相手に次は勝つなんて、そう上手くはいかないわね。」

太史慈「ホント、どうしてこんなに強いんだろうね。でもま、最後の相手にはちやうど良いかな。」

孫策「そうね。結局こんな所にまで付き合わせてしまつて、ごめんなさい。」

太史慈「私が望んだ事よ・・・さて、あと何人くらいいけるかねえ。」

孫策「せめて、孫呉の恐ろしさを思い知らせるくらいは、しておかないとね・・・！」
純達の圧倒的な強さに、孫呉側の前線は崩壊していったのだった。

87話

ズバツ！

曹彰軍兵士A 「ぐはっ！」

ザシユツ！

曹彰軍兵士B 「がああっ!!」

太史慈 「雪蓮！今何人目！」

孫策 「そんなの覚えてるわけないでしょ！百過ぎたあたりで忘れたわよ！」

太史慈 「えー。せっかく競争しようと思ったのに！」

孫策 「そういう梨宴は覚えてるの！」

太史慈 「あはは。八十あたり・・・までかな。」

孫策 「・・・けど、二人合わせて三百いかないか。戦況を変えるには程遠いわね。」

太史慈 「そんなの、最初から分かった事じゃん、気にしたら負けだよ。・・・それ

より、シャオちゃんは上手くやってるのかなあ？」

孫策 「そう信じたいけどね。」

太史慈 「どうする？今ならまだ城に戻るけど。」

孫策「……そうね。なら、そろそろ……」

その時

霞「孫策うううっ！」

ガギン！

孫策「張遼！ちっ、こんな時に……！」

霞が孫策を攻撃してきた。

太史慈「雪蓮！」

孫策「ここは任せなさい！梨晏は……」

今度は

翠「お前の相手はあたしだ！」

ガギン！

太史慈「……へえ！そういや、噂の錦馬超とはやった事がなかった気がするよ！」

翠が太史慈を攻撃した。

孫策「梨晏！」

太史慈「冥琳や蓮華様が上手くやってくれるよ！後ろは任せたんでしょ！」

孫策「……そうね。なら……張遼！」

霞「おう！孫策、いざ尋常に勝負せい！」

孫策「良いでしょう。孫家に伝わる南海霸王の切れ味・・・その身でとくと味わうが
良いわ！」

孫尚香「姉様達、苦戦してるわね・・・。」

呉軍兵士A「孫尚香様。攻撃の準備、整いました。」

孫尚香「分かったわ！なら総員、ここから敵の横合いに奇襲を掛けるわよ！シャオ達
で、この流れを一気に変えてみせるんだから！」

孫尚香「総員・・・。」

しかし

「「おおうっ!!」」

孫尚香「・・・え？」

秋蘭「そうはさせるか！」

沙和「皆ー！相手の好きにさせてはいけないのー！」

秋蘭「放てー！」

秋蘭達があっさり対応した。

孫尚香「もおおっ！せっかくの奇襲が台無しじゃない!!何でシャオ達の動きが読まれ

てるのよーっ！」

曹彰軍本陣

曹彰軍兵士C「郭嘉様。夏侯淵隊、孫尚香率いる奇襲部隊と接敵。押さえ込みに成功したとの事です！」

稟「分かりました。」

稟「・・・しかし、この戦場の広さで奇襲とは・・・まだまだ未熟ですね。動きが素直すぎます。」

稟「とはいええ・・・ここが正念場です。そろそろ相手も籠城戦に移る頃です。誰か！」
曹彰軍兵士D「はっ！」

稟「最前線に伝えたい事があります！策は・・・」
そして、稟はある策を最前線に伝えさせた。

陽平関・呉軍

魯肅「うう、何だか状況・・・だいぶこつちに不利じゃないですかあ？」

張昭「そのような事、最初から分かっておったじやろう。いちいち動揺するでない。」

魯肅「それはそうですけどお・・・」

陸遜「包ちちゃん、指揮する側が動揺すると、下にも伝わっちゃいますよ。」

魯肅「・・・それも分かってますけどお。」

孫権「冥琳。」

周瑜「ええ・・・雪蓮には悪いが、そろそろ潮時でしょう。銅鑼を鳴らせ！外に出ている部隊を戻し、これより籠城戦に持ち込む！」

呉軍兵士B「はっ！」

そして、引き揚げの銅鑼を鳴らした。

孫権「ここで勝てないまでも・・・桃香達が準備出来る時間を、少しでも稼いであげないと・・・。」

周瑜「それに、向こうはあくまでも遠征。ここで粘りきれれば、あるいは……」
孫権「ふふつ。流石にそこまでは望みすぎだと思っけどね。」

ガギン！ガギン！ドーン！

太史慈「撤退か！雪蓮！」

孫策「見れば分かるでしょ！……ちつ、離しなさいよ！」

ガギン！

霞「誰が離すか！」

ズバツ！ザシュツ！ズバツ！

孫策「そういうしつこいのは嫌われるわよ！」

ガギン！

霞「純に愛してくれればそれでええわ！純がおれば、ウチは無敵や！」

ズバツ！ザシュツ！ガギン！

それを聞いた太史慈は

太史慈「あー、その気持ち分かるわー。」

そう言ったが

孫策「分からなくて良い！」

と孫策に返された。

その一方で

曹彰軍兵士E「曹彰様！本陣の郭嘉様から、敵の城門を制圧して下さいと！」

純「分かった！よっしゃ！派手に暴れてやるぜー！」

純は不敵な笑みを浮かべ且つ目を輝かせながらそう言い、馬を走らせた。

太史慈「そうはさせ・・・ぐっ!？」

それを見た太史慈は止めようとするが

翠「よそ見をするな！純殿、ここはあたしに！」

凧「純様！ここは私達が食い止めますから！」

先程太史慈と一騎打ちしていた翠と、途中加わった凧が止めた。

太史慈「くっ！こんな事してる場合じゃないのに・・・！」

純「任せたぞ！」

そう言つて、純は馬を一気に加速させた。

太史慈「ああもうこうなりやヤケだ！雪蓮!!ここは全部私が引き受ける！雪蓮は曹彰

を止めて！」

それを聞いた孫策は

孫策「……ぐつ。分かったわ！」

そう言つて純を追い掛けた。

霞「行かせる……」

それを霞は止めようとしたが

太史慈「それはこつちの台詞!!」

ガギン!

霞「ぐ……つ。」

太史慈に止められた。

太史慈「あんたが曹彰への想いで戦うように……こつちは雪蓮との友情で戦ってるんだ!」

霞「コイツ……まさか、本気でウチら三人と戦うつもりなんか。」

凧「そうかもしれない。なら、我らも全力で当たるのみです!」

翠「ああ!なら、あたしらもそれに応えるのみ!」

太史慈「……さ。あんたらと私。どつちの気持ちが強いか……勝負といこうじゃない!」

そして、太史慈は、霞、翠、そして凧の三人を相手にしたのだった。

88話

引き揚げの銅鑼は、孫尚香率いる部隊にも聞こえていた。

孫尚香「撤退ですって!?!もしかして、シヤオ達の奇襲が上手くいかなかったから!?!」

呉軍兵士A「如何なさいますか!」

孫尚香「この後は籠城だから、皆城に戻るはず!撤退の支援に行くわよ!」

しかし

沙和「そうはさせないのー!!総員、槍を構えて騎馬隊を包囲するの!突撃はしなくても良いから、自由に走らせないようにするのー!」

秋蘭に代わって沙和率いる部隊が、孫尚香を足止めをしたのだった。

孫尚香「ああもうっ!何でこうなるのよーっ!」

陽平関

甘寧「戻る兵を優先しろ！戦える者は、城門の前で敵を食い止めるのだ！」

程普「敵は一人も通さないで！ここからが正念場よ！」

張昭「穩、収容状況は！」

陸遜「全軍の八割といった所です。もう少しですよ！」

孫権「姉様とシャオは？」

周瑜「まだです。梨晏も戻っていないあたり……敵の主力を足止めしているのでしよう。」

孫権「……そう。」

張昭「蓮華様。万が一の時は……」

孫権「分かっているわ。でも、待てるうちは……」

秋蘭「総員、城門は目の前だ！押し込め！」

呂蒙「呂蒙隊は前へ！敵の攻撃を止めますよ！」

程普「程普隊は漏れ出た敵を逃すな！」

呉軍兵士B「ぐうっ！」

曹彰軍兵士A「がはっ！」

秋蘭「進め進め！」

程普「押し留めろ!!」

陽平関の中にいる呉軍も、前線の撤退支援をしたいのだが

周瑜「くっ、これだけ乱戦になつては、弓の援護も・・・」

乱戦のため、援護できなかった。

すると

甘寧「蓮華様！城門をお閉め下さい！」

城外の甘寧が、そう孫権に言った。

孫権「思春!?!」

甘寧「我々は大丈夫です！亞莎や外の雪蓮様達と合流して、何としてでも逃げ延びてみせます！」

これには

孫権「そんな・・・！」

孫権は決断を躊躇った。

呂蒙「思春さんの言う通りです！このままでは、陽平関が陥ちます！冥琳様！」

周瑜「……ああ。蓮華様、雪蓮には梨晏もいます。」

孫権「……。」

甘寧「蓮華様！」

程普「蓮華様!!」

呂蒙「蓮華様!!」

孫権「……ぐっ。」

この様子を見た

張昭「……お辛いなら、儂が代わりましょうか？」

張昭が、そう孫権に言った。

しかし

孫権「いえ……。」

孫権「思春と亞莎、粹怜は城内へ！三人の隊が戻り次第、城門を閉鎖する……！」

孫権はそう全軍に言った。

周瑜「撤退！撤退だー！」

程普「殿は私が引き受けるわ！亞莎の隊から先行なさい！」

張昭「……蓮華様。」

孫権「……大丈夫よ。陽平関の事は、私が任されたのも。それに、姉様も……」
その時

周瑜「雪蓮……」

周瑜の言葉に

孫権「……え？」

孫権は反応した。

周瑜「あそこだ。あそこに雪蓮が！」

その言葉に、城外を見た孫権は

孫権「本当！思春！」

甘寧に声を掛けた。

甘寧「……はっ！お前達、もう少し粘れ！何としても雪蓮様達を陽平関へとお戻し
するのだ！」

秋蘭「後一步で連中を押し崩せるぞ！歩みを止めるな！」

程普「何としてでも食い止めなさい！これ以上進ませないで！」

その横で、孫策が走っていた。

孫権「姉様……っ。」

周瑜「雪蓮……っ。」

甘寧「雪蓮様……！」

しかし

??「……わりーな。」

ズバツ！ザシュツ！ドシュツ！

呉軍兵士C「がはあっ！」

呉軍兵士D「ぐあっ！」

呉軍兵士E「ぎやああっ！」

城門近くの守備兵が、あっさりと斬り殺されてしまった。

張昭「な……。」

魯肅「え……。」

そこにいたのは

孫権「……曹彰!!」

純だった。そして

純「今だ！突撃いいっ！」

曹彰軍兵士「「おおーっ!!」」
兵に一気に突撃させたのだった。

これを見た

魯肅「め、冥琳様っ!」

周瑜「ちっ、城内にだど・・・!?総員、押し返せ!何としてでも・・・っ!」

周瑜は何とか城内へ追い出そうとしたが

陸遜「駄目ですっ!この勢い・・・押し返せません!」

純が直接率いる部隊の勢いを止められなかった。

孫権「そんな・・・姉様に気を取られた、あの一瞬に・・・」

これに、孫権は呆然としていた。

張昭「蓮華様、ここは撤退を。これでは総崩れじゃ。」

この様子を見た張昭は、孫権に撤退を勧めたが

孫権「でも・・・でも、ここは私が任されたのに・・・!」

孫権は責任感故、躊躇った。

周瑜「諦めるしかありません。誰か、漢中側の門を開け!扉は破壊して構わん、こち

らはそこから脱出する！陽平関は放棄！」

魯肅「放棄、放棄ーっ！陽平関から撤退します！」

周瑜「雷火殿。」

張昭「うむ。儂は蓮華様を・・・」

周瑜「頼みます。穩、撤退の指揮を手伝ってください！」

陸遜「わ、分かりましたあ！」

そして、銅鑼を鳴らした。

孫尚香「ちよつと、この合図って・・・陽平関が陥ちたって事・・・!?」

呉軍兵士F「何て早さだ!」

呉軍兵士G「どうなさいますか！」

孫尚香「どうするって言っても、とりあえず撤退するしかないでしょ！姉様達に合流するわ！」

そう言つて、撤退した。それを見た

沙和「皆ー！追い掛けるのー！」

沙和は、彼女らを追い掛けたのだった。

太史慈「……。」

霞「まだやるんか、太史慈。」

太史慈「当然。……私の役目はあんた達の足止めだよ？撤退の銅鑼が鳴ってるなら、寧ろこれからが本番っしょ！」

霞「成程……ええな、それ！」

翠「ああ！あたしもだぜ！」

太史慈「なら来い！あんた達の攻撃、全部ここで止めてやる！」

凧「行くぞ！はあああっ!!」

ドガン！

太史慈「くっ！そんな蹴り、当たらなきやどうってことないね！」

翠「だったら……！」

ドーン！

太史慈「だから言ってるでしょ！当たらなきや……しかし

霞「上出来や！はあああっ！」

即席ながら良い連携で、最後は霞が攻撃を掛けた。

太史慈「くつ……まだ来るか！」

太史慈（……ごめん、雪蓮！）

これに、太史慈は死を覚悟したが

ドガン！

霞「……何やつ!？」

何者かが、太史慈の攻撃から守った。その者は

敵顔「遅まきながら、撤退の支援に参った！梨晏、健在か！」

敵顔だった。

太史慈「な……何とかね！」

敵顔「張遼よ！この勝負、儂が預からせて貰う！」

霞「何や！割り込んできて勝手な事を言いよつて！」

敵顔「ならばこの豪天砲とやり合ってみるか！だが、そのような偃月刀で受け止めれば……我が一撃、刃はおろかお主の身体ごと貫くぞ？」

霞「おもしろいなー！風！」

風「はい！」

しかし

太史慈「そうは・・・させないよ！」

凧「っ!？」

太史慈「でやあああーっ！」

凧「くっ！」

太史慈が、凧の攻撃を止めた。

ガギン！

太史慈「ちっ！」

翠「させないのは、あたしらも同じだぜ！」

陽平関

純「はあああっ!!」

孫策「てやあああっ!!」

ガギン！ドン！キーン！

純「へえ……やんな、孫策！」

孫策「当然よ！私の本気、侮らないで欲しいわ！」

純「ふっ。これ以上時間を稼がせるわけにはいかねーし、本気を出すか！」

その言葉に

孫策「……えっ!？」

孫策は驚きの言葉を吐いた。すると

孫策「……っ!？」

孫策（な……何て覇気なの!!江東で見た時よりも更に強い！また強くなったって言うの!?!あ……足の震えが……止まらない……!）

純の圧倒的な覇気に、孫策は動けないでいた。

孫策「けど……負けるわけにはいかないわ！」

しかし、何とか気合で動き、純に攻撃をした。

純「おもしろー！」

孫策「食らえ！はあああっ!!」

純「うおりやああっ！」

しかし

キーン

孫策「しまった・・・！」

孫策の南海霸王は、弾かれてしまった。

純「終わりだ!!」

それを見て、純は孫策を討とうとしたその時

魏延「たあああつ!!」

ガギン!

純「つとお!?魏延!」

魏延が孫策を助けた。

趙雲「雪蓮、無事か!・・・関を回り込むのに、時間が掛かった、すまん。」

駆けつけたのは魏延だけじゃなく、趙雲もやって来た。

孫策「星!?どうしてここに・・・!」

趙雲「話は後だ!この場合は撤退しろ、援護する!」

孫策「手助けは不要よ!あなたこそ下がって、蓮華や冥琳の撤退の援護を!」

趙雲「それは他の連中がしている。案ずるな。」

真桜「大将!みな、はよ来い!大将達を助けんで!」

魏延「星、増援が来たぞ!このままではまずい!」

趙雲「雪蓮!」

これを聞いて

孫策「・・・ちっ。」

孫策は撤退した。

純「待てコラ！」

それを見た純は、追い掛けようとしたが

趙雲「させるか！焔耶！」

魏延「応さ！」

趙雲と魏延が立ちはだかった。

純「ちっ。テメーら、どけ!!」

それに純は、威圧感をむき出しにして趙雲と魏延にそう言った。

趙雲「くっ・・・!!何て覇気だ!!この私が・・・立っているのがやつとだと・・・!!」

魏延「くっ・・・!!動けない・・・!!」

これには、趙雲と魏延は立っているのがやつとの状態になった。

純「どうした、来ねーのか？」

趙雲「・・・くっ。焔耶、我らも後退するぞ!!」

魏延「しかし・・・！」

趙雲「焔耶!!」

魏延「……分かった！」

そして、趙雲と魏延は撤退したのだった。

真桜「純様……無事でホンマ良かったですわ……」

純「つたりめーだろーが！それより城内の占拠は。」

真桜「今進んどります。」

純「……そっか。」

霞「……やれやれ、陽平関は陥ちたか。早かったな。」

純「……霞か。太史慈は？やったか？」

霞「うんにや、蜀の応援が来て山の方に逃げられてしもうた。翠達が追ってるんやけど……まあ、追い付くのは無理やろうな。」

純「そっか……」

真桜「純様……追撃はどないします？」

純「いや、この先何が待ち構えているか分かんねーから追撃はしねーよ。それより、連中が壊していった漢中側の城門の補修を急がせろ。あそこが開きつばなしだと、関の守備もあつたもんじゃねーしな。」

真桜「了解しました！」

そう言つて、真桜はその場を後にした。

純「しかし……孫権も案外甘いな。あそこで城門を閉じていれば、アイツの実力なら、少なくとも一月は持ち堪えられたぞ。」

霞「せやけど、孫策がおつたから、見捨てる事が出来なかつたんとちゃうんかな……。」
純「……そうかもな、俺もその気持ちは分かる。けど、ここは戦だ。ちよつと決断を躊躇つたら、軍全体に影響を及ぼす。それじゃ、勝てる戦には勝てねーよ。」

霞「……せやなあ。」

呉軍

孫尚香「姉様！皆も無事だったのね、良かった！」

太史慈「シヤオちゃんも無事だったのかー！」

孫尚香「それで……どうしたの、この空気。」

空気の悪さを太史慈に尋ねた。

太史慈「……あー。それはさ。」

それを聞かれた太史慈は、ある方向に目を向けた。するとそこには

孫策「……。」

孫權「……。」

孫策が、怒りの表情で孫權に對峙していた。

孫策「……蓮華。私の言つた事、覚えてゐるわよね。」

孫權「……はい。」

孫策「なら、どうして城門を閉めなかつたの。あそこで門を閉じていれば……貴女なら、例え曹彰相手でも少なくとももう一月は持ち堪えられたはずよ？これが、曹操と曹彰の姉弟だったら、間違ひなく門を閉めてゐるわ！」

孫權「……申し訳ありません。ですが……」

孫策「言い訳は必要ないわ。」

これに

魏延「雪蓮。」

魏延はフオローしようとしたが

趙雲「焰耶。」

趙雲がそれを止めた。

魏延「星？」

趙雲「これはあの二人の問題だ。私達が口を挟んではいけない。」

魏延「……むう。」

孫権「……姉様。」

孫策「言い訳は聞かないと言ったでしょう！
しかし」

孫権「ですが！」

孫策「……っ！」

孫権「私はもう、祭の時のような思いはしたくなかったのです！」

孫権はそう強く言った。

孫策「それは、私達があそこで助からないと思ったの？」

これに孫策もそう言ったのだが

孫権「祭の時もそうだったではありませんか！」

孫権に反論されると

孫策「……ぐっ。」

黙らざるを得なかった。

孫権「姉様は、ここを建業だと仰いました。……ですが、陽平関は建業ではありませんん！」

孫策「それは気持ちの問題で……！」

孫権「それでもです！」

孫権「確かに陽平関は漢中の要です。重要な拠点なのも理解しています。けれど姉様が・・・孫伯符ともあろうお方が、死に場所として選ぶ場所ではありません！」

孫権「それに・・・私は孫仲謀であつて、曹孟徳でも、曹子文でもありません！」

孫策「・・・。」

すると

孫尚香「もう・・・やめてよお。」

孫策「・・・シヤオ。」

孫尚香が入ってきた。

孫尚香「ぐすつ。・・・皆、無事だったんだよ？なら、それで良いじゃない。」

孫尚香「関なら、取り返せるよ・・・。でも、死んじやつたら・・・取り返せないん

だよ。」

孫尚香「・・・祭みたいに悲しい思いをするのは・・・もう沢山なんだから・・・ひつく。」

そう言つて、孫尚香は泣いてしまった。

程普「シヤオ様・・・。」

張昭「よしよし。・・・よう仰つて下さいましたな、シヤオ様。」

これに、程普と張昭は、彼女の傍に寄った。

孫尚香「……ひつく……ぐすつ。粹怜、雷火あ……。」

周瑜「雪蓮。その責なら、私にもあるよ。蓮華様を罰するというなら、補佐に付いた私も……。」

孫策「……。」

張昭「そうですな。儂や包にも責はある。」

太史慈「雪蓮。」

孫策「……ああもう。分かつてるわよ。私だつて……分かつてるんだから。」

孫策「……はあ。趙雲達も助かったわ。」

趙雲「いや。我々も自らの成すべき事をしたまでだ。」

孫権「それと……すまない。決して陽平関を軽んじたわけではないんだ。」

敵顔「それも分かつておる。確かに陽平関は要だが、孫伯符や呉の諸將の墓標とするにはいささか物足りん場所だ。」

敵顔「何より……お主達がここで死ぬと悲しむ者が……小蓮以外にもおるしう。」

孫権「……ありがとう。」

魏延「で、この後はどうするんだ？ 今度はこつちから陽平関を攻めるのか？」

趙雲「奇襲で邪魔する程度ならともかく、流星にこの手勢では、曹彰に返り討ちに遭

うだろう……。それに、漢中も取り戻すだろう。我々の目的は果たせし、ひとまず成都まで戻るのが良からう。」

孫策「一緒に持つて帰るのが、関を陥とされた凶報っていうのは……。どうにも締まりが無いけどね。」

趙雲「構わんだらう。皆が無事に戻るのが、桃香様にとって何よりの吉報となるだらう。」

そう言つて、孫策達は成都へ撤退したのであった。

そして、漢中は全て純に取り返されてしまったのであった。

89話

益州・成都

陽平関陥落、そして漢中を失った事は、すぐ成都に伝わった。

劉備「そっか……。孫策さん達は無事？」

孫乾「はい。孫策様達は無事撤退。救援に駆けつけた星様と焰耶様もご無事です。」

劉備「そうか……。良かった……。」

この知らせに、劉備はホツとした表情になった。

鳳統「……。桃香様。」

劉備「うん……。大丈夫……。」

鳳統「……。」

すると

買駆「桃香！」

買駆が慌てて入ってきた。

劉備「どうしたの！」

買駆「朱里が……！朱里がまた血を吐いて倒れたわ！」

劉備「え!？」

鳳統「朱里ちゃんが……!？」

それを聞いて、劉備と鳳統は買駆と一緒に慌てて諸葛亮の部屋に走って行った。

買駆「ここ最近は、特に発作も無く、落ち着いていたんだけど……!」

買駆「今日、陽平関陥落の知らせを聞いた時、『私の生涯最大の過ちでした。曹彰さんの軍才に抗った事を。この後、桃香様が理想を叶え、大陸に泰平の世が訪れるのを目にする事は無いでしょう。』と言って涙を流した後、突然血を吐いたんだよ！」

買駆「医者の話では、恐らくはもう助からないと……!」

劉備「そんな……!」

鳳統「朱里ちゃん……!」

そして

諸葛亮の部屋

劉備「朱里ちゃん！」

部屋に入ると

董卓「桃香様……。」

董卓がおり、劉備と鳳統の顔を見るや、首を横に振った。

劉備「……！」

鳳統「……！」

それを見て、劉備と鳳統はフラフラした足取りで寝台に近付いた。

そこには

諸葛亮「……。」

明らかにやつれ、弱り切った状態で寝ている諸葛亮がいた。

劉備「朱里ちゃん……。」

鳳統「朱里ちゃん……。」

すると

諸葛亮「桃香様・・・雛里ちゃん・・・ゴホッ！ゴホッ！」

諸葛亮が起きたが、すぐに咳き込んだ。

劉備「朱里ちゃん！しっかりと！」

鳳統「朱里ちゃん！」

それを見た劉備と鳳統は、諸葛亮の手を取った。

諸葛亮「桃香様・・・雛里ちゃん・・・私はもう駄目です・・・。」

諸葛亮「黄巾の乱の時から・・・今に至るまで・・・多くの戦にて・・・献策を出し・・・

勝利を重ねてきました。」

諸葛亮「・・・けれど・・・もう私は・・・お力になれなくなりました・・・。」

劉備「そんな事言わないでよ、朱里ちゃん。絶対良くなるから！ね！」

鳳統「・・・。」

そう言つて、劉備は励ましたが、諸葛亮は首を横に振つて

諸葛亮「・・・私が誰より・・・分かっておられます。私はもう・・・良くなる事は・・・

ありません・・・。」

そう言つた。

劉備「そんな事ない！必ず良くなるから！だから・・・死なないで・・・朱里ちゃん

！」

諸葛亮「桃香様……。」

鳳統「朱里ちゃん……。きつと良くなるから……。だから……。弱気になつちや駄目だよ……。！」

諸葛亮「雛里ちゃん……。」

その時

蜀軍兵士A「劉備様！」

蜀の兵士が報告に参つた。

買駆「僕が聞くよ。どうしたの？」

それを買駆は、代わりに話を聞いた。

蜀軍兵士A「関羽率いる曹彰軍別働隊十万が、荊州を全て平定しました。そして、その勢いのまま我が国に侵攻し、北の曹彰五十万と成都にて合流するかと！」

それは、荊州が全て曹彰軍の手に落ちたという報告だった。それを聞いた買駆は買駆「……。分かつたわ。下がって。」

と言い、下がらせた。

劉備「そんな……。！」

鳳統「想像以上です……。！」

それに、劉備と鳳統は、驚きを隠せなかつた。傍で聞いていた諸葛亮は

諸葛亮「桃香様……曹彰さんはやはり……武勇と軍才に優れた……まさに戦の天才です……。私や雛里ちゃん、周瑜さん、魯肅さんのような……軍師の考えや……予測を遙かに上回ります。」

そう言つて、劉備を落ち着かせた。

諸葛亮「桃香様……。」

劉備「何、朱里ちゃん？」

諸葛亮「既に蜀は風前の灯火です……。しかし……。何があつても……。決して屈してはなりません。」

諸葛亮「最後まで……。曹彰さんに抗つて下さい……。そして……。必ず勝つて……。桃香様ご自身が描いた……。理想の世を……。築いて下さい……。」

それを聞いた劉備は

劉備「分かつたよ、朱里ちゃん……。」

涙を流して、そう言つた。

諸葛亮「雛里ちゃん……。」

鳳統「朱里ちゃん……。」

諸葛亮「桃香様の事……。宜しくね。」

鳳統「……。うん。」

それを聞いた諸葛亮は

諸葛亮「……これで……安心だね……。」

と言った。そして

諸葛亮「……口惜しい。」

諸葛亮「……口惜しいです。」

と諸葛亮は突然言った。

劉備「何がなの、朱里ちゃん？」

鳳統「どうしたの、朱里ちゃん？」

劉備「朱里ちゃん、何が言いたいの？」

それを聞いた劉備と鳳統は、そう尋ねた。

すると、諸葛亮は腕を掲げて

諸葛亮「……天は諸葛亮を生みながら……何故曹彰も生んだのですか……!!」

涙を流しながら声を絞り出した。

劉・鳳・董・買「「!?!」」

それを聞いた劉備達は、驚きの顔をした。

そして

パタリ

劉備「朱里ちゃん!？」

鳳統「朱里ちゃん．．．!？」

劉備「朱里ちゃん!!？」

董卓「朱里ちゃん．．．!？」

買駆「朱里!？」

諸葛亮は二度と口を開く事無く、息を引き取った。

鳳統「お願い．．．!! 答えてよ．．．朱里ちゃん．．．!!」

董卓「朱里ちゃん．．．!」

買駆「朱里．．．アンタ．．．早過ぎるよ．．．!」

それに、鳳統は事切れた諸葛亮にしがみついて涙を流し、董卓は目を閉じながら、買駆は悔しさを押し出した顔で拳を握り、血を出すのではの力で唇を噛みしめながら涙を流した。

その横で、劉備は呆然としたまま諸葛亮が使っていた羽毛扇を取って

劉備「朱里ちゃん．．．!!」

それを強く抱き締めながら大粒の涙を流した。

こうして、『臥龍』と言われた軍師諸葛亮は、その大志を果たせぬまま、その生涯を閉じたのであった。

90話

益州・成都

諸葛亮が亡くなった事は、成都に残っていた張飛達含め、陽平関から撤退した呉軍と、救援に駆けつけた趙雲と魏延にすぐに伝えられ、蜀の連中は皆、悲鳴と嗚咽の声を上げた。

趙雲「朱里……。」

張飛「朱里！うわあーっ!!」

糜竺「うわーん!!」

糜芳「朱里ちゃん!!」

孫乾「朱里さん……。」

訃報を聞いて、特に付き合いが長い趙雲と張飛に孫乾、そして糜竺と糜芳は、大きく悲しんだ。

黄忠「朱里ちゃん……!」

「敵顔「何故じゃ！何故若い者が先に死に、儂のような老いぼれが生き長らえるのじゃ！」」

公孫賛「朱里……くっ！」

劉備「ぐすつ……朱里ちゃん……！」

鳳統「……。」

黄忠も涙を流し、敵顔と公孫賛は、地面を叩いて泣き、劉備は、ずっと諸葛亮の羽毛扇を抱き締めながら涙を流し、鳳統はとんがり帽を更に深く被りながら唇を噛みしめ、静かに涙を流していた。

孫策「諸葛亮……。」

周瑜「『天は諸葛亮を生みながら、何故曹彰も生んだのですか』か……。諸葛亮……無念だっただろうな……。」

孫権「諸葛亮……何で……！」

孫尚香「ぐすつ……諸葛亮……！」

甘寧「……。」

呂蒙「そんな……！」

陸遜「諸葛亮さん……。」

魯肃「どうして……諸葛亮さんが……！」

張昭「諸葛亮の無念さが籠もった言葉じやな……。」
程普「……ええ。そうね……。」

呉の連中も、諸葛亮の死に同情し、涙を流す者もいた。

買駆「……天は非道だね。」

董卓「詠ちゃん？」

買駆「志半ばなのに……。朱里は……。死んでも死にきれなかつただろうね。桃香の理想のため、邁進してきたんだから……。」

董卓「そうだね……。朱里ちゃん……。」

曹彰軍

諸葛亮の死の情報は、すぐに純の耳にも入ってきた。

純「……そうか。諸葛亮が……。」

稟「はい。以前から病を患っており、最期を遂げたとの事です。」
それを聞いて

純「・・・そうか。」

純は、非常に惜しむ顔でそう言った。

稟「純様・・・？どこか惜しんでるように感じますが・・・。」

それを聞いていた稟は、純にそう言った。

純「そうか。そう聞こえたか・・・。」

稟「はい・・・。」

すると、純は夜空を見上げて

純「立場、主君は違えど、主のため、大志を内に秘め、その命を懸けて戦ってきたんだ。それに少し、同情しただけだ・・・。」

そう言った。

稟「純様・・・。」

純「悪い、らしくねー事言っちゃったな。さあ、戻ろう、風邪引くぞ。」

そう言い、純は天幕に戻ったのだった。

稟（その想いは、常に戦場の最前線で武を振るっておられる純様のみが感じられる戦への情熱なのかもしれませんね・・・。）

稟（やはり、純様は生まれながらの武人であると同時に、生まれながらの霸王でもあるのでしよう……。ならいつその事……）

その時、稟は一瞬ある事を考えたのだが

稟（……いや、止めましょう。これを純様に求めたら、純様は怒り悲しんでしまいます……。あのお方には、いつまでも笑顔でいて欲しいものです……）

その考えを封印したのであった。

91話

曹彰軍

秋蘭「純様。全軍、集結致しました。」

純「・・・分かった。」

先日愛紗率いる別動隊と合流した純は、ある地にて、全軍を集結させた。純の目の前には、出陣の時に見た、銀色の荒野そのものだった。そしてその兵士達は、皆純の言葉を待っていた。

純「皆聞け！」

その声と同時に、兵達は己の武器を構え直す。

純「生きて我が国へ、帰れると思うな！」

純「相次ぐ戦乱によって、何度苦難に遭ったか。自分の近くの身内や身の回りの知人が、巻き込まれていったか！」

純「どれ程・・・乱世を憎んだ事か！」

そして、周りを指差し

純「ここにいるお前達は、数々の死線をくぐり抜け、地獄の底から這いあがってきた者達だ！」

と言った。

純「成都是、すぐそこだ。我々が今まで戦ってきた中で、最も手強い敵が、我らを待ち構えている。」

純「戦うのが怖い者は前に出る。離脱を認める。」

そう言った純だが、誰一人離脱しなかった。

それを見た純は

純「・・・良し！」

満足した表情でそう言った。

純「誰かが言っていた。今回の敵は、強いと。」

純「では俺達は？」

純「俺達のもっと強い！確かに、奴らには趙雲、張飛、孫策を筆頭に名将、知将がい
る！」

純「だが戦で肝心なのは、それは信念と勇気なのだ！恐れる事はねー！」

純「今まで生きてきたのは、この時のためだ！蜀を？み込み、我が姉曹孟徳が王とし

て君臨している曹魏の大陸統一を果たし、民が望む泰平の世を築く！その礎として、誇り高き曹魏の兵らしく、命を懸けて戦い、死のうではないか！」

愛紗「純様と共に、勝つまで戻らぬ！」

「勝つまで戻らぬ！勝つまで戻らぬ！勝つまで戻らぬ！勝つまで戻らぬ！勝つまで戻らぬ！勝つまで戻らぬ！」

そして

純「我々は、負けて戻るつもりはねー！ここから成都まで、三日を要する。食料は三日分のみ支給する。無論俺もだ！」

そう言った純は、薪をとって火をつけ、兵糧に投げた。

それを見た兵士達も

曹彰軍兵士「うおーっ！」

ガシャーン！

釜を壊したり、兵糧を燃やしたりした。そして、純率いる五十万の兵は、成都に向かつて怒涛の進撃を始め、そして遂に、成都に到着したのだった。

成都

稟「純様。全軍の展開、完了致しました。」

純「伏兵の気配はどうだ？」

稟「今のところありません。しかし、相手は鳳雛鳳統と周公謹。警戒を怠らないよう、徹底させています。」

純「うむ……。」

翠「なあ……純殿？」

純「ん？どうした、翠？」

翠「劉備達は……籠城戦を挑んでくると思うか？」

この問いに

純「ねーな。」

純はあっさり即答した。

純「籠城戦は本来、時間稼ぎのために行くものだ。それは応援を待ったためや、こちらの兵糧が尽きるのを狙うなど様々だがな。とはいえ、我らも兵糧はあと一日だけだがな。」

稟「けれどそれは、向こうも同じ。むしろ状況は城内の方が過酷でしょう。」

翠「成程……。」

純「それにあの劉備の事だ。成都の民まで巻き込む事はしねーだろう。」

風「そうですねー。」

稟「各地でこの動きに乗じた反乱があるという情報もありませんし、対応出来る兵も各地に配備済みです。黄巾規模の反乱なら、十分に制圧可能です。」

純「それに、そんな指揮が出来る人材は、もう三国のどこかに加わってるさ。」

翠「……確かにそうだな。」

その時

愛紗「純様。成都の城門が開きました！敵部隊、各方向から展開していきます！」

呉蜀連合軍が、陣を展開したとの報告が入ってきた。

純「そうか。劉備達は？」

愛紗「まだ……いえ、出て来ました！趙雲、張飛達も付いているようです！」

純「……そうか……なら、何人か付いてこい。」

これに

愛紗「はっ！」

秋蘭「ならば、私も。」

翠「あたしも行くぜ！」

愛紗と秋蘭、そして翠が反応した。

純「分かった。残るお前達は敵の陣形に応じて配置を調整しておいてくれ。楼杏、稟、風、指揮は任せたぞ。」

楼杏「はい。」

稟「御意。」

風「御意。」

そして、純は馬に乗って行き、劉備と向かい合った。

純「・・・ようやく出てきたな、劉備。」

劉備「曹彰さん・・・。」

劉備「やっぱり戦うんですか・・・？」

純「ああ、そのためにここまで来たんだからな。」

劉備「あなたのやり方は間違っています！そうやって、力で国を制圧して、人を沢山殺して・・・それでは、この大陸に平和が来るとは思えません！」

劉備「だから・・・やめませんか？」

純「前にも言ったと思うが、その言葉を言って良いのは、我が軍より多い兵力を連れてきて、俺達を打ち倒した後だけだ。」

劉備「・・・。」

純「それに、俺は一日も早くこの大陸に国境をなくし、あるべき姿を取り戻したいだけ。それだけだ。」

純（それで例え、俺がこの大陸に住む全ての民に恨まれても構わねー……。姉上の理想が叶うなら……。）

劉備「……。これでやつと分かりました。あなたは正義じゃない。自分の欲望のためにお姉さんの曹操さんを利用して人を殺す……」

その時

秋蘭「黙れ劉備！言わせておけば……！」

純の傍にいた秋蘭が、劉備にそう怒鳴った。

純「秋蘭。」

愛紗「止めろ秋蘭！お前らしくないぞ！」

翠「おい、秋蘭！」

それを純は勿論、愛紗と翠も止めたが

秋蘭「いいえ！私達の純様を……。絶対に許せぬ！どのような罰も受けます！言わせて下さい！」

と秋蘭はそう言った。

純「……。分かった。」

愛紗「純様！」

翠「純殿！」

それを聞いた純は、秋蘭を許した。

秋蘭「ありがとうございます。」

そして、秋蘭は劉備に向き直った。瞳には涙を溜めたまま。

秋蘭「お主に純様の何が分かる！何を知っている！お主が言うように話し合いで解決出来る事は確かにある。だが、それだけでは無理な場合もある。人の数だけ真実があり、其々に譲れぬ信念があるからだ！それを知った風に言うな！」

劉備「それは・・・」

秋蘭「よく聞け！人は善し悪しもそうかもしれないが、力のある人間に付いてくる。だから身体を張って戦い、互いに命という代償を払い勝利し、力を示すのだ！これが現実なのだ！」

秋蘭「劉備、現実を知らぬ、この大馬鹿者がっ！理想だけで世の中が変わるのなら：人々が救えるのなら、誰が戦など起こすのだ！お主が理想だけを夢見て自分の周りだけで楽しく暮らしている間、純様は華琳様のため、民のために自らの手を血に染めていたのだ！」

秋蘭「お主など、純様と対等に戦う資格などないっ！己の無知で正義を振りかざすな

！」

秋蘭は、涙を流しながらそう劉備に言った。

愛紗「秋蘭……。」

翠「お前は……。」

この姿に、愛紗と翠は何とも言えない表情で見ていた。

劉備「……そんな正義なんかじゃない！曹彰さん……私が倒れてもあなただけは倒してみせる！私はあなたを、あなたのお姉さんの曹操さんを認めない！亡くなった朱里ちゃんのためにも！そして、無力な人達の居場所のためにも！」

しかし、劉備はそう言い、純達に敵意の目を向けたままそう言った。

純「……そうか。ならば、話は終わりだ。これより先は、戦にて決着をつけよう。」

純「愛紗！」

愛紗「御意！」

愛紗「全軍戦闘態勢！我が曹魏の行く末、この一戦にあり！命を惜しむな！名誉を……そして、我らの歴史に刻まれぬ事を惜しめ！」

翠「共に戦い、誇りと共に、命を懸けて戦おう！」

秋蘭「この戦い、遙か千年の彼方まで語り継がれるであろう！」

純「曹魏の牙門旗の下、最後の戦いを行う！各員奮励努力せよ！」

劉備「星ちゃん、お願い！」

趙雲「御意！」

趙雲「曹魏の野望を食い止められる者は、最早我ら蜀しかおらぬ！敵は強大！されど我らの団結をもってすれば、打ち破れぬ物は何もない！」

趙雲「全軍戦闘準備！我らが子孫に永久の平安をもたらすために！」

劉備「劉旗の下、私達は私達の理想のために戦う！皆、力を貸して！」

鳳統「桃香様！すでに準備は出来ています！」

劉備「うん！第一陣は、桔梗さん、焰耶ちゃん・・・お願いするね。」

嚴顔「うむ。先陣は任せておけ。」

魏延「この戦いが最後の戦いなら、今まで奴らに受けた借りと屈辱の全て、この一戦で晴らしてみせます！」

甘寧「蓮華様、行つて参ります。」

孫権「ええ。思春も明命も、気を付けて。」

周泰「はいっ！任せて下さい！」

麋竺「穩、指揮はお願いねー！」

陸遜「はい！任せて下さい！」

秋蘭「純様、敵陣が動き出しました！第一陣の先陣は……魏延！」

純「分かった！翠、攻撃しろ！」

翠「了解したぜ！」

孫策「桃香！巻き込まれるわよ！」

劉備「うん！」

魏延「なら、行くぞ！」

翠「さあ、来な！あたしが相手してやるぜ！」

「総員、突撃ーっ！」

そして、最終決戦が始まったのであった。

9 2 話

純率いる魏軍と呉蜀連合の最後の戦が始まり、第一陣同士が激突した。

魏延「こんな所まで来やがって、もう逃げ帰れると思うなよ！」

霞「まーた使い捨てのワンコロかいな。ご苦労さんなこつちやな。」

魏延「それで桃香様のお役に立てるならば本望だ！」

霞「なんやこんなんばっかやな・・・もうちよつと命は大切にされた方がええで。」

魏延「余計なお世話だ！その口今すぐに閉じさせてやる！」

こうして、最初の激突が始まった。

孫乾「敵の足は止まっています！狙い撃ちを！」

愛紗「ううむ次からうつつとうしい！」

翠「本当だぜ！」

霞「お前からここが踏ん張り所やでえ！とにかく前進を続けるんや！」

戦いは、呉蜀連合の第一陣の粘りと

愛紗「どうした、もうお終いか？」

翠「あたし達はここに健在だぜ！」

魏延「何なんだこいつら・・・これだけの攻撃を、化け物か？」

凧「決死の覚悟でここにいるのは、お前達だけではない！」

真桜「せやせや！ワンコ口の言う取ったとおり、ウチらかてもう引き返されへんところまできとんのや！」

稟「もう後方を気にする必要はありません！全軍前へ！」

愛紗と翠、そして霞等の猛攻により、一進一退の攻防となった。

魏延「死ねええええい！」

翠「あたしを舐めるなっ！」

ガギン！

魏延「ち・・・っ！流石錦馬超！」

翠「そんな一撃、来る事さえ分かってれば、怖くないぜ！」

魏延「くっ・・・！」

呉蜀連合

周瑜「よし。今のところは順調か……。」

鳳統「ですが、油断は出来ません。思った以上に敵が崩れていませんし……。」

陸遜「兵力を集中するのではなく、部隊を増やして各個撃破……ですかあ。口にするれば簡単ですけど、綱渡りですね。」

この作戦に、陸遜は苦い顔をした。

周瑜「だが、兵数と練度で負けている我らが唯一勝っているのは有力な将の数だけだ。

相手の精強さ、指揮の速さ、相手の思考も、赤壁で嫌と言う程思い知っているからな。」

鳳統「我々軍師の指揮の速さで勝てないなら、現場の動きと連携でそれをねじ伏せてもらうしかありません。……軍師としては情けない限りですが。」

周瑜「とはいえ、これが現実だ。受け入れるしかあるまい。その上で勝つ手段を見付けられたなら、軍師の勝負もこちらの勝ちだ。」

鳳統「ただ、向こうもこの状況は把握しているでしょうし……あの郭嘉さんがどういう手を打ってくるか。」

周瑜「そうだな。それまでに……曹彰のいる本陣を裸に出来れば良いのだが。」

鳳統「そうなれば……私が、先陣で指揮を取ります。」

この鳳統の発言に

周瑜「雛里……。」

陸遜「雛里ちゃん……。」

周瑜と陸遜は驚いた。

鳳統「このくらいはさせて下さい、冥琳さん、穩さん。戦場との距離が近ければ近いほど、指揮も早くなるから。それなら私だって……」

これに鳳統はそう言った。

周瑜「……分かった。実際、その程度はやらねばあの曹彰には勝てん。本当なら私が行きたい所だが……」

鳳統「いえ、冥琳さんと穩さんは、ここで指揮を取って下さい。呉の皆さんには、あなたの指揮が必要ですから。」

陸遜「雛里ちゃん……。」

冥琳「……死ぬなよ、雛里。」

厳顔「でえええいつ！」

ドガン！

霞「どわっ!?ま、またアレや・・・!」

真桜「・・・ああ、アレか。こないだ姐さんが言うつつた、バカでかい一撃言うんは。」

真桜「つつーかあんな受けたんですか!よう助かったなあ・・・。」
すると

甘寧「余所見をしている暇などないぞ!張遼!」

甘寧が霞を攻撃してきた。

霞「・・・ちっ!そんなんしてへん!ちつと作戦会議しとつただけや!」

甘寧「それを余所見と言うのだ!」

ガギン!ガギン!

そして

孫尚香「思春!向こうの連中は何とか片付けたわよ!」

孫尚香が参戦してきた。

甘寧「小蓮様!亞莎!」

真桜「くそっ!こつちに気い取られとる間に!」

霞「真桜!もうこつちはええ!あいつらを何とかしい!」

真桜「せやかて姐さん!」

霞「あのちっこいのを好きに動かしたる方が問題や！動けるあれがどんだけ面倒くさいか、よう分かつとるやろ！」

霞「それに、指揮や穴掘りならともかく・・・戦働きでお前・・・言う程役に立つてへんで。」

これに

真桜「な・・・なんやて・・・！」

真桜は驚いてしまったが、霞は構わず

霞「つちゅーわけやから、ここは気にせんでええ！敵将の一人や二人、ウチが全部片付けたる！」

そう真桜に言った。それを聞いた真桜は

真桜「・・・なら姐さん、死になや！」

と霞に言った。

霞「死ぬかアホ。早よ行けえ！」

そして、真桜はその場を後にした。

敵顔「成程・・・流石、名高い遼来々というわけか。その心意気や良し！」

甘寧「とはいえ、こちらも早めに片付けねばならん。まだまだ敵は多いぞ、桔梗。」

霞「言うたな・・・！」

そこへ

周泰「思春殿！お手伝いします！」

周泰も加わった。

霞「げっ、三人かいな？」

甘寧「ああ。卑怯と言うのならいくらでも言うが良い！だが私の刃、そのような言葉では毛ほども揺るがんど！」

糜竺「こつちだよー！」

糜芳「こつちかもー！」

風「ええいつ、鬱陶しい！」

沙和「それより風ちゃん、敵が……！」

秋蘭「総員、敵に圧を掛けろ！相手の好きにさせるな！」

そこへ

蘆植「敵の攻撃は回避して構わないわ！流れを外に受け流して！」

孫乾「お二人とも！矢の合間に留まらずに、一気に間合いを詰めて下さい！」

秋蘭「・・・おのれ。」

凧「増援か！」

増援が来た。

沙和「うう、これじゃ押し負けちゃうの・・・！凧ちゃん！」

凧「ああ。せめて、秋蘭様だけでも自由に動ければ・・・！」

凧「総員、もう一回・・・」

その時

??「突撃しなさい!!」

ある部隊が、蘆植達の兵を一撃で逆転させた。

麁芳「えっ!？」

蘆植「そんな・・・たった一撃で、こちらが押し負けるですって・・・!？」

その隊を率いるのは

楼杏「秋蘭さん！凧さん！」

楼杏の率いる部隊だった。

秋蘭「うむ！弓隊、この隙を逃すな！」

凧「歩兵隊も一気に突き崩せ！」

これにより、状況が逆転した。

沙和「ありがとうなの、楼杏さん！」

楼杏「まだ相手に隙を作っただけよ！油断しないで！」

蘆植「・・・楼杏さん。」

楼杏「・・・久し振りね、風鈴さん。」

蘆植「まさか、このような形で会うなんて・・・。」

楼杏「これも天の定めよ。」

蘆植「・・・そうね。」

曹彰軍本陣

その頃本陣では

稟「中央の翠には、引き続き攻撃を続けさせ、そこに愛紗を加えて、魏延を範囲で制圧するように。」

稟「左翼はこのままでは崩れてしまいます。一時撤退し、後続と交代。こちらの兵に

は十分余裕があります。焦る事はありません。」

稟「右翼は桜杏殿が合流したならば、凧と沙和の部隊は下げて下さい。真桜の援護に回って、その後の判断は三人に任せるように。」

曹彰軍兵士「はっ！」

稟「続いて……」

稟が全軍の指示をしており

凧「純様。崩れた部隊の援護、一通り終わりました。」

純「……分かった。」

戦場の出来事を、純は腕を組んで座って泰然としながら聞いていた。

凧「しかし向こうの動き、中々の早さですね。」

純「恐らく軍師からの指揮ではなく、現場に動きを任せているのだろう。流石だな。」

純「稟……」

そして、純は稟を呼ぼうとしたが

稟「……。」

純「稟!？」

稟が頭を押さえて机に手を掛けていたので、それを見た純は、すぐに駆け寄って稟を抱き寄せた。

稟「だ、大丈夫……です。純様……！」

純「大丈夫じゃねーだろ！ほら、座れ！」

しかし

稟「か……構いません。純様。」

稟はそう言つて、純の頬に手を添えた。そして

稟「純様と将兵が戦場で命を賭けるように、私もここが命の賭け所なのでしよう。……
もとより、生きて帰れない事など承知の上です。」

そう言つた稟は

稟「伝令兵！」

純から離れて伝令兵を呼んだが

稟「あ……。」

すぐにふらついた。

純「稟！」

それを見た純は、再び稟を抱き寄せた。

純「風、稟の介抱を任せた！稟の代わりに俺が全軍の指揮を取る！」

そして、稟を抱き抱えた状態で風に伝えた。

風「は、はいですよー！」

純「稟、お前は休め。頼む。」

稟「・・・分かりました、純様。」

そう言った稟は

稟「んっ・・・。」

純の首に手を回して口付けした。

純「・・・風。稟を頼む。」

風「はいー。」

そして、風は稟と一緒に後方に下がり、全軍の指揮は純が取ったのだった。

ドガーン！キーン！ガギン！

霞「・・・ちっ。流石に三人はキツいなあ。」

敵顔「そう言いながらしっかり耐えきっているではないか。感心するぞ！」

周泰「ですが、もう一息です！思春殿！」

甘寧「ああ！張文遠、その首・・・貫い受ける！」

敵顔「というわけだ！トドメ・・・！」

そう言って、霞にトドメを刺そうとした。

霞「そこで三人来るとか血も涙もないな！けど・・・っ！」
その時

ガギン！

甘寧「・・・っ！」

曹彰軍武将A「間に合いました！」

援軍がやって来て、甘寧の攻撃を防ぎ、霞を守った。

敵顔「・・・ちっ、応援か！」

霞「・・・やれやれ、また死に損のうたか。」

曹彰軍武将A「入らない方が良かったですか？」

霞「いや。まだ遊べるっちゆう事やからな。あんがとな！」

曹彰軍武将A「なら・・・ここから反撃しましょう！」

愛紗「翠、無事か！」

翠「おお、愛紗か！回りで暴れている連中を叩き潰してくれ！頼む！」

愛紗「・・・稟の言う通りだな。任せろ！」

そう言って、愛紗は馬を走らせてその場を後にした。

翠「良し。これでやりやすくなったぜ！」

魏延「・・・なんだ、随分余裕じゃないか。」

翠「当たり前だ。兵の事に気を取られてたら、些かやりにくいからな。」

翠「それに愛紗は、武勇だけじゃなく、指揮能力も長けているしな。」

魏延「・・・成程。」

翠「さあ、続きといこう！あたしはまだまだやれるぜ！」

魏延「・・・ふっ。面白い！」

第二陣

孫権「敵もこちらの動きに対応し始めたか・・・そろそろかしらね。」

鳳統「はい。向こうが流れを取り戻そうとした時こそ、さらに追撃を打ち込む好機となりますから。」

孫権「・・・けれど、あなたまで前に出る事もないでしょう、雛里。」

鳳統「いえ・・・相手の指揮と速度と精度に勝つ最善の策は、これが一番ですから。」
孫権「命の保証は出来ないわよ。」

鳳統「承知の上です。」

鳳統（・・・どうか、力を貸して下さい。祭さん。そして、朱里ちゃんも、私に力を貸して。）

すると

魯肅「あの一。それは良いですけど・・・ええつと、雷火様もお出になるんですか？」
魯肅は張昭にそう尋ねた。

張昭「総力戦というなら、儂とて後ろにおるだけというわけにもいかんだろう。これでも大殿が当主であつた頃はな・・・」

そう張昭が言っていると

魯肅「それってただの年寄りの冷や水・・・」

魯肅が何か言つたので

張昭「なんじゃと！」

張昭が反応した。

魯肅「ひやわわ！こ、これでも包、雷火様を心配してですねえ！」

張昭「まあ、祭ほどの無理はせんわ。蓮華様、後詰めは我々で致します故、存分にお

働き下さいませ。」

孫権 「ええ。．．．でも、雷火も無理はしないでね。」

張昭 「何と、蓮華様もですか．．．。」

魯肅 「ほ、ほら、蓮華様！そろそろ出ないと、流れを完全に向こうに取られちゃいますよ！今出れば、ちょうど向こうの流れを折れますから！」

孫権 「そうね．．．。ならば我々、第二陣本隊もこのまま一気に突っ込むぞ！」

鳳統 「はいっ！」

そして

孫権 「聞け！孫呉、蜀の勇者達よ！」

孫権 「我らは二陣、戦の要！先達の屍を踏み越え、戦い疲れた敵を更に蹂躪する事が務め！」

孫権 「命の力を刃に変えて、流れを変えよ！そして、粉碎せよ！曹魏の旗を、『黄鬚』曹彰をつ！」

孫権 「全軍、突撃いいいっ！」

そして、第二陣同士が激突したのだった。

93話

第二陣同士が激突した。

孫権「曹彰……！」

純「孫権か……。」

孫権「ここで……あなたを討つ！」

純「……どうやら、あの時の出会いから吹っ切れたようだな。」

純「だがな、俺はこの戦、負けるわけにはいかねーんだよ。」

純「第二陣、出撃しろ！最初から全力で行くぞ！」

孫権「相手は勢いに乗っている。正面から当たらず、目先をかわしていけ！」

鳳統「はい。敵が恐れているのは分断・挟撃される事。必ずこちらに合わせて向きを

変えてくる筈です。」

魯肅「う、後ろにはまだ劉備さん達がありますし、万一何かあってもなんとかしてくれ

ます！……よね？」

張昭「戦は一人で行うものではない。最後にモノを言うのは結束力。つまり信頼

じゃ。」

愛紗「フン、いかな計略があろうとも、全て返り討ちにすればそれで済む事だ！」

翠「それに、結束手なら、あたし達も負けてないぜ！」

愛紗「そうだ！どちらが強いか、ここで証明してくれる！」

呉蜀連合第二陣も良く粘り

愛紗「奴らを抜ければ後は孫権だけだ！突撃イー！」

張昭「愚か者が。我らが正面から戦うと思うてか！」

鳳統「今です！お願いします！」

曹彰軍武将A「な、何だ!?地面から槍が！」

純「まあ、流石に無防備で待つていうわけじゃねーよな。」

孫権「敵の出足は鈍ったぞ！かかれー！」

地面から槍が出てくるという罠を仕掛けたりした。

呂蒙「相変わらず強いですね・・・しかし想定外の範囲内です。」

鳳統「はい。そろそろ合図を。」

また

霞「なんや、伏兵がまだおつたんか！」

純「準備万端なんだろ。それくらい、流石の俺でも予想したわ。」

風「後方との連携が・・・指揮が乱れます！」

伏兵を仕掛けたりした。

翠「知った事か！あたし達は目の前の敵を倒すだけだ！」

純「翠の言う通りだ！全軍、敵の動きに惑わされるな！隊を整えて仕切り直せ！」
しかし

呂蒙「そんなつ、この計略の嵐の中を抜けてくるなんて！」

孫権「これが州からはるばる遠征してきた曹彰軍の真の力なのか？」

純「俺の力を、そして俺の仲間の力を舐めんじゃねーよ！」

風「仮に全ての能力が互角だった場合、攻め側が優勢になるのが常というものですしねー。」

純「そういう事だ。お前ら、成都はもう目の前だ！残るは劉備とその側近のみ。決戦だ！」

どのような計略も、純達の突破力には耐えきれなかったのだった。

霞「うらあああつ！」

呉軍兵士A「うわあああつ！張遼だ！」

呉軍兵士B「遼来々だ、遼来々……!!」

ドガン!

甘寧「ちっ!それ以上は行かせるものか!」

そう言つて、甘寧は張遼を止めようとしたが

曹彰軍武将A「そうはさせねーぞ!」

ガギン!

甘寧「……ぐうっ!」

甘寧(しかし……曹彰を筆頭に、張遼、関羽、马超などといった武将も強いが、名が知られていない此奴らも何て強さだ……!この力、普通に一万の兵に匹敵する程の強さだぞ!)

純の率いる武将に止められてしまった。

凧「はあああつ!」

ドガン!

厳顔「ちっ……。向こうには気の使い手までおるのか!」

沙和「せいっ！」

カキン！カキン！

周泰「そんな攻撃、一人なら私に効くわけが……！」

沙和「一人じゃないのーっ！」

真桜「せや！ 凧、あれやるで！」

凧「おう！」

そして、三羽鳥はある構えをとって

真桜「行くでええええっ！」

周泰「な、何ですかっ!？」

敵顔「あの妙な槍を先頭に……!?! いかん、逃げる！」

孫尚香「きやーっ！」

凧・真・沙「はあああっ！」

ガギン！ガギン！ガギン！ガギン！ガギン！

呂蒙「な、何ですかこの威力……！」

敵顔「気と絡繰の組み合わせか。中々やりおる。」

連携技を発動した。

真桜「見たかー！これが必殺、噴射暴風攻撃や！」

甘寧「ちっ！動きが止まった隙を狙え！もう一度やられてはたまらんぞ！」

沙和「そうはさせないの！」

ズバツ！

呉軍兵士C「ぐはっ！」

ザシユツ！

呉軍兵士D「ぎやあああっ！」

嚴顔「・・・成程。三人目はそういう役目か。」

沙和「何もしてないわけじゃないの！凧ちゃん、真桜ちゃん、もう一発なのー！」

凧「ああ！」

真桜「おっしやあ！ここは出し惜しみナシで行くでええっ！」

そう言つて、再び連携技を発動したのだった。

曹彰軍本陣

稟「はあ、はあ．．．とりあえず、何とか凌げましたね．．．。」

純「風、稟の状態は？」

風「こちらも、とりあえず何とかー。」

純「そうか．．．。こつちの立て直しは俺がやる。だから、お前は少し横になれ。」
しかし

稟「構いません。」

そう言つて、稟は断つた。

純「何．．．。」

稟「今ここで手を緩めたら、敵は勢いづきます。」

風「稟ちゃん．．．。」

純「稟．．．。」

稟「ですから、ここで緩めるわけには．．．
しかし

純「誰か！稟を本陣から叩き出せ！」

稟「純様!!」

純は稟を下がらせようとした。

純「お前が抜けたくれーで、俺達の手が緩むだと・・・？お前、俺を誰だと思っただよー！」

純「それとも疲労のせいで、そんな判断が付かなくなったのか？」

純「だったら尚更、お前は足手まといだ。・・・そうじゃねーと示したいなら、横になつて休め！」

稟「純様・・・。」

風「稟ちゃん。ここは従うべきかとー。」

純「・・・安心しろ。次の敵が動いたら、お前には存分に働かせて貰うからな。」
これに

稟「すみません。でしたら、少しお言葉に甘えます。」

稟はそう言つて横になつたのだった。

曹彰軍武将B「曹彰様。水、持つて来ました。」

純「ああ。先に稟に飲ませておいてくれ。」

純「それと、何か食う物があれば、それを稟に。」

曹彰軍武将B「承知しました。」

風「・・・純様。次はいよいよ、敵の主力かとー。」

純「そうだな。趙雲や孫策もまだ出て来てねーからな・・・。」

風「……はてさて。」

純「……とはいえ、連中に付き合っつてやんのもここまでだ。俺も出撃する！風はここに残り、待っていてくれ。」

風「分かりましたー。純様、どうかご無事で。」

純「ああ。」

そして、天幕を出た純は、馬に乗って

純「全軍に命じる！出陣する！『黄鬚』曹彰に付いてこい！」
と力強く言った。

「「「おおうっ!!」」

そして、純は最終決戦に向けて、最前線に向かったのだった。

孫権「小蓮は撤退するか……。」

曹彰軍武將C「おらー！余所見してつと……っ！」

ガギン！

孫権「くっ。曹彰軍は曹彰、関羽、張遼、馬超などといった武将だけじゃないのね……」

！」

曹彰軍武将D「食らえっ！」

ガギン！

孫権「ちいっ！こうも強くそして連携を食らったら、私では避けきれない！」

曹彰軍武将C「おらもういつちよーっ！」

孫権「雷火！雛里！」

張昭「蓮華様が彼奴らを食い止めておる間に、何としても曹子文への道を開くのだ！」

鳳統「はいっ！総員、もう一度突撃して下さい！」

しかし

曹彰軍武将E「それはさせるわけにはいかぬな！」

曹彰軍武将E「この先には一歩たりとも進ませてはならぬぞ！何としても曹彰様の所

には行かせるな！踏ん張れ！」

完全に食い止められてしまって、突破出来なかった。

張昭「おのれ！何て強さじゃ！」

鳳統「このままでは……！」

魯肅「れ、蓮華様、雷火様あ！そろそろこつちも限界ですよお！」

孫権「くっ。……せめて、小蓮が下がるまでは持ち堪えたかったけれど。仕方ない、

こちらも撤退する！」

鳳統「蓮華様……！」

孫権「……私だつて悔しいけれど、ここは堪えなさい、雛里。」

鳳統「……分かりました。」

張昭「くっ……！」

魯肅「つていうか、後方にいるとか言いつつ思いつ切り最前線まで来てますよね、雷火様。」

張昭「うるさい！お主はさっさと撤退を指揮せんか！」

そして、純達は呉蜀の第二陣を退けたのだった。

成都前

愛紗「……霞、そちらも生きていたか。」

翠「霞、無事だったんだな。」

霞「真桜らのお陰でな……。……にしても連中、気持ちええくらいの引き際やったな。」

愛紗「……嵐の前の静けさだろうな。」

翠「……そうだな。」

霞「いよいよ本隊かー。」

愛紗「ああ。趙雲に孫策のいるな。」

その時

純「この最終決戦、俺も参加させて貰うぞ。」

純が馬に乗って現れた。

愛紗「純様……。」

霞「おお、純！」

翠「やはり純殿も出るか！」

純「指揮は風達に任せてる。それに、本陣の天幕でじつとしてるより、最前線で武を

振るってる方が俺の性に合う。」

愛紗「全く……純様は。」

霞「にやはは！純らしいで、ホンマ！」

翠「純殿と一緒に戦ったら、やっぱ負ける気がしないぜ！」

純「そうか……。では、お前達の活躍、期待してるぞ！」

愛紗「はっ！」

霞「おう！」

翠「錦馬超の槍の冴え、もっと見せつけてやるぜ！」

そして、純達は陣形を整えたのだった。

蜀軍本陣

趙雲「桃香様。出撃準備、整いました。」

劉備「うん。・・・月ちゃんは？」

趙雲「恋とねねに命じて、詠と共に逃がしました。」

劉備「そっか・・・。」

趙雲「・・・鈴々。この戦、絶対に勝ってみせるぞ！」

張飛「当たり前なのだ！」

劉備「蓮華さん、焰耶ちゃん。城の守りと支援、お願いします。」

魏延「お任せ下さい！星、外と桃香様は頼んだぞ！」

趙雲「ふっ、言われるまでもない。」

孫権「……ええ。姉様達も気を付けて。」

孫策「ふふっ。勿論。」

鳳統「冥琳さん、勝ちましょう！」

周瑜「ああ。それ以外に道はないからな。それに、諸葛亮の為にもな。」

太史慈「大丈夫！私と雪蓮と冥琳がいれば、例え『黄鬚』曹彰でも打ち砕けるって！」

程普「桃香ちゃん、兵が言葉を欲しがっているわよ！」

劉備「はいっ！」

そして、劉備は前に出た。

劉備「皆さん！圧倒的だった曹彰さんとの戦いも、皆の活躍のお陰で今は互角になってます！」

劉備「私達には多くの勇者と、賢者が味方してくれています！だから、この戦いを終わらせるため……皆も、あともう少しだけ力を貸して下さい！」

曹彰軍最前線

純「いよいよ本隊が動き出したか……。」

愛紗「純様。我らに言葉を。」

純「ああ。勿論。」

そう言った純は、居並ぶ兵士達に向けて太刀を突き上げた。

純「聞けい！魏武の精鋭達よ！」

純「長く苦しいこの遠征も、いよいよ最後の一戦となった！」

純「黄巾の乱より始まった大陸の混乱も、反董卓連合、そして官渡から連綿と続くこの戦いによって、いよいよ幕引きとなるだろう！」

純「全ての戦いを思い出せ！その記憶、その痛みと苦しみ、その経験と勇気の全てを、この一戦に叩き付けるのだ！」

純「曹魏全軍大都督としてでは無く、『黄鬚』と呼ばれてる者としてでも無く、この国を愛する者として皆に願う！」

純「俺と共に戦い、勝て！」

純「そして、素晴らしき未来を手に入れ、曹魏の王である我が姉曹孟徳に捧げるのだ！」

劉備 「この大陸の平和のために・・・」

純 「この大陸の繁栄のために・・・」

純・劉 「総員、突撃いいいいっ！」
そして、天下を決める最終決戦が幕を開けたのであった。

94話

最後の戦いが幕を開けた。

純「これが最後の戦いだ．．．余力を残す必要はねー。全軍進撃しろ！」

劉備「ここで曹彰さんを止めないと、何度も同じ事が繰り返される．．．。だから皆、お願い！これを最後の戦いにして！」

こうして、両軍は激突した。

純「うおりやああっ！」

ズバツ！ザシュツ！

蜀軍兵士「ギャアアツ!!」

純「まだまだ！ぬりーぞ！この程度で俺達を止められると思うなよ！」

愛紗「純様につけーっ！」

趙雲「くっ！この戦闘狂共がっ．．．お主らの存在が新たな戦いを呼ぶ！」

秋蘭「対話などでわかり合えるのなら、我々はここに存在せんよ。」

張飛「だからそれを鈴々達で終わりにしようと言ってるのだー！」

翠「そっちが降参すれば今すぐ終わる話じゃねーか！」

嚴顔「これはしたり。しかし信念を失うと死ぬ事には、然程違いは無いと儂は思うのじゃがな。」

純「良く分かってんじやねーか。じゃあこつちがどうするかつても、分かつてるよな?」

鳳統「私達は、一人でここにいるわけじゃない……後ろに沢山の人の思いがある……そして、志半ばで死んじやった朱里ちゃんの思いも……だから退くわけにはいかないんですつ!」

黄忠「そろそろ皆に後を託そうかと思つていたけれど、まだまだ隠居するには早いよ。うね。私も心は同じなのだから!」

そして、戦いは激しさを増し、一進一退の攻防となつたが、段々と形勢が純の方に優勢となつていった。

劉備「曹彰さんつ……もう十分じやないですか。ここで終わりにしませんか?」

純「ああ? 負けんのがこえーのか? ならば白旗でも掲げてみれば良いんじやねーか?」

劉備「……和睦に依じてくれるのなら。」

純「それは無理な話だ。そうなれば俺は、劉備が負けを認めて降伏したと、天下に向けて喧伝するつもりだからな。」

劉備 「どうしてそこまで．．．！」

純 「これが俺と姉上が信じる、最も繁栄に満ちた未来への道筋だからだ。テメーのそれとは相容れねーんだよ。」

劉備 「つ．．．。」

純 「さあて後一押しだ！奮え、曹魏の勇者達よ！お前らの力はこんなものじゃねーはずだ！全ての力を余す事無く、全力を振り絞れ！」

この純の鼓舞に

曹彰軍兵士 「「おおーっ！！」」

曹彰軍の士気は最高潮に上り詰めていき、どんどん呉蜀連合軍を呑み込んでいった。

そして

劉備 「ううっ．．．もう保たないかも．．．っ。」

純 「ふっ。道は拓かれた。さあて、決着をつけにいかうか。」

純達は、呉蜀連合軍の主力である本隊を完全に呑み込んだのだった。

ガギン！キン！ドガン！

愛紗 「くうう．．．っ。流石趙子龍。劣勢でありながら、ここまで抗うか．．．！」

趙雲「当たり前だ！私は桃香様の槍！例え最後の一人になろうとも……我が主の為、負けるわけにはいかのだ！」

愛紗「その志……分からんでもない。しかし貴様の槍、我が主の為に折らせてもらおう……！」

その時

孫策「趙雲、無事か！」

趙雲「雪蓮か！」

孫策が、太史慈と一緒に現れた。

愛紗「……むう。流石にこの二人が加勢となると……！」

霞「趙雲、見付けたでえっ！」

すると今度は

趙雲「ちっ！張遼か！」

霞が現れた。

霞「おうよ！この張文遠から逃げられると思つたら大間違いやで、趙雲！」

愛紗「良いところに来た！霞、趙雲の相手は任せる！」

霞「言われんでもやったるわい！趙雲、行くでえっ！」

孫策「なら私達は……」

愛紗「・・・私が相手をさせてもらう。一度、貴様ら二人とも、戦ってみたかったのだ！」

太史慈「良いわね。そういうの、嫌いじゃ無いわよ！」

孫策「行くわよ、関羽！」

ガギン！ドン！ドガン！

翠「降参しやがれ、チビ！」

張飛「なにおう！そっちこそ降参しろ！」

翠「うりやあああつ!!」

ガギン！

張飛「うりやりやりやあああつ！」

ガギン！ドン！ガギン！

秋蘭「投降した兵士を攻撃する事はまかりならん！しかし、刃向かってくる者には容赦するな！」

凧「秋蘭様、敵の増援が・・・！」

秋蘭「まだ残っているか。だが、これで最後……いや。」

凧「秋蘭様？」

秋蘭「成程。最後に大物が来たな。……黄忠！」

秋蘭の見てる先には

黄忠「夏侯淵！あなた達をこれ以上自由に動かすわけにはいかないの！足止めさせてもらいます！」

黄忠がいた。

秋蘭「……凧、私の前と隊の指揮を任せて良いか？」

凧「勿論です！秋蘭様は、黄忠と存分に！」

黄忠「粹怜さん。隊の指揮は任せて良い？」

程普「ええ。その為に私を連れて来たんでしょ。……相手は違うけど祭の仇、頼むわよ。」

黄忠「……任せて頂戴。」

黄忠「ならば夏侯妙才。いざ尋常に……！」

秋蘭「それはこちらの台詞だ。黄漢升！」

そして、互いに弓を構えたのだった。

鳳統「敵の本陣まで切り開く事は、出来ませんか・・・。」

周瑜「・・・ここまで来て、まだこのような力が残っていたとはな。」

周瑜「包、こちらの予備兵力は？」

魯肅「ひやわわ、もうそんなもの残ってませんよう！」

陸遜「やつぱり蓮華様達が引いた後、一呼吸置いたのが良くありませんでしたかねえ・・・？」

鳳統「あそこで無理に押し込んで、消耗戦になるだけでした。少なくとも、あそこで仕切り直すのは間違いでは無かった筈。」

周瑜「だがそれでも、向こうの流れに乗せられつつあるのが気に入らん。」

呂蒙「それに、相手も戦えば戦うほど、どんどん強さが増していききました。」

陸遜「密偵からの情報ですと、曹彰さんは成都に到着する三日前に、糧食を三日分のみ残し、後は燃やしたりして、ほぼ背水の陣に近い状態にしたそうです。」

周瑜「・・・まるで、かつて西楚の霸王項羽が、章邯率いる秦の主力軍を撃破した鉅鹿の戦いにそっくりだな。」

鳳統「はい。冥琳さんの仰るとおりです。数の違いはありますが、それとよく似てい

ます。」

魯肅「ひやわわ、そんな事が簡単に出来るなんて……！」

周瑜「うむ。圧倒的武勇と類い稀なる統率力で味方の士気を極限以上に上げて、敵を打ち破る。まさに曹彰は、古今比類無き戦の天才だな。恐らく、古の知将、猛将相手でも彼奴に勝てる者はおらんだろう。」

呂蒙「それって、鉅鹿の戦いを実際にやった項羽でも……ですか？」

周瑜「ああ……。項羽でも、一騎打ちで倒せてしまうだろうな。」

魯肅「それに何と言うんでしょうか……。以前よりも益々威圧感が増したような気がしますよ……！」

周瑜「ああ。見てる私も、気を抜いたら気絶してしまう程の覇気だ。」

鳳統「……はい。」

周瑜「……劉備には到底無理だな。」

鳳統「……そうですね。」

蜀軍本陣

孫尚香「ねえ、桃香。そろそろ城内に戻った方が良いんじゃない？きつと雛里達も心配してるよ？」

劉備「うん……。皆……。」

孫権「桃香殿……。」

その時

バタリ

蜀軍兵士A「おい、どうしたんだ!？」

一人の蜀軍兵士が、突然倒れた。その時

ズン!

劉備「っ!？」

孫権「な、何!？」

孫尚香「な、何!?!この圧迫感!？」

孫権「う、上手く……。息が……。出来ない……。!!」

甘寧「蓮華様……。!小蓮様……。!くっ……。!」

劉備達は突然息苦しくなって、立てなくなり、意識を保つのがやっとの状態になった。

そんな中

バタリ

蜀軍兵士B 「おい、どうした!？」

バタリ

蜀軍兵士C 「何が起きてんだ!？」

蜀軍兵士がどんどん倒れていった。

そしてそこに現れたのは

魏延 「ぐっ！何て威圧感だ．．．!?立っているのがやつとだ．．．!!けど．．．これ

以上は．．．わあっ!!」

劉備 「え、焰耶ちゃん．．．!」

魏延 「と、桃香様、お逃げ下さい!く、くそ、ここは絶対．．．!」

孫尚香 「こ．．．この圧迫感って．．．!」

孫権 「まさか．．．!けど．．．以前はこんなに強くなかったはず．．．!」

純 「．．．勝負はついたぞ、劉備。」

圧倒的覇気を身に纏った純が現れたのだった。

劉備 「え．．．?そ、曹彰さん．．．っ!？」

純 「剣を抜け、劉備。それとも、その腰に帯びているのは飾りか？」

劉備「・・・っ。」

孫権「まさか・・・総帥自ら敵陣に乗り込むとは・・・！」

純「生憎、俺はこういう戦い方しか出来ねーんだよ。」

孫尚香「で、でも・・・こつちにはまだ・・・シヤオ達が・・・！」
すると、それを聞いた純は

純「ふっ・・・テメーらが俺の相手になると思ってたのか、ああ？」

甘寧「ぐ・・・っ、また殺気と威圧感が強くなっただと・・・っ！」

どんだん覇気が強くなり

孫尚香「あ・・・あ・・・い、いや・・・！」

孫権「シヤオっ!!」

孫尚香は完全に臆してしまい、腰が抜け尻を突いてしまった。

魏延「な・・・舐めるな曹彰！でえーいつ！」

劉備「焰耶ちゃん・・・っ！」

それを振り払うように、魏延が攻撃をしたが

純「・・・ふんっ。」

ガシイ！

魏延「な・・・っ!？」

純は左手であっさりと止めた。

純「その勇氣は賞賛に値するが、対峙している者の力を見抜けねーテメーは、俺の相手じゃねーよ。」

甘寧「嘘……だろ!? 焰耶のあの攻撃を……素手で止めただと……!?」

純「この程度の相手に、この『黄鬚』曹彰が止められると思つたか!」

そして

純「うおりやああつ!!」

魏延「うわあああつ!!」

純に鈍砕骨諸共軽々と投げ飛ばされてしまったのだつた。

純「力量の差が分かつただろう、なら下がりな。……俺は、コイツに用があんだよ。」

そう言つて、純は劉備を指差した。

劉備「……っ!」

純「……天命は既に下つた。その天命を確かめる勇氣……テメーにはあんのか?」

純「もしあるんなら……劉備。その剣を抜いて、俺と対峙してみせろ。」

孫権「そんな、無茶な!」

純「どうした、抜かねーのか? テメーの理想は、その程度か?」

劉備「……曹彰さん。」

そして

魏延「桃香様！」

劉備は劍を抜いた。

孫権「無茶よ！」

劉備「確かに無茶かもしれない……でも、ここで悪逆曹彰さんを討てば、この大陸は笑顔になる！私の理想が叶う……！それに……黄蓋さんと朱里ちゃんを討てる！」

孫権「しかし……！思春！皆を呼んできて！このままじゃ、桃香が……！」

甘寧「承知！」

そして、孫権は甘寧にそう命令し、甘寧はその場を後にした。

純「……来な、劉備。」

劉備「行きます！でええええいつ！」

そして、純と劉備の一騎打ちが始まったのであった。

95話

霞「でやああああつ！」

ガギン！

趙雲「くうっ！」

カキン！

霞「何や、天下の趙子龍もその程度か？ウチを失望させといてんか！」

趙雲「まだまだだっ！貴様こそ、身のこなしが甘くなり始めたぞ！」

霞「そないなわけあるか！ウチはまだまだ元氣一杯や！」

この時

趙雲（此奴を早々に下して、早く本陣へ・・・！）

趙雲「行くぞ！せえええいっ！」

趙雲は内心焦るような気持ちで霞と一騎打ちをしていた。

ガキン！キン！ドーン！ガン！ギーン！

太史慈「・・・えええ。こいつ、ホントに私達二人を相手に立つてるよ・・・本気!?!」
愛紗「この私は常に本気だ！貴様らをここから動かしてなるものか！それに貴様とて陽平関の時、霞達相手に似たような事したらしいじゃないか！」

孫策「とはいえ・・・こつちも余裕は無いし、そろそろ決着をつけたい所ね。行くわよ、梨晏！」

太史慈「おうさつ！はあああつ！」

ガキン！ギーン！

この連携プレーに

愛紗「ちつ、流星に連携が取れているな。隙が無い！」

愛紗（赤壁の前に真桜にこれを仕立てておいて正解だった。もししてなければ、既に折れ、私は死んでいただろう・・・。）

愛紗はそう思いながらいなしていた。

太史慈「雪蓮！このまま押し切るよ！」

孫策「ええ！」

愛紗「させるかああああつ！」

その時

甘寧「星！雪蓮様！桃香殿が．．．っ！」

甘寧が慌てた様子でやって来た。

趙雲「何があつた！」

甘寧「曹彰と本陣で一騎打ちを．．．！」

趙雲「む．．．無茶な！桃香様が曹彰に勝てる訳が．．．っ！」

太史慈「雪蓮、蓮華様達じゃ、曹彰の相手つて敵しくない!?」

孫策「．．．ええ。」

趙雲「張遼．．．。」

霞「．．．行かせるか！つて言いたいところやけど、そないな顔されたら興醒めやな。」

霞「ええで。やる気失せたわ、どこへなりと行き．．．愛紗！」

愛紗「仕方あるまい。だが．．．私達も同行させて貰う。」

太史慈「えええっ!？」

孫策「まさか、勝負に．．．」

愛紗「純様が劉備などに負けるなんて天地がひっくり返つてもあるまい．．．戦いを見届けたいだけだ。我が主に誓つて、手は出さん。」

愛紗「だが、それは貴様らとて同じだぞ、趙子龍、孫策。」

孫策「当然よ。私達も、この勝負の行く末を見届けたいだけ。星もそうよね？」

趙雲「……そうだな。これも臣下の務めだな。」
孫策「……そうよ。」

太史慈「雪蓮、私は他の皆を呼んでくるよ。」

孫策「ええ、任せたわ。二人とも。」

甘寧「はっ！なら行こう、梨晏殿！」

そして、太史慈と甘寧は皆を呼びにその場を後にした。

霞「さて。なら、ウチらも急ぐで。」

そして、霞達も移動したのだった。

蜀軍本陣

ガギン！

劉備「きゃああつ！」

一方の純と劉備の方も、純自身が手加減してるとはいえ、武人では無い劉備は終始圧倒されていた。

純「……もう終わりか、劉備？」

この言葉に

劉備「はあ、はあ、はあ……まだまだあ……っ！」

劉備はそう言つて剣を構えて突撃したが

キーン！

劉備「きやああっ！」

軽くないなされてしまった。そこへ

趙雲「桃香様っ！」

孫策「桃香！」

趙雲と孫策が現れ

張飛「桃香お姉ちゃんっ！」

張飛も遅れて現れた。

劉備「星ちゃん……鈴々ちゃん……雪蓮さん……。」

それに続いて

霞「お、やっとなるな。」

愛紗「そのようだな。見た限りじゃ、純様が圧倒してるな。」

霞と愛紗もやって来た。

翠「まあ、純殿は手加減してるがな。」

愛紗「翠。」

翠「一騎打ちしてるって聞いたから、張飛と一緒に駆けつけたんだよ。」

愛紗「そうか……。」

張飛「お姉ちゃん……うう、曹彰！」

純「……んだよ、張飛？」

その時

劉備「スキありいつ！」

劉備はそう言つて純目掛けて剣を振り下ろしたが

スツ。ズザーツ！

劉備「きやああつ！」

純にあつさり避けられてしまい、思い切り前のめりに転んでしまった。

純「こんなのは隙とは言わねーんだよ、劉備。今の攻撃、例えば姉上でも避けられるぜ。」

劉備「うう……はあ、はあ……。」

これには

張飛「桃香お姉ちゃん、ここは鈴々に任せろのだ！こんな奴、鈴々がやつつけて……」
張飛が蛇矛を構えて言ったが

孫策「待ちなさい、張飛。……それ以上続ける事は、桃香に代わって私が許さないわ。」

と孫策が止めた。

張飛「……何でなのだ!?!」

純「……分かつてるようだな、孫策。流石元呉の王だ。」

孫策「……それはどうも。もつとも、一言余計だけど。」

劉備「えええいっ!」

純「ふっ……突くならよお、もつと腰を落として掛かつてきな!」

ガギン!

劉備「ひやあつ!」

これには

張飛「ううう……もう我慢出来ないのだー!!」

孫策「あつ!?!待ちなさい、張飛!」

趙雲「鈴々!?!」

張飛は蛇矛を構えて純目掛けて突撃した。

張飛「うりやりやりやあああつ！」

しかし

ガシイ！

張飛「にやにやあつ!?」

純はあつさりとそれを掴み、そして

純「・・・邪魔だ。うおりやあああつ！」

張飛「にやあああつ!!」

蛇矛ごと張飛を投げ飛ばしたのだった。

張飛「くううつ！もう許せないのだ!!」

しかし、張飛は完全に頭に血が上ってしまったため、再度突撃しようとしたが

パンツ！

趙雲「止めろ、鈴々!!」

趙雲に一喝され、頬を叩かれてしまった。

張飛「何でなのだ、星!!」

趙雲「桃香様の戦いだからだ！そうでなければ・・・とつくに私が割って入っている。」

張飛「・・・。」

趙雲「それに、それを見守るのも、義妹として、臣下としての務めだろう。」

張飛「けど……!!」

すると

劉備「星ちゃんの言う通りだよ……鈴々ちゃん。」

張飛「お姉ちゃんっ!」

劉備はそう言つて立ち上がった。

劉備「曹彰さんは、私に勝負しろつて言ったの……。星ちゃんでも、鈴々ちゃんでもなくて……。この私に!」

純「そうだ。だからテメーの全てを賭けて、この俺に挑みな。それが蜀の王としての務め。……。それとも、もう終わりか?」

劉備「まだ……。まだ負けてません!あなたを倒して、この大陸を笑顔にする!そして、朱里ちゃんの願いを叶える!」

劉備「えええーいっ!」

そう言つて、劉備は再度剣を構えて突撃した。

それを見た

趙雲「桃香様……。」

張飛「お姉ちゃん……。」

趙雲と張飛は言葉を失つてしまった。

ガギン！

劉備「はあ、はあ、はあ．．．あああああつ！」

ガギン！

何度純に弾かれても、倒されても．．．劉備はそれでも、純に向かって行く事をやめなかつた。

その鬼気迫る姿に、趙雲や張飛だけじゃなく、その場にいる他の者も言葉を失つた。

劉備「曹彰さん．．．！」

ガギン！

純「何だ．．．？」

そんな中、劉備は純を呼んで

劉備「．．．私は．．．私は、あなたやあなたのお姉さんの曹操さん、そして雪蓮さんが羨ましかつたです．．．！」

そう言った。

ガギン！

純「．．．。」

劉備「強くて、優しく、何でも出来て．．．っ！私もそうなりたいと思つても、辿り着けない高みにいて．．．何にも出来なくて．．．！」

ガギン！

純「それで？」

純「己の無能を自覚し、正当化して……頑張りましたとだけ言つて……負けた時の言い訳にしか聞こえねーな。」

純「テメーは剣を取らず、かといつて文官を統べるわけでもなく……テメーは一体何をしてきた？何がしたかった？」

ガギン！

劉備「それは……！蜀の皆の……王として！」

純「姉上に代わつて力で物事を進めてきた俺は許せないと？」

ガギン！

劉備「そう……だよっ！私は、皆が仲良くしてくれれば……それで良かった！」

劉備「晴れた日は星ちゃんと畑を耕して……雨が降つたら、雛里ちゃんと、皆で鈴々ちゃんに勉強を教えて……っ！」

ガギン！

純「それで？」

ガギン！

劉備「皆で笑つて、仲良く過ごせれば良かった！」

ガギン！

純「なら、何でテメーは劍を取った？・・・この乱世に立つという覚悟を決めたのは何故だ？」

劉備「最初は・・・皆が笑って暮らせれば良いって、それだけを考えてました。」

劉備「でも、この世界は、私が知っているよりも・・・もつともつと複雑で、広いって・・・気付いたんです！」

劉備「白蓮ちゃんと一緒に、風鈴先生に色々な事を教わっていただけの頃とは違う。」

劉備「家で、筵を作って売ってた頃とも違う。」

劉備「星ちゃんや鈴々ちゃんと出会って、黄巾党と戦って・・・」

劉備「反董卓連合に加わって、徐州から蜀へと旅をして・・・」

劉備「皆ただ笑って仲良く過ごしたいだけなのに、そう思うだけじゃ上手くいかなくて・・・！」

劉備「でも、それでも・・・だからこそ、作りたいって思ったんです！」

劉備「皆が笑って暮らせる、優しい国を！」

ガギン！

純「それで？」

劉備「そんなの甘いって、さつき夏侯淵さんに言われた！私も幻想だって分かってる

！けど幻想を幻想って笑ってるだけじゃ、駄目だって！」

劉備「だから私は立ち上がった！願うだけで何も出来なかった自分を变える事が出来た！」

ガギン！

純「それで？」

劉備「私は・・・変わったと思ってる！一人じゃ何も出来ないけど・・・星ちゃんや鈴々ちゃん、雛里ちゃん・・・皆がいれば、私一人じゃ出来ない、もつともつと大きな事だって出来るから！」

ガギン！

純「・・・。」

劉備「だから、曹彰さん・・・。力で国を制圧して、人を殺すあなたが・・・自らの欲望の為に姉さんの曹操さんを利用して人を殺すあなたが・・・許せないの！邪魔なの！この泣いてる大陸を笑顔にする為には・・・曹彰さんのやり方じゃ、駄目なのっ！」

純「なら、邪魔な俺を討てばいい！反董卓連合のように、徒党を組んで・・・この俺を討ち取り、首級を挙げれば良い！そして、その後陳留を攻めて、姉上を跪かせるか、俺同様首級を挙げれば良いじゃねーか？一度はテーマもそれをしただろうが！」

劉備「でも、止められなかった！曹彰さんは、強いから！強くて・・・全部、私達は

掌の上で……！」

純「駄々っ子の理屈だな。」

劉備「そうだよ。私達が弱いからだって、分かってるよ。……でも、どうして力でのこの大陸を制圧しようとするの！ どうして……！ 話し合えば、分かり合えるのに……！」

ガギン！

純「はあ……あめーな。」

劉備「甘くない！」

純「あめーんだよ！ 俺は難しい事は分かんねーが、それでも分かる。甘ったるいほどの過ぎる偽善に、吐き気がしそうだ！」

劉備「……っ!？」

純「俺はテメーの、そんな理想だらけの考えが気に入らねーんだよ！ 王の癖に、その背に多くの命を背負っている癖によ！」

純「理想を見る事は否定しねー！ だが王なら、もっと現実を見据えろ！」

劉備「現実なんか離れちやんがいくらでも見てくれる！ なら、上に立つ者はもっと遠くを見るべきでしょうっ!？」

純「北斗の彼方を望んだところで、辿り着けるものじゃねーだろう！」

純「先程も言ったが、理想を見る事は否定しねー！だが、桃源を望み過ぎて足元を掬われては、元も子もねー！幻想を抱くのは勝手だ、だがそれはせめて泰山の上あたりでも見てろ！」

劉備「そうやって誤魔化さないで！」

純「誤魔化してねー！」

劉備「私だって、もつと大人っぽくなりたいの！紫苑さんみたいに、大人の女の人になつて・・・あなたみたいに強くなつて、あなたのお姉さんの曹操さんみたいに色んな仕事が出来るようにって・・・」

劉備「星ちゃんや、雛里ちゃんの仕事のお手伝い、したいんだよ・・・。桃香様なんて言われなくて良い：桃香がいてくれて助かった、つて言つて欲しいだけなんだよ：！だから・・・王様なんて・・・」

ガギン！

すると

純「・・・お前やここに居る皆は知つてると思うが、俺と姉上は、宦官の子として生まれた。」

劉備「・・・曹彰、さん？」

純がそう言い始めた。

純「宦官の子供というだけで、周りの豪族の者、その子息は俺と姉上に理不尽な嫌がらせをしてきた。」

純「それいづらは、守るべき民に重税を課し、自ら私腹を肥やし、民を蔑ろにしてきた。」

純「それによつて、盗賊や山賊が跋扈し、戦が起き、天変地異が起き民を脅かす。にも関わらず、能力の無い者が地位にしがみつiki賄賂を送り、民を蔑ろにし苦しめる。」

純「だから・・・だから俺と姉上は、こういった苦しむ民を救いてーと思つた。」

劉備「・・・。」

純「けど俺は姉上と違つて、頭も悪い。だから国を治める事も出来ねー。俺にあるのは武だけの、ただのつまらない武骨者だ。」

劉備「・・・!」

純「それでも、俺はかつて活躍した衛青と霍去病のような將軍になつて天下を平定し、苦しむ民を救いたかつた。姉上の夢である、大陸が一つとなつて、民が戦禍に怯える事無く穏やかに暮らせて、外の脅威から守れる国にするため、貢献しようと思つた。」

劉備「でも、曹彰さんは力を・・・」

純「この大陸を乱世から救うには、一つにするには、大きな力があると知つたからだ。」

劉備「・・・!!?」

純「だから、姉上と誓つた。他を凌駕する大きな力で大陸を一つにし、民が望む泰平

の世を作り、外の脅威から守れる強い国を作ろうと。」

純「それで例え、この手を敵味方問わず多くの者の血で染め、大陸全ての民に恨まれても構わねー。俺と姉上が夢見た国が築けるならな・・・。」

そう言つて

ガギン！

純は劉備に一撃を加えたのであつた。

96話

純の一撃で、劉備は劍を落とし倒れた。

張飛「桃香お姉ちゃんっ！」

趙雲「大事ない。氣力を消耗しすぎただけだろう。」

しかし

劉備「……私は大丈夫だよ、星ちゃん。」

劉備はそう言つて再び劍を取つて立ち上がった。

これに

趙雲「桃香様……。」

張飛「お姉ちゃん……。」

趙雲と張飛は、何とも言えない氣持ちになった。

純「劉備、テメーの理想は確かに尊い。けどな、力には力で制さなければ、争いはや

まねーんだよ。」

劉備「……。」

すると

孫策「……私達の負けね。曹彰、私達はあなたに降伏するわ！」

孫策が、純に降伏する事を宣言した。

劉備「雪蓮さん……!?!」

孫策「桃香。この戦は、最早決したわ。これ以上、無駄な血を流すのは良くないわ。」

劉備「けど……それじゃ黄蓋さんと朱里ちゃんの仇が……!」

孫策「桃香。これ以上復讐に囚われるのはやめなさい。それに、曹彰の想いは、全て大陸と民の為。それは曹操も然り。あなたと同じなのよ。同じ泰平の世を築きたいのよ！」

趙雲「桃香様、雪蓮の言う通りです。これ以上、下らない意地を張るのはお止め下さい！」

そう言つて孫策は劉備を説得し、趙雲もそれに賛同した。

劉備「けど……けど……!」

しかし、劉備は亡き諸葛亮の想いを無駄にしたくないという気持ちが占めており、意固地になっていた。

その時

嚴顔「蜀王劉玄德が臣、嚴顔っ！これより儂は、曹子文に曹魏に降伏するっ！」

蜀軍の方から、そういう声が聞こえた。

黄忠「良いの、桔梗？」

嚴顔「良いのじゃ、紫苑。それに、雪蓮も言っておつたが、この戦は最早決した。これ以上の戦いは、無駄な血を流すのみ。それこそ、大陸の平和など、夢物語じゃ。」

黄忠「・・・そうね。けど、今の桃香様にそれが・・・」

嚴顔「うむ。今の桃香様は、朱里の想いを叶えたい一心で意地になっておる・・・。」

黄忠「焰耶ちゃんは、どうなんでしょうね・・・。」

嚴顔「彼奴は分からん。彼奴と朱里は、最後まで仲違いしておつたしな・・・。けど、桃香様への忠義は星と鈴々に匹敵するかそれ以上の忠義を持つておる。儂のような行動をするかは分からぬ。」

黄忠「・・・。」

嚴顔「お主も降伏するのじゃろう。だったら、早く行動をせい！」

黄忠「ええ・・・。」

劉備「な……何で……!？」

嚴顏の宣言の後、嚴顏が率いていた部隊が距離を取り始めた。それを見た劉備は、開いた口が塞がらなかった。

しかし、これはほんの始まりに過ぎなかった。

黄忠「蜀王劉玄徳が臣、黄漢升! 私達も曹魏に投降致しますわ!」

糜竺「桃香様……ごめんね。」

糜芳「電々……。」

糜竺「これで良いんだよ、雷々……。」

糜芳「そうだね……。桃香様は、朱里ちゃんの想いを叶えたい一心なんだけど、このままじゃ駄目なんだよね……。」

糜竺「うん……。このままじゃ……。」

糜芳「電々。」

糜竺「うん……。電々達も、曹魏に投降します!」

蜀の臣下が、続々と純達に投降していった。

周瑜「……こうなったか。」

その様子を見ていた周瑜は、そう呟いた。

孫権「冥琳……。」

周瑜「どうかありませんか、蓮華様？」

孫権「いいえ。曹彰は、そんな想いで戦っていたとは知らなくて。私達が曹彰に勝てないのも納得だと思ったのよ。」

周瑜「……そうですね。」

孫権「……桃香殿は、分かってくれるかしら？」

周瑜「今のところは分かりません。今の彼女は、諸葛亮の想いを無駄にしたくないという気持ちが占めているのでしよう。それ故、意固地になっているかと。」

孫権「そう……。」

劉備「……皆……どうして……。」

厳顔をきっかけに、次々と蜀の武将が投降していく様子に、劉備は呆然とした姿で見
ていた。

趙雲「桃香様、もうこれ以上の抵抗は意味ない事です。降伏なさいませ。」

孫策「桃香！」

そんな中、趙雲と孫策は必死に説得していたが

魏延「何を言うか、貴様ら！我が桃香様は、魏に降伏などあり得ぬ！降伏は死あるのみだ！」

魏延がそう言い、鈍砕骨を再び振り上げて、純目掛けて突進していった。

魏延「死ねーっ!!」

しかし

ガギン！

魏延「なっ!?!」

魏延の攻撃が、純に到達する前に

愛紗「貴様・・・よくも純様を・・・!!」

愛紗がすぐ駆けつけて純を守った。

そして

愛紗「はあああっ!!」

ガギン！ギン！ガーン！

魏延「くうっ!!な、なんて強さだ!!」

愛紗は容赦なく魏延を攻め立てた。そして

ドガツ！ギン！

魏延「うわああっ!!」

魏延は愛紗の攻撃に耐えきれず鈍砕骨を落としてしまい、倒れてしまった。

魏延「あ……あ……」。

そして、愛紗の姿を見て魏延は恐怖のあまり涙を浮かべ、失禁したまま力尽きてしまった。

敵顔「この大たわけが……龍の逆鱗に触れおって……!!」

それを見た敵顔は、魏延を助け起こした。彼女の目には、愛紗に対しての恐怖が宿っていた。

鳳統「桃香様！」

公孫贊「桃香！」

すると、今度は鳳統が劉備に駆け寄った。その隣には、公孫贊がいた。

劉備「雛里ちゃん……白蓮ちゃん……」。

鳳統「桃香様、これ以上はお止め下さい！」

劉備「けど……このまま頭を下げて降伏しちやったら、朱里ちゃんの想いが叶えられないよ！それは雛里ちゃんも同じでしょ！」

公孫賛「いい加減にしろ、桃香！下らない意地を張るな！復讐に囚われるな！」
しかし

劉備「でも……私は……！」

駄々をこねる子供のようになっており、聞く耳を持たなかった。

その時

蘆植「……桃香ちゃん。」

劉備「……先生!？」

そこへ風鈴先生が劉備に近づき、劉備を優しく抱き締めた。

蘆植「ごめんね……桃香ちゃん一人に重い物を沢山背負わせちゃって。」

劉備「……っ。」

蘆植「もう良いんだよ。もう、重い物を背負わなくても良いんだよ。」

劉備「……先生……っ。」

蘆植「よく頑張ったね、桃香ちゃん……。」

これを聞いた劉備は

カラン

劉備「……先生っ！うわあああん!!」

剣を落とし、蘆植の胸の中で泣いたのだった。

そして、ひとしきり泣いた後

劉備「……ありがとうございます、先生。」

蘆植「良いのよ。私はいつまでも、桃香ちゃん先生の先生なんだから。」

劉備はどこか憑きものが取れた顔で蘆植にお礼を言い、純を真つ直ぐ見据えた。

そして

劉備「私劉玄德は……魏に降伏します。」

そう言った。

純「分かった、受け入れよう。」

純「愛紗、秋蘭。」

秋蘭「はっ！」

愛紗「ここに！」

純「総員に戦闘停止命令を出せ。」

秋蘭「そう仰るかと思ひ、既に出しております。」

純「よし。……劉備、負傷者の手当に、成都を使わせて貰うぞ。」

劉備「うん。でも、薬や機材はそんなにないから……」

純「そちらは十分な準備がある。そちらの兵の負傷者にも使つて構わねーから、搬入

させろ。……おい。」

曹彰軍武將A「はっ。直ちに後方の部隊から持つて参ります。」

劉備「雪蓮さん。」

孫策「……思春、明命。曹彰の本陣に行つて、手伝つてあげなさい。」

甘・泰「御意！」

そして、純は振り返り

純「今、ここに乱世は終わり大陸は一つとなった！」

太刀を地面に刺し

純「勝ち鬨を上げろ！新たな時代の到来、天下に知らしめろ！そして、その声が陳留におられる我が姉であり、曹魏の王である曹孟徳に届けるのだ！」

そう宣言した。

「「うおおおおおーっ!!!」」

その瞬間、純の力強い宣言に応えるかのように狂喜乱舞する兵士、雄叫びを上げて感涙する兵士、各所で戦の終わりを喜ぶ声を掻き消す程の、平和を祝う大きな歓喜の音が爆発し

秋蘭「純様……!!」

愛紗「純様……!!」

楼杏「純さん……!!」

霞 「おっしやー!! 流石純やーっ!!」

翠 「流石純殿だぜー!!」

凧 「うおーっ!!」

真桜 「流石大将やーっ!!」

沙和 「やったのー!!」

秋蘭達もそれぞれ喜びの雄叫びを上げたりなどそれぞれ嬉しさを表現した。

その声に呼応するように、天空が蒼く蒼く輝きだす。泰平の世が来た事を祝うかのよう
うに・・・。

こうして蜀は滅び、遂に天下は、曹魏の下一つとなったのであった。

9 7 話

成都での最終決戦に勝利した純達は、戦の終結とその勝利を祝う大宴会を行い、大盛り上がりとなった。

そして、その大宴会も終わり、一同は解散となった。

純の仮の部屋

純「ふうー。流石に飲んだなー。」

そして、宴会を終え、純は部屋に入った。

純「・・・今後とも、孫権に酒飲ませねー方が良いな。」

その時、宴会での孫権の酒乱を思い出し、純はそう呟いた。

純「・・・明日から忙しいなー。まだ俺達に敵対する勢力も恐らくいると思うし、そ

れらの排除と民の慰撫をやらねーとな。」

純（特に魏延が危ねー……。アイツは特に気を付けねーとな。劉備は止める事が出来るのか否か……。）

純（まあ……。後者だと思いがな……。）

純「……。寝るか。」

そう言つて寝台に向かった純だったが

純「っ!？」

殺気を感じ、太刀を手に取った。

純「……。」

辺りを見渡し、周囲に気を配り気配を探したが、どこにも気配は感じなかった。

純「……。気のせいかな。」

そう感じた純は、いつでも取れるように太刀を枕元に置き、就寝したのだった。

?? 「……。ちっ……。」

その様子を見た者は、舌打ちをしながら武器を下ろしたのだった。

翌日

純「やあ、秋蘭。」

秋蘭「これは純様。」

純「昨日は楽しかったな。」

秋蘭「はい。しかし、孫権殿がああも酒癖が悪いとは思いませんでしたよ。」
純「それは俺も同感だ。あれも孫家の血か・・・。」

秋蘭「そうですね。」

そう言い、廊下を歩いて行くと

愛紗「純様。」

霞「おー、純。」

楼杏「純さん。」

翠「おっす、純殿。」

稟「純様。」

風「・・・ぐう。」

稟「起きて下さい、風。」

風「おっ！おはようございますー、純様。」

稟「全く・・・。」

愛紗達に会った。

純「はは。」

そう言って、純達は廊下を歩いた。その時

??「曹子文、覚悟おおおっ！」

「!!??」

いきなりの大声に一同は驚いた。しかし

純「はっ！」

ガシッ！

??「何!？」

背後からの攻撃を、純は振り向き様で自らの手で掴み、防いだ。

そして

純「おりやつ！」

バツ！

??「くっ!!？」

相手から武器を取り

純「はあああつ！」

ドカツ！

??「ぐうっ!!」

その者を蹴飛ばした。

秋蘭「純様!!？」

愛紗「ご無事ですか!!？」

霞「誰や！こんな日が昇ってる時に!!」

翠「純殿を殺そうとするなんて!!」

楼杏「誰ですか!!？」

秋蘭達は、それぞれの武器を構えながら守るような形で純の前に立ち、襲いかかった者を見据えた。

襲いかかった者の正体は

純「やっぱりテメーか、魏延。」

魏延「だった。すると」

孫策「何の騒ぎ……って、焰耶!!？」

孫権「焰耶!!？」

孫尚香「どうして……!!？」

冥琳「……。」

劉備「焰耶ちゃん、どうして……!!？」

趙雲「気でも触れたか、焰耶!!！」

張飛「そうなのだ!!やめるのだ、焰耶!!！」

鳳統「あわわ……!!？」

嚴顔「やめよ、焰耶!!！」

黄忠「やめなさい、焰耶ちゃん!!！」

騒ぎを聞きつけた者が駆けつけ、魏延を見て驚いていた。

魏延「……貴様さえ、キサマサエイナケレバ……」

純「やはり、テメーはこう動いたか……。」

そんな中、純はこうなる事を予想していたため、今起きてる現実をあつさり受け入れていた。

劉備「どうしてこんな事するの、焰耶ちゃん!!」

魏延に劉備がそう尋ねると

魏延「・・・桃香様!あなた様は仰いましたよね!?!皆が笑って暮らせる世を作ろうと
!」

魏延「なのに、なんですかこの様は!!目的をお忘れですか!!まだ負けたわけではない
!!皆どうしてこんな非道な奴に降伏したんだ!!」

と魏延は純に対し憎しみを込めた目でそう叫んだ。

孫策「それは違うわよ、焰耶!!」

孫権「そうよ焰耶!!私やお姉様、そして皆は自分の意思で魏に降伏したのよ!!」

小蓮「そうだよ!!」

趙雲「焰耶!最早天下の行く末は既に魏に傾いた!個人的感情でこの大陸、そして民
を巻き添えにして良いと思っっているのか!?!」

魏延「何を甘い事を言うのだ、星!!星はそんな甘い考えで今まで戦ってきたのか!?!」

趙雲「違う!!ただ、お主が曹彰殿を殺しても最早何も意味ない、また乱世の逆戻りだ
!!それに、お主の力じゃ、曹彰殿には勝てぬぞ!!それ以前に、曹彰殿の臣下に八つ裂き
にされるぞ!!」

愛・霞・翠・楼「.....」ゴゴゴゴゴゴッ

魏延「っ!!」

純の下で活躍した猛将達の凄まじい殺気を受け、魏延は険しい顔をした。

純「魏延、テメーがこのような暴挙に走った理由はこうだろう……。テメーは、自分と同じ考えの者達を集めて拳兵し、俺を殺して劉備の下、再び蜀を復興させようとした。……。けど、その者達に断られた。」

魏延「くっ!」

純「そうだろうな!既に趨勢は決まったのだ!俺達曹魏の天下にな!それでも、俺を殺して、自ら一人の手で蜀を復興させようとした……。違うか!!?」

これに

魏延「っ!!」

魏延は凶星だったため、苦虫を噛み潰した顔をした。

純「テメーにハッキリと言わせて貰おう。天下の趨勢は既に定まった。俺達曹魏の天下だ!!いい加減、現実を見ろ!!」

魏延「……。」

劉備「お願い、焰耶ちゃん!!もうやめて!!」

そして、劉備は純に振り返り

劉備「お願いです、曹彰さん!!焰耶ちゃんを許して下さい!!お願いします!!」

土下座して懇願した。

しかし

魏延「……認めん。」

純「あっ？」

魏延「認めん!!認めん!!認めーん!!」

魏延「曹魏の天下?……そんなもの、この私が全て叩き潰してやるー!!」

そう叫んだ魏延は、懐から短剣を取り出して、再び純目掛けて突撃した。

しかし

ガシツ!

魏延「なっ!?!」

純は魏延から短剣を奪い取り

ドシユ!

魏延「がはっ!」

魏延の胸を一突きしたのだった。そして、魏延はそのまま倒れてしまったが、純の足

にしがみつき

魏延「……曹……彰……!!」

そう憎しみの言葉を吐き

バタリ

そのまま倒れた。

劉備「焰耶ちゃんっ!？」

それを見た劉備は、魏延を抱き起こしたが、既に事切れていた。

劉備「・・・っ! どうして・・・どうして殺したんですか!？」

そして、劉備は純に対し、怒りの目でそう叫んだ。

純「こうでもしなきゃ、コイツはまた俺を殺そうと襲う。だから殺した。」

それに純は、冷静にそう返した。

劉備「だからって・・・話し合えば・・・!」

純「コイツが話し合って聞く奴だと思っつか？」

孫策「桃香。悪いけどこれは曹彰の言う通りよ。」

孫権「桃香殿・・・。」

劉備「けど・・・けど・・・!」

これに、劉備はどうとう泣き出してしまい、そのまま動かなくなった。

趙雲「桃香様・・・お辛いようでしたら、このまま全てを捨ててしまわれたら如何で

しょうか？」

その時、趙雲は劉備にそう言い、劉備を突き放した。

張飛「星……。」

趙雲「鈴々……全ては私が背負う。」

張飛「……良いのだ。今のお姉ちゃんは、もう無理なのだ……。けど、お姉ちゃんのを離れるわけにはいかないのだ。だから……お姉ちゃんには鈴々が。」

趙雲「頼むぞ、鈴々。」

そして、劉備は張飛に連れられ、その場を後にしたのだった。

黄忠「焰耶ちゃん……。」

嚴顔「この大たわけがっ!!」

鳳統「……。」

その横で、元蜀の臣下は、複雑な表情で見っていた。

純「……愛紗。」

愛紗「はっ。」

純「魏延を手厚く葬ってやってくれ。」

これには

愛紗「しかし純様……!!」

霞「せやで、純……。」

翠「いくら何でも……。」

楼杏「……純さん。」

愛紗は勿論、霞、翠、秋蘭、そして楼杏も不満な顔をしたが

秋蘭「……。」

秋蘭のみ、何かを察したのか、純に同情する顔を浮かべた。

純「確かに魏延のした事は、許される事じゃねー。けど、これも全て主の事を思うが故に起こした行動なんだ。もし立場が違えば……俺が劉備にああいう行動をしたかもしんねーな。」

そう言い、純は魏延の遺骸を見て辛い表情をしたのだった。

愛紗「純様……。」

純「だから愛紗、頼むぞ。」

愛紗「……御意。」

霞「純……。」

翠「純殿……。」

楼杏「純さん……。」

純「稟、風。」

稟「はっ。」

風「はいー。」

純「魏延の他にも、同じ考えを持つ者がいるかもしれない。徹底的に調べ上げろ。」
稟・風「御意。」

そして、それぞれ行動を開始したのだった。

その後、稟と風が調べ上げた結果、他にもまだ抵抗勢力がいた事が判明し、純達はそれらを平定したのであった。

また、魏延の表向きの死は、最終決戦による怪我が元で亡くなったという事にし、純の命令の下、手厚く葬った。

そして劉備は、かつての師である盧植の責任の下、身柄を預けられたのであった。

98話

蜀を平定した後、純は暫く成都に残り、抵抗勢力の排除と民の慰撫を積極的に行つた。また、純はこういつた高札を成都の街に出した。

一・みだりに人を殺す者

二・みだりに物を盗む者

三・みだりに流言を放つ者

以上。その一つを犯す者は斬罪に処す。

魏軍大都督曹彰

これにより、魏軍はこの軍令をしつかり守つた。その結果、成都を含めた蜀の民は、皆心服したのだった。

そして、成都の治安と民心が治まったと感じた純は、

純「成都もある程度落ち着いてきたし、陳留に戻るか。」

稟「そうですね、成都の民も治安も、大分落ち着いてきましたし。」

秋蘭「そろそろ帰らないと、皆が寂しがりますからね。」

風「風もそろそろ皆さんにお会いしたいですよ。」

愛紗「私もです。」

霞「ウチもそろそろ皆の顔が見たいなー。」

楼杏「私も、皆さんの様子が気になりますね・・・。」

翠「あたしもだぜ。」

凧「自分も、華琳様を含め皆の様子が気になります。」

真桜「ウチもや。」

沙和「沙和もなのー。」

純「そうだな。皆、陳留に引き揚げの準備をしてくれ。また、引き揚げの件を姉上にも遣いを送っておいてくれ。」

秋・稟・風「御意。」

大軍を率いて陳留に戻った。そして、一同は無事陳留に到着すると

「曹彰様、万歳!!」

「曹魏、万歳!!」

先頭を進む純の耳に、そんな声が無数に届いた。そう、陳留の民が、皆総出で純達軍の凱旋を見に来たのだ。それは奥に進めば進むほど益々大きくなっていき

純「こりやスゲーな・・・。」

それを見た純は苦笑しながらそう言った。

秋蘭「はい、恐らく華琳様がやったのでは？」

すると、純の横にいる秋蘭は、華琳がやったことではと言った。それに

純「ああ、実に姉上らしい。」

と純はそう言った。そして、純は馬上で右拳を掲げ挙げた。その姿は正に、曹魏全軍の総帥に相応しい姿だった。それを見た民は一斉に沸き、純を激賞するため、声を枯らして叫んだのだ。純は掲げた右拳を、今度は振り返りざまに後方へ向け、将兵達を示した。すると、民達の賞賛の声が、一斉に彼らに向いたのだった。

「「魏軍、万歳!!」」

「「讚えんかな、真の兵士達を!!」」

「「讚えんかな、勇敢なる兵士達を!!」」

それらの声を聞いて、自然と純の頬が緩み

純（こいつらの働きが無ければ、勝てなかつたんだ。真の英雄はこいつらだ・・・。）

そう思っていた。それを見た

愛紗「相変わらず純様は、私達の事を考えてくれるな！」

秋蘭「昔からそうなのだ、あのお方は。」

楼杏「私は、純さんに仕える事が出来て幸せよ。」

霞「ホンマ、純らしいなあ。」

翠「これから先、どんな事があっても、あたしは純殿に付いていくぜ！」

凧「流石純様だな……。」

真桜「ああ。ウチも嬉しゆうてたまらんわー！」

沙和「沙和も、精一杯戦って嬉しい気分なのー！」

愛紗や秋蘭達は、敬服の表情を浮かべながらそう言ったのだった。そうして暫く行くと、華琳達が出迎えていた。

それを見た純は、馬上で手を掲げ皆を止め馬から降り、皆もそれに続いて馬から降り、跪いて拱手した。

華琳「良いのよ。あなたの勝利を祝いに来たんだから。」

純「しかし姉上、わざわざ出迎えなくても……。」

この言葉に

華琳「良いのよ、待ちきれなかったんだから。」

華琳は柔らかない笑顔でそう言った。

「一刀「相変わらず、華琳は弟思いだな。純も、常にお姉さんの華琳の事を立てて支えてるし。」

春蘭「当然だ。あのお二人の姉弟の絆は、例えどんな剣でも斬る事は出来ぬ！」

華命「そうつすよー！華琳姉えと純兄の仲はこれからもずっと仲良しつす！」

柳琳「ふふっ……そうね、姉さん。」

栄華「本当ですわ……。お兄様……。大好きですわ……。」

燈「まさに理想の姉弟ね……。」

喜雨「……そうだね。」

桂花「ああ……。華琳様……。純様……。」

その様子を見た一刀達は、優しく見つめていたのだった。

そして

そっ

華琳「純、良くやってくれたわね。本当にありがとう。」

華琳はそう言つて純の頭を優しく撫でたのだった。

純「ありがたきお言葉。これも全て皆のお陰です。」

それに純は、そう言つた。

華琳「皆、立ちなさい。私にその雄々しき姿を見せなさい。」

すると、華琳は純達にそう言った。それを聞いて、純達は立ち上がった。

それを見た華琳は

華琳「これら全て、あなたの力ね、純。」

と言った。これに純は

純「はい。力であると同時に、俺にとって将兵全て共に戦う同志であり、守りたい宝でございます。」

純「すなわち、この曹魏の王であられます姉上の力であり、同志でもあり、宝でもあります。」

と真つ直ぐ見据えて言った。

華琳「あなたという弟を持つて、私は本当に嬉しいわ。あなたのお陰で、悲願を果たせたわ。」

華琳「その力で、この大陸をそして民を守りなさい。」

それを聞いて

純「はっ！」

純は拱手し、他のメンバーもそれに続いて拱手した。

それを見た民は、益々盛り上がったのであった。

99話

蜀を平定し、大陸を姉華琳が王として君臨している曹魏の物とした純。

孫策達元孫呉の者は、曹魏に臣従し、今後は華琳の臣下として天下泰平の為、力を振るった。

蜀の者も同様で、趙雲を筆頭に張飛、鳳統、孫乾などが曹魏に臣従し、天下泰平の為、力を振るった。

その後、華琳はしっかりとした善政を行い、法を整備して、曹魏の確固たる基盤を築いた。その背景には、一刀の天の知識も加わっており、更なる発展を促したのだった。

こうして曹魏の下、安寧泰平の時代となったある日の事、華琳の元に烏桓が攻めてきたとの情報が届き、それを聞いた華琳はすぐに臣下達を呼んだ。

玉座の間

華琳「烏桓が攻めてきたわ。」

それを聞いた皆は

一刀「なっ……!?!」

春蘭「何と……!?!」

秋蘭「……。」

華命「北方の烏桓っすか？」

柳琳「……。」

栄華「……。」

霞「面倒やなあ……。」

凧「はい。」

真桜「せやなあ……。」

沙和「そうなのー。」

桂花「烏桓……。」

稟「……。」

風「……ぐう。」

稟「寝ないで下さい！」

風「おおっ!?!これは遂……。」

燈「……。」

喜雨「……。」

季衣「烏桓かー。」

流琉「……。」

香風「……。」

それぞれ大小の差はあるが、険しい顔を浮かべた。

純「姉上、今すぐ攻めてきた烏桓を討伐しましょう！」

これに、純は拱手して強く唱えた。

華琳「初めからそのつもりよ！純、あなたに烏桓討伐を任せるわ。『黄鬚』の力、そして曹魏の威厳を烏桓に見せつけて、民を守りなさい！」

純「御意！では今すぐ、出陣致します。秋蘭、霞、稟、行くぞ！」

秋蘭「御意！」

霞「了解や！」

稟「はっ！」

純「秋蘭、愛紗と翠、そして楼杏にも出陣の準備をしると伝えてくれ。」

秋蘭「承知しました。」

純はその場にいた秋蘭と霞、そして稟を呼び、その場を後にした。

桂花「……あの、華琳様。」

華琳「何かしら、桂花？」

桂花「今回の北方の動きですが、烏桓は鮮卑とも連携を組んでいるのではないでしょうか？」

華琳「その可能性もあるわね。」

真桜「羌族は大将に従ったしなあ……。」

一刀「大丈夫なのか、華琳？」

華琳「私は純を信じるだけよ。」

一刀「華琳……。」

すると

華琳「もう大丈夫よ、私は迷わないし、恐れたりしないわ。だって、私にとって大切な弟よ。そして、必ず勝って帰ってくる事を信じるわ。」

華琳は一刀に曇り無い目でそう言ったのだった。

一刀「華琳……。」

それを見た一刀は、今日の前にいる人を好きになつて良かったと思つたのだった。

実を言うと、あの日華琳に平手打ちをし、純と仲直りさせて以来、華琳は一刀への想いを一層強くし、一刀も華琳の弱さを知り、そして一人の少女として惹かれていった。

そして、先日一刀の告白に華琳は涙を浮かべながらも綺麗な笑顔で、その告白を受け入れ、一つとなった。

この一件に、春蘭と桂花はモヤモヤした感情が渦巻いたのだが、二人も素直になりきれない所があるので苦労したが、遂に一刀への想いを認め、二人も一刀と結ばれたのだった。

春蘭「・・・むうう。」

華命「春姉え、どうしたつすか？」

春蘭「な、何でも無い!!」

柳琳「ふふ・・・。」

これに真桜は

真桜「流石魏の種馬やなあー。」

とからかい

沙和「沙和もー、隊長からの愛を受けたいのー!!」

風「さ、沙和!華琳様の前でそんな事言うな!」

栄華「全くですわ・・・。」

風「流石お兄さんですねー。」

沙和の発言に風が慌てて止めたのは内緒である。

100話

烏桓を討つ為に北進した純達曹彰軍。その途中烏桓の奇襲を受け、激しい戦いとなったが、純の圧倒的武勇と統率力で戦線を保ち、烏桓の軍勢は撤退に追い込まれた。

秋蘭「純様、敵は退却していきます！我が軍は攻撃を凌いだ様でございます！」

純「敵を徹底的に追撃しろ！引き続き俺も戦闘に加わる事とする！」

秋蘭「はっ!!」

それを聞いた純は、敵を追撃し、半日間烏桓との激しい戦闘を繰り広げた。

純「はあああっ!!」

烏桓族A「うわーっ!!」

純「うおりやああっ!!」

烏桓族B「ぎゃーっ!!」

その戦闘でも純の武勇は凄まじく、太刀を振るうだけでなく弓を使うなどして烏桓族を倒していき、段々と烏桓を追い詰めていった。

活躍したのは純だけでは無い。

愛紗「はああっ!!」

烏桓族C「うわーっ!!」

秋蘭「はっ!!」

烏桓族D「グハッ!!」

翠「でりやああああ!!」

烏桓族E「ぎゃーっ!!」

霞「うおりやああっ!!」

烏桓族F「ぎゃーっ!!」

楼杏「はあっ!!」

烏桓族G「グフッ!!」

愛紗や秋蘭、翠に霞、そして楼杏も烏桓相手にその武勇を見せ、目覚ましい活躍をしていたのだった。

しかし、とある村に到着した時、ある事に気付いた稟が純にこう進言した。

稟「烏桓に打撃を与えましたが、我が軍の兵馬は疲れ切っております。」

純「うむ。」

稟「さらに、これ以上追撃をするのは難しいです。ここで一旦追撃を止めるべきではないですか？ それに何かあつて曹操殿に何を言われるか・・・。」

しかし

純「稟、それは違うぞ。」

と純は言った。

稟「どういう事でしょうか？」

純「軍を率いたからには、ただ勝利に専念するべきであり、陳留にいる遠くの者この場合は姉上だな、その姉上の言うことを聞くべきではない！」

稟「は、はい……。」

純「奴らは、まだ遠くまで逃げていない。命令に従って敵を放置するのは、奴らに立て直す機会を与えているのと同じだ！これを放置すれば、奴らは立て直し、他の異民族と結託してまたこの地を攻めてくるぞ！それでは、また同じ事の繰り返しだぞ！」

稟「わ、分かりました！」

純「敵を更に追撃する事にする！遅れた者は斬ると伝えておけ！」

稟「ははっ!!」

純「皆、共に行くぞ!!『黄鬚』曹彰について来い!!」

愛・秋・翠・霞・楼・稟「「ははっ!!」「」」

そして、純は更に烏桓を追撃し、先の戦闘と合わせて烏桓を数万騎討ち取る壊滅的な打撃を与え、丘力居は降参し、純は烏桓を従えたのだった。

この勢いで、純は更に烏桓と手を組んでいた鮮卑を攻め、

純「うおりやああっ!!」

鮮卑族「「ギヤアアツ!!」」

鮮卑族A「た・・・たった一振りで数十人がやられただと・・・!!」

鮮卑族B「だ・・・駄目だ!! やっぱり『黄鬚』曹彰には勝てねー!! に、逃げろーっ!!」

純「逃がすな!! 徹底的にやれ!! 今後姉上に、曹魏に歯向かうなんて考えさえも思い浮かばないくらい、その身に恐怖を叩き込んでやれ!!」

曹彰軍兵士「「おおーっ!!」」

鮮卑を烏桓同様壊滅的打撃を与え従えた。この知らせを聞いた匈奴は、

単于「烏桓だけじゃなく、鮮卑にも勝ち、平定してしまうとは!? これが曹操の弟であり、『黄鬚』と恐れられている曹彰の実力か!？」

匈奴族A「如何なさいますか?」

単于「そんなの決まっている!! 我らではあの軍は太刀打ちできぬ!! 降伏のみじゃ!!」

と単于はそう言い、鮮卑は服従し、それに続いて羯、氐も純に服従し、北方は純の手により完全に平定されたのだった。

その後、最初に投降した羌族以外の全ての北方異民族は、純を見て

「「真の強き王である!!」」

と言い、純に心酔したのは内緒である。

戦後、

純「此度の戦、厳しかったとはいえ、よく戦ってくれた！皆のお陰で、北方は平定できた！今回の恩賞だが、通常で決められた倍の数字を皆に出す事としよう！」

と純はそう言った。これを聞いた諸将は感激し、将だけでなく兵士達も諸手を挙げて大喜びし、純と将兵との間の結束は益々強くなった。

そして、純達曹彰軍は陳留に向けて帰還し、華琳は非常に大喜びしたのであった。

最終話

晴れた日の陳留。

空には雲一つ無い快晴。

それは見る者の心を癒し、気持ちを書れやかにする。

陳留の街を歩く人々には笑顔が様々に咲き乱れており、街を明るく染めていく。

少年少女達が甲高い声で町並みを駆け回れば、大人達はそんな子供達を見て表情を綻ばせる。

笑顔が笑顔を生む、そんな素敵で素晴らしい循環が街のあちこちで見られた。

陳留。曹操のお膝元の街。

大陸の覇者、曹操が治め、彼女の弟であり、『黄鬚』と敵に呼ばれたその武勇で民を町を守った曹彰。全てはここから始まった。

そしてこの姉弟が、大陸を乱した乱世を終わらせ、皆が望む泰平の世を作った。

そして、その中からまた新たな事実が作られる。

だからだろうか、いつも笑顔が絶えないこの街も、この日ばかりはいつも以上に皆が興奮していた。

陳留の街そのものが、まるでお祭り前の様な昂ぶりに満ちた状態だ。それもそのはず。

今日は曹魏を挙げてのお祝いの日。ともすれば、街に住む人々はいつも以上に笑顔で溢れ、平和な日に感謝し、祝い踊るのも無理はない。

街でこれだけの騒ぎとなれば、城内もそれに匹敵するものだった。

陳留城

華琳「おめでとう、純。秋蘭。栄華。楼杏。霞。郭嘉。関羽。」

純「ありがとうございます、姉上。」

秋蘭「ありがたきお言葉。」

栄華「ありがとうございます、お姉様。」

楼杏「ありがとうございます、華琳さん。」

霞「おおきにな、華琳。」

稟「ありがとうございます、曹操殿。」

愛紗「ありがとうございます、華琳殿。」

並んで立つ純達に、華琳はまず先にお祝いの言葉を述べた。

純「しかし姉上。流石にこれは大袈裟すぎじゃ・・・」

華琳「我が国最強の武人であり、全軍を統括する大都督の婚礼よ。国を挙げて盛大に祝うのは当然でしょう。」

華琳「何より無事にこの大陸を統一できたのも、あなたがいてくれたおかげなんだから。」

これには

純「うっ・・・」

純も返す言葉が見つからなかった。

一刀「本当によく似合ってるぞ、純。」

純「お前のいた世界じゃ、これが普通なんだよな？」

一刀「ああ。タキシードって言うんだ。」

純「たきしーど・・・か。秋蘭達が着てるのは？」

一刀「ウエディングドレスって言うんだ。」

純「・・・そっか。」

すると

春蘭「純様ー！本当に良くお似合いですよー！」

春蘭が泣きながらそう純に言った。

純「ありがとう、春蘭。つか、お前ずっと泣いてんな。」

春蘭「だってしょうがないじゃないですかー！秋蘭も、よく似合ってるぞー！」

秋蘭「ああ。ありがとう、姉者。」

この言葉に

春蘭「うわあああああつ！！」

翠「な・・・泣きすぎだろ・・・春蘭。」

春蘭の涙はどんどん溢れてしまった。

華侖「栄華ー！おめでとうっすー！！」

柳琳「栄華ちゃんも、おめでとう。」

栄華「ありがとう、柳琳。」

華侖と柳琳の言葉に、栄華は幸せそうな表情でそう言った。

凧「桜杏様達も、おめでとうございます。」

真桜「姐さんめっちゃ綺麗やでー！」

沙和「なのー！」

季衣「綺麗だねー、流琉。」

流琉「そうだね。」

楼杏「フフツ・・・ありがとう。」

霞「おおきにー！」

愛紗「ああ、ありがとう。」

風「稟ちゃん、おめでどうなのですよー！」

桂花「おめでどう、稟。」

稟「ありがとうございます、風。桂花。」

他の皆も、それぞれ幸せそうな表情だった。

婚礼自体は既に終わったが、街中に溢れたお祝いはこれからが本番だ。

華琳「それじゃあ、私達は戻るわね。今は夫婦水入らずでゆっくりしなさい。」

華琳「この国には、もう戦は無いんだから。」

そう微笑みながら言い、華琳は一刀達と一緒に城内へと戻っていった。

そしてこの場に、純と新婦の秋蘭、栄華、楼杏、霞、稟、愛紗だけが残される。

秋蘭「フフツ・・・私達だけになりましたね。」

純のすぐ横から、幸せそうな秋蘭の声が聞こえた。

純「そうだな・・・」

栄華「お兄様・・・」

純「んっ?」

栄華「私達・・・お兄様と出会えて、好きになって、本当に幸せですわ。」

楼杏「私もよ。」

霞「ウチもや!純に出会えて、ホンマに良かった!」

稟「純様に出会えたことに、好きになったことに本当に感謝しております。」

愛紗「純様、これからもずっと一緒ですよ。」

その言葉を受けて

純「ああ。ずっと一緒だ!だから、これからも宜しくな!」

純は六人を抱き締めてそう言った。

六人は驚いた顔をしたが、すぐに柔らかい表情に変わり、笑顔が零れた。

その様子を見ていた快晴の空にある太陽は、明るくそして優しく彼らを包み込んだのであった。

完